

予測不可能者
キンジ

遠山

caose

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学園島。

そこはIS学園や武偵校と言った兵器を扱う事を主目的とした学校である。

その島で武偵をしている青年「遠山キンジ」と個性豊かな仲間達が織りなす物語……。

「遠山君。一緒に太巻き食べよう。」

「駄目ですよ飛鳥さん。キンジさんは私と勉強するんですから。」

「おいキンジ。夜桜と一緒に任務受けようぜ。」

「キンジ。ちよつとここ分らないっす!」

「キンジ。．．．一緒に出掛けよう。」

「キンジさん。ネクタイが歪んでますよ。」

「．．．なあ聞いていいか？」

うん？何か?!

「．．．何で俺の周りにいる連中は皆胸がでかいんじゃあ!!!」

．．．(´・ω´) 知らんがな

．．．これは色んな意味でヒスル原因が多くある中で仲間達と共に困難とハーレム（本の与り知れぬところ）を切り抜けようとする青年の物語である。

目次

予測不可能な始まり。	1
時は移ろいて。	6
運命の出会い。	11
ヤバけりや逃げろ。	15
少女の名前	19
次の朝。	23
忠告する。	27
カナメとキンジ	32
心配してくれる人たち	37
正義とは？悪とは？	41
いざ外へ。	47

心の中を曝け出せ。	52
大丈夫。	57
甘い空気。	60
それから。	65
蜂弾（ホーネット・バレット）	
弾丸込めて	69
爆弾騒動。	74
倉庫にて	78
倉庫の中で	81
倉庫での死闘	85
心配してくれるうちが花だよ。	
90	
屋上でのひと時。	93

家でのひと時	99
嵐は突然に。	102
人の話はちゃんと聞けよ。	105
情報開示	113
雨の中	119
作戦・・・会議?	123
バスを止めよ!	127
犯行予告?	135
飛びます!飛びます!!	142
ゴングは静かになる。	146
その正体に驚きおののけ!!	152
爆殺鬼現る。	157
悪夢の時間停止。	163

葉を飲むときは自分の体質も確認し ろ。	166
幼子は成長して空を飛ぶ	172
時間停止の激闘	176
G o o L o c k !!	183
ようこそ、国連軍へ。	194
閑話 キンジと紫のデート。	202
第二章『炎と氷のシスターズ(姉妹) ジエミニの剣』	/
昼でのドタバタ事情聴取。	209
「アドシールド」に向けて。	213
護衛申請	216

お引越し。	220
チエックは同性にさせろ。	224
食事だああ。	228
朝のひと騒動。	232
生徒会室で……。	237
場所はちゃんと教えるように。	242
空を彩る光を見るために	248
花火を見て	253
新たな愛車	258
大切な人の為に。	263
真実の闇	267
救いたいと願う事の何が悪い。	

その記憶は果たして戻して良い物か？	270
心砕けかけ。	276
歴史の真実。	283
戻れない。	287
その頃の下の階。	291
萌える思い。	297
姉の決意。妹の覚悟。	302
譲れない思い。	309
力の解放。	313
戦いは終幕へ。	318
事件の後。	323
	334

貴方に・・・ありがとう。	338	いざ電気とサブカルチャーの街へ。	397
ワタシノ思い。	346		
他人の物、勝手に読むなよ。	353	それって・・・フラグだぜ。	401
再会して。	358	作戦説明。	405
その提案待ったー！！！！	362	全ては体から始まる。	414
新たな日常。	366	失った仲間。	423
第三章 蜂蜜とオイルのマシントラップ		強襲。	431
転校したら第一印象はしつかりとな。	373	オオカミとの戦い・・・PART I	436
テスト前は憂鬱だ。	382	オオカミ変貌。	440
テストだよ〜。	385	バイク変身！！	444
DVDを見るときは静かに。	389	事件の終結と兜の締め直し。	449
依頼内容。	393	相手の大切な人の顔は・・・相手を激怒	

アタシハアタシダ!!	511
俺達がいる!!	506
戦いへと。	501
ブラドの怒り。	497
小夜鳴先生の秘密。	491
天の見える場所にて。	483
泥棒作戦 開始!!	479
ベッドでの模様。	475
疑いはより深く。	470
朝の一コマ。	466
仕事の説明。	462
いざ敵地へ。	458
させるぞ。	453

作戦説明	559
初対面の主人公ズ。	554
忠告。	550
戦いの後。	546
アリア対カナ。	541
終業式。	536
兄(姉)?との対話。	532
待ち人。	527
『第四章 カオスエピソード 黄金のス トラトス／白銀のベストマッチ!!』	
事後処理。	523
宣言。	519
決着。	515

作戦開始!	563	ラザーズ	631
潜入中の出来事。	568	第5章『カオスエピソード2 序曲と悲しみのエンドロール』	
二階で賭け事。	572	作戦説明。	648
賭けと悪意。	576	潜入開始。	652
あらゆる場所で……。	586	突入。	660
黄金のメツキ／目覚めるソウル	592	決着を……。	669
怒りの変身!!	598	決着は決まり……本当の戦いへ。	679
もう一つの変身。	609	混ざり合うソウル／奇跡と思いのブラ	
驕りし王の末路。	614	ザーズ 前編	688
人のダークサイド／救いのホーネット	619	混ざり合うソウル／奇跡と思いのブラ	
死のゲームサイス／再会と正体のブ		ザーズ 後編	701

序曲のエンド／継がれしフューチャー	
前編	714
序曲のエンド／継がれしフューチャー	
後編	722
ひと夏のバケーション／再開のデン	
ジャー 前編	735
ひと夏のバケーション／再開のデン	
ジャー 中編①	746
ひと夏のバケーション／再開のデン	
ジャー 後編	750
プールで胸の大きい人が飛び込んだら・・・こうなるわな。	759
火花が散るのは何も陸だけじゃあねえ	

ぜ!	767
レースで商品を取るのは楽しやねえ!!	774
プールが終わって。	786
親じゃないけど・・・ちゃんと見ているからね。	793
花火と告白。	800
金一の報告。	809
涙流してそして笑顔。	819
訪れは唐突に	824
占いの内容は未だしれず。	831
第6章『絶対狂槍!光と闇の剣炎舞!!』始業式。	835

路地裏での決闘。

844

暗躍と準備。

850

お寺を見よう。

860

猫にご用心。

868

泊まる場所は自分で見つけろ。

875

スパイなんてどこにでもいるさ。

883

戦いは山中にテ。

891

暗躍なんて日常茶飯事さ。

899

お前だれ？

906

最終戦闘の備え。

914

決戦 前編。

921

決戦 後編。

931

新しい始まり。

940

オリジナル怪人・ライダー・IS

948

第7章 螺旋のメイドの過去(バック)

バンデイレの宣誓

957

ルール説明

964

バンデイレ終了

972

緋緋神とは？

980

変装決め

987

服の調整

997

裁判

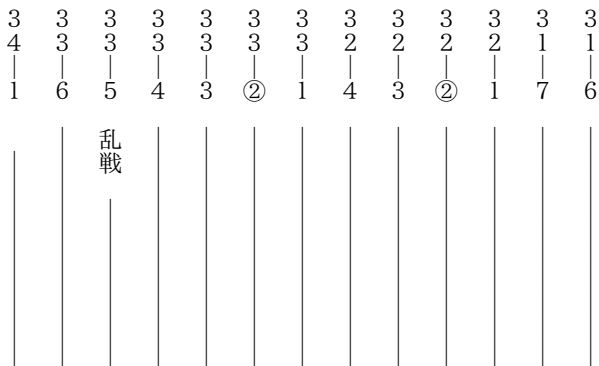
1003

護送中

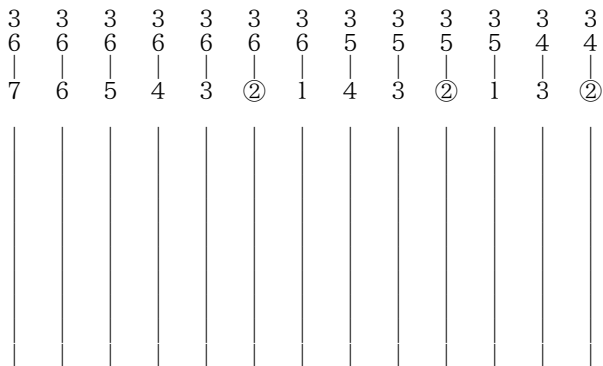
1012

と歌とラーニングと悪意編																				
夢	1100	1089	1082	1074	1067	1061	1048	1039	1028	1021										

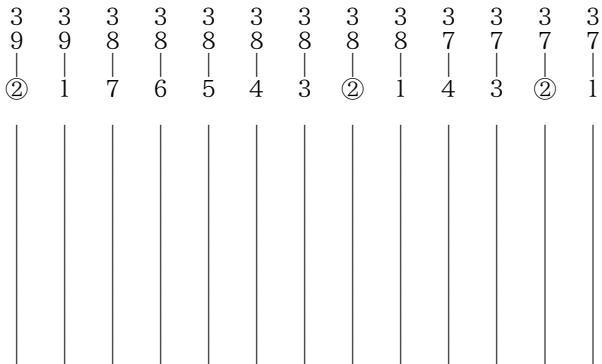
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5	4	②	1	7	6	5	4	3	②	1										
	翼対響																			
1210	1201	1191	1182	1176	1163	1157	1151	1144	1137	1128	1120	1111								



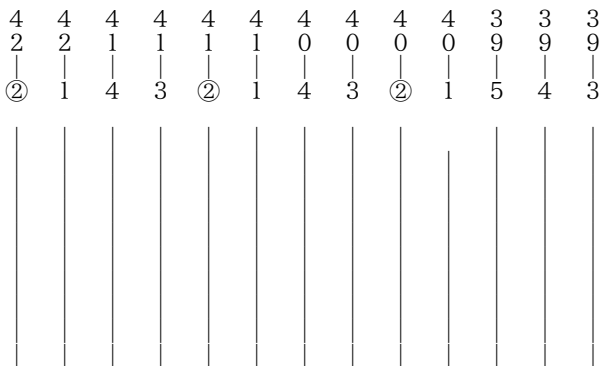
1328131713081299128912801274126112531245123712301221



1459145114421432142214121403139113801372136113491339



1570156315591551154315351527151815101494148614761465



1702169116831675166716601647163416161607159815891581

4 4 4	4 4 3	4 4 ②	4 4 1	4 3 7	4 2 6	4 2 5	4 2 4	4 2 3	4 3 ②	4 3 1	4 2 4	4 2 3
(1 2)	(1 2)	(1 2)	(1 2)	(1 1)	(1 1)	(1 1)						

1828181518061800178617771769175717441737173017211713

オリジナル怪人・仮面ライダー・IS	人物紹介 10巻まで	誕生日	異変	内容	エピソード編④	エピソード編③	エピソード編II	エピソード編①	4 5 3 (1 3)	4 5 ② (1 3)	4 5 1 (1 3)	4 4 5 (1 2)

197119571950194319321916190718981886186018521836

2014

予測不可能な始まり。

ターーーン・・・

何処かの山にある寺の一角で銃声の音が聞こえた。

そしてそのまま縁側に座っている少年は後ろから血を噴き出しながら倒れて行くのが見えた。

「キンジーー!!」

すると髪の毛の長い青年が少年に向かって一直線に走って行った。

そして少年の元に着くや否や自分の服を脱いで血が噴き出している所に巻き付けた。そして青年が何があったのかを見渡すとそこにある物が見えた。

それは焔が立ち舞う場所で古い拳銃でこちらを見ながら何か言いながら笑う・・・

黒髪から白髪になりかけた男性がそこにいた。

「貴様ー!!」

青年は懐からリボルバー式の拳銃を出して構えた瞬間・・・それは姿を消した。すると後ろから人の声が聞こえた。

「どうしたんですか!?!」

後ろから巫女のような服装をした女性がそう言うと言った。

「救急車と医者をお願いします！キンジが！キンジが！！」

「え・・・キンジ君！」

そして何人かの少女達も駆けつけてきた。

この撃たれた少年こそ多くの事件に巻き込まれながらも成長し、やがて多くの伝説を残す英雄「遠山キンジ」である。

あれから暫くしてキンジは目覚めたが背中に撃たれた傷は銃創となって残るらしいのだが本人曰く・・・。

「男の勲章だい。」と言ったそうである。

そしてその地方の病院で観察入院することになった。

幸いにも夏休み中であつたため学校には一応報告したものの始業式には余裕で間に合う事から兄でもあり自分の怪我の治療をしてくれた「遠山 金一」により勉強道具一式が送られた。

キンジははーと溜息つきながら宿題をしている中ある人間がやってきた。

「遠山君!!大丈夫だった!?!怪我は!!?!」

入ってきた人間は六人。

そのうち四人は老人の男女であるが一人は長い髭を持った老人。

もう一人は目つきは悪いがちよび髭の老人。

そして老婆達の方であるが一人は白髪の子セルを啜えたファンキーな衣装を身に纏った老婆と。

もう一人は着物を着た白に近い水色の髪のお婆がいた。

そして入るや否やキンジを心配して体中を触っている少女は前半の老人の孫である

「服部 飛鳥」

最後に中学生であろう黒い学生服を身に纏った色白の肌をした水色の髪のお少女

「光 雪泉」がそこにいた。

すると雪泉が飛鳥を少し離すところ言った。

「駄目ですよ飛鳥さん。キンジ君は一応病人ですから少し休ませないと。」

「はい……。」

飛鳥は少ししゅんとしているとキンジは飛鳥の頭を撫でてこう言った。

「ありがとな。飛鳥。」

「……うん／＼／＼／」

「……むうう。」

キンジが飛鳥の頭を撫でているのを見て少しむくれている雪泉を見てキンジは雪泉の頭を・・・撫で始めた。

「ふええ。」

「え？こうしたいんだろ？雪泉姉は?？」

「・・・い、・・・いえ・・・／＼／＼」

すると今度は雪泉が真っ赤になり始めていたのだ。

それを見ていた老人達はと言うと・・・。

「やれやれ早くひ孫が見たいものじゃあ。」

「まあその時は雪泉が勝つがな。」

それを聞いた飛鳥の祖父が少し目を細めてこう言い放った。

「何言ってるじゃ黒影。それは飛鳥の方じゃろうが?（#。∩。∩）」

「そんなわけないだろうがこの色ボケが（#。∩。∩）」

「・・・やるか?ら!!」

「やめなさい。」

「~~ん~~ふう!!」

二人は懐から何かを出そうとしたようであるがそれを飛鳥の祖母が大きなキセルを。

雪泉の祖母は鉄扇を使って頭を殴りつけた。

それを見た三人はあまたかと思いつながらそれを見ていた。

そんな日常こそこの少年の日常であった。

そしてそんな日常に新しく加わる人間が出ることをまだこの時誰も知らなかった。

時は移ろいて。

「……ふあゝあ、懐かしい夢を見たなあ。」

あれから数年がたち「遠山キンジ」は武偵高校一年生になった。

理由についてだがそれは兄「遠山 金一」の姿とその理由がヒーローのようであったからである。

それだけで……東京の武偵校に進学したわけではないのだがまあそれはそれとしてキンジは地元からここに来たのだがある事が理由であらゆる面子から

目を付けられたのだ。

それは……。

ピンポーン。

すると入り口からインターホンが鳴ったのでキンジは服を制服に着替えた後扉へと向かった。

するとそこにいたのは……。

「おはよう。遠山君！」

「おお、おはよう。飛鳥。」

そこにいたのは茶色の髪をショートポニーテールにした同学年よりもスタイルの良
い少女「服部 飛鳥」である。

「もしかして今起きたの。」

「まあな。あの時の事を思い出してな。」

キンジはそう言いながら欠伸を欠くと飛鳥は心配そうな口調でこう聞いた。

「・・・まだ痛むの？その傷。」

「いやもう痛みが無いから心配するなよ。」

キンジはそう返すも飛鳥は嘗てキンジが撃たれた背中を見ながらそつかと言うと
そのまま台所へと向かった。

「それじゃあご飯作っとくねえ。」

「おお。」

飛鳥は慣れた手つきで台所から包丁やまな板を出して、調味料を取り出した。

すると暫くしたら鍋の中でわかめや豆腐が入った味噌汁が煮だっており炊飯器には
大量のご飯が入っていた。

そしてコンロの上でおいしそうな魚が焼かれていた。

然したった二人にしては量が多いようである。

味噌汁は少し大きな鍋一杯に入っており魚も十匹近く大皿に盛られていたのだ。

ピンポーン。

するとまたインターホンが鳴ったので飛鳥は十枚近くある皿を並べていたキンジに向けてこう言った。

「遠山君。出て〜。」

「おお、まあ多分あいづらだらうな。」

キンジはそう言いながら扉を開けるとそこにいたのは・・・。

「よっ！来たぜキンジ。」

「おはようなのじゃ。」

「・・・キンジ。おはよう・・・。」

「おはようっす！キンジ!!」

「おはようございます。キンジ君。」

そこにいたのは黒髪のロングの少女と青に近い黒色の髪を短く切り揃えた少女、少し暗めな他の娘達よりも胸部が大きい紫髪の少女、活発そうなオレンジ髪の少女、そしてもう一人の幼馴染である雪泉がそこにいた。

彼女達はキンジとよくコンビを組む少女達で上から「伊達 焰」、「豊川 夜桜」、「式 凧」、「巫神楽 華毘」、「光 雪美」と「服部 飛鳥」がメインメンバーである。

本来なら男の方を加えたかったが飛鳥と雪泉によってこの面子となったのだ。

「おおおはよう・・・それにしてもよく来るなあ。」

キンジは呆れながらもそう言うど焰がこう返した。

「当たり前だろ。チームワークを鍛えるなら偶にでもいいからご飯に来ないかって

言われて来ない奴が可笑しいぜ。」

「それに一人の食事は味気がないしのお。」

「・・・私はキンジがいるぐらい・・・。」

「うちは料理はからつきしつす。花火や爆弾ならお手の物だけど。」

「それにもしかしたらこのメンバーで登録されるかもしれないですしねえ。」

「いや雪泉姉は二年生だろ。」

雪泉の言葉にキンジがツツコミを入れると奥から飛鳥が大声でこう言った。

「遠山君。皆来たならこっちに來させてねえ。」

「分かった。それじゃあ入れよ。」

「二二おじやましまくす。」

それぞれが部屋に入ると焰達がある物を差し入れしてきた。

「ほい。あたしが作った餃子。晩飯に喰えよ。」

「農からは雑穀米。」

「・・・鮭。」

「私からはイチゴを持ってきました。おやつに皆さんで食べましょ。」
焰、夜桜、紫、雪泉がそれぞれ持って来たものを飛鳥に渡した後飛鳥はそれを
冷蔵庫に入れた後飛鳥は全員にご飯が行き渡ったことを確認した後キンジが全員に
向けてこう言った。

「それじゃあ・・・手を合わせて。」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そう言った後に全員食べ始めた。

運命の出会い。

更に暫く時は過ぎてある雨の日・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。」

学園島の裏街である少女が歩いていた。

紫と黒のドレスのような衣装をして端から見れば仮装大会の帰りかと思われても不思議ではない。

然しその恰好は何故か殺風景な感じがした。

両手には銀の手甲。

頭には銀のティアアラのような物があつた。

紙は金色の足元まで届くかのような長さを三つ編みにしていた。

全身ずぶぬれになっており息も絶え絶えで歩くことでさえやつとであつた。

「ああ・・・アアア・・・。」

そしてとうとう目の前の世界が回り始めよろけてそのまま倒れた。

「ふあゝあ、早く戻らねえとなあ。」

この時キンジは焰達と指定任務（指名された）がありその任務が終了して帰っている所であった。

武偵校では学校の単位以外で学校から持ち出された任務がありその中でも指名されている任務は単位が多い分危険が付き物であり仲間と受ける際にはそれ相応に強さがなければいけないのである。

そんな中キンジはある物を見かけた。

「ん？猫？！」

キンジの目の前で猫が通り過ぎて行ったのだ。

一匹なら未だしも何匹かの猫が通って行くので変だなと思ったキンジは猫が入っていった脇道を見るとそこには……。

「何だこりゃ!？」

倒れている金髪の少女の周りで猫がすり寄っていたり顔を舐めていたのだ。

いったい何の撮影だと思ってしまうくらい状況であったがこのままでは風を引きかねないと思つてキンジは金髪の少女に手を伸ばそうとすると……。

フギアアア!!

「痛——!!」

猫がキンジの手を引つ掻いたのだ。

それでもキンジは親切心でやっとのことで救出した。(本人は傷だらけ)

そしてキンジは彼女を背中に乗せると・・・。

「(うわあああ!! まじい!! マジイ!! 服で分からなかったがこいつ

胸デカいぞ!!)」

キンジは背中越しで分かる柔らかい二つの物体に驚愕しながら自身の部屋がある

アパートまで走って行った。

「ただいまー!」

キンジはアパートに入るとそこにいたのは・・・。

「お帰りなさいキンジさん。」

雪泉がエプロンを付けて部屋に入っていた。

すると雪泉はキンジの背中にいる少女を見てこう言った。

「あらあら・・・キンジさん。」

「は・・・はい?」

キンジは雪泉の声色が変化した事に恐怖すると雪泉はキンジに……目のハイライトが消えているにもかかわらず笑顔でこう聞いた。(目は笑っていません)

「ソノジョセイハイツタイダレナンデスカ？コタエテクダサイ。」

「え……エート……。」

何でこうなったのだろうと思うキンジであった。

ヤバけりや逃げろ。

あれから雪泉に事情を話したキンジは金髪の少女を床に降ろして頭は座布団を敷かせた。

そして雪泉はと言うと……。

「成程偶々脇道に向かう猫の大群を見たらその子が倒れてたからここ迄運んだと？」

「……ハイ……。」

キンジは雪泉の言葉に力なく答えていた。

因みに猫にやられた傷はちゃんと治療してもらった。

「……折角二人つきりになったのに……。」

「ん？どうしたんだ雪泉姉？」

「な……何でもありません／＼／＼／」

如何やら先程の言葉はキンジには聞こえないような声で喋っていたようだ。

そして雪泉が顔を真っ赤にしてそう返した後金髪の少女を見てこう言った。

「さてと……先ずは彼女の体を拭かなければいけないので……。」

雪泉が金髪の少女の服を見てそう言うのとキンジの方を向いてこう言った。

「・・・さっさと自室で着替えて下さい!!」

「は・ハイパー!!」

キンジは雪泉の言葉に従って自室に入った。

キンジの住むアパートは此れ迄指名任務をクリアしていることからそれなりにちゃんとした造りになっており自室も完備されている。

部屋は男四人が軽く入る位のスペースになっているためそれなりに広い。

キンジは部屋に入って部屋ぎに着替えた。

といつてもキンジの部屋着は無地な物が多く地味なものが多い。

そしてキンジが部屋から出ると風呂場から水音が聞こえた。

「・・・マサカ・・・」

キンジはまさかかと思いき耳を立てていると・・・。

「ふー。いい湯です。」

「なあ!!」

雪泉が風呂に入っていたのだ。

何故だと思っていると床には先程の少女が寝ていたのだ。

如何やら少女の服を脱いでいる中自分も濡れていたようだ。

そしてキンジは金髪の少女の方を見ると・・・。

「俺のシャツじゃねえかって・・・上だけかよー!!」

上だけカッターシャツで着させただけの簡単なものでありキンジ自身はどうしようかと困り果ててある事を思いついた。

「よし、トイレに逃げ込むか。」

トイレは風呂場の真ん前であるが無いよりはマシだと思っていたがキンジはこの時失念していた。

何故自室に戻らなかったという事である。

そしてキンジはトイレに向かい、その前についた途端・・・災難に見舞われた。

「ふう・・・いい湯でした。」

雪泉が真っ裸で現れたのだ。

普段雪泉は色白の肌の為湯上りなのか赤く火照っており、大きな胸がどんと張りがあるのか揺れており、尻も大きかったがそれを支える腰が細く折れてしまいそうな感じであった。

それから数秒間経つとキンジは雪泉に向けてこう言った。

「ええと・・・すみませんでしたあ!!」

そしてキンジは颯爽と自室に逆向きになって戻って行った。

そして暫くして雪泉も事の次第に気づいて顔が赤くなりそして体を掴むように

して・・・。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

悲鳴を上げてしまった。

少女の名前

「／／／／／／／／／／」

「／／／／／／／／／／」

「・・・（ゝゝ）モグモグ」

キンジ、雪泉は先程のことで真つ赤になっており金髪の少女はその間でゆっくりとだごご飯を食べていた。

因みに雪泉と金髪の少女の格好は・・・キンジの上半身の服だけを使っているため（下半身は色々と不備がある為使用されず。）少し下を向くと綺麗な足が見えており角度次第ではお尻も見える程である。

そんな男性なら生睡な場所でもキンジからすれば・・・地獄そのものである。

その理由は・・・。

「（落ちて着け遠山キンジ。目の前の光景は只の事故からなるものであるからして・・・なるなよHSS!!）」

HSS、正確には「ヒステリア・サヴァン・シンドローム」であり極度の

興奮状態になるとあらゆる感覚が研ぎ澄まされ超人さながらの活躍が出来るのだが

キンジは此れを嫌っていた。

そしてそれこそが地元を離れて東京の学園島に来た原因でもある。

暫くしてそれぞれご飯（今回はホワイトシチューである。）を食べ終えて暫くするとキンジが先に話を切り出した。

「そう言えば君は誰なんだい？」

キンジは空中投影出来る携帯電話を出して翻訳モードにして（英語）聞いた。

すると少女が出した言葉は……。

「ワタシは……ダレです？」

片言だが日本語が出来ると知りキンジと雪泉はほっとする中雪泉はキンジの近くに行つてこう聞いた。

「如何やら彼女は記憶喪失のようですね。」

「それじゃあ監視カメラで記録が無いか調べたほうがいいな。」

「それは紫さんに任せましょう。それで当面の住居ですが……。」

雪泉はそう言つた瞬間言い淀んだ。

飛鳥と焰は同居人がおり夜桜は一人暮らしであるが節約して兄弟たちに仕送りをしているので無理。

華毘と紫は……論外であろう。

華毘は馬鹿で然も爆弾を作っているため万が一があれば大変だし紫は最近は改善されたとはいえ昼夜逆転の生活をしていたので駄目。

当然ホテルか武偵校での施設に預けるかであるが右も左も分からない所に放り込むのも後味が悪いと思つた雪泉が取つた考えはと言うと……。

「ええと……キンジさん。暫くでいいので彼女を預けてくれませんか？」

「……はああ!!」

まさかの丸投げであつた。

「ちよつと待つてくれよ。雪泉姉！俺は確かに一人暮らしだけど女と一つ屋根の下つて……。」

「それじゃあ彼女は此れからどうやって生きるんですか？」

「それは……。」

キンジはその言葉に言い詰まるところ続けた。

「暫くの間です。その間に私も探しますから。」

そう言つてお願いと言つたとキンジは……ため息交じりでこう言つた。

「分かつたよ雪泉姉。暫くだぞ。」

「ありがとうございませす。キンジさん。」

雪泉がそう言つてにこつと笑う所を見てキンジは顔を赤くしてそつぽを向いたとき

金髪の少女にある事を言った。

「名前が無いからなあ．．．どうするか?！」

彼女の名前を何にしようかと言うとキンジはある文字を思いついた。

「．．．『カナメ』はどうかかな?！」

『『カナメ』．．．ですか?！」

「ああ。俺がキンジで兄さんが金一だろ。だから女の子だからカナメっていうのはどうかかな?！」

それを聞いて雪泉は顎に手を置いて考えた後こう言った。

「良いですね。丁度金髪でするので丁度良いですね。」

「それじゃあ．．．決まりだな。」

そう言うのと金髪の少女はその言葉を復唱していた。

「カナメ．．．カナメ。」

「そうだ。お前の名前は『カナメ』で良いか?！」

それを聞いた金髪の少女は．．．ニコツと笑ってこう言った。

「ハイ。」

次の朝。

「ううう．．．ん。」

キンジは．．．ソファの上で眠気眼の状態で起きた。

自分の部屋はカナメにさせて自分はソファの上で寝ることにしたのだ。

何やらトントントンと音がしたので起きてみた。

周りには良い匂いが漂っており鍋からも良い匂いがしてきたのだ。

そして台所に立っている人間を見た。

腰すら軽く届くほどの金髪。

少し白っぽい服と．．．後ろからフリフリと動くお尻．．．。

「!!!」

キンジはそこを見た瞬間ソファに戻った。

血が逆流するくらい沸騰している事が丸わかりでありキンジは落ち着こうと
していた。

「(落ち着けよ俺!こんな所であれになったらマジヤバい!!)」

キンジはそう思って落ち着かせようとした。

HSSによつて中学生時代は酷い目を見たからだ。

そして落ち着いたことを確認してもう一度確認しようとする……目の前に本人がいた。

「オハヨウゴザイマス。キンジさん。」

「どわあ!!」

キンジはそれに驚いて落ちる寸前で体勢を整えた後その少女を見た。

金髪碧眼の自身と同一年（おそらく）の少女『カナメ』がそこにいた。

そしてカナメはキンジに向けてこう言った。

「ゴハン……タベル?」

こてんと首を傾げながらそう言うがキンジは別の所を見てしまった。

そこは……。

「(やつぱこいつ煽ぐらいあるって言うか白くて……!!)」

……胸の谷間であった。

お前馬鹿かと言う人間がいるかもしれないがまあそれも男の性だなと思う所である。

そしてキンジはカナメに向けてこう言った。

「あ、ああ……食べる。」

そしてキンジが目にしたものと言うと……。

「これ……全部お前が作ったのか？」

「……ハイ」

それは二人分をベースにした朝食であった。

昨夜作ったホワイトトシチューの隣には少しカリっとする程度のパンとサラダ、綺麗に盛り付けされたハムと目玉焼き。

正に外国の朝食と呼ぶべきものであった。

そしてキンジとカナメが席に着いて食べようとすると……。

ピンポーン。

何やらチャイムが鳴ったので見てみると……。

「げ。」

ここで見たのは……。

黒い髪の毛を長くした大和撫子風の美少女がそこにいた。

「……白雪。」

星伽 白雪。

星伽神社の長女でキンジの幼馴染であるがちよつとヤバいところがある。

それは……。

「今日はまだ飛鳥達が来てないからこれを期にキンちゃんとうフフフフフフ。」

少し瞳のハイライトが消えてそう言う彼女はキンジに惚れているのだが他の女の子がいると直ぐに邪魔するので大変なのである。

キンジはカナメの格好を見るとヤバいと思った。

「(下手すりゃ飛鳥たちが来た時のように家がボロボロになり兼ねんぞ!!)」

そう、嘗て飛鳥達がキンジの部屋にいるのを見て問答無用に斬り捨てようとした

ところ応戦してドンパチ起こした後雪泉によつて(白雪を失神させて)鎮圧した後

部屋の片づけとその片隅で雪泉の折檻を受けている白雪を見た後白雪は雪泉の監視下に置いてキンジに近づかないように警告された。

その時の白雪の顔はこの世の終わりのような顔になっていたそうだ。

然しキンジの部屋に来たという事と飛鳥達が来てないことを理由に入室しようとしているのであろう。

そしてキンジはカナメをもう一度見た後ため息交じりでこう言った

「しゃあない・・・何とかするか。」

そしてキンジは扉を開けた。

まるで危険物に触るかのように。

忠告する。

キンジが白雪を見つけてしまい仕方なく扉を開けると白雪が扉の前でいそいそと手鏡を見て何か準備していた。

「(何であんな所で準備するんだよ。部屋でやれよな。)」

キンジはそう思いながら扉を開けた。

「あ、おはようございませす！キンちゃん!!」

「ああ、おはようつてキンちゃんはやめろつていつも言ってるだろ？ガキじゃあるまいし。」

キンジは白雪が自身に向けて言った言葉に注意をかけると白雪はあわあわと慌ててこう言った。

「あつ……ご、ゴメンね。でも私……キンちゃんのこと考えてたから、

キンちゃんを見たらつい、あつ、私またキンちゃんつて……ゴメンね、キンちゃん、あつ……。」

白雪は顔面蒼白になりながらもそう言う所を見ると何だか怒るに怒れなかったが今、白雪を入れるのは少し不味いと考えていた。(少しじゃないが)

「今『カナメ』がいるのを見るとこいつ暴走しそうで怖いんだよなあ。此間みたいに部屋が滅茶滅茶にされそうだし。」

キンジがそう思っていると・・・ペタペタと足音が聞こえた。

「トオヤマ・・・さん。・・・ゴハン・・・サメますよ。」

『『カナメ』!!』

カナメが台所から姿を見せるとキンジは彼女の服装を白雪が見た瞬間どんな化学反応を起こすか全く見当がつかないのだがキンジは白雪の方を見ると・・・。

「・・・・・・・・・・。(。ρ。)」。

「・・・・・・・・・・。白・・・雪?」

白雪は茫然とした表情で見ていたことにキンジは戸惑っていると・・・。
がくがくがくがく

「うおー!」

突如白雪の体がガクガクガクと首如震えるとそれを見たキンジは驚いた。
そして暫くすると・・・。

「ネエ・・・キンちゃん。」

「は、・・・ハイ!!」

キンジは白雪の言葉に警護で返事をする。白雪はキンジに対してこう聞いた。

「何であの子キンちゃん、服を着ているの？何でキンちゃんの部屋にいるの？」

「何でキンちゃんの部屋でエプロン何て着ているの？何で・・・ネエナンデなんでなん
で何で何でナンデナノキンちゃん。」

白雪はハイライトを失った瞳でキンジにそう聞くとキンジもどう答えれば良いか
分からなかったのでどう答えようかと思っていると白雪は懐から・・・短刀を出した。

「天誅ー！！」

白雪はキンジの横をすり抜けてカナメに目がけて一直線に向かった。

「ヒイイ！！」

カナメはそれを見て悲鳴を上げて伏せると・・・キンジが割って入って白雪を
止めた。

「待て白雪！！こいつは武偵校生徒じゃない！！」

キンジは短刀を持っていたナイフで止め乍らそう言うも白雪は相変わらず
ハイライトの消えた目でキンジに向かってこう言った。

「駄目だよキンちゃん。そいつはキンちゃんを私から奪う泥棒猫だよ。そういうのは
さっさと消した方がいいんだよキンちゃん。」

「（駄目だ！完全に飛鳥達と会った時と同じ・・・いやそれ以上だ！！）」

キンジは白雪の様子を見てそう思いながらカナメの方向を見ると・・・

とんでもないのが見えた。

それはカナメの・・・白いお尻がふるふると見えてしまったからだ。

「!!」

キンジはそれを見てしまった瞬間ある現象が起きてしまったことに気づいてしまった。

「(ああ・・・やばい・・・こりやなっちゃうわ・・・)」

血が沸騰しそうなこの感覚。

頭が冴え渡ってしまうようなこの感覚。

「(ヒスつちまったぜ!)」

キンジはそう思った瞬間・・・白雪に向かってこう聞いた。

「白雪・・・お仕置きの時間だよ。」

「へ?・・・!!」

白雪はそれを聞いた瞬間・・・足元が何かに当たったことに気づいて下を見ると・・・キンジが白雪の足元を薙ぎ払っていたことに気づいた。そしてキンジはそのまま白雪をさせるところで呟いた。

「もうお前をこんな風にしたくないから・・・良いね?」

「は・・・はい／／／／／」

白雪はそう言つて顔を赤くして立ち去つた後キンジは性格が変わつたようにカナメのほうに近づいた。

「すまないね。白雪からは俺から忠告しておくからここは・・・。」

「貴方は・・・ダレ？」

「へ？」

カナメはキンジにそう聞いた。

カナメとキンジ

「貴方は・・・ダレ？」

「へ？」

カナメがキンジを見てそう聞いた。

するとキンジはカナメの頭を撫でてこう言った。

「何言ってるんだい、カナメ？俺はキンジ」

「貴方・・・チガウ。」

カナメはキンジの目を見て言うのとキンジは頭を少し搔いてこう言った。

「・・・凄いな君は。一目で見破るなんて飛鳥や雪泉姉でもそこまでじゃなかつたよ。」

キンジはカナメに向けてそう言うところ続けた。

「ちよつと待っててくれるかい？直ぐに治まるから。」

キンジの言葉にカナメは大人しくこくと頷くとキンジは自分の部屋に戻った。

数分後……。

「……。」

「大丈夫……ブ？」

部屋から戻ってきたキンジは机に突っ伏していてそれを見たカナメは気に掛けていた。

「……さっきのだけだよ……どうしてわかったんだ？」

キンジはカナメに向かってそう聞いた。

あのモードはそれなりに顔なじみの人間か知っている人間でなければ分からないのだがそれを初見で見切ったカナメに対して少しだが警戒心を持って聞いた。（懐にはいつでも戦えるように銃を構えていた。）

そしてカナメはキンジの言葉に対してこう返した。

「……何となく……カナ？」

その答えはキンジの警戒心がズズッと下がったのだ。

（頭も一緒に）

キンジは体勢を立て直してはああと溜息ついてこう言った。

「あれなんだがな……。」

キンジはカナメにさっきの状態の説明をした。

HSS（ヒステリア・サヴァン・シンドローム）

前にも話したが興奮状態の時に脳のリミッターが一時的にカットされ超人的能力に目覚めるのだが：：覚醒するためには異性に興奮しなければならぬという冴えねえ条件が付くのだ。

「そんな能力を中一の時に一人の女の子を虐めていた女生徒共にやらかしたらあいつら何処で知ったのか俺を使って色々ときき使いやがってな、だから地元からここに来たのに・・・。」

試験前に白雪に絡んでいた男子生徒共を軽くのした後そのまま試験会場に行ったのが運の尽き。現役武偵を倒してしまいSランク武偵と言うトップに一年にしてなってしまうのだ。

「それで今に至るってわけだが・・・今なら雪泉姉に頼んで」
キンジはそう言いかけた瞬間言葉が途切れた。

「!!!」

何せカナメに抱きしめられていたからだ。

「イイ子・・・イイ子」

何だか子供をあやしているようなないような感じであるが現在カナメは・・・
ノーブラの為胸の弾力がダイレクトに伝わっているのだ。

キンジは慌てて飛び出すとカナメに向けてこう聞いた。

「何してんだよ!!」

するとカナメはキンジにこう返した。

「キンジ……頑張ったから……オレイ?」

何でそれだよと思いたいがカナメの邪気の無い笑顔に溜息つくこうとするとこう言った。

「キンジ……助けて……クレタ……だから……イル。」

カナメの言葉にそうかよと少し笑顔になって言うとかナメはキンジに向けてこう言った。

「ゴハン……食べよ。」

「ああ」

そしてお互い手を合わせてこう言った。

「いただきます」

この日から二人の共同生活が始まり……あの日にへと向かった。

「緊急速報です! たった今届いた情報によりますと豪華客船

『アンリ・マリーベル』号が沈没したの事です! これに伴い負傷者、死者は0ですが

行方不明者が一名いることが分かりました。
名前は『遠山 金一』。武偵とのことです!!」

心配してくれる人たち

「ここ最近ですが武偵に対するパッシングが根強いですね。」

「そりゃそうでしょ。豪華客船沈没なんてへましたせいでクルージング会社は大損ですからね。そもそも武偵なんてヤクザまがいな連中」

突如音が消えた。

それもそのはず先程のはテレビの声であったのだ。

キンジはそのテレビを消すとある物を見た。

それは・・・白い布に包まれた兄「遠山 金一」の遺骨である。

否・・・骨などない。

何せ海から遺体すら浮かんでこなかったからだ。

遠山 金一は乗客を全員逃がすために脱出できなかつたらしいが訴訟を恐れたくルージング会社はこう声明を出した。

「今回の事件は未然に防げなかった武偵『遠山 金一』の職務怠慢から起こった事件である。」

何という無茶苦茶な声明であるが武偵を否定していた議員やマスメディア、金一に

よって助けられた一部の乗客によって金一のことを『無能な武偵』、『税金取り』等とネットや週刊誌で大々的に報じられていた。

キンジはそのショックで部屋に引きこもっていた。

外には未だメディアが待機しており外出すら出来ないのだ。

そんなキンジの自室の前でコンコンとノックする音が聞こえた。

「キンジさん。ご飯・・・置いてますから食べて下さいね。」

ここ最近でやつと日常会話が喋れるくらいになったカナメはキンジの事が心配でここに居るのだ。

扉の前を見ると昨日作っておいたご飯も手つかずの状態であったのを見て悲しい表情になった後カナメはキンジにこう言った。

「キンジさん。ここから出てくるの、待ってますから。」

そしてそろそろと去って行った。

それでもキンジは答えなかった。

心が・・・凍り付いてしまったからだ。

そして武偵校では・・・。

「何が『無能な武偵』だー!!ふざけやがって!!」

武偵校にある生徒会室にて焔が持っていた週刊誌を破り捨て投げてそう言った。

ここにはキンジを心配するメンバーが集まっていたのだ。(白雪は諸事情でいいない)

「手前らには出来るのかって話だろ!!」

「そう怒るな、焔よ。僕も腸煮えくり返ってすぐさま殴り飛ばしたいわい。」

焔にそう言いながらも夜桜は掌を握りつぶさんとするようにそう静かに怒っていた。

「ネットでも金一さんに対しての暴言が結構あつて順次出てる。」

紫はPCを操作してそう言った。

「そもそもこれって間違いにも程があるつす!キンジのお兄さんは皆を守るために

残ったのにこれは酷過ぎっス!!」

華毘は今回の報道に怒り心頭で見っていた。

「それよりも遠山君・・・大丈夫かな?」

その中で飛鳥はキンジを心配していた。

「今はカナメさんがいらつしやいますが彼女によるとここ最近食事をまともに摂ってないようです。」

雪泉はキンジの近況を伝えた後全員暗い表情になった。

「何とかしなけりゃあなあ・・・。」

焰がそう言うも全員何も作戦がないのだ。

どうするかと考えている中コンコンと扉をたたく音が聞こえた。

「あ、どうぞ。」

雪泉がそう言つて扉が開くとそこにいたのは・・・。

「何やらキンジ君関連で考えているのなら。」

「手が無いわけではない。」

「じっちゃん!!」

「おじい様!」

彼らこそキンジを助けるキーパーソンになる存在。

「服部 半蔵」

「光 黒影」がそこに立っていた。

正義とは?・悪とは?

に
さてさて半蔵が何やら計画を飛鳥達に話した後彼らはキンジが住んでいるアパート

向かったが部屋の前には多数の報道陣やマスメディアが居座っており入る事すら容易でないことが見てうかがえる。

それを近くのビルの・・・屋上から双眼鏡で飛鳥が見ていた。

「こちら飛鳥。目標の部屋前に多数のマスゴミが健在。」

飛鳥は無線でそう言うのと近くの河に屋形船の中で待機している雪泉達に届いた。

「了解。おじいさまたちが入るのを見た後再度連絡を。」

『了解。』

そう聞いて飛鳥は無線を切った後雪泉は屋形船にいる焰たちに顔を向けた後こう言った。

「それではこれより・・・『遠山キンジ』救出作戦を執行いたします。」

「「「「おおおおお!!」「」」」」

「いやーまさか車に乗せてもらえるとはありがたいのう、『武藤』君。」

「いや、いいつすよこれくらい。ダチが大変な時に何も出来ねえと思つていたら丁度あんたらがキンジの所に行くつて言うんだからこれくらい当然すよ。」

半蔵達は学園から出る途中でそのことを聞いていた『武藤 ゴウキ』は自身が所属している「車輛科（ロジ）」にある車に乗せてもらつていた。

そして目的地のすぐそこに着いた後「武藤 ゴウキ」は半蔵達に向かつてこう言つた。

「本当なら俺達は何とかしてえとこだけど俺達じゃあ……キンジを何とか出来ねえかもしれねえから……キンジを宜しくお願い致します!!」

武藤は運転する場所越しであるが頭を下げるとそれを見ていた半蔵達はこう言つた。

「……分かつたわい。」

「何とかするわい。」

そう言つて立ち去つていった。

そして半蔵達はキンジの部屋の所に行こうとすると記者達に囲まれた。

「すいませんが遠山キンジさんの関係者ですか?」

「今回の事件について一言を!」

「すまんが通してくれんかのお?」

半蔵は記者達の質問を聞かずそのまま入ろうとするもある一言が・・・彼らの耳に入っ
てしまった。

「今回『遠山金一』がやったクルージング会社の損害について何か謝罪をして

下さい!!」

「・・・アアア(#。D。)」

「ヒイイ!!」

すると半蔵はその記者に笑顔で向かってきてこう言った。

「ほおお。謝罪って・・・何をじゃ?」

「きききき、決まってるでしょ!今回クルージング会社が保有していた豪華客船を

沈没させたことに対してですよ!」

記者の一人は恐怖しながらも虚勢を張って言い返すも半蔵は記者の手を握ってこう
言った。

「ほおお。たかが船一槽と人の命は同じ価値とは驚きじゃのお。」

「へ?」

記者の間拔けな言葉に半蔵はこう続けた。

「船などはもう。作ればまた出来るが……人の命はそう簡単な物ではないしもしあの時お主が乗っていたら……出来るのか？」

その言葉に記者は馬鹿らしいと思いつながらこう返した。

「何言ってるんですか？一般人では出来ることなど限られるけど武偵は何でもできるじゃないですか？それで出来ない武偵なんて役立たず以外の何物でも……」

「馬鹿者が……!!!」

半蔵はその記者に向かって大声でそう言うと言いつつ半蔵はこう続けた。

「武偵と言えども只の人も同じく間違いは起きるし過ちも起こす！然し彼らはそれを押し殺してでも人々を守り、悪から世を守ろうと必死にその力を使っておるのに

お主たちは『出来て当たり前』じゃと？違う!!出来ようと努力と研鑽を積んでおるのじゃ!!今回の金一君の行為は多くの人間の命を救い、守り切ったというのに

それに尊敬の念ではなく侮辱を振りまいて死者を冒とくしていることと

分からねぬのかあ!!」

すると傍でじつとしていた黒影が記者達に向けてこう言った。

「お主等は仕事と割り切っているようじゃが貴様らの行為が遺族の傷を広げさせ、多くの人間を不幸にさせていると自覚しているのか？」

その言葉に記者の一人がこう言い返した。

「然し我々には『言論の自由』がある!どう言う風に表現するも我々の自由であり正義」

「それが正義と言うのなら・・・悪は何だ?」

「へ?」

「悪とは何だ?船を守れなかった事か?財産を守れなかった事か?謝罪しない

ことか?・・・否だ!真の悪とは命を守ったものに対して感謝ではなく暴言を吐き、悪意をばら撒き、自らの罪を隠蔽しようとする者共ではないのか!!」

「そしてなによりも命を懸けて大勢の命を守り抜いた若き武偵に対して哀悼の意を述べず!死者の思いを踏み散らかすものたちではないのか!」

「・・・・・・・・」

その言葉に全員が黙りこくってしまった。

正義とは何か?悪とは何か?仕事とはいえ本来なら自分達よりも年下の青年が

命がけでやっていたことを蔑ろにしているという真実が彼らの胸に強く突き刺さった。

「それでも正義を語るといふなら・・・もう一度今自分達が持っている

そのペンの重さを思い出せ。」

そう言った後黒影と半蔵はキンジの部屋をノックした。

「おおい？おるか？」

そう言った後何やら扉を少し開けると・・・カナメが立っていた。

「誰ですか？」

カナメは半蔵達に向かってそう聞くと半蔵はにこりと笑ってこう返した。

「儂は『飛鳥』の祖父じゃが『キンジ』君はおるかい？」

そう聞くとカナメは笑顔になってこう言った。

「『飛鳥』さんの！どうぞこちらです!!」

そう言って扉を開けた後半蔵と黒影は素早く部屋に入った。

いざ外へ。

半蔵達はカナメの案内の元キンジの部屋の前に着くと半蔵がキンジの扉を叩いてこ
う言った。

「おおい、キンジ君や。儂じゃ、半蔵なんじゃが開けてくれんかのう?」

「……」

「すいません。キンジはあれから全然出てくれない。」

カナメが半蔵に謝りながら説明するも半蔵は頭を掻いてこう言った。

「こりや時間がかかりそうじゃな……黒影。」

「分かつとるわい。」

半蔵は黒影に変わらせると黒影は黒い鉄扇を出すとそれを扉の前目掛けて……叩き
つけた。

すると……扉がスパツと……斬れたのだ。

「ええええええ!!」

カナメはそれを見て驚いた。

まあ……普通に考えても無理だろう。

扇で扉が斬れるなんて・・・ねええ。

そして扉の先には・・・箱だけの骨壺と遺影、そしてその正面で体育座りしているキンジを見た。

そして黒影はキンジの肩を掴んでこう言った。

「キンジ、顔を見せよ。」

そう言つてキンジを正面に向かせるとそれは酷いさまであった。

目は赤く純血しており涙の跡がくつきりと残っていた。

それは嘗ての・・・雪泉のようであった。

雪泉の両親も武偵であったがとある任務の際に殉職して雪泉一人だけになつてしまつたのだ。

その時黒影は雪泉を引き取ろうと来た時には・・・キンジと同じような顔になつていたので。

だが環境は違つていた。

未だ幼かつた雪泉の周りにはキンジや飛鳥、周りの人間の支えや泣くことが出来たのだがキンジの場合は違う。

頼れる友すら入ることが出来ず、周りには兄に暴言を吐く民衆と言つた

檻の中である事から泣くときも一人ですすり泣くしなかつたのであろう。

それを察した黒影は少し荒い方法を使った。

「いい加減に起きないか！この盆暗が!!」

「ぐは！」

黒影はキンジを殴り飛ばすとキンジはそのままベッドまで飛んで行った。

「キンジさん！」

カナメはそれを見てキンジの所に向おうとすると半蔵がそれを止めた。

そしてキンジは前を見るとこう言った。

「黒影・・・じいちゃん？」

「ほう、眠気眼ではなかったようじゃな。」

もしそうだったらもう一発だったぞと言うとキンジに向かってこう言った。

「荷造りしろ。」

「へ？」

黒影はキンジに向けてそう言った。

「早く!!」

「は、ハイ！」

そう言つてキンジは服を鞆に詰めながらカナメも荷造りして準備し終わると・・・。

「良し行くぞ。」

そう言いながら黒影と半蔵は・・・窓にへと向かった。

「へ？そつちは河だぞで？」

「知つとるわい。」

黒影はキンジの言葉をスパツと斬り捨てると窓からベランダの下を見ていた。

キンジはそれにつられて下を見ると・・・。

「キンジさ～～ん。」

「お～～い、キンジー。」

「キンジ殿ー。」

「キンジ。」

「キンジ～～～！」

「雪泉姉！焰！夜桜！紫！華毘！」

キンジは下にいる彼女達を見つけた後半蔵がキンジとカナメに向かつてこう言った。

「それじゃキンジ君。・・・飛ぶぞ。」

「？」

「・・・あああな。」

カナメは分からなかったようだがキンジはそれを察してカナメを・・・

お姫様抱っこした。

「ひゃあ／＼／＼／＼」

「悪い。」

カナメは素つ頓狂な悲鳴を上げるとキンジはそれをわびた。

「先に行つてるぞ。」

半蔵はそう言つて・・・窓から飛び降りた。

「!!」

「それじゃあ・・・しつかり捕まつてる!!」

カナメはそれを見て驚くと・・・キンジもそれに続いて飛び出した。

「きゃあああああ!!」

カナメは悲鳴を上げながらキンジに掴まっているとキンジは武偵の必需品である高い硬度のワイヤーをベルトから射出して他の部屋のベランダに引っ掛けた。

無論半蔵達は懐に入れていた縄を引っ搔けていた。

そして彼らはそのまま屋形船に移った。

心の中を曝け出せ。

あの後キンジたちを屋形船に移送させた半蔵達はそのまま何処かに行っているが
当のキンジはと言うと……。

「……………」

あれからと言う物今度は窓際でボーっとしていた。(黒影に殴られた傷は
その時に雪泉が治した。)

「キンジさん……………」

「やれやれ……………如何やら一過性だったようじゃな。」

雪泉はキンジの様子を見て心配している中半蔵はもう少し時間がかかりそうだなと
思った。

それを見ている焰たちはと言うと……………。

「やっぱもう一発殴るか?」

「いやそれは流石にだめじゃろう?」

焰の提案に夜桜は待ったを掛けた。

「……………あ、半蔵さん達の事がネットで色々出てるよ。」

紫がネットで先程の事が出てるのを言った。

「・・・誹謗中傷があるけど大多数は金一さんの事で同情や賛同者が出てるよ。」
それを見て少し笑顔になっていた。

「でも誹謗中傷を書いているような連中なら嫌がらせが起きそうっすね？」

華毘が半蔵達にも被害が及ぶんじゃないかと危惧しているが黒影達はこう返した。

「なあに自らの身ぐらいは守れるわい。」

「もし他の連中に何かしやうものなら・・・百倍返しでやってやるわい。」

半蔵はふおっふおっふおっふと軽い感じで返した。

「じっちゃ〜ん。」

「おお、飛鳥の声が聞こえるという事は合流地点か。」

半蔵は飛鳥の声が聞こえたことにより集合地点に来たのだと気づいた。

すると飛鳥は橋の近くにある船着き場から・・・跳び上がった。

そして見事に屋形船の天井に着地した。

「じっちゃん！遠山君は!?!」

「あそこでボーっとしておるわい。それと飛鳥、今からちよつとある物作るから

それをキンジ君に渡してくれんかい？」

「うん。」

すると半蔵は実家である寿司屋の装束に着替えて厨房に立った。

「おおい皆。もう少して昼食じゃから皆で食べんか？」

「「「「ハローイ!!!」」」」

半蔵が全員に向けてそう言うのと寿司を出した。

「さあたっぷり食べてくれ！」

「「「「いただきま〜す!!!」」」」

全員がそう言った瞬間傍にあった寿司を食べ始めた。

すると半蔵は飛鳥にもう一つの寿司を出すと飛鳥はそれをキンジの前に出した。

「はい、遠山君!じっちゃんが作った握りずしだよ。これを食べて元氣を出そう!」

そう言つて飛鳥はキンジにそれを箸で持つて・・・

「はい、あ〜〜ん。」

あ〜〜んをしようとしていた。

「良いよ!自分で食べるから」

「駄目だよ!カナメちゃんのご飯を食べてないからこうしないと食べないでしょ!!」

飛鳥はキンジにそう注意するとキンジは慌ててこう返した。

「分かった、分かった!! 食べるって!!」

そう言つてキンジは飛鳥の箸からそれを取つて食べた……。

「くえ t w y ていろ 7 p y p!!」

突如鼻を摘まんでもだえ苦しんだ。

「ふえ!! 遠山君!?!」

「キンジさん!! これって……。」

カナメはキンジの状態を見てそれを食べると……。

「x d s g h f d h f k g l l k!!」

同じようになつた。

「えーえ!! なにこれ!?!」

飛鳥はさらに混乱するとキンジは近くに置いてあつたコーラを飲むと大声で

ここう言つた。

「飛鳥!! これ山葵巻きだぞ!!」

「えええ!! 山葵巻きって……じつちゃん!?!」

飛鳥はそう言えばと思つて半蔵の方を見ると……。

「ほっほっほっ。大成功じゃな。」

どうやら半蔵の悪戯の様であつた。

「じつちゃん！何やってるの!？」

「爺さん!!なんの冗談だよおい!？」

飛鳥とキンジが大声でそう言うのと半蔵はキンジの方を見てこう言った。

「ようやくとしみつたれた顔じゃなくなったのお。」

「へ?。」

キンジは半蔵の言葉を疑問すると半蔵はこう続けた。

「遠山君。世間は金一君の事を悪く言っておるしお前さんにも言われのない言葉を投げかけられるが・・・儂らが最後まで君を守るからほれ、心に思っている言葉を出せ。楽になるぞ。」

半蔵はキンジの心を気遣いながらそう言うのとキンジは壁に背を持たれついでこう言った。

「・・・なあ、爺さん。」

「ん?なんじゃ?。」

「・・・正義って何だろうな?。」

大丈夫。

「正義か……。」

キンジの問いに半蔵は繰り返しで答えた。

「爺さんは俺の家についてどれくらい知ってるんだ？」

「それとなりじゃな。君のご先祖がかの有名な『遠山 金四郎』である事ぐらいなら。」

そう、キンジの先祖は皆も良く知っているあの桜吹雪で名を馳せた

『遠山 金四郎』であるのだ。

(諸説色々あるが中には女の刺青をしていたと言う説もある『必殺仕事人』情報)

「そう。俺の御先祖様は正義の味方だった。だから父さんや兄さんも代々から人を守る事を目的に活動していたんだ。」

「でも……そうやったって意味はあったのかなって思っちゃうんだ。」

キンジはそう言いながらも言葉を詰まらせつつ続きを言った。

「結局誰かを守ったって後ろ指さされ、罵詈雑言を吐かれ、死体に石を投げつけられる。そして残された人間は肩身の狭い一生を送る。」

「なら俺達は何のために戦つてたんだ！傷つきながらも這つて立ち上がつて守つても何の意味も無い!!どうした良いんだよ……。」

キンジは自分の心の中にある本音を語つた。

父は任務で殉職するも何も語られず、兄は多くの人を救つても感謝どころか

侮辱の言葉で兄を形成させられ御先祖が語っている正義の味方とは程遠い理想を

裏切られ現実と地獄を目の当たりにしたキンジに対してどう言おうかと考えていた。

キンジの覆われている闇を消し去るほどの光を当てる方法を考えている中隣で

聞いていた飛鳥がキンジに近づいて……こうした。

「遠山君。」

そのまま彼女はキンジを抱きしめた。

胸を顔に押し付けるように……。

「なっ！飛鳥!!」

キンジはその行動に驚き離れようとするも飛鳥は頑として離れなかつた。

「遠山君……今は私達だけだからさ……もう楽にして良いんだよ?」

「……え?」

「私達仲間じゃない。仲間が大変な時には支え合つて乗り越えようよ。」

一人でさ……抱え込まないですよ……。」

キンジはその声を聞き、そして……これまで溜め込んでいた自分の悲しみが……溢れ出した。

「……俺……兄さん……憧れて……それ……なのに……何で……ナンデ……」

「もう我慢しなくていいんだよ遠山君。私達がいるから。」

「もう……泣いていいんだよ。」

そして飛鳥の言葉でキンジの心が……吐き出された。

「ウワアアアアアア!!アアアアアア!!兄さん!!ニイサン!!」

キンジは飛鳥を抱きしめ乍ら泣き続けた。

人の目も憚らず、子供のように泣き叫んだ。

そして飛鳥はキンジの頭を撫でながらこう言った。

「大丈夫だよ遠山君。私達を守るからさ。遠山君もみんなと一緒に守ろう。」

「アアアアアア!!」

甘い空気。

「すう。すう。」

キンジは泣き疲れたのか眠っていた。

飛鳥の膝枕で……。

「眠っちゃったね。」

飛鳥はキンジの頭を優しく擦りながらそう言う。他の人間もそれを見ながらこう言った。

「当たり前だろ。兄貴を…… たった一人の家族を失っちゃったからな。」

「それに世間の事で泣く暇と言うか、ここ迄声を上げることすらなかったのじゃろう。」

「私も…… 姉に何かあつたら…… どうしようもないかも。」

「うちも同じっす。妹や姉期に何かあつたと考えたら…… 悲しいじゃすまないっす。」

焰、夜桜、紫、華毘がそれぞれ、特に紫や華毘は他人ごとではないと思っ
ているようだ。

「・・・私、何も出来ませんでした。」

「カナメさん？」

雪泉の隣でカナメが少し寂しそうな面持ちでこう言った。

「キンジさんが苦しい時、私が出来たのは扉越しからの声掛けとご飯だけでした。

あの時、無理やりでもあの扉を開けていれば皆様にここまでの事を」

「そこまでです。」

「痛。」

カナメが何か言いかけた瞬間雪泉がカナメの頭に手刀を軽く叩いたあとこう続けた。

「カナメさん。確かにそうかもしれないかもしれませんがあつてもなくても私達は行動して

いました。それに・・・遠くで考えているよりも何かできることはないかと近くで

精一杯頑張ったあなただからこそ最悪の状況にならずに済んだんですよ。そう思

えば貴方もキンジさんを立ち上げらせようと頑張った一人で私達の仲間です。」

だから自分を責めないでくださいと雪泉がカナメを慰めたら雪泉は少しうるつと涙

を流しながらも「ありがとうございます。」と答えた。

「着いたぞ。」

半蔵は屋形船をある河原に停泊させた。

「……う……ん。」

丁度良くキンジが目を覚めると最初に見たものは……。

「何だ？……大きな……鰻頭か？」

そう言つてそれを手で……揉んだ。

「ふひゃあ！」

「？」

キンジは眠気眼の状態から目が覚めると目にしたのは……。

「……遠山君。／＼／＼／」

顔を真っ赤にしている飛鳥の胸を……揉んでいた。

「x z n c m g m n m ・ n ? m ? ・ !!」

キンジはどひゆんと言う音が出る程後ろに下がった瞬間……船の角つこに後頭部をぶつけた。

「つくえy r w y てうりゆといy ぽう!!」

キンジはあまりの痛さに悶絶していた。

血の周りが早くもなっていた。

「えっと……おはよう遠山君。／＼／＼／」

飛鳥は胸を抑えながらそう言った。

「えつと・・・大丈夫／＼／＼／」

それを聞くとキンジはそっぽを向きながらこう答えた。

「おお・・・ありがとうな・・・眠らせてくれたことに／＼／」

「う・・・ううん／＼／／／」

何やら周りが甘酸っぱい空気になりかけている所に後ろから声が聞こえた。

「・・・キンジさん／＼／」

「・・・キンジ」

「ふあわわわわわわ。」

後ろを向くとそこにいたのは顔をふくれっ面にしていて雪泉と少し不機嫌そうな顔をしている紫、顔を赤くしているカナメを見かけた。

「いや・・・あのお・・・これには・・・」

キンジはどうしたら良いのかと迷っている中焔たちを見てみると・・・。

「修羅場だぜ。夜桜。」

「こりやどうしようもないのう。」

助ける気零であつた。

その後自分もと雪泉と紫から胸を押し付けられHSSになりかけるといふ惨事に

なつた。

「それでどうするんだ？これから？」

その様子を見ていた黒影が半蔵にそう聞いた。

「奴の実家もここじゃがマスコミが黙っているわけではあるまい？」

「それなら大丈夫じゃ。僕の元でかつキンジ君の修行が出来るといえば？」

「成程そう言う事か。それなら良いが只ではいくまい？」

「当たり前じゃろう・・・馬車馬の如く鍛えて働かせるわい。」

それから。

あれから寒い冬が訪れた。

「はあ、はあ、はあ。」

飛鳥は自身の家に帰って行く途中であった。

この時武偵校も冬休みに入りそれぞれ家に帰っているのだ。

そして自身もそれにより家に帰っていった。

彼女の家は「寿司どころ 服部」と言う小さな寿司屋であるが地元から愛されており常連もいる程である。

さてさて間もなくクリスマスであるが老人たちは孫が帰ってくるのに備え玩具とお昼に寿司を頼む事がしよつちゆうあり今は書き入れ時である。(大晦日も然り)

「じつちゃん！只今ー！」

「おお、お帰り飛鳥。早速で悪いんじやが」

「店の手伝いでしょ？二人は？」

飛鳥は店の奥にある自室にへと向かいながら半蔵にそう聞くと半蔵はこう答えた。

「二人は出前に行つて、もう一人は昼飯の準備をしておるぞ。」

そう言っていると飛鳥は台所に立っている人間を見た。

足元まで届く長髪を三つ編みにし、包丁の叩く音と鍋の煮える音が聞こえていた。

「只今！カナメちゃん!!」

「!・・・お帰りなさい飛鳥ちゃん。」

カナメが台所で昼食の準備をしていた。

「今日は皆さん忙しそうだからサンドイッチを作ってます。おかずのから揚げも後でどうぞ。」

「ありがとうカナメちゃん!」

飛鳥はカナメにお礼を言った後自室に入って寿司屋の制服に着替えていた。

そして着替え終わるとスクーターの止まる音が聞こえた。

「ああさみい!!半蔵さん!終わりました!!」

「おおご苦労さん。後は婆さんが魚の買入れの補充が済めば昼からの作業に取り掛かれそうじゃ。」

それじゃあそれまで二人とも小休止じゃと言うと飛鳥は店に入るなりその帰ってきた人物に向けてこう言った。

「お帰り!遠山君。」

「おお只今。飛鳥」

それは黒髪青年キンジであった。

あの後浅草に向かったあと半蔵の計らいで寿司屋で働かせてくれるように配慮した。最初は裏方の仕事や魚の買い付けの手伝いなどをしていたが噂がなくなつたことから出前や店の手伝いをするようになった。

無論それだけではなく自身が武偵になる前「忍び」として過ごしてきた際の

経験と技術をキンジと彼と一緒に強くなりたいとカナメも混じつて特訓させた。

半蔵はカナメび戦闘経験があるんじゃないかと特訓の中で知るがそれは後にしようと考えた。

そして昼の仕事と夜までの通常営業が終わると帰ってきた「服部 小百合」と夕食をすることとなつた。

「「「いただきます。」」」

それぞれそう言つてご飯を食べるとキンジは飛鳥にこう聞いた。

「そーいや皆元気していたか？」

「うん武藤君は相変わらずだけど不知火君がサポートしてるよ。白雪さんは・・・

遠山君がいなくなつた後何だか少し怖かつたけど他の皆は元気だよ。それと雪泉姉

は

暫く生徒会関連で来るのが年末だった。」

それを聞いた後飛鳥はこう続けた。

「ねえ遠山君。．．．何時でも良いけど、私今幸せだよ。こうやって一緒に笑っているだけで良いから。」

そう言った後飛鳥はご飯を進めた後キンジは小さな声でこう言った。

「．．．ありがとう。」

そう言った後キンジは心の中でこう思っていた。

「(一度戻ってそして世間にこう言うんだ。『遠山金一は間違つて

いなかった!!』って言えるぐらいに強くなろう!)」

すると隣に座っていたカナメもにこっと笑って答えた。

ここから新たに始めようと決心して。

そして始業式前にキンジは半蔵達にお礼を言つて武偵校に戻つていった。

その時のキンジの顔には後悔などなかった。

蜂弾（ホーネット・バレット）

弾丸込めて

「キンジさん起きて下さい！もうすぐ皆さんが来ますよ。」

この金髪の少女「遠山 カナメ」が扉をノックしながら大声でそう言った。さてその本人はと言うと……。

「ふああああ。よく寝た。」

そう言う黒髪の青年「遠山 キンジ」ベッドから起きてパジャマから制服に着替えた。

そして携帯の時計を見た。

「今7時5分か。もうじきかな。」

ピンポーン。

そう思う中インターホンが鳴った。

「はい。」

カナメは慣れた動作で扉に向かった。

「今開けますねえ。」

カナメは先ずドアの覗き穴から見た後にそう言つて扉を開けた。

「いらつしやい。飛鳥さん。」

「~~~~~(△^△) おはよー『カナメ』ちゃん！」

そこにいたのはキンジの幼馴染の「服部 飛鳥」と・・・。

「おはようさん。」

「オハヨウなのじゃ。」

「・・・おはよう。」

「オハヨウっス！」

「おはようございます。『カナメ』さん。」

焰、夜桜、紫、華毘、雪泉がそこにいた。

そしてそれぞれ部屋に入る中キンジも自室から出てきた。

「お前らよく来るなあ。」

キンジは呆れながらも嬉しそうにそう言った。

それを見て満更じやないかと確信して全員がテーブルの方を見た。

「ほう、今日は又旨そうだなあ。」

焰が品を見てそう言った。

テーブルにあるのは目玉焼きとカリッと焼いたベーコンとキャベツとトマトが乗っ

たサラダの皿、エビの刺身、魚の身が入った味噌汁、白いご飯と言った少し量があるがそれなりにきちんとした朝食であった。

それぞれ自分の配置に着くと両手を合わせてこう言った。

「「「「「いただきます」」」」」

!!!!!!

そう言つて食べ始めた。

「は〜。食つた食つた。」

焰がそう言つて持たれている中カナメが残つたエビの刺身で何かを作っていた。

「何作ってるんだカナメ？」

「ああこれですか？むこうで「飛鳥」のおじいちゃんが作っていた醤油漬けです。

晩御飯に食べようと思つて。」

キンジはカナメが何作っているのかを聞き、答えたことに納得して新聞を見ていた。

「へええ。『武偵殺し』の犯人は同一犯濃厚、犯人は収監中の重犯罪者か!?!つて

これ信頼できるのか？新聞なんて政府の犬みたいなもんだろ？」

キンジは経験則からか新聞批判をしている中紫がある事を言った。

「・・・それ裏があるよ。」

「『『『『え？』』』』」

紫の言葉に全員がそつちに向いた。

「私その時間帯と犯罪時刻とその人の経歴、PCのデータを調べてただけどどうにも食い違いが幾つかあってもっと調べていたら・・・ウイルスかまされて使い物にならなくなった。」

紫の言葉を聞いた全員は何かがあるのかと思つて考えている中カナメが全員に向けてこう言った。

「あのう皆さん。・・・バスの時間宜しいんですか？」

そう言つて時計を見ると・・・バスの時間が迫つていた。

「『『『『遅刻だあ!!!』』』』」

「ただでさえIS学園の入学式で通行規制かけられてんのに!!」

焔が他校について文句を言った。

何せ今日は人類史上初めての・・・男の新入生が二人も来るからだ。

全員荷物を持つ中キンジは荷物を取りに行く中写真に向かつて手を合わせて

こう言った。

「・・・行つてきます。兄さん。」

「遠山君！早く早く!!」

「分かった!!」

キンジは飛鳥にそう言われて部屋を出るも・・・彼女達で満員になったため自分は自転車で登校することになったがこれが間違いであった。

この時彼は最悪な出会いをするのだ。

最強にして当時最悪な武偵「神崎・H・アリア」こと『独唱のアリア』に出会った事が彼の運命を全く違った意味で引き寄せてしまうからだ。

爆弾騒動。

「その チャリには 爆弾 が 仕掛けて ありやがります」

「・・・脅迫文をそのまま読んでんのか？」

チラシを切り貼りしたような言葉で隣にいるセグウェイを見た。

本来ならそこには人が乗っているのだが代わりに乗っていたのは・・・スピーカーと「UZI」と言う短距離機関銃が・・・搭載されていた。

キンジは現在それと並列で走り漕いでいる。

そして落ち着いた様子で自転車の最も幅があるサドル部分を弄ると・・・。

「これか。」

キンジはそれを指でなぞると更に最悪だと思った。

「（こいつはプラスチック爆弾って・・・これだと自転車どころか自動車も

木端微塵だぞ！へ最近是人造トランスフォーマーによって検知されるようになった）」

「・・・マジかよ。世にも珍しい『チャリジャック』かよ」

キンジは頭を抱えてそう言った。

世の中こう言うもの好きがいるのかよと思った。

キンジは万が一に備えて人気がないであろう第二グラウンドに行こうとするとセグウェイからこう言う忠告が出た。

「チャリを 降りやがったり 減速 させやがったり 携帯を 使用した場合 爆発しやがります」

「ああそうかよー！」

それを聞いて半ば怒り口調で返すとキンジはある物を取り出した。

それは……

「月影のじつちゃん。使わせ。」

彼から貰った苦無である。

キンジはそれをあのセグウェイに当てようとしているのだ。

そして行動に移す為近づこうとした次の瞬間……ある物を見た。

「……女の子?」

グラウンド近くにある七階建てのマンションの屋上に武偵校の制服を着たピンクの髪をツインテールにしている少女を見かけた。

するとそのまま……飛び降りた。

「えー!自殺?!」

キンジはそれを見て驚いた瞬間少女の後ろから巨大なナニカが出てきた。

「パラグライダー着いてんのかよ。」

キンジはその正体を見てほっとした瞬間……こつち目掛けて近づいてきた。

「おい待て！これには爆弾と隣には機関銃があいびき」

「ほらそのバカ！さつさと頭を下げなさいよ！」

少女はそう言った瞬間黒と銀の大型拳銃を二丁抜いた。

そしてそのまま打ち始めた。

「オツわわわわ！」

キンジはそれから避けるとあれ程の不安定な場所で百発百中の辺りの良さを見た。

「すげえな。」

キンジはそれを見て驚き、感心した。

自分では先ず無理だなと分かっているからだ。

すると少女がこつちに来たのでキンジは注意した。

「おい話聞いてたか！これには」

「このバカ！武偵憲章第一条『仲間を信じ、仲間を助けよ』ってあるでしょ！——

行くわよ！」

「（その前に第四条知ってるか『武偵は独立せよ』って言うな）」

キンジは第一条と第四条の矛盾を心の中で指摘するも少女は……某有名アニメ映画

よろしくの宙ぶりの状態になってこつちに来た。

「マジでやるかよ!!」

男女逆だなあと思いながらも上下逆さまの状態で少女に掴んだ瞬間・・・。

どがああああんと言う爆発音と同時に熱風に吹き飛ばされ、パラグライダーが木に引つ掛かり腕ぎ取られ、グラウンドの片隅にある倉庫の扉に突っ込みそうになるが

あれは政府が試験的に作った対IS用の防護壁の試作品をあらうことか体育倉庫に着けるといふ暴挙をしていることを知っておりキンジは懐から拳銃を抜いて・・・

全弾撃ちかました。

撃ったといつても扉の鍵は旧世代な為破壊しやすくそのまま内部に突っ込んだ。

そしてそのままキンジの意識は途切れた。

倉庫にて

「ぐうおおおおお・・・石頭でも痛く〜。」

キンジは何か狭い箱のような空間に尻もちをついた姿勢で収まっている。

「・・・ここは・・・ああ跳び箱の中か。」

キンジは自分が現在いる状況を確認した。

「多分倉庫に入った時に一番上を吹き飛ばしてそのままボツシユートしたんだな。」

そう思いながら上に行こうとすると腹と額の上に何かが乗っかっているような感触と甘い匂いを感じた。

「?。」

キンジはそれが何だと思いついと頬でぶにぶにとした感触の物体を押しつけようとすると・・・目の前に女の子の顔が真正面に現れた。

「可愛!!」

キンジはそれを見て驚く瞬間ある事を思い出した。

それは先程ハンググライダーで自分を助けた女の子だったのだが現在その少女を自分が抱えているような状態であった。

見れば見る程ファンタジー映画に出てきそうな人形みたいな少女であった。体格から見て中等部かインターン制度で入ってきた小学生と見て取れるがあの救出劇が出来るあたりそれ相応の実力を持っていると直感したのだ。

「……すげえなこいつ。」

キンジは感心しているが一つ問題が出来た。

「……腹に収まつてて息が出来ねえ。」

キンジは何とかここから出ようと藻掻くとある物が鼻に当たっていた。

「?……『神崎・H・アリア』。」

学年とクラスは始業式の為か未記入だったが名札に名前が書かれていたのだが何でそんな高い位置に名札がと思つて見ると……。

「!!」

アリアのブラウスが捲りあがつてトランプマークがぼちぼちプリントされたファンシーな下着が目映った。

『65A⇒B』

下着の縁にあるタグを見てああと思着いた。

「……これって……寄せブラか。」

そう確信してゆっくりとブラウスを下に下げながらこう思っていた。

「もしこれで胸がもつとデカくて顔なんか押し付けられたらたまったもんじゃねえぞ。」

「飛鳥とか・・・」

黒い下着を身に付けた飛鳥

「雪泉姉とか・・・。」

風呂上がりの全裸になっている雪泉

「カナメとか・・・」

下に何もつけていなくエプロンを付けたカナメ

「ふああああ!!」

「(何思い出してんだ俺は!?)」

キンジはそう思いながら自分を殴りつけた。

「・・・あぶねえ。危うくなっちまうところだったぜ。」

(*、口、) はあはあはあど荒く息切れをしてそう思っているキンジだが・・・
お前目の前でそう言うことしたらどう思われるか分かってんのか？

「・・・へ・・・へ・・・変態ー!!!」

アニメ声で起きたアリアが大声でそう言った。

・・・そら思うわな。

倉庫の中で その2

「さっつ、さささっつ、サイツター!!」

意識を取り戻したアリアは如何やらキンジが自分のブラウスを捲り上げたのだと勘違いしたようだ。

「この恩知らず!痴漢!!人でなし!!!」

「ち、違うぞ、これは俺がやったんじゃないって痛!!」

キンジは殴られながらも事の真相を話そうとするも当の本人は殴りまくって聞いていなかった。

すると・・・

ガガガガガと銃声が聞こえた。

「うっ!まだいたのね!」

アリアは跳び箱の外を睨むとスカートの中からさつき見せた銀と黒の二丁拳銃を取り出した。

「いたって何がだ!?!」

「あの変な二輪!『武偵殺し』の玩具よ!」

「さっきのセグウェイか！」

キンジはアリアの言葉を聞いてまだあるのかよと思っていた。

因みに蛇足だがこの跳び箱、無駄にも防弾性で他にも幾つかの体育道具がそれに該当されるのだ。

・・・何という無駄遣い。

「あんたも戦いなさいよ！ 仮にも武偵校の生徒でしょ!？」

「阿保言うな！ ！ ！ ！ 狭くて出るに出れねえんだよ!!」

そう、キンジは現在体育座りをするのがやつとなスペースなのだ。

「ああもう！ 向こうには七台もいるのに！」

どうやらさっきのが七台いるようだ。

然しその時予想外の出来事が起きた。

アリアは銃を撃つのに集中しているのかキンジの顔に自分の胸を・・・押し付けているのに気付かなかった。

「(ああ・・・こりやアウトだ。)」

何せ小さいからそんなにないだろうと思っていたがちやんと柔らかい水饅頭みたいなものが押し付けられていた。

然しキンジはそれを冷静に分析していた。

小さいからではない。

・・・来てしまったのだ。

・・・あの力が・・・

暫くして銃声が鳴りやんだ。

「・・・やったか？」

キンジはそう聞くとアリアはこう返した。

「まだよ。射程圏外に追い払っただけだからすぐ又来るわよ。」

「それだけでできれば・・・上出来だよ。」

「は？」

アリアはいきなりクールになったキンジを見て眉を寄せるとキンジはこう返した。

「ご褒美にちよつとだけ」

「きやつ！」

「お姫様にしてあげよう。」

キンジはアリアをお姫様抱っこにして跳び箱の縁に足をかけて、倉庫の端まで一足で跳んだ。

そして積み上げられていたマットの上にアリアを座らせるとキンジは自身の銃「ベレッタ・M92」を持つてこう言った。

「アリア、君は俺が守るから」

すると外から銃声が聞こえてきた。

如何やらさっきのセグウェイが戻ってきたようだ。

そしてキンジはアリアに向けてこう言った。

「君は俺を見守っていてくれ。」

そう言って銃声のある方向にへと向かった。

「さあ・・・お仕置き時間だよ。」

倉庫での死闘

「さあ……お仕置きの間だよ。」

そう言いながらキンジはヒステリアモードになって七台のセグウェイの真正面に立った。

するとそれを感知してかセグウェイに搭載されているUZIが一斉発射された。

然も全弾頭部に集中されているため本来なら回避できずに頭が柘榴の様に吹き飛ぶのだ。

そう……普通なら

この時のキンジはヒステリアモードになっているため全ての神経が鋭敏化されているためUZIから射出された弾丸が……スローモーションのように全て視えてしまっているのだ。

そしてその弾丸を上体を大きく逸らして回避すると同時にベレッタをフルオートで七発応射された。

全てUZIの銃口に飛び込んだ次の瞬間……UZIが全て内部爆発した。

あの時キンジはUZIの銃口に弾丸を撃ち込んで中の弾丸と衝突させて爆発させた

のだ。

普通確実に出来ないことであろう。

そう・・・普通なら。

そしてキンジはセグウェイが全機沈黙するのを確認した後アリアの方を見た。本人はその光景を見てポカーンと見ていたがキンジを見るや否やギロつと睨みつけながらキンジに対してこう言った。

「お・・・恩になんか着ないわよ。あんな玩具ぐらい、あたし一人でも何とか出来たのよ。」

本当よと言いなながらゴソゴソと何かをしていた。

「・・・ああ、スカートを直してんのか。あれっでもう壊れているんだけどなあ。」

そう、キンジはアリアをお姫様抱っこした時にホックが壊れていることに気づいたのだ。

「そ、それにあんた・・・あ、あたしが失神している間にふ、服を、んうぬぬ、脱がせようとして!!」

アリアは地団駄を踏みながらこう続けた。

「胸、見てたああ!!これは事実!!あんたは強制強姦の現行犯よ!!!」

そう言いがキンジはアリアに向けてこう言った。

「・・・アリア。それは悲しい誤解なんだ。」

「誤解ですってえ!! あんた責任取れるのお!!」

アリアは地団駄踏みながらそう言うのとキンジはこう続けた。

「冷静に考えよう。俺は高校生でしかも二年生だから中学生を脱がす趣味はないから・・・大丈夫だよ。」

キンジは優しくそう言うもアリアは更に地団駄を踏んでこう怒鳴った。

「あたしは中学生じゃない!」

等々床が弾けて木片が散った。

そしてキンジは更にこう言った。

「・・・悪かったね。インターン制度で入ってきた小学生なんだね。」

凄いなアリアちゃんは。」

そう言うもそれを聞いたアリアは顔を伏せるとこう言った。

「こんな変態・・・助けるんじゃないかった。」

そして二丁拳銃をキンジに向けてこう言った。

「あたしは高2ダアアアアアアアアアア!!!」

そう言うってキンジ目掛けて撃ち込み始めた。

「うおおおっ!!」

キンジはそれを避けていた。

「逃げられないわよ! あたしは逃走する犯人を逃したことは! 一度も!!
ない!!!」

アリアはそう言つてマガジンを抜いて再装填しようとする。・・・何かアリアの拳銃に当たった。

「うみやあー!」

変な悲鳴を上げるとマガジンと拳銃が地面に落ちた。

そして拳銃の方を見ると少し近くで・・・苦無が落ちていた。

そう、この苦無はキンジの物なのだ。

「よくもやったわねえ!!」

そう言うのと今度はセーラー服の背中に手を突っ込むと・・・二本の刀が出てきた。

そしてアリアは人間離れた瞬間発力で飛び掛かってキンジの両肩目掛けて

日本刀で斬りかかろうとするも・・・ぎいんと言う音が鳴り響いた。

それはキンジも背中に隠し持っている「飛鳥」と同じタイプの脇差である。

「強狼男は神妙に・・・。」

アリアはそう言いながら足元に何か当たったような感触がして下を見ると・・・

玉があつた。

するとそれは……ボンと爆発した。

「うわきや!」

アリアは素つ頓狂な悲鳴を上げて周りが白い煙で覆われた。

そう、これはキンジが作った煙玉である。

そしてキンジは颯爽と離れてセグウエイを再起動させた。

「じゃあな。」

そう言つてキンジはそれに乗つて走り去つていった。

「この卑怯者ゲホゲホ。でつかい風穴——開けてやるんだからあ!!」

これが俺「予測不可能者」こと「遠山キンジ」と世界に幾つもの厄災を引き起こした「独唱のアリア」との硝煙に塗れ正に未来の光景ともいえる最低最悪な出会いであつた。

心配してくれるうちが花だよ。

「はあ・・・またやつちまった。」

あの後キンジは鬱気味な様子で教務科に行つて始業式不参加についての報告とセグウエイの提出を終えた後キンジは教室の自分の机の上で突つ伏していた。

「よおキンジ!!何だよ初日からブルーだなおい!!」

そこに悪友の一人でもある武藤が大声でキンジに声を掛けた。

「ああ最悪だよ。・・・チャリジャックに遭うはその後UZI付のセグウエイに追われるわ見知らぬ女の子に銃をぶちかまされるわで災難だったわ。」

「おい最初は同情できるが最後の女の子つてまたお前つて奴は。」

武藤は頭を抱えてそう言う・・・窓の外から声がした。

「遠山君!!」

「ぐふお!!」

飛鳥が・・・窓の外から出てくるや否や武藤に飛び蹴りまがいな一撃を与えてしまった。

「ああ!ゴメンね武藤君!!」

大丈夫と聞くと武藤はこう答えた。

「あ……アア……大丈夫……ブ」。。。。——?——〇

武藤は鼻を抑えながらそう言った。

「それよりも遠山君大丈夫だった!?!爆弾に巻き込まれたって聞いたけどもなかつたよね?!?!」

「それよりもかよ!!」と武藤が抗議する声が聞こえたが知らぬ顔でキンジはこう返した。

「ああ大丈夫だって。心配するな」

「心配するよ!!だって前だってあんな大怪我したから私も雪泉姉も心配で

心配で……!!」

飛鳥は涙を流しながらそう言っているのでキンジは慌ててこう言った。

「分かってるよ飛鳥。お前や雪泉姉が心配していることぐらい分かっているさ。

大丈夫。ちゃんと戻ってくるって前に約束したろ。」

な、とキンジは真面目な顔でそう言った後飛鳥は本当?と返したのでキンジはこう返した。

「ああ本当だ。前に指切りしただろ。」

そう言う言葉に納得したのか飛鳥は涙を拭いてこう言った。

「うん分かった。後で雪泉姉にも言つてよね。心配してるから。」

「じゃあねと言つて出て行くのを見送ると・・・生暖かい目で武藤がこう言つた。

「いやあ。朝つばらからいちやつくねえ。キンジ?」

「阿保言うな。あれが普通だろ?」

キンジは武藤にそう言うのと武藤はこう返した。

「おいおい、お前あの子の手料理食つているだけじゃなくて色々してもらつていて
通い妻みたいだつて言われてるじゃねえか。」

武藤はにこやかにこう続けた。

「それに今のお前があるのはあいつらのおかげなんだぜ。ちゃんと心配させない
ようにしないとイケないぜ。」

武藤はそう言つて隣の机に座つた後キンジは聞こえないようにこう言つた。

「ああ分かつてるよ。あいつらを泣かせる真似はしねえしあいつらを泣かす奴は絶対
許さねえよ。」

そう言いながらキンジは窓の方を向いた。

屋上でのひと時。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

二年A組、キンジがクラス分けされた教室の最初のホームルームにてその言葉が聞こえた。

何事だと思ってキンジは前を見ると・・・あのピンクのツイントール

「神崎・H・アリア」がキンジの方に指をさしてそう言った。

「『『『『はあ？』』』』」

クラス全員が茫然とした様子でそう言った。

始めにこのクラスの担任でもある「高天原 ゆとり」が「自己紹介は去年の三学期に転校してきたカワイ子ちゃんからねえ。」と言った事から始まり今に至るのだ。

「な・・・何でだよ。」

キンジは眩暈がしそうだなと思いつながらアリアの方を見た。

「（もしかしたら俺のヒステリアモードを知って！いやそれだったら武器を出すわけじゃねえし・・・もしかしたら冷静になってヒステリアモードを感じていたって

線も。）」

キンジはそう思いながらぶつぶつと考えている中ゆとりはアリアにこう言った。

「ねえアリアさん。キンジ君の席はもう他の人が座っているからねえ。」

「いやよ、あたしはアイツの隣が良い」

ゆとりの言葉にアリアは聞く耳も持っていなかった。

「なあよキンジ。あの子お前の知り合いか？」

「な訳あるか。あいつがさつき言った女だよ。」

「あああの子がねえ。」

武藤の質問にキンジが返すとそれを聞いて納得したのか武藤はこう言った。

「先生、俺変わりますよ。これじゃあ何時まで経っても終わらねえだろうし。」

「なあ!!」

武藤の言葉にキンジは待ったをかけようとするも……。

「ごめんね武藤君。席は先生の扉の方だから。」

それを聞いて分かりましたと武藤は「悪い」と言つて立ち去り代わりにアリアが座つてこつちを睨みつけていた。

「……まだ諦めてねえのかよ。」

そしてお昼休み……。

「アハハハハハハハハ！そりゃ災難だなキンジ!!」

「まあ目覚めていたら目の前に男がいればその恰好でどう言う事か分かってしまうから無理もないのじゃ。」

キンジの今回の災難に焰は終盤の所で笑い夜桜は状況証拠での判断についてを話した。

「それにしても大胆すねえその子。『キンジの隣』って聞かなかつたんすよね？」
華毘はホームルームでの事を話している中約三名は……不機嫌であった。

「いいなア……。」

「私もそれが良い……。」

「はああ。何で私一年上なんでしょう。」

飛鳥、紫、雪泉がそう呟いていた。

「それにしても未だ疑ってんなら何とか解決しねえとなあ。」

キンジは弁当（カナメ作）を食べながらそう言っていた。

「それにしてもアリア……結構有名。」

「「「「え?」」」」」

紫の言葉に全員が耳を傾けた。

「三学期入ってすぐにファンクラブが出来て盗撮した写真が万単位だとか。」
「いやそれいらねえよ。」

紫の言葉にキンジがツツコミを入れた。

「二つ名を持っていたり。」

「二つ名って・・・それ結構腕利きって事かよ!!」

焰はそれを聞いて驚いていた。

武偵で二つ名を持っている人間は一流の武偵なのだ。

それを伺い年（見た目年下）が持っていることに驚いていたのだ。

「他にもあるのかどうか調べてみる・・・。」

「ああ分かった。頼むよ紫」

「報酬・・・。」

キンジが紫に頼むと紫がそう返した。

「へ?」

すると紫が近寄りながら繰り返した。

「報酬・・・。」

「アアアア!!」

紫がキンジの顔に近寄りながらそう言う所を見て飛鳥と雪泉が大声を上げた。

「ちよ、ちよつと待てて紫！当たってるって・・・!!」
血が逆流してくるのを感じ始めた。

紫の体つきはむっちりしているがメリハリはしつかりとしていてこの面子の中で最も胸がでかいのでキンジの胸板に自分の胸が変形しながら押しつぶされて行った。

それを見たキンジはヤバイと思いつつもこう言った。

「分かった！分かった!!資料を提供してくれたらどつかで映画でも見るぞ!!」

「・・・ナイトショーで。」

「ああ何でも良いから了承してくれ!!」

「うん・・・分かった。」

そう言つて少し離れようとする・・・。

(＊、3、)

キンジの頬にキスをした。

「・・・へ?」

キンジはその出来事に呆然すると紫は顔を真っ赤にしてこう言った。

「・・・前払い」

そう言つて食事を再開した。

そして・・・。

「遠山く~~~~ん。」

「キンジさ~~~~ん。」

飛鳥と雪泉が怒り心頭でキンジを睨みつけた。

目をウルウル状態にして……。

「いやその……あのなあ……。」

詰め寄ってくる二人にキンジは後ずさりも出来ずどうしようもできなかつた。困みに残り三人はそれをニヤニヤと見ていた。

家での一と時

「……やつと学校が終わった。飛鳥と雪泉姉め、俺の体の事二の次で抱きしめやがって〜。」

夕方、キンジは学校から家に向かって帰宅途中であつた。

その姿は……最早ボロボロと言つていいほどであらう。

紫によるキス事件と飛鳥と雪泉による抱き着け騒動とその前に起こつた

チャリジャックにより精神、肉体的に疲労が頂点に達している。

そのチャリジャック事件だがセグウェイと残つた残骸は武偵校にある鑑識科

(レピア) が回収し、探偵科(インケスタ)によつて調査されている。

因みにだが武偵校には幾つもの専門科が存在し上記以外にもキンジ、焰、夜桜が

所属している強襲科(アサルト)、狙撃科(スナイプ)、飛鳥、雪泉が所属している

諜報科(レザド)、尋問科(ダキユラ)、華毘が所属している装備科(アムド)、

武藤が所属している車両科(ロジ)、通信科(コネクト)、情報科(インフォルマ)、衛

生科(メデイカ)、救護科(アンピキュラス)、超能力捜査研究科(SSR)、

特殊捜査研究科(CVR)と言つた専門学科があるが他の国では違う学科があるとも

いわれている。

「ただいま〜。」

「キンジさん!」

キンジが家に帰るとカナメが心配した表情で抱き着いてきた。

「カ、・・・カナメ!?!」

キンジは突然の状況にびっくりしている中カナメがキンジの目の前でこう言った。

「飛鳥さんから聞きましたけど狙われたって本当なんですか!?!怪我は!」

何処か痛むところはないですか!?!何だったら直ぐに救急箱を!」

「カナメ・・・大丈夫だよ。何処も怪我してねえよ。お前を一人にさせるわけねえだろ。」

キンジはカナメを掴んで安心させるようにそう言った。

「・・・本当ですか?」

カナメは目を潤ませながらそう聞くとキンジはカナメにこう返した。

「ああ大丈夫だ。・・・だから泣くなつて、俺はカナメが笑ってくれるなら

それでいい。」

キンジはカナメに対してそう言うとかナメは少し離れると小さな声でこう言った。

「・・・どうしてそう言う言葉で言えるんでしょうねえ。」

「ん？どうした？」

「何でもありません。」

カナメの言葉にキンジは何だと聞くも当の本人は秘密にした。

「それと着替えて下さいね。今日は朝作った『海老の醤油漬け』と『鶏の甘辛焼き』デザートは『シュークリーム』ですよ。」

「おおそれは楽しみなな。」

そう言つてキンジは自室に戻つた。

それと同時に

キンジの住んでいるアパートに一人の少女がトランプ柄のトランクを持って向かつていた。

そしてキンジが住んでいるアパートの前に着くとその少女・・・神崎・H・アリアが犬歯を剥かせてこう言つた。

「待つてなさいよー！！遠山キンジ！！」

嵐は突然に。

キンジは自室で部屋着に着替えている間先の事件について考えていた。

「あれは一体何だったんだ？ 『武偵殺し』の根幹は爆弾魔、つまり快樂反だ。

無差別に爆発を起こして人々の注目を集め、浴びせ、自分の要求を飲ませる迄続ける

タイプ فقط」

ピンポーン

「あ、はい。」

カナメはチャイムの音を聞くとガスコンロの火を消して扉にへと向かった。

「となると偶々・・・イヤそれならあそこにいるチャリの中から俺をピンポイントで出来る・・・まさか俺が目的となるとこれ迄の依頼を洗い出す必要が」

ピポピポピポピポピポピポピポピポピポーン！ピポピポピンポーン

！

「待って下さあい!!」

「・・・だああ!!集中できねえ!!」

まさかのチャイム連打にカナメは慌てており、キンジはそれに腹を立てていた。

「どちら様でしょうか？」

「ねえここって遠山キンジの部屋？」

「!!この声って・・・マサカ。」

キンジはその声を聞いて自室の扉を開けて見てみると・・・。

「ええそうですけど貴方は？」

「私は神崎・H・アリアよ。ここ通してよ。」

「(やっぱあいつかあ!!)」

キンジはそれを見てどんだけ執念深いんだよと思いつつもカナメの所に行った。何せここで銃撃戦になれば彼女にも被害を及んでしまいそうだからだ。

するとアリアはキンジを見て指さしてこう言った。

「遅い！あたしがチャイムを押ししたら5秒以内に出る事！」

そう言った後ケンケン交じりで靴を玄関に脱ぎ散らかしてキンジの部屋に入ろうとした。

「おい待てそこは俺の部屋だぞ！」

「トランクを中に運んどきなさい！ねえ、トイレ何処よ？」

「ああそれでしたらお風呂場の前に。」

キンジの言葉にアリアは聞き入れずにトイレの場所を聞いた。

そしてカナメの案内でトイレに小走りで入った。

「……何なんでしょう？彼女?？」

「……さあな。」

キンジとカナメは何だと思ひながら二人はリビングに向かった。

そしてトランクを中に入れた後アリアがトイレから出てきた。

「あんたこいつと同居?」

アリアはそう聞くとカナメはこう返した。

「あ、はい。去年の梅雨ぐらいからですからもう八か月ぐらいは。」

「あそ、まあ良いわ。」

アリアはそう切り捨てた後キンジに向かってこう言った。

「遠山キンジ!あんた、あたしのドレイになりなさい!!」

「……はあ?」

アリアの言葉にキンジとカナメは訳わからんと言った言葉が出た。

「ほら!さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ!無礼な奴ね!!」

「……お前のほうだろ。それ。」

キンジは小さくそう呟きながらやれやれと台所に向かった。

人の話はちゃんと聞けよ。

「コーヒー淹れるならエスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ！砂糖はカンナ！一分以内！」
「・・・お前それ人に頼む時の態度とは思えねえぞ。」

キンジは呆れながらそう言うも呪文みたいな名前な為インスタントコーヒーにした
(と言うかそう言うの無いし一般家庭に)。

「？これホントにコーヒー?？」

「お前インスタントコーヒーも知らねえのかよ？取り敢えずそれで我慢しろ。」
キンジはそう言いながら柵から雪泉が持ってきてくれたカステラを取り出して
アリアに上げた後キンジはアリアに向かい合ってこう言った。

「今朝助けてくれたことに感謝しているけど『ドレイ』って何だよ一体？」
キンジはそう聞くとアリアは口をへの字に曲げてこう言った。

「分かんないの？」

「さっぱりだ。」

アリアの言葉にキンジはすっぱり言うのとアリアはこう返した。

「あんたならとづくに分かっていると思ったのに。んー。まあその内思い当たるからまあ良いわ。」

「(よくねえよ。)」

宇宙人かよと言うくらい意思疎通が出来ていないことに呆れを覚えていた。

「お腹空いた」

アリアがいきなりそう言うので台所に立っていたカナメはこう返した。

「ああもうちよつと待っててくださいね。もう少しでアリアさんの分が

出来上がりますから。」

そう聞くとアリアはこう返した。

「あたしは『ももまん』で」

「そう言うな。折角あいつが作ってくれてるんだからちよつと待ってろ。」

アリアの言葉を遮るようにキンジがそう言った。

「それでは皆さん」

「いただきます。」

「い……いただきます。」

アリアの前には特別に作った『かしの照り焼き』と小鉢に盛られた「海老の醤油漬け」、赤味噌で作った味噌汁とご飯。

それを見たアリアは恐る恐るとかしわに箸を伸ばして口に入れると・・・。

「!!」

アリアは目をかつと開いてそのままご飯を食べ進めた。

「・・・・・・・・」

あまりの速さに二人が茫然していると・・・。

「!!」ドンドン

ご飯を喉に詰まらせたようだ。

「ああいけない！大丈夫ですか!?!」

カナメがそう言ってお茶を差し出すと・・・。

「!・・・・・・・・!・・・・・・・・!」

ごくごく飲み干して何とか助かった。

「(こ)ち(こ)う(こ)さ(こ)ま(こ)で(こ)した。」

「(は)い、(は)い(こ)ち(こ)ら(こ)も。」

アリアは皿に入っていたモノを全て完食した後カナメがお茶を二人に差し出した後アリアはキンジにこう言った。

「それじゃあ本題だけど・・・あたしのパーティーに入ってくれない？」

パーティーとは言わばチームのことであり二人のチームをパーティーと呼ぶ。

「生憎だが断る。俺にはもうチームが」

「そんな連中解散しなさい。」

「はあ！」

キンジの言葉にアリアはとんでもないことを言ってくるもさらにこう続けた。

「あなたのポジションはアタシと一緒のフロント。つまり前衛ね。これで決定。」

「おい、何でそんなに自分勝手に決めやがる。それにそもそも何で俺」

「太陽は何故昇り、月は輝くか？」

「はあ？」

キンジはアリアに抗議しようとするも突如話が別の方向に飛んで行った。

「キンジは質問ばかりの子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて

推理しなさい。」

「(子供なのはおめえだろうが!!)」

どちらかと言えばアリアの言動こそ子供っぽいのだ。

自分の要求だけを伝え、相手の事を聞こうともしないその態度はまるでガキ大将そのままである。

それにキンジは彼女達と解散したくないのだ。

「(お前には分からねえだろうがあれがいたからこそ俺は今でも『アサルト』にいるんだぞ！あれがいないかったら俺は・・・)」

キンジはIFの事を考えながらも冷静になってアリアに向けてこう言った。

「とにかく俺は今のチームで満足してんだ。さつさと帰ったらどうだ？」

「ええその内ね。」

「それって何時まで？」

「キンジがあたしのパーティーに入るって言うまで。」

「そんなこと言うか！さつさと帰ってくれ！」

キンジは最後に言葉を荒げながらもアリアに向かって毅然とした態度を取ると

アリアは目を大きく開けてぎよろつと睨むとこう返した。

「言わないなら泊ってくわ！」

「はあ!？」

キンジは大声を上げた後アリアに向かってこう言った。

「おいちよつと待てよ！何でそうなるんだ!？」

「うるさい！うるさい！泊ってくつたら泊ってくつたら！長期戦になるのも」

「そう言いながらずびしつと音が出るような感じで玄関の・・・扉を指さしていた。

「あれ？あたしのトランクは??」

「そう言いながら探していると・・・」

「よいしょつと。」

カナメがトランクを外に出していた。

「ちよつとあんた何やってるのよ!?!」

「アリアがそう言うのとカナメはアリアを見てこう言った。

「アリアさん、貴方の言葉を聞いて何となくわかりました。」

「な・・・何よ。」

「アリアはカナメの目を見てそう聞くとカナメはこう返した。

「貴方はまるで駄々っ子です。」

「だ・・・駄々っ子!」

「ええそうです。相手の事を考えずに自分の考えを押し付けてそれでも駄目なら

無理やりでも従わそうとするその態度そのものが子供なんです。」

「!!!」

「アリアはそれを聞いて顔を真っ赤にすると顔を俯かせてこう言った。

「そう・・・それなら・・・あんたなんか出てケ!!」

アリアはそう言うのとスカートの下から二丁拳銃を出そうとした。

「カナメ!!」

キンジはそれを見て驚くとキンジは拳銃を・・・アリアの足元目掛けて撃った。

「!!」

アリアは銃声を聞いて後ろに飛び移ってキンジの方を向いてこう言った。

「何するのよ! あんた!!」

するとキンジは恐ろしい感じでアリアに向けてこう言った。

「おい手前、俺の事ならまだ良いとして・・・一般人でもあるカナメに銃を向けるのは

どう言う理屈だ! くらあ!!」

「はあ!? 一般人ってそんなことある訳」

「一つ忠告するがな! 俺は仲間が危機に瀕していたり大切な奴等に弓ひくのなら」

そしてキンジは怒りの表情でこう怒鳴った。

「例え『武偵憲章』を破ってでも仲間を守って見せる覚悟があるんだよ!!」

「ひい!!」

その言葉にアリアは体を強張らすとキンジはアリアに向けてこう言った。

「だからさっさと帰れ。・・・俺が手前をぶちのめさない内になア!!」

「!!!」

そしてアリアはトランクを持ってそのまま走り去っていった。

「はあ．．．はあ．．．はあ」

キンジは怒りながらも肩で息をしているとカナメがキンジに近づくとこう言った。

「大丈夫です。私は何処にもいきませんから．．．大丈夫ですよ。」

そう言いながらキンジを抱きしめるとキンジは流されるままこう言った。

「ああ．．．ああ。」

それはまるで怖い夢を見た子供を抱きしめる母親の様であった。

情報開示

それから暫くして……。

キンジは武偵校の女子寮にある温室に向かっていた。

ここには色んな花が保有されており中にはレザドやダキユラ等が使用する薬物（死ぬほどはないがキツイ薬物）の原材料も保管されているが大抵は秘密裏での集まり等に使われる。

そしてキンジは薔薇ゾーンにいる人影を見つけた。

「おおい、『紫』か？」

そう聞くとその人影はそれに気づいてこう返した。

「……あ、キンジ。」

紫がキンジを見て少し笑顔でそう言った。

「悪いな。アリアについて調べて欲しいって頼んじまって。」

「ううん、私も気になったから。」

そう言うと紫はキンジに向けてこう言った。

「……ありがとうね。」

「？何がだ？」

「カナメさんが言ってたよ。キンジ、私達の為に怒ってくれたって。如何やらこの間の事を言っているようだ。」

「別に良いよ。俺もあいつの言動には少しムカついていたしな。」

「・・・それでも・・・私達は嬉しかったんだよ。」

終盤、紫は顔を真っ赤にしてそう言うと言おうとキンジはこっぴどくかしいのか頬を掻きながらこう聞いた。

「それよりもアリアについてだけだよ。」

「ハイ此れ。」

紫は鞆からパソコンを出して起動させるとそれをキンジに見せた。

「神崎・H（オルメス又はホームズ）・アリア」

西暦1985年9月23日生まれO型

武偵ランク S

所持武装 コルト・ガバメント・クローン*2（ステンレスモデルとスチールモデル各一丁ずつ）

日本刀*2

徒手格闘流派 「バーリ・トウッド」

別名 双剣双銃（カドラ）

14歳からロンドン武偵局に所属し以下の功績有り

……長いので省略

血縁関係 父親 「リブラート・ホームズ」イギリス人と日本人のクォーター……離婚

母親 「神崎 かなえ」（現在拘置所に収監中）

異母妹 メヌエツト・ホームズ

備考 イギリス王家から貴族待遇（祖母が叙勲されている）のためD a m eの称号が与えられている。

「なあ聞いていいか、紫？」

「ん、何？」

「……あいつってホームズなのかよ!？」

キングはアリアの名前を聞いて驚いていた。

何せホームズで武偵となると一人しか心当たりがないのだ。

「まさか……『シャーロックホームズ』かよ。」

シャーロックホームズ

言わずと知れた名探偵であり徒手格闘、銃剣術、法医学、科学関係のエキスパートでありそのたぐい稀な才能で幾つもの難事件を解決した名探偵である。

「そ、その有名なね。その証拠に幾つもの戦闘術を身に付けてるんだって。」

「それだったら強いわけだ。」

「それに彼女は99もの事件をたった一回の強襲で解決できるほどだからそれに拍車がかかっているんだって。」

「……あいつって人間か？」

キンジはそれを見てげんなりしていった。

自分はそのような人間に手を出されていたのかよと思っているからだ。

そしてキンジは家族構成を見てある所を見た。

「おい、この『神崎 かなえ』って……この間新聞に出てたよな。」

「うん。『武偵殺し』の容疑もかけられてるの。」

「!!」

キンジはそれを聞いて目付きが鋭くなった。

何せ兄が死んだのも……「武偵殺し」によるものだからだ。

「でも可笑しいの？」

「……」

「その人の犯行時刻が書き換えられていたの。」

「……それって。」

「多分誰かが……それも国のトップが関わってるんじゃないのかなって思うの。」

「つまり兄さんと同じくこの人も『人身御供』ってわけかよ!!」

腐ってやがるとキンジは手を強く握っていると……紫はその手を優しく包んでこう言った。

「……たとえばどんな理由でも私達は真実を明らかにする『武偵』。どんな嘘も崩すことをモットーにしている。だから嘘を暴いて真実を多くの人に見せて疑いを

晴らさせよう、キンジ。」

お兄さんの為にもと言うとキンジはその手を弱めにするとうこう言った。

「ありがとうな。」

そう言うのと紫は顔を俯かせてうんと答えた。

「それじゃあおれは」

するとキンジは腕時計が落ちて行つた。

「……あ。」

紫はそれを見るとそれを拾ってこう言った。

「・・・今度の映画のナイトショーの時にこれも買いに行こう。」

「いや良いよ。こんな安もん。」

「・・・駄目。時計は大事。」

キンジの言葉に紫が待ったをかけるとキンジははあと溜息ついてこう言った。

「分かったよ。それじゃあ頼むわ。」

「うん。任せて。」

そう言うときンジたちはそこから出て言った後キンジは空を見てこう言った。

「・・・有名人の子孫ねえ。」

そう言いながら自分の家に帰っていった。

雨の中

「今日は雨ですね。」

カナメはキンジにそう言いながら窓の外を見ていた。

「さてと・・・そろそろ行くか。」

「そうですね。・・・流石に焰さんや、夜桜さん、華毘さんは来てませんね。」

そう雪泉が言うときんじは飛鳥と紫を見てこう言った。

「そろそろ出るか。バスが来そうだしな。」

「そうだよ！これ逃したら一時間目遅刻だよ!!」

飛鳥は大慌てで準備して外に出て行った。

そしてキンジも出ようとすると・・・。

「はいキンジさん。傘です。」

カナメはそう言いながらキンジに傘を渡した。

「それじゃあ行ってくるけどそつちも気を付けてろよ。『武偵殺し』みたいな奴がまだうろついているかもしれないからな。」

「はい、行ってらっしゃい。」

キンジはカナメにそう注意した後に出て行くと・・・既に停留所には人が結構来ていた。

「うわあああ。」

「これは。」

「・・・予想外。」

飛鳥、雪泉、紫がその光景を見て茫然しているとバスがやってきたのだが・・・。

「中もかよ。」

バスの中も人が一杯乗っており乗れるのかよつて思う中キンジは飛鳥達にこう提案した。

「・・・今日は歩いていくか？遅れるかもしれないけど。」

そう言うと飛鳥達はこう返した。

「そうだね。濡れるのは嫌だけど。」

「ここで次を持っていたら遅刻でしょうしね。」

「・・・偶には良いかもね。」

それぞれから了承を得るとキンジは近くにいた武藤にこう言った。

「おい、武藤。俺達は歩いていくからな。」

「おおう分かった！先生には俺がうまくいっておくから二時間目に会おうぜ。」

そう言った後キンジは飛鳥達を連れて学校にへと向かった。

「・・・完全に遅刻かもな。」

キンジはアサルトが使っている体育館前でそう言った。

この体育館も防弾仕様であるため並みの砲弾ではびくともしないのが売りらしい。

「おおい、キンジーーーー!!」

雨の中、焰たちが来るのを見かけた。

「お前らもかよ。」

「うむ、バスが満員で入り切れなかったのじゃあ。」

夜桜がそう言う・・・携帯電話の鳴る音が聞こえた。

「あ・・・ゴメン。」

そう言つて紫が電話を?げて何事かと聞いていた。

すると上からヘリの音が聞こえた。

「?何だ?」

キンジは上を向くと女子寮に向かってヘリが向かっているのを見かけた。

「あれって確かロジのヘリっすね。」

華毘がそう言うのと紫は電話を切るとキンジにある事を伝えた。

「キンジ大変。直ぐに『C装備』を纏って女子寮に向かっつて。」

「?何があつたんだ。」

キンジはそう聞くと紫はこう答えた。

『武偵殺し』がまた現われた。今度はさつき私達が乗ろうとしていたバスが

ジャックされたつて。」

「何だつて!!」

雨が強まる中キンジは人生の岐路に立っていた。

そう・・・運命の岐路に

作戦・・・会議？

「然しまさか武藤を助けるとはな。」

キンジはそう言いながら防弾ベストを着用していた。

更に強化プラスチック製のフェイスガードヘルメットとフィンガーレスグローブ、武偵校の校章が入った無線のインカムを持って外に出ると・・・。

「遅いってあんたのなのね『遠山キンジ』!!」

「げ、神崎。」

屋上でアリアがキンジを見て苦虫を噛み潰したような顔をするも自分も

そうであった。

「おや、遠山キンジも参っていたか。」

そこにいたのは長い翡翠色の髪をポニーテールにし、ヘッドホンを付けた少年のような顔立ちをした少女、「里奈者 レキ」（本名かどうかは不明）が本を読みながら

キンジに対してそう言った。

その細い体に似合わずスナイパーとしての腕は一流でありキンジとは何度かコンビを組んだ事がある。

「あれこいつって確か高いところ」

そう思つて足元を見ると・・・足が震えていた。

そう、彼女は高所恐怖症でスナイパーライフル越しでしか景色を見ることが出来ないのだ。

強がりだなアと思ひながらもキンジは隣に座つて暫くすると・・・。

「あと一人ぐらひはSランクが欲しかったけど仕方ないわ。火力不足は私が補うわ。」
さあ、行くわよと言うとヘリは空高く飛んで行つた。

『キンジ、気を付けて。今バスは学園島を一周した後地下の輸送道路を使って街に向かっているからバスが出たところを狙つて。』

「ああ分かつたぜ。紫、道案内を引き続き頼む。」

『O, K.気を付けてね。』

「ああ。」

キンジは紫と通信した後アリアの方を見てこう聞いた。

「そーいや警視庁と東京武偵局は動いてないのか？」

そう聞くとアリアはこう返した。

「一応はね、でも相手はバスで走行中よ。それなりの準備がいるはずよ。」

「あれって『トランスフォーマー型』じゃないのかよ?」

「いや、今学園島で使っている奴の大半は旧式だから引つ掛からないようだ。」

キンジの問いに隣にいたレキがそう答えた。

「見えたわよ。」

アリアが窓を見てそう言うのと猛スピードで走っているバスを見つけた。

「それじゃあ作戦だけどあたしとキンジがバスに乗り込んで調べるわ。」

あたしが外側、あんたが内側から調べるけど見つけたら連絡するように!」

以上と言うとキンジはこう反論した。

「おい、お前犯人を決めつけているようだが中にいたらどうする気だ?」

「それは無いわ。『武偵殺し』はターゲットにいないことが常だから。」

「模倣犯かもしれないねえだろ。」

「それだったらあんたが何とかしなさい。どうにか出来るはずだわ。」

キンジはアリアの答えにこいつはチームリーダーに向いていないことを痛感した。

これまで一人で解決していただけに協力することを忘れ、猪突猛進で突き進んできた

のであろう。

そしてアリアとキンジは強襲用のパラシュートを着けるとアリアはこう言った。

「作戦開始よ！」

バスを止めよ!

キンジとアリアはパラシュートを使ってバスの屋根に着地するとアリアはキンジにこう言った。

「それじゃあ後は個々の判断で対処!」

そう言うのとアリアは下へと、キンジは窓を見下ろすような形でノックした。

最初はその行動に中の生徒が慌てていたがある声があった。

「キンジ!」

「よう、武藤!一時間目以内に会えたな。」

キンジはそう冗談交じりで言うのとキンジは武藤にこう聞いた。

「それで現状は?」

「近くに眼鏡付けた中等部いるだろ?」

そう聞くとキンジはその少女を見て頷くとこう続けた。

「本人曰く携帯がすり替わっていてよ、いきなり喋りだしたそうだけ。」

「何て?」

「『速度を落とすと 爆発しやがります』って。」

「それ俺のチャリジャックと同じじゃねえか。」

キンジはそれを聞いて同一犯と確信するとアリアにこの事を知らせようと連絡した。

『何?』

「如何やら同一人物の様だ。そつちはどうだ?」

『有ったわ。カジンスキーβ型のプラスチック爆弾、『武偵殺し』の十八番よ。見える

だけでもー炸薬の容積は3500立方センチはあるわ!』

「それだけありゃこんなバス俺達まとめて炭に出来る程だぞ。」

『潜り込んで解体を試みーあつ!』

「うお!」

アリアの叫び声と共に一台のオープンカーが横から体当たりしてきた。

『『『『ウワアアアアア!!』』』』

全員が悲鳴を上げる中キンジはある事を思い出していた。

「(待てよ・・・これが『武偵殺し』と同じなら!!)」

キンジはある考えを思い出して全員に向かってこう言った。

「全員伏せろー!!」

すると真つ赤なオープンカーの座席にいたのは人ではなく・・・。

またもやUZIが乗っていた。

そしてバリバリと音を立ててバスの窓が全部粉々になった。

「くそが!」

キンジはそう言っただけで伏せながら外に出ようとした瞬間・・・

ガシャンと言う音と共にバスがガードレールに接触した。

「な、何だ!?!」

キンジはそう言いながら周りを見渡すと・・・。

「運転手!!」

バスの運転手がハンドルにもたれかかるように倒れていた。

「畜生! 運転の為に躲せなかったのかよ! 武藤!! 俺と来い!」

「分かった!!」

キンジは武藤にそう言うのとヘルメットを渡してこう言った。

「良いか? 俺は爆弾処理をするからお前が運転しろ! この中で運転の上手い

お前だからこそ頼みたい。」

「おいおい、俺この間改造車がバレてあと一点で免停だぜ。」

武藤がそう言うのとキンジはこう続けた。

「大丈夫だ。俺が先生と話しつけるから・・・頼むぞ。」

そう言うのと武藤はヘルメットを着けてこう言った。

「全く・・・ダチが信用してるのに答えないほど・・・俺は男捨ててねえぞ。」
「頼んだぜ。」

「おう！」

そしてキンジはバスの窓の前から出ると海が見えるのがわかりその先にある有明コロシアムが見えた。

「このままいけば街中でドカンかヨ！」

そうはいくかとキンジはバスの天井に上っていくとアリアを見つけた。

「おい神崎！大丈夫だかつてヘルメットは如何した!？」

「さっきのオープンカーに追突された時にぶち割れたわよ！あんたのは!？」

「俺のは武藤に貸した！運転手が被弾しちまってな!!」

「あんたバカ！如何して無防備に出てくるのよ!？」

「その言葉そっくりそのまま返すぞ!!」

キンジはアリアの言葉を返す口で文句を言うと・・・さっきのオープンカーがこちらを捕らえるのを見てキンジは・・・。

「避ける!!」

そう言つてキンジはアリアを押しのとそれとそれが自分の顔に当たる事を確信した。

「あ……これ死んだわ。」

キンジはそう思つて弾丸を見た瞬間……弾丸の動きが遅くなつていることに気づいた。

「(何だこれ?……弾丸の軌道が……見える!!)」

キンジはそう確信するとその弾丸を避けきり……返す弾丸でオープンカーにあるUZIを破壊した。

「避けろ!」

「へ?」

アリアはキンジが押しのとけた瞬間オープンカーがキンジに狙いを合わせているのに気づくも発射されているのに気づいた。

「キンジ!」

アリアは間に合わないと確信し、目を瞑つて暫くすると……何か壊れる音が聞こえた。

「?」

アリアはその音を聞いて目を開けるとそこで目にしたのは……。

「嘘。」

まだ生きているキンジと破壊されたUZIを乗せているオープンカーであった。

「あんた……。」

アリアはキンジに何か言いたげな雰囲気であったがすると……。

パアンと言う破裂音が響いた瞬間……オープンカーが何やらおかしな軌道を取り始めた。

更にもう一発音がするとオープンカーはそのままスピンしてガードレールに激突した。

上空を見ると武偵校のヘリに乗っているレキが狙撃銃で狙っている姿が僅かに見えた。

「いやあ、間に合った〜。そしてやっぱ怖いよ〜!!」

レキはどうやら怖いことからさっさと終わらせようとオープンカーを狙ったようだ。

「さてと……爆弾はと。」

レキはそう言いながら爆弾のある場所を探すと……。

「こりゃあ難問だけどー」

そう言いながらもレキは一発、二発とも当てて三発目に入ろうとした瞬間・・・何かあるのを見た。

「!!」

そしてそれはそのまま中に入ると爆弾が落ちて行くのが見えた。

「そこだ!!」

レキはそのままそれを射撃で破壊するとキンジに連絡した。

「遠山キンジ!今なら大丈夫だ!!」

そう言うバスは少しずつ速度を落とすのを見て完全停止すると・・・うわつと歓声が響き渡った。

そしてそれを聞いている中レキはある事を思い出した。

「・・・あれがやったのか?」

そしてそれはレキの死角になるようにバスの壁に潜んでいる中キンジを見ていた。それは巨大な鉄の「スズメバチ」のような印章を持つロボットであった。

そしてキンジを見た後それは再び跳び上がった姿を消した。

それは運命の崩れを知らせるようにブブブと音を鳴らして。

犯行予告?

「何でしょうこれ?」

あのバスジャック事件から数日が過ぎたある日カナメはキンジが武偵校に言った後キンジあてに少し大きな段ボールが届いた。

『遠山キンジ様より 『ZEX』 電子機器株式会社から』・・・聞いたことない会社ですね?」

カナメはそう言いながら段ボールを開けてみるとそこに入っていたのは・・・。
「プレスレットですかね?」

カナメはそれを見ながらそう言うともう一つ何かが入っているのに気付いて取り出すと・・・。

「・・・携帯電話?」

それを取りだすとメールの音が聞こえた。

「な、何ですか一体!」

そこに書かれていたのは・・・。

「!!大変です!!」

この時、時刻は午後三時ごろでキンジは紫からあるチケットを貰っていた。

「それじゃあ8時ごろに学園島のシネコンで。」

「うん、・・・じゃあね。」

キンジと紫はそう言つて別れると家路に向かつていった。

「さてと・・・先ずは着替えてその後時計屋で時計を買つて軽く夕飯済ませたら

映画館つと・・・内容は・・・『桜舞う金縛り大名〜この桜吹雪に恨み有り』つて

俺の一族に恨みあるのか監督はよ。」

そして家に近づいていくと・・・カナメが走つてくるのが見えた。

「おお、どうしたカナメ?そんなに慌ててよ。」

「はあ、はああ。キンジさん!これ!!」

キンジは何事だと思ひカナメに聞くとカナメは持っていた携帯電話をキンジに

見せた。

「?お前こんな携帯電話だったっけ?」

キンジは見せた携帯電話を見て疑問に思っていた。

「そこじゃなくてその中のメールです!!」

カナメはキンジにそう言うのとキンジは何事だと思ひ開いてみると・・・。

「・・・何だよこれ。」

『遠山キンジ様へ 《武偵殺し》において重要な証言がありますので五時ごろにもう一度このメールを見て下さい』

「これって一体。」

「これ、届いた段ボールに入っていてそれで!!」

カナメは慌てながらもそう言うのとキンジはそれを制してこう言った。

「待てカナメ! 落ち着いて家で説明しろ!!!」

「は、はい!」

キンジの言葉にカナメは落ち着かせようとした後二人は家に帰っていった。

「つまりこれの中に入ってたんだな?」

「は・・・はい。」

キンジはカナメに確認させた後入っていたモノを確認した。

「ブレスレット・・・以外は何もなし。」

何が目的なんだと思っっている中ピンポン!と音がした。

「・・・キンジいる?」

「紫さん。」

「俺が読んだんだ。」

紫の声が聞こえたので何でとカナメが思っていることにキンジが答えた。

「キンジ・・・持って来たヨ。」

紫が部屋に入ると何やら仰々しいような機械があった。

「それって?」

「インフォルマが使う『電波探知機』。これでメールの発信源を追える。」

カナメの問いに紫が答えるとキンジは紫に手を合わせてこう言った。

「悪い紫!!この埋め合わせは必ず!!」

「うん・・・倍で返してね。」

キンジの謝罪に対して紫はジト目でそう言うときキンジは力なく「はい」と答えた。

そして5時になったその時・・・携帯電話からメールの音が聞こえた。

「!!」

キンジは?げられている携帯電話を取ってそれを見ながら紫は高速で位置情報を

追おうとした。

『遠山キンジ様 今回の《武偵殺し》においてですが貴方のお兄様にも関係がある

事が分かり、それをお伝えします。 次のメール先においては同封のプレスレットを着用

の上、7時までには羽田空港のイギリス行きチャーター便で伝えます。』

「!!紫!!情報は!?!」

「・・・駄目。ネットワークを幾つか経由されているし特殊なアルゴリズムで特定できなかった。」

「くそお!!」

キンジは壁を思い切り殴りつけた。

何せメールの内容によればキンジの兄、「遠山 金一」も《武偵殺し》に関わっていたのではないかと思いに心の余裕がなかったのだ。

そしてキンジは時計を見てこう聞いた。

「紫ーイギリス行きのチャーター便って誰が乗っているか分かるか!」

「・・・それなら余裕。」

紫はキンジの問いに対してパソコンを打ちまくっていた。

「如何したんですかキンジさん。」

カナメはキンジの壁を殴った方の腕を擦りながら聞くとキンジは言いにくそうな顔をしていた。

すると紫がキンジに対してこう言った。

「・・・今日乗る乗客名簿、手に入れたけど知っている名前がいた。」

「誰だ!？」

キンジは紫のパソコンを見るとある名前が出ていた。

それは……。

『神崎・H・アリア』

それを見た瞬間、キンジの中である仮説をたてた。

これまで武偵殺しを追っていたアリアが何故兄の豪華客船の時にいなかったのか？
如何して電波を発せなかったのか？

そして二人の関係性で一つ心当たりが浮かんだ。

それは……。

『武偵殺し』は名のある武偵で且つ単独を主にする武偵のみを狙った腕っぷしが
強くて頭のキレル奴だ。」

キンジはそう考えると紫にこう伝えた。

「紫!この事みんなに伝えて万が一に備えて救助艇をスタンバってくれ!!」

「分かった。」

「カナメはここで待っていてくれ!……ちゃんと戻ってくる!!」

「……はい、気を付けて下さい。」

キンジは紫とカナメにそう言った後キンジは急いで新しく買った自転車に乗り込ん

で思いっきり漕いだ。

相手はあの兄ですら敵わない敵に猪突猛進を素でいくアリアでは敵わないと分かっているからだ。

そしてもし爆発すれば飛行機は破壊され今度はアリアの家族が避難の対象になる恐れがあるからだ。

そしてその恐怖を知っているキンジにとって自分の二の舞にさせたくないという気持ちがある理由である。

「・・・馬鹿するんじゃないぞ。」

キンジは自転車を漕ぎながらそう言った。

そしてその様子を鉄製の「スズメバチ」がじっと見ていた。

そしてそれはキンジを見てみるとブレスレットをちゃんと付けているのを確認した後それはまた飛んで行った。

・・・キンジが向かおうとしている羽田空港に向けて。

跳びます！飛びます！！

キンジはあの後羽田空港に着くや否や空港にあるボーディングブリッジを突つきつて、今まさにハッチを閉ざそうとしているロンドン・ヒースロー空港行飛行機に飛び込んだ。

「うおっしやあああ!!」

キンジは滑り込むように中に入るとすぐそこにいた小柄なフライトアテンダントに向けて武偵校章の入った生徒手帳（捜査の際にはこれを使う事も出来る。）を見せた後そのフライトアテンダントに向けてこう言った。

「―武偵だ！今すぐ離陸を中止するか延期して欲しい!!」

すると近くにいたフライトアテンダントはキンジに向けてこう聞いた。

「ええと・・・お客様、失礼ですが、d、どういう」

「説明している暇はないんだ！一刻を争ってるんだ!!」

「は、ハイハイ!!」

フライトアテンダントはビビリ乍らも二階にへと向かった。

「これで・・・後は紫たちに連絡を・・・」

すると機体がぐらりと揺れた。

「うお!!まさか動いてるのかよ?」

そう言うと二階からあのフライトアテンダントが震えながらキンジを見て

こう言った。

「あ、あの・・・だ、駄目でした。このフェーズになると管制官からの命令でしか離陸を止めることが出来ないって、機長が・・・。」

「・・・マジかよ。」

キンジはそれを聞いてある事を聞いた。

「なあ、この飛行機に『神崎・H・アリア』がいないか?同じ武偵校の人間として話が見たいんだが?」

「・・・それでしたら・・・良いですよ。」

その後飛行機が完全に離陸した後キンジは未だに震えているフライトアテンダントにアリアの席・・・いや個室に案内させるようにしてくれた。

この飛行機は『空飛ぶリゾートホテル』と呼ばれる飛行機で1階はフロントバー、二階は12個ある個室の中にはベッドやシャワー室なども完備したセレブ御用

達の新型機であり泥棒等の迎撃用のシステムも完備されている。

そしてキンジはアリアのいる部屋に着いた。

そして入ってみると・・・

「キ、キンジ!?!」

目を真ん丸にして驚いていた。

「流石は貴族様だな。片道20万円するチケットぐらい余裕つてかよ。」

俺なんてバイト何万ぐらいいしか貰えなかったぞとぶつくさと言っているとアリアはキンジに向けてある事を聞いた。

「・・・もしかして・・・アタシの『ドレイ』になってくれるの!?!」

「・・・はあ?」

「やっぱりそうなんだ!そりやそうでしょうね、アタシとアンタなら良いコンビ

組めるもんね!!」

アリアはそう喜びながら言うがキンジはこう返した。

「いや・・・生憎だが違う。」

「・・・?」

キンジの言葉にアリアは素つ頓狂な声を出すとアリアは不機嫌になってこう聞いた。

「・・・んじゃ何よ?」

アリアの剥れっ面を見てキンジは真剣な表情でこう言った。

「お前は狙われているぞ。」

「誰によ?」

アリアは横目で言うどキンジはこう答えた。

「・・・『武偵殺し』にだ。」

「!!」

飛行機が飛ぶ中キンジの言葉にアリアは目を大きく開けていた。

一方飛行機の中で鉄製の「スズメバチ」がある物を見ていた。

それは・・・。

「さあてと・・・パーティーと洒落込もうぜ!オルメス!!」

アハハハハと大声上げて笑う女性を喚起穴からじっと見ていた。

ゴングは静かになる。

「『武偵殺し』があたしをって．．．どう言う意味よ!？」

アリアはキンジの言葉を聞いて問い詰めようとするとキンジはすつと避けてこう言った。

「お前自分の立ち位置と言うか．．．これ迄の襲撃から考えられないのかよ。それで『ホームズ』の末裔なんて嗤える冗談だぜ。」

「!!どうしてそれを!？」

アリアはキンジが自分の家系の真実を聞いて驚くもキンジはこう続けた。

「俺の仲間の中にはこういうのが得意な奴がいるんでな。んでお前には腹違いの妹がいることも留置場で服役中にされている母親についても調べたぜ。」

「!!!」

アリアはキンジの言葉に愕然するも更にキンジはこう続けた。

「それで如何してお前が『武偵殺し』にそこ迄拘るのか考えてみたが．．．母親の罪状がでっち上げだという事を証明したいってことしか浮かばなかったな。」

「．．．．．」

アリアはキンジの言葉に最早驚くことも出来なくなつてしまった。

「・・・沈黙はYESととるが間違いなさそうだな。」

キンジはそう言うのとアリアにこう警告した。

「アリア、お前は爆弾を探して解除させろ。お前の体格なら大抵の場所は

潜り込めるだろ？それともし『武偵殺し』と会つたら直ぐに逃げろ。これ迄も一流と

言えるほどの武偵を屠つた頭のキレル強者だからな。」

それだけだと言つてキンジは今の内に携帯電話を使つて帰りのチケットを

予約しようとして取り出した。

するとアナウンスが鳴った。

『お客様に、お詫び申し上げます。当機は台風に伴う乱気流を回避するため、到着が30分程度遅れることを誠に申し訳なく』

すると・・・。

ガガンと雷が鳴るのを聞いた。

「うみや!!」

アリアは悲鳴を上げながらきゅつと首を縮めた。

それを見たキンジは・・・。

「お前雷が怖いのか？」

「こ、怖いわけない。バツカみたい」

すると今度はピシヤアアア!!という音が鳴り響くと……

「きゃああ!!」

そう叫びながらアリアはベッドの中に潜り込んでいった。

それを見てキンジはアリアに笑いながらこう言った。

「(？▽？；) ハツハツハ。お前後でトイレ行つとけよ。」

キンジのその言葉を聞いてアリアは布団の中でガルルルと

睨みつけていると……。

パアン！と銃声が聞こえた。

キンジと少し遅れてアリアは部屋から出ると乗客乗務員が不安げな顔で騒いでいる中コックピットの扉から誰かが出てきた。

「!!」

キンジとアリアはすぐさま構えるとそこから出てきたのは……。

さっきのフライトアテンダントの女性と機長が副操縦士の男二人を引きずり

出してきた。

そして二人を通路の床に無造作に投げ捨てるとキンジとアリアが拳銃を引き抜いた。

「動くな！」

「あんたに勝ち目はないわよ!!」

そう言うのとフライトアテンダントは胸元から・・・缶を取り出してこう言った。

「ATTENTION PLEASEでやがります。」

「その口調!!」

キンジはその口ぶりを聞くや否やピンと音を立てて、放り投げた。

それを見たキンジは全員に向かってこう言った。

「全員部屋に入れー!!」

キンジが乗客全員にそう言つて扉を閉めた。

そしてアリアは部屋の中からある物を出した。

「これは?」

「携帯用の酸素マスクよ。ここう言う機体にはこれが常備されてるのよ。テロリストに備えてご丁寧にその部屋の間人しか開けないようにしてね。」

今時そんなものもあるのかよと思ひながらキンジはそれを口に着けて防護用の

ゴーグルを付けて外に出た。

そして外に出てみると・・・。

「何もない?」

キンジはそう言いながら武偵校の生徒手帳を出してそこからコードを出した。

因みにこれは電子式でありレーダーやセンサー、小型パソコンとしても使われている。

「どうやらこいつはフェイクの様だな。」

すると部屋の電気が消えて非常灯に切り替わった。

そして外に出ていたベルト着用サインが点滅し始めた。

「・・・和文モールス信号ね。」

アリアはそれを見て眩きながらこう解読した。

「オイデ オイデ イ・ウー ハ テンゴク ダヨ オイデ オイデ ワタシ ハ

イツカイ ノ バー ニ イルヨ」

「誘っているって言うより馬鹿にしてるなあれ。」

キンジはそう言いながら拳銃を構えるとアリアはこう言った。

「上等よ・・・風穴開けてやるわ!!」

着いてきなさいと言って颯爽と走ろうとすると・・・

ゴロゴロと言う雷の音にヒイイ!!と叫ぶとキンジはそれを見てアリアに

こう言った。

「着いていこうか?」

「・・・勝手にすれば。」

どうにも締まらないなと思うキンジであった。

その正体に驚きおののけ!!

キンジとアリアはあの後一階のバーに向かっていった。
すると・・・。

ブー!ブー!ブー!とキンジのポケットからバイブレーションの音が響いた。

「あんた何やってるのよ!?電源消したの!!」

アリアはそれを聞いて小さな声で怒鳴り散らすとキンジは慌てながら携帯電話を出そうとすると・・・ある事を思い出した。

「そーいやもうメールが来ているはずだよな?」

そー思い携帯電話の時刻を見た後キンジはその携帯電話を見ると確かにメールが来ていた。

『遠山キンジ様 貴方達を狙っている《武偵殺し》の正体分かりましたので
名前と画像データを送信いたします。』

敵は貴方のすぐ近くにまだいる可能性が高いので気を付けて下さい。』
それを見たキンジは携帯電話の画面をスクロールしてその人間の正体を・・・
見てしまった。

「!!」

「如何したのよキンジ?」

「アリアはキンジの表情を見て何かあったのかと話すときンジはアリアに向けてこう言った。」

「・・・如何やら俺達は足元を掬われてしまったようだぜ。」

そしてキンジ達はそのままバーに向かうとその部屋のシャンデリアの下でフリルたつぷりの・・・武偵校の制服を着ていたフライトアテンダントが足を組んでそこでカクテルを嗜んでいた。

キンジはその服を見て確信に変わった。

これ程変な改造服を着て活動する武偵はキンジが知っている限り只一人しかいないのだ。

「まさか手前が《武偵殺し》だったとはな、俺達はまんまと騙されていたわけだ。

ずっとアリアがお前を捕まえようと四方八方する様を見ていて楽しかったんだろう

？」

キンジはそう言いながら銃を構えた。

「いい加減に正体を現したらどうだ? 『峰 理子』いや……。」

そしてキンジはメールが送信されていた方の携帯電話をフライトアテンダントに向けてこう言った。

「『峰 理子 リュパン四世』!!」

「!!」

キンジの言葉にアリアは雷を撃たれたように驚いていた。

何せ目の前にいるのは嘗ての先祖の仇の末裔なのだから。

「……まさか私の正体をここまで気づくなんてやっぱり凄いな、キー君は。」

そう言いながらフライトアテンダントは自分の顔を掴むと……ベリベリとはがれ始めたのだ。

そしてその下から……もう一つの顔が現われた。

それこそ「武偵殺し」峰 理子であった。

「BON SOIR」

こんばんわとフランス語でそう言うと理子はこう続けた。

「でもさ、家の人間は皆理子の事をさ『四世。四世。四世。四世様』って皆私の名前じゃなくてそう言う記号で呼ぶんだよ……酷くない?」

「それがどうしたって言うのよ?……四世のどこが悪いのよ?」

アリアがそう言うと言子とは……目ん玉をひん剥かせてこう言った。

「——悪いに決まってるんだろ！あたしは数字か!?記号か!!あたしは『理子』何だよ!!
それなのにどいつもこいつもアタシの事を認めてくれない!!」

だから!!と言子は天井を見上げてこう言った。

「曾お爺様を越えるためにあたしは『イ・ウー』に入つてこの力を得た。

あたしはこの力で自分を手に入れて……自由を得る!!」

そのために!!と今度はアリアに指さしてこう言った。

「あんたをおびき寄せるためにこれ迄殺してきた武偵16人の経験値を総動員して……あんたを殺す!」

だけどと今度はキンジの方を見てこう言った。

「知つての通りだと思うけどホームズ家の一族にはパートナーがいないと十全に発揮されないから条件を合わせるために選んだのがお前だ。」

「……何で俺なんだ?」

キンジは静かにそう言うと言子はニヤリと笑つてこう言った。

「アリアと同じ実力で曲者ぞろいの『アサルト』を纏め上げているお前こそ

ふさわしいと思つたからさ。でもよく。チャリジャックの時にやあ簡単な電波で

気づかせても駄目だからさあ、態々変装してバスジャックに乗り込んで見ていたのに

お前ら協力せずにキンジが一人でアタシの無人車両を全部倒しちまったからどうしようかと思つたら何故か分からねえがちゃんと来てくれたようだから助かつちまったよ。」

「……やっぱりあの女子中学生はお前だったようだな。」

「……気づいてたのかよ？」

「最初は気づかなかつたがあの人無人のスポーツカーが来た後に疑問に思つたんだよ。『何でこんなにジャストなタイミングだったんだ？』つてな。」

そしてキンジは理子を見てこう言った。

「あの時犯人がそこでネットワークを経由して操作すりや大抵のタイミングが合う筈だからな。それでこそ『中にいない限り』見えてなかつたはずだぜ？」

そう言うのと理子は更には笑うとキンジに向けてこう言った。

「ハハハハハ!!まさかそれだけで真実に辿り着いちまうとはこりやあともねえ推理力持った奴だぜ!まるで曾お爺様のライバルみてえな奴だぜ!さあ来いよ!!

これで手前をぶつ飛ばす準備が整つたつてもんだぜエ!!」

そう言うのと理子はスカートから二丁のワルサーP99を出した。

戦闘が始まった。

爆殺鬼現る。

理子がワルサーP99を二丁抜くとアリアも自身のガバメントを二丁とも出して攻撃し始めた。

ここで武偵の戦い方を少し話そう。

武偵同士の戦いにおいてはISの誕生以前からある訓練がなされていた。

それは防弾服を着用している限り決着は近接戦である。

そして拳銃はそれを可能にする打撃武器なのだ。

然しここで問題なのは拳銃に使われる装弾数である。

ワルサーP99の装弾数は16発、それが*2の為合計32発

一方のアリアの方はガバメントの装弾数はあらかじめ入れてたとしても8発、

それが*2であることから合計16発と半分以下である。

そして後は・・・本人たちの腕次第である。

「くっ・・・このお!!」

「あはっ、アハハハハハ！」

アリアと理子の戦いはその小柄な体つきからかお互いの銃弾は当たることなく壁に、

床にへと撃ち込まれて行く。

そしてキンジはと言うと・・・。

「あいつら考えなしかよ。」

近くのテーブルを壁代わりにして伏せていた。

そして暫くすると・・・。

カチツ、カチツと音がした。

お互い弾切れの様だ。

「はあっ!!」

アリアはそれを見計らって自身の両脇で理子の両手をブロックした。

「今よーキンジ!!」

アリアはそれを言った瞬間キンジは背中から脇差を抜き放って理子目掛けて

襲い掛かろうとした。

すると理子はアリアに向けてこう言った。

「ねえアリア。あたし達って似てるよね。」

「はあ?」

アリアは何のことだと思っていると理子はこう続けた。

「家系、キュートな姿、そして・・・二つ名。」

すると理子の髪の毛が・・・有り得ないことになり始めていた。

「あたしも持つてるんだよ。でもあんたと違って完璧な『カドラ』をな!!」
髪の毛がまるで生きた蛇のようにうねうねと動きながら背中に入り込み・・・
そこからナイフを出した。

「!!」

「ハッハー!!」

理子は笑いながらアリアに襲い掛かった。

「くう!!」

一撃目は避けられたが・・・反対側からもやってきた。

「やらせるかよ!!」

キンジはそれを見て懐から苦無を出してその軌道を変えた。

「!!っ!!」

アリアはそれを見て更に避けきると・・・。

「うみやあ!!」

背負い投げの要領で理子を投げ飛ばした。

「おっと。」

然し理子はそれを髪の毛を使ってシャンデリアを掴んだ後に着地した。

「やっぱ2対1じゃ無理があつたかなあ。」

理子は面白半分で言うもアリアはキンジに向けてこう聞いた。

「ねえ・・・弾ある?」

「規格外だから無理だな。」

だがキンジは自身の銃を渡すとアリアに向けてこう言った。

「俺が前衛で奴を引きつけるからお前はその間に奴を倒しとけ。」

然しアリアはこう返した。

「何言ってるのよ!?!あいつはママに罪を着せた悪党よ!!あたしが風穴開けて

やるわ!!」

如何やらアリアは仇がいることで頭がいっぱいのようだ。

無論キンジも仇を目にして倒したいという願望があるが今は飛行機を何とかしな

きやいけない為それは二の次で考えているのだ。

するとそれを見ていた理子はこう言った。

「全く、Sランクとはいえ協調性が無い奴は大変だな。だがまあ・・・本気でしないと

いけないようだな。」

「あんたのそれ・・・本気じゃないって事。」

アリアはそれを聞いて訝しげに聞くと理子はこう返した。

「いや本気だよあたしは．．．この状態ではね。」

「?．．．『この状態』?」

キンジはそれを聞いて何かあると思うと周りの電灯がチカチカと点滅していた。

「このモードあたし嫌いなんだよなア。」

何せと言うと胸の中央部分に空白の三桁の数字が表れた。

「何せ可愛くないしソレニ」

すると理子の声が変わった瞬間体も変わり始めていた。

黒に近い鋼の金属と姿を変え。

頭のツーンテールは二対のキャノン砲のようにせり上がり。

両脚にはブレードの様なものが生え。

顔は最早理子ではなく突起物が生えたような口になっていた。

『コノジョウタイダトオマエラスグニコロシチャウカラネえ。』

それを見たアリアとキンジは言葉にも出来なかった。

何せ目の前にいるのは人間ではなくなっていたからだ。

『サテト．．．コロスカ。』

すると両腕のナツクルがせり上がった瞬間理子だった何か．．．

いや．．．『ロイミュード』ナンバー125『ボムキル』がアリア達目掛けて

走り出した。
未だ戦いは終わらず。

悪夢の時間停止。

「・・・何よあれ？」

アリアは姿形が変わった理子を見てそう言うもそれはキンジも同じであった。

あれは人ではなくまるでロボットののような印章であるからだ。

そして理子のセリフで更に緊張が高まった。

『サテト・・・コロスカ』

その言葉と共に理子が走り出した。

そしてキンジ達が構えた瞬間・・・時が止まった。

「!!」

キンジはその状況に驚愕していた。

まるで世界の時間が止まってしまったかのような感覚なのである。

「(おいおい、どうなってるんだよこれはよ!!体が自由に動けねえ!!)」

キンジはそう思いながら理子の方を見ると理子は歩きながらアリアの元へと向かって行くのを見た。

「(神崎!!おい聞こえねえのかよ!!そっちに行ってるぞって何か

反応しろよ!!」

キンジはそう思いながら視線をアリアに合わせようとしていた。

然し理子だった者がアリアのすぐそこにまで迫るとアリアを見てこう言った。

『コレデアタシハ〃リコ〃ダ。バイバイ〃アリア〃。』

そう言うのとアリアを掴んで扉目掛けて思いっきり投げつけた。

そしてキンジを見ると理子だった者はこう言った。

『アンタガイキテルトヤバいかラクチフウジダヨ。』

「何だど!こいつに一矢も報いてねえのに!!兄さんの仇も打てて

ねえのに!!」

キンジはそれを聞いて絶望しながらもこう思っていた。

「(動け動けよ俺の体!!俺には未だ!!)」

するとキンジの脳内に浮かんできたのは武藤や不知火、そして仲間でもある焔、

夜桜、華毘、紫と大事な人たちでもある飛鳥、雪泉、そしてカナメが映っていた。

「(帰りを待っている連中がいるんだよお!!)」

『ジャアネエ、〃キークン〃』

そう言つて腕を振り上げた瞬間・・・時間が元に戻った。

「!!どらあ!!」

『!!』

「がはああ!!」

キンジはその瞬間に避けるとそれを見た理子だった者は驚き、アリアが扉にぶつかり頭から血を出すほどのけがを負った。

「畜生が!!」

キンジは悪態つけながらアリアを抱えてバーラウンジから出るとそれを見た理子だった者は嬉しそうにこう言った。

『キャハハハハハ、コンナセマイヒコウキノナカデ、オニゴツコ、スルンダア!』

『イイヨ、キークン、ソノアソビヲウケテアゲルカラサア、・・・チャントニゲテヨ。』

ジャナイトコロシチャウカラネエと遠くから言う声にキンジは体勢を整えなければいけないという思いでアリアの部屋にへと向かった。

そしてそれを見ていたのは、・・・キンジだけではなかった。

鉄製の「スズメバチ」もそれを見た後キンジの行く方向に向かつて飛んで行った。

薬を飲むときは自分の体質も確認しろ。

「糞つたれが！何だよあの化け物は!?反則じゃねえか!!」

キンジはアリアをお姫様抱っこしながらそう言っていた。

「今の神崎は頭に怪我してる！頭は今俺の制服を包帯代わりにして

血を沁み込ませてるがこの出血量だと失血死しかねえぞ!!」

キンジはそう思いながらアリアを部屋に連れて行って血まみれになった顔面を

備え付けのタオルで拭いた後シーツを破って包帯代わりにして巻こうとするとある

事に

気づいた。

「側頭動脈がやられてやがる！このままじゃあ!!」

キンジはそう言いながら電子手帳の中にある止血テープを取り出して傷を塞いだ。

然しこのテープはワセリンで無理やり血を止めるその場しのぎ程度の物である。

そしてキンジをアリアの表情が芳しくないことに気づいてタッチペンの

ペンホルダーに指を突っ込んである物を出した。

それは『RAZZO』と書かれた小型の注射器である。

「神崎、ラッツォ打つがアレルギーとかあるか？」

「……な……い。」

ラッツォとはアドレナリンとモルヒネを組み合わせて凝縮させた復活薬である。

「こいつは心臓に直接打たなきゃいけない薬だから服脱がすぞ、良いな？」

「へ……変な事……したら、風、穴」

「するか阿保か？」

アリアの言葉にキンジはそう言い返してブラウスのジッパーを開けた。

「う……。」

アリアは小さく震えていたがキンジは胸骨を探していた。

「確か……指二本……ここだ！」

キンジはフロントホックの辺りで見つけると注射器のキャップを外して心臓目掛けて準備した。

「行くぞ！神崎！！」

そして……ぐさつと刺して、薬剤をアリアの心臓目掛けて注入した。

「——！！」

その後アリアは痙攣したと思ったら目を思いっきり見開いてこう言った。

「う……っはあ!!な、何これ!どうなっただって胸!」

「キンジ！あんたの仕業ね！こ、こんな胸なんで見たがるのよ！！嫌味のつもり!? カナメとかいう奴よりも・・ちよつと小さいぐらいで!! どうせ身長だつて

万年142cmよ!!!」

混乱状態であつたアリアは茹蟄のように真つ赤になりながらマシンガンのように喋つていると自分の胸に注射器が刺さつているのを見て・・・こう叫んだ。

「ぎゃああ!!何よこれ!!?」

それを見た後キンジはアリアにこう説明した。

「お前はあの時理子?にやられたから俺がラッツオで生き返らせたんだ。」

「りん・・・理子ー!!」

アリアは全てを思い出したのか服を整えるとバランスが取れない足取りで両手に拳銃を持つて部屋に出て行こうとしていた。

ラッツオとは復活薬であると同時に興奮剤でもあるのだ。

恐らくアリアは薬が効きやすい体質なのだろう。

自分と理子?の戦力の優劣すら判断できないほど興奮しているのだ。

キンジはドアの前に立ちふさがつた後アリアの両手を掴んでこう言った。

「待て神崎!まともにもやり合つてもあの化け物に勝てるかどうか分からねえぞ!!」

「そんなの関係ない!!あたしがやるんだ!あたしがああ!!」

「落ち着け!!一流の武偵は相手の戦力分析をしたうえで凶悪犯罪者と渡り合うのが鉄則だろ!?それぐらいお前だって」

「あたしは独唱曲(アリア)よ!!いつだって一人で戦ってきたんだからこれからもだつて!!」

アリアは興奮状態が収まっていないどころか増々強くなっているような感じであった。

そしてキンジは兄に対してこう謝罪した。

「(悪い兄さん。約束破るわ。)」

そう思いながらキンジは顔を天井に向けるとそのまま・・・アリア目掛けて頭を落とした。

「いい加減にしろ!!この猪突猛進馬鹿娘が!!」

ゴスツと言う鈍い音と同時にキンジの頭はアリアの頭に直撃した。

「ウニャアアアア!!」

アリアは変わった悲鳴を上げるとそのまま・・・失神した。

「うにゃああゝゝゝ。」

アリアが失神したのを確認した後キンジはアリアを布団のシートで簀巻きにしてそのまま荷物入れにポッシュアウトした。

「・・・兄さん。これは応急処置だから大目に見てくれよ。」
キンジはアリアを入れた後にそう呟いた。

金一曰く「女性は丁寧に接しろ」と常日頃から言われていたのだが今回は特例としてもらいたいと思っっているようだ。(序に御先祖様にも)

「さてと・・・あいつをどうするべきか?」

キンジはあの理子?らしきものとどう戦おうと思っっているようだがこれまであんな犯罪者は見たことなかったので如何すれば良いのか分からなかったのだ。そして暫く考えていると・・・。

「?」

上に何かいると思っつて天井を見るとそこにいたのは・・・。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・デツカイスズメバチだった。

「うおおお!!」

キンジはそれを見て驚くとそのスズメバチはキンジの周りを飛び回り始めた。

「・・・・(動いたら刺される)」

キンジはそう思いながらじつとしていた。

スズメバチは黒い物に反応して複数回も指すことのできる凶暴性の高い蜂なのだ。そしてそのスズメバチはキンジの肩に乗るとそのまま・下に下にへと下がって行った。

「・・・・・・・・（――；）」

キンジは脂汗を掻きながらもじっとしているとスズメバチはそのままブレスレットにまで向かうとそのまま・そこに座った。

その時にカチツと音がしたのに気づいたキンジはそれを見てこう思っていた。

「な・・・・・・・・何だ!？」

『H E N S I N 』

ブレスレットから音声が発するとキンジはそれを見て驚いていた。

「な、何だよって何だよー!!」

するとキンジの周りに緑色の粒子が集まるとそれは装甲になってキンジの周りを纏うように展開していった。

そして光が収まるとそこにいたのは・・・・上半身が分厚い装甲で覆われた自分が鏡の前に立っていた。

「な・・・・・・・・な・・・・・・・・何じゃこりやアア!!」

幼子は成長して空を飛ぶ

「な……な……何じゃこりや〜!!」

キンジは鏡を見て驚いていた。

今自分は武偵校の制服ではなく上半身を分厚い装甲を身に纏っているのだ。

然も顔も特殊なプロテクターで覆われていて辛うじてだが自分だと分かる位であつた。

「これって……夢か？」

キンジはそう思いながらブレスレットを見てみると先程の巨大なスズメバチは大人しくくっ付いていた。

「夢じゃなさそうだがどうなってるんだ此れ？」

キンジはもう一度自分が身に纏っているものを見ても訳が分からなかった。

「……如何やって纏ったんだ俺??」

正直そこが疑問なのだ。

何せ突如光ったと思えばこの様な装甲を身に纏っているのだからだ。

そして暫く考える中……足音が聞こえてきた。

ガシヤ、ガシヤと音を鳴らして歩いてくるのが分かった。

「糞ツ、もう来やがったか。」

キンジはそう言いながら自身をもう一度見直すところある決心を固めた。

「ああもう仕方がねえ!!男は度胸!!ぶち当たってやらあ!!」

そう言いながらキンジは扉を半ば破壊するような感じで出て行った。

「おい!理子!!」

突如目の前に現れた人間を見て理子は・・・ププツと笑いながらこう言った。

『ナニソレキークンwwwwヘンナカツコウwwww』

「喧しいわ!!」

理子の笑い声にキンジは怒りながらそう言った。

『マアイツカ、アリアハウシロニイルカラアトデコロセバイイカラマズハ

“キークン”カラ・・・コロシチャオ』

そう言うともた時間が止まった。

「(糞っ!!またかよ!!)」

キンジはそう言うも声が出せないので何も出来なかった。

『バイバ〜イ』キーン』』

理子がそう言うのとキンジを何度も周りを殴りつけた。

「ぐうお!!」

そしてそれを何度も繰り返すうちに・・・時間切れとなった。

「ガアアアア!!」

そして幾つもの火花が散っているも・・・傷一つもなかったのだ。

『ハア?』

理子は素っ頓狂な声を上げるもキンジはそれを見て驚いていた。

「(これって・・・結構堅いのか!!)」

キンジはそれを見てそう確信するもある事に気づいた。

「(ああでもどうやって攻撃すりゃいいんだよ!!)」

そう思っているとプロテクターの中から何かデータが出てきた。

「?!何だこれ?」

キンジはそう思っているとある所が点滅しているのを見るとそこはそのスズメバチの羽の所であった。

そしてそれは映像によれば羽を左右それぞれ逆向きに回すものであった。

「(これを回すのか?)」

キンジはそう言いながら羽を回すと・・・ある音声が聞こえた。

『Cast Off』

「は?」

すると装甲が浮かび上がり・・・飛び出した。

「ウオワアアア!!」

すると周りの飛行機の壁にも当たりその形に凹んでいた。

そして装甲の下が露となった。

上半身は黄色の装甲が幾つか点在し、顔はまるで蜂のようになっていた。

そしてある音声中それは明らかに変わった。

『Channge Wasp "Thebe"』

「・・・『ザビー』」

今新たなる戦いの始まりが告げようとしていた。

時間停止の激闘

『Channinge Wasp “The bee”』

「……『ザビー』」

キンジは装甲がパージされて姿を現した自身の姿をデータ映像から見ていた。見た目は正しく「スズメバチ」が人の形を模ったような姿になっていたのだ。

「これが今の俺か……」

キンジはその姿を見ていると理子がキンジに向かって嘲笑うようにこう言った。

『アハハハハ、イイネ！イイヨ』キークン！！スツゴクイイケドサ、

ソナテイドデアタシニカテルトオモツテンノ？』

理子の言葉にキンジは確かにと思っていた。

幾ら姿形が変わってもあの時間が止まる現象に対処できるのかと言われると微妙な所であるのだ。

するとキンジのマスクにある情報が送られた。

そこにあるボタンが点滅しているのを見てキンジはそれを見た瞬間理子はもう一度発生させようとしていた。

「くそ！こいつが頼りかよ!？」

『ジャアネエ』キークン』

『Clock Up』

理子が何かをしようとした瞬間にその「スズメバチ」から音声が流れてから・・・時間が止まった。

そして理子はキンジに近づくとキンジに向けてこう言った。

『バイバ〜イ』キークン』

そして拳を振りかざそうとした瞬間・・・突如理子の腹部に衝撃が走った。

『グフツ！ナンダ!？』

理子は衝撃が襲った所を見ると・・・信じられない物が見えた。

それは・・・。

『ナンデウゴイテ』

理子は信じられないという言葉でキンジを見ようとするとキンジは・・・もう一方の拳を既に準備していた。

「教えるかよ。」

キンジは理子を見てそう言いながら拳を腹部目掛けて当てた。

『グハア!!』

理子はそれが当たりよろけ乍らもキンジから離れるとキンジはそれを見てこう言った。

「これなら負ける気がしねえ!!」

そう言うのとキンジは待つてましたとばかりに理子目掛けて突進してきた。

『ウオラア!!』

すると理子は両足に付いている「レッグブレード」を展開して回し蹴りした。

「ちい!!」

キンジはそれを見て跳躍して天井を蹴ってから殴りつけた。

『ゴハア!!』

理子はそれを喰らってよろけるとデータ映像からある情報が出てきたのでキンジはもう一度「スズメバチ」の機体に付いている3つのボタンを全て押した。

それを見ていた理子はそれが何なのか分からなかったが本能で感づいたのだ。

『(イマヤラナイトヤバイ!!)』

理子はそう思った瞬間に頭部についていた塔のような物がキンジ目掛けてせり下ろされた。

よく見るとそれはキャノン砲でありキンジはそれに気づいて理子目掛けて

走り出した。

『ナニイ!!』

理子はそれに驚くと更に驚く出来事がそこにあった。

何と「スズメバチ」のようなものから電流が流れ始めておりある音声が響いた。

『Raider Stinging』

「ライダーステイング!!」

それを言った瞬間「スズメバチ」の針が大型化しドリルのように回転し始めた。

そしてそのまま・・・理子目掛けてブチ当たった。

『ガアアア!!』

そして理子はそのまま吹き飛ばされて元に戻った。

「ガアア!!」

そしてそのまま転び止まった理子を見てキンジはこう言った。

『峰 理子 ルパン四世』殺人未遂の現行犯で逮捕する。』

そう言った瞬間に・・・飛行機が横に傾いた。

「どわあ!!」

キンジはよろめいた瞬間に理子は颯爽と逃げだした。

「待て!!」

キンジは走り去っていく理子を見て追いかけた。

「ハア、ハア、ハア。何だよあの姿はよ？聞いてねえぞ!!」

理子はキンジの姿を思い出しながら腹部を擦ってそう言っていた。

先程のダメージが理子に残っているのだ。

そして理子は携帯で何かをしようとしていた。

すると・・・

「もう逃げられないぞ、『理子』。」

キンジが階段から降りながらそう言った。

「やあ『キー君』。一緒にイ・ウーに来ない？お兄さんもいる」

理子がいかけた瞬間理子の足元にダンと言う音と同時に穴が開いた。

よく見るとキンジが銃を持っていたのだ。

するとキンジは・・・怒り乍らこう言った。

「それ以上兄さんを語るなあ!!」

殺すぞと言うと理子は笑いながらこう言った。

「それはやだなあ？まだ『アリア』を倒してないんだしさあ・・・逃げちゃおう」

理子がそう言い切った瞬間に壁から・・・ドンという音が聞こえたので

よく見ると・・・蜘蛛のようなロボットが機体にしがみ付いていた。

そして壁を脚で破壊すると理子はその足の一つに乗った後キンジに向かってこう言った。

「キンジ!!アンタはあたしのターゲットに決めたぜ!!あたし以外の奴らに負けんじやねえぞ!!」

そう言つて理子はその機体と共に飛び去つていった。

「理子ー!!」

キンジは空気圧の変動により機内に大量の風が入り込んだことにより外にはじき出されないようにバーの机にしがみ付いていると天井から非常用の消火剤とシリコンの混在シートが出てきてその穴を塞いだ。

そして「スズメバチ」がブレスレットから離れた瞬間にキンジは元に戻った。

「くそオ!!」

キンジは理子を取り逃がしたことに腹を立てて机を思いつきり殴った。

そして外を見ようとすると・・・ある物が見えた。

それは飛行機目掛けて2つの光があった。

そしてそれが近づいてくるにつれてはつきりと・・・見えてしまったのだ。

「あれは・・・ミサイル!!」

キンジはそれの正体に気づいた瞬間に……衝撃が飛行機を襲った。そしてキンジはもう一度翼の方を見ると……。

「大丈夫……じゃねえなこりゃあ。」

機体は2機のミサイルに当たっても無事だったが4基あるエンジンの内内側二つが破壊されてしまったのだ。

機体は煙を上げながらも飛んでいるがヤバいと思ったキンジは「スズメバチ」と一緒に操縦室にへと向かった。

そうしている間にも……飛行機は落ちようとしていた。

GooO Lock!!

キンジは操縦室に入って操縦桿を握ろうとするとある事に気づいた。

それは……。

「俺、飛行機操縦したことなかったな。」

ヤバいなと思っている中インカムを付けると声が聞こえた。

『——31——で応答を。繰り返す——こちら羽田コントロール。ANA600便、緊急通信周波数127・631で応答せよ。繰り返す、127・631で応答せよ。』

「こちら600便だ。当機は『武偵殺し』による『ハイジャック』が発生し機長と副操縦士が負傷。今は東京武偵校2年『遠山キンジ』が操縦している。」

『何！二人は無事か!?!』

「二人とも麻酔弾で眠らされているだけだ。いつ起きるか分からねえがな。」
キンジの言葉に羽田コントロールの管制員はほっと安堵しているがキンジはある事を告げた。

「それと厄介ごとがもう一つ、『ハイジャック』犯は逃げられ、然もミサイルが機体の内側のエンジンに命中し、残ったエンジンは外側だけだ。」

それを聞くと管制員が驚いてこう言った。

『何だど!!今燃料系『EICAS』分かるか!?2行4列になっているはずだ!!』

その『Fuel』と『Total』を見てほしいと言われキンジはそれを見た。

「ああ、今540から更に減ってる。」

『それは恐らく燃料が漏れているようだ。』

「止められねえのかよ!!」

『無理だ。先程整備室の連中に聞いてみたがどうやらその飛行機のエンジンは

燃料系の門も兼ねているようだ。そこが壊れると何処をどうしても漏出は

止まらないようだ。』

キンジはその言葉にマジかよと思っていると管制員にある事を聞いた。

「後どれくらい持つんだ?」

『その速さだと後15分て所だ。今その機体は相模湾上空を飛行している

浦賀水道上空を飛行しているから距離的に見てもこっちに戻ってガガガガ』

「おい!如何したんだ!!もしもし!!」

くそつとキンジはインカムを投げ捨てると取り敢えず羽田に向かおうとした。

「隊長、先程国防大臣がIS部隊に発進命令を出しました。然も爆弾所持で。」

「連中は飛行機を爆破させる気ですね。」

「糞!!あそこには民間人がいるんだぞ!!」

「全員聞いてくれ。」

「!!!!!」

「俺達は此れよりステルス改造した輸送機に乗って600便を強襲する連中を打倒

し、

民間人と・・・新しい仲間を救援する!!」

「!!!了解!!!」

「!!!」

『こちら国防省、航空管理局だ。ANA600便聞こえるか?』

「防衛省?」

キンジはインカムから声が出たのでそれをとって聞いた。

『現在羽田空港は我々自衛隊が封鎖しており使用できない。その為千葉迄飛んでほしい。』

「千葉?」

キンジはそれを聞くと疑問に思えたのだ。

後13分で燃料が切れてしまうため千葉迄行くにはギリギリ無理な距離であるのだ。すると外にはI S部隊が操縦室から見えるぐらいに接近しているのが見えた。

何か違うなと思いきんじはI S部隊の一人に通信出来ないかと思いき外部通信をしようとする。・・・何かが光った。

すると下から爆発音が響き渡った。

「何だ!？」

キンジは外を見ると僅か2人のI S操縦者が外のI S部隊と戦っているのが見えた。

一機は4つのスラスターをアンロックユニットで固定し、大鎌を持った黒の機体

もう一機は大型のガトリング砲を持ち、背面部にミサイルコンテナとキャノン砲を合わせてスラスターに取り付けたピンクの機体がそこにいた。

ピンク色の機体がガトリング砲とキャノン砲でI S部隊を引きつけながら黒い機体が

飛行機の操縦室に近づこうとしている機体をたたっ斬った。

「あいつらは一体?！」

キンジはそう思っている中今度は飛行機のレーダーアラートが鳴り響いた。

「今度は何だよ!!」

キンジはそう言いながらレーダーを見ると機体反応が出たのだ。

「一体なんだよ!?!」

キンジはレーダーを見ながらそう言うのとそれは下からやってきたのだ。

巨大な輸送機が丁度600便の下側に着くようにしていたのだ。

するとその機体の後ろから4機の戦術機が現われた。

その内3機はここ最近配備し始めた機体10式『陽炎』。

そしてもう1機は見慣れない機体であった。

『陽炎』よりも人間らしいフォルムをした青い機体である。

すると3機ある『陽炎』の内二機がエンジンに入り込みもう1機は何やらホースの

ような物を出していた。

「こいつら一体・・・?」

キンジはそう思っている中上でゴンという音が聞こえた。

「何だ?」

キンジはそう思っているとインカムから声が聞こえた。

『こちら国連軍第0特務隊だ。600便を操縦している武偵校生に告ぐ。今すぐ

引き返して東京に向かえ。このままいけば飛行機を墮とされるぞ。』

「何だつて!!」

キンジはそれを聞いて驚いている中合点が言ったな思った。

「(どんだけ俺達を信用してねえんだよ!!)」

そしてインカムから流れる声はこう続けた。

『現在簡単だが機体の修理と補給とIS部隊の牽制を行っている。このまま羽田空港に直行しろ。それまで俺達がここを守る。』

そう言う通信が一方的に切られた。

「一体何だつてんだよ!」

キンジはそう思いながらも機体を操作していた。

目の前にいる黒の輸送機を見逃さないようにして。

「糞が!! あいつらキンジごと殺す気かよ!!」

武偵校にて武藤が拳をぶつけながらそう言っていた。

今回の事を紫から聞いて腕の立つ「ロジ」のメンバーで救助艇を用意しようと思つていたのだが嵐の影響で使用できなくなってしまったのだ。

そこで代用として学園島が保有するタンカーで行こうと準備している中、国防大臣の通信を傍受して学園島が保有するIS『戦嵐』と戦術機『撃震』をスタンバイさせようとした瞬間に電話が鳴った。

「この糞忙しい時に何処からだよ!!」

あほな奴だったら轢いてやるぞと思いつながら電話を?げると相手は……。

『よう武藤、準備できてるか?』

「キンジ!!」

何と相手はキンジであった。

「お前変な電話番号だったから分からなかったぞ!」

『悪いな。別の奴を使ってるんだがそっちの準備はどうだ?』

「おおよ!!学園島のタンカーと通信を傍受してこつちが持っているISと戦術機を

運び込もうとしている最中だ!!」

『……悪いがこのまま羽田空港に着陸する予定だ。』

「はあ!今そこ封鎖中で下手したらお前どうなるか!」

『だからだ、もし何かあったらそんな時はよ』

「阿保か!!そんなもん手前の口で生きて帰ってから飛鳥ちゃん達に

伝えておけ!!」

『・・・ありがとな武藤。』

「へ、悪友の言葉でも譲らねえものぐらいあるのよ。」

そう言つて武藤は電話を切ると周りで準備しているメンバーに向けてこう声を掛けた。

「皆!! キンジは羽田空港に着陸するようだ!! 俺達はバックアップに回るぞ!!」

『『『オオオオオ!!!』』』

「サンキューな、武藤。」

キンジは「ザビー」を受け取った時に渡された携帯電話から通信した後正面を見た。

「もうすぐ羽田空港だ。」

そう言つている中キンジは最悪な物を目撃してしまった。

空港の飛行機案内用のライトが消されて行つたのだ。

「なああ!!」

これじゃあ着陸できないとキンジは万事休すかと思つてるとインカムから例の男の声が聞こえた。

『そのまま進め! こっちで明かりを点ける!!』

「どうやってだよ!？」

キンジはその声の主にどうするのかと言うとそのまま着陸してから戦術機の一機が輸送機の後ろから予備の燃料タンクから燃料を出していた。

そして……。

『やれ!!桜花!!』

『了解!!』

そのままピンク色の機体がガトリング砲で撃つと瞬間に火が燃え始め、滑走路に沿うような形で明かりがついた。

「いつの映画だよ!!おい!!」

キンジはそう言いながらも滑走路に向かって着陸態勢に入った。

そして着陸に入る間際に誰かの声が聞こえた。

《遠山君》

飛鳥が、

《キンジさん》

雪泉が、

《キンジ》

紫が、

そして……。

「主よ、……どうかキンジさんを守って下さい!!」

カナメがキンジの為に祈っていた。

そして機体が着陸するや否やキンジは中に入っていた機体の説明書に書かれていた着陸方法を見ながらエンジンを逆噴射させた。

「止まりやがれえええ!!」

そしてそのまま前方にある輸送機がどんどん近づいているのが見えた。

「ぶっかる!!」

キンジはそう思いながら機体を横にずらすと……そのまま飛行場の通路目掛けて突っ込んだ。

「ドワアアア!!」

そして飛行機は……止まった。

「……止まった。」

キンジはそれを見てほっとすると……。

『『『『ウ（ノ・ω・）ノオオオオオオ——（ノ・ω・）ノオオオオオオ——！！！！！！』』』』

周りで乗客や国防軍の隊員が歓声を上げた。
これを持って『武偵殺し』のよるハイジャック事件は幕を下ろした。

その外でキンジを見ている一向がいた。

「あれが新しい能力者ですか？隊長。」

「ああそうだ。彼こそあいつに告ぐ新たな能力者。」

「私達の同族ですか。」

その様子を見ていたのが一夏が所属している国連軍第0特務隊『防人隊』である。

ようこそ、国連軍へ。

「おい、そっちはどうなっている!？」

『現在乗客を救助してしまして・・・』

「馬鹿者が!!乗客の中に仲間がいたらどうする気だ!？」

『そっちについてはこちらにいる武偵校生が大丈夫だと』

「阿保か!!他人の言葉に、餓鬼の言葉を信じる馬鹿がいるか!!そっちに

プロの奴を送るからそれまで乗客は飛行機内で待機させろ!!」

そう言いながら現場指示をする国防軍の隊員が怒鳴っていた。

本来なら飛行場を封鎖したのちにIS部隊が爆弾を設置して飛行機を安全な海の上
で

爆発させるという計画だったのだがあるイレギュラーが発生してしまったのだ。

その原因をその指揮官が忌々しそうに見ていた。

「何で国連軍が介入してくるんだ。」

本来国連軍は各国の下部組織でありこう言うのには介入しないはずだと
思っていたのだ。

するとそこにある電話がかかってきた。

「はい！こちら国防軍!!・・・何国連軍が!?放り出させてやれ!!」

『然し・・・特務隊の権限で入れるようになってるらしく』

「何だと!!そんなの聞いたことないぞ?」

『然し現に如何やら国防軍陸上戦隊総司令官のお墨付きのサインを持っているらしく』

「はあ!!陸上戦隊総司令官のどと!?!・・・入れてやれ。」

『・・・はあ?』

「入れてやれと言ってるんだ!!さっさと入れろ!!」

『りよ、了解!!』

向こうの隊員が電話を切ったのを確認すると指揮官は席に座るや否や頭を悩ませていた。

「・・・何で陸上戦隊総司令官のがあるんだ?」

「ではどうぞ。飛行機は今も待機させてますんで。」

「ああ、ご苦労さん。」

隊員が挨拶していたのは全身を目深な帽子と襟の長いコートを身に纏い、アルファベットのAを逆さまにしたような記号の付いた手袋とブーツを履いた男性と

学生服（それぞれ違うタイプ）を着た少年少女が中に入った。

彼らはそのまま飛行機に向かった後コートを着た男性が全員を見てこう言った。

「それじゃあ俺は会いに行くから皆はここで待つてくれ。」

「「「了解!!」」」

少年少女達は敬礼すると男性はそのまま飛行機に入っていった。

周りではお互い抱き合う老夫婦や何やら軍と話している家族連れや仕事ごとなのか

スーツを着た男性が目映った。

そして彼はそのまま通り過ぎて行くところある所にへと向かった。

そこはキンジがいる操縦室である。

そして彼は扉を開けるとその人間にこう聞いた。

「君が『遠山キンジ』か?」

「君が『遠山キンジ』か?」

「?」

その声にキンジは振り向くとその時見た第一印象が……。

「(何だこいつ? 変態か?)」

そう思ったのだ。

何せ服装がそうなのだから。

「おいお前、人を見て変態って思うなら一発殴るぞ?」

如何やら気にしているようであった。

「ああ違ったな。こう呼べばいいかな? 『ザビー』。」

「!!」

それを聞くや否やキンジは懐に入れてあるベレッタを引き抜こうとするとその男はキンジに向かってこう言った。

「まあ待って。俺は戦う気はないしそれに情報を与えてやったろ?」

「じゃああの情報って!!」

『ザビー』が見つけた情報を分かりやすくするためにはな。それにそのおかげでお前は生きてるんだからな。」

男はそう言いながら後ろに潜んでいる『ザビー』を見つけてそう言った。

「それじゃあ話と行こうか? 『遠山キンジ』君。」

「能力者？」

「ああ俺達みたいな人間をそう呼ぶ。」

男は自身の名前が「防人 衛」である事を告げると防人は能力者についてこう説明した。

「能力者は『脳』、『神経』関係の技が多く存在してな。内容は様々だが共通していることはただ一つ『感覚』が鋭いつて事だ。」

「例えば俺なら『身体強化』。体の感覚も鋭くなるんだ。君にもあるだろ？ 感覚が他よりも違っているという現象があつたかい？」

キンジはそれを聞いて思い出すと確かにあつた。
時間が凝縮されるという感覚が。

それを言うと防人はキンジにこう聞いた。

「遠山君。君、国連軍に入らないかい？」

「はあ。」

「俺達は君みたいな人間を集めて力をコントロールさせる術を教えたり世界を裏から守る暗部関係の仕事をしてるんだ。」

「君さえよければ歓迎するしそれに『イ・ウー』に関する情報を掴めるかもしれん。」

「!!!」

キンジはそれを聞いて少し魅力的だと思った。

兄の仇である『イ・ウー』に関する情報が手に入れられる場所でもあり

それに……。

「(世界を裏から守るねえ。まるで飛鳥のじつちやんと同じことを言うな。)」

「《良いかキンジ君。この世は表があれば裏もある。正義と悪、愛と憎しみ、

全てにおいてそれらは存在しており逮捕すべき悪と葬るべき悪もまたしかり。それらの矛盾を孕もうとも己の信じた正義を貫く覚悟を持たなければいかんのじゃ。そして儂もそう思い裏からこの国を守っておった。それは今でも変わらんつもりじゃ。》」

そのことを思い出すとキンジは防人を見てこう言った。

「あんたの話正直言えば疑う事が山ほどある。どうして俺なのか？ 異能だとか理子が化け物に変身した事とかな。けれどそれでも俺は自分の守れる人間を守りてえし

その為に強くなりてえ。武偵として、一人の人間としてな。」

「それでもいいなら……仲間になってやるよ。」

そう言つてキンジは手を差し伸ばすと防人はそれを掴み取つてこう言った。

「ようこそ、国連軍第0特務隊へ。」

そしてキンジはその後軍が貸してもらったホテルの部屋で（エリアは病院）

一泊した後キンジは家路に着いた。

昨日の事はカナメに幾つか省いた感じで話しているためそこは理解してるようだ。そしてキンジは部屋の鍵を開けてこう言った。

「ただい」

「キンジさん!!」

キンジは言いかけた瞬間カナメがキンジに抱き着いて来たのだ。

「カ、カナメ!!」

キンジは如何したのだと思っているとキンジの胸の中でカナメはこう言っていた。

「よかった・・・キンジさんが無事で・・・良かったです!!」

涙ながらにそう言っているとキンジはカナメの頭を撫でてこう言った。

「言つたろ。必ず帰ってくるって・・・俺は大丈夫だからさ、何時ものように

頼むぜ。カナメ。」

キンジの声を聞いてカナメはキンジから少し離れた後目元を拭ってこう言った。

「お帰りなさい、キンジさん。」

「ああ・・・ただいま。」

そうやってキンジとカナメは家に入っていった。

キンジの帰り場所には待っている人がいるという事を告げるように太陽は煌めいていた。

閑話　　キンジと紫のデート。

あの事件から暫く経ったある日の事・・・

「……だよなア？」

遠山キンジが私服姿でうろついていたのだ。

学園島には色々な店があり、休日中とも相まって周りには人が大勢いた。

そしてキンジはある所に向かうと・・・既に先客がいた。

「あ・・・いた。」

そこにいたのは少しフリルの付いたワンピースタイプの服を着ている・・・。

「おおい、紫。」

「あ、キンジ。」

胸元が凄く開いてる紫がいた。

「・・・!!!」

キンジはそれを見るや否や驚きながら目線を逸らした。

何せいともなら Goslori かと言うくらいにドレスみたいな服を着ているのに何故今

回そう言う服装なのかビックリしたのだ。

「／＼／＼あ、．．．えとね．．．おねいちゃんが今日の事聞いて．．．これで
行けて．．．」

「．．．そうか。」

紫の姉は新体操部のキャプテンであり「アサルト」の三年「式風 忌夢」なのだが
この女性はレズビアンであると同時に耳年増なところがある為こう言う服装なら
どうかと紫に無理やり着せるところがあるのだ。

「これ着てると．．．色んな人．．．見てて．．．その．．．」

紫はそうもじもじしながら言うがキンジはその理由は直ぐに分かった。

「（．．．そりゃあそんなデカイ物持ってるじゃあなア）」

そう、紫の胸はキンジが知っている少女達の中で一番大きく、武偵校でもそれ以上の
存在がない程なのだ。

然も動くたびにそれはぶるんぶるんと揺れ、胸の谷間がこれでもかと言うくらい
見せられているため目のやり場に困るのだ。

そしてキンジは．．．紫の顔を見てこう言った。

「それじゃあ．．．行くか。」

「．．．うん。」

そしてキンジと紫は出かけて行った。

時計屋では……。

「これはどうだ？」

「それ……こつちのほうが良いよ。電波型で時間は正確だし、耐久性もあるよ。」
そう言いながら紫はキンジに近づいて……くっ付いた。

「!!」

キンジは紫が近づいたことにより胸の感触と胸の谷間が見えることに驚き、
見ないようにしていた。

スパゲッティ屋では……。

「これ美味しいな。」

「……うん。」

キンジたちはスパゲッティを食べている中……ある事が起きた。

「……あ……キノコが落ちちゃった。」

胸の谷間にキノコが挟まったのだ。

それを食べるがホワイトソースなので白いソースが谷間に残ってしまったのだ。

「!!!」

まるでそう言う行為をしてしまったような感じである。

因みにキンジはトマトソースである。

映画館では……。

予定していた映画ではなく「忌夢」が勧めた奴なのだがそれが……駄目なタイプであつた。

『ああ……勝さん。そこは……。』

『奥さん……ここにあるお水は何ですか?』

『ああそこは……駄目です。駄目ええええ!!』

『さあ……私に全てを見せて下さい。』

「……………// // // // // // // //」

R—15のエロ映画であつた。

然も周りにいるのはカップルや若い夫婦が多く存在し、中にはデープキスするような人たちもおり正直いざらと思うキンジ達である。

それに……。

「あ」

「ア」

「//////////」

お互い情事のシーンの度に顔を合わせると顔を真つ赤にする始末だ。

因みにこの映画のタイトルは「万斉 勝と三人の女角関係」というタイトルである。

「ええと……今日は……ありがとう//////////」

「お……おお//////////」

映画が終わっても尚、顔が真つ赤になっているキンジと紫である。

キンジは紫を女子寮にまで送ると紫はこう言った。

「じゃ……また学校で。」

「ああ……じゃあな。」

そう言ってお互い別れて行くと紫はキンジの後姿を見て……走り出した。

「キンジ。」

「ん？」

キンジは紫の声がしたので止まると……。

チユツ（*、3、）。

「へ？」

「……じゃあ。」

紫はキンジの頬にキスをした後紫は寮に戻っていった。

「…………へ…………へ…………へえええ!!」

少し遅いぞと思いつつもキンジは夜の中大声を上げたとき……。

そしてここは学園島にある港の一つ。

普段は武偵等が見張りをしているのだが現在は誰もいないようだ。

その港のなかにある倉庫の一角である女性がいた。

窓ごしから出る月明かりの下である写真を見ていた。

「ウフフフフフフフフ。ここにいたんだね、仕事が終わったら一緒に帰れるから待っててね。」

そう言いながらも二枚の写真を見た。

一枚は黒の長髪の少女「星伽 白雪」

そしてもう一枚は・・・ナイフで殆ど判別できないが写真から見て黒髪の男性が僅かながら映っていた。

「・・・アンタハ私が殺すわ。待ってなさい。」

そう言いながら少女はナイフを持ってもう一枚の写真を張り付けると投げやるそぶりを見せながらその男の名を言った。

それは・・・。

『遠山キンジ』

そしてそのナイフはそのままキンジの頭目がけて深く刺さった。

第二章 『炎と氷のシスターズ（姉妹）／ジエミニの剣』 昼でのドタバタ事情聴取。

あのデート（あの後『夢ヒス』になってしまった）から更に時が経ち・・・。

「やあ遠山君。ここ、良いかな？」

キンジ達が学食堂で食べている中あるイケメン面の男が話しかけてきた。

「おお良いぞ。『不知火』。」

キンジがそう言うのと周りも良いよと言った後その青年「不知火 亮」は座った。

この男は武偵校生としては珍しくあらゆる分野において粗忽なくこなせて人格者としても有名な為武偵校では珍しいタイプなのである。

すると不知火の後ろにはもう一人男性がいた。

「よう、キンジ。ちよつと聞きてえことあるけどここ良いか？」

「おお、武藤。お前もか。」

悪友でもある武藤もそこに入った。

そして二人が席に着くと（不知火はサンドイッチ、武藤はお握りとうどん）武藤はキンジにある事を聞いた。

「そういやよキンジ。お前この間紫ちゃんとデートしたって本当か?」

「!!」

その言葉にキンジ、飛鳥、雪泉がぎよつとした。

そしてキンジは口の中に入れてある一口サイズのハンバーグを飲み込むと

こう言った。

「で、デートって何処からそんな情報が来たんだよ!!」

「ん? 丁度そこに「アサルト」の1年生が見ていてな。そつから。」

「・・・マジかよ。」

キンジはまさか自分が所属している所からと思いつつながら武藤に対してこう返した。

「あれは前に個人的な依頼をしていたからそのお礼だよ。」

「またまた、その『アサルト』の子たちによると『恋人同士みたいで良いなア。』

って愚痴ってたらしいぜ。」

キンジの言葉に対して武藤がそう返すと飛鳥と雪泉がキンジを見てこう聞いた。

「と、遠山君!! それってどう言う事!!?」

「まさか付き合ってますんよね!!?」

あまりの気迫にキンジもえええと思っっているのだが更に武藤は爆弾を落とすとした。

「そーいやお前から映画で何見たんだよ? あの時間帯だと・・・この映画見たのか?」

武藤はそう聞いて携帯電話から調べるとその映画の情報が出てきた。

それを見た飛鳥と雪泉は顔を真っ赤にして更にこう聞いた。

「何！この映画!!」

「こ、こんなもの私達が見てもって・・・ふえええ!!」

飛鳥と雪泉は最早混乱状態であつたがキンジはこう答えた。

「いやそれは紫の姉ちゃんがあの映画のチケットを渡されたからだよ。知つてたら見ねえよ!!」

キンジはそう返すと飛鳥はキンジに恐る恐るこう聞いた。

「じゃ・・・じゃあさ・・・何もやってないの?」

「何をさ?」

「その・・・キスとか・・・」

その言葉を聞いてキンジはあの時の事を思い出して顔を真っ赤になると一瞬・・・沈黙が起きて・・・爆発した。

「やっぱりしてるじゃん!!」

「不謹慎です!不純異性交遊です!!」

飛鳥と雪泉がそう言うのと焰たちはああなと思つてこう言つた。

「それであいつ今日は見てないのか。」

「ああ、恥ずかしいからの〜。」

「?・・・何の話っすか?」

焰、夜桜、華毘がそう言うのと武藤たちがキンジを見てこう言った。

「よくやったなキンジ!!お前男だぜ!!」

まあファンには怒りで殺されそうだけどなと言うとキンジは武藤にこう聞いた。

「ファンって・・・あいつモテるのかよ!?!」

「あれ知らなかったっけ?紫さんってちよつと前までネットアイドルとかしててね、巷じゃ『爆乳アイドルむらさき』って有名なんだよ。」

「・・・あいつ昼夜逆転生活中にそんなことしてたのかよ。」

マジかよとキンジは不知火の言葉に仲間の裏話を聞いて茫然としていた。

「アドシールド」に向けて。

「そーいやよキンジ、お前『アドシールド』どうするよ?」

武藤が飛鳥と雪泉に紫のことについて説明している中武藤がキンジにそう聞いた。

「そーいやそんな時期か? 雪泉姉は何するんだ?」

「わ、私ですか! . . . 私は . . . その . . . / / /」

キンジは雪泉にそう聞くと雪泉は何故か顔を真っ赤にして俯いた。

「キンジ、お前確か今年は出場は出来ないんじゃないか?」

「え? どうして! 遠山君なら今年も優勝出来るじゃん!!」

焰の言葉に飛鳥が何故と聞くとキンジはこう返した。

「ああ、大体だがSランクの場合はお互いの一騎打ちが基本でな。俺の場合は現役

倒しちまったから相手がいなかったようだけど . . . どうもヤバい事がありそうなんだ。」

「? ヤバいことって . . . ?」

蘭猫（ランピョウ）先生との一騎打ちかい? と聞くとキンジは全員にある方向に指さすようにしてそっちを見ると . . .

そこにいたのはたった一人で饅頭を食べているアリアがいた。

「ああ、アリアさんとね。」

不知火はそれを見てなるほどと思った。

アリア自身も現役の武偵以上に成績を修めておりキンジとは実力が相違ない為確かに相手としては不足ないであろう。

「だから『アドシアード』のコンバット戦には参加するつもりだ。」

遅ればせながらも「アドシアード」と言うのは簡単に言えば年に一度行われる競技大会である。

これで好成績を修めれば武偵大の推薦入学出来、武偵局ならキャリア入局、民間なら一流どころの内定が決まるのだ。

そしてコンバット戦とは一対一であるがあらゆる状況や限られた武器で相手を倒せるかでポイントが決まるのだ。

「成程な。俺と不知火は補欠だから手伝いに回されるけどよ、あっちじゃあれも始めるんだらう？『IS学園のクラス対抗戦』。」

「そうだね。特に今年は例の『男性IS操縦者』が公式に出場するからね。当日のお客さんは間違いなく例年以上になるって見通しだよ。」

武藤の言葉に不知火が追加で出した後、キンジはこう言った。

「まあ、ベストは尽くすさ。他の皆は？」

キンジはそれぞれに聞いてみると飛鳥達はこう返した。

「私は女子の手伝い。」

「あたしは『近接格闘』の代表だ。」

「僕は今回手伝いじゃ。」

「あたいは今回の締めの花火の製造っス。」

飛鳥、焰、夜桜、華毘がそれぞれそう言った後キンジはじゃあ紫はと聞くと

雪泉がこう答えた。

「彼女は今回、『学園島情報部』の手伝いで入場者のチェックですね。」

そう言うのと放送音が聞こえた。

「超能力捜査研究科の『星伽 白雪』さん。至急教務課にお越しください。」

それを聞いたキンジは何だ？と思った。

白雪は外面だけなら愛想よく振舞っており生活態度はキンジの事を除けば文武両道を素とした彼女が呼び出しなど何だと思っただがキンジは食事を続けた。

・・・この時、未だ彼は自分も巻き込まれるとは考えはしなかっただろう。

護衛申請

『アサルト2年 遠山キンジ至急教務課までお越しく下さい。』

「?・・・俺。」

放課後キンジは家に帰ろうとした時に放送で呼び出しを受けた。

教務課と言うのは教師の部屋、つまり職員室なのだが武偵校の教職員は全員・・・
まともじゃない。

前職が特殊部隊、傭兵、マフィア、殺し屋等上げればまあ真面なんてゴミ箱に
ボツシュートしている面子である。

キンジは何事だと思いついてみるとそこには・・・。

「来たわね、遠山キンジ。」

「あ、キンちゃん。」

「・・・何だこの面子は?」

そこには神崎・H・アリアと白雪がそこにいた。

キンジはそれを見て少し嫌な顔をしているとその前に一人の女性が煙草を

吹かしながらキンジを見てこう言った。

「おぉー……来たか、遠山。」

女性にしては低めの声にだらしなく黒いコートを着た女性、ダキュラの教諭

「綴 梅子」がいた。

彼女の尋問の技術は凄まじく担当した人間は全部白状した後、彼女を女王様や女神と目からハイライトが消えた状態でそう言うようだ。

すると綴は英和辞書の一部を引きちぎってそれに妙な草を乗せて、巻き付かせて唾で留めた後キンジにある事を聞いた。

「なあよ……キンジ……『魔剣（デュランダル）』って……知ってるかい？」

それを聞いたキンジはこう答えた。

「それって今有名な都市伝説だろ？ 確か超偵のみを狙う誘拐魔だけど姿を見た奴は誰もいないって言う話だろ。」

まあ、別件で失踪したって話が有力視されてるがなと言うと綴はこう返した。

「それがねー……いるらしいんだよねー……白雪。」

そう言った後キンジはマジかよって顔で白雪を見た。

「SSRでも……予言で出たしー……レザドでも……レポートで……出たしー……。」

それを見た綴は既に可能性があるというときんじは綴にある事を聞いた。

「綴先生、レザドの報告って誰が？」

「確かー……雪泉ー……だったかなあ……。」

「雪泉姉か……なら信憑性が高いな。」

きんじはその名前を聞いて間違いないと確信した。

雪泉がガセネタを提出するほど仕事をサボらない人間だというのはきんじはそれに分かっているのだ。

「白雪、受けたほうが良いぞ。雪泉姉の報告なら間違いなさそうだしそれにもうすぐ『アドシールド』だ。限定的に護衛を付けたほうが良いぞ。」

きんじがそれを言うときんじはこう返した。

「ええ……でも……それじゃあ……。」

白雪はきんじの方を見て少し慌てながら俯していると隣にいたアリアがこう言った。

「その護衛をアタシが引き受けるって言ったら条件を出したのよ。」

「条件？……お前程でもか？」

きんじはアリアを見てそう聞いた。

性格は酷いが戦闘能力だけならきんじとタメを張る位だと思っっているからだ。

そしてそれを聞いて白雪が慌てていると綴がそれを話した。

「それがー．．．あんたを呼んだー．．．理由なんだよー．．．。」

そう言いながら綴は煙草を吹かす中キンジは嫌な予感を感じた。

護衛ならアリアで十分なのにキンジも加わるほどではなく．．．もつと別の理由だと悟ったのだ。

キンジは顔を引きつらせていると綴はキンジにこう言った。

「あんたの家でー．．．匿ってー．．．くれだつてー．．．。」

その言葉を聞いたキンジは頭を項垂れる程の衝撃であった。

お引越し。

「それでは白雪さんとアリアさんは明日来るんですね？」

「ああ、悪いな。色々嫌な面子と一緒に暮らす羽目になつて。」

何だつたら雪泉姉か飛鳥に頼んで住まわせてもらおうかとキンジがそう聞くと一緒に食事をしていたカナメはこう返した。

「大丈夫ですよキンジさん。当面とはいえ我慢すればいいですし、

それに私がいないと遠山さんの食事がコンビニ弁当で済ますかもしれないじゃないですか。そう言う事をさせないでくださいねと雪泉さんから強く言われてますから。」

「雪泉姉……まあ確かにそうかもしれないけど。」

キンジはそう言いながらもご飯を食べていた。

明日から白雪とアリアがこの家に住むことになったことから部屋とかについての話し合いが行われ、当面の間はキンジの部屋を二人に使わせて自身はカナメの説得により彼女の部屋で拠点として生活することとなった。

因みに寝るときはと言うと……。

「えへへへへ。キンジさ〜ん。温かい。」

「ね、・・・寝づらい。」

添い寝させられているのだ。（キンジを抱き枕にして）

そして次の日・・・。

「悪いな武藤、手伝わせちまって。」

「なあに、あの星伽さんと神崎さんと一緒にいられたんだぜ！それに比べりゃ

こんな労働、屁の河童だぜ！！」

キンジと武藤はアリアと白雪の私物を部屋に運んでいた。

あの後綴の内容を仕方なしに受諾（アリアの目線のきつきに屈服して）した後武藤に手伝いをお願いしたのだ。

無論文句と嫉妬の言葉が出てきたがそれでも手伝ってくれる辺り友達としての思いやりであろう。

そして粗方荷物（大半は白雪）をキンジの部屋の前に置くと既にアリアと白雪が待っていた。

「速くしなさいよ!!あんたが遅いからこっちは待ち惚けよ!!」

「分かった、分かったって。ちよつと待つてろ。」

キンジはアリアの催促を受け流しながら言うど部屋の前に立つと……コンコンとノックをした。

「カナメ。良いぞ?」

「はあい。」

奥からカナメの声が聞こえ、扉を開けてくれた。

「お帰りなさい。キンジさん。」

そう言いながらカナメが現われた。

「うおお。」

武藤はカナメを見てほうとしていた。

「ちよつと来いよ。キンジ。」

「?…何だ?」

武藤はキンジを少し奥に連れて行ったあとこう耳打ちをした。

「おい、お前何だよ!いつからあんな金髪巨乳と暮らしてんだよ?」

「ああ知らなかつたな。あいつとはもう……1年くらい居候してんだよ。」

「いやそれもう同棲だろ?」

キンジの言葉に武藤がツツコミを入れた。

「キンジさくん。そろそろ荷物を入れましょう。」

「ああ、分かった。」

キンジはカナメの声にそう答えて向かった後武藤はキンジの周りにいる女子たちを思い出すとボソツとこう呟いた。

「あいつって・・・巨乳専門のフラグメーカーなのか？」

それとも無自覚かと誰にも聞こえないような声でそう言った。

チエツクは同性にさせろ。

「いやあ悪いなカナメちゃん。蕎麦をご馳走してくれるなんて。」

他のロジの連中が知ったらキレるだろうなと武藤はそう言いながら天麩羅を食べていた。

「いえ、引越しの手伝いをしてもらいましたのでこのくらいはしないと。」

カナメが武藤に向けてそう言うのと武藤はキンジにこう言った。

「羨ましいな、おい。こんな綺麗な女の子に飯を作ってくれるだけじゃなく身の回りの世話までしてくれるとは。」

武藤がそう言っているのを聞いている白雪はと言うと・・・。

「……………(＃。＼)。」

蕎麦を食べるのに使われる箸が折れるくらいの力で握りしめていた。

そして食べ終わると・・・。

「それじゃあよ、キンジ。またなんかあったら電話してくれや。」

「ああ、じゃあな。」

そう言つて武藤は軽トラに乗って帰って行くのを見届けたキンジははあと溜息つけながら部屋に戻つていった。

「ただいま。」

「お帰りなさいキンジさん。」

キンジは部屋に戻つた後アリア達の姿が無いことに気づいた。

「あいつらは?」

「アリアさんはこの家を要塞化するつといてアラームを付けていまして」
それかとかナメの言葉を聞いて周りを見渡した。

僅かであるが家具がズレている箇所を見つけたので家具を元に戻しながら白雪を探していた。

「白雪は?」

「白雪さんでしたら何やら生け花をしているようです。」

そう言いながら嘗てはカナメの部屋であつた所を指さした。

「あらあんた戻つてたのね?」

するとその部屋からアリアが出てきた。

「丁度良かったわ。あんたそのダンスもチェックしておきなさいよ? 危険物が

入っているのかどうかね。」

「危険物ってこれは白雪の私物」

「移動中に何か仕込まれたかもしれないでしょ?」

「移動中ってお前武藤が運んでいるのを見ただろうが?」

「武偵憲章第7条『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』。ちゃんと調べておかないと風穴祭りだからね!」

アリアはそう言っただけでベランダに向かっていくがどちらにしてもアラームは無意味だとキンジはそう思っていた。

「・・・お前がいるからな。」

キンジはそういいながら自分の部屋に向かうとそこには・・・。

呼んだかという風に首をキンジの方に向くザビーがいた。

ザビーはロボットであり、最新のシステムが内蔵されているため今回の護衛に伴って見張りを頼むようにした。

キンジは桐ダンスの方に向かうとカナメがキンジの方に近づいてこう言った。

「あの・・・それ手伝いますよ?女の子の私物を流石に・・・。」

「ああ、じゃあ俺が見てるからよろしく頼む。」

それではとカナメが柵を開けると・・・。

「化粧品ですね。」

「・・・大丈夫そうだな。」

そして次は・・・。

「下着ですね。」

「・・・中のチェックを頼む。」

「はい。」

キンジはそれから目を背けるような感じでそう言った。

時々カナメが・・・。

「うわあ、大胆ですねえ。」

「うわ、これなんか殆どスケスケ。」

等と言う言葉がチラホラと出てきた。

食事だああ。

「これはまた……。」

「凄いですねえ。」

その日の夜、キンジとカナメはボケーつと見ていた。

その理由は……。

「た、食べて食べて。『キンちゃん』の為に作ったんだよ。」

食卓にはカニチャーハンにエビチリ、酢豚、ギョーザ、ミニラーメン、何処で買ったんだという鮑のオイスターソース和えまであった。

これらは全てキンジの好物ばかりである。

てんでばらばらなら何回かあったがここ迄出されると逆に良いのかと思いたくなるほどである。

その中で白雪はジャスマンティーを人数分……入れていた。

流石にキンジの目の前ではちゃんとするようだ。

するとキンジはあれっと思いかナメにある事を聞いた。

「そっういやよカナメ、お前今日に備えて準備していなかったか？」

それを聞くとカナメは少し声のトーンを落としてこう答えた。

「実は……これだけあるとなと思つて……未だ冷蔵庫の中です。」

あ、でも朝には出しますよとカナメがそう言うときんじは白雪にこう聞いた。

「なあ、白雪。……カナメのも良いか？こいつ今日に備えて色々準備してたから。」

きんじは白雪にそう頼むと少し考えて……こう答えた。

「キンちゃんが良いなら良いけど。」

白雪はそう答えるとカナメは冷蔵庫から色々出してきた。

「へえええ。」

「ウワア。」

アリアと白雪はそれを見て驚いていた。

蒸した海老にさらつとソースを付けた物や、肉と野菜がたっぷり入った野菜炒め、
昼の蕎麦の残りで作つた吸い物、サザエや魚の刺身もあつた。

「ええと……どうぞ。」

カナメがそう言うときんじは手を合わせてこう言つた。

「いただきます。」

「いただきます。」

そしてカナメ達も同じようにした。

「ふう、食った食った。」

キンジはそう言いながらジャスミンティーを飲みながらそう言った。

目の前ではアリアが「動物奇○天外」の2時間スペシャルを食い入るように見ていた。そう言えばと思い、キンジはアリアにある事を聞いた。

「そう言えばよ、アリア。お前どうして今回の任務受けるって決めたんだ。」
お袋さんはと聞くとアリアはキンジの方に顔を向いてこう言った。

「あんたも知ってるでしょうけど、アタシのママは『イ・ウー』によって冤罪を掛けられてるの。その中に奴がいたから乗ったのよ。」

なるほどなとキンジはそう言うのと疑問が解けてスッキリしたと思った。
だがアリアはこう続けた。

「だからあたしは奴を捕まえるの！ママを冤罪に掛けた『デュランダル』
だけは!!」

すると・・・

パリーオンと言う音が台所に響いた。

「カナメ！どうした？」

キンジはそう聞くとカナメは落として割れた皿を片付けていた。

「すいませんキンジさん。直ぐに直しますから！」

そう言いながらカナメは皿を片付けようとすると・・・キンジも手伝ってきた。

「俺が拾つとくからカナメは掃除機を持ってきてくれよ。」

「わ、分かりました!!」

それを聞いてバタバタとカナメは掃除機を取りに行っている中ある映像が脳内から流れて行く様子が見えた。

「何だったんです？あれは・・・」

そこに映っていたのは・・・。

「あの人は一体？」

自分ともう一人の誰かがそこにいた。

朝のひと騒動。

次の朝……。

「あ、おはよう、遠山君。」

いつも通り飛鳥がご飯を作りに来てきた。

然しその日はいつもとは違っていた。

その理由は……。

「……あ」

白雪がいたからだ。

「え、ええと……おはよう白雪さん。」

「あ……オハヨウ。服部さん。」

お互いぎこちない挨拶をすると飛鳥は机にいるキンジとカナメを見つけた。

「あ、おはよう飛鳥。」

「おはようございます。飛鳥さん。」

それを聞いた飛鳥はキンジに近寄ってこう聞いた。

「と、遠山君どう言う事!! 何でカナメちゃんじゃなくて白雪さんがって・

エエエエ!!何で神崎さんもおお!!?!

「あんなあたしが見えてなかったの?」

少し離れた所でアリアも座っていた。

「ああ、ええとな・・・此れには理由がな・・・。」

キンジは飛鳥に「デュランダル」の事はぼかしながら話を聞かせた。

「ええとつまり・・・白雪さんは今ストーカーに狙われていて、んで神崎さんがそれにボディガードとして立候補したんだけど、条件として遠山君の所が良いといったからここに住むことになったって・・・なにそれ?」

「俺もそう思っているよ。今は神崎と白雪はカナメの部屋を使っているよ。」
それを聞いた飛鳥はある事を聞いた。

「・・・それじゃあカナメちゃんはイマドコ?」

飛鳥はキンジにドアップ（ハイライト無し）で聞くとキンジは目を逸らしたままこう返した。

「・・・俺の部屋。」

それを聞いた一瞬の間静かになり・・・飛鳥はこう言った。

「それってもう完全に新婚生活じゃない?」
ドン!!

それを聞いた瞬間白雪が切っていた大根が真つ二つになった。
飛鳥は頭を抱えて呻くと外から声が聞こえた。

「おい、飛鳥の声が聞こえたな。」

「うむ、何やら騒がしいな。」

「何か・・・あつた?」

「何だかうち、嫌な予感がするっす。」

「そうも言つてられませんか! 私達も見て何があつたのか確かめなくては!」

外から慣れ親しんだ声がすると思つていたキンジはもうどうにでもなれという思いであつた。

そして扉が開くと・・・。

「「何があつた(んだ!) (のじゃ?) (っす!) (の・・・) (んですか!)」」

焔たちが扉を開けて来た後白雪の方を見て・・・。

「「アアアアア!!」」

また大声が木霊した。

「キンジと……相部屋。」

「うううう……羨ましいです。」

紫と雪泉は飛鳥に言った事と同じことを言っただけで、中畑たちは白雪の方を見ていた。

彼女達は嘗て白雪相手に戦った事があるせいかわかり苦手意識を

持っているのだ。

そして白雪がご飯を持ってきてくれた。

「「「「「オオオオオ」」」」」

そこにあつたのはキンジの言う通りに大皿に盛りつけられた和風食材の数々である。

そしてキンジは全員に皿が行き渡るのを確認しているとアリアがこう聞いた。

「ねえさ。あんたらしいもこうやってるの?」

「まあな。何れはチームを組むっていうのも考えてるし多人数で食べたほうが

旨いぞ。」

キンジの言葉にアリアはふうんと言った後キンジは全員に聞こえるようにこう言った。

「それじゃあ全員手を合わせて．．．頂きます。」

「「「「「いただきま〜す。」」」」」」

「い、いただきます。」

白雪とアリアは少し遅れてそう言った。

生徒会室で・・・。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。／／／／／」

唐突ながらキンジと雪泉がこんな感じになっているのには・・・理由がある。

それは少し前の事・・・。

「それでは今日の打ち合わせはここ迄としましょう。」

生徒会長でもある雪泉が来るアドシアードに備えて打ち合わせをしていた。

因みに白雪も生徒会庶務として所属しているため本来ならアリアがいるべきなのだが本人はデュランダルの情報収集に明け暮れているため代わりにキンジがいた。

だが本人はここにあまりいたくなかったのだ。

それは・・・。

「(何で生徒会って・・・男俺だけなんだよ。)」

これが理由である。

最初は男性生徒役員がいたが部費の取り合いにより乱闘した事から女性になつたのだ。

因みに他の面子はと言うと……。

「もうすぐですか、これが終わつたら受験勉強もしておかないと。」

彼女は副生徒会長の「凰燕 斑鳩」所属はアサルト

「そうねえ。私みたいに武偵局の臨時職員つて感じで採用されているからまだマシよね。」

彼女は会計の「釈玄 春花」所属はメデイカ

「全くだ。この忙しきで即売会に出す本が出せん。」

「貴方はいい加減にお面を取つても喋れるようにして下さい。」ぽい

「ああ〜。お面盗らないでください〜。」

そして彼女は生徒会書記の「眞 叢」所属はインフォルマ

以上が生徒会メンバーであるが白雪以外は全員三年であるため自動的に白雪が次期生徒会長になるようだ。

「そう言えば貴方、雪泉ちゃんがよく口にする二年生でしょ?」

春花がキンジを見てそう聞いた。

「貴方の事は3年のアサルトが噂するほどよ。うちにいるメンバーも貴方といつか

やり合いたいって愚痴るほどのな。」

「それに貴方の周りの周りの評判も宜しいですので一度こちらのメンバーの依頼を受けるという事も考えれる程ですしね。」

そして斑鳩もそう言った。

現在のキンジのランクは今もSランクだが最近仕事が少しだが指名任務が減ってきているのでそう言うのは一応できる。

このように上級生の任務に誘うケースは珍しくもない。

そして全員がそれぞれ荷物を持って部屋から出て行った。

キンジは雪泉がまだ残っているのを見てこう聞いた。

「雪泉姉？未だ残るのか？」

「あ、はい。未だやり残している・・・その・・・課題がありましてそれを。」

「そうか・・・遅くならないようにな。」

キンジはそう言って部屋から出て行った。

「・・・さてと。」

雪泉はキンジが帰ったのを確認すると・・・荷物からある物を出した。

「遅い!!」

アリアがキンジ達に向かってそう言った。

「悪い、悪い。会議が長引いたんだ。」

キンジはそう言うのと白雪を連れて合流した。

そして帰ろうとするとキンジはある事に気づいた。

「あ、やべ。部屋に携帯置き忘れた。」

直ぐに戻るとキンジはそう言って会議室にへと向かった。

「♪~~~~~」

何やら会議室で音楽が聞こえる。

「.....!!」

同時に英語のような声が聞こえる。

そんなこととは露知らずキンジは部屋の中に・・・入ってしまった。

そこで見てしまったのは・・・。

「It makes my change at all dramatic!!」

チア服を着た雪泉がポンポンを持って踊っている所だ。

然も・・・振り返る所。

「・・・・・・・・。」

キンジはそれを見て・・・何も言えなかった。

「・・・・・・・・キンジさん。」

雪泉はキンジを見て始めは・・・（。D。）ポカーンとしていた。

だがだんだんと・・・現実が分かってきたのか・・・。

「////////////////////」

顔が真っ赤になり始めた。

「あ・・・・・・・・えーと。」

キンジは取り敢えず何かを言おうとするが・・・それが間違いであった。

「結構綺麗だったぜ。雪泉姉。」

それを聞いた瞬間雪泉は・・・目をウルウルにさせて・・・。

「イヤアアアアアアアア!!」

恥ずかしさの余り悲鳴を上げてしまったのだ。

場所はちゃんと教えるように。

「プププ・・・あの雪泉さんがそんなことを。」

「笑ってやるなよカナメ。俺何かどう言えば良かったのか分からなかったんだぜ。」

夕食後、キンジとカナメは二人でお茶を飲みながら今日の事を喋っていた。

あの後雪泉は何故チア服なのかを説明してくれた。

何でも今年からIS学園も閉会式でのチアに加わるため両校の生徒会長でチアを

しないかと言う話が舞い上がったのだ。

無論雪泉は断ろうとしたが他の生徒会役員（白雪を除いて）によつてとんとん拍子に進んでしまったため断りづらくなり諦めてOKを出したのだ。

それで練習をする羽目になるのだが表立つての練習は本人の羞恥が天元突破するためこっそりと一人でやっていたのだ。

それも放課後の空き教室や先程使っていた生徒会室にてだがキンジに見られてしまい更に悲鳴が原因で生徒会全員に知られてしまったため今はやけっぱちで近くの

ダンススタジオ（イベント以外は使用されない）を使って練習している。

尚叢はこれをネタに本を書いている。

それを聞いてカナメは少し笑っていたのだ。

「さてと・・・風呂に入るか。」

「ああ、どうぞ。キンジさん。」

キンジはカナメに風呂に入る事を伝えて風呂に入った。

現在アリアはレザドからメールが来て夕食後直ぐに出かけて行った。

「もう10時か。」

キンジは風呂から出て体を拭いてズボンを履いてからバスルームを出た。

そしてバスタオルで頭を拭いていると・・・何か足音が聞こえた。

ぱたぱたと廊下からスリッパの音が聞こえた。

「?カナメか?」

キンジはそれを聞いて何だと思っていると・・・脱衣所のカーテン

(1年前の雪泉の騒動の後に付けた。)が思いつきり開いた。

「キンちゃん!?!どうしたの!?!」

巫女装束の白雪が開けたのだ。

「な、何だよ急に!？」

キンジは慌てながらそう言うのと白雪も慌てながらこう言った。

「え、だ、だって、キンちゃんか・・・で、電話で」

「風呂に入ってるのに電話かけれるのか？」

「非通知だったけど『パスルーム』にいるって電話が!」

「それいたずら電話じゃねえのか？」

キンジは慌てている白雪の言葉をバツサリと切り捨てる中白雪はキンジの体をじつと見ていると・・・顔を真っ赤にして・・・土下座した。

「ごめんなさい!!」

それも跳躍しての土下座だ。

何処の銭稼ぎ生徒会会計だと思いたくなるほど鮮やかである。

「ごごごごごごごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!キンちゃんが

お風呂で裸で想像して言えない空想して猫を10匹被ってあsdfgf!」

「お前大丈夫か？」

キンジは白雪の慌てっぷりを見て少しかわいそうな人を見るかのように聞くと・・・。

「おあい!!」

と言って白雪は起き上がったって自分の巫女装束に手をかけた。

「はあ!!」

「キンちゃんも私のお着換え見ればおあいこ!!」

「どう考えたらそうなるんだ!!おい!？」

キンジは白雪の奇行に呆れながらそう言うと言こうから声が聞こえた。

「キンジさん。どうしました?」

「カナメ!白雪を止めてくれ!!」

「へ?・・・何してるんですか白雪さん!!?」

カナメはそれを見て白雪を後ろから後ろ固めた。

「脱ぐ脱ぐ脱ぐー!平気なの!!キンちゃん様になら見られても平気なの!!むしろ見て

ほしいのお!!」

「何言ってるんですか!!それは流石に駄目ですよ!!」

カナメは白雪を何としようとするも・・・叶わなかった。

「放して(; 皿) !!」

「あ」

白雪はカナメを思いつき振り回すとカナメは白雪を放してしまい床に頭をぶつけそうになった。

「カナメ!」

それを見たキンジはカナメを救おうと手を掴み、そのまま倒れてしまった。ドタン!!と音を出して。

「痛たたた。大丈夫か？カナメ。」

「あ、はい大丈夫です・・・」

カナメはキンジを見て言葉を失った。

今自分は少し濡れているキンジに抱き着かれている状態なのだ。

キンジとカナメはお互いの顔が近いことを・・・暫くして気づいた。

「どわ！すまん!!／／／／／」

「いえ、こちらこそ。／／／／／」

キンジとカナメはお互い離れるも先程の状態に幾分か緊張していた。

そして白雪はと言うと・・・。

「・・・・・・・・」

口から半透明な物を出して白目で正座しながら失神していた。

「ただいまー」

するとそこにアリアが袋いっぱい何かを持って来た。

そしてアリアはその現状を見てこう言った。
「・・・ナニコレ？」

空を彩る光を見るために

あの後アリアに事の次第を説明した後アリアが発したのはこの一言。

「・・・あんた保護対象なんだから面倒な事するなあ!!」

これである。

その後は白雪の携帯にキンジの連絡先を勝手に登録させられた。

まあ『アドシールド』が終わるまでと協議の末に決められた。

そして時を経て梅雨開けの情報と同時にある企画が持ち上がった。

『梅雨明け花火大会』？」

キンジは部屋でアリア達とうどんを啜りながらそれを聞いた。

「はい。今日の夜に臨海公園から花火が見れるから座敷船に乗って見に行かないかと

と飛鳥さんから電話で報告してくれたので誘われたのでキンジさんもどうかと

聞かれましたけど？」

勿論白雪さんも良いですよと言ってますのでと付け加えた後白雪の方を見ると

少しオドオドしてこう言った。

「え、えとね。私、星伽の許可なしに外に出ないようになって言われてね。

その……。」

キンジはそれを見ていてある事を思い出した。

星伽の人間、特に女の子は本来神社から出ることも許されない家系なのだ。

キンジは嘗て兄の金一と共にそこに行つたときに少女達が丁度「かごめかごめ」を歌つていた時にそれを見ていた金一はこう呟いたので。

「まるで籠の中の鳥だ。」

それが今だ耳に残つていた。

まるで哀れな動物を見るかのように。

そしてキンジはカナメにある事を聞いた。

「なあ、カナメ。それって誰が来るんだ？」

それを聞いたカナメはこう答えた。

「あ、はい。飛鳥さんと焰さん、夜桜さん、紫さん、華毘さん、雪泉さんですね。」

それを聞いたキンジは白雪にこう提案した。

「白雪、行くぞ。アリアもだ。」

「え！」

それを聞いた白雪は驚く中アリアはこう言った。

「あんた本気？人が多くつてガード出来ないわよ。」

「それなら心配ねえよ。座敷船なら周りに人はいねえし俺達しか乗ってねえし恐らく半蔵さんも乗るから大丈夫だ。」

キンジはアリアに自信たっぷりにそう言った。

アリアは暫く考えるところ返した。

「良いわ。でも責任はあんた持ちよ。」

そう言うのと白雪は慌てながらこう言った。

「え・え・でも。」

「ほら何時までぐずぐずしてるの！さっさと準備するわよ!!」

アリアは白雪を引きづって何処かへと向かった。

それを着ていたキンジとカナメはお互いに顔を見て苦笑いをした。

そして夜、キンジ達は河に集まっていた。

白雪は白の、アリアはピンク色の浴衣を着ていた。

そしてキンジは黒の浴衣を羽織っていた。

暫くすると少し向こうで声が聞こえた。

「遠山く〜ん。」

飛鳥達も浴衣を着ていた。

飛鳥は緑、焔は黒、夜桜は青、華毘はオレンジ、紫は紫陽花の華が彩られた紫、雪泉は青と白と着ていた。

「?・・・カナメは?」

キンジは全員を見てカナメはと聞くと雪泉が後ろ向きでこう言った。

「さあどうぞ。」

そこにいたのは・・・白百合の華が彩られた黄色の浴衣を着ていたカナメがそこにいた。

髪は少し結わえた後ポニーテールみたいにして纏めていた。

「ど・・・どうでしょうか?」

カナメはキンジを見てそう聞くと当の本人は・・・。

「・・・・・・・・・・。」

ポカーンと見惚れていた。

「あの・・・キンジさん?」

カナメはキンジを見てどうしたのかと聞くと焔がキンジの背中を叩いてこう言った。

「ほらキンジ!!何とか言ってみな!!」

「あ・・・ああ。」

キンジは意識を取り戻してもう一度カナメを見てこう言った。

「その・・・綺麗だなんておもって。」

「ふえええ!!」

キンジの言葉にカナメは顔を赤くして慌てている所を焰たちは生暖かい目で
見ている中座敷船がやってきた。

「じっちゃん!!」

「おお、飛鳥来たぞ。皆も乗りなさい。」

「!!!」お世話になります!!!」

キンジ達は半蔵を見てそう言うと言つて半蔵はうんうんと言つて全員が乗り込んだところ
でこう言った。

「それじゃあ・・・出航じゃあ!!」

花火を見て

「「「「玉屋ー!!」」」」」

キンジ達は屋形船で花火を見ていた。

無論デュランダルの事も考えて警戒しているがそれはそれ、これはこれである。

白雪も今回は楽しんでいた。

「ねえキンちゃん、覚えてる？青森の花火大会？」

白雪は花火を見ながらキンジにそう聞いた。

キンジはそれを聞くところ答えた。

「ああ、覚えてるぜ。あの後俺滅茶苦茶怒られてお前土蔵に数日間

閉じ込められたな。」

「・・・遠山君。そんなことしてたの？」

キンジはその後についても答えると飛鳥はそれを聞いて呆れていた。

「あの時も・・・キンちゃんが、私を星伽から出してくれた。」

「いや結果的に出したの Aria だろ？」

キンジは Aria を見てそう言った。

そのアリアも花火を見てご満悦であった。

「それでもね……私からしたらキンちゃんが好きつけを作ってくれたから……今日はありがとう。」

白雪がキンジに向かって笑顔でそう言った。

「そうか。」

キンジも満更でもないような表情でそう言う……雪泉がキンジにこう言った。

「ほらキンジさん、白雪さん!!!そろそろ最後ですよ!!!」

そう言うて窓の方を見るとファイナーレなのか今までの中で大きな花火が打ち上げられた。

その中で……携帯が鳴った。

「あ、ごめんなさい。」

白雪の携帯であったようだ。

「ごめんねキンちゃん。ちよつと後ろにいるけどメール見るだけだから。」

「分かった。だけど俺の背中合わせでいろよ。」

「うん。分かった。」

キンジは白雪の言葉を聞いてそう言う自身と自身の背中の近くにいることを

確認した。

そしてそのメールを見た白雪の顔色は・・・少し蒼くなっていた。

その後白雪は船から降りてキンジの家に帰った後「少し疲れたからもう寝るね。」と
言って部屋に入った。

その時キンジは失念していた。

あの時のメールの事を聞いていれば・・・あのような事にはならなかったかも
しれない。

そして海際にある何処かの雑居ビルの2階にある居住部屋。

そこではある人間が勝手に・・・住み込んでいた。

そこには数多の写真と『アドシアード』に関する資料、学園島の各ブロック毎の
簡単な見取り図などが所狭しとあった。

そしてそこにいる人間がずっと同じ写真を見ていた。

それはアングル毎であるが・・・カナメの写真があった。

ご飯を食べている所。

洗濯をしているところ。

買物をしている所。

色々なアングルの写真があった。

「ああ姉さん。いつ見ても良い笑顔ね・・・こいつさえいなければ。」

そう言いながらキンジと仲睦まじい様子で笑っているカナメの写真を見ると・・・強いナニカを感じた。

「なんでそいつに見せるのよ姉さん。その笑顔はいつも私に見せてくれるのに何で？何でナンデナンデナンデナンデナンデソynaツニミセルノヨ!!」

そう言いながらその人間は机を叩いた後ダーツボードを見た。

そこには幾つも串刺しになり、穴だらけになったキンジの写真があった。

「待つてね姉さん。直ぐにそいつを殺して・・・ムカエニイクカラ。」

そう言いながらダーツをキンジの写真に当てると・・・その写真が凍り始めたのだ。そしてその人間はある物を見た。

それぞれ色違いであるが・・・同じ槍と剣があった。

「さあ・・・始めましょう！私と姉さんの再会ドラマを!!」

「アハハハハハハハ!!」

そう言いながらその人間は狂ったように・・・笑い出した。

新たな愛車

そして時は過ぎて・・・。

『アドシアード』が始まった。

キンジは現在武藤たちと一緒に武偵校にて機材の確認をしている中武藤がキンジを呼びつけた。

「おおいキンジ！お前に届け物だぜ。」

「？俺に。」

キンジは何事だと思っている中そこに向かった。

周りには『アドシアード』に備えて幾つもの部品や機材が所狭しと並んでいる中キンジは武藤がいる場所にへと向かった。

「これなんだけだよ。」

そう言つて武藤が指さすとそこには巨大な・・・箱があつた。

「何だこれ？」

「さあな。まあお前に送られる奴だつてのはあのタグに括られてんだよ。」

そう言つとキンジはそのタグを見てあつと思つた。

『ZEX』

それは前に防人から聞いたのだが国連軍のペーパーカンパニーであり表向きは「御剣重工 篁技研」の下部組織として存在しているという設定の会社である。

キンジはそれを見て確信した後箱についていた指紋認証機に指を押し付けると声が聞こえた。

『遠山キンジ様。特定しました。』

それが聞こえた瞬間箱がぱかっと開いた。

「うおお!!」

武藤は驚いて下がるとそこにあつたのは……。

「凄ええ!!最新型のバイク『αEXAS』じゃねえか!!」

そこにあつたのは黒と黄色で塗装されたバイクであつた。

するとそれを見た武藤は興奮気味で説明口調で喋り始めた。

「こいつはトランスフォーマー型じゃねえのに最新のテクノロジーを搭載した奴じゃねえか!馬力は10300!燃料は内部にあるプラズマイオン発生器で半永久的!!」

然も武装を取り付けられるって言う国防軍ですらまだ全体配備が終わってねえレアものじゃねえか!!」

武藤はそのバイクの周りをきよろきよろしながら見ている中キンジはそれに

ついている手紙を読んだ。

『これをお前にやるよ。お前自転車ぶつ壊れて今徒歩って聞いているしこれライダーシステムと連動することも出来るから便利だぜ。』って……これ高そうだな。」

キンジはそう思い乍らバイクを見るがまあ良いかと思いい封筒に同梱されている鍵を
持った。

まあ実際これ軍用だから買うともなれば億単位になるのだが。

キンジはバイクに一応跨ってみると中々座り心地が良さそうであった。

そしてキンジは取り敢えず何処かに置かなきゃなと思つている中携帯が鳴った。

すると武藤と不知火も同じように携帯を取り出した。

どうやら武偵校の全体周知であった。

キンジは取り敢えず携帯を取り出してメールを開くとそこに

書かれていたのは……。

『ケースD7』

それは『アドシアード』中に起きた事件だが事件性があるのかまだ分からない為
一部の関係者のみに送り『アドシアード』は続行するというものであった。

何だよとキンジが思っている中キンジは咄嗟に白雪の携帯に電話を入れようと

するも。

「くそっ！繋がらねえ!!」

キンジはもう一度つなげようとするともたまたメールが来た。

「白雪か!？」

キンジはそう思つてメールを見るとそれは文章ではなく画像であつた。

「何だこれは?」

キンジはそう思いながらその画像を見るとそこに映つていたのは……。

「カナメ!」

キンジはそれに映っている少女がカナメだと気づいた。

さらに続けて見ると……。

「白雪!!」

何故白雪がと思つている中衝撃的映像が見えた。

それは……。

白雪が剣の柄を使ってカナメの首筋に当てた瞬間であつた。

!!

キンジはそれを見て驚くとそのまま白雪はカナメを裏に停めていた小さなトラックに乗せ込むとそのまま何処かに行つてしまった。

それを見たキンジは眩暈しそうであった。

幾ら白雪がカナメを気に入っていないかとはいえここまでやるかと思っ
ている中
またメールが来た。

それに書かれていたのは……。

『この少女を返してほしくば第9排水溝の蓋を外して来い。』
それだけだった。

「!!……カナメ!」

キンジはそれを読んだ後バイクに跨った。

「お、おいキンジ!!」

武藤は何事だと思う中キンジはαEXASを動かした。

普通のバイクみたいに排気ガスの音が出ることなくスムーズに起動した。

「(待ってろ!カナメ!!)」

キンジはそう思い乍らバイクを発進させた。

自らが帰る場所にいる少女を取り返すために。

大切な人の為に。

「ごめんね。キンちゃん。」

トラックを運転しながら白雪はそう呟いた。

トラックの荷台には失神したカナメが寝ていた。

正直言えばこんな事したくなかったのだがせざるをえない理由があるのだ。

そして白雪はある場所にへと向かった。

「ここだね。」

そこは「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた看板が立てられていたが白雪は

そのままトラック每入っていった。

そこは学園島の武器、弾薬が収められている通称「地下倉庫（ジャンクション）」

である。

「ここだな。」

キングはそう言ってバイクから降りようとすると・・・何かが上空からやってきた。

「ザビーー！」

それはキンジの変身ツールでもあるザビーであった。

ザビーは何かを訴えるかのようにキンジの周りを飛んでいた。

「お前も来たいのか？」

それに対してザビーはこくこくと首を振っていた。

そしてキンジはザビーを連れて排水溝に向かった。

そこで目にしたのは……。

「一度開けられたな。それも無理やりに。」

キンジはそう言いながら排水溝の蓋を開けて中に入った。

「ここから何処に向かうんだ？」

キンジはそう思いながら武偵手帳にある液晶画面を操作して調べると出てきたのは。

「……ジャンクションじゃねえか。」

キンジはそう言いながら冷や汗を掻いていた。

もしここで何かを起せば大惨事になると分かっているのだ。

キンジは何があつたんだと思いつながら直進で進んだ。

学園島の地下は船のデッキみたいな多層構造になっており、キンジは排水溝の出入り口にある三重の鉄の扉を開けて中に入った。

そこには階段がありキンジはそのまま駆け下りて立ち入り禁止区域に繋がる

エレベーターに向かった。

そしてエレベーターに入って緊急用のパスワードを打ち込むが・・・。

「くそっ！動かねえのかよ!!」

キンジはふざけるなどと思い扉を叩くとザビーがエレベーターにある配線板の扉を開けた。

そして配線をザビーは口で加えると・・・。

ピンとエレベーターが動き出した。

「これって・・・そういやお前、理子の時も調べてたって防人さんが言ってたな。」
キンジはありがたうなと言うとザビーは只ブーンと羽音で答えた。

そしてそのままエレベーターで最深部に向かった。

キンジはエレベーターから降りて先ず資料室を調べてみると・・・暗かった。

あるのは非常用の赤い電灯だけであった。

次に地下駐車場に入った。

大抵の武器輸送車はここで待機しているのだ。

そしてその中に・・・白雪が使ったと思われるトラックがあった。

キンジはそれを見つけると周りの車を壁代わりにしながら近づいて・・・

ザビーが初めに窓をぶち破った。

そしてそれに続くかのようにキンジも突撃するも・・・。

「いない。」

運転席には白雪の姿が無かった。

そして荷台を開けるも・・・カナメもいなかった。

キンジはさらに奥に進むことにした。

ここから何が起こるのかも知らずに。

真実の闇

キンジはザビーを肩に乗せて走って行く中、ある部屋にへと向かった。

そこは……。

「後はここだけか。」

キンジが着いた場所は弾薬が管理、保管されている大倉庫の扉の前である。

「粗方調べて残ったのがここだけど……行くしかないな。」

キンジはそう言つて銃を収めて、バタフライ・ナイフと脇差を出してゆつくりと扉を開けて中に入った。

キンジは潜入時には音が出やすく使えないバタフライ・ナイフの刀身を

鏡代わりにして進んだ。

そしてしばらく歩いていっている中声が聞こえた。

「誰かいるな。」

キンジはそう言つて少しずつ近づくと……それが分かった。

「(白雪!!)」

キンジは巫女装束の白雪を見つけると足元にある誰かを見つけた。

「カナメ!!」

キンジはカナメを見つけるや否や助け出したいという衝動を耐えて、様子を見ようとしていた。

「デュランダル。貴方がどうして私を欲しがるのか分かったけど何で彼女もなの？超偵でもない一般人なの？」

白雪がキンジから見ても不規則に並べ替えられている火薬庫の奥で誰かと話していた。『彼女は貴方が思っている以上に重要だからよ』

「(ボイスチェンジャー!!)」

キンジは機械的に修正された音声を聞いてそう確信した。

「それと約束を覚えているわね。」

『勿論だ。彼女と君を連れ去れるなら彼を……遠山キンジを生かしてやろう。』

「(どう言う事だ!?)」

キンジは何のことだと思っている中その声の主はこう続けた。

『然し君も悪女だねえ。虫一匹も殺さない顔をしているくせに男の周りにいる女を遠ざけたいだけで私に協力するなんて。』

「!!違う! 私はキンちゃんの安全の為に貴方を!!」

『あらあら何言ってるんだ? 君は夜な夜な彼女達を呪い殺そうと幾つもの呪術法を

学んでいることもお見通しだよ。』

「違う違う!! 私はただキンちゃんの為と思って!!」

『それだけじゃない。君は彼女の写真を切り刻んで殺す所を何度も何度も

想像してるんだろ? 成程成程。優秀な人間ほど闇は深いと言うのは本当だねえ。』

「イヤ!! もうやめて!!」

白雪は頭を振りながら否定するも彼女の言葉にドンドンと追い込まれていることに気が付いてない。

『まあ約束は守るさ。．．．彼がここにいなければね。』

「へ?」

「そこまでだ。」

声の主の言葉に白雪は声のあつた方向を見た。

そこにいたのは脇差を構えていた．．．。

「デュランダル。お前を誘拐、犯罪教唆の現行犯で．．．そして、星伽 白雪。

お前を誘拐の容疑で逮捕する。」

遠山キンジがそこにいた。

救いたいと願う事の何が悪い。

「逮捕って・・・キンちゃん何言ってるの?」

白雪はキンジを見て驚いていた。

何故ここにいるのか? 如何して自分を逮捕するのか?

もう訳が分からなくなっていたのだ。

然しただ一つだけ分かるとすれば・・・。

「まさか!?!」

白雪はデュランダルの方に顔を向けようとした瞬間、首元に冷たいナニカが当たった。

「動くな、白雪。」

キンジが白雪の首筋に脇差を当てていたのだ。

「俺の質問に全部答えてもらうぞ。」

「き・・・キンちゃん、これは。」

「黙れ、俺の質問にだけ答えろ」

ここからは分からないが今のキンジが白雪に対して見せる視線は仲間ではなく

敵としての目で見ていた。

キンジは白雪の言葉を一瞬で斬り捨てるとキンジはある質問をした。

「何時からデュランダルが接触してきた？」

「……この間の花火の時。」

「あの時か!!何で言わなかった!?!紫に頼んで逆探知も出来たぞ!!」

「……だって……だって言えば殺すってメールで!」

「ああいう手合いは成功してもしなくても殺すタイプって武偵校でも初期に教わるぞ!!」

キンジは大声で荒げながらそう言う足元にいるカナメを見てこう言った。

「とにかく、外に戻ったら今回の事を報告させてもらおう。それと未成年略取の現行犯としてもしよっぴくからな。」

キンジは白雪に警告しながらカナメをおんぶしようとした瞬間に……
煙がキンジ達の前を覆った。

そして何かが来るのをキンジは感じた。

「ちい!!」

避けて刺さった所を見るとそこにあつたのは湾曲した刃物。

フランスの銃剣「ヤタガン」に装備されるサーベルである。

そして何処からか声が聞こえて煙がなくなった瞬間・・・カナメがいなかった。

『遠山キンジ、彼女を助けたければ上に来るがよい』

何処からか声が聞こえたキンジは辺りを見回していると・・・。

「あそこか・・・！」

キンジは天井の扉が一つ空いているのに気づいた。

このジャンクションは大抵が無人で武器の受け渡しも全自動なのだがメンテナンスとして幾つかの出入口がありその一つが開いていた。

キンジはそこに向かおうとすると・・・。

「ダメ、キンちゃん！行っちゃ!!」

後ろから白雪がキンジを止めようとするもキンジは走ってそこに向かった。

「キンちゃんダメ！武偵は超偵には勝てない!!」

だがキンジはその警告を無視してでも向かった。

・・・守りたいと決めているから。

「ダメ！キンちゃん行かないで!!キンちゃん~~~~ん~~~~!!」

「(全く俺は武偵失格だな。)」

キンジは心の中で自分を小ばかにしていた。

武債は何があつてもクライアントの為に行動し、利益を守るために行動しなければいけない。

まあ例外があるとすれば……。

「やっぱり俺はあんたの弟だよ。兄さん。」

遠山 金一である。

貧しい国や人に対して無償かおにぎり一個でどんな仕事も引き受けるという文字通り正義の味方を体現したような存在である。

そして今のキンジは……。

「無料で仲間を守るために戦うんだからな。」

金一が全てを守るならキンジはこの手で救えるならそれを全て救うという……
やはり正義の味方のような事をしようとしていた。

「待つてろよ、カナメ！」

キンジはそう言いながら上に向かうとそこにあつたのは……。

「ここは確か学園情報部のHPCだったな。」

何十台もあるスーパーコンピュータの冷却室である。

結構冷えるがそれでも銃が使えるからまだましだなと思いつつ銃を出そうと

すると……。

「へえ、一人で来るなんてツイてるわね。」

「!!」

女性の声があったのでキンジは銃は諦めて持っていた脇差を声のある方向に構えた。

「全く箱入り娘を操るなんてどうとでもなるわね。」

コツ、コツと足音がした。

「それに……大切な人に出会えた。」

近づくにつれて姿が露になった。

「後は。」

黒いドレス。

「あんたを」

銀色の手甲とティアラ

「コロセバ」

足元にまで届くほどの銀色の髪

「すべてが上手くいく。」

「!!」

キンジはその女性の全容と顔を見て驚いた。

「なんで」

少しきつい目つき

「何で」

然しその顔つきはまるで

「ナンデ」

鏡写しのように

「何でそんなに」

似ていたのだ。

「カナメに・・・似てるんだ!!」

救おうとした女性に・・・。

「初めまして、遠山キンジ！」

遠山カナメに・・・そっくりだったのだ。

その記憶は果たして戻して良い物か？

「・・・ううん。」

キンジが来る少し前、カナメは目を覚ました。

辺りを見ると大きな機械が至る所にあつた。

「ここは、一体・・・？」

カナメはここが何処なのかと思ひながら記憶を辿つていた。

「確かあの時・・・白雪さんが来て・・・それから・・・何かが首元に!!」

カナメは全てを思ひ出した瞬間・・・何処からか声が聞こえた。

「久しぶりねえ。姉さん。」

「!!」

カナメは誰かと思ひそれを見るとそこにいたのは・・・。

「わ・・・私？」

自分と髪の色以外全てそっくりな黒いドレスを着た女性であつた。

「・・・やっぱり忘れてるのね。」

「何の事です？」

その女性の言葉にカナメが問いかけると女性は人差し指を頭に添えてこう言った。

「大丈夫。次に目を覚ましたら全て思い出すから、それまで寝ててね。姉さん♡」

そしてそれを着た瞬間カナメは・・・再び失神した。

「さてと・・・あの男を殺せば全部上手くいくわ。」

そう言つて少女は近くにあつた黒い槍と剣を携えた。

そして前回の終わりに繋がる。

「初めまして、遠山キンジ。」

キンジはその女性を見て驚いていた。

髪が銀髪である事以外カナメと瓜二つなのだから。

「お前は一体」

「あたしはあんたが『カナメ』って言ってる女の双子の妹よ。」

キンジの言葉に少女は素知らぬ顔で明かすところ続けた。

「そしてまあ貴方達が名付けた『デュランダル』の片割れよ。」

「片割れ・・・だと・・・じゃあまさか『カナメ』も」

「姉さんをそんな俗な名前で呼ぶな汚らしい。」

キンジの言葉に少女は吐き捨てるように言うと少女は持っていた槍を構えてこう言った。

「さあ始めましよ、遠山キンジ。私達の再会を貴方の死で飾ってあげるわ。」
そう言うのと少女はそのままキンジに突進してきた。

「剣道三倍段」を知っているか？

剣で槍相手に戦う際には相手が槍の初段に対して剣を使う方はその三倍の段を持つていなければ互角に戦えないという事だ。

そしてそれは現代でも変わらない。

「くそっ！」

「そらそら！手も足も出ないのかしらあ!!」

キンジは如何にか耐えているが彼女の槍さばきはとてもではないが対応することが難しいのだ。

槍とは突くだけではなく振り下ろし、叩き、いなすことが出来る武器なのだ。

無論剣でも出来るがリーチの長さのより防御領域を作れるという利点があるのだが槍はその反面密室空間ではその長さにより振りまわす事が出来ないという

愚点があつたのだがそれを彼女は上ではなく左右で回すことでそれを可能としたのだ。

そして遠心力を活かすことで打撃力を倍増させているのだ。

キンジは何とかしなくてはと思いつながらもその攻撃を対処していた。

だがやはり剣だけでは対処が難しい。

キンジは一度HPCの裏に隠れて考えていた。

どうすればと思う中キンジはある事を思いついた。

然しそれは下手すれば自分の身の危なさを助長させてしまうのではないかと

思っていたがキンジはこれ以外思いつかなかつた。

「いっちょやるか。」

キンジは思ったが吉日だと決心してそれを仕掛けるタイミングを待ち構えていた。

「何処に行ったのかしらあ？かくれんぼしてもここからは逃げれないわよお。」

少女は嘲笑いながらもキンジを探していた。

そしてキンジは懐からある物を出した。

そしてそれを少女に投げた。

それは・・・。

「なにこれ？・・・くう！」

少女の視界が突如に煙でかき消された。

「煙幕なんて・・・二番煎じも良い・・・!!」

少女は侮辱するような態度でそう言うとか何かが来るのを煙の動きで感じ取りそれから避けた。

「ナイフ!!・・・いえこれは。」

それは彼女は知らないようだがそれは苦無と呼ぶ飛び道具である。

そして彼女は周りを見渡そうとすると・・・下から何かを感知した。

「まさか!!」

それは脇差を口に加えたキンジがそこにいた。

「(槍の弱点はそのリーチの長さ由縁の短距離を想定していない設計思想!

これなら!!」

キンジはそう思いながら脇差を口から離して手に持って少女に迫った。

「これで!!」

キンジは勝利を確信していた。

この時までは・・・。

「レティシア!!」

突如そう言う声が聞こえた瞬間・・・キンジの後ろから何かが来るのを感じ取った。

「ちい！！」

キンジはすかさずそこから離れてもう一度HPCの裏に入ろうとすると・・・ヤタガンのナイフがキンジの行動を阻んだ。

「くそっ！」

キンジはそう言いながら煙幕の向こうにいる誰かを見た。

そして煙幕が晴れるとそこにいたのは・・・一人の女性であった。

紫色のドレス

銀色の手甲とティアラ

白色の槍と剣

そして何よりも・・・鮮やかな足元まで届きそうな金髪

それをキンジが見た瞬間・・・その人間が誰なのかが一目で分かった。

イヤ・・・分かってしまったのだ。

だってそれは・・・初めて彼女と出会った時に着ていたのだから。

「何でお前が・・・いるんだよ？」

自分が初めて自身の力で救おうと決めていた彼女

「なあ・・・答えてくれよ？」

そして何より・・・孤独を癒してくれたヒト

「何でここにいるんだ『カナメ』!!」
遠山カナメが武器を持ってそこにいたからだ。

心砕けかけ。

今から数分前。

「．．．．．思いだした。」

カナメは虚ろな表情で目覚めた。

然し次の瞬間彼女は．．．

「アアア．．．私は．．．ワタシハ．．．なんてことを。」

泣き出したのだ。

うつ伏せになり両手は顔を隠すように泣いていた。

自分の本当の名前。

自分の与えられた名前。

自分の片割れとの記憶。

そして．．．自分の罪を。

記憶を思い出したと同時に嘗ての自分が見て見ぬ振りをしてきた記憶も蘇ってしまったのだ。

そして次に思いだしたのは．．．。

「・・・キンジさん。」

キンジに関わる記憶であった。

仕事で何日か家を空けるときは飛鳥達が代わる代わる勉強や遊び相手になってくれたり買い物をしていったこと。

仕事が無い時は休みになれば色んな所に連れて行ってくれたこと。

あの家で過ごした楽しい記憶が次々と浮かんできた。

然しそれも終わりののだとカナメは思ってしまった。

「もう・・・戻れない・・・こんな罪人を・・・キンジさんは・・・出来ない！」
カナメは途切れ途切れとはいえ、もう戻れないと思ってしまったのだ。

そしてカナメは目の前にある服を見た。

それは嘗て自分が嘗て使っていた服。

それを取った瞬間カナメは手を強く握りしめてこう言った。

「もう戻れないのでしたら・・・自分の手で。」

そう言つてカナメは服を脱ぎ捨ててそれを着た。

もう・・・後戻りできないと覚悟を決めるかのように。

「何でここにいるんだ!!カナメ!!」

キンジはカナメを見てそう言った。

初めてであった服を着て。

「あの服は確か家に置いて・・・ここまで計算尽くって事か!!」

キンジは銀髪の女性に目を向けてそう思っていると彼女の顔は・・・

「ああああ、やっぱりそれでこそ姉さんよ。」

恍惚の表情を浮かべていた。

銀髪の女性はそう言いながらカナメに近寄っていくとカナメは銀髪の女性の頭を

撫でながらこう言った。

「よく頑張りましたね、レティシア。・・・今まで傍にいらなくて御免なさい。」

「ううん、良いの。姉さんが生きてるって分かってたから・・・今いてくれるだけで良

いの!」

そう言いながら女性、レティシアがカナメを抱きしめ乍らそう言うのとカナメは

キンジを見てこう言った。

「キン・・・遠山キンジさん、貴方にも感謝を。あの時傷ついた私を介抱し、

名を与えてくれたことに心からお礼を。」

カナメはキンジを見て何かを言いかけた後に社会儀礼としての言葉を出した。

「・・・何・・・言ってるだよ・・・俺達にそんな他人・・・行儀・・・」

キンジは言葉を詰まらせながらそう言うところ続けた。

「なあ・・・どうしたんだよ・・・何でこんな・・・」

「何か言ってくれよ!!カナメ!!!」

キンジは大声を上げ、振り絞るかのようにそう言うときカナメは一呼吸おいてこう言った。

「私の名前は『カナメ』ではありません。」

「・・・へ」

「私の名前は・・・『30代目 ジャンヌダルク』。オルレアンの聖女

『ジャンヌダルク』の子孫です。」

歴史の真実。

ジャンヌダルク

15世紀、イギリスとフランスによる100年戦争の際、フランス勢として戦線に参加。

ジルと言う軍師を率いてその旗のもとに同志たちを勝利に導いた聖女。

だがそのブルゴーニュ公国軍の捕虜になった後イギリスに人質としてイギリスに引き渡され、その後異端審問に掛けられて最後は……。

「若干19歳で火刑にされた……でもおい……それって……
どう考えても!!」

年齢に異常が出るぞとキンジはそう思っていた。

19歳で死んだジャンヌダルクに子供がいたのなら捕虜になる前……つまり1年前には既に子供がいたという事になっていなければならぬ。

さらに子供がある一定までに大きくなって且つ国外から逃げていなければならぬ。

そう考えるならジャンヌダルク派の人間の手を借りたとしても彼女が歴史の表舞台

に立つ前から子供がいたという事となる。

詰まるどころを言えば日本で言えば元服になったばかり、つまり15歳以前に出産していたこととなる。

それを考えていたキンジであったがレイシアから笑い声が聞こえた。

「まあ普通ならそう思うだろうけど一つ訂正があるとすれば・・・あれは影武者よ。」

「・・・影武者・・・なら納得がいくな。」

ジャンヌダルク程の大物ならば方が一に備えて影武者を用意することも考えられる。それもキリスト教でジャンヌダルクと同じくらいの年齢ならなんとか見繕えるからだ。

するとカナメ・・・いや30代目ジャンヌダルクはこう続けた。

「我々一族は聖女であると同時に魔女としての側面を併せ持ち、歴史の中でその力と知略を持つて今迄存在し、それは『イ・ウー』に入っても変わらずでした。」

その言葉にキンジはあることを考えた。

「なら、超偵を狙うのはその力を」

「そ、使いこなすためヨ。まあNo.2の命令でもあるけどね。」

キンジの言葉にレイシアがそう答えた後30代目ジャンヌダルクはこう言った。

「ですが事件が起こりました。ある超偵を船の上で捕まえる際に私はその超偵の力により、海に投げ出され．．．記憶を失いました。」

「それがあの時か．．．。」

はいと30代目ジャンヌダルクがそう答えるとキンジはそう言えばと思った。

デュランダルを調べていた際、その前日に超偵の一人が行方不明になったという情報がある事に。

すると30代目ジャンヌダルクはキンジにこう言った。

「あれから私は記憶がない間．．．楽しかったです。」

「．．．カナメ．．．。」

「皆さんと食事し、笑って、泣いて、怒って、それでも皆さんが．．．

貴方が笑っていた。」

その時30代目ジャンヌダルクがキンジに見せた笑顔は．．．カナメと同じ笑顔であった。

「だけどそれも今日で終わり。」

30代目ジャンヌダルクはそう言いながら槍を振りかざしてこう言った。

「貴方を倒して．．．星伽 白雪を貰い受けます!!」

「カナメ．．．!!」

キンジは30代目ジャンヌダルクを見て悔しそうな顔で脇差を持ってこう言った。
「俺がお前を……止める!!」

戻れない。

キイーンー

ジャンクシヨンのHPCの部屋にて剣戟の音が聞こえる。

片方は足にまで届くほどの金髪を結わえた女性が槍を振り、突いていた。

ガキイーン!!

もう片方は黒髪の青年が脇差片手にその攻撃を凌いでいた。

キンジと30代目ジャンヌダルクが戦いあっていた。

「はあ!!」

「くうー!」

30代目ジャンヌダルクの攻撃にキンジは防ぎながら戦っていた。

「如何したのですか遠山キンジ!?それが貴方の全力ですか!!」

30代目ジャンヌダルクは弾かれた槍を振り下ろしてそう言った。

「俺はお前とは戦いたくない!!」

キンジはそれを避けながらそう言うのと30代目ジャンヌダルクはこう返した。

「ふざけないでください!私達は敵同士!!ここでどちらかが倒れる以外に終わりはない」

いのです!!」

30代目ジャンヌダルクはそう言いながら槍を振り回し、キンジを遠ざけた。

「さあ立ちなさい遠山キンジ!何時までも避けきれれると思ったら大間違いですよ!!」

30代目ジャンヌダルクはキンジに向かって大声でそう言った。

「・・・カナメ!」

キンジは振り絞るかのようにそう言うと・・・頬に何かが伝っていくのが分かった。それを拭うとそれは・・・温かい水であった。

何でと思いキンジは30代目ジャンヌダルクを見て・・・ある確信を持った。

そしてキンジは脇差を・・・捨てた。

「何してるんです!?!それで勝てると思ってるんですか!?!」

30代目ジャンヌダルクはキンジの行動を見てそう言うがキンジはそれを聞くことなく・・・歩き始めた。

「来、来ないでください!」

30代目ジャンヌダルクはキンジにそう言いながら少しだが・・・下がって行った。

「姉さん?」

それを見たレティシアが加勢に出ようとした瞬間、30代目ジャンヌダルクが

こう言った。

「来ては行けませんレティシア！これは私の戦いです!!」

「・・・姉さん」

レティシアはそれを聞いて足を止めるがキンジは尚も30代目ジャンヌダルク目掛けて歩き続けた。

「来ないで・・・コナイデーロー!!!」

30代目ジャンヌダルクはそう言いながら槍をキンジ目掛けて突くとキンジは・・・それを楽に躲した。

「!!」

30代目ジャンヌダルクはあまりの事にへ？と思っているとキンジは

30代目ジャンヌダルクを見てこう言った。

「お前がどこの誰だろうが関係ないし、俺もお前がどんな奴だったなんて分からねえけど一つだけ言えることがある!!」

そしてキンジは30代目ジャンヌダルクの目と鼻の先にまで近づいてこう言った。

「・・・何で泣いてんだよお前。」

「・・・へ？」

30代目ジャンヌダルクはそれを聞いて手甲越しに自分を見ると・・・泣いている自

分がそこに映っていた。

「・・・何で・・・どうして・・・私何で・・・泣いて」

30代目ジャンヌダルクは何でも思っている中目を拭おうとすると・・・
キンジが30代目ジャンヌダルクの顔を両手で固定してこう言った。

「本当はお前だつてこんなことしたくなかつたんだろ！本当はこう思つてんじやねえのか!」

『タスケテ』つて」

「!!」

キンジの言葉に30代目ジャンヌダルクは目を開くとキンジはこう続けた。

「俺はお前のそんな泣き顔見たくねえ!」

笑っている彼女の顔。

「俺はいつも通りのお前でいて欲しい!!」

家にいるときに見せてくれる幾つもの表情。

「俺は!!!・・・心の底からお前を守りたいんだよ。」

キンジは振り搾るようにそう言った。

「私は・・・ワタシハ」

30代目ジャンヌダルクはキンジの言葉を聞いて心が揺らぎ始めた。

自分は幾つもの罪を背負った悪女。

全てを断ち切つてここから去ろうと決意したのに……

「戻りたい……私だつて出来る事なら……でも！」

30代目ジャンヌダルクはキンジを突き飛ばすと剣を引き抜いた。

「貴方が見ているのは『カナメ』の私！今いるのは……30代目ジャンヌダルク！

私達は敵同士になり、そして……もう戻れない。」

30代目ジャンヌダルクは泣きながらこう続けた。

「もう戻れないんです！過去は変えられない!!そして私は貴方を倒す!!

そして私は……ワタシハーハー!!!」

素晴らしいながら30代目ジャンヌダルクは剣をキンジに向こうとするとキンジはそれを……真つ向から受けた。

グサツ。

「……え……」

30代目ジャンヌダルクはその行動に何故と思つた。

槍の時のように何故よけなかつたのかと思つていと……

キンジは30代目ジャンヌダルクの頭を撫でながらこう言つた。

「確かに……過去は……変えられないけど……未来なら……未だ……

間に合うだろうか？」

「俺さ．．．兄さんが．．．死んだ．．．時．．．お前が．．．

いてくれたから．．．強がれ．．．たんだぜ。」

「カナメ．．．いや．．．ジャンヌ．．．帰ろうぜ．．．俺達の．．．い．．．え．．．
に．．．。」

キンジはそう言いながら．．．30代目ジャンヌダルクに倒れ込んだ。

そして彼女は．．．剣から伝ってくるキンジの血の温かさが来たと同時に．．．

30代目ジャンヌダルクは．．．。

「イヤ．．．イヤ．．．。」

彼女は．．．

「イヤアアアアアアアア!!キンジサアアアアン!!!」

．．．『カナメ』に戻った。

その頃の下の階。

今から数分前。

「いい加減にどいて！キンちゃんが大変なのよ!!」

ブブーン！ブブブブブブーン!!

白雪は未だザビーをどかすことが出来なかった。

恐らくキンジの命令によるものだろうがザビーはそれをちゃんと実行していた。

一方の白雪も早くキンジの所に行きたいという思いでやきもきしていた。

そんなことが暫く続く中……。

「白雪!!」

部屋の外からアリアの声が聞こえた。

そして……。

「白雪さん!」

雪泉の声も聞こえた。

それを聞いて白雪は顔を強張らせた。

もし自分がカナメを連れ去った事が知れたら只では済まないからだ。

それだけではなく飛鳥達も来ていた。

全員が部屋に着くと白雪はたどたどしくこう聞いた。

「え……えつと……どうしてここが？」

それを聞いたアリアはこう返した。

「あんたがいなくなつたつて言う報告を聞いてあたしは直ぐに飛んで行こうと

思つたら見慣れないバイクに乗つたキンジを見かけたからコネクトの人間に頼んでキンジの居場所を特定してもらつたのよ。それで分かつたから行こうと思つたら生徒会長も行くことになつたから代表以外の面子は全員来たのよ。」

「へええ……そうなんだ。」

白雪は内心冷や汗がダラダラと出ていた。

下手したら更に最悪な展開が待っているからだ。

「(ウウウ……どうしよう、どうしよう。雪泉さんだけじゃなくてこの泥棒猫も一緒だなんて……絶対ばれないようにしないと!!)」

そう思っていると上の階から……悲鳴が聞こえた。

『イヤアアアアアア！キンジサアアアアアン!!』

「！今の声!？」

「カナメさん!？」

「何でここにいるのじゃ!？」

飛鳥、雪泉、夜桜がその声を聞いてびつくりする中華毘がこう続けた。

「それに今のつてまさか!？」

「・・・キンちゃんに何が・・・キンちゃん!!」

白雪が走り出そうとするのとザビーが上に通ずる扉にコンコンと当たっていた。

「あそこから!!」

飛鳥はそれを見て特定すると白雪がそれを開けようとした。

すると・・・。

「ちよつと待ちなさい!」

アリアが待ったをかけた。

「如何して!？」

「そこしか出入り口がないのならトラップを仕掛けているはずよ! デュランダルは慎重な犯行を繰り返しているからそれをしてははずよ!？」

「でもキンちゃんが!!」

アリアの言葉に白雪が反論していると華毘が懐からある物を出した。

「開けるのが駄目なら・・・あれを使うつす。」

華毘が指さした方向にあったのは幾つもの重火器であった。

暫くすると華毘はある物を作っていた。

「これで完成つす!!」

それはI Sの予備パーツで使った急ごしらえの大砲であった。それを扉目掛けてセツトすると。

「離れるつす!」

華毘は全員にそう言った後全員離れた。

「・・・発射ーーーー!!!」

ドン!!という音と共にI S用のバズーカが火を噴いた。

そして扉に着弾すると扉は・・・粉々になった。

「これでどうつす!?!」

それを聞いたアリアは呆れながらこう言った。

「・・・あんた無茶しすぎ。」

それに対して華毘はへへつと鼻を擦って答えた。

「皆さん!行きましよう!!」

雪泉がそう言うのと全員おお!!と答えた。

そして一人ずつ上に上がった。
彼らが見るのは真実か？それとも・・・。

萌える思い。

「キンジさん！何でー？ナンデ!??キンジさん！キンジサーン!!」

30代目ジャンヌダルク・・・いや、カナメは何が何だか分からなくなり始めていた。最初は躲した攻撃を何故躲さなかったのか。

どうしてこんな事をしたのか。

頭の中で何が何だか混乱していたがそれは簡単な事であった。

只キンジは・・・彼女を救いたいという願いがあつただけであった。

その為にキンジは自分がどれだけ傷だらけになろうと構わなかったのだ。

たとえそれで・・・死ぬことになつたとしても。

そうとも知らずカナメは如何したらいいのか考えていた。

「(このままじゃキンジさんが！キンジさんが!!)」

最早慌てて考えもしなかった。

そうしている間もキンジの刺された横腹から血が出続けていた。

人間は血液を3/1以上出されると出血死してしまうのだ。

そうしている中後ろから・・・声が聞こえた。

「姉さん。」

「・・・レテイシア。」

レテイシアがカナメのすぐそこ迄やってきた。

するとレテイシアが剣を抜くとカナメに対してこう言った。

「どいてくれない姉さん？後は私が始末してあげる。そして・・・」

「一緒に帰りましょ♪」

「レテイシア・・・！」

カナメはその時初めて妹であるレテイシアの笑顔に・・・恐怖を感じた。

恐らくこの1年の間にさらに何人も手に掛けたと考えた瞬間彼女に恐怖したのだ。

するとカナメはキンジの懐からある物を出した。

それは・・・。

「えいー！」

「きやあ!!」

煙幕玉であった。

「ちよ、・・・姉さん!!」

レテイシアはカナメの行動に驚いていると晴れた瞬間彼女は・・・消えていた。

「ちよ、姉さん！何処なの!?!・・・何処ヨ姉さーん!!」

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．はあ．．．。」

カナメは自分のドレスを剣に巻き付かせるために破つて血の垂れを防いでいた。然し所詮それは一時的な物。

満たせてしまえば必然的に垂れてしまうのが必然である。

現に既に垂れ始めていた。

カナメはレティシアから少し離れた所まで歩いた後キンジをHPCの一つに背中を預けるような感じで置いた。

既に血が巻き付いた布を真っ赤に染め、このままではいけないと思ったカナメは頭を抱えてどうしようと思っていた。

「携帯電話は使えない、救急道具もない!!如何したらいいの!!?」

カナメはそう言いながらキンジを見ると．．．もつとヤバいこととなっていた。

「ウ．．．ウウ．．．．．。」

既に目を閉じかけていた。

「ダメですキンジさん!!目を開けて下さい!!閉じないで!!

死なないで．．．!!」

カナメは最後泣き崩れるようにキンジの胸に顔をうずくめて言った。

「どうしたら・・・どうしたら・・・」

カナメはどうしようとして涙を拭きながらそう言うとう自分の腕を見てある事を

思い出した。

然しそれをしたらどうなるか分かっているのだがキンジの状態を見て考える間もなく行動に移した。

カナメは手甲を外しながらキンジにこう言った。

「キンジさん！今から剣を抜きます!!その後少し痛いかもしれませんが」

カナメがキンジに何か言いかけた瞬間、キンジは・・・呟くようにこう言った。

「イママデ・・・アリガトウ」

キンジは少し笑顔でそう言うとうカナメは・・・怒鳴るようにキンジにこう言った。

「嫌です!!」

「私は認めません!!」

カナメはキンジの服の上着を脱がせながらこう言った。

「貴方が死ねば多くの人が悲しみます!!」

「飛鳥さんに雪泉さん、焰さん、紫さん、夜桜さん、華毘さん、武藤さん、

他にも多くの人達が悲しみます!!貴方が金一さんを失ったように!!・・・

私も悲しみますから……だから……」

カナメはキンジの上着を着崩した後剣の刺さっている部分に手を伸ばしてこう言った。

「……生きて下さい……キンジ。」

そう言つてカナメはキンジの唇に……自身の唇を押し付けた。

「!!」

キンジはあまりの事に驚きながらもカナメはキンジの刺さつた剣を……引き抜いた。

「!!」

キンジはそれに痛みを感じるとさらに不思議なことが起きた。

カナメの腕から……炎が出てきた。

「!!!」

それをキンジの腹部に……押し付けた。

「!!!」

キンジはあまりの痛さに悶絶していた。

腕は血が出過ぎたことで使うにも力が出なかつたのだ。

今キンジに出来る事は……只身を委ねることではなかつた。

「・・・はむっ・・・くちゅ」

カナメは自分がキンジの声を出させないようにしていたのだ。

そしてある感情があつた。

それは・・・。

「(キンジさん・・・私は貴方の事が・・・大好き。)」

「(これが最後なら・・・一度だけ・・・私の初めてを貴方に。)」

ようやく気づいた自分の気持ちにカナメはぶつけるかのように続けた。

そして傷が塞がると・・・それも終わった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

キンジとカナメはお互い唇を離すとお互いの口から唾液が伸び、息遣いも荒かった。

まるで事後のような感じであつたがキンジの横腹の傷口が塞がるのを確認すると

カナメは頬を赤くしながらもにこりと笑つていた。

「キンジさん・・・。」

「カナメ・・・。」

お互い名前を呼び合い意識があるのかを確認していた。

二人の間には何かの時間が過ぎるように感じた。

そして無論そこにいるのは・・・彼らだけではなかつた。

「・・・・・・・・姉さん？」

目を大きくかつ開いてそれを見ていた・・・・・・・・レテイシアがそこにいた。

姉の決意。妹の覚悟。

「姉さん!!どこ行ったのー!!?」

レティシアは血痕を頼りにしながら30代目ジャンヌダルクを探していた。

血痕は少しずつだが感覚が狭まって行くのが見えており、どうやらここら辺じゃないのかと確信しながらレティシアはこう思っていた。

「あの男が姉さんを変えた・・・やっぱ無理にでも介入して殺すべきだったわ!この血の量ならそう遠いところには行ってないだろうし、生きてたとしても

虫の息・・・あの男には言葉に表せないほどの痛みを与えて苦しませた後にコロシテヤル!!そして姉さんを正気に戻してやるんだから!!!」

レティシアはそう思いながら血痕を辿っていた。

「・・・ここら辺ね。」

レティシアはそう確信してその角に向かった。

そして彼女が見たものは・・・。

「・・・え・・・?」

キンジにキスしている30代目ジャンヌダルクであった。

それを見たレティシアは直ぐに隅に隠れた。

「(え・・・今・・・姉さん何してた?・・・あいつと・・・キス?)」

それを思い出したレティシアは頭を思いつ切り振つてこう考えた。

「(いえ違うわ!あれはただ単にあいつを殺そうとしている最中よ!!
きつとそうよ!!そうに違いないわ!!)」

レティシアはそう思いながらも一度その光景を見ようとした。

然しそれは・・・。

「・・・はむっ・・・っむちゅ。」

濃厚なキスシーンだった。

その時見たレティシアから見た30代目ジャンヌダルク・・・いや、カナメの表情が頭から離れられなかった。

「(姉さんがあんな・・・あんな女の顔になって・・・顔も火照つてて・・・あんなに・・・嬉しそうに・・・)」

「(・・・何で・・・なんで・・・ナンデナンデナンデ・・・)」

そんな顔をするの?あたしにだって見せたことない・・・そんな顔・・・)そんなこと思いながらレティシアはそれを見ていることでしかできなかつた。

「・・・姉さん?」

そして前回に戻る。

目をかつ開いて立っていたレティシアを見たカナメはレティシアを見てこう言った。

「レティシア・・・私はやはり・・・ここにいたいのです。」

「キンジさんと一緒にこの学園島にいたいのです!それが私のたった一つの願い!!だからレティシア・・・もうやめましょ。今なら」

「やっぱり姉さん騙されてるんだ」

「レティシア・・・?」

レティシアの言葉にカナメは戸惑いを隠せなかった。

然しレティシアはこう続けた。

「姉さんそいつに弱み握らされたの?それとも犯されたの??凌辱されて

言う事聞けつて拷問されたの??それなら合点がいくわ、だってだって・・・

姉さんがあんな女の顔するわけないんだもの!!」

「だからどいてよ姉さん!!そいつを滅多切りにしてこの世から抹消して」

レティシアがキンジに向けて槍を構えようとした瞬間・・・カナメは刺さっていた

剣を拾ってレティシアに向けた。

「・・・何でヨ姉さん？如何して私に」

「私はこの人を守りたい。例え・・・貴方が敵であったとしても私は・・・

私は大好きな人を守るために戦います!!」

カナメの言葉を聞いてレティシアは顔を下にした後・・・こう言った。

「良いわ・・・なら・・・姉さんを痛めつけてからあいつをコロシテヤル!!」

「そうはさせません!!」

レティシアの言葉を聞いてカナメも覚悟を決めた。

今・・・守るために・・・殺すために・・・姉妹は刃を交わそうとした。

そして・・・。

「姉さーん!!」

「レティシア——!!!」

剣と槍が交互に・・・交わった。

譲れない思い。

「姉さーん!!」

「レティシア——!!!」

嘗ては共に戦った姉妹。

今はお互いの自分の為に闘っている。

レティシアは姉を連れ戻すために。

カナメはキンジと共に居たいという願いの為に。

どちらが正しいのかは誰も分からない。

何故ならどちらも・・・願いの為であるからだ。

「はあ!!」

レティシアは槍を穿つようにカナメに当てようとし・・・。

「てえい!!」

カナメは剣で槍の軌道を逸らしながら接近戦で戦っていた。

「くう!」

「貴方にその槍の戦い方を教えたのが誰なのか忘れちゃったか!」

「姉・・・さん！」

『あたしの勝ち——！』

『ふぁあん、また負けたア！』

何処かの小さな農家の家。

二人はそこで生まれ、育った。

双子であった彼女達は髪の色以外は同じである。

二人はよく棒を使って戦いごっこをして遊んでいた。

無論、近所にも子供たちがいるがどちらかと言えば二人で遊ぶタイプであった。

『——！！、レティシア！！ご飯よ——！！』

『はあい！！行こう、レティシア！』

『うん！！』

二人はいつも一緒にで本当に仲の良い姉妹であった。

だがそれもたった一人の男の存在で狂った。

キンジの存在により姉は恋を知り、妹は彼に殺意を抱いた。

全く違うコインの裏表のようになってしまった二人はあまりにも哀れとしか
言えなかった。

「はアア!!」

カナメの剣がレティシアの槍を真つ二つに叩き切った。

そして……。

「もう観念してください。レティシア」

「……姉さん」

カナメはレティシアの喉元に剣を突き立てた。

勝負ありと思っていたその瞬間……爆発音が聞こえた。

ドカーーン!!

「!何です!?!」

カナメはその音に気を取られた瞬間にレティシアは跳躍してそこから離れた。

そして……。

「遠山君!!」

突如、レティシアが大声を上げるや否やこう続けた。

「何で、どうしてこうなるのよ!! やつと姉さんを見つけたと思ったら邪魔ばかりの連中が何人も何人も現われて計画がパアヨ!! ここまでやってきた事が

水の泡になるなんて・・・そんなこと!!」

出来るか——!!!と言いながらレティシアが剣を抜くとカナメは全員に向けてこう言った。

「皆さん気を付けて下さい!! 彼女は超偵です!!」

「「「「「!!」」」」」

全員がそれを聞いて構えた瞬間・・・レティシアはカナメに対してこう言った。

「さああ・・・修正するわ。」

力の解放。

姉さんは私を裏切った。

カシヤンと手甲が音を鳴らしながら落ちて行つた。

何で私を裏切ったの？

そう思いながら剣を構えた。

如何して姉さんは私に向けるの？

最後の頭に付いているティアアラを手にとるとこう結論付けた。

アイツノせいだ。

そしてティアアラを投げ捨ててこう決心を固めた。

アイツガ姉さんを汚した。

姉さんを変えた。

「さああ・・・修正するわ。」

アンタヲコロシテ姉さんを元に戻す!!

「キンちゃんには手を出させない!!」

白雪はそう言いながらレティシアに剣を頭から斬り捨てようとした。

然しそれは……。

「遅いわ。」

軽々と受け止めた。

「!!」

白雪はそれに驚いているとレティシアが白雪にこう言った。

「今のあんたにアタシが負けると思ってたんの? ……思いつかないでよね!!」

後ろから受け止めた白雪の斬撃を弾いた後、レティシアは剣を振りぬく際に

こう言った。

『オルレアンの磔!』

すると白雪の足元が……氷に包まれた。

「そんな!」

白雪はそれに驚きながらも何かぶつぶつと唱え始めた。

「幾ら貴方でも動けるようになるには……まあ氷を解かすのも加えれば15分つてと

ころかしら?」

「そこで見てください。アンタガ守ろうとした男が殺される姿を。」

レティシアがそう言いながらキンジに近づこうとすると・・・。

「あなたの相手はあたしヨ!!」

アリアがそう言いながらレティシア目掛けて突撃してきた。

ダン!ダン!とガバメントから発砲音が聞こえた。

幾ら超偵であつても銃弾の姿を捕らえられるのは至難の業だと確信していた。

確かにこれまでも同じタイプとアリアは戦っていたが敵が全てそうとは・・・限らない。

「ちよろまかしい!!」

レティシアは『オルレ안의磔』を空中で使つて銃弾を・・・氷漬けにした。

「な!!」

アリアはそれに驚いた瞬間・・・レティシアはアリア達がいる床目がけて剣を突き刺した。

『オルレ안의十字架!』

そしてアリア、華毘、夜桜のいる床が・・・凍り付いた。(無論白雪の足の氷も追加)

「ウニャアアア!!」

そしてアリアはそのまま・・・すってんころりんとなった。

「ちよつとこれは……。」

「……動けないのじゃ。」

華毘と夜桜も動けなくなってしまった。

「そこでじつとしてなさい。」

そう言うのとレティシアはカナメ目掛けてこう言った。

「さてと……姉さん、最後通告よ……どいて。」

そう言うのとカナメは……キンジの方に体を向けるとそのまま歩いていった。

「……カナメちゃん。」

飛鳥はカナメに何をするのかと聞こうとすると……カナメはキンジの頭に自身のでこを当てるとこう言った。

「主よ、どうか私の愛する人に……私の思いを。」

そう言いながら自身のティアラを取ると飛鳥と雪泉にこう言った。

「後をお願いします。」

「……カナメちゃん」

「カナメさん」

飛鳥と雪泉がそう言うのとカナメはレティシアの方に向き直すと……こう言った。

「レティシア、私は貴方を……倒します。」

するとカナメの持っていた剣から・・・炎が出てきた。
その焔はまるで・・・カナメの意志其の物のように・・・朱く・・・美しかった。

戦いは終幕へ。

何故レティシアの能力が氷なのか？

それは初代ジャンヌダルクの影武者が火刑されたことから起因するのである。

火に対抗するためにそれよりも冷たい氷で対抗しようと考えたことがそもそもの始まりである。

然し……何世代か経ったジャンヌダルクは姉妹で産まれた後幼い彼女はこう
思っていた。

それは……。

火に打ち勝つためにより強い火を作り出す。

詰まるところ彼女は「バックドラフト」を起こして火を消すという荒業を

思いついたのだ。

そしてそれは何世代も続き、今に至る。

「・・・綺麗。」

誰かが言ったのか分からないがそのような声を出した。

炎は恐れられ、畏怖される力である。

人々に暖かさと、豊かさ、そして恐怖と悪意も蔓延させることが出来るからだ。

そして・・・カナメが動き出した。

「!!」

レティシアは防御しようと能力を使って受け止めた。

キイン!!という音と共にお互いの剣がぶつかり合った。

本来なら火花が散るのだがこの時の二人の剣は・・・。

火と氷がぶつかり合った事により周りに水しぶきが弾かれた。

「ハアアア!!」

今度は二人同時で攻撃した。

ぶつかり合う水しぶきが二人に当たりながらも攻撃を続けた。

まるで雨に打たれながらも戦いあうかのように・・・。

そしてお互いが何合かの剣が弾かれた瞬間レティシアがHPCを足蹴にして宙を

舞った。

『オルレアンの磔!』

レテイシアが斬撃を叩きつけようとした瞬間・・・カナメも動いた。

『オルレアンの解炎！』

剣から炎の斬撃を出してそれを打ち消した。

『オルレアンの十字架！』

するとレテイシアが剣を突き刺して氷の床にした。

そしてカナメも同じく剣を突き刺した。

『オルレアンの導旗！』

そしてカナメも炎の壁を出してそれを打ち消した。

バシユ——！！という音と共に周りは白い煙を上げた。

まるで霧のように周りが白くなった。

そしてカナメは周りを警戒していた。

それは・・・。

「！」

カナメが何かに気づくと剣を構えた。

キイン!!という音と共に火花が散った。

その訳は・・・。

「幾ら姉さんでもこの中じゃああたしが有利ヨ！」

レテイシアがそう言いながら縦横無尽でカナメに襲い掛かった。
「相変わらずのやり方ですね！」

そう言いながらカナメはある所を見ていた。
それは・・・キンジが倒れている方向である。

「・・・グウ・・・ウウ。」

弱弱しくもキンジは目を覚ました。

然も・・・ヒステリアモードになって・・・。

キンジは自分の体の確認をした。

「(・・・腹の刺さっていたところは・・・何とか血が止まっているな。
少し痛いけど・・・。)」

「あ、遠山君!!雪泉姉、遠山君が気づいたよ!!」

飛鳥はキンジが目を覚ましたのを見てそう言うと言とうと雪泉がキンジに駆け寄った。

「大丈夫ですか!?!痛むところはありますか!?!」

雪泉がキンジにそう言うと言とうとキンジはこう答えた。

「ああ……二色の花を見て少し元気になったよ。」

「あ……その言葉って……。」

「あれになってますね。」

飛鳥と雪泉はキンジがヒステリアモードになっていることを感じ取るとキンジは二人こう聞いた。

「今……どうなってる?」

そう聞くと飛鳥はこう答えた。

「今、カナメちゃんがそっくりな人と戦ってるよ。」

それを聞いたキンジは……。

「止めない……と。」

立ち上がろうとしていた。

「駄目だよ! 遠山君!!」

「今は安静にしないとイケません!!」

飛鳥と雪泉がキンジを止めようとした。

然しキンジは……こう返した。

「あの二人を……このままにしちゃ……いけない……だから。」

ハアハアと言いながらキンジはベレッタを懐から出すと飛鳥と雪泉にこう聞いた。

「二人共……手を貸してくれないか？」

そう聞くと……二人はこう返した。

「勿論だよ！」

「武偵憲章第1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』です！」

二人が了承するとキンジは……近くにいたザビーを見てこう言った。

「お前も……力を貸してくれるか？」

そう聞くとザビーは……。

こくつと首を上下に振って答えた。

「はあ……はあ……はあ。」

カナメは少し肩が息をしている状態であった。

未だ霧は晴れず、精神的に見ても限界であった。

然しそれはレイシアも同じであった。

決着が着くことが無く、後もう一押しが上手くいかないのだ。

お互い体力が無いことを確認すると……レイシアはある事を思いついた。

「(今なら姉さんの体力がもう底に付いている頃合い、剣戟で撤収すると同時に

投擲してあいつの首筋に当てるわ。」

居場所も覚えてるしねと考えた後レティシアはいつでも取り出せるように準備した後走り出した。

「！・・・そこ！！」

カナメはレティシアを感じ取った瞬間・・・声が聞こえた。

「カナメ——！！！！」

そして次の瞬間・・・銃声が響いた。

「これでいいの？」

「ああ・・・これでいい。」

今キンジは飛鳥に支えて貰いながらベレッタを構えているが・・・構えているのはキンジ本人ではなかった。

では誰かと言うと・・・。

「誤差修正・・・いけません。」

雪泉がキンジの掌を重ねるように構えていた。

そして霧の中で・・・キンジはある所を構えていた。

そこは……。

「ですが……カナメさんに当たるかもしれません。」

カナメのすぐ近くである。

本来なら視界が悪い中ででの射撃はあまりよろしくないのだがキンジはお構いなしと構えていた。

そしてキンジは構える中こう考えていた。

「(カナメ……お前は俺を助けてくれた……)」

「(今度は俺がお前を助けてやる!!)」

そう思いながらベレッタを構えた。

そして……影が見えた瞬間……大声でこう言った。

「カナメ——!!!」

カナメはキンジの声を聞いた瞬間銃声が聞こえたのでそこから避けた。

するとレティシアは銃弾の気配を感じ取ってその銃弾を……切裂いた。

「邪魔したわね!!」

レティシアはそう言いながら「ヤタガン」の刃を投擲しようとしたその時……。

ブーーン!!

ザビーが猛スピードでレティシア目掛けて突っ込んできた。

そしてザビーはそのまま・・・レティシアの刃を持っている方の腕に針を刺した。

「グウー！」

レティシアはいきなりすることに回避できずに受け止めてしまった。

そして・・・。

びりびりつと電流が流れた。

「ギガア!!」

それにより腕がしびれてしまったただけではなく刃を投擲することが出来なくなった。

そしてレティシアの悲鳴を聞いたカナメはその地点に狙いを絞った。

「そこお!!」

カナメはそのままレティシア目掛けて剣を振り上げ、レティシアはそれを

防御しようと刀身を盾代わりにして構えた。

「ハアアア!!」

そしてそのままカナメはそのまま・・・レティシアの剣を切裂いた。

「そ、そんな!!」

レティシアはあまりの事に驚いていると・・・カナメは更に剣を構えた。

「ヒイ！」

レティシアはやられると感じ取って悲鳴を上げて目を瞑った。

そしてカナメはそのまま・・・剣を捨ててレティシアを抱きしめた。

「へ？」

レティシア何でと思つて目を開けるとそこに映っていたのは・・・。

「・・・姉さん。」

涙を流しながら抱きしめるカナメがそこにいた。

「・・・ごめんなさい。」

「へ？」

「・・・貴方を・・・一人にして・・・私・・・何も・・・出来なくて・・・

ゴメンナサイ。」

カナメはレティシアを抱きしめ、・・・泣きながら謝っていた。

するとレティシアも・・・泣きながらこう言った。

「わだじ・・・しゃびしかった(寂しかった)!!ねえじゃんいなくにやって

わだじ・・・じゅつとじゅつとこわきゆて!!・・・ぢゅらくて・・・

ウワアアアアアア!!(姉さんいなくなつて、私、ずっとずっと怖くて、辛くて)」

レティシアは鼻声を上げながら泣き出すとカナメはそれを無言で頭を撫でていた。

事件の後。

ジャンクシヨンの輸送車専用道路から一台の小型トラックが出てきた。

それは白雪がカナメを連れ去った時に使っていたトラックであったのだが運転席に乗っているのは違う人間であった。

「ええそう。デュランダルと α を連れてそっちに行くわ。綴先生も呼んどいて。」

助手席に乗っているのはアリア、電話の向こうにいるコネクトの生徒に伝えていた。

「それにしても白雪、何勝手な事してんのよ!!自分勝手に犯人の要求を飲む武偵があいつ以外に何処にいるのよ!!」

「すいませんアリアさん。彼女には私が厳しく言っておきます。」

そのお隣で運転席で運転しているのは雪泉である。

今回白雪が自分勝手に起こした騒動に＋してIS学園のトーナメント試合において暴走していたという事が輪を書いて忙しくしているそうだ。

「まあ、あいつはあんたに任せるけど本当にあいつにあれ付けなくていいの?」

アリアは雪泉に敬語もなしでダメで喋っていた。

「アリアさん、年上に対しては敬語を使わないといけませんよ。それに・・・彼女は太

丈夫です。」

「何で？」

雪泉はアリアの言動に注意した後にかう続けた。

「彼女は・・・カナメさんは私達の仲間だからです。」

「痛みますか？キンジさん。」

カナメはトラツクの中でキンジの腹の火傷に氷嚢を当てながらそう聞いた。

氷嚢はレティシアがカナメに頼まれて渋々作った物である。

「ああ、大丈夫だカナメ。迷惑かけたな。」

キンジはカナメにそう聞くとカナメはこう返した。

「いえ！私こそキンジさんを危ない目に合わせてしまいました!!」

「私の方が・・・謝らなきゃいけないんですから。」

カナメは少し落ち込みながらそう言うとキンジはそれを見て・・・。

頭を撫でていた。

「き、キンジさん！何をしてるんです!!」

「いや……こうしたほうが良いなと思ってな。」

駄目だったかと聞くとカナメは頭を少し押し付けけるような感覚でこう言った。

「いえ……もう少しこのままで……。」

「……そうか。」

それを聞いたキンジはもう少しだけと思い、カナメの頭を撫でていた。

「……良いなあ。」

「諦めよ、飛鳥。今回はカナメに譲るのじゃ。」

「そうつすよ！あたしらにはこの人達の監視つつう任務があるんすから。」

その光景を見て羨ましそうに見ていた飛鳥に夜桜と華毘が間にいる二人を見てそう言った。

その二人はと言うと……。

「あの男、姉さんの頭をよくも……。」

「ふにゆ……！あの泥棒猫……!!」

レティシアと白雪であった。

二人には如何やら警護任務を引き受けた際にエリアが私的に手に入れた超偵用の手錠が掛けられていた。

本来ならカナメも同じであるはずなのだが二つしか手に入らず、超偵三人に対して

二つしか使えないということからキンジが・・・。

「カナメは俺が監視する。」

そう言ったことと飛鳥達の弁護からアリアは少々了解したのだ。

そしてキンジとカナメのやり取りを見て嫉妬していたのだ。

車は武偵校にへと向かう。

・・・時間はあまり残されてはいない。

貴方に・・・ありがとう。

「おー・・・来たかー・・・。」

武偵校のロジ専用自動車格納庫の前で綴が煙草を吹かして待っていた。

「先生、デュランダルと・・・+αです。」

そう言つてアリアが助手席から出てトラックの荷台の扉を開けた。

それを見て綴は・・・少し驚いていた。

「アリアー・・・そのー・・・銀髪はー・・・分かるけどー・・・白雪はー・・・
どうしたのー・・・？」

そう聞くとアリアはこう答えた。

「星伽 白雪は一般人を剣の鏢で気を失わせ、デュランダルに引き渡そうと
していました。」

それを聞いた綴は・・・二やあと笑つて白雪に向けてこう言つた。

「白雪ー・・・あんたー・・・やらかしたねー・・・武偵のー・・・罪はー・・・
三倍ー・・・重いつてー・・・知ってるよねえ。」

それを聞いた白雪はビクツと体を震わせると綴はこう続けた。

「あんたはー・・・アタシがー・・・取り調べるからー・・・
覚悟しときなー・・・。」

それを聞いた白雪はガクガクつと震えていた。

そしてキンジのいる方を見た後アリアはこう続けた。

「先生、デュランダルは二人組であいつもその一人です。」

「ちよ、ちよつと神崎さん！」

「お主、それは今言う事では!!」

アリアの言葉に飛鳥と夜桜が反論しようとする。綴はカナメを見るとカナメは立ち上がった。こう言った。

「はい・・・私もデュランダルです。」

「カナメちゃん!!」

カナメの言葉に飛鳥が綴に説明しようとする。・・・キンジが立ち上がった。こう言った。

「綴先生・・・こいつは・・・こいつを許してくれませんか!!」

そして綴先生の所まで行くとキンジが綴先生に対して土下座をした。

「キンジさん！」

「確かにこいつはデュランダルかもしれないねえ！けどこいつは罪の意識に際悩まれて

いたんだ!!だから綴先生!!頼む!!」

キンジはそう言って綴先生に土下座で頼むも・・・綴先生はこう返した。

「遠山・・・例え・・・どんな理由が・・・あつても・・・悪事を・・・したんなら・・・償わせる・・・のも・・・必要だよ・・・」

「・・・くうー!」

キンジは綴先生の言葉を聞いて言葉が出なかった。

たとえどんな理由があつても悪事を犯したのなら償わせるのも良心である。

そう言う事である。

キンジはそれであつてもと思ひながら両手を握つていと・・・カナメがその手を優しく握つてこう言った。

「ありがとうございます、キンジさん。私は大丈夫ですから・・・だからもう・・・頭を上げて下さい。」

それを聞いてキンジはカナメに涙ながらこう言った。

「カナメ・・・あの家で待つてるからな。」

「キンジさん・・・」

それを聞いたカナメは困つたような表情で何か言おうとすると・・・綴が思いだしたようにこう言った。

「そう言えばー・・・アタシー・・・こいつらをー・・・連れてー・・・
行かなきゃなー・・・。」

「アリアー・・・あんたー・・・飛鳥とー・・・一緒にー・・・ダキュラのー・・・尋
問室にー・・・銀髪ー・・・連れてつといてー・・・。」

「え?」

「あ・・・はい?」

「白雪はー・・・アタシがー・・・連れてつてー・・・行くからー・・・

雪泉はー・・・アンビキュラムにー・・・再生カプセルー・・・

頼んどいてー・・・。」

「あ・・・はい!」

「それとー・・・手錠・・・置いちゃってたからー・・・取りにー・・・

行かなきゃー・・・いけないからー・・・三分ー・・・待つといてねー・・・。

その間ー・・・夜桜とー・・・華毘はー・・・ここでー・・・見張りー・・・。」

「分かったのじゃ。」

「了解つす。」

「ソレジャアー・・・逝こうかー・・・。」

そう言つて綴先生は白雪達を連行しようとした。

「待つてください綴先生！キンちゃんをあの女と一緒に待つて!!・・・
キンちゃん!!」

「ちよつと待つてよ！あの男を姉さんと一緒にさせちやつて話聞きなさいよ!!
姉さ〜ん!!」

二人はお互い大声を上げながら引き摺られて行つた。

それを見た後カナメはキンジに向けてこう言つた。

「キンジさん・・・待たないでください。」

「え」

キンジはカナメの言葉に何故と思つてしているとカナメはこう続けた。

「私を持つていたら貴方はそこで時間が・・・何もかもが止まつてしまいます。
それだけはさせたくないんです。」

「・・・カナメ。」

「だから・・・私を忘れて生きて・・・未来を作つて下さい。それが私が・・・
貴方に出来る最後の仕事です。」

「カナメ・・・。」

キンジはカナメの言葉に泣きだしそうになつていた。

それは・・・永遠の別れになるという意思表示であつた。

「キンジさん。」

「カナメ」

キンジはカナメの呼びかけの答えようとする。カナメはキンジに・・・キスをした。

「おお！」

「これは確かに飛鳥達には見せんが方が良いな。」

華毘が興奮して夜桜が成程なっと思っているとカナメはキンジから少し離れるとキンジに向けてある事を言った。

「キンジさん。私の本当の名前を伝えます。」

「お前の・・・本当の。」

「私の名前は。」

『レスティア・ジャンヌダルク』。それが私の名前です。」

「・・・レスティア。」

「呼んでくれませんか？貴方の声で・・・貴方の言葉で・・・私を・・・呼んでください。」

カナメ・・・いや、レスティアがそう聞くとキンジは・・・彼女を抱きしめてこう呼んだ。

「レスティア・・・レスティア・・・レスティア！」

「キンジさん．．．キンジさん．．．キンジさん！」

キンジとレスティアはお互い呼び合いながら抱き着いた。

まるで心の内側が露になったように．．．。

「．．．行かないでくれ、レスティア．．．行かないでくれ。」

「キンジさん．．．もつと呼んでください。私の心を満たさせて．．．。」

「一人にしないでくれ．．．レスティア。」

「私はいつまでもいます．．．初めて恋した貴方の心の中で．．．何時までも。」

キンジとレスティアの様子を見て夜桜は華毘と共に外に出ようとするところを見つけた。

「これは．．．。」

「超偵用の手錠つすね。」

それを見た瞬間．．．夜桜はそれが何処のなのかが見当が付いた。

「(全く綴先生は．．．。)」

そう思いキンジに渡そうとするとレスティアがそれを見てキンジにこう言った。

「これを付けさせてください．．．貴方に．．．逮捕されたいんです。」

そう言うときンジはそれを持ってレスティアに向けてこう言った。

「レスティア・ジャンヌダルク。お前を．．．超偵誘拐．．．及び．．．傷害．．．罪

で・・・罪で・・・。」

キンジは最後の一言を言えずにいた。

それを言う事とはたった一つ。

・・・もう二度と会えないという事だ。

それでもと思う中レスティアを見ると・・・。

泣いていた。

笑つて・・・泣いていた。

「キンジさん・・・お願いします。」

そう言うときキンジは振り絞るように・・・こう言つた。

「・・・逮捕する。」

ガチャンと言う音と共に手錠が掛けられた。

そしてレスティアはキンジにこう告げた。

「ありがとうございます、キンジさん。・・・私の大切な人。」

「！・・・~~~~~!!!」

それを聞いたキンジは声押し殺すように泣いた。

それを見ていた夜桜達は空を見上げた。

綺麗な青空の中だというのに・・・まるで雨が降っているかのような気分であった。

ワタシノ思い。

『それでは治療を終了します。』

外から声が聞こえた。

学園島の武偵校にはI S学園学園よりもグレードが下がるがそれなりの医療室を保持しており再生カプセルも配備されている。

キンジはその中で火傷と内蔵の治療をしていた。

そしてカプセルが開かれてキンジが出てきた。

『矢常所先生から《今回のアドシアードのコンバット戦は欠席するように、それと明日もまた来るように。お腹の方は再生スキンを使う》と言っていました。』

アンビキュラムの生徒が操作室越しでそう伝えた。

キンジはそれを無言で聞いた後制服に着替えなおして部屋の外に出た。

そして部屋から出ると……。

「よう、キンジ。」

武藤がそこにいた。

何故飛鳥達がいらないのかと言うと・・・キンジの精神状態を鑑みたことである。

「あのバイクはロジが責任もってお前の家に運んどいたぜ。それと、明日でも良いからちゃん登録しとけよ。あれ一応軍用だからな。」

「・・・分かった。」

キンジはそれだけ言うとそのままそそくさと去って行った。

「・・・大丈夫か、あいつ？」

武藤はキンジの表情に心配していた。

キンジはあの後バスに乗って家路についた。

やる事がなくなってしまうからだ。

そしてキンジは自分の家に着いた。

「・・・只今。」

キンジはそう言って扉を開けた。

そしてダイビングを見ると・・・。

「・・・誰もいねえか。」

いつもの家なのに・・・何だか広く感じた。

キンジはそう言つてソファに座ろうとすると・・・ある部屋を見た。

「・・・レストニア。」

キンジはそう言つて自身（レストニアもいた）の部屋を見た。

キンジはそう言えばと思つた。

「そういや俺、あいつの事何も知らなかつたなア。」

キンジはそう言つて部屋に入った。

「・・・以外に荷物少ないな。」

キンジはそう言いながらレストニアの荷物を整理していた。（無論下着は除外）

そして暫くすると小さな本が見付かつた。

それは・・・。

「日記か？」

それはオレンジ色の日記帳であつた。

『○月×日』

今日はキンジさんと動物園に行きました。

可愛らしい動物と結構触れ合いました。

・・・何故かキンジさんの周りにだけ動物は来ませんでした。

何ででしょう?』

「・・・俺が聞きてえよ。」

『◇月▽日』

飛鳥さん達が一緒に海に行こうと誘ってくれました。

キンジさんは嫌々ながら着いてきました。

海でいっぱい泳いで遊びました。

最後は皆さんとバーベキューしました。

・・・何でキンジさんは皆さんから視線合わせようとしなかったのでしょうか。』

「・・・見れるか。」

とまあこのように日常の事を纏めていた。

「それにしても豆だなア。その日のご飯の内容や、飛鳥達とのやり取りとかを

記録するとは。」

記憶喪失だった彼女からすれば日々の思い出を書くことはまあ珍しいことでは

ないだろう。

そしてページを進める中・・・あの事件についてが記されていた。

『今日、キンジさんのお兄様が亡くなったという通知が来ました。

外には色々と酷いことを言う人達がいました。

・・・助けたことは悪い事なのですか？』

『今日は飛鳥さんのお爺様たちが来られました。

最初は黒影さんがキンジさんを殴り飛ばした後船の中で半蔵さんに言われた後

飛鳥さんが慰めてくれました。

・・・私は無力だと思いました。』

「・・・レスティア。」

『今日から飛鳥さんのお店でお世話になります。偶に魚市場を見せて

もらっていますがとても大きくて色んな人たちが笑っていました。

その後キンジさんはお寿司の握り方を教わってました。

私は店の接客でした。

何故か皆さん私を見て《キンジ君はどっち選ぶんだろうねえ》と言っていました。』

「いや待て、なぜそうなる。」

『今日で今年もお終い。店が終わったのは23時ごろで皆さんで残った魚で吸い物や

蕎麦を食べました。年を越した後皆さんで行った初詣で着物を着させてくれてよかったです。』

『家に帰りました。少し遅い（だいぶ）ですが大掃除をしました。終わった後は久し振りにと言う意味で二人つきりで夕食を食べに行きました。

レストランですがそれでも幸せです。』

そしてアリア達にへと向かった。

『今日は電話でキンジさんが巻き込まれたという報告を受けました。帰ってきた時は嬉しかったです。何事も起らないように願っています。』

『今日は飛行機に何かが起きるといってキンジさんは空港へ向かいました。

無事だと知った時はうれし泣きしちゃいました。早く帰ってこないかなあ。』

『今日から新しくザビーというロボットが家に着きました。ちよつと顔は怖いですけど意外に可愛いところがあります。』

『今日から神崎さんと一緒に白雪さんも住むことになりました。これから皆さんと暮らしていけるように頑張らないと。』

「・・・ここで終わってる。」

恐らくキンジと部屋が同じになる為か日記帳にはここ迄しか書いていなかったようだ。

そして更に続きが無いのか。パラパラと開いていく中最後のページにある一文が書かれていた。

それは……。

『私、遠山カナメはキンジさんに……恋をしています。』

それを見たキンジは今までの記憶がどんと蘇ってきた。

その中では全てレスティアの……笑った顔が浮かんできた。

「…………レスティア。」

キンジは日記帳を閉じると……そのまま泣き始めた。

「ウアア……ウアアアアア!!」

嘗て兄を失った時も泣いたが今は違う。

「アアアアアア!!」

もう誰もいない部屋でキンジは声を上げて……彼女の名を叫んだ。

「レスティアアアアアアアアアアアア!!」

その声を聞くのは……無言の表情のザビーだけであった。

他人の物、勝手に読むなよ。

キンジはあの後泣きまくった。

自分の大切な人間がまたいなくなつたという思いが自分を締め付けているからだ。キンジは泣いて、泣いて、泣きまくり……そして……。

「……レスティア。」

泣き疲れて眠ってしまったのだ。

そんな中ある車がキンジの部屋があるアパートにやってきた。

その車は近くの駐車場に止めた後二人の少女が降りてきた。

「……なの、姉さん?」

随分小さいわねと銀髪の少女はそう言うともう一人の少女がこう返した。

「確かに小さいかもしれないませんが私にとつてここは……もう一つの帰るべき居場所なんです。」

そう言うのと金髪の少女がそのアパートを見上げると運転席から一人の女性が

出てきた。

「あんたらー……早くー……行きなさいよー……。後がー……
聞えてるんー……だからねー……。」

そう白衣を着た女性が言うと二人はある部屋に向かっていった。

カチャカチャ。

「……んん。」

キンジは鍵の開く音がしたので何事かと思い、日記帳を持ったまま銃を構えた。

「……何だ？」

キンジはそう思いながら扉の方に向かった。

そして扉が開いた瞬間……キンジは銃をそっちに向けた。

「誰だ!!」

そして扉の開いた先にいたのは……。

「あ……えーと。」

レスティアであった。

「……レスティア……か？」

キンジは恐る恐る聞くと少女、レスティアはこう返した。

「はい……只今帰りました。」

満点の笑顔でそう言った。

そしてそれを見たキンジは恐る恐る近づいて……。

「レスティア!!」

「きゃー!」

レスティアを思いつきり抱きしめた。

「き、キンジさん! 如何したんです!?!」

レスティアはそうキンジに聞くとキンジは……泣きながらこう言った。

「良かった……良かった……戻ってきて……くれて。」

それを聞いたレスティアもキンジを……抱きしめ乍らこう言った。

「はい……戻って……来ました。」

お互い扉の前で抱きしめあう中……一人の女性が間に割り込んだ。

「ちよつとさー……あたしらも……いるんだけど……。」

送ってきた女性、綴先生がそう言うのとキンジとレスティアは飛び起きるかの

ように……お互い離れた。

「す、すまん!!」

「い、いえ！そんな事!!」

お互い顔を真つ赤にしてそう言うがその光景はまるで新婚夫婦のようであった。

そしてレスティアはキンジが持っている日記帳を見て・・・フルフルと震えてきた。

「き、キンジさん！それ!!」

「・・・あ。」

キンジは何事だと思ってレスティアの指さす方向を見ると・・・。

日記帳を持っていたままである事に気づいた。

「・・・中身・・・見ました？」

「・・・ああ。」

「・・・全部・・・読みました？」

「・・・ああ。」

「・・・まさか・・・最後のページに・・・書いている所も・・・？」

レスティアは顔を真つ赤にしながら最後の・・・半泣きになりながら聞くと

キンジは・・・顔を真つ赤にしてこう返した。

「・・・ああ／＼／＼。」

それを聞いたレスティアは・・・こう・・・叫んだ。

「き・・・き・・・キンジさんの・・・馬鹿—————!!」

その声はアパート全体に響き渡ったほどである。

再会して。

「むうううう／＼／＼／」

「済まないってレスティア。だから機嫌直して」

「知りません！」プイ

帰ってきて早々だがキンジとレスティアは色んな意味で第二戦が始まっていた。まあ……キンジがレスティアの日記帳を見てしまったことが原因なのだが。それを見ていた綴先生ともう一人……。

「あの男、姉さんとイチャイチャして〜!!」

「まあまあ。」

レスティアの双子の妹レティシアである。

だが何故二人がいるのか疑問が出ますね。

だって二人はダキュラの尋問受けていたはずだからだ。

「そういうやよレスティア！如何してここにいるんだ？お前捕まったはず」

「……キンジさんは私がいけないほうが良いのですか？……」

キンジの質問にレティシアは少し俯いてそう聞くとキンジはこう答えた。

「そんな訳ねえだろ? . . . 俺はお前がいてくれると . . . 嬉しい / / / / 。」

「. . . キンジさん / / / / 。」

「ギリギリギリギリ (血涙) 。」

「アツアツだねえ . . . 。」

キンジとレスティアの色んな意味での甘い空間にレティシアは血の涙を流し、

綴先生は煙草を吹かしながらそう言った。

「遠山 . . . その質問 . . . アタシが . . . 教えるよ . . . 。」

綴先生はそう言いながら答えた。

「先ず . . . レティシア . . . だけど . . . こいつは . . . 。」

「ぐく。」

綴先生の言葉にキンジは息をのんだ。

そして出た言葉は . . . 。

「. . . 条件付き . . . 釈放 . . . 。」

「条件付き . . . 釈放? 。」

キンジはそう聞くと綴先生はこう続けた。

「元ター . . . こいつは . . . 片手で . . . 数える . . . までも . . . ないぐ

らい . . . だからね . . . 武偵校に . . . 入学させて . . . 。

監視しとくー・・・事にー・・・したんだー・・・。」

そう言い終わった後綴先生は煙草を吹かした。

それを聞いたキンジはホツとするもレティシアの方を見てこう言った。

「それじゃあこいつはどうするんです？未だ取り調べ終わっては・・・？」

すると綴先生はこう答えた。

「こいつはー・・・結構ー・・・やらかしたからねー・・・司法取引でー・・・

こいつもー・・・入学ー・・・するんだわー・・・。」

するとある資料を出した。

それはレティシアとレスティアの転入証明書と経歴であった。

『レスティア・J・ダルク 17歳 所属 アンビキユラム

フランス武偵校からの転入生』

『レティシア・J・ダルク 17歳 所属 コネクト

フランス武偵校からの転入生』

後は家族構成と現住所だがそれを見てキンジはある事に気づいた。

それは・・・。

「あの・・・綴先生」

「?・・・何ー・・・?」

「現住所って・・・何でここなんですか？」

そう聞くと綴先生は間延びしながらこう答えた。

「だってー・・・こいつらー・・・あんたのー・・・部屋にー・・・」

住むんだからー・・・。」

「・・・はアアアア!!!」

又同居話であった。

その提案待った——！！！！

「ちよーちよつと待つてくれよ綴先生!!レスティアの時は正体が分かるまで
だったけど何で分かった後もここなんだ!?!」

キンジは綴先生の言葉に対して意見を述べると綴先生はこう返した。

「それがねー……レスティアの事……知ってるの……」

あんたら辺で……監視……出来やすいから……」。

「はあ!?!」

「女子寮だと……神崎が……暴走しそうだし……白雪の……
件も……あるからね……」。

如何やら母親の冤罪を作った人間と犯罪を指示した人間と一緒に入れるのもなアと
言う理由であった。

「それに……あんた……こいつの事……よく知ってるから……
見張るのに……適してるのよ……」。

そう言った後に煙草の火を持っていた携帯用吸い殻入れに閉まった。

「と言う訳で……よろしくねえ……これ……指名任務ねえ……」。

武偵校卒業までのと付け加えてそう締めくくったが正直言つてマジかよと思った。
レスティア達と暮らせることには嬉しいと思うのだがそれはそれ、

これはこれである。

問題が二つあるからだ。

一つはキンジの体質だ。

只でさえレスティアだけではなくレティシアも暮らす羽目になるといふ事は
HSSになる可能性が更に高くなるといふ警戒心。

もう一つは・・・部屋だ。

事件が解決した事でアリアと白雪はこの家を出ることになるのだがそれでも

3人暮らしとなる。

そうなると部屋を何処にするか次第では家を引っ越す羽目となるのだ。

如何するべきかと思つている中レスティアがキンジにある提案を告げた。

「あの・・・良かったら私の部屋を兼用でレティシアが使うというのは

如何でしょう?」

「・・・良いのかよ?」

キンジはそう聞くとレスティアはこう返した。

「はい、今までもそう言う事ありましたしそれに・・・」

「それに？」

「・・・今まで辛い思いをさせ多分甘えさせてやろうと思うんです。」

「成程な。」

それを聞いたキンジはレティシアの方を見て確かにも思った。

レスティアと一緒にいた彼女は姉に良く甘えていたのだ。

それは今までいなかった反動によるものであろうが姉妹なら一緒にいさせてもいいかと思っているとレティシアはキンジの目線に気づくと立ち上がってこう言った。

「言つとくけどね！あたしが負けたのは姉さんがいたから!! あんたがいたからじゃないわ！あんた一人何て直ぐに倒せるんだから覚悟しときなさいよ!!!」
そう言うのとまた座るとキンジはそれを聞いて苦笑いをした。

「(・・・まあ良いか。また一人増えると思えば)」

そう思っているともう一つの事に気づいた。

「綴先生、白雪はどうするんだ？今回の事次第によつちや武偵校をやめねえといけねえぞ。」

白雪の事であった。

何分理由があるとはいえ誘拐に加担したのだ。

場合によっては退学処分も辞さないはずだ。

幾ら白雪が優秀であつても。

それを聞いた綴先生はニヤツと笑つてこう言つた。

「それならー．．．いい方法がー．．．あるんだよー．．．。」

「「??」」

それを聞いたキンジ達は．．．何だと思つた。

新たな日常。

時は流れてアドシアード最終日

「あ、遠山君!!こっちこっち!!」

キンジは閉会式の会場に来ていた。

よく見るとバンドミュージシャンが楽器を打ち鳴らしていたが・・・問題はそこではない。

『~~~~~♪~~~~~』

何せ武偵校の恐らく・・・CVR辺りを中心にした面子とIS学園の応援部のクレイどころをかき集めてチア服で踊っていることだ。

IS学園の少女達は見た目も美しい人間が大勢おり（まあ・・・国際学校だから結構多国籍であるが）また武偵校では雪泉達がチアダンスを披露していた。

武偵校は胸元に弾丸の形に切り取ったタイプ。

IS学園は鳥の羽を模ったタイプ。

どちらも色々と見えてしまうためキンジははあと溜息ついていた。

然しよく見るとその中には・・・。

顔を真っ赤にして前列で踊っている白雪がそこにいた。如何やらあれが綴先生の言っていた罰であろう。

元々反対派であった白雪はまあ踊るにしても後列辺りならと妥協したが今回の誘拐騒動で公にしない代わりに最前列にさせたのだ。

無論白雪は星伽の決まりを破りたくないといって断固拒否したのだが綴先生の一言がそれを覆させた。

『あんたー……親御さんにー……伝えてー……退学とー……』

決まりをー……破ってー……残るかー……どっちが良い？』

この言葉である。

本来なら決まり事を守るといふ教えがあるのだが想い人（あつちにその気なし）と離れたくないという恋する乙女は何と言うかである様子でそうなった。

更に言えば今回のペナルティーにてキンジの周辺にいる少女達に対して一切の接触、攻撃を禁じ、破れば今回の事を武偵校全員に報告させたうえで退学させるという誓約を課せられてしまった。

それを聞いた白雪は真っ青になり最早成すすべ無しという顔でサインしたという情報だ。

それを綴先生から聞いたキンジはもう大丈夫だと思い、ホツとしていた。

「それにしても驚きだねえ．．．カナメちゃんに双子の妹がいたなんて。」
飛鳥はそう言つてキンジの隣を見ると．．．。

「こらレテイシア。ソースが口に！」

「ちよ、姉さん後にしてよお。」

駄目ですと白い薄での服にカーデガンを着たレスティアが同じく黒い薄手の胸元が見えるカーデガンを身に纏つたレテイシアの口についているホットドッグのケチャップを拭いていた。

彼女達については既に飛鳥達にはデュランダルの事も含めて説明してある。

始めは全員驚いていたが最終的には受け入れてくれた。

まあ、キンジが出場する予定であつたコンバット戦においては代わりに蘭豹先生がアリアの相手をしたのだがこれがまた強かつたらしく周りの障害物を蘭豹先生は破壊しながらアリアと戦い、勝利したのだ。

それを見ていたキンジはと言うと．．．。

「戦わなくてよかつた。」

そう言つたようだ。

更には言えばIS学園ではトーナメント試合の際に暴走事故があつたことから一回戦までは全て行つたが後は中止となつた。

防人たちによればこの間性別訴訟で転入してきた奴がウィルスを使つて暴走させたらしく下手人は既にフランスに引き渡されたようだ。

『『『Who was the person, id like to hug t
he body』』』

キンジは今回の事を思い出している中如何やらチアはファイナーレに差し掛かろうと
していた。

チアの彼女達はポンポンを投げると中に仕込んでいた拳銃が打ち鳴らされた。

無論空砲であるが・・・少し打ち過ぎのように思える。

「あれは完全にやり過ぎじやの。」

夜桜は持つていたりんご飴を舐め乍らそう言つた。

「まあ良いじゃないっすか？今回ぐらいは」

華毘はそう言いながらポップコーンを食べていた。

「それにしてもお前ら良いよなア。デユランダルと戦えてさ。」

「・・・私達、仲間外れ。」

そうぶつくささと焰と紫が文句を垂らしていた。

「まあまあ、良いじゃない？焰ちゃんは上位ランクに入れたからさ。」

けどなあと飛鳥の言葉に焰がむすつとしていた。

その花火はまるであの時見た花火とは違い……二人を祝福するようであった。

「キンジさん。早く起きないと皆さん来ますよ!」

「早く起きなさいよ!!」

アドシアードが終わった次の日の朝、キンジは二人分の声で目を覚ました。キンジは服を着替える終わって外を見ると……飛鳥達も準備していた。

「おはよう、遠山君!!」

「おはよう、キンジ。」

「おはようなのじゃ。キンジ。」

「……おはよう。」

「オハヨウっす!」

「おはようございます。キンジさん。」

いつものメンバー全員が来ていた。

そしていつも通り席に着くが違うことがあるとすれば二つ。

一つはレティシアもいる事。

もう一つは……。

「これから学校でも一緒だね。レティシアちゃん！」

「はい、よろしくお願いいたします。」

レスティアも武偵校の制服を着ていることである。

そして食事が終わると全員が外に出る瞬間……。

「キンジさん！忘れ物!!」

「ああ・・・ザビー!!」

キンジはザビーを来させるとザビーはキンジの肩にちよこんと乗った。

そしてレスティアが扉を閉めるのを確認した後、全員が外に出た。

これから始まる新たな日常。

その日常を守るためにキンジは……その手に武器を持つ。

然し今彼が持っているのは……。

「キンジさん！早く早く!!」

「分かっているって！レスティア!!」

こんな自分を想ってくれている女性の温かな手であった。

第三章 蜂蜜とオイルのマシントラップ 転校したら第一印象はしっかりと。

「皆ー！オツクしぶりー！！」

「ブーーッ！！」

ある少女の声を聞いた瞬間キンジは口から唾を窓に向かって吹いた。

（隣にはアリアがいるため当たったら只では済まないからだ。）

「りこりんがーか月ぶりに帰ってきたぜエ——！！！！」

『『『『ウオオオオオ！！りこりん！！りこりん！！りこりん！！』』』』

キンジのクラスの男子連中はそう言いながらヲタ芸を披露していた。

・・・阿保しかないのか？このクラス。

「・・・何でアイツガ・・・？」

キンジは狼狽しながらそう言った。

何せ理子の本名は『峰 理子ルパン4世』。

彼の大泥棒ルパン三世の実子であると同時にキンジにとって怨敵でもある存在

「武偵殺し」の黒幕であり実力の高さはアリアとほぼ互角である。

然も彼女はある変身能力を持っておりキンジは知らないがロイミュードにもなれるのだ。

「……………(、口、)」

隣にいるアリアはと言うと驚きを通り越して変な顔で見ていた。

如何やら目の前が現実である事を認識しきれないようだが……これは現実なのだ。何せキンジさえもそれを認めたくないのだから。

「理子ちゃんお帰りー！あーこれ何ー？」

「えへへへへー。シーズン感を取り入れて見ましたー！」

理子はそう言いながら武偵校の鞆ではなく、ランドセルに向日葵のぬいぐるみみたいのを付けていた。

それも女子には……。

『『『『カワイー!!』』』』』

受けていた。

そう、皆さんも分かったと思うが理子はおバカキャラを演じているためクラスのマスコットの存在で人気者なのだ。

こうなると幾らキンジ達が彼女達に本当の事を言っても信じてもらえず、ポツチルートまっしぐらであろう。

キンジは何かあった時に備えて鞆の中に潜んでいるザビーをいつでも使えるように構えていた。

すると理子はキンジの方を見ると・・・いつものような感じでこう言った。

「おー！キー君もオハヨウ!!」

「・・・おお。」

キンジは理子の言葉に最低限の返事で返した。

「おやおや、元気がないけど・・・ああそうか!!とうとうあつすー達と

大人のかいd」

「やあおはよう理子！いつにも増して上機嫌だなおい!!」

理子の爆弾発言が出る前にキンジは颯爽と挨拶した。

・・・聞かれたら誤報であってもキンジの命が無いからだ。

「皆さくん。席に着いて下さいね。」

キンジのクラスの担任教師でもある高天原先生がそう言いながら教室に入ると全員が座り始めた。

理子もそれに習ってくるくと回りながら座った。

「今日は転校生を紹介するわねえ。」

『『『『オオオ!!』』』』

全員がそれを聞いて驚いた。

何せついこの間アリアが来たばかりだからだ。

「先生、それって男ですか？女ですか？」

クラスメイトの男子がそう聞くと高天原先生はこう答えた。

「今回も女の子。それも二人よ。」

『『『『『イヨツシヤアアアアア!!!』』』』』

それを聞いて男子連中は希望を持ったかのように雄叫びを上げた。

何せ上玉の何人かはキンジの方に行っちゃつてることから勝ち組になりたいと虎視眈々とそのチャンスを待っているからだ。

「さあ、入ってきて。」

そう言つてその二人が現われた。

二人は髪の色以外は・・・まるでそっくりな双子の姉妹なのだ。

「レスティア・J・ダルクです。フランス武偵校から転入してきました。未だ不慣れではございますが皆さん、よろしくお願いいたします。あ、それと学科はアンビキュラムです。」

「レテイシア・J・ダルクよ。紹介は姉さんと同じつてところかしら？双子だけど髪の色で分かるから大丈夫だろうけどよろしくね。学科はコネクトよ。」

レスティアとレティシアであった。

『『『『ウオオオオオ』』』』』

男性陣全員が溜息を拭いていた。

何せ美少女で二人ともスタイルが良い為見惚れていたのだ。

そして紹介が住むと高天原先生がこう言った。

「それじゃあ席だけど・・・アリアさんの隣二つ分空いてるから好きな方を選んで。」

「はい。」

そう言つてその席に向かうとレスティアがキンジの方を見るとこう言った。

「キンジさん、これからもよろしくお願いします。」

「ああ、こつちこそな。」

キンジはレスティアの言葉にそう返すがキンジよ、お前は忘れていないだろうか？
今お前がいるのは家ではなく、学校だ。

それに転校生とそんなに親密そうに話していると・・・とんでもない事が起きるぞ。

「え？・・・レスティアさんが遠山と？」

「どう言う関係?？」

「何か親密そうだね。」

周りがかがやかと音を立ててきた。

しまったとキンジは気づくがもう遅い。

疑惑はゆつくりとだが広まる物だ。

するとある女性徒がレスティアに向けてある事を聞いた。

「あのー、質問いいでしょうか？遠山キンジとはどう言う関係ですか？」

それを聞くとレスティアの答えた言葉は・・・。

「私と遠山さんは・・・一つ屋根の下で一緒に暮らしています。」

『『『『・・・へ？』』』』』

その言葉にキンジは頭を抱え、レティシアはあちゃーと言う顔をしていた。

そして次に出た言葉は・・・。

『『『何ーーーーー!!!』』』』

叫び声であった。

「転校生と遠山キンジが同棲だと!!」

「それってもうそういう関係!?!」

「光先輩だけでも飽き足らずまさか外人にまで手を出すとは!さすがSランク!!

規模が違うわ!!」

「何でキンジ何でキンジナンデキンジ。」壁殴り

一部恨みが出ているがまあ仕方があるまい。

キンジは色んなところでは「女たらし」「フラグメーカー」「恋愛原子核」等と不名誉な称号が幾つもあるのだ。

するとさつきから黙っていた理子がピキーンと目を光らせてこう言った。

「おおお!! もしやキー君はその転校生と同居していることを良いことに夜遅くに部屋ではっこんぱっこんベットのうえで毎晩エロゲーみたいなシチュエーションをやっていたのかー!!」

『『『『何だってー!!』』』』』

理子の言葉に周りは更にヒートアップした。

「それっつつまり遠山キンジは非童貞!」

「さらに服部さん達ともそういうシチュエーションを!?!」

「夜のキンジはベットのうえではRランク級の実力・・・売れるぞこのネタ!!」

「クソクソクソクソクソクソ」壁に頭突き

最早教室は大混乱。

事を收拾することも叶わないと思ったその時・・・キンジは全員にこう説明した。

「あのな・・・俺が非童貞とかそう言うのは無いからな」

そしてこう続けた。

教室の中は最早阿鼻叫喚の世界。

この状況を止めるすべは最早なく二人のスクールライフはドタバタコメディーよろしくの如く一時間目潰れる勢いで続いた。

テスト前は憂鬱だ。

昼休み……。

「ハハハハハハ！そりやお前、皆誤解するわけだぜ!!」

「儂らはそんな関係ではないが偶に行動を共にしておるから誤解されるのかのう?」
「何言ってるんすか?」

学校の屋上にてキンジはホームルームの際に起きたことを有りの仮話すと焰、夜桜、華毘の順でそう言っていた。

……華毘自身は何のことか分かっていなかったが。

キンジはあの後の事を頭を抱えて話した。

「大変だったんだぜ。一時間目潰して迄俺とレスティアの関係について根掘り葉掘り聞かされた挙句二時間目からは男子連中から殺気の籠った目線を撃たれ続けられて散々な目にあつたんだからな。」

「……すいませんキンジさん。ご苦勞をおかけさせてしまつて。」

キンジの言葉にレスティアが謝ると隣にいたレイシアがこう返した。

「何言ってるの姉さん。こいつが空気読まずに爆弾落とすから悪いのよ。それに

姉さんと一緒に寝たっただけで死刑ものなのに生かしてやってんだからありがたく思いなさいよ。」

そう言った後にキンジにある事を聞いた。

「それで・・・あそこでトリップしている連中はどうするの?」

そう言って持っていた箸を向けるとその先にいたのは・・・。

「二////////////////。二」

顔を真っ赤にして俯いている飛鳥、雪泉、紫であった。

キンジの言葉を聞いた後からこの様子なのだ。

「ほっとけよ。どうせ時間になれば気が付くって。」

焔はそう言いながらタッパーに入れてあるチャーハンを食べていた。

「そういえばもうすぐ中間考査だけど皆勉強しているか?」

キンジは弁当に入っているささみ入りサラダを食べている中そう聞くと焔たちはこ

う答えた。

「ああ、もうそんな時期か。嫌になっちゃまうなあ、追試だけはごめん被りたいぜ。」

「僕は夏休み中アルバイトしたり単位や任務報酬の為にここに出ずっぱりしたいから

試験は何か何でもパスさせてやるわい。」

「うちは・・・キンジ教えてくれっすー!!」

華毘がキンジに対して土下座交じりで教えを扱っていた。

「またか・・・まあ今回はレスティア達の勉強も範囲ぐらひは教えなきやいけねえから序に教えてやるよ。」

「助かるっす〜。」

そう言いながらキンジの手を思いつきり華毘は掴んでお礼を言った。

はあと溜息つくがキンジはある事が気になった。

「(何で理子は戻ってきたんだ？あれ程のことがあつてもちやんと戻れるように情報操作していたけど・・・何が目的なんだ?)」

そして何処かの教室の中・・・。

「さあてと・・・そろそろ行動に移るとするか。」

そこにいたのは・・・「武偵殺し」の目付きをした理子であった。

テストだよ～～。

そして中間考査が始まった。

午前中は二日に分けて一般科目テスト。

昼休みを挟んで午後からはスポーツテストが行われた。

スポーツテストの場所は第二グラウンドで行われており見た目は普通だが武偵らしく武器を所持したままテストをしていた。

その理由は……。

「武偵は武器を持ちながら色んなところを縦横無尽で走り回らなければいけなから自分の獲物持ったままどれくらいできるのかを試す。」という理由である。

尚キンジはそれなり（Sランクとしては普通）の成績を修めた後に他のメンバーを見てみると……。

「あ……SSR浮いた。」

キンジはそう言いながらマントを付けたSSRの生徒を見てそう言った。

この人間は走高跳の際に浮遊して飛んでいるかのように見せるが……無理だった。

「何浮いてんだ貴様は——!!!」

何処からともなく木刀がその生徒目がけて一直線に向かつて・・・命中した。

「ぎゃいん!!」

「やるなら相手妨害する方に使えやあ!!」

「・・・それでいいのか?」

木刀を投げてきたのはアサルトの鬼教官事蘭豹先生であった。

他にも綴先生。

愛称がゴルゴと言われるスナイプの南郷先生

一説によればオネエや女性、悪魔や獣人族かという謂れを持つチャン・ウー先生などと言った面子が監視に来ていた。

当てられた生徒は失神してそのままメデイカの生徒が連行していった。

あのまま補修だなどと思ったキンジであった。

—パアン!!

という音がしてキンジはその方向を見ると・・・。

レスティアが走っていた。

・・・胸を結構揺らして。

!!!

キンジはそれを見てさつと横に向き直した。

何せ色んな意味でヤバいと悟ったからだ。

「お疲れ様姉さん。少し鈍ってるわね？」

「はい・・・やはり少し走り込みをしなければいけませんね。」

そう言いながらキンジの所に向ってタオルを頭にふさつと被っているレスティアと喋りながら歩いているレティシアがキンジの所に来た。

「お疲れ様ですキンジさん。やはり現役は違いますね。」

私も頑張らないと言いながらスポーツドリンクを飲みながら座るとキンジにこう告げた。

「後で私は生物の小テストを受けるので帰りは暫くかかります。」

「分かった。正門前で待つてるから一緒に帰るか？」

「はいー！」

キンジとレスティアのこの言葉にレティシアは顔を剥れながら見ているが他の連中はと言うと・・・。

「くそ・・・何でキンジばかり」

「羨ましいぜ。」

「良いなア。私もああいう甘酸っぱい」

「けつ、餓鬼がイチャコラと」

「相変わらずー．．．だねえー．．．。」

「．．．．．」ちよつとチラ見

「あらあ．．．青春だわー。」

十人十色であるがそれなりに羨ましいようだ。

DVDを見るときは静かに。

「……ですね。」

レスティアは体操服から制服に着替えた後インフォルマが使う大視聴覚室に向かった。

「……結構女性が多いですね。」

レスティアはそう言いながら席に座った。

周りにいるのは自分と同じアンビキュラムやインケスタと言った武偵の中では比較的平和な生徒だけが……結構女生徒の割合が多いが座っていた。

そして机に置いてあるプリントを見た。

プリントによれば武偵校の非常勤講師が監修した「遺伝学」についてのDVDを見て問題文の空欄に当てはまる内容を書き取りせよという優しい問題であった。

そして前の方を見ると女生徒の周りできやあきやあさされている男性が目についた。

「ほらほら皆さん。騒がないでちゃんと着席してくださいね。さもないと単位をあげませんよ。」

そこにいたのはアンビキュラムの非常勤講師の小夜鳴である。

若干18歳で海外の大学を飛び級で卒業した遺伝子学者である。

眼鏡を付けた長身のイケメンであり、いかにもトレンディードラマに出てきそうな美青年でありこの武偵校において不知火と同じく常識人で礼儀正しく、誰であつても敬語を話すのだ。

それを見たレスティアは何だか分からなかった。

「・・・彼を何処かで見たことあるような？」

何処だっけと思っていると・・・隣から声が聞こえた。

「よっすー！レスティン!!」

「!!理子!!!」

レスティアは理子を見てびっくりしていた。

何せ『イ・ウー』においては同じ人間同士であつたのでよく話す間柄であつた。

「・・・何故貴方がここに？キンジさんの話によれば貴方は」

「おっと、それ以上は・・・野暮だぜデュランダル。」

一瞬だが理子の目付きが「武偵殺し」の目付きに戻つた。

その瞬間に周りが消えてDVDが上映された、

「後で話そうぜ。場所は屋上だ。」

そう言うのと理子は前に向き直した。

そしてレスティアもそれに従って前を向いた。
机の下でメールを打ちながら。

「理子の奴、何する気だ!!」

「あいつ姉さんにナニカしたら氷漬けにしてコロシテヤルワ!」

あの後レスティアは終わった後直ぐにメールで知らせた後二人は屋上に走って向かった。

「レスティア（姉さん）!!」

二人は慌てて屋上の扉を壊すかのように開けた。

そしてそこで見たものは……。

「こういうのはどおう? キー君も喜ぶよ〜?」

「そ、そんな事出来ませんよ／＼だって……こんな……こんな事〜!!」

「……え?」

二人は何だこれと思った。

何せ目の前にはエロゲーの映像を見せながらそれをキンジとレスティアに置き直さ

せてそう言うのに対し、レスティアは顔を真っ赤にしてその映像をなるべく見ないようにしていた。

「……」

「……一体どうなつてんだこりや？」

「……アタシに聞かないでよ。」

この状況についてこれない二人であつた。

依頼内容。

「いやあー。キー君達も来るんじゃないかなと思つてさ、ちよつとレスティンが喜びそうなゲームを見せたらそりやもうさ」

「もうやめて下さい理子さん。あんなもの見たら私／＼／＼」

理子が笑いながらキンジ達にそう言つてる中レスティアは未だ思い出して顔を真っ赤にしていた。

「それで・・・話つて何だ。」

「話がそれなら私達は帰るわ。」

キンジとレティシアは理子をじろつと睨みつけると理子はこう返した。

「ええ！良いじゃん良いじゃん!!りこりんはずつとレスティンと遊びたかつたんだからさちよつとぐらいさ!!!」

理子はそう言いながら頭に手を置いて鬼の角みたいな感じで指を上げていった後こ
う続けた。

「それに手前らと会いたかつたのは事実だぜ。特にキンジとはな。」

理子は「武偵殺し」の目付きになってそう言うところ続けた。

「アタシハ手前らとちよつと仕事の相談がしてえんだよ。もうすぐ来る奴と一緒にな。」

「もうすぐ・・・?」

「来る奴?」

キンジとレティシアは何だと思つていると・・・下から声が聞こえた。

「理子——!!! デュランダル——!!!」

そう言いながら屋上に来たのはアリアであつた。

「ようやく見つけたわ! アンタら三人纏めて逮捕」

「待て神崎! レスティア達は司法取引で俺の監視付きでこの学校に転入したんだ!」

キンジはアリアの目の前に立ちふさがつてそう言うたアリアはこう返した。

「馬鹿言わないで!! そんなウソ信じられるか——!!!」

「嘘じゃねよ! 綴先生からお墨付きを貰つてる!! 疑うんなら今すぐに職員室に行つ

て確かめて来い!!!」

キンジはアリアにそう言うたアリアは尚も信じていなかったが理子はある事を

アリアに告げた。

「序にりこりんも司法取引で4月の事件はチャラになつたよ。引き換えに

あんたの母ちゃんの証人になる事だけだ。」

そう言うとアリアは開いた口がふさがらなかつた。

「あ……今……何て」

「分からないのお？りこりんはあんたの母親の無罪を証明するって言ってんの。」

「その代わり……アタシと仕事してもらうぞ。」

それを聞いたアリアはこう怒鳴った。

「ふ、ふざけるな！ルパンと仕事するなんて一族の恥」

「それじゃああんたの母親の無実の証言はしないよ。」

それを聞いてアリアはグぬぬぬと唸っていた。

これは確実にアリアの負けだなと悟ったキンジは話を切り出した。

「それで……仕事って何だ？」

キンジはそう聞くと理子はこう返した。

「ほほう、仇のあたしにそれを聞くとはやっぱお前すげえな。」

「今の俺は武偵としての遠山キンジだ。依頼は受けるがこつちにも何かしらの報酬は

払ってもらうぞ。」

「OK。報酬はキンジには最も欲しい情報を渡すぞ。それじゃあ仕事だが簡単だよ。」

理子は目付きを鋭くしてこう言った。

「イ・ウーのNo.2 『無限罪のブラド』があたしの宝物を奪いやがった。それを取り戻してほしい。」

まさかのNo.2から奪還せよという任務であった。

いざ電気とサブカルチャーの街へ。

そして次の日……。

「……来てしまったなあ。」

キンジは俯きながらそう言うのとレスティアはこう言った。

「仕方ないですよ。ここで待ち合わせって言われたんですし。」

「けど何でこんな場所でやるのよ？やるなら人があまりいない場所で

やるべきでしょ？」

レテイシアはそうぶつくさ文句垂らしながらその建物を見た。

少し大きなビルで年代は少し古いタイプであった。

そして周りには……大人数の人間が所狭しといた。

然も全員何かの買い物袋をぶら下げていたり、大型のカメラで何かの衣装なのか

写真撮影していたり、踊っている人間もいた。

ここは秋葉原

一般人にとつての渾名は3つ

一つは「電気の街」

もう一つは「サブカルチャー、オタクの街」

然し武偵校からすれば忌み名とも呼ばれる場所である。

別名「武偵封じの街」

年中人で溢れかえっているため銃が使いづらく、入り組んだ路地が幾つもある為
追跡することが困難を極めている場所である。

キンジ達はその一角でアリアを待っていた。

アリアもここで現地集合することとなっているがとてもじゃないが探すのが
困難である。

そして数分後……。

「やつと……着いた〜。」

「よお、神崎。」

アリアはへとへとになりながらも辿り着いた。

「何なのよここは……人は多いし、アタシを見ていきなり写真撮ったり、『ツインテ』
『アホ毛』『ミ〇だ』とか変な事言ってる連中ばっかでここは何の国よ!?!」

アリアは息切れしながらそう言うが切れるなキレるなど言いたいところだがキンジ
は腕時計を見てこう言った。

「……時間だ。」

そう言うと全員は万が一に備えて武器を（レスティアはベレッタを、レティシアはツアスタバ・C z 100を武偵校転入時に購入）持って構えた。

アリアは万が一の為に小窓から背伸びして監視した後身構えた。

キンジは全員が配置に着いたのを確認した後、扉を開けた。

ここで目にしたのは……。

「「「お帰りなさいませー、ご主人様！お嬢様ー!!」」」

・・・メイドがいる店、俗にいう「メイド喫茶」である。

罨である事も含めてキンジ達は準備していたがどうやら取り越し苦労であった。

「じ……実家と同じ挨拶を……まさか日本で聞くとは思わなかったわ。」

アリアはそう言うがキンジ達はそれを聞いて……。

「「ああ……ブルジョワが……」」

そう言ったのだ。

だがアリアの家とは違い胸元を強調する服装であるためキンジはなるべく見ないようになっているがまた災難が降りかかった。

それは……。

「キンジさんは……ああ言う服好きなんですか？」

「……はっ。」

レスティアがキンジの視線を見てそう言うときキンジはレスティアが着ているのを想像した瞬間・・・ヤバいと直感した。

何せ最近また成長して飛鳥とほぼ変わらないくらいの胸に成長しており最近の服も胸元が少し空いている服が多くあるためこれ以上は危険だと思ったキンジはこう答えた。

「いや・・・俺は・・・もう少しちゃんとした服の方が似合うと思うぞ。」

「・・・そうですか／＼／＼」

レスティアはキンジの答えに満足した様であるがキンジは先程のレスティアがああ服を着ていた時のことを想像して顔を真っ赤にした。

それって・・・フラグだぜ。

「お客様、既にお部屋がご用意されていますのでご案内いたしますね。」

メイドの一人がそう言ってキンジ達を案内させた。

そして少し離れた所に個室に入ったが中はすさまじい物であった。

「・・・これはまた。」

「・・・何と言うか・・・」

「理子の趣味全開ね。」

キンジ達は思い思いの言葉を述べた。

何せ室内はピンクと白を基調とした何処かの一昔前の少女漫画に出てきそうな感じの室内だからだ。

「・・・この店长、何考えてんだ？」

そう言いながらキンジ達は席に座ると案内していたメイドがこう言った。

「それではご主人様、お嬢様、ごゆるりとお過ごしください。」

そう言っつて扉を閉めた。

するとアリアは彼女達を見た感想をこう述べた。

「な、何ヨあのむ・・・じゃなくてあの衣装！幾ら時給が良くてもあれは無いわ!!イギリスでもあんなの着ないわよ!!!あたしだったら絶対着ないわよ、絶対絶対

あんなの着ないわ!!!」

「・・・何で俺達にそんな事言うんだ?」

アリアは早口でそう言うがキンジは何でこつちに向かつて言うのかと訳が分からなかった。

誰も着ろとは一言も行っていないしましてや着させたいとは思っていないのだ。

「(大体お前最初に胸って言いかけたろ?その時点でお前の癖みもろ丸わかりだぞ。)」

キンジはそう思いながらアリアとレスティア達を見比べた。

アリアは全体的に小さい。

最悪小学生、然も中学年だと言われても仕方がないと思えるほど小さいのだ。

まあそこに「小さくて可愛い」と言う連中がいるがキンジからすれば推理は直感よりで直ぐに手を出して協調性の欠片もない武偵と言う印象である。

そしてレスティアであるが最初のキンジとの同居宣言以降、表立って彼女を口説くという人間はいないが裏では彼女が所属している料理部で作る食事が美味しく、

然も物腰が柔らかく家庭的で妹のレティシアのいるテニス部に顔を出したりキンジ

と

一緒に登下校する様子から人気が集まっている。

因みに・・・。

キンジに対しては「女たらし」、「フラグメーカー」、「恋愛原子核」に続いて「巨乳美少女専門のヤリオ」と言う悲しい仇名が増える始末である。

そして暫くすると・・・。

「皆おっ久——！」

「理子様お帰りなさいませ！」

「きやー！お久しぶりー!!」

「理子様がコーディネートしてくれた新しい制服、お客様に大好評なんですよ——！」
如何やらやつと理子が出来てきたようだ。

「理子・・・ここじゃ人気者なのね。」

レティシアは外の様子からそう言っていると・・・。

「ごめ(；。D。)ーん！遅刻しちゃった——！急ぐぞブーーン!!」

首に大きな鈴をつけた理子が飛行機の真似をするかのように両手を広げてる中
レスティアは理子の両手に持っている紙袋を見てこう聞いた。

「あゝ。何ですか理子さん。その袋は？」

そう聞くと理子はニコツとこう答えた。

「ああこれ？ いやあ欲しかったファイギュアとかー、限定版のゲームが発売されてたからさ、ついつい衝動買いしちゃった後に限定もののセールスや服を選んでて遅れちゃったんだあ〜？」

理子はそう言つて何処かの秘密結社が使うような決めポーズをして言うときんじは少し顔をひつかせて片手を握っていたがアリアの場合は・・・。

「・・・。(＃。＼。)」ゴゴゴゴゴゴゴ

アリアは怒り心頭で睨みつけていた。

それも何のそのと言う風に理子は座った瞬間にメイドの一人に注文した。

「んと、理子はいつものパフェとイチゴオレ！ キー君とレスティンとレティシーにはマリアージュ・フレールの春摘ダージリン、そのちびっ子はももまんでも

投げつけといてー。」

理子はまるで水を得た魚のようにすばすばと指示を出した。

自身のホームグラウンドで然も武偵封じの街である利点を最大限に利用して主導権を得ようとしているのだ。

正に今のリコは「武偵殺し」と言われる由縁に相応しい用意周到な人間である。

作戦説明。

「……まさかルパン家とホームズ家が同じテーブルに着いて食事とは
ご先祖様からしたら天国で嘆かれてるわ。」

「そう言うんだつたら今すぐ帰れば……？あんたのお母さんの裁判での
証言しないよ……。」

「それって司法取引の約束違うじゃない!!だつたら今すぐ」

「それやるなら……あの姿で手前を倒すぜ。」

くつと言いながらアリアは出し掛けた拳銃を下ろした。

只でさえここは人が多い為、騒ぎが起これば自分達が不利になるのにあのチカラを
使われたら間違いなく今度こそアリアは死ぬとキンジは直感で理解した。

そして理子は勝ち誇った様子で最初はタワーのようにあつた巨大パフェを
もう半分まで食べ終わっていた。

……鼻にクリームがついていて何か台無しだが。

「それじゃお前ら、喧嘩は後で良いとして、作戦の説明を始めようぜ。……
ここって防諜設備ちゃんとしてんのか？」

キンジはあれっと思ひながら周りを見まわしてそう言った。

大抵こう言う部屋は何かあった時に備えて音が聞こえやすいようにしているのだ。

それだと如何に物音がしたとしても内容次第では聞かれてはまずいんじゃないかと思つていると理子はそれに対してこう返した。

「ああ大丈夫だよここはね．．．元々は風俗営業の個室だったんだ。

だから防諜はしっかりしてるから大丈夫！」

「そうか．．．それならつて．．．理由がひでえなおい。」

キンジは項垂れながらそう言うどレスティアとレテイシアは顔を真っ赤にしていた。

「それじゃあ．．．ここつて／／／／」

「男の人と．．．はううううう／／／／」

二人はそう言つているがアリアは頭を？にしながらもまんを食べていた。

「それじゃあ作戦タイム！」

理子はそう言いながら紙袋からノートパソコンを出して起動させた。

「横浜校外に建てられてあるお屋敷『紅鳴館』。見た目は洋館だけど中身は鉄壁の要塞並みにセキュリティが馬鹿高えんだ。」

その屋敷は地上三階、地下一階の建造物だが地下には幾つもの防犯装置が配備されていた。

然し驚くところはそれだけではない。

「・・・おいおい何だこの計画案はよ。」

それはあらゆる状況を想定し、予定日や時間、気象なども事細かく記した侵入や逃走、アリバイ工作などが記されていた。

これほどの計画を考えると本来なら半年近く考えなければ出来ないものだ。すると隣で見ていたレティシアがそれを見てこう言った。

「あら・・・私が言った事、ちゃんと実行してるじゃない？これなら期間によるけど合
格点を出しても良いわよ？何時から考えたの??」

レティシアはそう言いながらパソコンを操作しているとキンジはある事を聞いた。

「何だよ教えたって？お前教師か何かだったのか？」

キンジはそう聞くとレステシアがこう答えた。

「彼女は私達が『イ・ウー』にいた時に教えていたんです。皆で」

レステシアがそう言うのとレティシアがこう続けた。

「あたし達は組織で自分の腕と力を鍛え上げて目的の領域に至るまでお互い切磋琢磨し合う。それが『イ・ウー』。その中でもあたし達は未だ弱い方ヨ。」

「・・・はあ！お前らでもか!!」

「ええそうよ。」

レティシアはそう言いながらダージリンを飲んでいるがキンジはそれを聞いてマジかよと言いなながら机に突っ伏した。

何せ理子の強さはあの飛行機の中で、レティシアは前回に見たばかりなのだ。

そんな連中でも未だ弱いとなるとこれからの戦いが更に激化するのも時間の問題だと思っっているのだ。

すると理子はこう続けた。

「それじゃあ期間だけど．．．先週ぐらいかなあ。大体それくらい寝ながら考えたよ。」

それを聞いてアリアは目を丸くした。

何せここ迄の計画をたった一週間で考えるあたり矢張り天賦の際だなとキンジはそう思った。

思っていた。

「二週間なら卒業ギリギリつてところね。後は少し詰めれば完成ね。」

レティシアは理子に対してそう判定した。

「それで理子のお宝がある所がーこの地下金庫の中だと思っただけどー一人じゃもう無理ゲーも良いところなんだけどキー君とレスティン達なら何とかなると

思っただあ。」

「……根拠は何だ？」

キンジは理子にそう聞くと理子はこう答えた。

「先ず、キー君はあの状態になれば間違いなく奪える。レティシーはコネクトだから通信でサポート出来るし、レスティンならあたしの方法通りなら間違いなく相手を信用させる可能性が高いと思っただ。」

「……アタシは？」

アリアは理子にそう聞くと理子はふつと笑ってこう言った。

「……次いでだよ〜♡」

「(#。D。)」ガバメントを抜こうとした。

「おいやめろ。話が進まねえぞ。」

理子の言葉にアリアは怒り心頭で攻撃しようとするもキンジがそれを制止させた。

「それで理子。お前のお宝って何なんだ？」

キンジは話題を変えようとそう聞くがそれは……悪手であった。

「……理子の母様がくれた十字架」

「あんた……とことん死にたいようねえ!!」

理子の言葉を聞いてアリアは遂に堪忍袋の緒が切れた。

それもそのはずだ。

何せ自分の母親を陥れた相手が自分の母親の貰ったものを取り返してほしいと言ったのだ。

「あたしのママに冤罪着せといて、自分のママからのプレゼントを取り返させてアンタどう言う神経してんのよ！アタシがどれだけママを取り戻そうと

這いつくばってまで頑張ったのか考えたことあるか!!」

「ちよ、神崎さん！理子さんのご両親は」

レスティアが何かを言おうとすると誰かが肩に触れた。

「キンジさん……」

キンジはレスティアを見て首を横に振った。

「アンタのママは電話すれば声が聞けるしいつでも会えるけどねあたしはママとアクリル板の壁ごしでほんの少ししか」

「……二人とも死んだよ。」

「……え？」

理子の一言にアリアは少し固まった。

「二人ともあたしが8つの時に死んだんだ。……『オルコット家』によって」

理子はそう言いながら顔を俯かせていた。

然しアリアはそれを聞いた瞬間に驚いた。

『オルコット家』って……あのイギリスのIS部隊を窮地に陥れて危うく外交問題になりかけたあの『セシリア・オルコット』の!？」

それを聞いたキンジはある事を思い出した。

それはインターネットのLIVE映像で彼女が行った不正行為や言動、その後の事をニュースで聞いたからだ。

無論これはイギリスの武偵校からすれば関係ないように思われるがこれにより

日本からの要請で財産接收の折彼らが関わってきた組織の調べを徹底的に行うようにと御触れが来たことにより膨大な情報の精査に時間を掛けなければならなくなり彼らからすれば一発殴り倒したいと思う相手である。

「そう、そのな。アタシは今でも覚えてる。お父様がアタシと遊んでいる時に電話が来てな、それで聞いたんだ。『オルコット家』と『カリバーン』ってな。」

最後はアナグラムか暗号かもなと言ってイチゴオレを飲んだ。

「あれは理子が命の次に大切な物なのに……ブラドのやろお!!」

理子は大声を上げながらイチゴオレが入っていたコップを叩いてこう続けた。

「あたしからそれを奪って退学させて拳句の果てに嚴重嚴戒な金庫に

隠しやがって!!畜生が——!!!」

「……これって聞こえてねえよな。」

理子の叫びにキンジは大丈夫なのかと思いつながら外を見た。

「……如何やら聞こえてないのか聞いていても入らないように気を使ってるのかのどちらかと思うがキンジは内心ハラハラしていた。

「それにしても目的のブツがあつたとしてもどうやって入るの？普通に侵入しても駄目ね。奥深くの情報は大まかで然もターゲットは中途半端。データによれば

トラップは何度も配置や種類を変えてるから先ずは内部情報を確実に手に入れないとね。」

レティシアはパソコンの情報を見ながらそう言った。

データによれば場所はしつちやかめつちやかでおまけに種類も豊富で確実に種類と場所を把握する必要があるのだが理子はそれを聞くとこう答えた。

「それなら大丈夫だよーりこりにグッドなアイディアがあるからー！」

「……それってどう言うのだ？」

キンジは恐る恐る嫌な予感を滲み出していた。

「ふっふっふっ……キー君とレスティン、レティシーとアリアには『紅鳴館』にて三人のメイドと執事になってもらいまあす!!」

「……へ？」

キンジ達は鳩が豆鉄砲を食ったよう顔をしてそう言った。

アリアは更にまさかと思ってこう聞いた。

「・・・まさかそれって・・・外のあいつらに・・・?」

「うん、そうだよ。」

理子はその問いにズバツと答えるとアリアは顔を真っ赤にして・・・。

「・・・?でしょ——!!!」

悲鳴交じりの言葉を上げた。

全ては体から始まる。

潜入捜査（スリップ）

暴力団や企業、ナイトクラブ、学校などと言った捜査対象やその関連施設、

関係者がいる場所に入り込んで潜入して情報収集して準備や証拠が揃い次第逮捕すると言った所謂騙し討ちである。

日本では以前までは違法であったが激増する凶悪犯罪対策の一環として適法化したのだ。

因みに武偵校では主に、CVRやインケスタ、レザド、アサルトなどが行っており以前にもお金持ちの息子子女だけが通う事の許されたエリート校に潜入したことがあった。

・・・まあその際にも色々とフラグを建てたが。

今回はそれを泥棒の手段として実行しようと言うのだ。

理子によれば『紅鳴館』の主人でもある「無限罪のブラド」はここ数十年に渡って帰っていないらしく今いるのは管理人と雇われのハウスキーパー*2名である。

だがそのハウスキーパーが二人同時に休暇申請・・・恐らく理子が裏で手を回したの

であろう。

管理人が急遽臨時のハウスキーパーを二人と雑用をもう二人ほど募集しているのだ。そこに派遣会社の営業を装った理子が接触して『紅鳴館』から採用通知を貰ってキンジ達を送り込むという計画なのだ。

そしてキンジ達は後日集まることとなったがキンジは未だメイドカフェにいた。その理由は……。

「さあ!!身体検査ですよ〜!!」

「な、何で脱がすのです!?!理子!!」

「いやさ、メイド服着るんだからサイズ測らないと。」

「それでしたら何で脱がすんですか!?!」

「メジャーで測るの・・・キー君と暮らしてどれだけムチムチになったのか見てみたいから!!」

「それが理由でしょ!!」

「さあ!理子に全てを委ねるんだあ」

「タスケテキンジさ〜ん!!」

「……………」

着換え室の近くであったのだがレスティアの声が聞こえしまいその後の色々と声が聞こえてしまった。

「ほほお……結構大きくなりましたなレスティン。特に胸はレティシー以上じゃない?」

「何で声出して言うんですか!？」

「これなら良いメイド服が完成するんじゃない? 二着作っておこつと。」

「何で二着なんです?」

「え、そりゃあさ……キー君の家で二人つきりになった時にそれで誘惑してゲームみたいにあれやこれが出来るようにさ!!」

「そ……そんな事……するわけないでしょー!!」

理子とレスティアの声が聞こえているが取り敢えず聞かなかつた事にしようと思つたキンジであった。

……特に後半が……。

「さあ次はアリアだよ〜。先ずは胸囲から!」

「あ、あんた嫌がらせのつもり!! あ、あたしが、ががが人よりも若干……

ほんの少し、僅かに発育が遅いからつて……!!」

「はあ？何言ってるのよあんた。どこが僅かでほんの少しって??ほんの少ししか無くてお子様下着を使っているくせによく言うわね。」

「な・・・何ですって——!!!」

「その癖にプツシユアツプブラを付けても寄せれないほどの残念胸が『僅かに発育が遅い』って笑っちゃうわｗｗｗｗｗｗ。」

「あんたやっぱここで逮捕してやるわ——!!!」

何やら今度はレティシアとアリアが何やら言い争いをしているがキンジは呆れた表情をしていた。

確かにそんな台詞を吐いても確実に言い返されると分かり切っていたからだ。

「(然しもまあアリアがそう言うブラ付けてるって知ってるな。)」

キンジはそう思いながらジュースを飲んでいた。

・・・まあ最初にアリアのそれを見たのはキンジだからな。

そして暫くの間何やらカタカタと音がするなアと思っていた。

そして数分後・・・。

「終わったぜー！キー君!!」

理子がホクホク顔で理子が着替え室から出てきた。

丁度キンジがカフェ特性の「リングの果肉が入った萌え萌えケーキ」を

口にしていた。

「おおそれは前に私が作った新作ケーキじやありませんか！それを頼むとはキー君も中々良い目をしてますなあ!!」

理子はキンジの肩を叩きながらそう言うが当の本人はと言うと・・・。

「・・・いや、飲み物頼んだから何か食べておかなきゃなと思ってな。」

キンジはそう思っていたが理子はキンジに向かつてこう言った。

「さあキー君！御覧あれー!!」

そう言うって着替え室の扉が開くとそこにいたのは・・・。

「ウ~~~~」

「これは・・・///」

「意外に・・・ね///」

そこにいたのはメイド服を着たレスティア達であった。

レスとフリルがあしらわれた二段構造のカチューシャ、胸元の開いたワンピースと純白のフリル。

エプロンは白いカクテルエプロン。

短いスカートの中は4、5段重ねのベチコートと本格的な衣装であった。

特にレスティアとレティシアは胸元が見えているため二人とも恥ずかしそうに

隠していた。

そしてアリアは二人のそこを恨めしそうに見ていた。

キンジはそれを見てぼーっとしていた。

無論それは他のお客様やメイド達もであった。

「それじゃあレッスンと行きましょうか!!」

「「・・・レッスン?」」

理子の言葉にレスティア達は頭に?マークを出した。

「今日の前にいるキー君に『ご主人様、ご用件は何ですか?』って笑顔で聞いてねえ。」

「はあ!!」

アリアとレティシアはそれを聞いて何故と想っていた。

二人とつてすればキンジは相手したくない(アリアは嘗て頭突きで失神させられたから) 苦手なタイプなのだ。

「頑張れば出来るよ二人とも!ほらレスティンを見習って!!」

「?」

理子の言葉にレティシア達は何でと思つて前を見るとそこに映っていたのは・・・。

「・・・あの・・・ご主人様・・・ご用件は・・・その・・・何でしょうか?／／／／」

「いや・・・あの・・・その・・・な・・・／＼／＼／＼。」

よく見るとレスティアがキンジの隣で顔を真つ赤にしてそう聞いていた。それを聞いたキンジも何だか恥ずかしの顔か顔を真つ赤にしてそう答えていた。するとレスティアがキンジが食べかけていたケーキを見るとフォークを持ってケーキを切り分けていた。

そしてその一つをフォークに刺すとレスティアはそれを・・・キンジの前に差しだした。

「ア~~~~ン／＼／＼／」

レスティアは恥ずかしながらもキンジの口にそれを向かわせた。

「／＼／＼／」

流石のキンジも顔を真つ赤にしながら・・・。

「ア~~~~ン／＼／＼／」

それを口に入れた。

（~~~~）モグモグ

「お・・・美味しいですか？／＼／＼／」

レスティアは恥ずかしそうにそう聞くとキンジも・・・。

「お・・・おお・・・美味しい・・・ぞ／＼／＼／」

どちらかと言えばあまりの恥ずかしさに味など分かるはずないと思うのだが
そう言わなければかわいそうだなと思ったがキンジはある事を思いついた。
それは……。

「レスティア……ア……ン。」

「ふええ!!」

レスティアはキンジの行動を見て驚くがキンジはいい顔で続けていた。

「ア……ン」

「……ア……ン／／／／」

レスティアも観念したかのようにそれを口にした。

（……）モグモグ

「旨いか？」

キンジは意地悪そうな顔でそう聞くとレスティアは頬をむくれさせてこう言った。

「……キンジさんは……意地悪です／／／／」

レスティアは顔を真っ赤にしてそう言う……レティシアが怒り心頭で
こう言った。

「ちよつとあんた！何姉さんと間接キスしてんのよ!？」

「キ……キスですって——!!!」

それを聞いたアリアは驚いた口調でこう言った。

「何やってんのよあんだ！」

そしてこの後の言葉が・・・場を凍らせた。

「子供が出来たらどうするのよ!!？」

「……はあ？」

何言ってるだと思ってるがアリアはこう続けた。

「何言ってるのよ！キスしたら子供が出来るとママがそう言ってたのよ!!」

間違いないわと言うと理子は・・・優しい顔でこう言った。

「アリア・・・キスしたら子供ってそれ今時小学生でも嘘だつてわかつちやうよ。」

「はあ？何言ってるのよ!!キスしたら子供が出来ることが当たり前でしょうが!!」

ぎやあぎやあ何か言ってるがキンジはそれを聞いて思った事はと言うと……。

「お前・・・ちゃんとした教育受けろよな。」

キンジは頭を抱えてそう言った。

失った仲間。

あの後理子はキンジに執事についてを資料で学ばせた後帰宅することとなった。
・・・アリアは理子に連れられて別口の学習である。

それは・・・。

「流石にアリアの性知識があれだと可哀想だから少し学ばせてくるねえ〜。」
と言って秋葉原で理子が懇意にしているエロゲーの専門店に連行された。

・・・あほな洗脳しなければ良いが。

キンジ達は昼の時刻になっていたため何処かで食べないかと言って秋葉原から
脱出して駅から少し離れたレストランに向かった。

「いらつしやいませー。」

キンジ達はファミリーストランに入ると・・・時が止まった。

全員が見ていたのはレスティアとレティシアであった。

二人とも顔が同じで然も美人である為全員はモデルかアイドルかと思っていた。

キンジはこの状況に不味いと思った。

何せレスティアなら未だしもレティシアは黙っていれば美人であるため余計目立つ

てしまうのだ。

いけないと思いきんじは急いで席に着いてメニューを渡した。

そしてキンジ達が注文を終えた後キンジはある事を聞いた。

「そういやお前等理子に教えてたつて言つてたが如何してあいつはあそこ迄強くなるうとしたんだ？」

キンジはそう言えばと思ひ聞いてみるとレスティア達はお互い顔を見合わせるとキンジにある事を言つた。

「キンジさん。これは他言無用で良いですか？」

「構わない。」

「それじゃあ話すわね。理子があそこ迄強くなるうとしたのは・・・『自由』を得るためヨ。」

「自由？」

キンジはレティシアの言葉に何だそれかと思つたとレティシアはこう続けた。

「理子は8歳の時・・・つまり両親が死んでから監禁されて育つたらしいわ。」

「・・・何だと？」

あの理子かとキンジは疑ひ深く思つているとレスティアがこう続けた。

「理子さんが年齢の割に体が小さいのは満足な食事を提供されなかつたことに伴う

「栄養不足が原因なんです。」

「それとあいつの服を見ていればわかると思うけどあのフリルの付いた服を好んで着ているのは監禁されていた時には襤褸切れの布しか着させられていたことの反動ね。」

「おいおい、ルパン家は怪盗とはいえ名家な筈だろ?」

キングはレスティアとレティシアの言葉に待ったをかけてそう言うがレスティアとレティシアはこう答えた。

「ルパン家は理子の両親・・・つまり三世の死後に没落したそうです。」

「おまけに昔の仲間はそれを知らせていなくてね。情報が漏れないように嚴重だったよね。」

「私は姉さんを探す過程でその人たちにも会ってただけど全員は反応はまちまちだったけど驚いていたわ。」

中東の何処か・・・。

「・・・ルパンが死んだダあ!!??」

何処かの古びた酒屋でレティシアはその人間にそう報告した。

その人間は目元迄帽子で隠し古びたスーツを着た白髪の男性であった。

「何時だ……?」

「9年前に……。」

「そうか……。」

男はそう言うのと煙草を吹かしているとレティシアはこう続けた。

「彼には子供がいたわ。名前は『峰 理子』」

「……はあ!!まさかあいつ」

「貴方の知っている人間じゃないのは間違いないわよ。」

「……それが聞けただけあいつの鼻を開かせてやったな。」

ヒヒヒヒと笑いながら酒を飲むとレティシアはこう聞いた。

「……『次元 大介』。貴方はこれからどうするの?」

白髪の男性……次元 大介はこう返した。

「俺はもう年でな。仕事を辞めて弟子と一緒に世界中を渡り歩いている

最中だが……寄って行くのも悪くねえかもな。」

その時の次元の目から……光る物が流れ落ちるのが見えた。

日本の山中……。

「……あ奴……彼岸にへと逝ったか。」

「ええ……」

レティシアはそう答え乍ら仏の人形を木で作っている男にそう答えた。

「泥棒のあ奴らしいな。」

「え?……」

「あ奴は自由が好きで風のように現れて……そして去って行く雲のような

男であつた。」

「まさか拙者等にまで黙って去り、剩え子供がいたことすら秘密にするとは何とも

あ奴らしいな。」

「……最後くらいは友として……語り合いたかつた。」

そう言いながら仏像を作る彼……「石川 五右衛門」を背中から見ていた。

東京の何処か……。

「随分高そうなマンションねー。」

雨が降る中レテイシアはそのマンションに向かった。

そしてその中の一部屋にあるインターホンを鳴らした。

『……誰だ?』

向こうから男の声が聞こえるとレテイシアはこう聞いた。

「貴方がICPO日本支部幹部『銭形 幸一』ですね?」

『そうだが誰だ……?』

「……ルパン三世の所在を掴みました。」

『!!』

「では」

『待て。』

そう言うとガチャと言う音が聞こえた。

「……入れ。」

そこにいたのは70を超えても鍛えられていた銭形 幸一であった。

「それで……ルパンは何処におる?」

銭形がそう聞くとレテイシアはこう答えた。

「ルパン三世は．．．死にました。」

「嘘言うな!!」

銭形はそれを聞いて机を叩いてこう怒鳴った。

「アイツガ．．．ルパンが死ぬなど!!．．．今までだって．．．

今度も!!．．．」

「本当です。」

「!!．．．くう!!」

銭形は悔しがっている中レティシアはある事を告げた。

「ルパン三世には子供がいるわ。」

「!!」

「その子は父親を越えると息巻いてい武偵として活動しているわ。」

「．．．．」

銭形はレティシアの言葉を黙って聞いていた。

「それじゃあ。」

「．．．待て。」

銭形はレティシアにそう言うところ聞いた。

「その子は．．．笑っているか?．．．心の底から。」

「……ええ。」

「そうか……ありがとう。」

銭形はそう言った後無言でレティシアを返した。

「……ルパン。」

その時の銭形はまるで長年の友人を無くしたかのような喪失感を覚えた。

「まあこんな所ね。先代は良くも悪くも……恵まれていたつて事ヨ。」
レティシアの話にキンジは何も言えなかった。

幾ら悪党でも人はちゃんと見てくれていたことだなと思いつながら……。

強襲。

「理子を監禁したのは『無限罪のブラド』。そいつが親戚だと偽って理子を監禁したのよ。それもフランスからルーマニアまでの長い旅路の果てにね。」

レティシアはそう言ってレモネードを飲んだ後こう続けた。

「そして理子が脱走して『イ・ウー』に匿われてね、後を追ったブラドを今のボスが返り討ちしたのよ。」

「だけど理子を諦めきれなかったブラドがそのボスとこう言う契約をしたのよ。」

「・・・契約？何だ?？」

キンジはそう聞くとレティシアはこう答えた。

「『自分がナンバー一になったら理子を返してもらうがもし理子がその間に

初代ルパンを越える存在にまで昇華した時は諦める。』っていう契約よ。」

「・・・成程・・・だから理子はあの時。」

『曾お爺様を越えるために』

あれは自分の自由が掛っていることに対する恐怖の裏返しだったのだとキンジはそう思った。

・・・たとえそれで人間を捨てたとしても・・・。

「それとロイミュード技術は元々ブラドの初期段階の研究データを今のボスが完成させたやつなのよ。それが逆にブラドのプライドを傷つける結果になったのよ。」

・・・如何やらブラドはそれに対しても怒っているのかもしれないと言ったが・・・当たり前だと思った。

何せ自分の研究を横取りされたのだから。

「それともう一つあるわ。」

「・・・もう一つ?」

レティシアが何やら意味深な表情をしたのを見てキンジは何事だと思っ
て聞くと・・・

「それは・・・」

「あれ?遠山君にダルクさん?どうしたんです、こんな所で?」

「あ・・・小夜鳴先生。」

レティシアが何か言う前に横から小夜鳴先生が声を掛けた。

「ええと・・・これは・・・。」

レステイアはどう言おうかと迷っていた。

何せ泥棒の準備をしていたなんて馬鹿正直に言えないのだ。

如何したのかと迷っている中キンジはこう返した。

「少し買物に付き合ってたんです。もう夏ですから色々。」

などと言うと二人はこう答えた。

「ええそうですね。」

「はい、そうです。」

そう言うのと小夜鳴は・・・言いくそんな表情でこう言った。

「そうですか、子供もできてますからその準備で忙しいんですね？」

「「「プフ——!!!」」」

小夜鳴先生の言葉にキンジ達は飲んでいた飲み物を吐いた。

「ええ!!?どうしたんですか??」

「ちよつと待つてください小夜鳴先生!! 一体どう言う意味ですか!?

今のは!!?」

キンジは小夜鳴先生に問い詰めると小夜鳴先生はこう返した。

「ええとですね・・・噂が流れてるんですよ。『遠山キンジに子供が出来た』

って・・・。」

「一体何処からですか!？」

すると小夜鳴先生はこう答えた。

「た．．．確か．．．武藤君辺りだったかなあ。」

ハハハと小夜鳴先生は苦笑いしていると．．．キンジは怒りの表情でこう言った。

「．．．武藤の野郎．．．次会ったら．．．ククククク」

キンジはそう言いながら笑っているのを見て少し後ずさりするとレスティアは話題を変えようという聞いた。

「そ、そう言えば先生。どうしたんです!?こんな所で。」

そう聞くと小夜鳴先生はこう返した。

「ああ、少し論文を作るのに必要な書物を買った帰りですよ。」

そう言つて鞆から何かを取り出そうとした瞬間．．．。

バリーンと音がした。

「きゃあアアア!!」

店員の一人が悲鳴を上げたのを聞いてキンジ達は武器を取り出すとその犯人．．．

いや．．．その正体が分かった。

圧倒的な殺気。

だが何処か気品を漂わせる体。

そして100キロを超えかねないほどの巨体。

それは絶滅危惧種「コーカサスハクギンオオカミ」であった。

—ウオオオオオオオオオオン!!

そのオオカミの遠吠えと同時にキンジ達に向かっていった。

まるで・・・獲物を見つけたかのように。

オオカミとの戦い・・・PART 1

「皆さん！ここは私達に任せて早く逃げて下さい!!」

『ウアアアア!!』

レスティアの言葉に全員が我先にと離れて行った。

「俺が奴を引きつけるからレティシア！能力で奴の動きを封じてくれ!!」

「言われなくてもやるわよ!!」

キンジの指示にレティシアは文句を言いながらそのオオカミの後ろに向かおうとした。

するとそのオオカミはキンジ目掛けて突進してきた。

「くっつ!」

キンジはそれを後ろに備えられている脇差を鞘ごと使って防衛した。

「グワーツ!!」

然し脇差の鞘は粉々に砕けたと思ったたらそのままキンジは吹き飛ばされた。

「くそが!!」

キンジは毒付き乍ら嫌な顔をしていた。

「(脇差の鞘がぶっ壊れちゃった!!あれを諸に受けるのは危険だ!!)」
キンジはそう考え、銃を引き抜いた。

猛獣駆除は武偵の仕事の中でも辛い仕事の一つである。

今回のように突然襲われた際、最悪、無垢な動物を殺さなければならぬ。

・・・まあ、ジビエにして売る奴もいると言ったらいるが・・・。

「(そういうのをレスティアの前じややりたくないんだよなア)」

元々レスティアはそう言う非情な手段をするところを見せたくないと思っ
ているが今は有事である。

・・・仕方がないと割り切るしかなかった。

するとオオカミが小夜鳴先生の方を見ると・・・。

グルア!!

「ヒイイ!!」

小夜鳴先生はそれに怯えて逃げようとする。するとオオカミは小夜鳴先生に体当たりした。

「ウワア!」

小夜鳴先生はそのまま弾き飛ばされると持っていた鞆をオオカミは口に加えて持ち去った。

「ああ、私の研究資料!!」

小夜鳴先生は右腕を庇う様にしてオオカミが逃げに行った方角を見ていた。

「大丈夫ですか!? 小夜鳴先生!!」

レスティアがそう聞くと小夜鳴先生はこう返した。

「私の事よりも研究資料をお願いいたします!! あれは論文作成に必要なんです!」

小夜鳴先生は泣く一歩手前の表情でそう言うがもうオオカミは遙か彼方に逃げ去ったような感じで追うと言っても何処にへと思っているとレティシアがノートパソコンを

開いてこう言った。

「今、ここら一体の防犯カメラをチェックしてるからもう少し時間を頂戴!!」

「居場所が分かってもそこからとんずらされりやどうしようもねえぞ!!」

キンジはそう言うのと鞆からザビーが出てきた。

ザビーはキンジに何か言いたそうな雰囲気で周りを飛んでいた。

すると・・・何かエンジンの音が聞こえた。

「「??」」

キンジ達は何事だと思つて外を見るとそこには・・・。

『『αEXAS』!!』

それはキンジの愛車「αEXAS」が単独で来た音であつた。

キンジは何でと思っているが今は考えるよりもやる事を決めた。

「レテイシア、お前はレスティアと残ってナビを頼む。レスティアはここで小夜鳴先生の治療と援軍を頼む！」

「分かったわ。」

「・・・気を付けて下さい。」

レテイシアとレスティアがそれぞれそう言うとキンジはαEXASに乗って動かし
た。

オオカミ狩りの始まりだ。

オオカミ変貌。

『キンジ！ 奴は如何やら近くのコンビニの監視カメラで行方を晦ましたわ!!』

レティシアが無線でキンジにそう伝えるとバイクに乗っているキンジはこう返した。

「分かった！ その周囲に隠れられる場所とかあるか!？」

キンジはそう聞くとレティシアはこう答えた。

『有ったわ！ その近くにあるマンションの工事現場!! そこよ!!!』

『それと小夜鳴先生は姉さんがちゃんと治したから徹底的に暴れなさい!!』

「ああ!!」

レティシアの言葉にキンジはホツとした様子で返事をした後その建物に向かった。

「……だな。」

キンジはバイクから降りて中に入った。

そしてキンジは辺りを見回してみると肩に乗っているザビーがブブブと

音を鳴らしていた。

「何だ？」

キンジは何事だと思つて後ろを振り向くと……。

グアアアアア!!

「どわ!!」

キンジは驚いて避けると襲つてきたのは……。

「あのオオカミ……後ろで隠れてやがったのか。」

キンジは毒づきながらもある推測を立てた。

「（恐らくあいつは何かしらの訓練を受けてるやつだつて事は……ここに飼い主がいるつて事かよ!!）」

マジかよと思いながらもキンジは目の前にいるオオカミに的を絞つた。

そして暫くすると……。

グアアアアア!!

オオカミがキンジ目掛けて突進してきた。

然しキンジは慌てずに……銃を構えて……るふりをして腰に差してある脇差を

オオカミ目掛けて突き刺した。

グオオオオオオン!!

オオカミは突き刺した事により後ろに下がると・・・キンジはある事に気づいた。それは・・・。

「あいつ・・・血が出てねえ。」

キンジがオオカミ目掛けて刺した脇差の刃に・・・血が付いていなかったのだ。するとオオカミは空に目掛けて雄叫びを上げた次の瞬間・・・様子が変わった。

グオオオオオ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇!!

オオカミの体が膨張した次の瞬間にそれは起こった。

白い体毛は灰色の装甲で覆われ始め。

四本足であった足が二本足に変わり。

しつ尾は刃が生えて付け根には鞭のような材質に変わり。

顔はイヌ科の顔からバイザーの付いた人型に変わった。

「・・・おいおい、マジかよ・・・。」

それは嘗ての理子の変身と同じであった。

オオカミ? だったものはキンジを見るや否や天目がけて咆哮した。

「GUUUUUUUUU!!」

「!!ザビー!!」

キンジはヤバいと悟ってザビーをブレスレットに付けた。

『HENSIN』

ブレスレットから音声が出了瞬間キンジの体から装甲が光の中から現われた。

そして纏い終わった瞬間ザビーの羽を回した瞬間に・・・それが襲い掛かった。

「GUGYAAAAA!!」

『CAST OFF』

「GYAAA!!」

ザビーの音声と同時に装甲が弾き飛ばされた瞬間にそれも装甲に当たって飛ばされた。

『CHANGE WASP “ZABEE”』

そしてキンジはそれを見るとこう言った。

「さあてと・・・バラすか。」

そう言いながらキンジはそれに突っ込んでいった。

バイク変身!!

「ウオラア!!」

キンジはオオカミ・・・イヤ、「トルーパー」を殴り飛ばした。

「GUOOO!」

トルーパーはそれをまともに受けて吹き飛ばされるも・・・。

シユルルルウルとテイルブレードが近くにあった柱に巻き付いて衝撃を緩和させた。

そして着地してキンジに目がけて剣を抜いて襲い掛かった。

「GURUAAA」

「ウオつと。」

キンジはそれを回避しながら攻撃しようとするも・・・。

「GUA!」

トルーパーもそれをしゃつと回避した。

そしてトルーパーは更に銃を出して辺りに構わず撃ちまくった。

「アブね危ねえ!!」

キンジはアタフタと慌てながら物陰に隠れた。

何故キンジも応戦しないのかと言うと……。

「ああ糞！こいつ武器なんて一つもねえもんなあ!!」

これが原因である。

元々ザビーは近接格闘特化型であり徒手空拳を中心とした戦闘しか出来ないのだ。その分機動力は高いが矢張り欲しい物である。

防人達はそれを知っておりキンジの戦闘データが纏まり次第、製造されることとなった。

だがそれまでは……矢張り徒手空拳しか武器が無い。

「……如何すりやあ良いんだよおい。」

キンジは天を仰ぎながら考え事していると……トルーパーが襲い掛かってきた。

「ああもう！男は根性だ!!」

少しやけそ気味に聞こえるがキンジは物陰から出ようとする……外から何かがある音が聞こえた。

「？」

「……何だ？」

トルーパーとキンジは何だと思つて外を見ると……。

バイクがトルーパー目掛けて突進してきた。

「GUGYAAAA!!」

トルーパーはいきなりのことに対応しきれずに飛ばされるとバイクはキンジの元に滑り込むように止まった。

「・・・乗れってか?」

そう言えばとキンジはある事を思い出した。

「これってライダーシステムと連動できるって書いてたなア。」

そう思いだしながらそのバイクに乗ると・・・またとんでもないことが起こった。

『CHANGE』

「は?」

キンジはその音声を聞いた瞬間に何だと思ったその時!!

バイクが変化した。

バイクの外側にハチのような外装が加わったのだ。

前面部分はハチの口のような鋭い歯が現われ。

座席部分の左右には薄い羽根のような装甲が。

そして後方部分には蜂の尻尾のような物が現われた。

『RAIDAR WASSP』

バイクからそう言う音声の流れた瞬間にバイザーから情報がインストールされた。

「・・・成程、そう言う事か!!」

キンジはそう言いながらバイクをトルーパーに目標を合わせると・・・エンジンを吹かした。

「G A A A A A A A A A!!」

トルーパーはバイクを見て怒り狂いながら突撃しようとするも・・・バイクの口の部分が開いてトルーパーに突撃した。

「G U O O O O O O」

口に挟まれたトルーパーは何とকাশようとキンジを攻撃しようとする・・・。

「やらせるかよ!!」

キンジはバイクを浮かしたまま柱目掛けて走り続けた。

すると・・・座席部分についていた薄い装甲が羽のように開いて空を・・・飛んだ。

「ウオオオオオオオ!!」

「G A A A A A A A A A」

そのまま天井を突き破りながら上に飛び・・・屋上を突き破った。

そしてトルーパーを離すとキンジはバイクから身を取り出してボタンを押した。

そしてトルーパーがキンジのバイクを掴もうとした瞬間に又もや口で挟んだ瞬間に

キンジは右腕を思いっきり振りかざしてこう言った。

『RAIDER STINGER』

『ライダー ステイング』!!』

そしてそれをトルーパーに叩きつけた。

「G I I G A A A A!!」

「これで終わりだああ!!」

キンジはそう言いながら下まで落ちて行って・・・トルーパーを叩きつけた。

そして爆発した場所に残っていたのは・・・。

キンジとバイクだけであった。

事件の終結と兜の締め直し。

キンジはあの後小夜鳴先生の鞆を回収した後レスティア達がいるレストランに戻った。

すると周りにはパトカーや武偵校のレピアの生徒たちが周りをうろついていたり現場検証をしていた。

キンジはバイクから降りると身分証明書を見せて中に入るとレスティアがキンジを見るや否や抱き着いてきた。

「キンジさん！」

「おわ！」

キンジはいきなりのことであつたが勢いを殺すために回転して難を凌いだ。

「良かったあ、心配してんですから。」

「悪いな。レスティア・・・周りの目も考えてくれるか？」

キンジはレスティアにそう言つて周りを見まわさせると・・・。

何だか生暖かい視線を感じさせる光景であつた。

「
／
／
／
／
／
／
」

レスティアは顔を真っ赤にしてキンジから少し離れた。

「……何だか甘酸っぱい空気が周りに漂っているのを感じるが恐らく気のせいだろうと思う。……多分。」

「ああ、遠山君！大丈夫でしたか!!」

その空気が分かっているのかいないのか分からないが小夜鳴先生がキンジを見てそう聞くとキンジは鞆を小夜鳴先生に渡した。

「はい、中身は未だ確認していませんが取り返しました。」

「ああ、ありがとうございます!!これで中身も無事なら論文が書けます!!!」
そう言いながら小夜鳴先生は鞆を開けて中身をチェックした。

「……大丈夫でした。ありがとうございます、後でお礼は必ず」

「ああ良いですよ。今回は偶々そこにいたんで。」

「いやそれじゃあ申し訳ないからどうだろう、近くの甘味屋で奢りましょうか?」
レスティアさん達も如何ですか?」

「へ！宜しいんですか?」

「はい。」

「それじゃあお構いなくね。」

小夜鳴先生の言葉にレティシアがそれじゃあと言って三人はそのままその甘味屋に

向かった。

「はあくゝ。食べたわね、姉さん。」

「はい、あそこのパフエは結構美味しかったですね。」

「小夜鳴先生って甘党なんだな。」

キンジ達は家路に向かいながらそう言った。

「それにしてもオオカミがロイミュードになるとはな」

「はい、一体だれがそんなことを？」

キンジとレスティアはお互いそう言いあうがレティシアがこう口を開いた。

「多分ブラドよ。」

「!!」

キンジとレスティアはそれに驚いている中レティシアはこう続けた。

「そう不思議じゃないわ。ブラドはオオカミを使って世界中の情報を

仕入れているのよ。恐らくあれもその一体ね。」

「・・・世界中って・・・何処の数字のスパイだよ。」

キンジはそう言つてツツコミを入れるとレティシアはこう続けた。

「恐らくブラドはそれを部下がやられたのを知っていると思うわ。今回の任務はちよつとじゃすまないほど大変かもしれないわね。」

「・・・お前よく知ってるな。ブラドの事。」

キンジはそう聞くとレティシアはこう返した。

「あたしたちの祖先から続く文献にそれがあつたのよ。『ブラドは科学を使つて

超能力を上回る発明をしている』つてね。1888年に初代ルパンと初代ホームズの戦いの際に双子のジャンヌダルクもお互いルパンとホームズの派閥にそれぞれ入つていた際に奴と遭遇したのよ。その時だけは共闘したけど一つだけ言うわ・・・奴は正しく天才ヨ。」

それに気を付けてとそう言つたレティシアの表情を見てキンジは気を引き締めて対応しようと考えた。

相手の大切な人の顔は・・・相手を激怒させるぞ。

7月13日・・・。

等々潜入作戦が始まった。

キンジ達はこれから数日間横浜にある「紅鳴館」に潜入することとなった。

作戦行動の期間中は理子が事前に提出した『民間の委託事業を通じた

チームワーク特訓』という大義名分を掲げているため欠席については何とかなりそうである。

潜入におけるフォーメーションについては以下の通りである。

キンジ、アリア、レスティア、レティシア・・・潜入、工作

理子・・・作戦立案から機材の調達、輸送を主にした後方支援兼司令塔

という編成となった。

朝早くに学園島から外界に通じられているモノレール乗り場の駅前でキンジ達は理子と待ち合わせをしていたが・・・一つだけ大丈夫かという人間がいた。

それは・・・。

／／／／あ・・・あんな・・・アンナあsだd s f g d g h f h g f j g j l k k k g

h j f s s !!」

アリアがこういう状態なのだ。

如何やら理子が見せたであろうエロゲーのエロシーンやエロアニメなどを見せて性教育を徹底的に仕込まれたことにより頭がオーバーヒートしているようだ。

「これって大丈夫なの？」

レティシアは呆れた表情でそう言うがキンジはこう返した。

「まあ、落ち着けば元に戻るだろうな。それまではこっちに害は無いから良いけどな。」

「いえ、それは良くないと思いますか？」

キンジの言葉にレスティアは駄目だろという表情でそう言った。

そして暫くすると・・・。

「キー君、レスティン、レティシー、アリア、チヨリーツス！」

理子の声があったので振り返るとそこにいたのは・・・。

「——!!カ・・・カナ!?!」

キンジは驚いた表情でそう言った。

目の前にいるのは・・・見た目だけでも絶世の美女と言ってもおかしくない顔立ちをした理子であった。

キンジは金縛りにあったかのような表情をとりながらこう言った。

「おま・・・それ・・・何で・・・」

「くふっ。理子さ、ブラドに顔バレされちゃってるからさあ。防犯カメラに写って

ブラドが帰ってきた時にバレないようにするために変装したんだ。」

「だったら他の顔になれ！何で・・・なんでよりもよつて!!」

キンジは声を荒げながらそう言うと言理子はこう返した。

「カナちゃんが理子の知っている人間の中で世界一の美人さんだからだよ。それに

キー君にとってカナちゃんは大切な人だからそのお顔で応援しようと思ったの。

怒った」

理子が言い終えた瞬間に・・・ヒュンと言う音が聞こえた。

その音の正体はキンジが持っている脇差が理子の首元に斬りかかる一歩手前の

状態であった。

「おい・・・理子。」

「?・・・何?!!」

理子は少し顔を青くして聞くとキンジはこう言った。

「今回は許すが次やったら・・・その首たたつ切るぞ。」

「!!・・・は・・・ハイ。」

キンジの殺気に流石の理子も恐怖して返事するしかなかった。

そしてキンジは脇差を鞘（新調した）に収めると自動改札に向かった。

「な．．．何ヨあれ。遠山キンジの奴あの顔を見て．．．一体誰なのかしら？」
アリアは何事だと思いいキンジのあの表情に疑問を抱いた。

「待つてくださいよ!!キンジさ〜ん!!」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

キンジを追うようにレストエリアとレイシシアは慌てて荷物を持って向かった。

そして殺気を浴びせられた理子はと言うと．．．

「へえ．．．やっぱやるじゃん。キー君は」

そう言った理子の表情はまるで．．．獲物を見つけた獣であった。

そしてそれをはるか彼方に見ている者達がいた。

「あの子が師匠が言っていた娘さんかなあ？」

「ああ、そうだろうな。」

そこにいたのはスナイパーライフルで監視していた薄い金髪の少女と

茶髪の少年であった。

茶髪の少年は綺麗な刀を手入れしながら返事をした後こう言った。

「そろそろ移動するぞ。ここだと何時バレるか分からねえからな。」

「了解。・・・早く会えるといいなア。」

そしてそう言った瞬間に・・・二人は何処かにへと消えた。

いざ敵地へ。

「……大丈夫ですか？ キンジさん。」

「ああ……ちよつと……だがな。」

キンジ達はあの後横浜東北線に乗った。

キンジは理子から離れて座っている所にレスティアがそう聞くがキンジは少し浮かない顔でそう答えた。

「あの……もしかしたら嫌ならいいんですけど聞いていいですか？」

「……カナの事か……」

「……はい……」

レスティアは言いづらそうな感じでそう聞くとキンジはこう答えた。

「カナは……俺にとつて……家族みたいな……そんな存在だ。」

「……家族ですか……？」

「ああ……」

キンジはそう言うくとレスティアを見てこう言った。

「今の家族は……お前やレイシアに飛鳥、雪泉姉や仲間たちがそうだけだな。」

そう言いながらキンジはレスティアの手を握るとレスティアもそれに習うように握り返した。

因みにそれを着ていたレテイシア達はと言うと・・・。

「あいつまた~~~~!!」

「何よあの空気。」

「これはまた甘々ですなあ。」

レテイシア、アリア、理子はそれぞれその光景を見ていた。

そして目的の「紅鳴館」に着いたキンジ達がまず初めに思った事は・・・。

「・・・呪いの館か?ここは。」

キンジが先にそう思った。

昼なのに薄暗く、周りは鬱蒼とした森の奥にある館はまるでホラー映画に出てきそうな雰囲気漂っている。

周囲を囲む鉄柵は黒雲目掛けて真っ黒な鉄串が突き上げており、内側には茨の茂みが柵一面に敷き詰められている。

おまけに周りは霧が靄のように包まれていて最早今すぐにでもホラー映画出来そうな場所である。

バサササササ!!!

「きゃああああああ!!」

「ふにやああああ!!」

するとレスティアが叫び声を上げてキンジに掴まった。

序にアリアもそれにびつくりして悲鳴を上げた。

「如何した!?!レスティア!?!」

キンジはレスティアが自分に泣き顔でしがみ付く姿を見て少しくらっとしながら

何事だと思つて聞いてみるとレスティアは黙つてそこに指さした。

その先は……。

「何だ……蝙蝠か。」

音の正体は蝙蝠であつたがレスティアはそれでも放すことが出来なかつたキンジは

やれやれと思ひながら頭を撫でながら落ち着かせた。

序にアリアはうつ伏せになりながらこう言つていた。

「怖くない怖くない怖くない怖くない怖くない。」

……これで大丈夫なのかこのメンバー。

気を取り直して理子がちよつと引き攣った顔でインターホンを鳴らした。

「すみません。正午からの面会のご予定をされているものです。家事のお手伝いさんを2人とサポーター2人を連れてまいりました。」

『は〜い、今行きま〜す。』

向こうから男の声が聞こえた後扉を開けたその人間は・・・。

「ねえ遠山キンジ。」

「何だ・・・レティシア。」

「この作戦・・・失敗したんじゃない?」

「ああ・・・。」

「い、いやー。意外なことって・・・ありますね(；。∩。∩)」
小夜鳴先生だった。

「間違いなく失敗だ。」

仕事の説明。

小夜鳴先生は館のホールにキンジ達を案内するがそこにはオオカミが槍を啜えている年代物の旗と二頭の狼が混ざり合うかのようにつまえているようなメダルが壁に飾られていた。

アリアはそれを見て怯え切っていたがキンジ達はもうあきらめると言わんばかりに小夜鳴先生を見ていた。

まああの本人はと言うと・・・。

「いやー、この間のことがあったからキンジ君達が来てくれるなんて

よかったですよ。私この研究室を借りているうちに管理人にされてしまいましたね、そりゃあハウスキーパーさんが幾つかやってくれますけど私、研究に没頭しすぎてしまうと周りが聞こえなくなる口でして、この間みたいに狼や不審者が入られたりしたら溜まったものじゃありませんからねえ。」

良かった良かったと言いながら小夜鳴先生はギプスを着けていない方の腕で頭を掻きながらほっとしていた。

「——いえ、驚きましたねえ。まさか同じ学校の教師と生徒だったなんて。」

「いえ、私は非常勤の講師でして、本業は科学者何です。」

派遣会社を装っていた理子は困惑気味で言った言葉に小夜鳴先生は首を横に振りながらそう答えた。

「然しこれは話のタネになりますね。まあ……この二人が契約期間中にお戻りになれば……の話ですが。」

理子はブラドの現在の位置情報を知ろうとすると小夜鳴先生はこう答えた。

「いや、彼は今とても遠くにおりまして。ここしばらくは戻ってきてないですよ。」

「……(……)……」

その言葉を聞いてアリア以外の全員がほっとしていた。

「……この本来の御主人はどう言うお仕事をされて？」

その言葉に小夜鳴先生はこう答えた。

「ああ、確か本人によれば生物関係の仕事についているようですが途轍もなくブラックな企業らしく未だ帰れないそうです。」

「それ……厚労省に直訴したらよいのではないですか？」

理子は流星にそれはと思いがらそう返すと小夜鳴先生はこう答えた。

「いえ、その分給料は良いのだと言われてますが恥ずかしながら私は彼に一度も

あつた事が無いのです。私と彼はとても親密なんですけどね。」

小夜鳴先生がそう言う言葉を聞いて全員が？を浮かべていた。

・・・それを聞いて疑問に感じたキンジ以外は。

「それでは掃除とかはハウスキーパーが作っている資料を見れば分かりますがこれだけは口頭で伝えておきます。」

「・・・何でしょうか？」

キンジは小夜鳴先生の言葉を聞くとこう答えた。

「いえ、簡単なこと何ですが食事についてですが基本串焼き肉で結構ですが焼き方は表面が軽く炙る程度のレアでニンニクの入った香辛料は比較的に入れないで

欲しいんです。」

「・・・は・・・はあ。」

それを聞いてキンジは脱力した様子でそう言うのと小夜鳴先生はこう続けた。

「それと私は研究で多忙ですので暇なときは・・・遊戯室にビリヤード台があるんです。ラシヤはあんまり使わないので新品ですので好きに使ってくださいね。」

そう言い終わると小夜鳴先生はこう締めくくった。

「それじゃあ・・・夕食の時間まで地下の研究室にいますのでそれでは!!」

と言いながらどひゅんと言う勢いで下に降りて行った。

そしてキンジ達は広いホール（理子は既に帰った。）に残ってしまいお互い顔を合わせるどころ言った。

「・・・それじゃあ・・・やりますか。」

「そうですね。」

「ここにいてもやることないし。」

「・・・うん。」

そしてキンジ達は着替え室にへと向かった。

朝の一コマ。

それから3日後の朝……。

「ふあゝあ。朝か。」

キンジは朝早くに起床した。

そして眠気眼でベッドから出た後顔を拭いて目を覚まさせるとクローゼットからちよつと厚手で略式の尾が短い燕尾服を着た後キンジは外に出て新聞紙を取った後

台所に向かった。

そこにいたのは……。

「おはよう、レスティア、レティシア。」

「おはようございます。キンジさん。」

「アンタ今日も早起きねえ。」

キンジの言葉にレスティアとレティシアがそう言つて調理をしていた。

レスティアは串焼き肉を焼き、レティシアは自分達の朝食を作っていた。

そしてキンジは地下に続く螺旋階段を降りて下にある研究室の扉を叩いて

こう言った。

「小夜鳴先生、もうすぐ朝食のお時間ですよ。」

『……ふあくくあ。もう朝なんだ。やっと論文が完成したよって……アアア!! 涎が

!!!』

小夜鳴先生はどうやら寝ている際に論文に涎垂らしてしまったようだ。

「……出来たらまた呼びますね。」

『……うん（ノ口、）……。』

「（……完全に落ち込んだなこりや。」

キンジは小夜鳴先生の状況を察した後キンジは上に戻って台所に戻った。

「あら……小夜鳴先生は？」

レティシアがそう聞くとキンジはこう答えた。

「……自分の涎で論文仕立て直してる。」

「……ああ……ね。」

キンジの言葉にレティシアは何となく察しがついた表情をしていると……。

「……オハヨウ。」

眠気眼どころか未だ夢の中に彷徨っているアリアが起きてきた。

……然もエプロンの紐が逆さまになっていた。

「あらあらアリアさん。少し起きて下さいよ。顔を洗って着替えなおして

ください。」

「うにゃあああ……。」

アリアはレスティアの言葉に未だ寝ぼけている様子で部屋に戻っていった。それを見ていたキンジとレティシアはお互い顔を見合わせてこう言った。

「あの子あれで大丈夫かしら?」

「……知るか。」

「今日の朝食は蝦夷牛の串焼き肉。ソースはリンゴソースです。サラダはキャベツとグレープフルーツ入り。スープはジャガイモのポタージュスープでございます。」

「ありがとうございます。」

キンジは鍋蓋を取った後串焼き肉の串から肉を取って小夜鳴先生に渡した。その後小夜鳴先生は完食した後こう言った。

「アリアさん。いつもこんなごちそうを作ってくれてありがとうございます。」

「いえ、当然のことです。」

「(……お前何もしてねえだろ。)(」

本当はレスティアが作ってくれているのだがアリアがしたことになれば接近しやすいだろうという理子の判断でそう決まった。

そして食事が終わった後に台所に入ったキンジ達はそれぞれ報告を行った。

「小夜鳴先生の行動パターンは大体把握できた。後は目標の場所だが。」

「それなら小夜鳴先生が金庫に出るときに見たけど一瞬だったからまだ分からないけど青い十字架のイヤリングだったわ。」

「それですね。後は監視カメラですけど。」

「そっちは偽装データを入れるように手筈は整えてるから今晚理子に報告したら・・・行動開始ね。」

キンジ達はそう言いながら朝食を食べるようにしていた。

疑いはより深く。

そして夜……。

作戦会議と理子の報告を兼ねているため深夜二時に定期連絡するという決まりと
なった。

只使うのは……通常の携帯電話なのだ。

まあそこは理子が幾つかのアルゴリズムを使ってブロックしているので大丈夫

(理子曰くだが)と太鼓判を押しただ。

因みにキンジの携帯電話は防人達から支給されたものでこれだけはあらゆる

ネットワークからの侵入を受け入れられないようにしたタイプであり、登録者以外に
は対応できないようにしているためキンジの部屋にレスティアがいる感じで

対応している。

まあ……キンジからすればいつ起こるか知れないヒステリアモードに戦々恐々と
しているが。

『それで……あったの？理子の？』

『ええあったわ。けど地下にはいつも小夜鳴先生がいるから侵入できるか

どうかね。』

アリアが携帯電話で（三者間通信）理子にそう報告をすると理子はこう言った。

『今最も小夜鳴先生が信頼している人って誰？』

それを聞くと全員がこう言った。

『『アリア。』』

そう言うのと理子はアリアにこう指示した。

『ヨツシヤ、それじゃあアリアはもうしばらくの間で良いから先生に気に入られる

ようによろしくね。』

そして次に日の昼時

小夜鳴先生は論文作成が終わったこともあつて一息付けるために洋モノのレコードから流れ出てくるノクターンを聞くと小夜鳴先生はこう呟いた。

「F i i B u c u r o s . . .」

i
「D a m n e , t e r a i v o r b i I i m b a r o m a n s . . . ? ” F i
B u c u r o s ” . . . ?」

その言葉にアリアは何かの言語でそう言うのが聞こえた。するとそれを聞いた小夜鳴先生はこう聞いた。

「アリアさん、貴方ルーマニア語が上手ですね。いったいどこで？」

「昔ヨーロッパ武偵校にいた時に覚えたんですけど小夜鳴先生も流石でしたよ。」

「いやあここの主人がルーマニア出身でして調べるうちに覚えちゃったんですよ。時にアリアさんは何か国語を話せますか？」

「えつと……17か国語です。」

それを聞いたキンジは驚いていた。

そこだけはシャーロックホームズの曾孫だけあるなと思ったのだ。

「……そうだそれだ!!」

「え?……どうしたんです?先生。」

アリアは小夜鳴先生の行動に驚いていると小夜鳴先生は外にあるバラを見てこう言った。

「あそこにある鮮やかな赤バラがあるでしょ?」

「あ……はい。」

「あれは17種類のバラの長所を集めて品種改良した優良種なんですけどまだ名前が無かったんですがよければ貴方の名前を付けさせてくれませんか!？」

「えー！良いんですか？構いませんけど。」

「ありがとうございます!!それでは遠山君たちもグラス・・・ああ未成年ですから無理ですけど棚の中にぶどうジュースがあるのでそれで乾杯しましょう!!」

「それじゃあ俺が取ってきます。」

「あ、アタシも。」

キンジの後に着いていくかのようにレティシアも付いていく中キンジにある事を聞いた。

「・・・ねえ?どう思う小夜鳴先生のあの発声。」

「如何って何だよ?」

キンジはレティシアの言葉に何だと聞くとレティシアはこう続けた。

「あの発声は確かにルーマニア語よ。然も現地の人と何ら変わらないほどの、それほどの声を日本人が出せると思う?」

それを聞くとキンジはこう返した。

「・・・無理だな。」

「そうでしょうか?国によって喉の使い方が違うから幾ら違う言葉使っても使い方では異なるものなのよ。だけどあの先生は難なく使いこなした。・・・奇妙なものね。」

「奇妙つていやあ小夜鳴先生とブラドの事で気になることがあるんだ。」

「何よっ？」

「『私は彼に一度もあつた事が無いのです。私と彼は親密なんですけどねえ』がどうも引つ掛かるんだ。」

「・・・確かに普通なら『メール友達』とか『月に何回か電話をする』関係つて言えば済むのにね。」

「後で理子に小夜鳴先生がルーマニアに住んでいたことがあるのかあ調させてもらった方が良いな。」

「・・・そうね。」

「それでは新しいバラの名前『アリア』の祝福を祝いまして・・・乾杯!!」

「「乾杯!!!」」

キンジ達は小夜鳴先生の音頭を聞いて乾杯した。

どうにも拭えない疑心を胸に秘めて。

ベッドでの模様。

『（・・）D フムフム、なら小夜鳴先生を遠ざけさせる役目はアリアに決定するけどどれくらい時間稼げそう？』

理子に今日の事を報告した後、地下室にある研究所にどれくらい遠ざけさせることが出来るのかを聞いた。

「小夜鳴先生の論文が終わったから後は発表までの間は使う頻度は限られるな。」

『だけどあいつ、研究バカだから大体10分以上出ている時はほぼないと見たほうが良いわよ。』

『10分かー。ちよつと厳しいな。』

キンジとレティシアの言葉に理子は頭を抱えていた。

何せその間に痕跡を残さずに無数の鍵を開け、アラームを解除してから目的の物を手に入れなければならないのだ。

『アリアー。何とかできないか？15分くらい？』

『・・。ちよつと考えないと分からない』

『ああー。考えるのは理子の仕事だから何も考えないで言う通りにしてね、

アリア。』

『何ですって——!!!』

『それじゃあお休みー。』

とりあえず今後の作戦を考えるためにアリアの雷が落ちる前に理子は逃走した。

ブー、ブー。

すると今度はレスティア（現在キンジの部屋）の電話からメールが来たので開けるとこう書かれていた。

『キー君！小夜鳴先生についてだけども、ルーマニアに滞在した期間はそれほど長くなかったよ。大抵は世界中を股に掛けるって言う感じだから。以上!!』

そう言う内容であつたが逆にそれがキンジの中にある疑いが更に強まったのだ。

「如何したんです？キンジさん。」

レスティアが何事かと聞くとキンジはレイシアに言った事を話すとレスティアも確かにと思っていた。

「確かに妙ですね。なぜあのような言い回しをしたのか？如何してあそこ迄流暢に喋れたのか疑問が絶えませんね。」

そう言うときンジはこうも言った。

「それにあと少しで分かりそうなんだ。親密なのに会ったことすらない小夜鳴先生と

ブラド。ルーマニアの渡航歴がそれほどないのにあそこ迄の確かなルーマニア語。この二つが繋がるナニカが分かれば真実が見えてきそうなんだ。」

キンジはそう言うのとレスティアがこう言った。

「取り敢えず今日は寝ましよう。今日の午後六時に最終日なんですから今の内に体力を回復しておかないと。」

「そうだな・・・んで何でお前普通に入ってるんだ?」

キンジは隣で眠ろうとしているレスティアにそう聞くとレスティアはこう聞いた。

「・・・駄目ですか?」 上目遣い

「うー!」

それを見てキンジは少しくらつとした後こう言った。

「・・・分かったよ。」

そう言つて少し離れて寝ようとする・・・。

「えい。」

「!!」

レスティアはキンジに抱き着いた。

キンジはそれに驚くが驚くかのようにレスティアが寝ているのを見てキンジはレスティアの頭を撫でながらこう言った。

「お休み。レストイア」
そう言ってキングジは眠りについた。

泥棒作戦 開始!!

そして次の日……。

詰まるところ最終日であるがこの日こそ作戦決行日である。

あの後昼食時に理子からの連絡で作戦が決まった。

先ずはアリアが例の改良種のバラの事を聞きたいと言って誘う。

←

荷物整理をレティシア達に任せてキンジは泥棒を行うと言った順番となっておりそこから説明を交えて伝えよう。

「こちらキンジ。モグラが畑に入る。」

オープンフィンガーグローブ、赤外線ゴーグル、ケブラー繊維のポーチ付きベストという特殊部隊丸出しの装備を身に纏ってピリヤード台の裏に貼り付けた携帯電話を

中継器にして耳に入れてあるインカムでそう言うと言おうと向こうにいる理子がこう返した。

『こちらシャイン、よく聞こえてるよー。キー君の声って電話越しで聞くと渋いねえ』

「やかましい。さっさと指示出せ。」

『むうう。わかったよーだ。』

キンジは理子にそう言いながら近くにある空気用のダクトを伝って下に潜っていった。

「こちらキンジ。モグラは岩盤を見つけた。」

『OK。後七分だけどそっちは如何？レスティン。』

『こっちは大丈夫よ。今の遠山は透明人間よ。』

現在理子が通信しているのは部屋にあるケーブルからカメラをハックしているレティシアがそう言った。

キンジは地下金庫の扉を開けた後赤外線ゴーグルを付けて周りを見てみると・・・。
「おいおい、こりやまるでジャングルジムだな。」

縦、横、斜めと縦横無尽であるがそこかしらにある赤外線が張り巡らされているがキンジはニヤツと笑うとポーチからある物を出した。

それは・・・。

「行けるか？ザビー。」

キンジはザビーを出すとザビーはコクコクと頷いて飛んで行った。

そしてそのまま飛んで行くと理子の十字架を両手で持つてまた飛んで行った。

そしてキンジの手元に戻ると今度は偽物を持たせて同じところに置かせるとまた

キンジの方に戻っていった。

「こちらキンジ。モグラは目的のミミズを捕まえた。」

『・・・キー君。それってルール違反じゃない?』

「阿保言うな。ちゃんと任務は達成したんだぞ。文句を言われる筋合いはない。」

キンジはそう言い返した後何事もなかったかのように戻ろうとするとある物を見た。

「・・・何だこれ?」

そう言つてそれを見るとそれは・・・。

「ボトル?」

それは小さなオオカミを模つたような細工が施されたボトルであった。

『キー君。後三分だよ。』

「おお分かった。」

キンジはそう言つた後ダクトに入った。

然しキンジはある物を見ていなかった。

そこには少し古い写真が飾られておりこう書かれていた。

『初成功。フルボトル開発。研究者 小夜鳴 幹人

副責任者 フギル・アーカディア

責任者 織斑・R・春樹』

と書かれていた写真が飾られていたことをキンジは気づいていなかった。

天の見える場所にて。

目的を達成したキンジは部屋の戻った後、武偵校の制服に着替えて紅鳴館を後にしようとしていた。

「それでは小夜鳴先生、お世話になりました。」

「「お世話になりましたー。」」

「はい、皆さんも帰りには気を付けて下さいね。」

小夜鳴先生は門の前まで見送ってくれた後キンジ達はタクシーに乗って出て行った。

そしてキンジ達が向かうのは学園島ではなく……。

横浜駅にほど近い横浜ランドマークタワーである。

理子が持つているアジトの一つで近代的な建物を拠点にしているようだ。

「それで……遠山キンジ。例の物は？」

「ああ……だ。」

アリアの言葉にキンジは懐から十字架を出すとアリアはそれを見てこう言った。

「それはアタシが持つておくわ。あいつが心変わりしないようにね。」

「アリアはそう言いながら分捕るかのように取った。」

「それにしても何で屋上なんでしょう?」

「そりゃあアタシ達は盗みを働いた訳だから。人目の付かない場所で交換させたかったんじゃないの?」

レスティアの言葉にレティシアがそう返した。

キンジ達は現在最上階から関係者以外立ち入り禁止の扉に入つて階段で屋上に向かつていた。

そして屋上に着いて周りを見ていた。

周りはフェンスすらない場所でヘリポートしかなかった。

そしてそこに・・・理子がいた。

「おー、キー君。よく来てくれたねえ。」

待つてたよーと言うとアリアは理子にこう聞いた。

「理子!これを奪つてきたわ!!約束覚えてるわね!!」

「勿論だよオ。お母さまの十字架の代わりに証人として裁判に立つてあげるつて言う約束でしょ。」

「忘れないよオと言っているがアリアはまるで信用していなかった。」

まあ仕方がないと言えば仕方がないのだが……

「それじゃあ……はい。」

そう言つて理子に十字架を渡すとアリアにこう聞いた。

「ねえアリア……『繁殖用牝犬（ブルード・ビッチ）』って……

呼ばれたことある？」

「はあ？……!!」

アリアは何事だと思つてしていると下から小さなナイフがアリアに襲い掛かったのだが

アリアはそれを紙一重で躲した。

そしてアリアは側転して避けると二丁のガバメントを速攻で出してアリアは理子に

こう聞いた。

「何するのよ！理子!!」

そう言つて理子はこう返した。

「ナニツて決まつてるじゃあん？……アンタをぶつ潰してキンジと戦うためさ。」

すると理子は「武偵殺し」の目付きになつてそう言つた。

「やつぱアンタハ根っこ迄泥棒つて事ね。目的の物が奪えればハイさよならつて言う

最低な所業をしてくれるじゃない。」

「それにブルード・ビッチつてナニソレ？」

意味わからないというと理子はこう言った。

「ほらあ、よくあるじゃない？ 悪質な犬のリーダーがさ、人気の犬種増やしたいってさ狭い檻に入れられて腐った肉と泥水しか与えないっていう話。」

ニユースにもなったよねと言うときアリアはこう答えた。

「ええ有ったわね。それで、それとこれが何の」

話ヨとアリアが言いかけると理子は悪魔の表情になつて大声を上げた。

「ふざけんな！ アタシはただの遺伝子かよ！ アタシは『4』かよ!! 違う!!!

アタシは峰 理子 ルパン四世だ!! 『5世』を産むための孕み袋なんかじゃねえ!!」

理子は大声を上げながら・・・視点を合わさずにそう言った。

そして理子が十字架を持つとこう言った。

「こいつは只の十字架じゃねえ。こいつに使われてる金属は特殊でなア。

前にアンタらに使った技を使うことが出来るんだぜエ。」

「前に・・・まさかあの髪!!」

キンジは飛行機で見た理子の髪が蛇のように動いていたことを思い出すと理子は満足そうな表情でキンジに向かってこう言った。

「そうさ！ この力でアタシはアイツから逃げれたんだ。」

そう言うとき理子はキンジに向けてこう言った。

「さあ！遠山キンジ、アンタを倒してアタシは峰　理子として」

「全く・・・恩知らずとは酷いですね。理子」

バチツツツツツツ！！

小さな電気のような音がした途端理子の顔が強張って前のめりに倒れて行った。

そしてその後ろには・・・一人の男性がいた。

「小夜鳴先生・・・！！」

レスティアがその男、小夜鳴先生を見ると本人は持っていた大型のスタンガンを手放してギプスからある物を出した。

それは・・・。

「！！・・・ミニママガトリングガン。」

それは連射機能を持った大型兵器「ミニママガトリングガン」である。

然しそれを何故武偵でもない科学者が持っているのだと思うとその後ろから・・・

「今度はあいつらかよ。」

キンジはマジかよという表情で小夜鳴先生の後ろから出てきたトルーパーを見て

そう言うのとキンジはある事に気づいた。
それは……。

「成程……これで全てが繋がったぜ。」

「？」

アリアはキンジの言葉に何だと思っっている中キンジは小夜鳴先生にこう聞いた。

「小夜鳴先生、少し時間貰えるか？」

「ええ良いですよ。貴方方が動かない限り私も彼らも何もしません。」

小夜鳴先生はそう言うのとキンジはある事を説明した。

「先ずそいつらだがそいつらはブラドの手下。つまりは奴の尖兵だ。だけどあんたを襲わねえとなるとあんたと奴は中々の友達だろうと思うがそうなる疑問が出てくる。」

「何です？」

キンジの言葉に小夜鳴先生は何だと聞くとキンジはこう答えた。

「知つての通りだと思うがオオカミは群れで生活し、その中にあるリーダーに対して絶対忠誠を誓っている動物だ。幾らあんたと仲が良いからってここまで

従う訳がねえ。」

「そこで出るのがあんたとブラドの関係性だ。」

「アンタはこう言ったな。『彼とはとても親密なんですがねえ』と言ったがその前にアンタはこう言ったな。『彼とは一度も会ったことが無い』これが飛んでもねえ矛盾何だよ。」

「・・・何がいたいです?」

小夜鳴先生は眼鏡を直しながら聞くとキンジはこう続けた。

「アンタと会ったことがねえならこいつらはどうやってあんたに従っている?

どうしてアンタハこいつらに襲われねえ。あんたの匂いを覚えてたとしてもそれだけで忠誠を・・・それも無関係に等しい人間に従えられるんだ!!?」

キンジはそう大声を上げた後こう続けた。

「そしてアンタのルーマニア語だ。」

「アンタのルーマニア語は現地の人となんら遜色ねえ程鮮やかだ。日本出身だと
言っているがあそこ迄流暢に話せるか?それもたった数週間で!!」

「それは不可能だ!アンタが本物の日本人である限りな!!」

「ただ中にはある手段を使えばそれは可能だ。」

「どういう意味です?キンジさん。」

レスティアは何だと思って聞くとレティシアは・・・。

「成程ね。確かにそれなら不可能じゃないわね。」

「ねえ！どう言う意味よ!!」

アリアはじれつたという風に大声で聞くとキンジは小夜鳴先生に向けてこう言った。

「こいつは・・・いやコイツラはずつと俺達を監視していたんだ。ずつとな。」
そしてキンジは小夜鳴先生にこう聞いた。

「アンタの中にいるんだろう？ブラドが・・・。」

「もう一つの人格でもあるアンタの分身がな!!」

「如何だよ!?!二重人格者さん!!!」

そしてその瞬間・・・

ピシャアアアという雷鳴が・・・屋上に響き渡った。

小夜鳴先生の秘密。

「……先生が……ブラド？」

アリアは信じられない様子で言うがそれを聞いていた小夜鳴先生は……。

『『フィー ブッコロス』素晴らしい推理力ですね、遠山君。』

笑顔でそう言った。

「まさか私の喋っていた言葉の僅か数行から真実を見つけるとは中々どうしてそこにいるアリアよりもホームズらしい推理をしますね。」

「ナ……ななな……!!!」

合格ですと小夜鳴先生は言うがアリアは自分がキンジよりも下と言われていることに驚愕しているが小夜鳴先生はこう続けた。

「ええ、そうですよ。私はブラドの表向きの人格にして……貴方達でも知っているでしょう？ 『ブラド三世』を。」

「ブ……ブラド三世!!」

アリアはそれを聞いて驚いた後こう言った。

「ブラド三世ってルーマニアの領主にして『串刺し公』と恐れられて吸血鬼だと

「言われたあの!?!」

「アリアはそう言うが小夜鳴先生はそれを否定した。」

「いいえアリア。彼が吸血鬼だというのは誤解ですよ。彼はD種ではなくちゃんとした人間なのですよ。現に……私のような子孫ですら吸血鬼じゃないのですから。」

「貴方が……ブラド三世の……子孫。」

それを聞いてレスティアは戦闘状態に入ろうとするとそれを着た小夜鳴先生はレスティアにある事を聞いた。

「そう言えばレスティアさんは私の試験を受けていましたね。」

「あ……はい。」

「でしたら覚えていますか?あのDVDの内容に合った遺伝子でどのようなものがおきるのかを?」

それを聞いたレスティアは思い出しながらこう言った。

「確か……『遺伝子は長所同士に遺伝することがあれば短所同士で遺伝することがある』……でしたよね?」

「その通りですレスティアさん。そしてこの峰 理子はその内の後者なのです。」

「然し遺伝子とは不思議な物ですねえ?特定の能力を兼ね揃えられない無能も

いれど」

小夜鳴先生はそう言いながらキンジの方を見てこう言った。

「貴方のように類まれな才能を持った者もいる。」

「世の中つて本当に理不尽ですよねえ？ 理子。」

「ガ……グウウウウ……。」

理子は痺れている体に鞭打って立ち上がろうとすると……。

「誰が立ち上がって良いと言いましたか？ 『失敗作』」

そう冷たい表情で理子の頭を踏みつけた。

「イ……ギイイイイイ……。」

「全く、本物のガラクタを自分の物だと言っている貴方のあの表情は

傑作でしたよ。」

そう言いながら小夜鳴先生はこう続けた。

「それにしてもまあ人選は褒めてやってもいいですがその程度でしたか。」

そう言いながら更に頭を踏みつけた。

「ほらどうしましたか？ 『無能』、その十字架は確か宝物なのでしょう？ 今度は

無くさないように肌身離さず持たせるように口に突っ込んで飲み込ませて

ヤリマシヨウカ？ それとも直接胃の中にねじ込んでヤリマシヨウカ？」

小夜鳴先生はそう言いながら頭を踏みつけていると……。

「いい加減にしなさいよ!! 理子を虐めて何の意味があるのよ!!」

「アリアはそう言いながら銃を構えようとしている所を・・・レティシアがそれを止めた。」

「!・・・何で止めるのよ!？」

「あんたバカ!?!この状況で武器を構えれば左右のあの化け物に撃ち殺されるわよ!!」

状況を考えなさいと言うがアリアはそれにギリギリと歯ぎしりをしていた。

「良い考えですよレティシア。私の命令一つで貴方を殺すことが出来るのです。」
それと小夜鳴先生はこう続けた。

「彼は被虐体質でしてねえ。こうしなきゃ来ないのでですよ。」

「ああそうそう遠山君は『イ・ウー』についてどれだけ知っていますか?」

そう聞くとキンジは少し考えてこう答えた。

「確か・・・能力を教え合う場所だったよな?」

そう言うと小夜鳴先生はこう言った。

「確かにその通りと・・・言いたい所ですが△です。まあ大体半分と言った所ですね。」

「・・・半分?」

キンジはもう半分は何だと思っていると小夜鳴先生はこう返した。

「簡単ですよ。能力を写し取るのです。」

「「!!!」」

それを聞いたキンジ達は驚いていた。

教えるのではなく写すという所業などどうやってできるのかと思っていると

小夜鳴先生はこう言った。

「まあ正確に言えば優秀な遺伝子を持つ血液に含まれているDNA情報を培養してそれを圧縮したものを体に投与させるのですけれども・・・」

「未だ人に対しての実験段階まで進んでいなかったのですが丁度良く理子がいるので彼女を実験・・・いえここはアリアもひっ捕らえて研究データを多くとりたい所ですなぁ。」

そう言う和小夜鳴先生はキンジにこう言った。

「さてと、私は少し寝ておきますが気を付けて下さいいね?」

「?」

「ブラドには私から『生け捕りにして優秀な次世代の遠山をその姉妹を使って孕ませて作りたいので三人は殺さないよう』について言っておりますが・・・」

「はあ!」

「ふええ!!」

「何よそれ!!」

キンジ、レスティア、レティシアは顔を真っ赤にして抗議しようとするが小夜鳴先生はこう続けた。

「彼は最近出てきてないので少し殺戮衝動が強いので」

「気を付けてクダサイネ」

すると小夜鳴先生の声が・・・全く別の物に変わった。

ブラドの怒り。

「気を付けてクダサイネ」

小夜鳴先生の声が変わった瞬間それは起きた。

黒に近い鋼の肉体。

長かった髪は幾つものチューブのような触手に。

両手両足はすらつとしており。

顔にはバイザーが上半分が砕けた状態でツインアイが覗いていた。

『Ce mai faci:イヤ、コッチガイイヨナ。ハジメマシテトオヤマキンジ』
ブラド・・・いやコードナンバー113のロイミュード「トルーパー・ヘッド」が
キンジに対してそう言った。

『オマエノコトハ『アイボウ』カラスベテミキイテイルガメンドウクセーゼ。』

『ヒサシブリニソトニデタノニイケドリトハヨ。ココマデツエーヤツトタタカエル
ノニヨー。』

トルーパー・ヘッドは頭を掻きながらそう言うのとトルーパー・ヘッドは理子を見ると
頭を掴んでこう言った。

『ヒサシブリダナリコ。イ・ウーイライダナ。』

「・・・ブラド・・・!!・・・」

理子はトルーパー・ヘッドを見て憎らしき全開で睨みつけるもトルーパー・ヘッドはこう言った。

『ソウイヤオマエホームズニカッタヨウダナ?』

「ああ・・・そうだ・・・だから・・・約束・・・」

理子はトルーパー・ヘッドに向けてそう言うのとトルーパー・ヘッドはこう返した。

『オマエハアホカ?』

「な・・・!!」

『ケツカンヒンノホームズアイテニロイミュードニナレナキヤカテネエクセシテドノツラサゲテイツテルンダ!アアア!!』

「ぎぎぎぎぎぎ!!」

『オマケニトオヤマキンジニハマケテイルクセニナニホザイテヤガル!!』
トルーパー・ヘッドは理子の頭を強く握りながらそう言った。

するとトルーパー・ヘッドは理子の頭を離して無造作に放り込んだ。

『ケツカンヒンハドリヨクシテモケツキヨクケツカンヒンダナ。』

「う・・・ウウウウ。」

理子は倒れた状態から嗚咽を上げながら泣いているとトルーパー・ヘッドは理子を見た後キンジを見て銃を構えてこう言った。

『サアテト、ジヤマモノハイネエゼトオヤマキンジ。サツサトヘンシンシロヨ。』

トルーパー・ヘッドはそう言うのとレスティア達を見てこう言った。

『ソレトモ・・・ソイツラノドツチカヲコロスカオカサレテイルノヲミレバヘンシンシテクレルノカ?』

「!!」

キンジをそれを聞くと怒りの表情で懐からザビーを出すプレスレットに着けてこう言った。

「手前みてえな奴に・・・仲間を!・・・大切な人を殺されてたまる物かあ!!」

『イイゼイイゼトオヤマキンジ!!ソノイカリダゼ!!』

トルーパー・ヘッドはキンジの表情を見て喜んでいた。

『HENSIN』

キンジはザビーの銃装甲形態を纏うと更にザビーの羽を回した。

『CHANGE WASP "ZABEE"』

そして装甲が解き放たれるとそこにいたのは・・・ザビーを纏ったキンジであった。

「ブッコロス!」

キンジはそう言ってファイティングポーズを撮るとトルーパー・ヘッドも銃と剣を構えてこう言った。

『サアテト・・・マツリトシヤレコモウゼ——!!!』

戦いへと。

『トルーパー!!マワリノザコドモヲアシドメシロ、コロスナヨ!!』
トルーパー・ヘッドはそう言いながらキンジに立ち向かった。

『GURUWAAAAA!!』

そしてトルーパーも武器を持ってレスティア達に立ち向かった。

「くっ!」

レスティア達は立ち向かってくるトルーパーを相手にしていた。

だが相手は量産型とはいえロイミュード。

通常兵器では歯が立たない。

それを知って尚トルーパー・ヘッドは戦わせたのだ。

「レスティア!!」

『ヨソミスルナ!!』

「グウ!」

キンジはトルーパー・ヘッドの剣戟を受けて少しくらっとしたら持っていた

ミニマムガトリングガンを向けた。

「どわ!!」

『ワリイイガオマエニハブキガネエツテコトクライオミトオシダゼー!』

「それがどうした!!」

キンジはトルーパー・ヘッドに対してそう言いながら唯一の物陰でもあるヘリポートの下に隠れていた。

そして銃撃が止んだ瞬間……。

「行くぜ!!」

キンジは立ち上がってトルーパー・ヘッドに立ち向かった。

『オレニハコイツモアルンダゼエ!!』

そう言いながらトルーパー・ヘッドはミニマムガトリングガンを捨てて剣をもう一度使おうとすると……。

「それを待ってたぜエ!!」

そう言いながらキンジは空になったミニマムガトリングガンを……殴打武器として振りかぶった。

『ハア!!?』

まさかという行動に流石のトルーパー・ヘッドも驚いている中キンジはそのまま当てようとするも……。

『アメエヨ!!』

そう言いながら剣を振りかざした。

幾ら何でも通常武器では無理だと思っていたがそれこそ狙いであった。

そしてミニマムガトリングガンが剣に当たって砕かれた瞬間・・・キンジは振り向きざまにトルーパー・ヘッドの顔に一撃を当てた。

『ギファア!』

それにトルーパー・ヘッドは少し下がって行くがその後・・・。

『フフフフフフ・・・ゲババババババババ!!』

トルーパー・ヘッドは変な笑いをしながらキンジに向けてこう言った。

『サイコウダゼエ・・・コリヤイイコロシアイガデキソウダゼ。』

『マ・・・アイツラハドウナルカダガナ?』

トルーパー・ヘッドは静かにそう呟いた。

「ああもう! 邪魔よ!!」

アリアは後ろからトルーパー達を銃撃していたが当のトルーパーは何事も無いよう

に戦っていた。

「ああもう！」

「きりがありません!!」

レティシアとレスティアもそれに苦勞していた。

すると戦っていた1機が理子の方を見て動いた。

「1待ちなさいって邪魔よ!!」

アリアは理子に向かってることを察知して救出しようとするももう1機に三人は邪魔されていた。

そしてそのままその1機が理子を捕まえようとした・・・その時、上空からヘリコプターが来ていた。

「「「「???」」」」

全員がそれを見て何だと思ってる中一人の人間がトルーパー目掛けて

落ちながら・・・ある物を構えていた。

「ウオラアアアア!!」

そしてそのままトルーパーを・・・真つ二つに切り捨てた。

「「「「!!」」」」

あまりの光景にレスティア達が驚いている中その人間・・・いやコートを着た少年が

理子に向かうとこう聞いた。

「大丈夫か？ルパン四世？」

「だ……誰だ？」

理子は自分の正体のことを何故知っているのかと思っているとその少年はニコツと笑顔でこう言った。

「初めまして、俺は『岩海 辰巳』。『石川 五右衛門』の弟子だ。」
それは嘗ての……ルパン三世の仲間の一人の弟子であった。

俺達がいる!!

『ゲババババババ!!マサカザンテツケンノケイショウシヤマデキテクレルタア
オレモツイテイルモンダゼ!!』

トルーパーズそう言いながらキンジ目掛けて斬りかかった。

「斬鉄剣だあ!?!」

『オオヨ!コノヨノスベテノキンゾクヲキリサクコトガデキルトイワレル

デンセツノカタナダ!!マサカオメニカカルトハナア!!!』

キンジはそれを受け止め乍らそれを聞いていた。

するとトルーパー・ヘッドはキンジに向けてこう言った。

『サアテト、オタノシミガフエタンダ!タノシモウゼエ!!』

「手前と楽しむ義理何てねえよ!!」

キンジはトルーパー・ヘッドに対してそう言いながら攻撃していた。

「・・・石川 五右衛門の・・・弟子だ?・・・」

理子は疑わしそうに聞かすが当の本人は知れつとこう返した。

「まあな。とはいえ未だ免許皆伝とはいかぬがな。」

辰巳はそう言いながら理子にこう聞いた。

「動けるか?」

「あ・・・まあ・・・な。」

辰巳は理子にそう聞いた後肩を貸して移動させた。

そして屋上の扉前に腰掛けさせようとすると・・・。

「理子!!危ない!!」

アリアの言葉に何だと思っているとトルーパーが辰巳に対して銃を構えていた。

トルーパーが殺すなと言ったのはアリア達であるが途中から来た辰巳は例外で

あるという答えに至ったのだろう。

トルーパーが辰巳に照準を合わせていた。

「!!・・・あぶな」

「大丈夫だ。」

辰巳がそう言った次の瞬間トルーパーの持っていた銃が・・・辰巳とは別方向に

向けて撃った。

「え・・・？」

理子は何故だと思っっている中辰巳はこう言った。

「俺達には仲間がいる。」

「全く、信じてるからって油断しすぎよ。辰巳。」

そう言いながらマテリアルロングライフルを使ってヘリから狙撃した薄い金髪の女性がそう言った。

その女性はバニーガールのような服を着るとし、下にセーターを着たような少女がそこにいた。

彼女の名は「未中 尽」。

「次元 大介」の弟子である。

そして尽は次弾を装填するとスナイプ越しから理子を見ていた。

「・・・失望させちゃダメだよ♪ルパン。」

そう言いながらも一撃をトルーパーに浴びせた。

「ここで待つてろ。直ぐに終わらせるからな。」

「無理だよ・・・ブラド相手にアタシは手も足も出なかった。・・・

勝てっこないよ」

「じゃあずつとそこで閉じこもって檻に戻されたいのか？」

理子の言葉に辰巳はそう聞くと理子は黙り込んでしまった。

「たとえあんたが昔手も足も出なかったとしても・・・今、俺達がいたとしてもか？」

「・・・え?・・・」

辰巳の言葉に理子は何だと思っていると辰巳はこう言った。

「一人じゃできなくても・・・俺達が・・・今ここにはあんたの為に闘っている連中がいるじゃねえか。」

「先代なんて見てみるよ。あの人も仲間を使って無理難題を乗り越えてきただろう?」

「・・・あ・・・。」

理子はそれを思い出した瞬間に辰巳はトルーパーに目を向けてこう言った。

「アンタも俺達使つてさ．．．乗り越えようぜ、過去も．．．理不尽も．．．
そして．．．。」

そして辰巳は走り出しながらこう言った。

「先代たちにもさ!!」

そして辰巳はトルーパー目掛けて斬りかかった。

「ウオラアアアア!!」

その光景に理子は．．．震えている唇が．．．キュツとなった。

アタシハアタシダ!!

『ゲババババババ! ニンゲンニシチャヤルジャンエカヨ!!』

「手前に褒められてもうれしかねえよ!!」

キンジとトルーパーヘッドとの戦いは体感時間から見ても長く感じる程である。

お互いの武器が火花を噴き散らして戦いあっていた。

それが暫く続く中ある事が起きた。

「ウオラアアアア!!」

『GURUWAAAAA!!』

辰巳の咆哮と同時にトルーパーの断末魔が響き渡った。

「これで最後だぜ! ブラド!!」 辰巳が言いながら斬鉄剣をブラドに向けるとブ

ラドは周りのトルーパーの残骸を見てこう言った。

『マツタクヨ、ザコノアシドメニモナラネエトハトンダシツパイサクダゼ!』

トルーパー・ヘッドはそう言いながら頭を搔いていたがすると思わぬ事が起きた。

「何だ……。」

「頭の……触手が……」

キンジとレスティアがそう言っている中レティシアはこう答えた。

「蠢いてる?」

するとその触手は壊れたトルーパーを突き刺しながらトルーパー・ヘッドに集まっていった。

そしてそのままトルーパー・ヘッドに纏わり始めた。

「何する気だ。」

キンジはそう聞くとトルーパー・ヘッドはこう返した。

『ナアニ、チョットシタリサイクルダ。』

そう言いながらトルーパー・ヘッドの体が変わり始めた。

すらつとしていた手足はごつく、マツチヨになり。

頭の触手は体に幾つも纏わりつき血管のようになり。

剣と銃は幾つものパーツになった途端に一つに交わり巨大な槍と姿を変えた。

『ナズケルナラ「トルーパー・ヘッド・マスター」ダナ。』

そう言いながら巨大な槍を振りながらこう言った。

『サアテト、ジャマガハイラナイヨウニシナキヤアナ。』

そう言った瞬間・・・時間が止まった。

「これは!」

キンジはその光景を覚えており臨戦状態に戻った。

『コレデホントウノサシダ。サア！オモウゾンブンニコロシ』

『テメエダケジヤネエゾ。ブラド』

トルーパー・ヘッド・マスターの言葉を遮るかのように誰かがそう言った。

そこにいたのは……。

「理子。」

それはロイミュード化した理子であった。

キンジはその正体を言った後警戒を続けた。

理子の強さは把握済みだがここで二対一は避けたい所なのだ。

『ナンダヨンセイ。ジャマスルナラオマエゴト！』

『モウオマエノサシズハウケネエゾ。』

『ホオ……。』

理子の言葉にトルーパー・ヘッド・マスターは何だと思っていると理子から姿を変えたボムキルがこう言った。

『アタシハオマエガコワかった。ズットニゲテタ。アタシノココロハズットアノ

オリノナカダツタ。』

『ダケド……ソレヲオワラセルノモアタシダ！アンタジヤナイ!!コノアタシ

ジシンダ!!!』

ボムキルは大声で言うがトルーパー・ヘッド・マスターはこう返した。

『ダガオマエデハヤクブソクダゾ?』

トルーパー・ヘッド・マスターはそうせせら笑いながら言う。ボムキルは右手からある物を出した。

そしてボムキルはこう言った。

『ブラド、ガツタイハアンタノセンバイトツキョジヤネエゾ!!』

そう言いながら見せつけたのは・・・紅い指輪だった。

『ナンデアアタシガアメリカニイツテイタツテコトニナツテイタノカハナ』

『マサカソレハ!!』

トルーパー・ヘッド・マスターはそれを見て驚いていた。

何せボムキルが見せていたのは・・・。

『コレヲテニイレルタメサ!!』

ISの待機形態だったからだ。

決着。

『コイツヲテニイレルタメサ!』

そう言つてボムキルはISを起動させた。

そして光から現われたのは・・・四本の昆虫のような足を背中に付けた機体であつた。

『ヘツヘースゴイダロウ!?コイツガアタシノIS 『アラクネ マーク2』ダ!!』
「・・・アラクネねえ。」

キンジはその姿を見て確かにと思つた。

そのISは腰に搭載されているそれが正に蜘蛛の尻尾と同じだと思つた。

そしてボムキルは其れを纏つた瞬間にある現象が起きた。

『サア!イクゼエ!!』

そう言つた途端に機体から無数の配線が彼女を取り込み始めた。

まるでISと同化していくかのような印章であろう。

そしてボムキルはこう名乗つた。

『ナツケテ 『アラクネ・ボムキル』ダ。』

そう言うのとボムキルはキンジに向けてこう言った。

『キンジ、ナンドモダマシテイタガコレダケハシンジツダ。』

「・・・何だ。」

キンジは疑い深そうに聞くとボムキルはこう返した。

『アイツハフタリガカリデカテルカドウカワカラネエガ・・・チカラヲカシテクレ』

そう言うのとキンジはこう言った。

「ま・・・依頼は未だ果たされてねえんだ。あの十字架を取り返すぞ！」

『オオ!!』

キンジの言葉にボムキルは応答した。

そして・・・第二ラウンドが始まった。

『マサカソウイウホウホウヲツカウトハナカナカジャネエカよオイ!!』

トルーパー・ヘッド・マスターはそう言いながら大型の槍を振るい続けた。むしろメイスと言っても仕方がないほど大きいのだがそれはそれである。

当たった場所は大きく穴が開き、黒焦げになっていた。

如何やら槍の中にエネルギーが蓄積されているようだ。

ボムキルはそれを察知してか宙に上がると四本の足に内蔵されているプラズマキャノンが火を噴いた。

『チー！』

それをトルーパー・ヘッド・マスターは避けるが今度は蜘蛛の尻尾のようなところから小型のミサイルが幾つものトルーパー・ヘッド・マスターに襲い掛かった。

『グオワ!!』

あまりの数にトルーパー・ヘッド・マスターは避けきれなかった。

そしてキンジはその爆炎に紛れながら攻撃していた。

『チクシヨウガ!!』

トルーパー・ヘッド・マスターは爆炎を吹き飛ばそうと大型の槍をぶつけようとした次の瞬間にアラクネ・ボムキルが腰から高熱を発したカッターを出した。

そしてそれが槍に当たって・・・切裂かれた。

『・・・!!ナア!!』

トルーパー・ヘッド・マスターはそれを見て驚いたと同時にヤバいと思った。何せ自分の唯一の武器を失ってしまったからだ。

トルーパー・ヘッド・マスターは一端引こうとして爆炎から外に出たその時……ある物を見てしまった。

それは……。

「よう。」

技を溜め込んでいたキンジであった。

すると電流が流れている方から音声聞こえた。

『RAIDER STING』

「ライダーステイング!!」

すると巨大なドリルのように電流が走り回った。

そしてそれは……トルーパー・ヘッド・マスターに命中した。

するとトルーパー・ヘッド・マスターはキンジに向けてこう言った。

『サイコウダ……サイコウノアイテダッタゼエエ——!!!』

ゲババババババと笑いながらトルーパー・ヘッド・マスターは……爆散した。

宣言。

「キンジさん！．．．あれ？」

「．．．終わっちゃってるわね。」

レスティアとレティシアはそう言っている中アリアはある物を見た。

「な．．．何よあれ！IS．．．にしては生き物みたい．．．。」

アリアはアラクネ・ボムキルを見てそう思っている中キンジ達はある物を見ていた。
それは．．．。

『ゲ．．．バババ．．．ヤルジャ．．．ネエか。』

トルーパー・ヘッド・マスターだったものの頭部がそう言っていた。

「ブラド。」

キンジはトルーパー・ヘッド・マスターを見て憐れんでいるとアラクネ・ボムキルはトルーパー・ヘッド・マスターに向かっていくと壊れた頭部を見てこう聞いた。

『オイ、テメエニキキテエコトガアル？』

『ナンダ．．．デキ．．．ソコナ．．．イ』

トルーパー・ヘッド・マスターはその状態になってもボムキルを馬鹿にしていた。

然しボムキルはトルーパー・ヘッド・マスターに対してこう聞いた。

『アタシハアノトキジブンノブジダイイチダツタケドヨ．．．アタシノホカニモイタノカ？ジツケンタイガヨ？』

「!!」

キンジはそれを聞いて愕然としていた。

理子以外にも実験体にされていた人間がいたのではないかと言う疑惑があつたという事だ。

するとそれを聞いたトルーパー・ヘッド・マスターは．．．。

『ゲババババ．．．キイテ．．．ドウスル．．．』

『モウテメエハシンダトイエバカイホウサレルダロウナ？』

そう言うのとトルーパー・ヘッド・マスターはこう返した。

『バカガ．．．ココロノ．．．キズハ．．．カンタン．．．ジャ．．．ネエ。』

然しトルーパー・ヘッド・マスターはキンジを見るとこう言った。

『マア．．．トオヤマキンジ．．．ダケハ．．．イッテモ．．．イイナ。』

『レテイシア．．．ガ．．．ラチシ．．．タ．．．ヤツラ．．．ハ．．．アル．．．ケンキュウニ．．．リヨウシ．．．タ。』

『ソイツラ．．．シンデ．．．ステタ．．．』

『オマエラ……ノ……シヌスガタ……アノヨデ……オガンデ……ヤルゼ……』

『ゲバ……バババ……』

そしてトルーパー・ヘッド・マスターは……喋らなくなった。

するとボムキルは理子に戻ると降りてきたヘリコプターに乗ろうとしていた。

「待ちなさい!!」

アリアは理子を止めようとする……。

「シエアアア!!」

辰巳がヘリポートに繋がる階段を全てたた切った。

そして理子はキンジにある事を言った。

「遠山キンジ。あんたはあたしのライバルだが……いい意味で長い付き合いになりそうだな。」

「お前とはごめん被るね。」

キンジは理子に対してそう言うと言った。理子は服のポケットからある物を出した。

それは……。

「何だこのUSBメモリ?」

理子はUSBメモリをキンジに投げ渡すところ言った。

「・・・遠山金一があたしと密会する際に使う倉庫の場所と次の集まりの時刻。」
「!!」

「それが入ったデータだ。あんたのおかげでブラドに一矢報いたんだ。
そのお礼だ。」

「あたしははずれあんたよりも強いチームを作る。」

「その時こそ・・・決着と行こうぜ。」

じゃあなと理子はそう言いながらヘリコプターに乗った。

そして空高く飛んで行った。

然しその中でアリアは理子に対してある事を言っていた。

「理子ー！あんたは必ずあたしが捕まえてやるから!!その時は

風穴じゃああああ!!」

そう大声で言ってるがキンジは携帯を出してある所に連絡していた。

そこは・・・。

「あ・・・防人さん」

事後処理。

あの後キンジは防人達にブラドのことで連絡した後、国連軍がトルーパー達の残骸の回収、紅鳴館の研究所と各地に散らばっている他の研究所の捜索が行われた。その際には多くの人間の脳の無い死体が大量に保管されていた。

如何やらブラドは死体を保管していたようだ。

そしてブラドが死んだという事は小夜鳴先生も死んだという事になったのだが、どうやら武偵校では既にバックストーリーが準備されていた。

如何やら小夜鳴先生はアメリカの研究所からお呼びがかかったので、そっちに行っただという設定になったそうだ。

キンジ達はと言うと武偵局や、警視庁、神奈川県警、検察庁、東京地裁から今回の一件に対しての司法取引を持ち込もうとしたところ防人がそれに対してこう告げたそうだ。

「あれは国連軍が内々で調べていた案件であるため貴官らとは何の関わりが無く、むしろ何もしてない貴兄らが今更動いても意味のない物である。」
と言う・・・少し本音が混じってるぞと言いたい所だがそれを聞いた関係者たちは

苦虫を噛み潰したような表情で去って行ったという光景は胸がすくむ思いであった。

「そして……。

「皆ー！りこりんが月の都からアポロに乗って帰ってきたヨー！！」

『『『『ウオオオオオオオオ！！りこりんーりこりん！！りこりん！！』』』』

暫くして理子が武偵校に戻ってきた。

又馬鹿共が大声出していた。

キンジはそれを見た後溜息ついていたが隣にいるアリアはと言うと……。

「………（#。D。）」ゴゴゴゴギリギリギリギリ

歯ぎしり鳴らしながら睨みつけていた。

……まあ飛び掛からないだけかもしれませんがなとキンジはそう思っていた。

すると理子はキンジを見ると……。

ウインクしていた。

『『『『オオオオオオオオオオ！！！！』』』』

男子連中はOrz状態で倒れるがキンジはそれを不審に思っただけでみると……。

モールス信号であった。

無論キンジはそれを見た後また溜息をついた。

そして放課後……。

「来たぞ理子。」

「……久しぶりだな、キンジ。」

屋上で理子は「武偵殺し」の口調でそう言った。

「……そいつらが新しい仲間か？」

理子の周りには辰巳と尽が両脇に立っていた。

「まあな。何れはもつと大人数にしてアタシノ全てを取り戻してやるさ。」

そう言うのと理子はキンジにこう言った。

「だけど……今回は貸しが出来た。それもでつかい……もしアメリカに行くことがあつたらあたしを頼れよ。今回アタシハアメリカにロイミュード技術を漏洩した事でコイツヲ手に入れたんだ。」

理子はそう言いながら自身のISの待機形態を見せた後そう言った。

「成程な・・・それなら合点がいくわけだ。」

キンジはそう言つて納得すると辰巳はキンジにこう言つた。

「俺も尽もお前のことは聞いてるぜ。現在で最も強い武偵校生だつてな！何れお前を越えてやるから覚悟しろよ!!」

「・・・それは断りたいなあ。」

キンジはそう言つて理子はキンジに対してこう言つた。

「気を付けろよ。ブラドは一時だがある科学者と手を組んで前に言つていた

能力の写しを実験していたんだ。そいつはこの間糸弦島で行方不明になつたらしい
が

念の為に頭の隅っこに入れとけよ。」

「ああ・・・気を付ける。」

そう言つて理子はキンジに向けてこう言つた。

「これからもクラスメイトとして・・・よろしくな。」

「ああ・・・こちらこそ。」

キンジと理子はそう言つて握手をした。

果たしてその先には何があるのやら・・・。

『第四章 カオスエピソード 黄金のストラトス／白銀のベストマッチ!!』
待ち人。

「本当にここにいるのう?」

レテイシアはそう言いながらキンジとレスティアと一緒に倉庫に向かっていた。理子から貰った情報を半ば（殆ど）疑いながらもそこに向かっていたのだ。

・・・兄である遠山金一の手掛かりがあると信じて。

そしてキンジはその倉庫を見つけた。

「ここか。」

そう言うときンジは万が一に備えて武器を持たせるように二人にそう言うとき扉を開けた。

そしてそこにいたのは・・・。

「カナ。」

嘗て理子に変装していたカナのオリジナルであった。

然しそれとは全く別物であつた。

時が止まるほどの美しさ。

周りの物が全て視えなくなる位の美しさだ。

ロングスカートを着ていたカナは編んだ黒い長髪を揺らすと長い睫毛の下にある瞳がそつと、開いた。

「……………」

その光景にレスティア達はボーっとしていた。

あまりの美しさで茫然としてしまつていたので。

然し当のキンジはと言うと……。

「(完全に呆然としているがあれば本物の女じゃねえつて言つたら……

落ち込むだろうな。)」

キンジはそう思いながらカナを見ていた。

遠山家に代々受け継がれているヒステリアモードは性的興奮をトリガーにすることが主である。

かの遠山の金さんは肌を脱ぐことで性的に興奮……まあ簡単に言えば露出狂の類であつたのであろう。

だがキンジとは違いいつでもヒステリアモードになれたのだ。

そして遠山金一もまたそれに倣おうとある工夫を施した。

それは異性を必要とせず、自らの意志で性的に興奮させられるもの……。

自信を絶世の美女に化けさせる事である。

つまり……女装である。

酷い嗜好であると思いたいがそのおかげで強くなつたという何とも言えない側面がある。

「キンジ、ゴメンね。イ・ウーは遠かつたわ。」

「遠かつたならさっさとあの時に理子を倒して帰ってくれば良かったら。」

キンジは内心激しい怒りを押し殺すかのようにそう言うところ続けた。

「それで理子の情報ならここで何か指示を出すと思つていたが何なんだ、カナ……いや、兄さん！」

そう言うとなレスティアとレテイシア（。 ㇿ。）ポカーンとした後……大声でこう言つた。

「フェ（； ㇿ。）!!あの人男なんですか!？」

「ちよつと！あたし達よりも美人て!!」

ふざけてるわよとレティシアはそう言うが唐突にカナ・・・いや、遠山金一が
こう聞いた。

「キンジは神崎・H・アリアとー仲良し?」

「何じゃそれ?あいつと仲良しって見えるなら今すぐ眼科と脳外科に行つて
医者に診てもらえ。」

後精神科にもなと言つと金一はこう続けた。

「・・・好きなの?」

そう聞くとキンジは二述べもなくこう言つた。

「あいつとは仲良しどころかあつちが一方的にあだこうだ言う始末だよ。」

何とかして欲しいぜとぶつくさ文句を言つと金一はキンジに向けてこう言つた。

「良かった・・・キンジが肯定したら一人でやろうと思つてただけど

丁度良かったわ。」

そう言つと金一はキンジに向けて手を差し伸べてこう言つた。

「これから一緒に、アリアを殺しましょう。」

それを聞いたキンジはと言つと・・・。

「・・・兄さん。マジで精神科行つたら?」

心配される始末であつた。

兄（姉）？との対話。

「ねえキンジ？精神科って私どこも悪くないわよ？」

「いや可笑しいにも程があるぞ？殺すって兄・・・カナは疲れてんだよ。少し休め。」

なつと言いながらキンジは金一を諭そうとした。

「きっとカナになり過ぎて頭のねじが数本逝かれちゃったんだな。そうだよ、そうに決まってる。おにぎり一個の為に危険な仕事を平気でするような

THE・正義の味方が殺し・・・何てしないもんな。」

恒久平和の為に銃を使って人殺しをする某魔術師みたいにくたびれたんだなきつと思っていたが金一はキンジに対してこう答えた。

「疲れてないわ。私は今夜、アリアを殺す。」

「（・・・とうとうそこまで疲れたのか。）」

ホロリと涙を流しながらそう思っていた。

「神崎・H・アリア。あの少女は巨凶の因由。巨悪を討つのは義に生きる

私達遠山家の天命」

「今時、義で救えねえ事だつてあるんだぞ？ 法治国家でそんな事出来るわけねえだろ？」

キンジは金一に説得していた。

「（アリアは比較的どうでも良いがよ？ あいつの為に兄さんを犯罪者に何てさせたかねえしそれに・・・半年分の怒りをぶつけなきや

気が収まらねえよ!!）」

キンジはアリアの為ではなく金一と・・・まあ大半であるが自分の為にと考えるとキンジは銃を出した。

「・・・どう言う事？」

金一はポカーンとした表情でそう聞いた。

「・・・軽々しく武器を見せるのは、良くないわ。」

金一は溜息交じりでそう言った。

「見せてしまえば、装弾数、射程距離、長所、短所まで・・・全てを見抜かれてしまうわ。覚えておきなさい。」

パァン！

銃声が鳴り・・・。

「・・・ウウウ。」

金一が右手を抑えていた。

そして下には……金一の拳銃でもあるコルトSAA——通称「ピースメーカー」があった。

「確かにあんたなら全てを理解できると思うが……世の中には上がいるんだぜ。」

「それにその銃は俺がガキの頃見ていた西部劇の映画で『かつこいい』って

言ってたから真似してたよな？」

「もう……あの時の俺じゃねえんだ。カナ。」

キンジはそう言いながら金一に銃を向けていた。

「それに……には俺だけじゃねえぞ。」

「!!」

金一はそれに気づくが既に周りにはレスティアとレティシアがそれぞれ自分の獲物を持って金一を囲っていた。

「遠山金一……いや、カナ。あんたには『イ・ウー』について

全て話してもらうぞ。」

キンジはそう言つて金一に近づこうとすると金一はキンジを見てこう言った。

「……強くなったね。キンジ」

そう言つて……笑っていた。

「けど・・・まだ貴方には知らせない。」

そう言つて金一は左手から・・・小さなボールを出して・・・落とした。

「「ウワア!!」」

すると目の前が煙で包まれた。

「煙幕!?!」

「前が・・・!!」

「またなのお!!」

キンジ達はそう言いながらゴホゴホと咳き込んでいた。

「キンジは強くなつたね。」

「!!兄さん!」

「今回アリアについては殺さないわ。・・・けど覚えておいて。」

「その選択が間違いかどうかはいずれはつきりするわ。」

その声が聞こえ終わつた時には既に・・・金一は消えていた。

「・・・兄さん。」

「アンタは一体何しようとしていたんだ?」

キンジは天井に向かってそう呟いた。

終業式。

「・・・それでは今日を持ちまして一学期を終了いたします。」

『ヨッシャアアアア!!!』

校長の一言が全生徒を熱狂させた。

何せ学園島全体が夏休みになるからだ。

これを期に外で遊んだり学業に勤しんだりするからだ。

そして全員が体育館から外に出て行った。

それはキンジ達も変わらずであった。

「それで皆は此れからどうするの?」

教室の前で飛鳥がそう聞いた。

そこにはいつもの面子もそこにいた。

焰の場合

「あたしは実家だな。久しぶりに皆の顔見てエエし。」

雪泉の場合

「私は武偵大ニ向けて勉強です。」

紫の場合

「・・・姉と一緒に旅行。」

華毘の場合

「うちは京都の実家つす！お土産たのしみにしてつす!!」

飛鳥の場合

「私は店の手伝い。」

夜桜

「僕はバイトに明け暮れるな。」

キンジ、レスティア、レティシアの場合

「「特になし。」」

そう言った。

「って・・・それは無いよ。遠山君。」

キンジの言葉に飛鳥が物申した。

「いやだつてよ。特にねえし。」

「それでもです。何も無いのなら何処かに三人で遊びに行ったり勉強したりと色々し

たらどうです?」

あ、節度あつてですからねとキンジの言葉に雪泉が釘をさしてそう言った。

すると外で何やら声が聞こえた。耳を傾けると……。

「おい、札幌武偵校のすげえ美人の女子がアリアとやり合ってるらしいぜ!？」
「もう始まつてるらしいわよ!？」

「何でも三つ編みの長い黒髪の女らしいぜ!!」
「!!」

キンジはそれを聞いて驚いていた。

アリアとやり合えるほどの……然もそんな人間はキンジが知る限りたった一人……然もこの間会ったばかりの人間だ。

「悪い!俺先行ってるわ!」

「あ、待つてください。キンジさ〜ん!!」

「ちよつと待ちなさいよ!!」

「あたしらも行くと!!」

「うむ!」

「うん!」

「……うん」

「おっす!!」

「ええ。」

キンジ達に続いてレスティア達も向かった。

如何やら場所はアサルトの体育館だったらしいがその一角。

コロッセオと呼ばれるスケートリンクみたいな楕円形の防弾ガラスで囲まれた
デスマッチフィールドである。

その周りで生徒たちが集まって見ていたがキンジ達を見るや否やこう言った。

「ああ！キンジさんだ！」

「焰の姐さんと夜桜の姐さんも!!」

「飛鳥さんに生徒会長！紫さんに華毘さんもいるわよ!!」

「すげえ!!最強チーム揃い踏みかよ!?!」

そう言っていた。

「・・・私達って・・・。」

「何か仲間外れって感じね。」

その中でレスティアとレティシアが居心地悪そうにそう言っていた。

そして生徒たちが道を譲り（モーゼのようであるが）歩いていくと……
「やっぱりかよ。」

キンジは頭を抱えてその光景を見ていた。

それは……既にボロボロのアリアと冷ややかな視線で見つめているカナであった。

「あれが札幌のか。」

「中々強そうじゃのう。」

焰と夜桜がそう言うが飛鳥と雪泉はそれを見てある事に……驚いていた。

「な……何で。」

「まさか……そんな。」

二人は幽霊を見ているかのような表情で見っていた。

それを見ていたキンジはすまなそうにこう思っていた。

「（悪いな二人とも。後で色々聞くから今は。）」

そう思いながらキンジはこの戦いの行方を見守ろうとした。

「（今のカナには殺気を出している様子はねえがもし万が一のこととなったら。）」

そう思いながらキンジはポケットの中にあるザビーを見ている。

アリア対カナ。

「おいで、神崎・H・アリア。もうちよつとだけーあなたを見せて？」

カナは憂いの表情を浮かべながら片膝を付いた状態のアリアを見下ろしながら
そう言った。

そして次の瞬間……。

「うっ！」

パアン！という音と共にアリアは短い悲鳴を上げて前のめりで倒れた。

血しぶきが見えないことから恐らく模擬弾か防弾制服に当たったのであろうが衝撃
は殺せなかったのであろう。

因みにだがその威力は金属バッドで殴られたかのような痛みであるため当たった
場所によっては内臓破裂で死ぬことだつてある。

それを見ていたキンジ達はと言うと……。

「おい、あれ・・・見えたか？」

「全然見えないのじゃ。」

「・・・早撃ち、それも的確な。」

「あの銃声・・・何処かで？」

焰と夜桜、紫、華毘がそう言う中飛鳥と雪泉は。

「今のつてやつぱり」

「ええ、『インヴィジビレ（不可視の銃弾）』ですね。」

そうなるとやはり彼女はと雪泉が考えている中キンジは未だ動こうとはしていない。

「このお!!」

アリアは逆立ちするかのように跳ね起きながら両足でカナの顎目がけて蹴ろうとするも・・・カナは殆ど動かずに躲した。

「これで!!」

そして拾ったガバメントを持って今度は至近距離で撃とうとするも・・・。

とんとんと言うかのように左右の手首を軽く押しして銃口を逸らした。

「——!!」

トリガーを引く指を止められなかったアリアの銃がスライドした。恐らく弾切れになったのであろう。

然しアリアは今度こそはと思いながらガバメントを逆さにして持って近接武器として使用しようとした。

然しそれも予定調和の如く銃をひったくるかのように取り上げた。

「や——っ!!」

するとアリアは背中から二本の刀を出して斬りかかろうとした。

これならと思っていたアリアであったが・・・相手が悪かった。

ギギン!!という音と共に刀が弾き飛ばされた。

「蠍の緒（スコルピオ）」

キンジはそう呟いた。

不可視の武器。

これこそが遠山金一のもう一つの名、二つ名でもある異名

『不可視（インビジブル）の金一』

これこそがその異名の由来である。

武器どころか格闘術ですら不可視と言うその実力は早業においてならナンバー1と言われている。

よく見たら打撃をあの攻防で喰らったのか口元から血が流れ出ていた。

「ハア……はあ……アンタの……銃……『ピースメーカー』ね!？」
アリアがそう言うときカナはこう答えた。

「正解。見えなかったのによくわかったわね？」

「銃声と……マズル……フラッシュで……骨董品……だから……
今………思いだ………せなかった………けど」

「けど………これで終わり。」

カナがそう言った次の瞬間……。

パァン!という音と共にアリアはそのまま真後ろに倒れた。

「今回は様子見と………キンジとの約束があったから………」

「ここまでしておくわね。」

そう言つてコロッセオの出入り口に向かうとキンジを見てニコツと笑つた後
飛鳥と雪泉を見て・・・声に出さずにこう言つた。

「・・・綺麗になつたわね。飛鳥ちゃん、雪泉ちゃん。」

「!!!」それを聞いた二人は泣き出しそうな顔になつた。

そしてそのまま彼女は・・・体育館から出て行つた。

「・・・後で説明しなきゃな。」

キンジは飛鳥と雪泉を見てそう呟いた。

戦いの後。

「・・・あいつが・・・キンジの・・・兄貴・・・？」

武偵校から少し離れたレストランでキンジは飛鳥達を誘ってカナ・・・いや、遠山金一についてを話していた。

そこでキンジが言った後に焰を大きく開けながらそう言ったがそれに続くかのように夜桜達もこう言った。

「いやいや待つんじゃない！お主の兄上は確か・・・」

「ああ俺も会うまでは半信半疑だったが間違いねえ。」

その言葉にキンジもそう言うが紫もこう言った。

「じゃあ・・・あの事件は・・・？」

「これは間違いなく武偵局も一枚噛んでいると思つたほうが良いつすね。」

そして華毘もそう言うが当の飛鳥と雪泉はと言うと・・・。

「・・・どうして・・・戻ってこなかったんだろう？」

「皆さん心配してました。・・・お爺様も・・・皆。」

「そう言つて落ち込んでいた。」

できれば何かしらの方法でも良いから生存報告ぐらいはしてほしかったと思っ
ているようだ。

「・・・何にしても兄さんの目的が何なのか俺は知りたい。・・・分かったら
電話する。それでいいか？」

キンジが全員に向けてそう言うのとそれぞれこう言った。

「ああ分かったぜ。」

「僕はここにおるから何か分かったら気兼ねなく伝えてくれ。」

「・・・じゃあ私はあの事件について調べ直しとくね。」

「何かあったら何でも言うて欲しいっす！」

焰と夜桜、紫、華毘がそう言った後飛鳥と雪泉はと言うと・・・。

「遠山君。もし分かったらこう伝えて。」

「私もです。」

キンジはそれを聞いて?と思うと飛鳥達はこう言った。

「ちゃんと後でじつちゃん（お爺様）達に謝ってほしいと・・・

私達の間も殴ってね（欲しいです）♡（#。∩。∩）」

「・・・お分かった・・・。」

流石のキンジも二人の怒りの表情に返事せざる追えなかったようだ。

「それにしてもアンタの兄さん強すぎよ。」

「あそこで私達が割り入っても勝てるかどうかですね。」

キンジとレスティア、レティシアは家に帰る道中でそう言っていた。

何せ金一自身はプロの武偵で然も二つ名もあるほどだ。

あそこでキンジ達が入っても焼け石に水になる事は明らかであったであろう。

キンジ自身もそれが分かっていた。

あそこで無理に割り入んでも勝ち目などない事ぐらい。

そしてキンジは家の部屋の鍵を開けると・・・玄関前に見慣れない靴があった。

「?・・・誰か来てるのか?」

キンジは不振だなど思っただけレスティア達に武器を携帯するように告げた後三人は物音を出さないように静かに歩いた。

「まさかアリアの奴・・・合鍵を仕込んで入ってきたのか?」

全開アリアはキンジの所まで突撃してきた事があつてかキンジは怪我したのに元気だなど思っていた。

そしてリビングに誰かいるという気配を感じてさんそれぞれ部屋の前に言って・・・銃を構えて出てきた。

そしてそこにいたのは・・・。

「スー・・・スー・・・スー・・・。」

「・・・カナ？」

ソファアアの上でカナが寝ていた。

忠告。

「はい、寝起き覚ましのココアです。」

「ありがとう、レスティアちゃん。」

レスティアの淹れてくれたココアを貰ってカナは一服していた。

「ふー．．．いい味。飛鳥ちゃんや雪泉ちゃんと同じで気配り出来る女の子と同棲なんて嬉しいわ。」

カナはレスティアを見てニコニコと笑いながらそう言った。

「いえ、私はそんな．．．キンジさんと暮らしているうちに覚えただけです。」

レスティアはそう言いながら台所に行って晩御飯の準備をしようとしていた。

「それで．．．何で俺達の家に入ってたんだけ？」

キンジはレスティアを見た後そう聞いた。

まあ．．．大体分かって切っているが。

「ちよつと眠くなつてね。もうそろそろアレが来そうなのよ。」

「．．．やっぱりかって．．．何で家で？」

「キンジに伝えておきたいことがあったから。」

キンジはカナの言葉を聞いてはーと溜息ついた。

アレとは言うところ……ヒステリアモードの長期使用における副作用のことである。何せ日中神経系、特に脳髄に負荷をもたらすヒステリアモードを長時間使用するためその反動で長時間睡眠を余儀なくしているのだ。

特にカナの場合は初め数十分ずつ寝たり起きたりを繰り返して最終的には10日前後の睡眠期に入るのだ。

そしてカナはキンジに向かってこう言った。

「でも嬉しいわ。」

「?」

「あのキンジが私の早撃ちを見破っただけじゃなくて殺気にまで対応できるなんて」「色々あったからな。それに俺だけじゃ無理だったところもあったよ。」

「それでも凄いわ。貴方は当代一の潜在能力を持っていただけこの分なら……もう私がいなくても大丈夫よね。」

後半カナは小さな声でそう言うが流石のキンジもそれを聞くことはできなかつた。

「それじゃカナ……歯あ食いしばれよ。」

「え?」

キンジはそう言ってカナに近寄って……ぐりぐりし始めた。

「痛たたたたたた！何で〜!?」

「喧しい！飛鳥達から『私達の方までお願いね』って頼まれたからな!!俺の分は兄さんに備えるがアンタハ飛鳥達の分喰らえ!!!」

「ヒギヤあ嗚呼ああ!!」

「ううう・・・キンジの鬼〜。」

カナは頭を擦りながらキンジの悪口を言っているが当の本人は知るかという風にココアを飲んでいた。

「それで・・・何だよ？用事って。」

キンジはそう聞くとカナは頭を擦りながらこう言った。

「気を付けなさいキンジ。恐らくだけど厄介な敵が・・・『イ・ウー』が来るわ。」それを聞いてキンジは又かよと思った。

「またか・・・今度はどんな末裔がやってくるんだか。」

キンジがそう言うところ聞いた。

「・・・神崎を殺す気か？」

キンジがそう聞くとカナはにこりと笑ってこう言った。

「殺さないわ。未だ・・・『第二の可能性』が残っている限り。」

「なんだそりゃ？」

カナの言葉にキンジはなんのこつちやと言うとカナはこう言って帰ろうとした。

「覚えておきなさい、キンジ。アリアは誰かが導かないとたぶん自分を滅ぼすわ。

それを頭にキチンと入れといてね。」

そう言って出て行った。

「・・・。」

キンジはその言葉の意味を知ろうとしていると電話が鳴った。

そして見るとメールが入っていた。

それを開くと出たのは・・・この言葉であった。

『7月24日、横浜の瀬戸神社に22:30来い。』

それだけであった。

初対面の主人公ズ。

そしてそれから4日後。

キンジ……達は瀬戸神社へと向かった。

街中であるがどちらかと言えば海側に近く、人通りもまばらな時間帯である。

そして……。

「何でオマエラも来てんだ？」

「あら良いじゃない？仕事話なら私達も囁ませなさいよ。単位を取らなきゃいけないし。」

「すいませんキンジさん。レティシアがどうしても言つて聞かなくて。」

キンジ、レティシア、レスティアの順番でそう言った。

そして神社の中に入った。

すると境内に……誰かがいた。

「こつちだ。キンジ」

「防人さん……でしたよね？」

「ああそうだ……そいつらは？」

防人はキンジの両隣にいるレスティア達を見てそう聞くとキンジは気まずそうにこう言った。

「ええと……その……あの」

「……まあいいや。今回は恐らく武偵としてのお前の仕事も入ってるしな。」

防人はそう言つて溜息ついた後こう続けた。

「それとお前の先輩……年はお前の一つ下だけど気兼ねなく接してくれ。」

「は……はあ？」

キンジは防人の言葉に空返事でそう言った。

するとレテイシアが何かを感じついた。

「何か来るわ。」

そう言つて武器を構えようとすると……防人がこう言つて止めた。

「ああ大丈夫だ。俺達の仲間だ。」

そう言つて空を見るとそこには……一機の黒いISが空を舞っていた。

それは巨大な翼を持っておりそのままキンジ達のすぐ近くで着陸した。

「よく来たな……一夏。」

防人がそう言うとそのIS乗りはこう言った。

「久しぶりです。防人さん。」

そう言うとISから降りた。

するとそれを見ていたレスティアが・・・顔を真っ青にしてこう言った。

「あの人・・・まさか男?」

「ハア!?そんな訳あるか?だって男のIS操縦者なんてそれでこそ

世界でたった二人」

キンジが言いかけるとそのIS乗りの姿が露となった。

黒髪で前髪の一部に銀のメッシュが入った頭。

少し切れ目の目つき。

何よりその顔は数週間記事で特集が組まれたほどの・・・有名人であった。

「あ・・・アンタ・・・マサカ・・・」

「ああ、新しい人ですね?初めまして」

「・・・織斑一夏と言います。能力は視覚の全体化。」

「よろしく願います。キンジさん」

まさかの有名人であった。

「防人さん！こつちですよ〜。」

「おお、今集まった所だ。」

防人が黒髪の青年にそう言うのとキンジに対してこう言った。

「キンジ、アイツラハお前の先輩達だからよろしくな。」

「あ、ハイ!!」

キンジはそう言うのと全員がそれぞれ自己紹介をした。(ここら辺は拙作に出てくる『カオスストラトス』に出てるのでそちらを参照してください。)

そして自己紹介を終わらせると防人は全員を神社の裏に集めた。

本人曰く……。

「秘密で話すならこう言うところだろ?」

だそうだ……。

無論全員そっちに向かったが……何名かと言うより約二名が怖がっていた。

それは……。

「お前ら……離れろよ。」

「嫌よ！絶対嫌だからね!!」

「キンジさ〜ん!!離さないで下さ〜い!!」

レテイシアとレスティアである。

只でさえ夜の神社は暗く、怖い印象が漂っているのに外人でもある

二人からすればそれは更に恐怖が倍増するのだ。

キンジは何とか意識しないように我慢している中一夏の方を向くと・・・。

「……………」

「……………」

「(ああ・・・俺達分かり合いそうだ。)」

何やら直感的にそう思ったそうだ。

「それじゃあ・・・作戦会議と行くか。」

防人は神社の壁を背中越しにしてそう言った。

作戦説明

すると防人は携帯を出して全員に投影ディスプレイでこう説明した。

「今回の任務地はアクアシティお台場にある都営カジノ『ピラミディオン台場』」

「ここは国が賭博法改正に伴って建造された建物で全面ガラス張りの建物だ。」

防人がそう説明するとキンジがこう聞いた。

「もしかして今回の任務はそこで何か行われているんですか？」

キンジがそう聞くと防人はこう答えた。

「そうだ。表向きは観光客や一般人などが使用する通常のカジノ・・・

裏じや貧困層の人間や女子供を使って強制的売春、肉体を使った賭け事などが金持ち

の層共が行ってる。」

それも特定のがなと言うと一夏は・・・。

「フザケンナ！」

怒り乍らこう言った。

「あの事件の時も一部の高官共が犯した犯罪でどれだけの人間が迷惑かけたと思

ってるんだ!!」

そう言いながら一夏は地面を叩きつけるが防人は一夏を落ち着かせるようにこう言った。

「お前の言いたいこともわかる。だが怒りに飲まれて全てを破壊しようとするれば待つてるのは無だけだ。ソノ怒りは連中にぶつける迄取つとけ。」

「・・・ハイ。」

一夏は怒りを抑えるようにそう返事すると防人はこう続けた。

「話がそれだが俺達の今回の任務はそのカジノに潜入して救出と層共の逮捕又は殺しだ。」

「今回は初任務のキンジとそこの姉妹たちにも潜入班として加えさせる。」
「良いなと言うと全員それでよいと領いた。」

「それじゃあ班だが。」

「先ず俺とカズキ、斗貴子、キンジ、そこの姉妹は堂々と正面から中に入る。」

「剛太、秋水、桜花の三人は俺の合図と同時にトレーラーで強襲。」

「一夏は空からI Sで奇襲。」

「剛太、秋水は戦術機じゃなくてジープで突撃してもらおう。」

「了解！」

「桜花の機体は『紫焰』。武装は軽装備でマシンガンとハンドガン。」

「分かりました。」

「一夏の機体は未だセカンドシフトして日が浅いからそのままの状態で頼む。」

「はい！」

「そして潜入班だが・・・俺とカズキ、斗貴子は普通の服で。」

「了解！」

「・・・ちゃんとした服ですよ。隊長。」

「分かってるよ。・・・キンジ達はちよつと悪いが正装で頼む。服代はこつちで

何とかする。」

「ま・・・乗り掛かった舟だしね。」

「精一杯お手伝いいたします!!」

全員がそれぞれ言うのと防人は最後にこう伝えた。

「それじゃあ7月30日の18時に作戦を始めるが・・・此れだけ言うぞ。」

「全員・・・馬鹿共を一人逃さずぶつ飛ばせ!!」

『オオオオ!!』

防人の掛け声に全員が答えた。

作戦は一週間後。

始まりのゴングが鳴る準備が整え始めた。

「あそうだ、一夏。お前にこれ渡すわ。」

そう言つて防人はあるトランクを渡した。

「何ですかこれ？」

一夏はそれを受け取りながら聞くと防人はこう答えた。

「わからん。だが総司令からの渡し物だそうだ。」

「総司令が・・・何だろう？」

一夏はそれがなんなのか分からなかった。

作戦開始!

そして7月30日 午後17時45分

作戦が始まった。

「それじゃあ全員・・・準備良いな?」

防人はトレーラーにいる全員にそう聞いた。

『ハイ』

全員がそう答えると防人はこう続けた。

「先ずは俺とカズキ、斗貴子の順で内部に入る。」

「その後にキンジ達が入って会場の場所を調べてくれ。」

「あの一。少しいいですか?」

「?どうしたキンジ?」

防人はキンジが何やら気まずそうな表情で聞きに来たので何だと思った。

「俺はスーツですから良いですけど・・・何で・・・ナンデ」

「何でレスティア達はドレスサンダー!!」

「ちよつと! 煩いわよ! トオヤマキンジ!!」

「あの・・・もしかしたら・・・嫌ですか？こういうの」

「いや、違うぞレスティア！出来ればもう少しそのお・・・露出をダナ・・・キンジがそう言うのも無理はあるまい。

今のレスティアとレティシアの服装は胸元が大胆に空いたドレスなのだ。然も背中が丸出しである為下着は着けていないのだ。

（まあ・・・それでも見えないように工夫はされている。）

防人はキンジを見て溜息つきながらこう言った。

「あのなあ・・・お前達の設定は『御剣重工パワードスーツ開発事業の

幹部のボンボンの子供』と『その愛人』って言う設定なんだから仕方がねえだろ？」

防人は肩を竦めてそう言うがキンジとレティシアが抗議した。

「はあ！何だそれ!？」

「聞いてないわよ！そんな設定!!」

「だって今言っただから。」

「それを早く言えー!!」

「わ・・・私が・・・キンジさんと・・・そう言う・・・関係／＼／＼」

約一名顔を真っ赤にしているが防人は無視してこう続けた。

「それで場所が分かったら剛太達と一夏が時間差で強襲するっていう作戦だ。」

「人の話を聴けえ!!」

防人の態度にキンジ達は抗議していたが聞く耳持たずであった。

「それじゃあ……行くか。」

「「ハイ!!!」」

「……おお……」

約二名ヤル気が失せているがまあ仕方があるまいと防人はシカトして先に向かった。

そしてその15分後にキンジ達が向かった。

「さてと……行くか。」

「……そうね……やる気失せたけど。」

「／／／／／」

キンジ達は各々の思い出中に入る前に換金所に向かった。

こういう時に備えて防人たちはキンジ達に1千万円分の金を渡しているのだ。

初めて渡された1千万に驚きが隠せていなかったが心を落ち着かせて中に入った。

カジノ・ホールの入り口付近はスロットゾーンで埋め尽くされているがそれは

パチスロ感覚で楽しんでる人で埋め尽くされていた。

然もこの一階は海辺のカジノという事なのかホールをぐるりと囲んでおり、バニーガールのウエストレス達が水上バイクで移動していた。

「ドリリンク如何ですかー？」

「カクテル、ウイスキー、コーヒー全てが無料デース！」

「ご注文の方はお近くのウエストレスをお呼びつけてくださいーい。」
それを見ていたキンジ達はと言うと……。

「あれって楽しいのかな？」

「面白そうね。」

「でもああいうのって難しそうですね。」

そう言っている中誰かが来た。

「失礼するのじゃお客様？ 飲み物は如何で？」

「いや俺は……」

キンジは隣にいたであろうウエストレスを見て……絶句した。

おかつぱ頭と言われるぐらいの黒の短髪

そして何より見たことある……その顔。

「おお、キンジじゃないかのう。」

「・・・何やってんだ？夜桜。」
バニーガールを見ていた夜桜がそこにいた。

潜入中の出来事。

「お前・・・何でここにいるんだ？」

キンジは口をパクパクさせながら夜桜に聞いた。

すると夜桜はこう返した。

「うむ。日雇いのアルバイトなのじゃが時給は高いし武偵だと言ったら即採用されたのじゃ。」

他にも体を見られたがのうと言うとキンジはそれを聞いて納得した。

「（・・・多分武偵だつて言うよりも見た目で判断されたんだな絶対。）」
キンジはそう思っていた。

何せ夜桜のスタイルは飛鳥や雪泉、レスティア達よりも胸が大きい割に腹部がシユツとしているためメリハリがしっかりとっているのだ。

おまけにバニーガールの制服である為か胸が強調された衣装となっており周りの客はそれに見入っていてスロットをすられる始末である。

「それでキンジ達はそんな畏まった服装でこんな所に来るとは・・・
何かあるのか？」

夜桜は終盤耳打ち（胸が腕に当たっていることに気づいていない。）してそう聞くとキンジは言いずらそうにしていたがこう答えた。

「今ある人間の護衛をしているんだが見失っちゃまってな。ここいら辺で金持ちが集まりそうなところってあるか？」

そう聞くと夜桜はこう答えた。

「うむ、それなら二階に行くときいぞ。あそこはプロや金持ちが集まっておるからな。」

「ありがとうな、夜桜。仕事頑張れよ。」

「うむ。キンジも元気でな。」

そう言つて夜桜は何処かへと向かった。

「さてと・・・行く」

「えい。」

「!!!」

キンジはレスティア達と二階に行こうとするとレスティアがキンジに抱き着いてきた。

「な、何すんだよ!?!レスティア!?!」

そう聞くとレスティアは・・・頬を掠らせてこう答えた。

「キンジさんが夜桜さんとくっついて鼻の下伸ばしてたからです。」

「いや待て！どちらかと言うと色々とヤバかったからであってダナ!!」

「私だって・・・結構あるんですよ。」

そう言つてレスティアはキンジに更にくっ付いた。

下着を付けていない為生の胸の感触が伝わるだけではなく小さな何か当たっている感触もしたので。

「グググググ」

キンジはこれはヤバいかもと思つていると・・・さらに追い打ちが掛つた。

「それ♪」

「!?!?!」

今度は反対側にレテイシアがくっ付いてきた。

何故だと思つているとレテイシアがこう答えた。

「あら？ 私達は『愛人』つて言う設定なんだからこういうのは当たり前でしょ？」

レテイシアはそう言いながらニやけ顔で更にくっ付き始めた。

両腕から伝わっていく温度にキンジは如何すれば良いのか分からなかった。

「(だああもう！如何すりやあ良いんだ!?!教えてくれ兄さん!)」

キンジはここにいない兄にそう助言を請いたがつていた。

571 潜入中の出来事。

二階で賭け事。

「……ここが……二階か。」

キンジはやつとの思いで二階の特等ルーレット・フロアに向かった。

この特等フロアでは会員パス（キンジが持っているのは本物に限りない偽物）を所有しているものしか参加できず、然も見物するだけでも別途料金である万単位の金が必要となっている。

そんなところに来る人間はと言うと……。

きちんとスーツを身に纏った目が死人の人間。

ドレス姿の美女。

モバイルを持ったダンディーな男性。

ジーンズ姿で目が血走っているどう見てもその筋のプロ。

そして太った金持ち。

「キンジさん。あの人」

「ああ……間違いねえな。」

キンジはレスティアが指さした方向を見て間違いないと思った。

作戦会議時……。

「キンジ、お前が潜入した時こいつも探してくれ。」

「……こいつは？」

防人がキンジの携帯にある人物を送信した。

それは経済紙でよく見る人間であった。

「あれ？こいつ確か新聞に」

「そうだ。『日本のビル・ゲイツ』と呼ばれ、日本の通信技術に革命をもたらした男『古恋 空（ふるこい くう）』。こいつが齎したIS技術を応用して作った

『超高速通信』で災害地や病院で役立っている物で衛星にも使用されているが……
こいつ如何やらいろんな女とヤリまくってな、それだけじゃ飽き足らずそのカジノ
で問答無用で色んな人間や従業員を犯しているようだ。」

「……腹が立つな。」

「そいつを見つけたら尾行しろ。そして奴が向かった場所は逐一俺達に通信しろ。」

そして現在。

キンジ達はそいつを見つけたので向かうとそこにいたのは……。

「おお、キンジ殿。またこんな所で。」

「レキ……お前もまさかバイトか？」

「うむ、そうだ。私はここでディーラーをしていてな。そしたらこの男と賭け事さ。」
よく見たら……酷いありさまだった。

何せ掛け金でもあるチップ（ここでは一枚100万円）が35枚もレキサイドだ。

然も周りには人ばかりでよく見たら他のバニーガールが金を要求している。

「は……ハハハ……ここまで強くて……可憐なディーラーは初めてだよ。」

この僕がたった一時間足らずで3500万円も負けるなんてね。」

「……いや、もうやめとけよ。」

キンジは古恋にそう突っ込みを入れると彼はこう続けた。

「残りの3500万円も全部黒に賭けるが勝ったら……君を貰う。」

「？」

「！」

古恋の言葉にレキは何だとも思うもキンジはそれを聞いて目を細めた。

「僕は強運な女性をものにするこゝとで、強運を手に入れてきたんだ。」

「(手前の場合は女を犯してだろうが!!)」

キンジは古恋の言葉を聞いて毒づくもキンジは割り込んでこう言った。

「ちよつと失礼。この勝負、俺も参加させてもらう。」

そう言つてキンジは軽く手を挙げて割り込んだ。

「誰だ? お前もディーラー目当てか?」

「いえいえ、ただ単に配当目当ての人間ですよ。手持ちはこの十枚だけですがこれを全部・・・赤の23に賭けましょう。」

そう言つてキンジはチップを全部そこに置いた。

「それでは私は・・・赤の14にお客様が賭けたチップ全部を賭けましょう。」

『『『『オオオオオオ』』』』

周りがそれを聞いてざわついたがレキはこう続けた。

「では黒が勝てば2倍私達が勝てば36倍です。宜しいですね?」

レキがそう聞くと二人は領き全員がそれを見届けていた。

「では・・・始めます。」

そう言つてレキは持つていたボールを・・・回るルーレットに入れた。

賭けと悪意。

レキが入れたボールはルーレットの中に入ってクルクルとルーレットの縁を滑り落ちて・・・。

カツン、カツン、カツカツンと数字を区切っている板の上で跳ね始めた。

(；。D)ゴクリ…と誰かが生唾を飲んだ。

そしてカツン、カツンと球が周り終え始めたルーレットの数字に向かっていた。

そして落ちたのは・・・。

カラン。

「——赤の23。二人目のプレイヤーの勝ちです！」

『『『『ウオオオオオ!!』』』』』

周りの客が大盛り上がり包まれ、キンジはと言うと・・・。

「え、・・・俺勝ったの？」

未だ理解していなかったがその間にレキはT字型の棒で自身と社長とキンジのチップを集めて行った。

「それでは掛け金合計82チップです。」

そう言つてキンジに向かつてチップを差し出した。

1チップ100万円の82倍である為合計8200万円となった

・・・元金1000万円が8倍で帰つてきたのだ。

キンジはそれを恐る恐る取つて隣を見ると・・・。

ズーンとした様子で古恋は机に突つ伏していた。

そして暫くして・・・ダンと言う音と共に立ち上がつてそのまま何処かへと

立ち去つた。

「追うぞ。」

「ハイ。」

「ええ。」

キンジ達はそれを見て追つていった。

「クソクソクソ！7000万円も負けちまつたぜ！！こうなりやあ」

そう言いながら古恋は奥へ奥へと向かつていった。

キンジ達は少し離れた場所で追っていた。

そして暫く行くと黒服のガードマンらしき人達が二人ぐらいたがエレベーターの前に陣取っていた。

古恋はそのまま行くと黒服の男たちが古恋を見てこう聞いた。

「パスは？」

「これだよ。」

古恋は黒服の片割れに投げ捨てるかのようにパスを渡すと男の一人がそれを見た後パスを返してこう言った。

「古恋様ですね。どうぞ。」

そう言って男たちはエレベーターを開けた。

古恋はふんと鼻息荒しながら中にへと入っていった。

それを偵察する際に放したザビーがそれを見ておりザビーはそのまま天井を歩きながら去って行った。

そして戻ってきたザビーはキンジのブレスレットに着いてその情報を携帯に

転送させた。

「防人さん。古恋が入ったエレベーターについてだけ資料がありますか？」

1階のパチスロ

「・・・分かった。桜花、今の聞いたな。」

トレーラーの中。

「・・・はい、分かりました。設計図から確認します。」

桜花はそう言つて携帯電話から設計図を確認した。

そして暫くして・・・桜花はこう答えた。

「如何やらそこは設計図に載ってない場所の様です。」

「ビンゴ！作戦を開始する！！」

その頃の古恋。

彼の乗ったエレベーターが下りた場所は設計図に載っていない地下三階のエリアである。

そしてそのまま行くと鉄製の扉があった。

そこでまたパスを確認させて出るとそこは・・・色んな意味で悪夢な場所であろう。

「助けてくれー！！」

「お家帰してー！！」

「貴方ー！タスケテー！！」

そこには人間を使って体がダーツの針（毒入り）で刺してどれだけ死ぬかのゲーム。

見た目はスロットだが何か当たると・・・。

「おおお！これは私好みだ!!」

「いやあああ！タスケテお母さーん!!」

少女や少年が当たってそのまま何処かへ連れ去られたり。

トランプでは・・・。

「ほら早くしろ！」

「ううう・・・ウワアアアア!!」

「残念ツーパー！」

「私はフルハウスだ！」

「いや・・・ヤメテ」

「それでは電流試しの始まりでエス!!」

「イギヤアアアアア!!」

負けると電流が流れる罰ゲーム。

ルーレットでは・・・。

「良し！当たったー!!」

「また負けたア。」

「それではその子供は全て。」

「持つてけ。」

「ウウウウウウ……。」

掛け金は勝つて手に入れた女子供。

「これはこれは古恋様！今日はどのようにな？」

「さつきぼろ負けしてなあ。支配人、良い女はいないか？」

ルーレットしていた女以外でこのカジノの支配人にそう聞くと支配人は持つている本をかざして調べるとある人間にヒットした。

「それではこちらは如何でしょう？武偵ですが中々の一品ものです。」

そう言つてある人間のページを見せた。

「ほう……こいつは中々。」

古恋がそれを見て興奮していた。

「よし、そいつを連れて部屋に連れて来い。犯すなよ」

「分かつていらつしやいますよ。」

そう言つて古恋は支配人に本を渡した。

「……豊風 夜桜か。」

それはキンジの仲間でもある夜桜であつた。

「それじゃあ・・・行きますよ。」

「オオ」

桜花の言葉にジープに乗っていた剛太達が返事をした。

そして三人を乗せたトレーラーはバックしてそのまま・・・扉目掛けて突っ込んだ。

「きゃあアアア!!」

誰かの悲鳴と同時にガシヤアアアンと言う音が聞こえた。

それは桜花達が乗っていたトレーラーが突っ込んできたのだ。

そして後ろの扉が開いて・・・ジープが出てきた。

剛太達を乗せたジープはそのまま階段に向かつていった。

そしてカズキたちはと言うと・・・。

「これ借りるぞ！」

「済まない。」

「えええええ？きやあアアア!!」

カズキと斗貴子はバニーガールが乗っていた水上バイクをかつぱらってそのまま上に向かつていった。

防人はこの期に乗じて客の間をすり抜けてジープに乗った。

そしてキンジ達は・・・。

「行くぞ。」

「はい。」

「ええ。」

お互い鞆の中に入れていた武器を出してジープに向かった。

戦いが始まろうとしていた。

その数分前・・・。

「ここで待って居るようにと・・・じゃったが。」

夜桜は待合室で待っていた。

然し一向に来る気配を感じなかった。

そしてどうしようかと思っている中・・・何かを感じた。

「なんじゃ・・・この匂い」

そう言っただけだと思っていると・・・視界がくぐもってきた。

「何じゃこれは・・・まさか・・・ど」

夜桜は何かを言いかけて倒れた。

そして出口からガスマスクを付けた人間が夜桜に向かってきた。

あらゆる場所で・・・。

「何だこいつらは!？」

「今はここを守る事が重要だぞ!!」

エレベーターを守っていた黒服の男たちはそう言いながら懐から銃を出して応戦していた。

「相手はたった2人!桜花が来れば勝ちだ!!」

『『了解!!』』

防人はそう言いながらジープからマシンガンを出してエレベーターまでの通路にいる黒服の男たちを相手にしていた。

運転していた剛太達は既に降りてケーブルからネットワークをハッキングして内部の本当の情報を得ようとしていた。

「防人さん!」

「おお、キンジ！・・・そいつは？」

防人はキンジに出会おうともう一人のズボンを着た少女を見た。

「こいつはレキ。スナイプで凄腕だ。武器は？」

「お前用の新装備と予備のマシンガンが何丁かってところだ。」

「分かった。レキ、ここは任せられるか？」

「いや、何がどういう事か全くわからないぞ!!」

レキはキンジの言葉に何がどうなっているのか分からなかった。

そしてキンジはこう説明した。

「良いかよく聞け。ここの地下には違法賭博場があつて俺達はその検挙が

目的だ。」

「なあ!!この下に!!??」

「だから万が一に備えて武偵校の先生たちにも応援を呼んでもらいたいんだ!お前が本郷先生経由で応援を頼めば事は一気に収まるはずだ!!」

「・・・いまいち理解できんが分つた!先生に電話・・・ああ!電話は

着替え室に置いてたんだ!!」

「マジかよ!!レテイシア!!電話を頼む!」

「分かつたわ!」

「じゃあ私はここを死守しておく!!」
キンジ達は話し合いが終わった後キンジはジープの中に入っているトランクを取って開けた。

「こいつが・・・新装備」

「そうだ! ザビー用の新装備『苦無ガン』と『ホーネットクラッシュャー』だ!!」

一つは銃剣のような形をした銃

もう一つは蜂の尻尾のような形をしたドリル系の武器

「一つは見たとおりだがもう一つはザビーを取り付けることでよりパワーが上がった
武装になっている!!」

後は実戦で試せと防人はそう言った後ある所に通信した。

「一夏! 今どこだ!？」

横浜の海側

「こちら一夏! 後20秒で着く!」

『分かった! こっちの場所は特定してるからそっちで攻撃してくれ!!』

了解と一夏がそう言つて翼から「月朧」をせり出させた。

一夏は黒服の男たちに照準を合わせて攻撃しようとする・・・アラートが鳴った。

「!!」

一夏はそれを聞いてその方向を見た。

そこにいたのは・・・黄金のISであつた。

金色のフィン

金色の銃

何もかもが金色であつた。

そしてそのIS操縦者はと言うと・・・

黒髪のおかつば頭

ツンと高い鼻

プライドの高そうな切れ目

大きな金色のイヤリングと頭頂部にはコブラを模つた同じく黄金の冠

そして金色のISスーツ

しかし一夏はその機体に見覚えがあつた。

何せ・・・今でも篁技研に貯蔵されているからだ。

その機体の名は・・・。

「そいつ・・・『ブルー・ティアーズ』か？」

そう・・・嘗てセシリア・オルコットが保有していた

IS「ブルー・ティアーズ」である。

「ホホホホ。これはそんな下賤な名前ではないぞ、織斑一夏。」

「これはわらわの崇高なる下僕『ダハビ・クアトラル（黄金の雫）』じゃぞ。」

その女はそう言うで一夏に向けてこう言った。

「やはり男は気に入らん。」

「・・・」

一夏はその言葉を聞いてまたかよと思っていた。

「このISは本来見目麗しい女が世界を牛耳るといふ大義名分を持ったチカラ。それを貴様のような下等な男が持つことには腹立たしくてこの上ない。」

「じゃからわらわが殺してそなたをミイラにしてやろう。光栄に思うのじやな」

ホホホホと笑っているが一夏は日本刀「嵐断」を出してこう言った。

「御託は良いからさっさとかかって来いよ。こちとら時間がないんだよ。」

そう言うとその女性はびくびくと蟬谷を振るわせてこう言った。

「そうかそうか・・・ならば・・・その言葉通りわらわ『クレオパトラ』が

葬ってくれるわ!!」

そうやって女性・・・クレオパトラはピットを射出させた。
それが・・・おこがましいである事にも気づかずに・・・。

黄金のメツキ／目覚めるソウル

「おい、一夏！もしもし!!？」

防人はいきなり一夏からの通信が切られたことに驚きながら返信させようとしても応答がない事に何かが起こったのではないのかと思っていた。

そして防人はもう一度通信しようとする桜花から通信が来た。

『こちら桜花！何時でも行けます!!』

「よし、だったら一夏の代わりに黒服の連中を何とかしてくれないか!？」

『それは一夏の役目では?』

「いきなり通信が切られた！何かがあつたんだろう!?!だから代わりに頼む!!」

『了解!』

そして防人は桜花からの通信を終えると空を見てこう呟いた。

「何が起きてんだ?」

「この下等生物が！」

「そう言う奴が雑魚だつて知つてつか？」

クレオパトラは一夏にそう毒づくも一夏は木の葉のように舞いながら回避していた。

彼女の機体から射出されたビット兵器も黄金色であるが端的に言えば……

お粗末であつた。

何せ確実な急所に狙いを定めれば表情で分かるほど分かり易く、

射撃もまあまあであつた。

これならセシリア・オルコットと戦つていた時の方がまだ手ごたえがあるなど

思つていた一夏はさつさと終わらせようと考へていた。

「行け！ 『神翼』！」

一夏は自身のビット兵器である「神翼」を4基射出すると一斉に攻撃してビット兵器

を全て破壊した。

「……へあ？」

クレオパトラはその光景にポカーンとしてしていると一夏は

「イグニッション・ブースト」で肉薄した。

「!!」

「おせえよ。」

クレオパトラはいきなりのもので驚いているが一夏はお構いなしに「嵐断」を逆手にして「ダバビ・クアトラル」を切り裂いた。

「きゃあアアア!!」

クレオパトラは丁度ミサイルがある場所に被弾してしまいそのまま彼女はカジノに落つこちてしまった。

「あ、やべえ。」

一夏はヤバいと思つてカジノに向かった。

「下がって下さい!!」

一方、カジノでは桜花が黒服の男たちを下がらせた後エレベーターの扉をハンドガンで破壊した。

そしてそれを見た防人は現状報告を聞いた。

カズキ班

「客は全員逃げたようです。」

剛太班

「内部情報と設計図、それと避難経路を手に入れた。既に国連軍と警察、武偵局に送った所だ。」

キンジ班

「武偵校からも援軍が来るそうさ。」

それを聞いた防人は全員に指示を出した。

「よし！カズキ達はおれと待機。剛太達は避難経路の指示、キンジ達は内部に突入してくれ！」

『『了解!!』』』

「それじゃあ・・・いく」

防人は全員に戦闘再開させるように指示を出そうとすると・・・上から何か落ちてきた。

「はあ??!」

防人は何事だと思って1階を見てみると・・・。

「何だあの悪趣味なISは?」

それは先程倒したクレオパトラが使っていたISであった。

「あ、防人さん。」

「一夏!お前・・・こいつと戦ってたのか?」

「いやあ．．．遅れました。」

一夏はアハハと苦笑いしながらそう言うのと瓦礫からクレオパトラがグググと．．．出てきた。

「己え．．．よくも」

クレオパトラは忌々しそうに一夏を睨みつけるとクレオパトラはこう言った。

「お主はわらわを地に貶めただけでは飽き足らずここ迄の屈辱を与えるとは．．．万死に値する!!」

クレオパトラはそう言つて機体のパステロツテからある物を出した。

それは．．．。

「?．．．目ん玉?」

それは目玉のようなボールであつた。

するとそれを掲げたクレオパトラは機体に押し付けると．．．とんでもない事が起きた。

『ア~~~~イ! バツチリミナー! チヤチャチャバツチリミナー! チヤチャチャバツチリミロー!!! チヤチャチャ』

何だこの音楽と一夏はそう思つていたが機体から幾つものコードがそのボールに集まるとある音声が出た。

『ファラオ！黄金の翼！太陽の化身！！王家の呪い〜〜！！』
そしてそれが言い終わった瞬間に機体に変貌した。

フィン は翼のように

銃は槍に

ミサイルポッドにはヘブライ語が刻まれ

顔にはローブと翼が交差したヘッドバイザーが付けられていた。

「ホホホホホ、これこそわらの真の姿じゃ。これでお主を・・・

コロシテヤルわい！！」

そう言つてクレオパトラは槍を構えて一夏に突進してきた。

戦いは未だ・・・終わらず

怒りの変身!!

「な・・何だアレは?」

防人はクレオパトラが変身した姿を見てそう言った。

金色の機体はそのままに頭にはフードのような物が頭を覆い隠していた。

そしてよく見たら機体の形状はまるでピラミッドに描かれている肖像画のようであつた。

「これこそわらわが持つ力ヨ。そしてそなたを・・なぶり殺しにしてやる。」

そう言つてクレオパトラは槍と化した銃を持つて一夏に迫つた。

「おっと!」

一夏はそれを楽に避けて上空に逃げようとするがクレオパトラはこう言つた。

「そなたは逃がさん!!」

そう言うのと翼の形に変貌したフィンが一夏の周りに群がると・・一発のレーザーが放たれた。

「当たるかよ!!」

一夏はそう言つて避けるが・・後ろも見える一夏からすればある現象が起きた。

レーザーが・・・他のフィンに当たった瞬間に・・・曲がったのだ。

「!!」

一夏はそれをも避けるが他からもレーザーが撃たれ避けるしかできなかった。

「クソ！刃更の機体と同じ武装かよ!？」

一夏は刃更が持つIS「白竜・ファブニール」の持つ盾形のビットと

同じタイプである事に気づいてくそっと思っていた。

「一夏!!」

防人はマシンガンをクレオパトラに向けようとするとクレオパトラはにやつと笑って機体のパステロツテから砂袋を大量に落とした。

そして・・・。

「さあ目覚めよ・・・わらわの僕たちよ!!」

そう言うのと砂袋から何体もの・・・モノアイのジャツカルが半月型の斧を持って現われた。

「また変なのが!!」

キンジはそう言ってザビーを取り出そうとすると防人はキンジにこう言った。

「キンジ！お前達はエレベーターに向かえ！俺達がここを死守するから!!」

「だけどー！」

するとキンジの言葉を聞く前にカズキがこう言った。

「俺達は仲間だぜ！仲間を信頼しろよ!!」

「早く行け!!」

そして斗貴子がそう急かすとキンジは・・・エレベーターに向かった。

それを見た防人はモノアイ型のジャツカルに向けてこう言った。

「さあぁ・・・どっからでもかかって来いよ!!」

「ほれほれ如何した!?!その程度か!?!」

「フザケンナ!!」

一夏はクレオパトラの言葉に対してそう言った。

然し形勢は未だ不利であった。

何せ一夏の武器は遠距離兵装全てビーム型の為この盾とは相性が悪いのだ。

そして一夏はある事を考えていたがやめた。

その理由は・・・

「『ハック』したとしてもこの攻撃の濃密さじゃ何割か犠牲覚悟にシナキヤ無理だ!」

一夏はそう思いながらクレオパトラの方に意識を向き直すがクレオパトラは笑いながらこう言った。

「ホホホホホ!これこそわらわの真の力!」

「これで『イ・ウー』をわらわの物に出来るわい!!」

そう言いながらクレオパトラはこう続けた。

「そもそもブラドはわらわが呪ったから勝てたのじゃぞ!?!それをあ奴らは!!」

『あれは遠山キンジによって倒されたのであつて呪いとは違う。』

「そうほざいたのじゃぞ!!じゃからわらわはここで多くの人間を殺して

遠山キンジをおびき寄せようとしたのに当の本人がいるのに贅がおらんとは

何とも味気ないわい!!」

その言葉を聞いて一夏は怒り乍らこう言った。

「フザケンナ!人を殺して自分が強いと証明したいだ!?!人間の・・・命を何だと思つてんだ!?!」

そう言うとかレオパトラはこう答えた。

「何を言う!?!わらわは王であり霸王(ファラオ)であるぞ!!」

この世はわらわの物!!世界の命はわらわの玩具なのじゃー!!」
そう言いながら槍を思いつきり振って一夏を「黒式・焰天」を叩き落した。

「世界はわらわの物なのじゃー!!」
それを見てクレオパトラはホホホホと笑っていた。

「・・・ぎげんな」

瓦礫の中から声が聞こえた。

「フザケンナ・・・」

それは……

「フザケンナー!!」

一夏の声であった。

「この世界は手前の物じゃねえし人間は玩具じゃねえ!!」

「やっとわかったぜ!!手前は只自尊心を満たして自分こそナンバーワンだと周りに宣伝して認められようとしている只の脳みそが砂みたいになった大馬鹿野郎だって

ことがな!!」

「……貴様……わらわが馬鹿じゃと?」

クレオパトラは一夏の言葉に大声で怒鳴るも一夏はこう続けた。

「ああ大馬鹿だよお前は!!」

「人の命を背負う覚悟も!!」

「恨まれる覚悟も!!」

「自分の力を自分の為にしか使わねえ!!」

「そんな身勝手な奴に誰も着いていかねえよ!!」

一夏の言葉ももつともだと思う。

只々自尊心を満たして認められなかつたら癩癩を引き起こす。

まるで駄々っ子のような存在を誰が認めるものかと言っているのだ。

だがクレオパトラはこう怒鳴った。

「黙れ黙れ黙れ!! わらわは最強なのじゃ! わらわの力はこのピラミッドによって

最強にして無限の力を発揮しておる!!」

無限の前にお主等は無力無力無力なのじゃあー!!」

クレオパトラはそう怒鳴るが一夏は「黒式・焔天」を解除すると同時に

パステロツテからある物を取り出した。

それは……。

「……手前みたいな奴に」

防人が一夏に渡した

「負けるわけには・・・いかねえんだよ——!!」

ベルトであった。

そして一夏はそのベルトを腰に付けると両端から黄色いバインダーが巻かれた。そして両手には二つのボトルがあった。

それを一夏は何回か振った後それを取りつけ口に付けた。するとベルトから音声 flowed 流れた。

『コウモリ!』

『ギアーズ!』

『ビルドオン!!』

その音声が終わった後に一夏はベルトについているレバーを回した。すると大型のファクトリーと同時に前後にある物が浮かび上がった。

まるで映像のように……。

コウモリのマークと歯車のマークが一つずつ前後に現れた。

そしてベルトからまた音声が聞こえた。

それは……。

『ARE YOU READY?』

その音声はまるで最終確認のような感じであったが一夏はニヤリと笑ってこう言った。

『覚悟は出来てるかって?』……そんなの!』

一夏はある事を思い出した。

あの時・・・初任務の際に守れなかったあの少女を・・・。

そして佑唯から教わったあの言葉から・・・。

そして帰りを待っている・・・仲間達・・・。

それらがフラッシュバックのように思い出すと一夏はこう言った。

「・・・もう出来てるんだよ!!」

「変身!!」

一夏はファイティングポーズを取った後映像が一夏を覆うように迫って・・・二つは一つとなった。

そこから現われたのは・・・。

『ガツチリ交わるダークヒーロー!!バットギアーズ!!YEA A A A!!』

白い体

紫色の複眼

両肩に搭載されている歯車

そして何よりも・・・胸部に模られているコウモリのような装飾

それこそ・・・新たな一夏の力である。

「・・・何者じゃ・・・?・・・お主は?」

そう聞くと一夏はクレオパトラに指さしてこう言った。

「俺は・・・俺は『仮面ライダー・・・ヘルローグ』」

そして一夏はクレオパトラに向けてこう言った。

「手前を・・・ぶっ潰す!!」

もう一つの変身。

京都の篁技研。

その自宅で一人の少女が外から月を見ていた。

「・・・一夏。」

少女、「篁 唯依」が月を見ながらそう呟いた。

夏休みに入って宿題している中一夏はセカンドシフトした「黒式・焰天」の調整と同時に何かを考えていた様子であった。

それはまるで・・・嘗て一夏が任務で外国に行った時と同じ状況であった。

唯依は窓から映る月を見て手を合わせてこう言った。

「どうか・・・一夏が無事でありますように。」

「手前を・・・ぶっ潰す!!」

ヘルログとなった一夏はクレオパトラに猛々しく挑んだ。

「はん！わらわの力は無限！つまり最強になったわらわに勝てるわけなからう!!」
そう言つてクレオパトラはビットを目の前に出して一夏に向けて発射した。

「(さあ避けてみよ・・・その時が・・・そなたの敗北じゃ!!)」

クレオパトラは内心ほくそ笑んでいた。

その間にもレーザーが一夏に迫つてきた。

それを一夏は・・・。

「ハア!!」

避けた後近くにあるビットを叩いた。

すると曲がつたレーザーがそのまま・・・一夏に当たらずに他の所に当たった。

「何じゃと!!」

クレオパトラはそれに驚くも一夏はそのまま立ち向かった。

「来るでないわ!!」

クレオパトラは槍を持つて一夏を倒そうとすると一夏はレバーを何回か回すとある武器が出てきた。

それこそヘルログの専用武器『バットアロー』である。

弓状の武器に見えるが実際は近接武器としても使うことが出来、それで槍に

応戦した。

「この!!」

クレオパトラは弓を弾いて貫こうとするも一夏はついて離れず槍の範囲内で戦った。

「手前の武器は間合いの中じゃ使えねえだろうが!!」

一夏は嘗てキンジがレティシア相手に使った戦法で戦っているのだ。

「ウ己え!!」

クレオパトラは防戦一方である事に腹が立つが一夏は少し離れると弓を構えた。

「おらあ!!」

そしてエネルギー上の弓矢がクレオパトラに襲い掛かった。

「きゃあ!!」

命中されたクレオパトラは一夏を睨みつけると防人達の方を見てほくそ笑んだ。

「織斑一夏!今すぐ武器を収めよ!!さもないと・・・。」

そう言いながら防人達の方を見ると一夏はぎりつと歯ぎしり鳴らしてこう言った。

「手前!王様つて割には屑な方法を使いやがって!!」

そう言うくとクレオパトラは笑いながらこう言った。

「ホホホホホ、王たるもの確実に勝つ手段を講じなければのう。」

そう勝ち誇っていると・・・防人が一夏に向けてこう言った。

「一夏！俺達は大丈夫だからお前は奴をぶっ飛ばせ!!」

「けど防人さん達が!!」

防人の言葉に一夏はどうするのかと聞くと防人はトランクからある物を見せた。

「こいつでやるさ。」

それは……。

「俺と同じベルト!!」

そう、一夏と同じベルトである。

そして防人は肩についている……蜘蛛みたいなロボットを見せるとそれを持ち、ポケットからフルボトルを出した。

そしてそれを振って蜘蛛の尻尾に差し込んで足を折り畳んだ。

最後にそれをベルトに差し込むと音声が出てきた。

『キルバス・スパイダー!!』

そしてレバーを回すと前後から蜘蛛の巣みたいなのが出てきた。

『ARE YOU READY!?!』

「変身。」

そう言うのと防人の体に蜘蛛の巣が纏わりつきその姿が露となった。

蜘蛛の顔をしたバイザーを持った赤いライダーが……。

「仮面ライダー・キルバス。手前らは俺が相手だ。」
はあ！と言って防人は敵に立ち向かおうとした。

それを見たクレオ・パトラはチィィ!!と舌打ちすると一夏は弓を構えてこう言った。

「さてと・・・仕切り直しだ!!」

そう言って攻撃を再開した。

驕りし王の末路。

「うおりゃー！」

一夏の攻撃から再開された。

「きゃあー！」

クレオパトラはそれをもろに受けて悲鳴を上げるも一夏は連続で攻撃した。

何度も何度もエネルギー状の弓矢が当たるのをクレオパトラは我慢ならなかった。

「（我は最強にして霸王（ファラオ）じゃぞ!?それをこのような餓鬼に！）」

クレオパトラは自身が最強でありキンジ達は呪われた相手だからこそ勝てたのだと

言ったがそれは違う。

クレオパトラが使った呪いは精々身の回りで起きる軽い呪いである。

（レティシアならばレスティアに敵対、ブラドならキンジの推理力）

このように偶然を僅かながら必然に変えるぐらいであり彼女の力ではなくキンジ達

の力によるものであるというのが『イ・ウー』の結論であるのだがクレオパトラは

それに気づいていない。

そしてもう一つ勘違いしていることがある。

確かにクレオパトラはピラミッドの力で無敵と誇っているが

それは最強と言えるのか？

それは……。

「ハアアア！」

「来るでない！」

クレオパトラは槍を大きく振りかぶって一夏を叩き伏せようとするも

一夏はそれを……。

「おっと！」

弓で防いだ後弾かせて腹部に蹴りを喰らわした。

「ガフ！」

クレオパトラは蹴りを喰らって飛ばされた。

そしてクレオパトラは忌々しく一夏を見た後フィンを呼び戻してそのまま飛翔した。

「逃げる気か!？」

一夏がそう言うとかレオパトラはこう返した。

「これは逃げではない！お主を呪い殺すために呪術を準備するために拠点に

戻るのじゃあ!!」

「それを逃げって言うんだよ!？」

一夏はクレオパトラにそう言うがクレオパトラは聞く耳持たずに立ち去ろうとする
とモノアイ型のジャツカル相手に蜘蛛の糸で縛り上げている防人が一夏に向けてある
物を投げた。

「一夏！これを使え!!」

そう言つて防人はあるフルボトルを渡した。

それは……。

「オオカミ?」

「そいつを弓に差し込むんだ!!」

防人がそう言うのと一夏は言われるがままに弓の射出部分に差し込むとある

データが出てきた。

それを見た一夏はニヤリと笑つてクレオパトラに照準を合わせて……射出した。

すると弓矢が狼の形状をしてクレオパトラのフィンを壊した。

「な……何じゃああ!!」

クレオパトラは何事だと思ひながら落ちて行つた。

「な……何が起きたんじゃあ?」

クレオパトラは堕ちた場所から這う這うの思いで出てくると一夏は弓を脚に装着し

てこう言つた。

「これで手前を終わらせてやるよ。」

そう言いながら一夏はレバーを回していた。

そして……。

『フルボトルブレイク!』

足にエネルギーが集中すると同時に肩部の歯車が一夏から離れてクレオパトラに襲い掛かった。

「ドわわわわ!!」

クレオパトラはそれをまともに受け続けてしまつて成すすべがなかった。

そして一夏はクレオパトラに走り向かつていった。

「わらわは……わらわは……わらわは最強のー!!」

「それがどうしたー!!」

そして走り出して駆けあがつてクレオパトラ目掛けて蹴りを喰らわそうと

すると……腰から蝙蝠の羽が生え、先程までクレオパトラを襲っていた歯車が

クレオパトラの前で整列した。

そしてエネルギーが一夏の足に重なるように集中してそのまま……クレオパトラの

腹部に直撃した。

「ぎゃあ嗚呼あああああ!!」

「ウおおおおおおおおお!!」

そしてそのまま一夏はクレオパトラごとピラミッドの床に押し付けるように蹴りを入れた。

すると床がバキバキとひびが入ってそのまま・・・下にへと向かった。そしてそのまま一夏達は下に向かっていった。

人のダークサイド／救いのホーネット

一夏が「ヘルログ」に変身する数分前。

キンジ達は地下にある目的の裏カジノに潜入した。

「ここからお互い離れないように行動するぞ。」

「はい」

「ええ。」

レスティアとレティシアがお互いそう言つて鉄の扉にへと向かった。

如何やらここもパスを使わなければ入れないようだが外部から剛太達が

ロックを解除させた。

そしてキンジ達は・・・悪夢を目撃した。

「これが」

「・・・酷いです。」

「正に金持ちの醜悪さがにじみ出てるわね。」

キンジ達はそう言いながら取り敢えず進んだ。

周りの状況を見て吐き気を堪えて進んだ。

「さっさと終わらせて帰りたいわ。もう息を吸う事さえ嫌なもの。」
レイシアは蒼い顔でそう言った。

正直言えばキンジは今すぐにでもここを破壊して囚われている人達を助けたいが騒動を起こして彼らが逃げてしまうという状況だけは好ましくなかったのでそのま

ま

奥にへと進んだ。

そしてその先にあつたのは・・・。

「何だこの匂い!？」

「イカ臭い。」

「鼻が曲がりそう。」

キンジ達はもう我慢できないと思ってそこから退散しようとすると思ふとある声が聞こえた。

「そういや古恋様が攫えって言った「夜桜」だっけ? いい体してたよなあ。」

「ああ、運んでいる最中に胸が結構揺れてたよなあ?」

「古恋様が羨ましいぜ。」

「ああ、あんな上玉を好き勝手に犯せるからなあ。」

「!!」

それを聞いたキンジは踵を変えてその男たちに向かっていった。

「おい」

「?!」

キンジの言葉に男たちは何事だと振り向くと……。

「がハア……」

「なあ?!」

キンジは男たちの片割れの腹部を思いつきり殴りつけて失神させたあと

バタフライナイフを出して男の喉笛に近づくかのような感じでこう聞いた。

「おい」

「ヒイイ!」

キンジの怒気に思わず震えた片割れに対してキンジは威嚇しながらこう聞いた。

「今言ったその女……今どこだ?」

「フザケンナ!そんな事教えるわけ」

グサツ!

「ギイイフグウウウウウ!!」

キンジは片割れの男の口を封じた後にバタフライナイフで鎖骨部分を切り裂いた。

「早くしやべらナイト右だけじゃ済まさねえぞ。」

「もが！モガツタ!!」

男はおそらく「分かった。」と言うとキンジは緩めてこう聞いた。

「早くしゃべらナイト5秒ごとに一回刺した。」

「わ．．．分かった。だかがアア!!」

男が何か言う前にキンジは懐から苦無を出して男の足に突き刺した。

「ほれ喋ろ。」

「あ．．．あいつは古恋様と部屋だ。ここから少し離れた8号室だ。」

男は泣きじやくりながらそう白状するとキンジは背中から．．．脇差を出して

こう言った。

『武偵憲章は守らなくていいぞ』．．．いい言葉だよな。」

「へあげ!」

男は悲鳴を言う間もなくキンジの脇差で口から刺されて絶命した。

そして脇差を引き抜いた後レティシアはキンジにこう告げた。

「ようこそ．．．無法者の世界へ。」

それはこう言う意味だ。

ここから先は法は無く、生きるか死ぬかの世界であるという意味であろう。

キンジは脇差を直した後その部屋にへと向かった。

「……………、ω……）ンンン??……ここは」

夜桜は眠気眼でそう言った。

目をこすろうと思ったが……腕が動かなかった。

「……………何じゃ？腕が動かん？」

そして意識がはつきりしてきて自身の現状に……驚いた。

「何じゃ？これは!？」

それは両腕を縛られ、ベッドの上で仰向けにして寝かされていた自身であった。

夜桜は何処なのかと思っていると……聞きなれない声が聞こえた。

「起きたかい？夜桜。」

古恋が夜桜を見てそう聞いた。

「……何者じゃ？お主」

「おいおいその言葉はやめたほうが良いぜ？何せおれの所有物になるんだからな。」

「何の話じゃ？」

夜桜は如何意味かと聞くと古恋は夜桜に近づきながらこう言った。

「言葉の通りだ。君は店によって売られたのだよ。」

「阿保言うでない！そんな人身売買行為は法で禁じられて!!」

「ここでは金がすべてなのだよ。夜桜。」

そう言いながら古恋は服を脱ぎ始めた。

「そう言えば君の家には何人もの家族の食い扶持を稼ぐために

働いているようだね？」

「!!何処でそれを」

「このオーナーが喋ってくれてね、俺の愛人になれば金は手に入るし・・・家族が救

えるぞ?。」

「卑怯な・・・!!」

夜桜は吐き捨てるかのようにそう言うが古恋はこう続けた。

「イイ女だ。そう言う女はゆっくりと調教して・・・俺の女にさせてくださいって

いうようにしてやる。」

古恋はそう言いながら夜桜のバニーガールを脱がした。

「ヒイイ!!」

「これは中々良いものを持っているじゃないか!」

夜桜の胸を見てそう言う古恋は夜桜に覆いかさぶつた

「それじゃあ．．．先ずは何処から食べようか？？」

そう言いながら古恋は夜桜の胸を弄ろうとした。

「（助けて助けて助けてタスケテ．．．）」

夜桜がこの時思ったのは助けて欲しい事。

そして．．．キンジのことであった。

「タスケテ！キンジ〜〜〜!!」

「夜桜ー！！！！」

外から声があった途端に．．．扉が文字通りに吹き飛んだ。

「な．．．何だ!!」

古恋はあまりの事にパンツ一丁でベッドから飛び起きるとそれを見た。

蜂の顔をした．．．人間いや．．．。

「手前．．．。」

ザビーになった．．．。

「俺の仲間に．．．。」

遠山キンジが．．．。

「何してんだああー！！！！」

怒り心頭で殴りかかった。

「ぐびやアアア!!」

古恋はそのまま吹き飛ぶと夜桜はその光景を見た後それを見た。

「(次は・・・儂か?)」

夜桜は震えるような顔でそう思っているとそれはこう言った。

「大丈夫か?夜桜。」

そう聞いたのだ。

夜桜は誰なのかと思つてこう聞いた。

「お主は・・・誰じゃ?」

夜桜は警戒しながらそう聞くと・・・それは慌ててこう答えた。

「俺だよ。」

そう言つてザビーが離れて・・・正体が露になった。

「キンジ!!」

夜桜はそれを見て驚いた。

何せキンジが目の前に現れたのだから。

「大丈夫か?ヒデエ事するよなあ。」

キンジはそう言いながら暗がりの中で夜桜を縛っているロープを千切つて

こう聞いた。

「おい、もう一度聞くがだいじよ」

キンジの言葉は途中で途切れた。

何せ夜桜が抱き着いてきたのだ。

「お．．．おい」

キンジはどうしたのかと思っていると夜桜が震えていることが分かった。

キンジは何も言わずに頭を撫でて落ち着かせようとしていた。

まあ．．．もう一つの理由もあるが．．．。

「(胸が当たって．．．ヤバい!!)」

ヒスラないように耐えているのだ。

何かをしないとだめだと直感で理解しているからだ。

そして暫くして．．．

「ありがとうのう。その．．．色々とな．．．って何で儂を見ないのじゃ？」

夜桜がそう聞くとキンジは目線を逸らしてこう言った。

「夜桜．．．服」

「服？」

そう聞いて夜桜は自分の今の現状を見た。

バニーガールを脱がされ真っ裸の状態で然もさつきまでキンジに抱き着いていたからだ。

それを知った夜桜は……。

「あ……アアア……／＼／＼／＼／」

顔を真っ赤にしながら……体を抱きしめて……。

「イヤアアアアアアアアア!!」

悲鳴を上げたとき。

そして暫くして……

「すまん。」

キンジは上着を夜桜に渡してそう言った。

当の夜桜はキンジの上着を着乍らキンジを監視していた。

自分の体を見たことで怒っているのとあの姿が何なのかと聞きたいことが

あつたからだ。

するとレスティア達が後でやってきた。

「キンジさん。こちらは無力化しました。」

「部屋にいた女の子達は全員逃がしたわ。」

後は私達がつて言うのと夜桜はキンジにこう聞いた。

「何かするのかわ？」

夜桜はキンジに泣きそうな顔でそう聞いた。

まるでどこか遠くへ行つてしまひそうな誰かを手放したくないように

するとキンジは夜桜にこう言った。

「わりいな。これは仕事でな、けど必ず戻ってくるし……あの姿も一応

説明するよ。」

そう言うのとキンジはぶつ飛ばした古恋をシートで雁字搦めにして縛った後外にへと向かった。

そしてキンジはザビーを付けて変身するとこう思っていた。

「（これが人間のやる事なら……）」

そしてキンジは武器を持つところ決心を固めた。

「（俺はそれをぶつ壊す……悪魔になってやるさ!!）」

そう思いながらキンジは苦無ガンとホーネットクラッシュャーを持って・・・突撃した。

死のゲームサイズ／再会と正体のブラザーズ

「さああ・・・ショータイムだ！」

そう言ってキンジは武器を持って裏カジノに突入した。

周りにいる黒服の男たちは苦無ガンとホーネットクラッシュャーで攻撃

(急所は逸らしてる) しながら突っ切った。

それを見ていた客たちはキンジを見て最初はショーかなと思っていたが周りの黒服の男たちの鮮血を見て我先にと逃げ始めた。

その最中でレスティア達は賭けの対象にされている女子供や無理やり参加されている人間達を救出していた。

「さあ！こつちですよ!!」

「こつちに行けば外に出られるわ!!早く!!」

「急ぐのじゃあ!!」

夜桜もそれを手伝っていた。

キンジは逃げていく参加者達がエレベーターに向かっているのを見て通信した。

「こちらキンジ。糞共は上に逃げる。」

「了解！こつちもそろそろケリが付く！」

『フルボトルブレイク!!』

防人が変身している「仮面ライダー キルバス」のベルトから音声の流れ出てくると両手から蜘蛛の糸が出てきてモノアイ型のジャツカルに巻き付かせると体から

巨大な蜘蛛の脚が出てきてモノアイ型のジャツカル目掛けて叩きつけた。

そして爆発すると同時にモノアイ型のジャツカルが消えたのを確認すると防人は

一夏が作った穴を見てこう言った。

「俺は一夏を追っていく。そつちは頼むぞ。」

了解と聞くと防人は手首から蜘蛛の糸を出して下に下った。

キンジが通信したし終えたのとほぼ同時刻

「ウおおおおおおおお!!」

一夏が上から落ちてきた。

「な、何だ!？」

キンジは何事だと思ってそれを見るとそこには……。

「う……ウウウ……」

「これで終わりだ。」

クレオパトラを踏み台にして出てきた一夏こと「ヘルローグ」である。

「……誰だ」

キンジはそう聞くなから武器を構えると……。

「あ、キンジさん。さつきぶりです。」

そう言った。

「まさかお前……一夏か?」

「あ、はい。」

一夏は頭を掻きながらそう答えた。

一夏は上で何が起きたのかを話した後キンジはクレオパトラの方を見た。

「こいつがなア。」

キンジは少し下げずんだ口調でそう言う上から防人がやってきた。

「おお、もう終わりか？」

「あ、防人さん。」

「またかよ……」

キンジはそう思いながらも作戦について最終確認をしようとする……。

「……己え……」

クレオパトラが目を覚ました。

クレオパトラは最早見る影もない機体から這い出て一夏達を見てこう言った。

「よくもわらわを……このファラオに対しての……侮辱……」

死をもって……」

クレオパトラは絶え絶えにそう言うが一夏はクレオパトラに向けてこう言った。

「降参しろ。お前はもう戦えないだろ。」

「クレオパトラ、お前を殺人未遂で逮捕する。」

それと兵器の不法所持もなど言いながらキンジは武器を構えた。

防人も徒手空拳の応用で構えた。

それを見たクレオパトラはくつと口を一文字に紡いでいた。

自身の力を使えずピラミッドの力を使っても今の様子じゃ間違いなくやばいと

悟っているからだ。

そう……幾ら無限の力があっても決して最強や無敵ではないのだ。

どうしようかと思っていると……。

「手も足も出ないようだな。クレオ。パトラ」

少し上から声が聞こえた。

「やれやれ、通気口を使って侵入を試みたが流石国連軍だな。うちとは違って

スマートに事件を解決してくれたな。」

それは手袋からコートに至るまですべてが黒一色で首回りが白の毛皮を付けた長髪

で端正な顔立ちの男性。

「……兄さん。」

遠山金一その人であつた。

「……夢を見た。」

「!!!」

金一の声に全員が構えた。

「弟が俺を越えた夢……もう一人でも大丈夫だと分かった……そんな夢。」

恐らく「カナ」の時に見た光景についてそう言っているのだろう。

「……久しぶりだな。パトラ。」

「……トオヤマキンイチ」

クレオパトラは金一を見てそう言うのと金一は懐から何かを出そうとしていた。

「お前の弱点は相手を必ず下に見る事。そんなんだから『イ・ウー』から退学させられたんだぞ。」

「うるさいのじゃ!どいつもこいつもわらわのチカラヲ評価しなかつたからじゃ!!わらわの力は誰よりも・・・」

『教授(プロテキシオン)』よりも強いのじゃ!!」

「プロテキシオン?」

防人はクレオパトラの言葉を聞いてそれが『イ・ウー』のボスの名前なのかと思っていた。

「・・・ならばその力を今見せてみる。」

そう言っ出てしてきたのは・・・

「ゲームソフト?」

キンジがそれを見てそう言った。

それは黒いローブを身に纏った二頭身のキャラクターが鎌を持っている

絵柄であった。

するとそれを金一は・・・腰に付けているベルトに差し込むと音声が出た。

『ガシャット!』

「変身。」

金一がそう言うのと後ろから先程の絵柄が出てきてその周りに

何かのキャラクターが現われた。

そしてその内の一つを押した。

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム！

アイムアカメンライダー！』

するとそこから出てきたのは……。

「は？！」

「へ？！」

「……兄さん？！」

三者それぞれ何だそれと言う反応をしているが無理はあるまい。

何せ出てきたのは……目と髪の毛が付いている二頭身キャラクターなのだから。

「……レベルアップ。」

『レベルアップ！デッドセット！デッドバック！死を運ぶデッドクエスト！』

その音声が出て瞬間に二頭身キャラクターの頭から人間が出てきた。

それは黒い体。

バイザーは両方とも黒目

コントローラーと一緒にした大鎌と剣が一對化した武器

「仮面ライダー グレイブ」

「死の世界に導かれたいのはどいつだ？」

「そう言いながら金一は下に……クレオパトラの近くにへと降りた。

「……フフフ……ホホホ。」

クレオパトラは何がおかしいのか笑っている。金一に近づいてキンジ達に向けてこう言った。

「見るがよい。わらわの僕がここに一人おったのう」

「兄さんが!？」

キンジはそれを聞いて驚いているとクレオパトラは金一に近づいてこう言った。

「さあキンイチよ、わらわの僕よ。あ奴らを殺せ。織斑一夏は奴の仲間を目の前で

殺してからわらわが」

クレオパトラが何か言う前に……胸から剣が生えた。

「!!!」

「……へ？」

クレオパトラはその光景に驚いていると後ろから金一が引き抜いてこう言った。

「パトラ。お前は此れ迄弱者しか殺さなかった。それがお前が『イ・ウー』を

退学させられた理由の一つだ。」

そう言う和金一はこう続けた。

「お前は世界を支配しようとする世界をコントロールしようとしている対戦派の中でも最弱、能力をより強くしようとする研鑽派においても半端者にして女尊男卑で多くの男を殺した卑怯者」

「ぐ……グウウ」

クレオパトラは倒れながらも力を使って何とかしようとするも……金一はこう言った。

「無駄だ。幾ら無限の力が手に入るといつても心臓に刺さればもう持つまい。」

そう言って金一はクレオパトラの胸ぐらを掴むとこう言った。

「お前の罪を数えろ。」

そう言いながら金一はクレオパトラを投げると金一は別のスロットに先程のゲームソフトを付けるとベルトから音声が出てこう言った。

『ヒツサ〜ツ！デスクリティカルブレイク！』

その音声と同時に足に電流が漫画化されたような物が出てくるとクレオパトラに対して金一はこう言った。

「良かったなクレオパトラ……先祖と同じ墓で。」

「トオヤマキンイチー!!!」

クレオパトラが大声でそう言った瞬間・・・蹴りが当たり・・・クレオパトラは爆散した。

「なあ!?!」

「!!」

「うっ!」

防人、一夏、キンジの順番でその光景を見てしまった。

爆散した瞬間にクレオパトラの内蔵や手足が飛び散り、血がグレイブの周りでシャワーのように降り注いだ。

そしてキンジ達の近くに・・・クレオパトラの・・・首が転がってきた。

そこには・・・。

「「ウグウ」」

恨みを持つかのような表情でこつちを見ているクレオパトラの首があったからだ。そして金一はその光景のままキンジ達に近づいてきた。

「「!!」」

三人は戦闘態勢になると金一はクレオパトラの首を見て・・・。

「じゃあな。」

蹴って何処かへと飛んで行った。

すると金一は全員を見て・・・変身を解除した。

『セーブ!』

それを見た三人も・・・解除した。

「お前は一体なんだ?」

防人は何時でも戦闘でできるように構えながらそう言うと言った。金一はこう言った。

「俺は武偵局の任務で『イ・ウー』の潜入捜査をしていた。」

「何?」

「・・・俺と話をしてくれないか?」

「全く・・・もう終わりかよ。つまらないねえ。」

「そう言わないでくださいよ蘭豹先生。我々は死にかけだったんですから。」

蘭豹先生の言葉にレキはため息交じりでそう返した。

「然し横浜でここ迄の人身売買を行うとは。」

「既に彼らの身元は割り出しを行っているから直ぐに終わるらしいです。」
そう言っているレキ達とは逆にキンジ達はと言うと……。

「成程……国連軍に」

「まあな。色々とこればかりは内密にされているが俺はザビーに選ばれたようだ。」
「だからできるだけ飛鳥や雪泉姉には秘密にしていって欲しいんだ。」

心配するからなと言うと夜桜はキンジに対してため息交じりでこう返した。
「分かったわい。こうなればとことん付き合っつてやるかのお。」

「ありがとうな。夜桜」

キンジがそう言うのと夜桜はキンジに対して……顔を真っ赤にしてこう言った。

「まあ……のう。俺は嬉しいぞ。その……対等の秘密と言うのじゃな」

「?なんつった?」

キンジがそう聞くと夜桜はこう答えた。

「何でもないわい。」

そう言うが心の中ではこう思っていた。

「(飛鳥達には悪いが早い者勝ちじゃしな。)」

そう思っていた。

すると金一と話していた防人は国連軍の全員に対してこう言った。

「それじゃあ俺達はこいつらを武偵局に引き渡す代わりにこれまで仕入れた情報の交換をするぞ。」

そう言うのと金一が前に出てこう説明した。

「先ず『イ・ウー』だがプロテクションの存在で一つになっているが彼は寿命で死にかけている。」

それを聞いて全員ががやとして中金一はこう続けた。

「現在組織は二つの思想に分けられている。」

「一つは主戦派（イグナティス）。世界への侵略と自身の組織の繁栄を主目的としたグループ」

「もう一つはプロテクションの遺志を継ぎ、純粋に己の力を高めることを望んでいる研鑽派（ダイオ）。」

「この二つが存在しダイオは次のプロテクションとして掲げたのは・・・」

『アリア』だ。」

「はあ？ナンデあいつが!？」

寧ろ逮捕しようとしてるやつをかよとキンジがそう言うのと金一はそれに対してこう返した。

「それは今のプロテクションがアリアにとってかけがえのない存在だからだ。」

「その存在って……母親は刑務所の中って……まさか!？」

「嫌、キンジ。アリアの母親は関係ない。彼女はプロテクションによって仕組まれた被害者だからな。」

「相手は間違いないくアリアは従わざる負えない存在。」

「誰だよ兄さん?」

キンジがそう聞くと金一は重く口を開けた。

「今の『イ・ウー』のボス……そいつは」

学園島のアリアの部屋。

「……未だ足りないわね。」

現在アリアは自身の母親の裁判の証拠を整理していたがもう一つ欲しいと思っていた。

それも確実なものが……。

「……ももまん買おう。」

アリアは煮詰めた頭を落ち着かせようと外に出た。
すると……。

「やあアリア。」

「!!誰!?!」

アリアは何者だと思つて銃を出した。
するとそこにいたのは……。

「んむ私の推理通りだね。アリア」

ひよろ長い瘦せた体

鷲鼻に角ばった顔

右手には古風なパイプ

左手にはステッキを持っていた。

「あ……アアア」

「アリア君。君は美しく、強い。ホームズ家が持つ最も優れた才能を持っているのに
も関わらず落ちこぼれ、欠陥品と呼ばれてきぞつらかつたろう?」

「……あ」

「だけど僕なら君を認めさせることが出来る。」

「そいつは世界で最初に武偵を作った男」

「僕は君を」

「そして稀代の天才」

「後継者として」

『シャーロックホームズ』
『!!』

「迎えに来たんだよ。」

「それが『イ・ウー』のボス……プロテクションだ。」

だが国内限定である事と、事件における計画や、後始末のしやすさから
防人達国連軍が担う事となり、自身たちはそのまま東京地方検察局に降った。

その点からかどうか分からないが防人達国連軍を見る目は何だかあまりいい印象で
もないような感じであるのだが防人達も彼らのある思想から毛嫌いしていた。

その理由は・・・本人曰く。

「あいづらは正義のためならそれを錦の旗として法すら無視して好き勝手やってたか
らな。」

だからあいづら嫌いと防人はこれが始まる前に金二にそう告げた。

防人達国連軍もそれに近いようであるが実際は入念な下調べと戦力集め、

証拠集め等を行ってから戦闘を行うが彼らの場合は、殲滅が主なため証拠などは後で
集めるが証言が取れず物的証拠しか揃えられないのだ。

まあ、話は逸れたがと思ったが金二は第0課の方を見た。

「・・・やつぱり居たか。」

そう言つて目を向けると・・・。

「・・・・・・・・。」コク

何人かがそれに気づいて会釈した。

元々第0課の何人かは金二の父親が勤めていた武偵局の知り合いが多くおり、

その中に入っていたのだ。

そして金二は前に向き直した。

「今回の作戦は『レインボー・クルージング』会社が所有する造船工場に
いるとされている秘密組織、『イ・ウー』の構成院の逮捕、又は殺しだ。」

「ここは最近だが船が安置されているという情報が入っていたがこの倉庫は
調べたところ・・・誰も使っていないことが分かった。」

「なら何故使用された痕跡があるか？簡単だ、それは」

「そいつは『イ・ウー』が関与しているからだろ？」

防人の言葉に割り込んできたのはこの第0課の纏め役でもある大柄の男性。

「獅堂 虎巖」であった。

「そうだ、これまでこいつらにさんざん煮え湯飲まされてた挙句にキンジに殆ど全部
手柄取られたもんなあ、武偵局と第0課さん？」

ドン!!!と・・・大きな音が聞こえた。

その音の正体は・・・。

「手前・・・喧嘩売ってるなら買うぞ？」

獅堂が机をへこますぐらいに殴ったからだ。

然し防人はこう続けた。

「事実だろ？手前勝手な正義の為に多くの人間を苦しめた挙句にガキに全部持ってかれてるからなあ!!」

そう言いながら防人は獅堂の目の前に行きながらそう言う。獅堂は頭の額をぶつけるぐらいの距離まで近づいてこう言った。

「誰のおかげでこの国が守られてるんだああ!!」

「少なくともお前らよりかはちゃんとやってるわ」

防人と獅堂、双方とも睨みつけながらお互い火花が散っていた。

そして防人はふんと鼻息荒らして前に戻った。

「今回は船を出させない様にするのが狙いだ。その為俺達国連軍は武偵局と第0課と合同で執り行うものとなった。」

「作戦はこうだ。」

「先ず武偵局は『レインボー・クルージング』を取り押さえる。」

「その間に俺達は『イ・ウー』に潜入しこれを叩く。」

「そして敵のトップ『プロテキシオン・シャーロックホームズ』を捕まえる。」

「これは時間との勝負だ！各員健闘を祈る!!」

防人はそう言って全員を解散させた。

潜入開始。

武偵局の第0課が去つたのを見て防人は一夏とキンジを集めてこう言った。

「それじゃあ作戦説明だけでもう一つ付け加えたいからよく、聞いてくれ。」
そう言うと防人はあるデータを二人の携帯に転送させた。

それは……。

「何ですか？これは。」

一夏が送られてきたデータを見て何だと思うとキンジはこう言った。

「これって指紋の戻し方か？」

「そうだ、こいつは万が一指紋が消えてしまった際に戻すために使われる液体の取り扱い説明書だ。」

防人はそう言つて説明した。

この薬はISが作られた後に製造された薬で現在ではインケスタやレピアが使用している。

「何でそんな薬を俺達だけに？」

「いや、こいつは前もつて第0課や武偵には知らされていない。国連軍だけだ。」

「どうしてだ・・・いや、何かあるのか？」

キンジは何かあるのかと思っていると防人が耳打ちしてこう言った。

「・・・第0課の連中がナニカした時に備えてな。」

「・・・。」

防人がそう言った後に本当に解散となった。

そしてその日の深夜。

防人達は『レインボー・クルージング』会社が運営している造船所に来ていた。

それなりに大きいだけではなく設備も整っているように見えるが防人はある物を見てこう言った。

「キンジ、あの大型車『トランスフォーマー』型じゃないぞ。」

「え？」

キンジは防人の言葉を聞いてそのトラックを見た。

トランスフォーマー型は大体であるが『スタークインダストリー』のマークが描かれているのだが其れすらなかったのに気づいた。

「成程な・・・そう言う事か？」

「?・・・どういう意味ですキンジさん」

側にいたレスティアが何事だと聞くとキンジはこう説明した。

「本来こう言うところは『トランスフォーマー』型が多くいるんだ。

人件費削減も兼ねてな。だけどこの乗り物は全部旧型ばかりだ。」

「成程ねえ、そう言うところは大抵黒い噂があるって事ね。」

キンジの答えにレスティアが追加した。

『トランスフォーマー』型は全て『スタークインダストリー』が運用している

軍事ネットワークで常時監視し、ディセプティコンや犯罪組織の撲滅に

使っているのだがそれがなくなると・・・そう言う事になるのだ。

「それじゃあ第0課と同時に突撃することになるが全員準備できてるな？」

防人の言葉を聞いて全員武器やISの待機状態、キンジと防人は変身用ベルトを見せると・・・後ろから声が聞こえた。

「準備良いか」

そうやって頭を掻きむしりながら来たのは……獅堂であった。
無論他の第0課も来ていた。

全員がスタンバイして暫くすると……防人がこう言った。

「突撃」

それだけを言うのと全員……各々の獲物を構えた。

「来い、『灰墓』」

「来なさい、『桜炎』」

「来い！『黒式・焰天』」

一夏達はI Sを出現させた。

「『H E N S I N』」

「『キルバス・スパイダー』！」

「『ガシヤット！』」

「変身。」

「『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャネーム！

アイムアカメンライダー！』」

キンジと防人は変身するためにベルトを、システムを起動させた。

「『A R E Y O U R E A D Y』？」

「キャストオフ」

「・・・レベルアップ。」

『Cast Off』

「変身！」

『キルバス、キルバス、キルバススパイダー!!』

『Change Wasp “Thebe”』

『レベルアップ！デッドセット！デッドバック！

死を運ぶデッドクエスト!』

キンジは装甲が外され、『ザビー』に、防人は『キルバス』に、

金一は『グレイブ』にへと姿を変えた。

カズキ達も自分たちの武器を持つと・・・全員出て行った。

向かうところは敵がいると思われる造船所に・・・。

「国連軍と第0課だ！大人しくしてもらおうぞ!!」

防人がそう言って扉を破壊するとそこにあつたのは・・・。

「これって・・・一体」

キンジが見たもの、それはこれだ・・・。

「大量の武器や弾薬、ISの機体にセックケースに、魔法術式。・・・

正にアンダーワールドのセールスだぜ。」

獅堂はそう言いながら周りを見渡していた。

周りにあるのは大量のアンダーワールドの溜まり場そのものであった。

キンジ達は目移りしながら船を見つけた。

「こいつは!!」

「やっぱりな・・・。」

キンジはそれを見て驚きながらも防人は納得していた。

すると金一がキンジに向けてこう言った。

「そうだ、こいつこそ俺達の因縁の船。」

『アンリ・マリーベル』号だ。」

そうやって金一はその船、『アンリ・マリーベル』を見ていた。

その大きな船を一瞥した後に全員に向けてこう言った。

「良いか、ここからは『イ・ウー』のメンツが山ほどいる。ここは慎重に」

「それはどうかな？」

『!!』

その声を聴いて全員が身構えるとそこにいたのは・・・人間たちであった。

その中にいた漢服を腰に巻き、槍を持っている青年がそこにいた。
いや・・・彼だけではない。

多くの人間たちがそこにいた。

全員が身構えると・・・青年がこう言った。

「さてと、アンタたちは・・・まあ、俺達に喧嘩吹っ掛けてきた政府の子飼いと国連軍

の暗部組織って言った処だな。」

「悪いが『プロテクション』は今大事な用があるから……足止めさせてもらうぜ。」

そう言うのと船にいた全員が……武器を持って……降りてきた。

『『『『ウおオオオオオオオおおおお』』』』
!!!!!』

「全員攻撃開始!!」

「突破して船内に入るぞ!!」

防人と獅堂はお互いそう言っで全員に指示を与えて攻撃を始めた。
今、『イ・ウー』との戦闘が……始まった。

突入。

造船所は戦場となった。

周りには『イ・ウー』のメンバーと思しき面々と防人達国連軍と第0課が交じりに混ざって戦っていた。

地上では銃声と肉と肉、鉄と鉄がぶつかる音、空を向けばISが上空で戦闘をしていた。

そんな中で・・・何人かがそこから船内に入ることに成功した。

そのメンツはと言うと・・・。

「はあ・・・はあ・・・何人・・・抜け・・・切った？」

防人は息切れしながらそう聞くと・・・何故かそこにいる金一がこう言った。

「・・・俺達入れて・・・7人だ。」

そう言つて周りを見た。

金一、防人、レスティア、レティシア、キンジ、一夏、獅堂のメンツであった。

「それで兄さん・・・ここからどうするんだ？」

キンジがそう聞くと金一はこう答えた。

「ここからエンジンルームに行こう。そこからだ」

そう言って金一は全員をエンジンルームにへと連れて行った。

「ここだ。」

そう言って金一は扉にあるカードリーダーにカードを差し込み、登録番号を入力した。

「こつちだ。」

そう言って金一は全員を中にいれた。

そこで目にしたのはエンジンでは・・・なかった。」

「・・・何も無い。」

キンジはそう言って周りを見た。

エンジンらしきものなど何処にもなく、あるのは細長いロープのような・・・。

「キンジ、下を見ろ。」

「?」

防人がキンジに向かってそう言ったので下を見てみるとそこで目にしたものは・・・。

「・・・潜水艦・・・だと」

キンジはそう言って顎を大きく開けていた。

全長300mはあるであろうその大きな黒い塊を見て驚いていたが金一はさらにもう告げた。

「これが『イ・ウー』の正体。大型原子力潜水艦『ポストーク号』だ。」

「!!オイオイ待てよ金一、それって確かよ」

獅堂は驚いた様子で金一に向けてそう言っていた。

何せこの船は……。

「30年以上前にソ連から姿を消した幻の原子力潜水艦……成程、

当時のソ連は強かって事かよ。」

防人は何やら考えながらそう言うのと一夏が何か聞いてきた。

「どういう事ですか? 防人さん」

すると防人はこう答えた。

「良いか、当時のソ連はアメリカと冷戦になった後にお互いスパイを

送り込んでたんだ。情報を手に入れるためにな、そしてその報奨が……

あれさ。」

防人はそう言つて『ポストーク号』を指さした。

詰まる話がソ連に対して何かしらの有益な情報を提供され、その見返りに

貰ったのが『ポストーク号』と言う訳である。

「行くぞ。」

金一はそう言つて全員を棧橋に連れて行き、そのまま潜水艦内部に通ずるハッチに入った。

「何だこりや？」

「驚きますよね、これを見たら。」

「私達も初めて見た時にはびっくりしたんだから。」

キンジが驚いているのを見てレスティアとレティシアも同意していた。

何せそこは・・・とんでもない内装であつたのだ。

恐らくだが最下層から最上層までのデッキをぶち抜いて作ったと思われる天井とそこに吊り下がっているのは巨大なシャンデリア。

ご丁寧天然石も敷き詰められていた。

それだけでも凄いの恐竜の全身骨格標本に数多なる動物の・・・

絶滅動物も付随した剥製が所狭しと置かれていた。

「すげえ、まるで博物館だ。」

一夏は周りを見渡しながらそう言った。

ここにある物全てが金に換えられたら1千億や2千億程度では済まない程の大金があるという事になる。

「これだけあるとは『レインボー・クルージング』もそれなりに儲けてたんだらうな。」

獅堂はそう言つて周りを見ていた。

「未だ続きはあるわよ。」

レティシアはそう言つと・・・ある扉を見た。

既に開けられていた扉があつたのだ。

「おちよくつてんな、あれ。」

獅堂はそう言つと金一はこう言つた。

「行くぞ。」

そう言つて全員そこにへと向かつた。

扉の向こうにあつた螺旋階段を駆け下りた先にあつたのは・・・。

「・・・水族館?」

キンジはそう言つた。

周りには数多の魚たちが入った水槽が入っていたのだ。
更に奥へ進むと・・・

「植物園？」

あらゆる鳥類がそこさらに飛び回っていた。

「鉱石専門店？」

金、銀、宝石が置かれていた。

「図書館」

長い布のタペストリーや、革表紙の本が並ぶ書庫

「音楽ホール？」

黄金のピアノや幾つもの時代にあつた音楽器があつた。

「武器庫？」

中世から近代の武器や甲冑が置かれていた。

「銀行？」

金の延べ棒と各国が使う紙幣が置かれていた。

そして等々最後の部屋に入るとそこにあつたのは・・・。

「土？」

防人はそう言つてその部屋に敷き詰められている土を一掴み掴み取つた。

そして正面にあるのは・・・。

「肖像画と・・・墓？」

一夏はそう言つてそれを見ていた。

「何か書いてますよー！」

「!!？」

全員それを聞いてそれを読んだ。

一番左側に書かれていたのは旧字が入っていたが・・・日本語であった。

「何々・・・『大日本帝国海軍超人（旧漢字が分からなかった）師団長

初代伊・U潜水艦長 昭和拾玖年八月』」

「その隣は逆正・・・ヒトラー政権時のマークか？」

「こいつはアフリカ系の女だな。」

「こっちは車いすの中国人です。」

防人が二つ目も見た後に続いて獅堂、キンジもそれを見て言うと言つて防人はまさかと言つてこっ答えた。

「こいつらは恐らく『イ・ウー』の歴代艦長、そして前二つは恐らく

枢機軸関係の組織だから・・・ここは枢機軸の超人兵士研究所か！

そして敗戦後にはそれまでの技術を使って秘密結社となった。」

「軍団長はそのまま『プロテクション』と名を変えて潜水艦を変え乍ら

今に至るってか。」

獅堂がそう締めくくるとある絵を見た。

それはキンジがよく知る人間の絵。

「こいつが『シャーロックホームズ』。」

キンジはそう言つてその絵を見ると・・・ナニカ違和感に気づいた。

「・・・兄さん!!」

キンジは金一を読んで絵にバタフライナイフを差し込んで引き裂くと・・・。

「隠し通路か・・・!!」

「ここに向かえつて事だよな。」

金一とキンジがそう言うと全員武器を構えた。

「・・・」コク

金一は何も言わずに突撃し、防人達も其れに続いた。

・・・その先にあるのは一体何か・・・彼らはまだ知らない。

決着を・・・。

キンジ達が隠し通路を下つてある部屋に辿り着いた。

そこは・・・。

「教会だ・・・」

キンジはそう言つてその部屋を見渡していた。

潜水艦の内部にはこのような聖堂があつたのだ。

大理石の床には見渡す限りラテン語で彫り込まれており、壁際や側廊には白磁器の壺と花が供えられていた。

「カトリック教会でもここまでは見たことがない。」

防人はそう言つて周りを見渡していた。

「これはカトリック・ネオゴシック様式で流石の『プロテクション』も改修したくなかつたようですよ。」

「イギリスじゃあプロテスタントらしいけど私達はこう言う感じが良いのよねえ。」

レスティアとレテイシアは全員にそう説明していた。

その中でも一際輝いているのが・・・とある場所であつた。

「あのステンドグラス、凄いですねえ。」

一夏はそう言つてそこに行こうとすると・・・手前で止まつた。

「?どうした」

「敵です!!」

『!!』

一夏の言葉を聞いて全員が武器を取り一夏は『黒式・焰天』を即座に展開した。

「へえ・・・私が身構えてたの気づいてたのね。」

そう言う声が聞こえ、横からその人間が現れた。

「この声・・・」

「まさか・・・ね。」

キンジとレティシアはそう言いながら武器を構え、攻撃態勢を整えていた。

ピンク色の髪

鬼の角のような髪留め

小さな体

その手に握られているのは二丁の・・・ガバメント
それを持つ人間はキンジが知っている中でただ一人。

「ようやく来たのね！キンジ!!」

小さく、自分の言う事を聞かせようとし、協調性すら持たない武偵。

「アリア・・・」

神崎・H・アリアであった。

「何でここにいるのか知らないけど大体わかるわ。」

そう言つてアリアはキンジに向けてこう言つた。

『『イ・ウー』を滅ぼす気ね?』

そう言つたアリアを見てキンジはこう答えた。

「ああそうだ、俺はここを徹底的に潰しに来た。」

そう言つたとアリアは苦々しい顔でこう言つた。

「そうはさせないわ。」

「何・・・?」

キンジはアリアの言葉を聞いて何故だと思つた。

ここは自身の母親を冤罪に陥れた人間の本拠地でもあるにも関わらずにと
思つているとアリアはこう言つていた。

「あたしは卓越した推理力を誇るホームズ家の中でたった一人だけその能力を持つて
いなかった。」

『『欠陥品』、『出来損ない』、『貴族の恥さらし』、

『役割のない只の人』』つて呼ばれて・・・馬鹿にされて・・・ママ以外の

皆から無視されて・・・私は・・・私は・・・私はいないモノ扱いされていたのよ!!

子供の時からずつとずつとずーっつと・・・一人だった。」

「あたしにとつて曾お爺様の存在は心の支えだったわ。」

「彼は名探偵であると同時に武偵の始祖でもあるのよ。だからあたしは

曾お爺様の半分でも名誉を得ようと・・・認めてもらおうと思つて

武偵になった。」

「そして・・・イギリスで実力を付けて・・・日本に渡つて・・・

あんたと会つた。」

「最初からアンタハ凄い奴だったわ。入学時には現役武偵を倒して

Sランクになって多くの人間から支持を集めたわ。」

「アンタはあたしですら手も足も出なかつた理子を退け、デュランダル姉妹を

仲間にして、ブラドを倒して・・・アンタは全てを手に入れていた!!」

アリアは突然大声を出しながらこう続けた。

「アンタは私と違つて曾お爺様のような推理力を持つてて、色んな奴から信頼を勝ち

取り、アサルトの連中ですらアンタを尊敬して、強くて、完璧で何しても

うまくいったわ!!・・・けど、・・・私は違つたわ。」

「理子の手も足も出ずに負けて、頭に一生消えない傷が出来て、デュランダルの片割れ

ですら後れを取つて、ブラドに手を出す事すら出来なかつたこの惨めな

気持ちをお前は理解できるの!?!」

「日本であたしはお前を見ながらどれだけ悔しくて!辛くて!!あんたのお零れ貰いながらママの裁判の証拠を集めていたかお前には分かるの!?!」

「お前の周りには必ず仲間がいたけどあたしにはそんな人たちがなくて悲しかったあたしの気持ちが分かるの!?!」

「お前はあたしにとつて『こうなりたい』と願っていたあたしその物だったのよー!?!」

「お前!?!」

お前はお前の独白を聞いてこう思っていた。

「羨望……か。」

お前はそう確信した。

お前の身の回りがある全てが、実力が、お前にとつて最も欲しかったものだからだ。

すると肩で息をしていたお前が息を整えてこう言った。

「其れも今日迄よ。あたしにとつて曾お爺様は神様なのよ、その曾お爺様が何て言うてくれたか分かる?」

「……『後継者』って。」

「其れつてつまりー！」

「恐らくな。」

一夏と防人がアリアの言葉を聞いて確信した。

シャーロックホームズはアリアを『イ・ウー』の後継者にさせるつもりなのだ。

「そうよ！曾お爺様は私を認めて下さった！！ここに『イ・ウー』を

譲り受けて下さるって、そうすればママを釈放させるだけの証拠が手に入ってママを自由にさせれるわ！！そしてママと一緒にここで楽しく暮らせるのよ！！アハハハハとアリアは笑いながら回っていた。

今のアリアは有頂天だ。

シャーロックホームズから認めてもらい、証拠も集まって母親を

釈放させることが出来ると・・・思いこんでしまっていたのだ。

正にピエロを見ているかのような光景であった。

その先に何かあるのかを知らずに踊っているかのようにであった。するとキンジはアリアに向けてこう言った。

「アリア、お前は大馬鹿野郎だな。」

「ハア？」

アリアはキンジの言葉を聞いて目を鋭くしたがキンジはアリアに向けてこう続けた。

「お前だけじゃない、シャーロックホームズも大馬鹿野郎だよ。」

「アンタ曾お爺様の侮辱を!!」

「ああ、もつと言つてやるさ。あいつは長生きしすぎてボケて犯罪者にまで堕ちて行った武偵の恥さらしだ!!」

「アンタいい加減に!!」

「お前は只玩具を貰つて喜んでいる只の我儘な餓鬼だ、神崎・H・アリア!!」

「……れ」

「……まれ」

「憧れに認めて貰うのは嬉しいと思うのは同意するがそれは……自分の力だけじゃなくて多くの人間の支えがあつて初めて成り立つんだ!!」

「……まれ」

「手前には武偵としての本当の意味をまるつきり理解してない!!」

「黙れ!!」

「そんなバカな娘を育てた母親も結構の大馬鹿の売女」

「黙れ!!!!」

ドきゅー!! ドきゅー!!

キンジが言い終える前にアリアが大声を上げて天井目掛けて銃撃した。そしてアリアはキンジを見てこう言った。

「そう、私だけじゃなく曾お爺様も・・・ママも侮辱するなら・・・アంతタを許さない!!」

そう言つてアリアはキンジに向けて銃口を向けるとキンジはこう返した。

「ハア!! 自分一人だけで何も出来やしねえおちびさんが一丁前に銃を構えてんじゃねえ!!!」

そう言つてキンジは自身の銃と脇差を構えた。

するとアリアはキンジに向けてこう言った。

「初めて会つた時以來ね、アంతタに銃を向けるの。」

そう言うアリアに対してキンジはこう返した。

「ハ、違エよ! 今の手前は武偵から犯罪者になり下がった屑! そして俺はそんなお前をぶつ飛ばす武偵!! 何もかもが変わつたこの状況があこの入学式と

同じだなんて思いあがるなこのクソガキが!!」

「もう許さないわ!! 風穴開けてやるわ!!」

「その台詞はそっくりそのまま爆弾付きで返すぜ!!」
そう言いながらお互いトリガーに指を添え……。

「キンジャー……!!!」

「アリアー……!!!」

お互いの慟哭と同時に銃声が鳴った。

……これがお互いの運命を決定づけるとはまだ誰も知らなかった。

決着は決まり・・・本当の戦いへ。

ガガッガン!!

アリアとキンジはお互い目にも止まらぬ速さで発砲してきた。

アリアはキンジの人体の急所目掛けて撃ってきたのに対しキンジはというと・・・

「見えてんだよ!!」

そう心の中で言いながらキンジは二発の銃弾に対してたった・・・一発の銃弾を放った。

然しその銃弾はアリアが放った銃弾の横を掠るかのように一発目に、

そのまま2発目にも当てた。

そしてアリアが放った銃弾はそのままキンジに・・・命中せずに明後日の方に当たり、キンジの放った銃弾はアリアの・・・右側のガバメントに当たった。

「きゃあ!!」

ガバメントが弾かれ、アリアは驚いた。

「何したのか分からないけどなら!!」

アリアは一瞬動じたが今度は6発モノ銃弾を撃ち放った。

「これならどうよ!!」

そう言つてアリアはそのまま落ちたガバメントを取りに行くときんじは更に・・・4発放つた。

その銃弾はまず1発目はそのままアリアの放つた1発目に掠るように当たりそのまま2発目を上から破壊した。

2発目の銃弾も同じように3、4発目に。

3発目の銃弾も5、6発目にそれぞれ当たり、破壊した。

そして4発目はというと・・・。

ガイン!!

ガバメントを弾き、そのまま飛んで行つた。

「ちい!!」

アリアは拾い損ねたガバメントを1瞥した後の舌打ちしてこう言つた。

「アンタ、まさか銃弾を銃弾で・・・弾き落としてるわね?」

そう聞くときんじは普通にこう・・・答えた。

「ああ、まあな。」

そう言つてきんじは銃をスライドして薬莖を吐き出させた。

「ほんととんでもないバケモノよ、アンタは」

アリアはそう言つてガバメントを入れなおすとキンジに向かつてこう聞いた。

「ねえさ、アタシと一緒だ」

「手前と組む気なんてさらさらねえよ、武偵の面汚しが。寝言は寝て

言つてこい。」

そう言つてキンジは脇差を構えた。

するとアリアは憎たらしそうな顔でこう言つた。

「そう、・・・なら少し調教して・・・無理やりにも連れて行くわ!!」

「手前は人の事すら考えないのかよ!!」

アリアは背中から脇差を2本構えて突撃していった。

これはアリアにとって都合のいい展開であるのだ。

キンジの背と自身の背と比較して考えたのがこれだ。

キンジは遠距離であるからこそあれが使えるだけであつて接近戦なら

背が小さくて小回りが利く自分が有利だと思つていたが・・・アリアは

失念していた。

これまでアリアが対峙していたのは超偵も含まれるがSランク級の人間と

やりあつたことがあるのかと言えばそれは・・・無いに等しい物であつた。

「・・・遅いな。」

キンジはそう言つてアリアの太刀筋を見てそのまま当たるように脇差と・・・苦無を構えた。

「!!」

アリアはしまったと思ひ、体を無理やり振じつて・・・十字切りした。

「ウにやあああ!!」

「!!・・・やるな、・・・だが。」

キンジはそう言つてアリアの攻撃を弾かれた瞬間に苦無を放つた。

「イツツ!!」

それはアリアの左手の脇差に当たつて弾かれると苦無から煙幕が・・・

噴出した。

「きやああ!!」

アリアは自身の視界が途切れてしまい、身動きが取れなくなつていた。

「(けどこの煙の量ならあんただつて!!)」

見えないとアリアは思つていようであるが彼女はもう一つ失念していた。

ここにいるのはキンジ一人だけで・・・あつたのかを。

ガウン!!

「!!なあ!?!」

突然の銃声を聞いて直ぐにアリアが驚いた瞬間に脇差が途中から・・・折れていたことに気づいた。

「いつの間に!!」

ガウン!!

「ひにゃあ!!」

アリアは脹脛ら辺に何か衝撃があつたのに気づいて見てみると・・・。

「銃が!!?」

ガバメントのトリガーが壊されていたのだ。

「どうして居場所が!!」

アリアは何故だと思つてしていると少しずつ煙が晴れていくのが分かり

目を凝らすとそこにいたのは・・・。

肩にザビーを乗せているキンジがそこにいた。

「居場所はこの赤外線情報を俺の携帯に送信して教えてくれたんだ。

それでだよ。」

キンジはザビーの頭を撫でながらそう言うとザビーもその通りだというかの

ようにブーンと羽音を鳴らしていた。

それを見ていたアリアは最早怒り心頭でこう言った。

「アンター！アタシに『武偵の面汚し』って言って挑んだくせにそいつに頼るなんて卑怯よ!! インチキよ!!! 正面から戦いなさいよ!!!」

そう言うときンジは（。ム。）ハッ！と鼻息吹かしてこう言った。

「馬鹿かお前は？こいつは決闘じゃねえ、只犯罪者を逮捕するための策だよ。」

「犯罪者ですつてえ!!!」

アリアはその言葉を聞いて顔を真っ赤にするがキンジはこう続けた。

「そうだ、お前はこの『イ・ウー』を継ぐと決めた時点で同じ穴の貉なんだよ。それとも何か？お前はここを継ぐことこそ武偵の真骨頂とでも言いたいのか？」

「そ．．．それは。」

アリアはそれを言われて口をもごもごとさせた。

心の底では分かっていたのだ。

自分は悪党に．．．これまで逮捕してきた連中と同等になるのだと理解しているのだ。

だが．．．。

「それでも．．．．それでも私はママの」

ガウガウガウン!!!

アリアが言い終える前にキンジはアリアの武偵服の肺と心臓目掛けて

「発ずつ当てて失神させた。」

「がはあ・・・!!」

ドサツとアリアは倒れていくのを見てキンジはアリアに向けてこう言った。

「お前は母親のためだといってるが実際は・・・手前の自己満足のためだろうが。」

そう言つてキンジはアリアを一瞥した後に周りを見ていた後にレスティアに向けてこう聞いた。

「兄さん達は？」

「金一さんでしたら防人さんと獅堂さんと一緒に奥の部屋に!!」

「行きましょう!!」

一夏がそう言つて防人達が向かった奥の扉に向かうと・・・。

「見事に壊したな。」

「そうね。」

キンジとレテイシアがそう言つてその扉であつたものを見ていた。

誰がやったのか分からないがどうも馬鹿強い力で無理やりこじ開けた感があるからだ。

キンジ達はそのまま奥に進むとそこで目にしたものは・・・。

「・・・嘘だろ。」

その通路に書かれていたのはラジオハザード。

・・・放射性物質に対する注意喚起マークであった。

そしてその向こうにあるのは巨大な柱・・・いや・・・柱じゃなかった。

「これって・・・ミサイルか」

「只のミサイルじゃないです。ICBM（大陸間弾道ミサイル）です」

「この数から見ると大国一つを丸々焼き尽くすほどはあるわね。」

キンジ、レスティア、レティシアがそう言っていたが一夏は驚いてこう言った。

「それじゃあこいつらが全部爆発したら!!」

「日本は・・・終わりよ。」

一夏の言葉にレティシアは恐怖するかのようになんと言った。

日本は4発の水爆で消えてしまうぐらいの国だ。

それが8発。

最早日本は跡形もなく吹き飛ぶであろう。

すると何か・・・音が聞こえた。

「・・・皆静かに。」

「キンジさん?」

キンジが全員に向けてそう言うとかかか聞こえていた。

「ブツ・・・ブツ・・・ブツと何か聞こえた。」

その音が聞こえる方角に向かうとそこにいたのは・・・。

「音楽の世界には、和やかな調和と甘美な陶酔がある。」

「グウウ・・・。」

うつ伏せになって倒れている獅堂と・・・。

「それはここに居る全員が繰り広げている戦いと言う混沌と美しい対象を描くものだよ。」

「畜生が・・・。」

ICBMを背にして立ち上がろうとする防人と・・・。

「そしてこのレコードが終わるころには・・・戦いの方も、終わっている。」

「・・・貴様あ。」

シャーロックホームズの手によって首を絞めつけられながら

ぶら下がられている・・・金一の姿があった。

「兄さん!!!」

「さあ、いよいよ『序曲の終焉（プレリユード・フィナーレ）』に移ろうか。」

混ざり合うソウル／奇跡と思いのブラザーズ 前編

「兄さん!!」

キンジはその光景を見て猛ダツシユしてシャーロックホームズに殴りかかろうとした。

「手前!!」

「おっと。」

然しシャーロックホームズはひらりと躲して金一を手放した。

「ゴホゴホ!」

「大丈夫か兄さん!!」

キンジはシャーロックホームズから金一を離すように下がっていった。

「・・・アリアは?」

シャーロックホームズは何やらきよろきよろして周りを見るかのようにそう聞くとキンジはこう答えた。

「あいつなら今頃聖堂でおねんねだろうさ。」

手錠付きでだがなと言うとシャーロックホームズは懐に手を入れた。

「!!!」

キンジと金一は何か出すと思つて身構えると出てきたのは……。

「ああ、すまない。考え事する際にはこれを何時も使つてるんだ」

そう言つてシャーロックホームズはマッチ箱からマッチを出して

それを懐から出した……古風なパイプにマッチの火を入れた。

「……ふうう。」

シャーロックホームズは何やら考え事するかのようにこう言つた。

「矢張り違うな。」

「何がだ」

キンジはシャーロックホームズの言葉に対してそう聞くとシャーロックホームズはこう答えた。

「今ここにいるのは金一君とその男性二人に、ジャンヌダルク姉妹、そして……君だ。本来なら……君とアリアだけのはずなんだがねえ。」

「……どういう事だ。」

金一はその言葉に眉をひそめるとシャーロックホームズはこう続けた。

「それだけじゃない。本来『ロイミュード』技術に『トランスフォーマー』、『IS』、そして『仮面ライダー』、どれも私が推理した世界にはなかったんだ。」

「何故こうも私の推理が外れるのか疑問してたんだよ。まるで……世界が私の推理を拒むかのようにね。」

「だから私は出来れば今日までの状況を完璧にしようと色々としナリオを変えたんだよ。」

ふうとうと煙を吹かしながらシャーロックホームズは金一の言葉を聞かずに続けていた。

まるで……視界に入っていないかのように。

「まずは『ブラド』の末裔から『ロイミュード』技術を奪った。」

「彼を仲間にするには必須事項だったからねえ。」

「その為に私は『理子』を脱走させたんだよ。」

「アンタが理子を逃がしたって事か。」

キンジは初めて理子が脱出した真実を聞いて驚いていたが

シャーロックホームズは更にこう続けた。

「そして私は幾つもの組織や人間に声をかけたのだが一つトラブルがあつたんだよ。」

「……何だ。」

キンジは何事だと思って聞いていると……意外な言葉が出てきた。

「レスティア・ジャンヌダルクとレティシア・ジャンヌダルクの事だ。」

「「!!」」

キンジ、レスティア、レティシアはそれを聞いて驚いていた。

特にレスティアとレティシアは自分の名前が出たので何事だと思った。

「私が見たジャンヌダルクは銀髪の女性だけだったのだが二人もいたことに驚いていてね、どうしようかと思っっていたんだよ。」

「何せ君とアリアの仲を取りまとめるには必要な存在なのに二人もいては

厄介なことになりかねないと思っただけ、そこで修正させようと考えたのさ。」

「・・・まさか」

「そう、キンジ君。君の推理通りさ、私はレスティアをこの世から消そうと
考えたのさ。」

「「!!」」

「彼女たちよりも強い超債をターゲットに仕立て上げてレスティアが死ぬように仕立
て上げたのだがね、どういう因果なのか分からないが君の下に

来てしまったのだよ。」

やれやれだよとシャーロックホームズは手をひらひらさせながら

そう言っていた。

それを聞いていたキンジはと言うと……。

「……手前。」

右手から血が滴り落ちるぐらいい握りこぶしを作りながら

シャーロックホームズを睨みつけていた。

彼のやっていることはまるでゲームの様に人を殺す快樂殺人者のようだと

思っているからだ。

「……そう」

「レティシア!!」

レティシアの声が聞こえてキンジは彼女のいる方向に視線を変えると

そこにいたのは……。

「あんたが……アンタが……!! アンタガ……」

「アンタが姉さんを……!!」

レティシアは親に殺された子供が仇を見つけたかのような表情をして

シャーロックホームズに飛び掛かった。

「もう少し待って欲しいのだがね。」

そう言ってシャーロックホームズは飛び掛かってきたレティシアの剣を……

指一本で止め切った。

「なあ!!」

「少し下がってくれないかね?」

そう言つてシャーロックホームズはレティシアをひゅつと・・・吹き飛ばした。

「きゃああああ!!」

「レティシア!!」

レスティアは飛ばされたレティシアを助けようと抱きかかえようとしたがそのまま二人は向こうに飛ばされていった。

「レスティア!!大丈夫か!!?」

「はい!大丈夫です!!」

レスティアはキンジの言葉を聞いてそう答えた。

「さてと何処まで話した・・・ああ、レスティアらへんだつたね。

何故こんなことをしたのか?だよ、簡単さ」

「・・・君とアリアがパートナーになるように仕向けるためさ。」

「何?」

キンジはそれを聞いて驚いていた。

自分とアリアがパートナー?

笑わせるなら大概ものだなど思っていたがシャーロックホームズはこう続けた。

「その前に君は兄の死をきっかけに『アサルト』から『インケスタ』に入り、通常学校に編入しようとするぐらいに武偵を拒んでいたからね。」

「・・・そう言う未来もありそうつつうたらありそうだな。」

確かにそうであろうな。

飛鳥達がいなければそう言う未来があつても想像でき易いからな。

「そして傷心中の君を理子の爆弾でアリアが気づいて君を無理やりにもパートナーにしてある事件で解散し、彼女は帰りの飛行機で理子と戦うことになるのだがここでトラブルが幾つか起きたんだ。」

「・・・トラブル?」

「そうだ、第1に君はレスティアを助けて家に匿った。そしてアリアを追い出した。第2にあのバスジャックの際にその蜂型ロボット君が爆弾を外し、理子の正体を見破った。そして最後にこれが重要、理子がロイミュードになれることだ。」

「それにより本来なら共闘であるところをアリアは負けて君が代わりに戦って勝った。」

「そしてジャンヌダルク戦においては君は本来ならアリアと白雪君の三人で

挑んで勝つというところをレティシアは白雪君を使ってレスティアを誘拐させ、

君は他に作った仲間と共に勝利を収めた。」

「さらに言うならばブラドの時には彼は自身の狼をロイミュードに作り替えた挙句に理子と、君とアリアの共闘で倒すところを実質合切に君はたった一人でブラドを・・・殺し、理子君は自分の仲間を作っていた。」

「この時点で私の推理は最早機能出来なくなってしまうたのに更に最悪な状況が起きてしまったんだ。」

「・・・兄さんか」

「そうだ、本来なら金一君は『パトラ』と恋仲になるところを君はそうにもならなかったどころか『パトラ』を殺した。」

「最早私が見た推理が意味をなさなくなってしまうたのだが・・・未だ時間がある。」

「どうだね、ここでアリアを呼んで私と戦ってもらおう」

シャーロックホームズが何か言いかけた瞬間に・・・キンジは銃を向けた。

「何かなキンジ」

「それ以上言うな、シャーロックホームズ」

キンジはシャーロックホームズに銃を向けたままこう言った。

「アンタはアリアそっくりだな。その思考も、行動もな。」

「ハハハ、私達は血が繋がっているからね。当然だよ。」

「だからこそ、俺はアンタを許せない」

「？」

シャーロックホームズはキンジの言葉を聞いて何故だと思っているとキンジはシャーロックホームズに向かってこう言った。

「アンタはそうやって多くの人間を不幸にしてきた。そして多くの人間を泣かせた。」

「アンタは武偵の祖としてだけじゃなく人間としても最低だよ。」

「ならば・・・どうするんだい？」

シャーロックホームズはそう聞くとキンジはこう答えた。

「決まっている。・・・アンタをぶっ飛ばす!!」

そう言うところザビーがキンジのプレスレットに装着した。

すると・・・。

「俺も行きます。」

「・・・一夏」

一夏がキンジの右隣に立ってこう言った。

「あいつのあの言動・・・今まで見た中で大っ嫌い4な奴なんですね。」

「俺もだ。」

「兄さん!!」

そう言いながら金一はキンジの左隣に立ってこう言った。

「俺達武偵は悪を倒し、正義を執行する存在。そして何よりお前は……姉妹を……家族を」

引き離すという外道を行った。」

「シャーロックホームズ。お前に実刑を与える。」

そう言った後に一夏、金一はベルトを装着した。

「行くぞ、キンジ!」

「……ああ!!」

金一の言葉を聞いてキンジはそう答えた後に……ザビーのシステムを起動させた。

『『HEN SIN』』

そして一夏はフルボトルを、金一はガシヤットを挿入した。

『『コウモリ!』』

『『ギアーズ!』』

『『ビルドオン!!』』

『『ガシヤット!』』

「変身。」

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！
アムアカメンライダー！』

すると一夏の前後に映像が付いたファクトリーが、金一の後ろに何やら幾つもの墓と
鎌を振り回す

二頭身キャラが出てきた。

そして金一はそのキャラになった。

『ARE YOU READY?』

「変身!!」

「・・・レベルアップ。」

『レベルアップ！デッドセット！デッドバック！死を運ぶデッドクエスト!』

『Cast Off』

『ガツチリ交わるダークヒーロー!!バットギアーズ!!YEA A A A!!』

『Change Wasp “Thebe”』

そして、キングはザビーに、金一はグレイブに、一夏はバットギアーズに姿を変えた。
するとシャーロックホームズはと言うと・・・。

「言っただろう？私には時間がないからね、アリアと共闘させるためには・・・致し方
がないね。」

そう言うとシャーロックホームズの胸から『248』の数字が出てくるとその姿を……変えた。

鋼の体。

頭部には剣のような角。

体はまるで細マツチヨのような体系であった。

「気を付けろキンジ、一夏君。俺達はあの姿で……やられたんだ。」

そう言うときンジはこう答えた。

「任せろよ兄さん。それなら俺が何とかして見せるさ。」

そう言うときンジはザビーを触っているとシャーロックホームズは更に何かを取り出した。

『ナツケルナラ《ファイター》トイウナマエナノダガキンジクンタイサクトシテコレモダソウ。』

そう言うときンジはシャーロックホームズは目玉のような……何かを出すとそこから音声が

流れ出てきた。

『ア~~~~イ! バツチリミナー! チャチャチャバツチリミナー! チャチャチャバツチリミロー!!! チャチャチャ』

「そいつは!!」

一夏はそれを見て奴を思い出した。

最初に『仮面ライダー』になって初めて倒した敵を・・・『パトラ』を。

すると何やらコードのような物が目玉から出てくると目玉の音声はこう言った。

『ジャック・ザ・リッパー!!』

『霧の中!闇の中!!不可思議な悪意くくく!!』

すると『ファイター』の体も変わった。

両手に幾つもの・・・刃物が生えていたのだ。

『ナツケルナラ』『リッパー・ザ・ファイター』ダネ。』

そう言うのとシャーロックホームズは3人に向かってこう言った。

『サア、ワタシノモクテキノタメニモハヤメニオワラセヨウ』

「上等だ!!」

シャーロックホームズの言葉を聞いて3人はそう言って突撃した。

混ざり合うソウル／奇跡と思いのブラザーズ 後編

「おらあー！」

キンジは賺さずに苦無ガンをシャーロックホームズに向けて撃ち込むが……。

『フン』

ギヤインと銃弾を両手の指に搭載されているブレードに叩き落とされた。

「は!!」

『オット』

金一はグレイブの武装《グレイブサイズ》を振り抜こうとするも其れも止められた。

「こいつならどうだ!!」

そう言つて一夏はバットアローを射撃モードにして頭部を狙うも……。

『ムダダヨ』

そう言つてもう片方の手で弾き落とした。

「そいつは如何だよ!!」

そう言つてキンジはホーネットクラッシュャーを使って振り抜いた。

然し……。

『マダマダダネ』

そう言つてシャーロックホームズは全員の攻撃を……両手だけで防ぎ切つたのだ。

だが……。

「もう一押し!!」

そう言つて一夏はバットアローをブレードモードにして斬りこんだ。

これならと全員がそう思つていたが……無駄であつた。

『ワカツテタヨ、ソレクライ』

そう言つてシャーロックホームズは両指にあるブレードを……射出した。

「ウワアアアアアア!!」

それを諸に当たつた金一とキンジが弾き飛ばされ、一夏は……。

『キミモダ』

「何!グああああ!!」

先ずは蹴りで止められ、頭突きで弾き飛ばされた。

「クソがああ……。」

一夏は頭を摩り乍らも立ち上がろうとしていた。

『マダヤルヨウダカラ・・・オワラセヨウ』

そう言った瞬間に全ての時間が・・・止まった。

シャーロックホームズはロイミュードが保有する時間停止を起こして全員の動きを止めさせたのだ。

『サテト・・・ドチラカラ』

シャーロックホームズが倒す人間を決めようとした瞬間に・・・銃弾が当たった。

『グウウ!』

何があつたと思つたシャーロックホームズが周りを見てみるとそこにいたのは・・・。

「よう、シャーロックホームズ。お味は如何だよ?」

そう言つて・・・キンジが苦無ガンを持ってそう言つた。

『一体・・・どうやって・・・?』

「そう言うかよ、ボケが」

そう言うくとキンジはシャーロックホームズに向けてこう言つた。

「さあてと、リベンジといくぜ!!」

キンジはそう言つてシャーロックホームズに斬りかかった。

然しそれは両指のブレードに阻まれるもキンジはそのまま
ホーネットクラツシャーも構えて二刀流で攻撃した。

シャーロックホームズはそれを往なしながらもそれを迎え撃っていた。
何やら動きに戸惑いがあるように見えてキンジは今が好機だと思った。

「アンタはここで決める!!」

そう言うときンジはザビーをホーネットクラツシャーの柄の部分に装着させた。
するとホーネットクラツシャーから・・・電流が流れてきた。

『Raider Stinging』

「ライダーステイング!!」

ザビーから音声が流れるときンジはそのまま回転していく

ホーネットクラツシャーをシャーロックホームズに向けて・・・穿った。

『!!』

シャーロックホームズはそれを見てやばいと思ったのか両指のブレードを
クロスさせた。

「ウおオオオオオおおお!!」

『クウウ!!』

キンジとシャーロックホームズの鏝迫り合いが火花を散らし、電流が周りの

ICBMに当たりそうになっていた。

「しまった!!」

『!!』

キンジの意識がICBMに向けたのを知ったシャーロックホームズは直ぐに行動に移した。

『ハアアア!!』

するとシャーロックホームズの指のブレードにエネルギーが集中し、

そのまま・・・弾き返した。

「グわあああ!!」

キンジはその攻撃に吹き飛ばされてしまった。

『サテト・・・マズハカレトイコウカ』

そうやってシャーロックホームズは金一に・・・向かって行った。

「待・・・て」

キンジはシャーロックホームズに手を伸ばそうとするもシャーロックホームズは金一に向かってこう言った。

『キミハホンライナラ《パトラ》トムスバレルハズダツタノニコロシタ。ダカラキミモ

ダ』

そう言つてシャーロックホームズは金一にブレードを向けて・・・金一の腹部に刺し貫いた。

「兄さん!!」

キンジは大声でそう言つたとシャーロックホームズは更に一夏にも向かった。

『キミモイレギュラーダカラネ、キエテモラウトシヨウ。』

そう言つて一夏にもブレードを刺し貫こうとすると・・・奇跡が起きた。

一夏の心臓部分から紅い光がきらびやかに光り輝いた。

『ナ、ナンダコレハ!?!』

シャーロックホームズは何だと思つていと・・・。

「ウオオオオ!!」

その大声と同時に一夏はその攻撃を避けた。

『ナニ!?!』

シャーロックホームズは何故と思つたその時に・・・時間が動いた。

「がはあ・・・!グウウ・・・」

「兄さん!!」

「キンジさん!お兄さんを安全な所に!!」

一夏はキンジにそう言つて離れさすように言つた。

「ウウウウウウ．．．」

「大丈夫か兄さん!?!?」

キンジは変身を解除して金一をICBMの近くに置かせると直ぐに武偵学生証から薬を出そうとしていた。

然し金一はそれを見て．．．払いのけた。

「!!何するんだ兄さん!?!」

「．．．良く．．．聞け、．．．キンジ」

そう言う和金一はキンジに向けてある物を．．．差し出した。

「これって．．．。」

それは．．．グレイブのベルトであった。

「お前は．．．これ．．．から．．．理屈を．．．超えた．．．」

戦い．．．を．．．する．．．が．．．これ．．．だけ．．．伝え．．．る」

「もう．．．これ．．．いじよ．．．う．．．あいつ．．．の．．．犠牲．．．者．．．」

作．．．らせる．．．な」

「俺た．．．ち．．．義を．．．全．．．う．．．する．．．武偵と．．．して

．．．戦か．．．って．．．くれ!!」

「．．．振り．．．返る．．．な。」

そう言いながら金一は弱々しくも頭を天に向けてそして・・・キンジにぶつめた。

「行け!!・・・遠山・・・キンジ!!!」

弱々しくもこつんと・・・頭突きをした。

それは金一なりのメッセージであつた。

後を託すという金一なりの・・・エールであつた。

「兄さん・・・。」

キンジはグレイブのベルトを持つと金一に向けてこう言つた。

「死んだら・・・アンタの弟やめるからな!!」

そう言うのと金一はキンジを見てこう言つた。

「ああ・・・それなら・・・キンジ・・・お前は・・・ずっと・・・

俺の・・・弟・・・だ。」

その声が聞こえた。

すると他のICBMに座り込んでいた防人がキンジにある物を渡した。

「キンジ!こいつを一夏に!!」

そう言つてあるフルボトルを渡した。

「そいつを使え!!」

「分かった。」

キンジはそう言うのと一夏が戦っているところに向かった。

一方、一夏はと言うと・・・。

「ぐあ!!」

一夏はシャーロックホームズと戦っていたが既に重症であった。

『サテト・・・ココマデダヨ』

そう言ってブレードを振り上げようとすると・・・。

「待てよ。」

キンジがそう言った。

「一夏!!」

そう言うってキンジは渡されたフルボトルを一夏目掛けて投げた。

一夏はそれを受け取る前にシャーロックホームズ目掛けてバットアローで攻撃した後に受け取って直ぐに一夏はキンジの下に移動した。

『サアテト、マダツツケルノカイ?』

シャーロックホームズはそう言うってブレードを向けるとキンジはグレイブの

ベルトを付けた後にザビーを見てこう言った。

「行くぜ、相棒」

そう言うのとザビーもブレスレットに装着した。

『ナニスルキカシラナイケドモウジカンガナイノダ。サイシユウカクニン
シタイガ』

「俺はアリアの相棒には一生かけてもならねえよ。」

「そして俺は武偵としてじゃなく、一人の人間として」

「シャーロックホームズ!!アンタをぶっ飛ばす!!」

するとキンジの隣に立った一夏もこう言った。

「手前みてえな自分勝手な奴に俺は負けるわけにはいかねえんだよ!!」

そう言うのと一夏はベルトに装備されているフルボトルを外して新たな

フルボトルを両手に持って振った。

「行くぜシャーロックホームズ!これが俺の・・・いや、遠山家の・・・

俺達兄弟の信念の姿を見せてやるぜエ!!」

そう言うのとキンジに二つの音声が届いた。

ブレスレットからは・・・。

『H E N S I N』

ベルトからは・・・。

『レッツゲーム！メツチャゲーム！ムツチャゲーム！ワツチャゲーム！
アイムアカメンライダー！』

するとザビーの重装甲携帯にグレイブの第一段階が・・・纏われた。
そして一夏はと言うと・・・。

『ウルフ！』

『冷蔵庫』

『ビルドオン！』

ベルトからの音声と共に一夏はレバーを回すと前後の映像が出てきた。

前面は狼。

後面は冷蔵庫。

それぞれがファクトリーに出てくると更に音声が聞こえた。

『ARE YOU READY?』

それと同時に二人はこう言った。

「変身!!」

するとキンジのベルトからこんな音声が聞こえた。

『レベルアップ！ブラザーズソウル！ワールドクロス!! C h a n g e
W

仮面ライダーモード!!!』

そこから現れて来たのは……。

右手には苦無ガン。

左手には大鎌。

そして何より……。

右目は蜂のような複眼とキャラクターのような目をした……ザビーが

そこにいた。

そして一夏はと言うと……。

『孤高のコードハンター!!コードウルフ!!Y E A A A A A!!』

ファクトリーが一つとなった後に出てきたのは……。

青い狼の顔のような形をした複眼

白い体。

両手首には狼の……爪のような形状をした……仮面ライダーが現れた。

『仮面ライダーグレイブザビー』

『仮面ライダーコードウルフ』

キンジと一夏はお互い今の自分の名前を言うとシャーロックホームズに向けて

こう言った。

「手前を・・・ぶっ潰す!!」

序曲のエンド／継がれしフューチャー 前編

『マサカココマデトハネ』

シャーロックホームズは一夏とキンジのその姿を見て驚いていた。

自身が見た推理とは違うその姿。

そう・・・熱源センサー越しで見ている世界とは言え興奮しているのだ。

今のシャーロックホームズは嘗ての暗殺未遂で盲目になっており赤外線越しでしか世界を見ることが出来ないのだ。

すると部屋の音楽が・・・変わった。

O zittire nicht mein lieber Sohn...! (お

お、我が子よ。恐れることはない)

「この歌は？」

一夏は何だと思っているとキンジはこう答えた。

「モーツアルトの『魔笛』の・・・アリア」

丁度たった一人で歌うパートなのだ。

『モウソンナジカンカ』

「!!」

シャーロックホームズはその音楽の事でそう言うで一夏とキンジは身構えた。するとシャーロックホームズは二人に向かってこう言った。

『コノオペラガアリアにナルコロニハ・・・キミタチヲチンモクサセテイルツモリダツタノダガボクガスイリシタヨリモナガイジカンタタカツテイタ。』

『ドウヤツテシテルンダイ?』

『ボクノスイリガコココマデクルウウトナレバモハヤアトモドリデキナイノカ?』
シャーロックホームズは頭を抱えながらそう言っている。キンジはこう答えた。

「あんたは確かにすげえ探偵だったよ。」

「・・・けどな、手前は探偵として一番やっちゃいけねえ、真実の偽装を

犯した!!」

「俺は一人の武偵として手前をぶっ飛ばす!!」

キンジの言葉に一夏もこう答えた。

「俺はアンタガどれだけスゲエのか知らねえけどアンタはやっちゃいけねえ事を犯した!!」

「その罪をここで償わせる!!」

二人は各々そう言いながらキンジはグレイブサイスとホーネットクラツシャーを、

夏はバットアローと新たに出てきた左手の爪状の武器『アイスクロー』を出した。

そして二人は・・・シャーロックホームズ目掛けて走り出した。

「ウオオオオ!!」

『クウ!!』

「おらおらどうしたシャーロックホームズ!!」

キンジはそう言いながらシャーロックホームズに向けて二刀流で戦っていた。最初と同じであるがあの時とは違う。

今のシャーロックホームズは迷いが出てきたのか剣に迷いが出てきた。

然しキンジは違っていた。

ただひたすらに武偵として、一人の人間としてシャーロックホームズを倒すという目的で剣と鎌を振るっていた。

そして一夏はと言うと・・・。

「ウオオオオオ!!」

ICBMを巧みに上り下りしながらバットアローで足止めしつつアイスクローで斬り裂いていた。

ウルフルボトルの能力でもある機動力向上により基本性能は

バットギアーズ以上の性能に上がった。

今の二人はまさにシャーロックホームズという巨悪を討つために戦う二つの
ダークヒーローのようであった。

『ジャマダア!!』

すると突如シャーロックホームズが大声を上げて両指のブレードを射出させた。

「ちいい!!」

キンジは二つの武器で叩き落とし、一夏は素早く躲していた。

するとシャーロックホームズは二人に向かってこう言った。

『モウジカンガナイノダ! ココデワタシガシネバコノヒダンヲネラツテ
オオクノクニガシノギヲケズルノダ!! ワタシハセカイヲマモルタメニ』

「ふざけんな!! 手前がやっているのは多くの人間を泣かしている

クソな奴の所業だ!!」

キンジはそう言ってシャーロックホームズの言葉を遮ると一夏もこう続けた。

「世界のためというならなら何故アンタハ子孫を泣かせた! 何故アンタハ

不幸にさせた!？」

『ソレハ・・・セカイヲマモルタメニシカタノナイ』

「違う! 手前は世界を守るつつう大義名分片手に好き勝手やってるだけだ!!」
キンジはそう言つてシャーロックホームズを殴りつけた。

『ガハア!・・・』

然しキンジは更にこう言いながらシャーロックホームズの顔を殴つた。

「こいつはレスティアの分!」

『ガハア!!』

「こいつはレティシアの分!」

『グボア!!』

「こいつは兄さんの分!」

『ゲバア!!』

「こいつはアリアの母ちゃんの分!」

『ゴヴァ!!』

「こいつは爺ちゃんの分!」

『ジャブ!!』

「こいつはばあちゃんの分!」

『ズバア!!』

「こいつは飛鳥達に分!」

『ゼブラ!!』

「こいつは……これまで手前が泣かした……多くの人間の怒りだあ!!」

『ゾギヤ!!』

シャーロックホームズは断末魔の悲鳴を言いながら吹き飛ばされた。

するとキンジはグレイブサイスについているコントローラーらしきボタンを

幾つか押した後にシャーロックホームズに向けてこう言った。

「シャーロックホームズ!手前の罪を数えろや!!」

すると一夏もベルトについているレバーを回していた。

『フルボトルブレイク!!』

そしてキンジの方も何やら音声聞こえた。

『ヒツサ〜ツ!!デスクリティカルSting!!』

するとキンジのザビーが付いている方から現実と漫画両方の電撃が、一夏の方は両手首からアイスクローが出て構えた。

「ハアアアア……ウおらああああ!!」

一夏とキンジが二人同時にシャーロックホームズ目掛けて突っ込むが

シャーロックホームズは両指のブレードを真正面に向けるとこう言った。

『ソレデモワタシハ．．．ワタシハ．．．セカイヲマモル

タメニ．．．!!!』

すると両指のブレードが光り輝いてキンジ達と．．．衝突した。

するとお互いのエネルギーがぶつかり合い、お互いが離れようとするかのようにバチ

バチと火花を散っていた。

『グウ．．．ウオオオオ!!!』

「ウオオオオ．．．．．ラアアアアアアア!!!」

お互い必死にぶつかり合っていたがその時、シャーロックホームズは．．．

ある物を垣間見た。

『ナ．．．ナンダ．．．アレハ?』

そこに映っていたのは．．．。

「ウオオオオ!!!」

キンジの方からは．．．巨大な黒い竜と白い剣が。

「ウオオオオ!!!」

一夏の方からは何やら．．．誰かの面影が．．．映っていた。

「ウオオオオオ!!!」

それが見えた瞬間に両指のブレードが……砕け始めた。

『バ……バカナ!!コンナコトガオキルナンテ……コンナコト……
コンナコトガアアアアアアアアアア!!』

そして両指のブレードが砕け散った瞬間にシャーロックホームズは
そのまま……吹き飛ばされた。

『会心の一撃!!』

キンジのベルトの音声が聞こえたと同時に全てが……終わった。

序曲のエンド／継がれしフューチャー 後編

『・・・バカな』

シャーロックホームズはそう言いながらキンジと一夏を見ていた。

自分が推理していた未来とは違うだけじゃない。

何か根本的から違ってしまったているかのような感じがしていたのだ。

それが何なのかは未だ何も分からなかった。

「キンジさん!!」

奥の方からレスティアがレティシアと一緒に走ってきた。

如何やら遠くから戦いを見ていたそうだ。

「レスティア!!早く兄さんに治療を!!」

「!!直ぐに」

レスティアは金一の状態を見た後に応急処置に移った。

そんな中で防人はシャーロックホームズに近づくとこう言った。

「シャーロックホームズ、『イ・ウー』のボスであると同時に幾つもの

闇組織を束ねる首領としてお前を拘束してもらう。」

そう言って防人はシャーロックホームズに手錠をかけた。

「この手錠は今までキンジが戦ってきた怪人のデータを参考に作ったやつだ。

お前の変身を阻害できるし超値としての能力も封じれるから逃げようと

考えないことだ。」

そう言うのと防人はシャーロックホームズを立たせようとしたその時に・・・白煙が防人達の足元にかかっているのが見えた。

「何だこれは？」

「・・・時間のようだね。」

そう言った瞬間に・・・外から爆発音が聞こえた。

「！！！！」

全員が何事だと思っていると防人の通信機から通信してきた。

「どうした!？」

『俺です防人さん!カズキです!!』

「カズキか!? 一体何が起きた!？」

『突然船が爆発したと思ったら造船場の天井も爆発してそしたら今まで戦っていた連中が潜水艦に向かったんです!!』

「何!!」

『多分そつちに向かっていると 생각합니다！ 気をつけてください!!』
それを聞いた防人はやばいと思っていた。

今いる面子の殆どはボロボロになつてしまい今新手が来たら太刀打ちできないと
悟つてしまつたからだ。

防人はシャーロックホームズを見、そしてキンジ達を見て・・・決断した。

「全員撤退しろ！ 無事な奴は動けない仲間を助ける!!」

そう言つて防人はシャーロックホームズを・・・置いて行つた。

「おい、シャーロックホームズは!？」

獅堂は防人に向かつてそう聞くと防人はこう答えた。

「置いて行く!!」

「ハア!? あんなに必死こいたのにか!？」

「今は仲間が優先だ!!」

防人はそう言つて倒れている金一をキンジと肩を貸してそこから脱出して
いった。

そんな中でただ一人、シャーロックホームズはある事を考えていた。

「私は如何して・・・間違つてしまつたんだろう」

今まで自分の推理は間違つていなかつた。

そのおかげで多くの人間を救っていたんだと信じていたからだ。

だが……何処から間違ってしまったのか分からなかった。

「あの時……スイスで……モリアーティーと共に滝に墮ちた時か？」

「もしかして……彼女を失った時か？」

「それとも……もつと前から……」

この推理をした時なのかと思っっている中で……シャーロックホームズの胸から……紅い光が零れ出してきた。

「これは?！」

シャーロックホームズはまさかと思っっていると……奇跡が起きた。

「目が……目が見える?！」

嘗ての暗殺未遂で視力を失って久しい自分の目から……光が戻ったのだ。

「あれは……まさか!!」

そして視力が取り戻したシャーロックホームズが見たのは……二つ。

一つは……ある少女が誰かと喋っていた。

金髪のような亜麻色の髪の少女が。

「二つは間違いないがもう一つは……!!」

シャーロックホームズはそれを見て驚いていた。

何処かの日本の縁側のような風景にいる二人の男の子。
その内の一人をシャーロックホームズは分かってしまった。

「・・・遠山・・・キンジ君・・・!!」

そう、まだ幼いが間違ひなく遠山キンジであった。

「これはまさか!!・・・いや、伝承とは違う。ならこれは・・・」

そう言いながらシャーロックホームズは自らの銃を見た。

「弾丸が・・・二つ!？」

シャーロックホームズはそれを見て驚いていた。

一つは紅い弾丸。

そしてもう一つは・・・白。

何物にも染まることすらない・・・白い弾丸がそこにあつた。

それを見た後にシャーロックホームズは・・・ふつと笑つてしまった。

「成程・・・神様も中々どうして・・・」

そう言つてシャーロックホームズはまず一発目を少女に向けるとこう言つた。

「さうらばだ・・・Aria The Scarlet Ammo (緋弾のアリア)」

そう言つてシャーロックホームズはその少女・・・アリア目掛けて撃つた。

そしてその後シャーロックホームズはキンジを見てこう言つた。

「君との戦い私の最後に相応しい相手であったよ。」

「願わくば今度こそ・・・アリアの相棒になってくれ。」

そう言っているシャーロックホームズの髪は既に・・・白髪に染まっていた。

そしてキンジに向けてこう名付けた。

「さらばだ。Kinzi Toyama Unpredictable（予測不能者 遠山キンジ）」

そう言つてシャーロックホームズは白の弾丸をキンジの背中目掛けて・・・命中した。

何やらもう一人の少年がこちらに銃を向けたが後ろから迫ってくる巨大な白煙をバツクにシャーロックホームズはそのまま・・・砂となつて・・・消えた。

残されたのは服と彼の愛用してきた・・・拳銃だけであった。

「兄さん!!しっかりしろ!？」

キンジはそう言いながら金一の意識を保とうとしていたのだ。

「レスティア!!兄さんの怪我は!？」

「・・・・・・・・」

レスティアは金一の刺された腹部に自身の能力でもある焔を使って怪我を塞いでいつているが・・・目を瞑ってこう思っていた。

「(腹部の傷がここまで・・・このままじゃあ!?)」

そう思いながら必死に命を繋ぎとめようとしている中・・・

金一がレスティアの手を取ってこう言った。

「もう・・・良い。」

「ですが!？」

「自分の・・・体・・・くらい・・・分かって・・・るさ」

「!!」

レスティアはその言葉を聞いて・・・やめた。

「レスティアはどうして!!このままじゃ兄さんが!!」

「キンジ・・・もう・・・良いんだ。」

「兄さん!!」

すると金一がキンジに向けてこう言った。

「キンジ・・・俺は・・・お前・・・が・・・心ば・・・い・・・だった。」

「母さんが・・・死んで・・・父さんも・・・死んで・・・たった・・・」

一人……の……家族……守る……って……誓つ……て……
お前……の……事……信じ……られ……なかつた……だ。」

「だけど……お前の……戦……い……見て……分かつた……」

そう言いながら金一はキンジの頭に手を添えて……撫でながらこう言った。

「もう……俺……抜き……でも……大丈夫……夫……て……

分かつ……て……ホット……した……だ」

「(あの時俺はお前を見てこう思ってたんだぞ。)」

『『大きくなったなあ、キンジ。』』

「だから……お前……の……戦……い……最後……まで……

見届……けて……もう……何も……悔いも……ない」

「ふざけんな!!」

金一の言葉を聞いてキンジは大声でこう言った。

「何が悔いが残らないだ!何死にそうになつてんだよ!!」

「兄さんの帰りを待っている人達がまだいるんだぞ!!」

「飛鳥に、雪泉姉!爺ちゃんにはあちゃん!!飛鳥や雪泉姉の

爺ちゃんばあちゃんも皆心配してたんだぞ!!」

「家に帰ったら飛鳥と雪泉姉が兄さんに怒りながらも泣いて『お帰り』って

言ってさ!!」

脳裏に浮かぶのはキンジの実家で帰りを待っていた飛鳥と雪泉の笑顔が。

「爺ちゃんとはあちゃん達から怒鳴られても暖かく迎えてくれてさ!!」

更に浮かんでくるのは自身の爺ちゃんばあちゃんや飛鳥や雪泉の方の

爺ちゃんばあちゃんが手料理を作って迎えてくれる光景が。

「そんでさ……レスティアとレテイシアも一緒にさ……笑って……

そんで」

キンジは泣きながらもそう言っていたが遂に言葉が詰まってしまったのだ。

それを見た金一はキンジの頭を……ゆつくりとだが……撫でていた。

「大丈夫だキンジ。お前はもう大丈夫だ。」

「(お前の帰りを待ってくれる仲間たちがいる)」

飛鳥や雪泉、そして他にもできた仲間の光景が。

「(お前を支えてくれる人がいる)」

キンジの隣でキンジの手を握りながら泣いているレスティアを見た。

「(お前と共に戦ってくれる仲間がいる)」

そう言っつて防人達を見た。

すると金一の体が……0と1のデータになり始めたのだ。

「兄さん!?!」

キンジは泣きじやくりながらもそう聞くと金一は……ニコリと笑って口パクでこう言った。

ア・リ・ガ・ト・ウ。

「もう、良いの?」

「!!」

金一は何か声が聞こえたので見てみるとそこにいたのは……。

「カナ……。」

自身が女装していた時の人格。

『カナ』であった。

「もう、良いの?」

そう聞くと金一はこう答えた。

「ああ……もう良いよ。」

「あいつはもう俺抜きでも大丈夫さ。」

そう言うのとカナは金一の目の前に手を伸ばすところ言った。

「じゃあ……逝こう?」

「ああ……逝こう。」

そう言つて金一はカナの手を取つて立ち上がると金一はカナに向けて

こう聞いた。

「なあ、カナ。」

「ん?なあに?」

カナが金一に何なのかと聞くと金一はこう答えた。

「手を……繋いだままで……良いか?」

そう聞くとカナは……笑顔でこう答えた。

「うん。良いよ」

そう言つて二人は光が見える場所に向かつて……歩き出した。

潜水艦の中とは思えない聖堂で一人の人間が・・・天に召された。

全員が哀悼の意を込めて黙とうを捧げ、防人は帽子を更に目部下にかぶり直していた。

その時の防人の肩は・・・震えていた。

「うう・・・ううう。」

一夏はその光景に涙を流していた。

然しその中でも一際泣いている人達がいた。

「うう・・・アアアアアアア」

レテイシアは顔を手で隠すように泣いていた。

「アアアアアアア・・・アアアアアアア!!」

レスティアは金一を抱きしめるように泣いていた。

そしてキンジはと言うと・・・。

「兄さん・・・兄さん・・・兄さん!!!」

「アアアアアアア!!・・・ウワアアアアアア!!」

レスティアに抱きしめられるように胸を頭で埋もれるかのように・・・

泣いていた。

朝日が顔を出し、らんらんと輝いていた。

その空に向かって立ち上る7本の煙柱。

まるで・・・死者を天国に召すための道を作るかのように・・・真つすぐに伸びていた。

そして聖堂に一際輝くステンドグラスの光はまるで彼の魂を祝福するか

のように・・・美しく・・・輝いていた。

そしてそんなステンドグラスの光にあったのは金一が着ていた・・・服だけであった。

ひと夏のバケーション／再開のデンジャー 前編

国連軍基地対人演習場

そこは対人演習や武術、兵術等を実践感覚で学ぶための場所であるためあらゆる模造武器や模擬弾等が置かれている。

その部屋の一角にある格闘演習場において二人の男性が稽古をしていた。

「ウおらあ!!」

「まだまだ!!」

一人は長いロングコートを着た男性、「防人 衛」

もう一人は制服を着た青年、「遠山キンジ」

二人は何やら・・・と言うよりキンジが何やら思いつめたかのような様子で稽古をしていた。

「ウワアアアアア!!」

「甘い。」

キンジが何やら取りつかれたかのように拳を振るうが防人はするりと避けるように往なした後に投げ飛ばした。

「ぐわあ!」

キンジは畳の上に叩き落されるとそれを見た防人はこう言った。

「よし、今日はここまでにするぞ。」

そう言つて防人は部屋から離れようとする・・・キンジは立ち上がろうとしながらこう言つた。

「もう・・・一度・・・お願い・・・じまず!!」

キンジは息を荒げながらそう言うも防人は時計を見てこう言つた。

「もうやめろ。彼は朝飯と昼飯加えて8時間稽古してるんだ。これ以上はお前の体が持たないぞ。」

防人はタオルで汗を拭きながらキンジに向かつてそう言つた。そして防人はこう続けた。

「あれから9日近く家に帰つてないだろうか? 偶には家に帰つて彼女たちと遊んで来い。来年は受験勉強もあるんだから今日だけはゆつくり寛いでも罰は」

「そんなんじやダメなんだよ!!」

「・・・キンジ」

防人は大声で怒鳴るキンジを見るとキンジはこう続けた。

「俺は強くならなければいけないんだ・・・強くなければ・・・」

強くなくちゃ・何も守れねえんだよおおお!!」

キンジはそう言いながら防人に殴りかかろうとすると防人はキンジの足元を蹴ってぐらつかせた。

「!!」

「少し・・・寝てろ!!」

防人はキンジの後頭部に手刀を叩きつけて失神させた。

「兄・・・さん」

キンジはそう言いながら・・・失神した。

「キンジさん!!」

すると出入り口からレスティアが水とタオルを持って出てきたのだ。

「そいつを頼む。」

そう言つて防人はキンジをレスティアに託して部屋から出て行った。

「まるで2年前の一夏そっくりだな。」

防人はそう言いながら自室に入つていった。

周りには今回の事件の報告書とある新聞が机の上に置かれていた。その新聞の表紙にはこう書かれていた。

『「レインボー・クルーディング」社倒産！2年前に沈んだと思われた豪華客船発見!!』

更に防人はある週刊誌を開いた。

『「レインボー・クルーディング」社社長と会長逮捕!!保険金詐欺とテロリストに対する資金援助によるもの!!』

『「武偵 遠山金一は英雄であった！遅すぎる賞賛!!言われなきパッシングと名誉棄損に訴えあるか!?!』

「・・・全くどこもかしこもメディアは手のひら返しだよ。」
防人はそう言いながら今回の顛末を思い出していた。

あの後「レインボー・クルーディング」社の会長と社長は逮捕された。

容疑は保険金詐欺とテロリストに対する資金援助、名誉棄損、書類偽装等と

挙げればきりが無い程の容疑で捕まった。

会社は無論倒産し社員の内社長、会長と親しかったもの以外は防人が予め紹介した会社に再就職した。

そして防人はメディアに対して以下の報告をした。

① 遠山金一は船よりも船員及び乗客を守るために一人で主犯格と戦った事。

② その戦闘後に彼は死んだこと。

③ メディアはこれまでの行き過ぎた報道に対して遠山家に謝罪すること。

④ 慰謝料は法定金額の3倍を耳を揃えて支払う事。

⑤ 以下の要求に一つでも応じられない場合は・・・生死の保証はできかねます。

このように見たままの脅しでメディアに送付させた。

無論反対意見をする馬鹿どももいたがそれはこう言つて納得させた。

「それじゃあご家族を一人ずつ顔のパーツをそぎ落として

送り返しましょうか？」

そう言つて更に反論した奴は・・・顔とまではいかないが手足がなかったり

二度と表社会に顔を出すことが出きない位にぼっこ凹にして言う事聞かせた。

更には言えば助けてくれた恩を仇にして返した馬鹿どもは居場所を特定した後

これでもかというくらいの痛みと恐怖を与えさせた。

そんなこんなで金一の名誉回復や事後処理等で疲れたのに更に何もしていない
武偵局から目の前でこう言われたのだ。

「『後の処理は我々が引き継ぐ代わりに今回の事は永久に他言無用』と・・・言つてき
たので流石に防人もガチで切れて全員凹した後にごう言つた。

「手前から何もしてねえ給料泥棒が一端の人間の様にほざいてんじやねえ!!」
そう言つて残りの仕事も防人が全て引き受けた。

その後に武偵局から抗議があつたがこう言つて退かせた。

「お前ら阿保言つてると手前らの無能っぷりをイタリアの武偵局本部に
チクるぞ。」

棘と言うか・・・ランスの如き強烈な攻撃にそれ以降何も言わなくなった。
無論指令所と潜水艦にあつた証拠品は既に国連軍管理下に置いた。

そしてそれらは全てある裁判官にリボン付きで送り渡した。

(指紋も確認した上で)

防人は報告書を書き終えた後キングジの事を思い出していた。

「(あいつ思いつめて・・・当たり前か、兄貴を失つたんだから)」

精神的ダメージは一夏以上だなあと思っている中どうすればいいのかを
考えているが・・・。

「ああ！全然思いつかねえ!!!」

防人は頭を掻きながらそう言うど気晴らしにチャンネルを取ってテレビを付けた。

するとあるCMを見て……ピコんと閃いた。

「これだ!!!」

そう思つて防人は思い当たつたが吉日と直ぐに行動を開始した。

一方、京都。

「ありがとうね一夏。荷物持ち手伝わせて。」

「良いよ、唯依。この間まで向こうにいたんだから」

一夏と唯依が何やら荷物を持って商店街を歩いていた。

「それにしても父様『流しそうめんするから麺を買つて欲しい』ってさ。」

「まあ仕方がないよ。俺の機体がセカンドシフトしたから整備の為に皆頑張ってくれてるんだからさ。」

一夏はそう言いながら唯依を宥めていた。

あの作戦の後に一夏は京都に戻って自身の機体『黒式・焰天』と共に帰還した後、機体の整備とテスト、専用武装の制作などで全員中々休まることが出来なかったのだ。

その為に唯依は休み返上で働いている研究員たちに休息も兼ねてこう言う企画を思いつくに至ったのだ。

「そう言えばさ一夏、何貰ったの?」

唯依がそう聞くと一夏はこう答えた。

「ん?何か福引があるらしくてな。その引換券」

そう言つて一夏は一枚の紙を唯依に見せると唯依はもしかしてと云って指さした。

「もしかしてあそこじゃない?」

そう言つて指さすとそこにあつたのは……。

ガラガラ抽選を机に置いているスタッフ達がそこにいた。

「一度やってみる?」

唯依は一夏にそう聞くと一夏もそれに従ってそこに向かった。

「おじさん一回」

「あーよ。」

一夏はそう言つて引換券を渡してガラガラ抽選を回して暫くすると出てきたのは……。

「……金色？」

「大当たり~~~~!!!!」

一夏が球の色を見てそう言つとおじさんはそう言つてベルを鳴らした。するとおじさんはある物を出した。

「はい、特賞のペアチケット。」

そう言つて一夏に渡すと何だろうと思つて開けてみるとその中に入っていたのは……。

『東京ビッグウオーターアイランド』ご招待券？」

「そ、今月分の前売り券は既に品切れで後は当日券なんだけどプレオープンでどれで遊んでもなんと半額！二人ともついてるねえ。」

そう言つておじさんは一夏達を見ているとおじさんは一夏を見てこう言つた。

「あれま!?!あんだ『織斑 一夏』かい?!」

「あ……はい。」

「だったらこいつも持つて行つてくれ！特賞祝いだ!!」

「ええ、良いですよ別に!!」

「ガハハハツどうせ客はあんまり来ないからサービスだよ!!」

そう言つておじさんは一夏にある物を渡した。

「こいつは最新型の腕時計だ。こいつ一つで心拍数測つたり音楽聞けたり、投影ディスプレイで地図を見ることが出来るんだ！持つてけよ！どうせ

祖父さんばあさんしか来ねえからさ!!」

そう言つてじゃあなとおじさんは一夏と別れた。

そして暫くして一夏は唯依に向けてこう聞いた。

「なあ、唯依。一緒に来るか?」

そう聞くと唯依は暫くして……。

「え……え……え……ええええええええええ!!」

驚いたようだ。

後で家族とも許可を貰つてその前日には東京に向かう事とした。

「ええ．．．ですから．．．ありがとうございます!!」

防人は何処か電話していたようだが終わるところ言った。

「後でキンジに任務と称して外に出させるか。」

そう言って準備していた。

ひと夏のバケーション／再開のデンジヤー 中編①

そしてそれから2日後。

「あ、キンジ。今日は演習場使えないぞ?」

「え・・・演習場が使えない!?!」

キンジが自身に割り振られた部屋の前で防人の言葉に驚いていた。

因みに部屋は一人部屋であるが自室と台所などワンルームタイプの部屋であるため比較的過ごしやすいのだ。

「そ、当面の間は清掃とか整備とかで閉鎖するから暫くはゆっくり過ごして」

「何かあるのかよ?」

キンジは何やら疑惑の表情で防人を睨みつけていた。

つい2日前の事を思えているようであるが防人は何も言わずにある物を手渡した。

「何だコレは?」

「取敢えずそこに行け、偶にはあのお嬢ちゃんにサービスして来い。」

そう言って防人はそこから去っていった。

取り合えずキンジは何なのかと開けるとそこには入っていたのは・・・。

「?・・・プレオープンのおウオーターアイランドチケット?」

「え、防人さんがですか?」

キンジはレスティアが泊まっている部屋に行つて事の次第を話した。

因みにレスティアとレティシアは国連軍が擁する客人用の部屋に泊まらせている。無論ちゃんとした造りになっておりホテルのような形になっている。

するとキンジはレスティアに対してこう言った。

「それじゃあそいつ持つてレティシアと遊んで来いよ。」

「え・・・キンジさんは?」

「俺は学園島に戻つてアサルトのアリーナに行くよ。」

そう言つてキンジは立ち去ろうとすると・・・何か引つかかた感じがした。

「・・・何だよレスティア。」

レスティアはキンジの服の端を掴みながらこう聞いた。

「キンジさんは・・・行かないんですか?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「俺は弱い。だから強くなるために今は特訓を」

そう言いかけるとレスティアは・・・後ろからキンジを・・・抱きしめてこう言った。

「レ、・・・レスティア!?!」

「一緒に行きましょう。」

「だから俺は!!」

「行くといわない限り抱きしめ続けますよ」

「だから俺は行かないって」

キンジはレスティアの言葉を聞いてマジかよと思つているとキンジは振り向くと

レスティアの顔を見て言葉を詰まらせた。

「レスティア・・・」

今にも泣きだしそうな顔でキンジを見ていたのだ。

それを見たキンジは・・・はあとため息ついてこう言った。

「分かった。行くぞ。」

そう言うレスティアはこう言った。

「(＊・▽・＊) ハイ!直ぐにレテイシアも連れて行きますので!!」

そう言つて部屋に入っていくレスティアを見てこう思つていた。

「・・・本当に俺って駄目だなあ。」
そう思いながら準備しようと思ったキンジであった。

ひと夏のバケーション／再開のデンジヤー

後編

そんなこんなでキンジはレスティア達と共に『東京ウオーターアイランド』にへと向かった。

既に多くの人間が並んでいるようだ。

目的は恐らく当日券目当てのようであるが……。

キンジは予め貰ったチケットを持って並ぼうとすると……後ろから声が届こえた。

「あれ、キンジさん？」

「?……一夏。」

キンジが振り向くとそこにいたのは白のカッターシャツと青いジーンズを履いた

一夏と黄色の薄い上着とワンピースタイプの赤色の服を着た唯依がそこにいた。

「ねえ一夏、この人達は？」

唯依が一夏にそう聞くと一夏は少し濁して自己紹介した。

「ああ、この間仕事があった時に一緒になった『遠山キンジ』さん。」

「おう。」

「それと『レスティア』さんと『レイシア』さん。」

「こんにちは。」

「はい。」

三人がそれぞれ挨拶すると唯依も自己紹介した。

「初めまして、一夏と同じIIS学園に通っている『篁唯依』です。」

唯依もするつとお辞儀しながら自己紹介をした。

それを見たキンジ達はちゃんとした娘だなと思っていた。

すると一夏がこう聞いた。

「それにしてもどうしたんです？三人ももしかして？」

そう聞くとレスティアがこう答えた。

「はい、防人さんが『遊んでいきなさい』と言われてここのチケットを。」

「そう言うお前は如何なんだよ？」

キンジはそう聞くと一夏はこう答えた。

「俺はこの間福引でここの前売り券が当たったのでそれで。」

「何だそりゃあ・・・。」

キンジは何の因果化と思いながら空を見渡した。

するとアナウンスが鳴った。

『只今より受付を始めますが前売り券をお持ちの方は案内役の職員にチケットを見せて下さい。』

そう言う声が聞こえたのでキンジと一夏はそれぞれそっちに向かつて行つた。

そして着替え室にて・・・。

一夏はキンジの行動を見てこう確信した。

「(多分防人さんが考えたんだろうな、立ち直れるようにしたいって思いで。

俺ももし千冬姉に何かあつたら・・・やめよう。考えると何だか

暗くなつちまいそうだ)」

一夏はそう思つて思考を止めて着替えを続けるとキンジの体を見て・・・

こう思つていた。

「(正に昔の自分を見ているようだな。)」

そう思いながら着替えを再開した。

今のキンジの体は幾つもの痣が残つており下手したら虐待の後のような

状態であつた。

それから暫くして……。

「キンジさ〜ん。遅れてスイマセン!!」

「別に良いじゃない? どうせこう言うことなれば特訓ばつかしてるんだから。」

そう言つてキンジと一夏の目の前にレスティアとレティシアが来た。

レスティアは白のビキニ

レティシアは黒のビキニ

そして……。

「一夏 (m・ω・) m ゴメン待った!?!」

「ええと、そこまで……。」

「?どうしたの」

一夏は唯依の水着を見て呆然としていた。

今の唯依は青緑色の装飾もないビキニであるのだが胸の谷間が目立つくらいに

見えているのでビックリしているのだ。

「・・・変・・・かな？」

「いやいやいやいや、スゲエ綺麗だぞ!!」

一夏は慌ててそう言ったがこれには理由があった。

それは・・・。

「(もし佑唯さんに唯依を泣かせたなんて知られたら・・・殺される!!)」

あのラ○ポーみたいな阿修羅真つ青の重装備付きでとそう思っていた。

「良かった・・・。」

唯依はそう言ってほっとした様子であった。

そしてこれからどうしようかと思っていた。

するとレスティアがこう提案した。

「其れでしたら皆さん一端別れてお昼ご飯になったらまた集まるというのは

如何でしょうか？」

そう言うときまあ・・・いつかという風に全員納得して別れた。

「一夏、早く早く」

「分かってるよ。唯依」

一夏と唯依はそう言いながら流れるプールに向かって行った。因みに浮き輪も持参している。

そんな中で唯依はある人物を目にした。

その人物は……。

「あ、織斑先生」

「え、千冬姉!？」

唯依の言葉に一夏はそっちの方を向くと……。

「誰もいないぞ?」

「あれ、可笑しいな?」

唯依はあれえと思いつながら遊び始めた。

少し離れた場所から……一組の女性と男性が水中から出てきたことも知らずに。

「それじゃあ俺達はどうするか」

キンジはそう言つて波が出るプールにいた。

ノープランであるため何をしようかと考えていた。

するとレスティアがこう言つた。

「でしたら・・・えい！」

「うおわ!!」

突然レスティアがキンジに向かって水をぶっかけた。

「何しやがる!!?」

「えへへへへ、そーれ!!」

「当たるか!」

「うわっぷ!?!何するのよ姉さん!!」

するとキンジが避けた先でレティシアに当たつた。

そしてまあどうなるかと思えば・・・こうなる。

「やりましたねえ!!」

「こつちの台詞だ!!」

「負けないわよー!!!」

お互い水の掛け合いをしていた。

すると何処かで・・・何やら声が聞こえた。

「おい、あの子スゲエ美人だな！」

「ああ、胸なんか超でけえし!!」

「一体何処のグラビアアイドルかなあ!?!お近づきになりてえ!!」

そう言う声が聞こえた。

「何だ？」

キンジは何だろうと思ってその人だからの方に向かった。

そしてそこで目にしたのは・・・。

「ねえねえねえねえ?何処から来たの!?!」

「何処のアイドルですか?できればサインと電話番号を!!」

「困ります!!私はそう言うのじゃなくてですね!?!」

それを見てキンジは・・・思い出してしまった。

「??!」

「あ・・・あいつは!?!」

嘗てお金持ちの学校にある生徒の護衛任務に就いていた時に知り合った女性。

長い黒髪

美人と言われるほどの顔立ち

何よりも目に映るのは巨大な・・・胸。

赤い水着を着ているが胸の谷間が大きく見えていた。

そしてそのスタイルの良さに・・・ヤバいと思った。

「ここは・・・逃げ」

キンジは直ぐに逃げようとする・・・後ろから・・・声が聞こえた。

「遠山・・・キンジ・・・君？」

「!!」

ぎくうとキンジは冷や汗垂らしながら後ろを向くとその女性を・・・

見てしまった。

「やっぱり遠山キンジ君!!」

「よお・・・久しぶり・・・だな・・・『初音ヶ丘』・・・」

キンジを見てうれしがるその少女の名は『初音ヶ丘 優衣』

嘗てキンジが潜入していた高校『一桜学園』の・・・クラス委員長であると

同時に・・・初音ヶ丘財閥の・・・御令嬢であった。

プールで胸の大きい人が飛び込んだら・・・こうなるわな。

「やっぱり遠山キンジ君ね！」

「うん、言ってる初音ヶ丘と言う少女はキンジ目掛けて・・・抱き着いてきた。」

「?!?!」

深如の事にキンジはやばいと直感で理解した。

何せ彼女の胸部装甲は紫と直角でありのに色々とムチツとした体つきを

しているのだ。

然しだからと言って太っているわけではなくスタイルがしっかりと

整っているだけあって更にヤバいと思ってるがもう一つヤバい事が加わった。

それは先ほどまで初音ヶ丘に言い寄っていた男性たちの・・・殺意の籠った・・・視線であった。

「何だよあの男は！」

「あんな美人と知り合いかよ!!」

「俺達の方が良いはずなのに!!!」

周りの男性陣は不服な様子でキンジを睨みつけていたが・・・更に事態は

やばいほうに移った。

「キンジさ〜くん。どうしたんですかって・・・誰ですかその人は!」
「ちよつとアンタ姉さんがいながらナニしてんのよ!」

キンジの様子を見に来たレスティアとレティシアがやってきたのだ。

「遠山キンジ君。この子達は?」

初音ヶ丘がレスチア達を見てそう聞くとキンジは自己紹介した。

「ああ、紹介するよ。こっちの金髪の方は『レスティア・J・ダルク』。それでこっちの銀髪の方は『レティシア・J・ダルク』。今俺の家に居候してんだ」

「へえ・・・居候・・・ですか・・・」

初音ヶ丘がそう言うくとレスティア達を見てこう紹介した。

「お初めまして、『初音ヶ丘 優衣』と申します。キンジさんのクラスメイトでよくシテモライマシタ。」

そうニコリと笑う優衣を見てレスティアもこう紹介した。

「初めまして、レスティアと言います。キンジさんの身の回りの世話をヨクシテイマス。」

お互い何やら意味深な笑顔をして数秒後・・・事態が・・・動いた。

「遠山キンジ君を譲ってくださいますか?」

「イヤです。」

「……………」

「遠山キンジ君（キンジさん）!!」

すると二人はキンジの両腕に抱き着いてこう聞いた。

「どちらと遊びたいの（んですか）!!」

キンジに向かってそう聞くがキンジは今それどころではないのだ。

「（こいつらの胸が当たって色んな意味でやばいってえの!!）」

そう思っている中男性陣はと言うと…………。

「何で…………何であの男の周りにあんな美少女達が!」

「然も巨乳と爆乳が揃いも揃って!!」

「□□□□ええええええ!!!」

等と嫉妬の炎を燃やしていた。

まあ…………無理ないかもしれないけど。

するとレスティアがある物を見てキンジに向かってこう言った。

「キンジさん! あっち行きましょう!!」

そう言つてキンジを引っ張るように向かった。

「ちよ、ちよつと待って下さい!!」

そう言つて向かつた場所は……。

「何だここは？」

「ウオーターズライダーですよ？」

「いや、見たらわかるわ!!」

ウオーターズライダーである。

「つうか何で初音ヶ丘がここにいるんだよ!?!お前自前のプールぐらいあるだろうが!!」

キンジはそう言つて初音ヶ丘を指さすと初音ヶ丘はこう返した。

「あら知らないの?ここつて『初音ヶ丘財閥』が運営しててね、

私はモニターとしてお父様が特別に招待させてくれたのよ?」

「……マジで?」

「ええ、マジですよ。」

初音ヶ丘の言葉を聞いてキンジはマジかよと思つていたがああなとも思う

自分がいたのだ。

「(そういうや優衣の家って確か主にレジャー施設の設備投資だったな。)」
そう思えば納得だなと思っていると後ろで何やら声が聞こえた。

その内容は・・・。

「それじゃあどつちがキンジと先に滑り降りるかでじゃんけんするわよお?」

「ええ・・・良いですよ。」

レティシアは何やらあほらしいなと思いつながらレスティアと初音ヶ丘の
じゃんけん勝負の審査員になってしまった。

当の本人たちは本気であるのだが。

そして暫くして・・・。

「私の勝ちのようですね。」

「くう!!」

レスティアが勝ち、初音ヶ丘が負けたのだ。

・・・どう転んだとしても一緒に降りれるのに。

それが最初か後かの違いなだけなのにとキンジはそう思っていた。
するとスライダーの見張り人がこう言った。

「それでは男女カップルの方々には密着して降りてくれなのじゃあ」

何やら聞いたことのある声でしたがキンジは気のせいだと思っていたが
現実はどう．．．甘くなかった。

「キ、キンジ!?!」

「またかよ．．．夜桜」

何と今度は夜桜がまたもやいたのだ。

然も水着を着て．．．。

「お前．．．バイトか?」

「う．．．うむ、そっちは．．．遊びか?」

「まあ．．．色々あつてな。」

キンジと夜桜はお互い幾つか言葉を交わした後でレスティアと．．．初音ヶ丘を見て
こう思っていた。

「ああ．．．また増えてるのじゃ。」

夜桜はそう思っていた。

そしてウオーターズライダーの最上部に着いたら．．．。

レスティアがキンジの背中に．．．抱き着くかのような体勢になった。

「!!」

「良いですか? キンジさん」

キンジはレスティアが耳元でそう囁くのを聞くとヤバいと思っていたが無情にも・・・スタートしてしまった。

「きゃああああ!!」

レスティアは面白そうにしながらも悲鳴を上げてそのまま・・・プールに飛び込んだ。

「ぷふああ・・・面白かったですね? キンジさん!」

「あ・・・ああ。」

一方のキンジはやっと終わったかと思つていたがすぐそこを見て初音ヶ丘が手を振っているのを見て・・・またかと思つた。

今度は初音ヶ丘が前になりキンジは彼女を支える役目になったのだが・・・
またもやキンジにとっての危険が迫つた。

それは・・・。

「ん、遠山キンジ君・・・当たってます・・・よ。」

「いやいや、確かに手には当たっているが意味深になるぞ!!」

その言動はと思つているとそのまま二人は・・・降りて行った。

「きゃああああ!!」

そのまま降りて行つたが・・・ここでミスが起きた。

それは・・・。

「ゴホゴホ!!?!?・・・大丈夫かって・・・どうし」

キンジが初音ヶ丘に何かあつたのかと聞く前にキンジの胸に・・・

飛び込んできた。

「ちよちよちよつとお前どうしたんだ!!」

キンジがそう聞くと初音ヶ丘は・・・小さい声で・・・こう言った。

「水着・・・取れたのです。」

「へ・・・ハアアア!!」

キンジはそれを聞いて驚くが今はそれどころではなかった。

キンジの体にびつちりとくつつくかのように胸がキンジの体に

密着しているのだ。

「(だああああ!!ヤバイヤバイヤバイー!!!)」

キンジはそう思いながら初音ヶ丘の水着をくつついたまま水に沈むような感じを探した。

火花が散るのは何も陸だけじゃあねえぜ!

「おい、大丈夫か? 初音ヶ丘?」

キンジはやつと水着を取ることが出来た後に彼女の壁になりながらも守ることが出来てほつと(あのままだと色々とヤバかったからね)した後にそう聞くが

当の本人はと言うと・・・。

「・・・何で襲わないのよ。」

「はあ?」

「!!何でもありません!!」

初音ヶ丘は何やら意味深なことを小声で言うがキンジには聞き取れなかったようだ。

すると何やらアナウンスが聞こえた。

『ご来場の皆様にお知らせがあります。本日は『東京ウォーターアイランド』に

お越しくださいませありがとうございます! 本日は特別企画として大会を

開きます!! 見事1位を獲得した選手には・・・『沖縄旅行ペアご招待5泊6日』の旅

行をプレゼントいたしま〜す!!』

それを聞いた全員が何やら目の色を変えてそっちに向かつて行った。それを聞いたレスティア達はと言うと……。

「行きましようレティシア!!」

「ええ行きましよう姉さん!!」

姉妹揃って行くのを見送ったキンジはと言うと……。

「どうする?」

初音ヶ丘にそう聞くと彼女はこう答えた。

「私は遠慮します。またあのような珍事に会いたくないですしそれに……」

「?……!!?」

「こうやって二人つきりになりましたから遊びましよう」

そう言いながら初音ヶ丘はキンジの腕をしっかりと掴みながらそう言うときんじは

それに驚いていた。

何せキンジの右腕は現在彼女の胸にすっぽりと包まれてしまったからだ。

「いや……あの……その……だな……」

キンジはどうしようかと必死で考えようとしていた。

……自分の為に。

「あ、一夏。」

「おお、唯依。お前も参加するののか?」

「そんな訳ないよ。私はここで見るだけでいい。」

「そうか。」

そう言つて一夏は唯依の隣に座つた。

本来なら男女共同の企画であるのだがこれは違うのだ。

何せ……。

「さあ、第1回! 『東京ウォーターアイランド』水上障害物レース、開催です!」

司会のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプすると大胆なビキニから大きな胸が零れそうなくらいに揺れていた。

それによるものなのかそれとも単純にレースの開始を喜んでなのか……恐らく前者だと思うが会場から男性の拍手と声援が送られた。

「……男の人つて。」

「アハハ……何も言えねえ。」

唯依の軽蔑するかの言葉に一夏は悲しい事に弁護すら出来なかった。

このレースに参加する人間は自由であるのだが何故か全員女性であった。

本来なら参加は男女自由であるのだが受付にて『お前空気が読めよ!!』的な無言の笑みと言う名の圧力により退けられたのだ。

・・・何とも悲しい事だ。

「さあ、皆さん！参加者の女性陣に今一度大きな拍手を!!」

ワアアと巻き起こる拍手の嵐にレース参加者は手を振ったりお辞儀したりして応えたが・・・何事にも例外はよくある。

例えるなら・・・。

「レティシア、体を倒すのお願いします。」

「OK。」

レスティアとレティシアである。

お互い何があつても良いように念入りに準備体操をしていた。
そしてもう一人・・・いた。

熱心に準備体操をしている・・・女性が一人。

サングラスを着け、髪もポニーテールにした・・・女性がそこにいた。

「・・・絶対に勝つ。」

何やら誰も近づけさせまいとする・・・狼のような・・・殺気で・・・満ち溢れていた。

そして誰もそこに近づこうともしなかった。

その光景を離れて見ていた一夏はと言うと・・・。

「・・・なあ、唯依。俺あの人見たことがあるような」

「・・・大丈夫よ一夏。私も・・・分かったと思う。」

一夏と唯依がお互いそう言うその後ろから・・・声が聞こえた。

「お、一夏じゃねえか。こんな所で何やってんだ?」

「え?」

そう言う声が聞こえたので後ろを振り向くとそこにいたのは・・・。

黒い髪。

凛々しい顔立ち

平均よりも低めの背丈。

そう、彼こそが千冬にとって初恋の男性。

『龍浪 響』である。

「何だかむかつく台詞が出たような感じがするんだが気のせいかな?」

気のせいだよって言うか地の分読むなお前!!

「どうしたんだ響兄？」

「ああ、良いんだよ一夏。何か言わなきゃいけないような何かを感じてな。」

響は一夏にそう言うのと唯依は一夏に対してこう聞いた。

「ねえ、一夏。この人は？」

「ああ、そう言えば知らなかったよな？唯依、この人は『龍浪 響』さん。

千冬姉の……トモダチだよ。」

「何でカタコト？」

「アハハ……。」

一夏は唯依の言葉に対してどういえばいいか迷ったのにこう言われた。

もしここで姉の初恋の人になって言葉を暴露すれば……自分の明日は棺の中で

あろうと確信していたからだ。

「そそそ、そう言えばどうしたの響兄！どうしてここに！」

そう聞くと響はこう答えた。

「ああ、友達がな。『せっかく誘った彼女がこれねえからこれ

持ってつてくれ!!』なんて言ってるさあ。」

「最初は袖香を誘ったんだけど……。」

「『今日は臨時の仕事でこれなくなっちゃったよー!!』 ; ω ; ;)』」

「……つて顔文字付きで送られてな。それで急遽千冬を誘ったんだけど……どうした一夏?」

響がそう聞くと一夏はこう聞いた。

「それって……千冬姉には……言ってますん……よね?」

「当たり前えだろう。」

それを聞いて一夏は……ほつとしていた。

もしありのままを聞いていたら……矢張り棺の中だなと確信したからだ。

そして暫くするとまた……聞きなれた声が聞こえた。

「……でいいんですか?」

「まあな。あいつらの応援しなきゃな。」

そう言う声が聞こえて（一人は知らないが）きたので振り向くと

そこにいたのは……。

「よう、一夏。」

「ああ、キンジ……さん……?」

一夏はキンジの隣にいる人を見て……こう思った。

「ダレ?」

これだけであった。

レースで商品を取るのには楽じゃねえ!!

「お初めまして、私この『東京ウオーターアイランド』のスポンサーをしております『初音ヶ丘 強道』の娘『初音ヶ丘 優衣』と申します。」

初音ヶ丘はそう言って恭しく自己紹介をしていると唯依もこう自己紹介した。

「これはこれは、私は『御剣重工 篁技研』所長の娘『篁 唯依』と申します。」
そう言うのと初音ヶ丘がこう言った。

「あらあら、『篁技研』と言うと佑唯様のご息女ではありませんか。ISにおけるスー
ツ開発に起きましてわが社を推薦してくれたことにはこちらからお礼した時以来です
ね。」

「いえいえ、こちらこそ『モンドグロッゾ』東京大会における土地提供に伴い
御剣を選んでくれたことに感謝いたします。」

何やらお互い仰々しいが自己紹介をしていた。

「・・・何だこれは？」

「俺達何見せられてんだ？」

一夏とキンジは二人の言葉を聞いて全然分からなかった。

如何やら二人は顔なじみのようであった。

それから暫くした後に一夏はキンジにある事を聞いた。

「それで、彼女とは一体どういう関係何です?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、俺はあいつが通っている学校の生徒の一人の護衛任務しててな、その時に世話になったんだが・・・何でこうなったんやら。」

最後に頭を抱えながらそう言ったキンジを見ていた一夏であるが響は

その光景を見てこう言った。

「青春だなあ。」

爺臭いぞと思うぞ。

まあ他の観客はと言うと・・・。

「おい、あの女の子たちスゲー美人だよなあ。」

「ああ、二人とも胸でかいし可愛いし。」

「あれ、あそこにいるのって『織斑 一夏』じゃねえ?」

「え、じゃああの黒髪の短髪の子って彼女!」

「それじゃああの黒髪長髪の爆乳の美女はまさかもう一人の男の彼女!!」

「嘘だろう!! あんなさえない奴のかよ!」

「けど、二人とも鍛えててカッコいい！」

「クソ!!あの二人が走る姿を見たかったなあ!!?!」

等と僅かな煩惱を口走っているメンツがいたがまあ・・・良いでしょう。

『それでは・・・ルール説明をします!!』

そんな中でも司会のお姉さんはルール説明をしていた。

『この50*50mの巨大プールの真ん中にあるバルーンで出来た

浮島にありますあのポ○モンに出てくる『ミジユマ○』のぬいぐるみを取った

選手が優勝です!』

「これ、著作権に違法してないか!!」

一夏、キンジ、響が揃いも揃ってそう言った。

・・・まあ、気にしない。

『なお、コースは円を描くようにして中央の島にへと続いていますが途中途中で障害物がありますし、妨害もOK!!皆さん賞品の為に頑張って下さるい!!』

そう言う選手が全員位置に着いた。

そして・・・。

『それでは・・・よーい、スタート!!』

パアンとピストルの音が鳴り響くと一斉にスタートした。

「甘いわよ!!」

「そうはいきません!!」

レティシアとレスティアは開始早々に妨害してきた選手を弾き落としてから向かった。

「このくらい訳ありません!!」

「そう言う事よ!!」

二人はそう言いながら進んでいった。

そしてもう一つの方では・・・凄い展開となった。

「そん!!」

「甘い」

そう言つてサングラスを着けた女性は妨害チームをちぎつては投げちぎつては投げを繰り返しながら進んでいった。

因みに客席で見えていた一夏と唯依はと言うと・・・。

「・・・間違いねえな。」

「うん・・・見間違いじゃあ・・・なかったね。」

「・・・ハア・・・」

その光景を見て間違いなくあの人だと確信した二人であった。

一方、レスティア達はと言うと・・・。

「うりやあああ!!」

ラリアットを仕掛けてきた妨害ペアに対して二人はそれを・・・。

「はい、お終い。」

レティシアはそう言つて足元を蹴つて落とした。

「私達は何度でも蘇るー!!!」

然し落とした女性たちはそう言いながら上がろうとすると・・・。

「アンタたち、これなあんだ？」

そう言つてレティシアが手元にある・・・水着のトップ部分を見せつけた。

「きゃあアあ!!」

『おおおつと!!まさかの水着強奪!!同じ女としてやるのは

まさに外道だあ!!』

「喧しいわよ!!」

司会のお姉さんの言葉に対してレティシアは怒りながらそう言った。

そのまま彼女たちは小島を渡つた後にそのまま幾つもの障害物を超えて行った。

第二障害物は放水であるがそれは・・・。

「そこです!!」

レスティアの指示で難なくクリア。

第三障害物にあるはずれ付き小島は。

「其れでしょ?」

レティシアがそれを見分けて難なくクリア。

第四障害物のヌルヌルの坂はと言うと。

「この勢いならば!!」

サングラスを着けた女性が勢い其の儘に滑り上っていった。

「あと一つ!!」

三人はそう言つて向かった先にいたのは……。

『おおっと……ここで先のオリンピックピックにおいて

レスリングメダリスト『木崎 原名』選手と柔道銀メダリストの

『岸本 純奈』選手が行く手を立ちふさがった……!!まさか

この二人が出場しているとは私も夢にも思いませんでした(＊、＼、＊)!!』

「いや、それ絶対嘘だろ!!」

司会のお姉さんに向かって三人はそう言った。

そしてそれを見ていた初音ヶ丘はと言うと……。

「支配人……何考えてんのかしら……(＃。＼。＊)」

「どう考えてもあれ『サクラ』だろうが。」
キンジも同意見であった。

そんなことにも露知らずにメダリスト二人が立ち向かってきた。

「ウオオオオ!!」

「もう!!(っ)まで来て!?!」

「ちよつと、これ反則でしょう!!」

レスティアとレイシアが疲れた表情でそう言っていた。

このままでは押し切られると思ったその時に・・・サングラスを着けた女性は
レスリングメダリストに向かってこう言った。

「確かに貴様は身一つで世界を勝ち取っているが・・・まだまだ甘いわ!!」
そう言つて襲い掛かってきた女性を・・・

腕を掴んで梃子の応用で投げ飛ばした。

『『『ええええええええええええ!!!!』』』』

あまりの事に観客全員が悲鳴を上げた。

あの細い体のどこにそんな力があるのかと思つていと・・・

柔道銀メダリストが横から出てこう叫んだ。

「シャアアアアアア!!」

「ではそいつ任せた。」

そう言って二人を置いてそのまま走り去っていった。

「あああ!!」

レストティアはその光景を見て慌てているとレティシアが飛び込んで抑え込むとこう言った。

「行って、姉さん!!」

「レティシア・・・分かりました!!」

そう言ってレティシアも走り出した。

そしてお互いが僅差で島に近づいて・・・。

「勝つのは私だあ(です)!!」

二人同時に飛んで僅差で・・・千冬が掴んだ。

「おおっと！勝ったのは『織斑 千冬』だああ!!」

司会のお姉さんのお姉さんの言葉と同時に二人はそのままプールに落ちた。

「プはあ!!」

そしてレストティアが出てきて辺りを見渡すと・・・。

「あれ？千冬さんは??」

そう言って周りを見てみると・・・。

「やべえ!!」

響が突如プールに潜っていった。

「(しまった!水着が!!)」

最後の最後に千冬の水着が・・・取れてしまったのだ。

「(えーい、こんな時に!!それもこれも一夏のせいだ!!」

あいつがあんな水着を薦めなければ!!)」

いや、最終的に選んだのアンタだから。

千冬はそう思いながら水着を探していると・・・。

「(響!!)」

千冬は響を見て何でだと思っていると響は千冬の体を掴んで・・・

上に向かった。

「ぶはああ!!」

響達が水上から出てくると響が千冬に向けてこう言った。

「お前どうしたんだよ!?!泳ぎ上手かったんじゃないのかよ!?!」

そう聞くと千冬は・・・恥ずかしそうにこう答えた。

「だって・・・水着・・・取れて」

「・・・え？」

響はそれを聞いてから胸元にある人形を見た。

確かに肩ひもが・・・無かった。

「マジでかよ。」

そう言つて響はどうしようかと思つていと・・・。

「「「「きやああアアアアア!!!」」」」

観客から悲鳴が聞こえた!

その理由は・・・。

「お、おい千冬!!」

「仕方がないだろう!!こうしなければ・・・見えてしまうから／／／／／」

千冬が響を抱きしめているからだ。

然も直に触れているため胸にある小さな何かが当たっていることも

分かつてしまった。

子の光景だけを見ればまるで恋人同士が抱きしめあつているかのような

光景であるのだが如何せん千冬の立場を考えればこれか間違ひなく

スキャンダル物である。

「いや・・・だからって・・・／／／／／／／／」

響は慌てていると千冬が響の目を見て・・・少し赤面して・・・こう聞いた。

「響は私じゃあ・・・イヤか?／／／／／／／／」

そう聞くと響は少し恥ずかしそうにであるが・・・こう答えた。

「いや、その・・・イヤと言うと・・・まあ・・・偶には・・・な／／／／／／／／」

響は頭を掻きながらそう答えた。

すると千冬が小声でこう言った。

「そっか・・・／／／／／／／／」

この光景を見て一夏はと言うと・・・。

「・・・やつと・・・1歩進んだって・・・所かな。」

一夏はそう言いながらその光景を見ていた。

因みに『沖縄旅行5泊6日の旅』はちやんとゲットして響を誘った。

プールが終わって。

あの後はまだ大変であった。

何しろあの織斑　千冬が正しく恋する乙女的な表情をしていたのでそこにいた

野次馬たちは大慌てで情報を聞き出そうとすると初音ヶ丘がこう言った。

「今回彼らは我が『東京ウオーターアイランド』の宣伝のために演出してくれたそっくりさんですので本人たちとは何の関係もありませんので。」

そう大慌てであるのだがしっかりとそう言ったのだ。

まあ、そんなウソを信じる人などいないようであったが次の一言で

全員態度を変えた。

「もし今のを信じてくれたのであれば正式オープン時にはここにいる全員に無料パスポートを受け付けさせますわ。」

その一言で信じるに変えたのだ。

・・・何て現金なんだと思うところである。

まあ、そう言う助け船がある事により千冬のスクヤンダル騒動は一通りの

終息を迎えたのだ。

まあ、当の本人はというと……。

「ウウウウウウウウ……／＼／＼／＼／＼／」

顔を真っ赤にして体育座りをしていた。

あの時は仕方がない（今更何言ってるの？）とはいえ、上半身を響と

密着してしまったため恥ずかしくなっちゃったのだ。

然しそんな中で一夏は命知らずなのかどうか分からないがこう言いだした。

「まあ、良いじゃないか千冬姉。響兄と結果的には距離が縮!!」

「貴様アアアアアア!!」

千冬はいきなり何か言いかけた一夏目掛けてアイアンクローを決めて大声で

こう言った。

「お前があ!!お前がアアアア!!」

「いたたたたたたつたあ!!千冬姉痛いつて!!頭が何かいつちやいけない音があぎや

あアアアアアア!!」

ゴリゴリと頭が何かび割れそうな音がしていた。

「……大変そうですね。」

レスティアはその光景を見て乾いた笑いを零していた。

「まあ……姉弟が仲いいのは良い事じゃねえか。……俺も」

キンジは二人の様子を見て少し．．．羨ましそうな表情をして見ていた。そしてそれから暫くするとやっと千冬の攻撃から解放された一夏は．．．。

「一夏！大丈夫!?!」

「．．．．．。」

ピクピクンと小さく痙攣するだけで失神していた。

．．．何やら一夏の顔にモザイクがかかっているようにも見えるが。するとキンジに向けて誰かがこう言った。

「遠山キンジ君！こっちこっちー!!」

「おお、初音ヶ丘か。」

キンジは初音ヶ丘の方に向かうと初音ヶ丘はこう言った。

「何とか終わったわ。後、支配人には今回の『サクラ』の件についても問い質しておいたし千冬さんにもあのチケットを渡しておいたから。」

「悪いな。」

キンジはそう言うのと初音ヶ丘はキンジに向けてこう聞いた。

「ねえ、遠山キンジ君。」

「うん?」

「今日って．．．時間．．．ある?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、まあねえけど。」

そう言おうと初音ヶ丘はこう言った。

「其れだつたら少しだけ……一人きりで……その？」

何やら初音ヶ丘は何か言いたいようであつた。

するとそこから一夏が横からこう言った。

「皆、予定ある？」

そう聞くと全員首を横に振つた。

すると千冬は思い出す様にこう言った。

「ああそうか、今日はあの日か」

そう言おうと響は千冬に向けてこう聞いた。

「何がだ？」

そう聞くと一夏はこう答えた。

「今日は篠ノ之神社でお祭りがあるんです。」

「何も変わってないな、ここは」

篠ノ之神社においてそう言う少女がそこにいた。

長い黒髪をポニーテールにし、きつめの表情をした・・・同い年の女の子に

比べたら圧倒的に大きい胸を持った少女。

篠ノ之 箒が板張りの剣道道場にいた。

現在はここは定年引退した警官が善意で剣道道場を定期的に使っているようであった。

すると箒はある名札を見て物思いにふけていた。

「昔は私と千冬さんと一夏だけだったな。」

そう思いながら箒は頭に付けている紅い簪を手に取ってそれを見ていた。

それは先の臨海学校において姉である天災（誤字でならず）篠ノ之 東が箒用に製造した第3世代 I S 『緋燕』である。

すると箒はもう一つある物をカバンから取り出してそれを見た。

それは・・・。

「まさか私を引き取ってくれる企業がいたとはなあ。」

それは箒の I S の武装などを受け持つこととなった企業のパンフレットであった。無論夏休みが始まって直ぐに向かい、今では社員全員が箒を知ってくれている。

篠ノ之 東が一から製造した I S だけあって各国の企業から色々と申し込みがあつたのだが箒はその中で日本で且つ、箒自身が決めた会社であるのだが

その会社の箒を任せたいと願つた理由が印象的であつたのでそこに選んだのだ。

すると箒は生徒手帳を出してある写真を取り出して広げた。

そこに映っていたのは……。

「姉さん。」

東、千冬、和の両親と私服を着た箒、一夏、和が映っていた。

すると箒は東の映っている写真に指でなぞるとこう言つた。

「姉さん。貴方の夢を共感してくれる会社があつたぞ。」

「そこはまあ……色々と面白い人たちがいて……夢があつて……

楽しいところだから。」

「何時姉さんとその人を会わせたいなあ。」

そう言いながら箒はパンフレットを見ていた。

そこには深堀した顔つきの男性が笑顔で巨大なロボットをバックに

撮影していた。

そしてこう書かれていた。

『夢に真つすぐ羽ばたけ!! 我ら中小企業連合!!』

親じゃないけど・・・ちゃんと見ているからね。

「箒ちゃん、ここにいたのね。」

「あ、雪子叔母さん。お久しぶりです。」

この人は箒の叔母にして現在この篠ノ之神社の運営を任されている

『佐竹 雪子』である。

「すいません。つい懐かしくてウロウロとしていて、夏祭りの手伝いをしなくてはならないのに。」

「(∇、▽、*) ウフフ、良いのよ。ここは箒ちゃんの実家だからゆつくりしなさいよ。6時まで暇なんだからお風呂にでも入ってすつきりしなさい。」

そう言つて雪子はそのまま出て行こうとすると箒はこう聞いた。

「あの、雪子叔母さん!」

「?」

何かなど思っていると箒はこう聞いた。

「雪子叔母さんは・・・ISを・・・どう思ってますか?」

そう聞くと雪子は暫くして・・・こう答えた。

「そうねえ．．．東ちゃんの．．．夢かしら？」

「夢．．．ですか？」

「そう、あの子って結構お転婆に見えて素直でいい子だけどちよつとねえ．．．冒険心が強すぎだったのよねえ。」

「けどあの子は夢を叶えるために必死に努力していたのも事実よ。」

「材料一つとっても手に入れるためにガラクタをひっくり返してでも作ってたわ。」

「あの子は宇宙の．．．その先をずっと見ていたのかもしれないわねえ。」

「ま、向こうから来たんだけどね。」

そう言うのと雪子は今度こそ立ち去った。

「夢．．．か。」

そう言うて箒はそのまま風呂場にへと向かった。

序に言うが本来禊とは井戸水汲んで行うものなのだが長続きするためにお湯にしているのだがまあ、合理的と言えば合理的である。

そして風呂から出てきた箒は純白の衣と袴の舞装束に着替え、金の飾りを装って鏡越しで自分を見ていた。

「・・・まるで自分じゃないみたいですよ。」

そう言うとき雪子は笑いながらこう答えた。

「あらあら何言ってるの？今鏡に映っているのは間違いなく自分よ。・・・
本当に綺麗になっちゃったわねえ。」

そう言いながら雪子は伝統通りに皿に入っている口紅を箒の唇に塗った。

そして仕上がった後に雪子は箒に向けてこう言った。

「それじゃありハ―サルしましょつか。」

そう言うとき箒は扇と・・・刀を持った。

これは篠ノ之流剣術でもある『一刀一閃』から振って『一刀一扇』におけるものである。

そして舞が行われた。

扇を右へ左へ揺らしながら一回転して刀を抜いた。

そして刀を扇に乗せてゆっくりと空を切っていく。

正に『劍巫女』・・・関西にあるとある武装巫女育成学校の通り名の如くであった。

「・・・以上です。」

「まあまあまあ!!よかったわ箒ちゃん!!ちゃんとここを離れても舞の練習していたのねえ。」

雪子は満面の笑みを浮かべながらそう言った。

「これなら本番も大丈夫ね!!さあ!準備しなくちゃ!!!」

そう言つて雪子は立ち去るのを見て箒はもう一度自分の顔を鏡で見た。

「さてと・・・頑張らなくてはな。」

そして舞を始めると中小企業連合の若いメンバーの何人かと社長が

来ていたのだ。

それを見ていた箒は少し恥ずかしそうであるが・・・嬉しがつていた。

踊りが終わったと箒は壇上の裏側に向かった。

「佃さん！来ていたのですね!!」

「まあな。箒ちゃんが頑張るところを若い連中が見たいと煩くてな」

そう言つて男性は後ろにいる20代前半の青年、女性陣を見てそう言つた。

「さてさて、お分かりの方もいるかもしれませんが彼こそ拙作の作品

『カオス・ストラトス』において登場したあの宇宙大好きおじさんこと

『佃 航平』である。

箒の機体の設計思想が自身が模索する宇宙探索に相応しいと直感した佃は猛アピールしてゲットしたのだ。

すると佃は箒の肩を叩きながらこう言つた。

「前にも言つたが折角の里帰りだ。会社に戻ったらまた大変だけどゆつくりと英気を養うんだぞ。」

そう言つた後に佃は社員たちの下にへと向かつて行つた。

佃にとつて箒は自分のもう一人の娘の様にも感じていたからこそ大切に育てたいと思つているようであった。

それと祭りを楽しむことも追加してやるらしい。

見送つた後に部屋に戻ろうと思つていると・・・声が聞こえた。

「おおい、箒!!」

「……へ?」

箒は聞き覚えのある声を聴いて振り向くとそこにいたのは……。

「い……一夏!!」

「よう、箒。様になっていたぞ。」

一夏がそこにいたのだ。

すると少し離れた所でそれを見ていた佃がこう聞いた。

「君は『織斑 一夏』君だよね?」

「あ、はい。貴方は確か『中小企業連合』の……」

「其れなら話が早い。『佃 航平』だ。箒ちゃんの機体と本人の面倒を

見ることとなっている。これからも箒ちゃんの事を学園でも宜しく願

してくれないかな?」

「ちよ! 佃さん!!」

箒はいきなりの事で戸惑っていると一夏はこう答えた。

「大丈夫です! 箒はちゃんと見ていますから。」

「な……なあ(*、 厶、*)!!」

箒はそれを聞いて赤面になると佃は箒を見て口パクでこう言った。

頑張れ。

「!! // // // // //」

それを聞いて箒はもう茹蟄になったがそのまま佃は立ち去って行った。

「何だったんだろうな?・・・箒?」

一夏は箒を見ると・・・真っ赤になった箒に驚いていた。

「おいしいいい!箒、大丈夫か(* 旦、*)!!」

「// // // // // // // // // // //」

これが暫く続いたとき。

花火と告白。

一方、キンジ達はと言うと・・・。

「あいつら何やってんだか？」

「アハハ・・・何でしょう？このデジャブ感は？」

キンジとレスティアがそう言っている中ある二人は別のところで別の話をしていた。

「あらあ、その下着ってやつぱり『パッション・クイーン』でお買いに？」

「そうなんですよ。やはりこっちのほうが可愛いですし。」

「確かにね、大きすぎると特注だったり野暮つたいタイプが多いですから

ああ云うところがちようど良いですよね。」

唯様と優衣が何やら特定の人間特有の言葉（貧乳が聞いたら血の涙流すが）でのお話のようであった。

そんな中でキンジは優衣にこう聞いた。

「なあ、初音ヶ丘。お前ここに来てよかったのか？」

「？」

「だってよ。何かあったらどうするんだよ?」

そう聞くと優衣はこう返した。

「まあ、確かに家からは『ボディガードを付けなさい』って言われたけどこう言ったら納得してくれたわ。」

「?」

キンジは何だろうと思っていると優衣はこう答えた。

『遠山キンジ君がいるから大丈夫』って言ったら納得してくれたわ。」

「いやお前何言ってるんだ!」

何故か彼女のボディガード擬きに認定させられていた事にキンジは抗議しようと思っていると優衣はこう言った。

「大丈夫よ、ちゃんと依頼料は払うし其れに……」

「それに……何だ?」

そう聞くと優衣はこう答えた。

「貴方に……謝りたかったから。」

「謝るって……何だよ?」

キンジに向かってそう言うと優衣はこう続けた。

「……貴方のお兄さんについて。」

「!!」

キンジはそれを聞いて驚きの余りに目をきつくすると優衣はこう続けた。

「貴方のお兄さんが事故に遭って・・・貴方が責められてるって聞いて私達・・・計画してたことがあったの」

「・・・計画」

何だよと聞くと優衣はこう答えた。

「貴方とご家族をヴェルカのご実家である『ロシア』に少しの間

雲隠れさせるって計画。」

「ヴェルカの実家・・・何だこの嫌な予感は何？」

キンジはそれを聞いて少し身震いするが優衣は更にこう続けた。

「ヴェルカの実家がどういう所か知ってるわよね？」

「まあ・・・ロシアの『国防大臣』だったよな。」

「そ、貴方は彼女の護衛を兼ねて1か月以上の短期入学してたわよね。」

「まあ・・・あいつがしつこかった思い出が強いがな。」

「まあ・・・あの殿方はねえ・・・。」

キンジと優衣は少し冷や汗掻きながらその男について思い出していると

優衣はこう続けた。

「それでね、貴方とご家族を一端ロシアに送った後に私達は力を合わせてネットに書き込まれている誹謗中傷を書いている人達を裁こうと考えていたの。」

「お前らだと・・・碌な目に遭わないだろうな。」

キンジはそう思っているが防人達がやった事を思い出すと・・・。

「(あれ、其れだつたらこいつらの方がまだマシだったような気がする)」

どうせ罰せられるにしても彼女たちの方がまだやり直しが効くなと思っていたがもう遅いの一言に事尽きるであろう。

何せ四肢の内のどちらか、又は全部が欠損されたり顔の一部が無かったり、賠償金を支払わせるためにヤクザに頼んで藪医者によつて内臓や血液を盗られたり社会的、精神的、肉体的に文字通り『骨までしゃぶりつくす』と

言つたとおりにしたからだ。

まあ事実、キンジの家族には大金がゴツソリと手帳に送られたのだが。

そんな事思っている中優衣は少し寂しそうにこう言つた。

「それでヴェルカから準備良しの連絡が届いてさ始めようと思つてたら貴方、他の人達に保護されたつて聞いて嬉しかった半面・・・力なさが分かつたの。」

「結局私達は親の力で全部やってたんじゃなかつて思つてね。」

それで今度は裏方に回つて貴方のお兄さんの誹謗中傷の書き込みサイトを

停止させたりと色々やってたんだけど心が晴れなくてね。」

「今だから言います。『遠山キンジ君・・・ごめんなさい。』」

そう言つて優衣が頭を下げ、謝るとキンジは少し・・・恥ずかしそうに

こう言つた。

「別に大丈夫だよ。」

「え？」

「確かに色々と合つて自棄になりかけたけど其れでも俺がこうやって未だ武偵でいられるのは俺の周りにいる幼馴染や仲間がいたから。」

それにとキンジは優衣の顎に指を添えるような感じ上にあげらせてこう言つた。

「お前らが俺を助けようとしてくれた。それだけで嬉しいさ。」

そう言つてキンジは優衣に向かつて笑うと優衣はそれを見て赤面になつて・・・こう言つた。

「ねえ遠山キンジ君・・・私・・・」

「？」

「わたし・・・貴方の事・・・」

優衣が何か言いかけるが・・・邪魔が入つた。

「おおい、キンジさ〜ん。そろそろ行きましょ〜。」

一夏が向こうからそう言った。

「ああ、それじゃあ行くか?」

「え……ええええええ……」

優衣は何やら少し力が抜けながらそう答えた。

そこからは色々と楽しんだ。

出店で色々と楽しんだ。

優衣は始めてきたのか凄く喜びながら祭りを楽しんだ。

因みに箒は千冬と響を見て……。

「マジですか?!?!」

目を見開いてそう言ったそうだ。

そしてもうすぐ花火が始める時刻の中キンジ達は今、神社裏の林にいた。

「もうそろそろですよ〜」

一夏が全員に向かってそう言った。

そして出た先は……。

「ほう……こいつは中々だな。」

「でしよう?」

キンジはそう言つて……空を見上げた。

何せ背の高い針葉樹の中でぼっかりと穴が開いたように開いているからだ。

ここを知っているのは千冬と東、箒、一夏、和の5人だけであつたが

今回はそうではなかつた。

「それにしても俺達も知つて良かつたのか？」

響が千冬に向けてそう聞くと千冬は地面に座つてこう言つた。

「まあな、ここに來させるつてことはそれだけ……お前を信用してるつて

事だからな／＼／＼／＼／＼／

「お……おお／＼／＼／＼／」

千冬と響はお互い赤面になつて語つていた。

因みにそれを初めて見た箒と唯依はと言つと……。

「あれが千冬さんなんて誰が信じるんだ？」

「……無理だろうね。」

お互いそう言つた。

そして暫くすると花火が上がる直前に箒は何やら一夏に何か言おうとした

光景を見てキンジは黙つていようと思つていと優衣がキンジに顔を向けると

こう言つた。

「遠山キンジ……いえ、キンジ！」

直感が頭を過つたそうである。

金一の報告。

あの騒動から暫くして……。

「ここですか？キンジさん？」

レステイアはそう聞くながら黒い服を着てそう聞いた。

「ああ、ここだよ……。」

キンジも黒い服を着てそう言っていた。

「それにしても結構お墓があるわねえ。」

レテイシアも同じ服を着てそう言った。

そして暫くして着いたのが……。

「ここだ。」

一つの墓石である。

そこにはこう書かれていた。

〈遠山金四郎景元〉

「これがキンジさんのご先祖様の。」

「まあな、そしてここから……ここだ。」

キンジはそう言いながら墓石の横にある名前の列の最後尾を見た。そこに書かれていたのは……。

〈遠山金一 2009年没 享年19〉

「……後で新しい所にも行かなきゃな。」

そう言つてキンジは墓の前に花とお供え物のお菓子を添えて祈つた。

金一の墓は防人が手配し、墨田区にある無縁寺『回向院』に特別に名付で吊つてくれたのだ。

無論そつちにも行くがキンジはある理由でここ、巣鴨にある本妙寺に來ていたのだ。

「さてと……次はあそこだな。」

そう言つてキンジが次に向かったのは……浅草である。

浅草にはキンジの祖父母が住んでいる家がありそこに向かつているのだ。

そして着いた場所が……。

「何だかサザ○さんみたいな家ねえ。」

「お前よく知つてんなア。」

キンジはレティシアのツツコミを聞きながら扉をノックすると扉がスライドして開いた。

「おお、キンジじゃねえか!!何だ急に!?!」

着流しに半纏を重ね着した老人

キンジの祖父『遠山 鐵』である。

「只今……ちよつと話したいんだが飛鳥達は?」

そう聞くと鐵はこう答えた。

「おお、お前が話したいことがあるつつうから入れたけど……へえ……

成程ねえ……。」

鐵はキンジの後ろにいるレスティアとレティシアを見て……

エロ爺その物の表情でキンジに向かってこう聞いた。

「お前も中々隅に置けねえなあ?どっちがキンジのコレだよ??」

そう聞くながら小指立ててそう聞くとキンジはその指を……。

「痛ててててててて!!」

「何言つてんだ爺ちゃん。」

思いつきりへし折るかのように握りながらそう答えた。

「ちよ、何してんですかキンジさん!!」

レスティアはキンジを止めるようにレスティアは引き離そうとすると

キンジはこう言った。

「大丈夫だ、レスティア。爺ちゃんはこれぐらいじゃあ怪我すら無しねえよ。」
然しそれでもキンジから離そうとすると鐵はこう言つて怒鳴つた。

「そうだぞ！ そうだぞ！！ こんないい匂いのする別嬪さん2人も連れてくるからお前学生」

「おや、キンジ。お帰り」

「ほおぶ!!」

「ええええええええ!!!!」

鐵が何か言いかけた瞬間に女の声をした誰かが鐵をぶつ飛ばした。

無論それをまじかで見えていたレスティアは更に驚いていたが。

然し老婆『遠山 セツ』は何事もないかのようにこう続けた。

「あれまあ、可愛い女の子が二人も。キンジも隅が置けないわねえ。」

平然にそう言うあたり矢張り遠山家である。

「只今、ばあちゃん」

「・・・お帰り、中に入りなさい。金花の『揃い踏み』があるよ。」

そう言つてセツはキンジ達を家の中に入れようとするレスティアはと言うと・・・。

「あのう・・・キンジさん？」

「？」

「大丈夫なんですか?・・・お爺さん」

そう聞いてレスティアは崩れたブロック塀の下敷きになっている・・・
鐵を見るとセツはこう答えた。

「ああ、大丈夫よ。また直せばいいからね、ブロック塀」

「いえいえ、お爺さんはどうなるんですか!?!」

「大丈夫よ。ああ見えて何十発も飛ばされてるから慣れてるわよ。」

「・・・・ええええええ・・・・。」

レスティアは何やら人外超えたナニカを見るような感じで二人を見ているが
レティシアはと言うと・・・・。

「・・・・なんつうバケモノよ。」

そう言ったそうだ。

「よう、来てたか? 飛鳥、雪泉姉」

キンジは飛鳥達を見てそう聞くと二人はこう答えた。

「うん、店番とかで疲れたよ〜。」

「私は今受験勉強中です。」

そしてキンジは半蔵達を見た後に少し大きなバツクを置くとキンジは全員に向けて……真剣な表情でこう言った。

「皆に話さなければいけないことがあります。」

「何じゃ?……キンジ君」

半蔵は何事だと思っているとキンジはセツに向けてこう言った。

「ぼあちゃん、爺ちゃんも連れてきてくれない?大事な話があるんだ。」

「……分かったよ。」

セツはキンジの表情を見てそう言うのと鐵を連れてきた。

無論……無傷だ。

そしてキンジは鐵が座るのを見るとキンジは全員に向けてこう言った。

「皆に話す事なんだけど……兄さんの事で」

「そうだよ!!遠山君!!じつちゃん達に言わなきゃいけないかったじゃん!!」

「そうですよ!それに金一さんは!?来てるんですよね!!」

飛鳥と雪泉がそう聞くとキンジは袋からある物を出した。

それは……。

「これって!？」

「まさか……!!」

飛鳥と雪泉はそれを見てまさかと思つて見たものは……。

血だらけの服と金一が使つていた拳銃『ピースメーカー』であつた。

「遠山君……これって……」

飛鳥はまさかと思ひながら聞くとキンジは意を決してこう答えた。

「ああ……兄さんの……遺品だ。」

「!!!」

二人は揃いも揃つて息を呑むとキンジはこう続けた。

「これから話すことは全て……真実だ。」

そしてキンジは全てを話した。

金一が『イ・ウー』に潜入し、何をしてきたのか。

そして『イ・ウー』の戦いで敵のトップに戦いを挑んだこと。そしてキンジの目の前で金一が・・・死んだことも。

全てありのままを話した。

全員がそれを聞いたが・・・飛鳥は俯いたままこう言った。

「・・・嘘だよ。」

「飛鳥さん。」

「嘘だよ・・・嘘だよ・・・嘘よ!!」

「何で!? 何で金一さんが死ななければいけないかったの!?!」

「折角また会えたのに!!」

「また一緒に・・・一緒に・・・昔みたいに・・・また・・・。」

飛鳥が泣きながらそう言うが遂に言葉を詰まらせて泣きじやくると

キンジは・・・飛鳥を抱きしめてこう言った。

「と・・・遠山君!?!」

「・・・泣けよ。」

「へ・・・?」

「今は泣いても良いんだ。」

「俺がこうやって抱きしめてやるから・・・雪泉姉もさ。」

「飛鳥と一緒に……泣いて良いんだ。」

するとキンジも静かにだが頬に……涙を流していた。

そして飛鳥達も……決壊するかのように涙を流した。

「ウワアアアアアン!!!」

「アアアアアアアアア!!」

二人が泣く姿を見て両家の祖父母達は……。

肩を震わせていた。

するとセツは遺品の中にある写真を見つけるとキンジに向けてこう聞いた。

「キンジ……これは……」

「ああ……兄さんの胸ポケットに入ってたよ。」

そう言つてセツが見ていたのは……。

血まみれの写真の中で未だ赤ん坊の頃のキンジを中心に撮つた……父や母、

そして金一がいる……写真であつた。

「あの子……未だ持つてたのね。」

セツはそう言つと……涙を流してこう言つた。

「お帰り……金一。」

セツの言葉に全員が涙を流し始めた。

すると鐵がいきなり立ち上がると部屋から立ち去る寸前にキンジに向けてこう聞いた。

「キンジ、……金一は最後に……何て言つて逝つたんだ？」
後ろ姿であるがそう聞くとキンジはこう答えた。

「……『アリガトウ』……つて。」

「……そうか。」

そう言つて鐵は部屋から出て行くところに向かつた。

そこは屋根であつた。

屋根に上つていつた鐵はそのに座り込むと空を見上げてこう言つた。

「金一……金叉には会えたか？」

そう言つと鐵は……鼻声で……泣きながらこう言つた。

「馬鹿野郎が……俺よりも……先に逝くたあ……爺不孝者だな……」

お前はよ!!」

最後に齒を食いしばりながらそう言つて鐵は人知れずに……泣いていた。

嘗ては息子の死を……、そして今……孫の死を聞き……青く美しい空を恨むかのように……泣いていた。

涙流してそして笑顔。

そして暫くして・・・。

「悪いな、飛鳥、雪泉姉」

キンジは目を真つ赤にしてそう言うが二人はと言うと・・・。

「ううん。それどころかありがとうね、本当の事を教えてくれて。」

「ええ、私達は今だ生きていると言ってくれても良かったのにそれでも告げてくれた。本当に感謝します。」

飛鳥、雪泉も同じように目を真つ赤にしてそう答えた。

すると上から何やら物音がしたので何だろうと思つていと・・・。

「おお、終わったか。」

「爺ちゃん・・・」

鐵が何やら段ボール箱を持ってやってきた。

「何だよそれは？」

キンジがそう聞くと鐵はこう答えた。

「そいつはな・・・金叉の遺品だよ。」

「・・・父さんの」

キンジはそれを聞いて開けるとそこにあつたのは・・・

「これって。」

「あいつが使っていた拳銃だよ。」

大型の拳銃。

大柄で二m越えの大男であつた父親が愛用していた拳銃。

『デザートイーグル』であつた。

それを持つとキンジはこう言つた。

「重いな。」

「当たり前だろうが！どう考えてもあいつ以外は宝の持ち腐れだよ!!」

鐵がそう言うのとキンジに向けてこう言つた。

「キンジ、今日からこいつはお前の物だ。」

「・・・はああ!!」

キンジはそれを聞いて驚くと鐵はこう続けた。

「お前・・・何やらトンでもねえ事件に首突つ込んでしまつてるようだな？」

「!!」

キンジはそれを聞いて驚くが鐵はこう続けた。

「わわわ・・・私・・・キンジさんが・・・そう望む・・・のでしたら／＼／＼／＼」

「ちよつと!!何で私まで巻き込むのよ!!!」

「知らねえよそんな事!!」

レティシアがキンジを問い詰めながらこう言った。

「あんたあの『初音ヶ丘』からキスされたくせに未だ姉さん狙ってるの!？」

「『』『』『』『』『』『』『』『』『』『』」

それを聞いて全員目を丸くすると・・・飛鳥を中心にしてこう言った。

「ちよつと!!遠山君!!それってどういうこと!!」

「一体どこの誰なんですか!!」

「全くこやつは・・・」

「それでそれでキンジ君?どんな女子なのじゃ!？」

「アンタは黙つとれ!!」

「グフ!!」

「あらまあ、キンジったらまだそんな子がいるのねえ。」

「・・・どんな美人だ?」

「ハイハイ、貴方は黙ってくださいね。」

「ポハアア!」

飛鳥や雪泉、黒影、半蔵、小百合、セツ、鐵が思い思いにそれを聞いた。
問い詰められているキンジは頭を抱えてこう思っていた。

「・・・勘弁してくれえ。」

そう言う声は何処からともなく響き渡った。

訪れは唐突に

あの後キンジは国連軍に戻った後、もう一度基礎からやり直していた。

無茶苦茶なやり方で強くなるのではなく自分の限界を見極めつつ戦い方を模倣していた。

無論レスティア達もそれを応援するような形で見守っている。

そんな中キンジは今ある所にいる。

そこは……。

「(……未だだな。)」

国連軍の修練場である。

未だここにいるのかと思っているが今は違う意味でここにいた。

その目的は……。

「(あの時から夢見る……あの場所に。)」

金一の死を仲間たちに告げてからという物ある夢を毎日の様に見ていたのだ。

周りが全て黒色

そんな場所にある一頭の……ナニカがそこにいた。

黒い体。

両肩に付いている大きな盾と剣が一对化した武器。

二本足で目の前に立ちふさがっていた。

・・・お前は一体誰だ!!

キンジはそう言うが黒いナニカは何も言わずに黙り込んだままある場所を指さしていた。

キンジはその方向を見てそれを見るとそこにあつたのは・・・。

・・・剣？

白い剣であつた。

それらが幾つもあるのを目にするとそのナニカは・・・大きな咆哮を上げた。

・・・グおアアアアアアアアアア!!!

それが全てである。

それをキンジは意識を集中させてその場所に向かおうとしていたのだ。

「未だだ!・・・後もう少し!!」

キンジはそう思いながら更に集中しているがここで見落としていることが一つ。

・・・あんたそこに入れば誰が来るのか・・・分かつてるよね？

「何やってんだこの大馬鹿がアアアア!!」

「ぎゃふん!!」

唐突に防人が現れてキンジの頭に拳骨を叩き込んだ。きた。

「何するんですか防人さん!!」

キンジがそう言うのと防人はこう言ってキンジに怒鳴った。

「何してるはこつちの台詞だ馬鹿が! お前また何こんな所に

入り浸っているんだ!! もう夏休みも終わりそうだからさっさと家に帰れって

言うか外でレスティアちゃん達と山にでも行つて頭冷やして」

「俺が外に出たらどうなるんか分かってんすか防人さん??」

キンジは防人に向かって・・・ハイライト無しどころかカオ○シと同じ表情で

そう言いながらこう続けた。

「俺が外に出るとねえ、何でだか分からないけど色々巻き込まれるんだよ〜だか

らここで夏休み終わりまで引きこもってたいんですよ〜〜」。

「お前お化けに憑りつかれたのか?」

防人はキンジのその表情に少し恐怖しながらもそう聞くとキンジは・・・。

「お化けならまだマシだアアア!!」

大声で反論してこう言った。

「前にプールに行ったら前に知り合った奴に水着姿で出会って抱き着かれて

挙句にキスされて何の因果か分からないけど幼馴染にバレるわ爺ちゃん達には

冗談半分で『曾孫何時見れるんだ?』何て言うから面倒くさい事この上ない状況になっちまったんだぞ!!どうしてくれるんだああああ!!」

「いや、それって俺よりも普段のお前の生活とやら変わらんないかって言うかお前少し本気で休め。」

防人はそう心配するがキンジは更にこう続けた。

「それに『ザビー』が使えないから精神集中の訓練しか出来ないって何時になつたりや」

キンジが言いかけると防人が・・・アイアンクローをしながらこう言った。

「誰のせいだと・・・思ってたんだこの馬鹿がアアアアアア!!!」

「グオオオオオオオ!!」

「お前が『ライダーシステム』を二人羽織宜しくデヤっちまったせいで『ザビー』の修理でこっちはてんでこ舞いなんだぞ!!どう責任取るんじやおるわああああああ!!」

「す・・・すみましえんでしちゃああああ」

現在『ザビー』は前の戦いの後にシステム不良が見つかったため修理中なのだが普通の修理とは違い二つの『ライダーシステム』のデータが使用されたため

時間がかかるのだ。

「全く、さつさと帰って家の掃除ぐらいして来い！良いな!!?」

「はい・・・分かりました。」

キングは防人からのアイアンクローから解放されてからそう言った後に急いでレストイアたちを呼んで荷造りさせて次の日に帰ることとなった。

午後国連軍基地から出てキングが学園島に着いた時にはもうすぐ

夜になろうとしていた

そんな中でも矢張り暑い。

何せ夏真っ盛りなのだから。

「・・・暑いなあ。」

「はい・・・早く休みたいですウウ。」

「このままじゃアタシたち・・・溶けちゃいそうよ〜。」

三人ともそう言いながらダラダラと・・・歩きながら自分たちが暮らしている部屋に向かった。

「・・・やつと帰ってきたな。」

「そうですね。」

「早く入りましょ〜。」

レティシアは早く休みたいようなので早く部屋に向かおうとすると・・・。

「あ、キンちゃん。」

「げ・・・白雪。」

キンジはその姿を見てイヤそうな顔になった。

何せあの拉致事件の後から暫くは会わない様に色々工夫してきたのだ。

それに彼女たちに対する接触はご法度のはずじゃないのかと思っていたが白雪は何

やらソワソワした様子でキンジに対してこう言った。

「あのね、キンちゃん・・・そのね・・・話したいことが」

「あるなら端的に伝えろ。今回は幼馴染に免じて報告させないしその首に

付いているチョーカーの事も含めて目を瞑るから早く」

「何ですかその態度は!!」

キンジが白雪に対して素っ気ない態度をしてそう言うと言った白雪の後ろから

大声が聞こえた。

「折角姉さまが来て下さったのにその態度は何ですか!!」

恥を知りなさい!!!」

「こら、粉雪!」

「粉……雪……!!」

キンジは白雪のその言葉を聞いて思い出した。

五芒星の家紋が入った風呂敷包みを背に背負い。

赤い唐傘を日傘にした……黒髪セミロングの目がきつめの少女。

「お前……『粉雪』か!」

「ええ、そうですよ。」

粉雪という少女がそう言うのと彼女はキンジを見るなりこう言った。

「やっぱりお姉さまを誑かしていたのは貴方だったんですね!! 悪しき武偵

『遠山キンジ』!!」

「……はああああ?」

キンジ達はその言葉を聞いて……何じやそりやと思っていた。

占いの内容は未だしれず。

「こんな遅くまで遊び歩くとはお姉さまの教育上不衛生です!!こんな夜遅くまで複数の……女の……人と……きいいいイイイい!!」

何やら粉雪と言う少女はキンジの状況にいらいらとしていたようであるがキンジは自身の携帯の時刻を見てからこう言った。

「いや、未だ6時前だぞ。そんなに遅くはねえだろ。」

キンジはそう言つて時間を見せると粉雪はこう言つて反論した。

「何をおっしゃつてんですか!お姉さまは本来門限は5時迄!!そして8時には就寝すると言う星伽の決まりがあるのですよ!!それを遠山様を思って我慢していたのに何ですかその態度は!!!」

「……5時つてアンタ小学生でもまだ遊んでるわよ。」

レティシアは呆れるようにそう言うが粉雪はこう返した。

「他所は余所!家は家です!!さあ、早く家に入れて下さい!!!」

「……とんでもなく自己中な奴だなおい。」

キンジはそう言つてそのまま家にへと入つていった。

「お茶をどうぞ。」

「ありがとうございます。」

レスティアは粉雪に対してココアを出した後にキンジがこう聞いた。

「それで、何の用だよ？」

キンジは白雪に対して睨みつけるようにそう聞いた。

ここで説明するがあの事件の後、白雪の首には電流が流れる

特殊なチョーカーが付けられておりキンジ達に接近したり攻撃したりすると

電流が流れるようにしてあるのだが教職員の許可次第では流れない様に

なっているのだ。

だが若し契約（つまりキンジ達と交わした約束）を違えれば電流が流れるようになって
いる。

すると白雪がキンジにある事を言った。

それは……。

「そ……それがねキンちゃん。私じゃなくて……粉雪が用があるの。」

「粉雪が？」

そう聞くとキンジはココアを飲んでいる粉雪を見ると粉雪は姿勢を正してこう言った。

「はい、私の『托』がお告げを告げたので今日中に伝えようと思ひまして。」

「『托』・・・ねえ。」

キンジはそれを聞いてやれやれと思つていた。

『托』とは星伽が持つ占術の一つであり十代前半までの幼い巫女が

時々夢を見た時に使う物である。

「・・・それで・・・どんな内容なんだ？」

そう聞くと粉雪はこう答えた。

「それではお答えします。」

「遠山キンジさん、貴方に対して『黒』に関する二つの出来事が起こります。」

「・・・黒？」

「はい、一つ目は黒猫。」

「その黒猫が突如変化して黒い着物を着たダレかになりました。」

「そしてそれが突如黒い霧に覆われると誰かわかりませんが

槍を持った男性が出てきました。」

「そしてその槍を持った男性が消えると今度は二人の人間が出てきました。」

「二人は大男、もう一人は黒い長髪の男性。」

「その人たちが貴方の名前を呼ぶとその人たちは混ざり合つて一つの・・・ナニカが現れました。」

「ナニカつて・・・何だよ？」

キンジはそれを聞いて何だと聞くと粉雪は・・・自信なさげにこう答えた。

「分かりませんが、ですが・・・これだけは言えます。」

「遠山キンジ様、貴方に対して・・・何やら途轍もない事が起こると思つてください。」

そう言うのと粉雪は白雪を見てこう言つた。

「さあ、姉さま。帰りましょう!!」

「えええ、ちよ・・・ちよつと待つて!!」

粉雪は白雪を引つ張るように外に出て行つた。

それを見たキンジはと言うと・・・。

「黒・・・あの夢も黒だったな。」

キンジは何か関係があるのかと・・・考えていた。

第6章 『絶対狂槍！光と闇の剣炎舞!!』 始業式。

8月31日、羽田空港。

多くの人間が賑わうその中にある一団がそこにいた。

男性が3人、女性が1人である。

5人ともそれぞれ色々な衣服を着ているが何かが・・・違う。

すると一人の少女が男性に向けてこう言った。

「若、明日は始業式ですので早めに部屋の準備を。」

すると男性がこう答えた。

「ああ、そうだな。色々と厄介なことが起こりそうだからな。」

そう言うのと男性が懐から何やら写真を出すと・・・ニヤリと笑ってこう言った。

「さてと・・・お前は俺のお眼鏡に敵うかな?・・・」

『遠山キンジ』

そう、写真に写っていたのは・・・キンジであったのだ。

そして彼らは人ごみに紛れて姿を消した。

・・・何かが起きそうな予感のみを残して。

次の日。

この日は学園島全体で始業式が行われた。

無論キンジ達もそうである。

キンジ達武偵校では世界初の武偵校・ローマ武偵校の制服を模して作られた

『防護制服・黒（ディブイーザ・ネロ）』と呼ばれる全身黒づくめの・・・

制服を着て方陣状に並べられたパイプ椅子に座っていた。

・・・見た感じ軍隊か・・・極道が着るようなそんな感じになっていた。

そして各国においてはランクごとにそれぞれ違う色のネクタイを付けるという
儀礼もあつた。

国によって違うが日本ではそうやっていた。

先ずEランク＝黒

Dランク＝白

C ランクⅡ黄色

B ランクⅡ赤

A ランクⅡ青

S ランクⅡ紫と決められていたのだが何事にも例外は存在する。
それは……。

「げえ!! 『遠山キンジ』!!」

「お前か……アリア。」

キンジを見てイヤな顔をしたアリアを見てキンジは興味なさげにそう言う
アリアはキンジを見ると……。

「ガルルルルルルルルル」

まるで猫の威嚇みたいな感じで睨みつけていたがキンジはある所を見て……
こう言った。

「俺を睨むな。自業自得だろう?」

「……」フン

アリアはキンジのその言葉を聞くも耳にも入らないような目つきでキンジから
目を逸らした。

因みにキンジが見ていたのは首に付いてある……チョーカーと両手首に

付いてある黄色のリストバンドであった。

チヨーカーを白雪が付けている者と同じものであるのだがもう一つのリストバンドはと言うと・・・現在のアリアのランクである。

『イ・ウー』に加担しようとしたのではなくシャーロックホームズの手を取って何かしようとしたことが分かり以下の罰則が付いた。

①今回の世界的犯罪組織の加入に伴い武偵校に情報を提供せず剩え独断で事に当たったためアリアのランクを3つ下げる。

②実弾及び遠山キンジに対して殺害する意思があったため遠山キンジに対する攻撃をした場合、チヨーカーから電流が流れるようにすること。

然し①を公でやった場合、武偵校所か武偵局としての信用失墜に関わるために彼女の武偵における今までの活躍を内々的に取り消すことで表向きとしては

Sランクであるのだが受けられる依頼はCランクまでとした。

それだけだと意外に軽そうに思うだろうがこれは今のアリアからすれば最悪な状況なのだ。

武偵校生はランクによって依頼だけではなく移動も限られているのだ。

例えばEランクならば武偵校周辺

Dランクなら学園島一帯

Cランクならば東京一帯

Bランクなら関東一帯

Aランクならば日本一帯

最後にSランクならば世界と言った感じで分けられておりこれは武偵としての当人の実力を評価しての物である。

そんな事になってしまった為、アリアは母親の裁判の際に使われる証拠を手に入れることが出来ないという現実とシャーロックホームズがキンジに倒されたという二重の現実の重さに一時は自暴自棄になってしまったのも言うまでもない。

現在は大人しくなったがそれと同時にキンジに対しては嫉妬と同時に対抗心と憎しみが積み重なりキンジを正に不？戴天の仇と言う風に見ていた。

そんな中で武偵校校長でもある「緑松 武尊」が全員に向けてこう言った。

「それとですね、ここ最近における治安悪化を考慮し、海外から

中国武偵校の生徒さんも来られてますのでまず一層の働きを期待しています。」それを聞いたキンジはそつちの方を向くと……。

「なあ……!!」

ある一人の男性を見て驚いていた。

服は違うがあれは間違いなかった。

黒の短髪

切れ目。

そして何よりもあの姿。

一瞬でしか見たことがなかったが間違いのないと思った。

「あいつは……『イ・ウー』の……!!」

キンジはそう思いながら彼を見ていた。

また厄介なことになりそうだなと思いつながら。

「や、遠山君。久しぶりだね」

「ようキンジ、ダブらねえとは相変わらず優等生だな。」

始業式が終わり外に出ろうとすると不知火と武藤がキンジを訪ねてきた。

この二人、態度も……見た目も正反対だ。

不知火は清潔感を醸し出しておりちゃんと正装していたが武藤は違っていた。

何せ無精ひげが生えまくりで夏休みボケなのかどうか分からないが服装も酷いものであった。

「おう、一人とも。つうか武藤お前、ちゃんと髭ぐらい剃れよな。」

そんなんだからお前モテないんじゃないのか？」

そう言うのと武藤は・・・怒り狂いながらこう言った。

「ウルセエヨ!!お前は良いよなあ、レスティアちゃんのご飯を毎日食べてさ!どうせ一緒に夏祭りにも行ったんだろうよー!!」

そう言うのと不知火は何やら思い出したかのようにこう聞いた。

「ああ、そう言えば遠山君。聞きたいことがあるんだけどいい?」

「?」

キンジは何だろうとっていると不知火は一呼吸おいて・・・こう言った。

「この間『東京ウオーターアイランド』で超乳美少女とデートしてタッて

本当?」

「ぶふおオオオ!!」

キンジはそれを聞いて唾を思いつきり吐くが不知火はこう続けた。

「中等部で『架橋生(アクロス)』している子から聞いたんだけどね、遠山君の隣で凄
い綺麗で胸が大きい女性と腕組んで歩いているのを見かけたって聞いたけど

「どうなの？」

「え……いや……その……な……。」

キンジはそれを聞いてしどろもどろになっているが武藤がキンジの肩を叩くと……般若真つ青の表情でこう言った。

「手前キンジ!!俺が寂しく家で過ぐしている間にお前は超乳美人と

プールでつてお前どんだけ胸のだけえ女の子と親しいんじやあー!!」

「知るかよ！俺だつて気づいたらつて言うかそいつは前の潜入護衛任務で転校した学校でよく勉強を教えてもらったんだよ。決してそいつとは……

その……。」

キンジは言い返そうと思いつき出すときにあれを思い出して……しまった。

『私は貴方の事が好き。』

そしてあの時のキスと……胸の……感触。

「……………// // // //」

「うん、黒だね。」

不知火はキンジの表情を真実だなど確信したが武藤はと言うと……。

「畜生がアアアアアア!!何で何時も何時も何時も

こいつだけがアアアアアア!!」

武藤は頭を抱えてム〇ク宜しくの表情になっていた。

すると不知火はキンジに向けてこう言った。

「まあ、君の事なら『修学旅行Ⅰ（キャラバンⅠ）』でも大丈夫だと思うけど出来るだけ女の子関係の整理はした方が良いよ？これ以上何かあったら僕助けられそうにないからね。」

不知火の言葉を聞いてキンジはそうだなと思っていた。

実は武偵校では2学期に2回修学旅行があるのでこれは生徒間でのチーム編成の最終確認と同時にチェックなのである。

手ごろな武偵がいればイタリアにある国際武偵局からの引き抜きが行われるからだ。

現に幾つもの武偵校でも同じようにイタリア武偵局に就職した生徒も少なくない。

キンジは今後のチームの事を考え乍ら・・・学校から出て行った。

路地裏での決闘。

「ウオオオオ!! すごいええ!!」

始業式、各国の重鎮や企業、民間人が揃って見ているのは……。

「綺麗!」

「可愛いなやつば!!」

上空を飛行しているIS部隊と地上で踊っている武偵校生である。

これらは学園島でのイメージアップ（大体は武偵）を目的とし、専用機乗りがこれを行うのだ。

今年は更に多くの人間がそこにいた。

その目的はと言うと……。

「あ、『織斑一夏』だぞ!」

「『東丈 刃更』もいるぞ!!」

二人の男性IS操縦士見たさである。

雑誌でしか見たことがない客にとっては見ることが出来る機会なのである。

そんな中で写真を撮ろうとしている人が……武偵に捕まっていた。

「いててててて！何しやがる!!」

「スイマセンがこちらでは写真は現金だと書かれているはずですが・・・!!」

「煩い！俺は客」

「喧しいわ!!!」

「げふう!!?」

ぶん殴つて大人しくさせた。

そういう所でイメーჯダウンに繋がるんだろうなあと思つていと・・・。

「お前が遠山キンジカ?」

後ろから声が聞こえた。

するとその人間はこう言つた。

「裏路地に来イ。」

それだけ言つて何処かにへと消えた。

キンジは何があつても良いように武器を構え乍ら裏路地を歩いているとある男性がそこにいた。

キンジよりも背が少し高い程度の赤髪の男性が槍を持って裏路地のごみ箱の上で座つているとキンジをみてこう言つた。

「おお、来たカ?何セああいう所は性に合わなくてサ。こういう所が性に合ウ」

そう言いながらキンジを見てこう続けた。

「お前、俺と戦工。」

「何でだ？」

キンジはそれを聞いて何言ってるんだと思っていると男性はこう続けた。

「お前現役相手に勝ったんだろウ？お前の実力がどれほどなのかを大将は

知りたくてネ。」

そう言うとうと男性は槍を壁に置かせてこう言った。

「ああ、大丈夫だ。今日は確か『水投げ』ってつう遊びなんだ口？遊びに武器は使わね

えヨ。」

そう言うって拳法家の様に構えた。

水投げとは元々は校長の母校で始まった『始業式の日には誰に水をかけても

大丈夫』だと言う習慣を武偵風に改造され『徒手でなら誰が誰に喧嘩

吹っ掛けても良い』とされたのだ。

なんでまたそんな風になったんだと思いたいところであるがまあしようがないと

思っつて諦めよう。

そしてキンジもファイティングポーズをとって・・・先ずは男性が攻撃した。

「おらあ!!」

「おうわー！」

男性の鋭い蹴りに対してキンジはそれをさっと避けてから・・・その足を掴んで振り投げた。

「おおツト。」

然し男性は壁を蹴って体勢を整えると・・・壁を走りながら殴りかかった。

「シユオ!!」

「甘エ!!」

キンジはその攻撃を受け止めて・・・殴り返した。

「ぐぼー！」

男性は咄嗟の事で当たるも壁を利用して飛び立つて地面に着地した。

「・・・へえ・・・『雅??内埃カ? (ヤルジヤネエカヨ)?』」

途中男は中国語でそう言う口から血を吐き出してこう言った。

「さてト・・・你真的要?么做?? (本気出すか)」

そう言うって男性は両腕を奇妙な構えで構えた。

右手を後ろに左手を前にした。

「来吧, 我?走 (さあ、行くぜ)!!」

男性は中国語でそう言うと言おうとキンジ目掛けて突出してきた。

先ずは左手で張り手のような感じで突きだすのでキンジはそれを避けるも……。

「いっばおー!!」

隠してた右手でキンジの右腹に掌底を叩きつけた。

「仍然（まだまだ）!!」

男性はそう言いながらキンジに肘打ちをお見舞いさせようとする

キンジはそれを右手で防御し左手で攻撃してきた。

「甜（甘い）!!」

男性はそれを分かっていたのか顔面に殴りかかるのを寸前で避けるも

キンジの狙いはそれではなかった。

「?……!!」

男性は突如頭に何かが掴まれた感触がしたので後ろを向こうとすると……

引き寄せられるようにキンジに目掛けて行きそのまま……頭突きを咬ました。

「!!」

あまりの事に男性はフラフラになって離れようとする……膝から崩れた。

すると男性はキンジに向けてこう言った。

「まさか……頭突きとハ……恐れ入ったぜ。」

「こつちも・・・ヤバかったがな。」

キンジもそう言つて右腕と右腹を摩つていた。

すると男性はフラフラになりながらも路地裏に入つていきながらこう言つた。

「俺の名ハ・・・李 藤駿（リ・トウシユウ）」

「また縁があつたら・・・今度ハ・・・自分ノ・・・獲物デ・・・

やりあおうぜ。」

そう言つて男性はそのまま路地裏にへと入つていった。

それを見ていたキンジは小さな声でこう言つた。

「もうやりたかねえよ。」

そう言つてキンジは路地裏から出て行つた。

暗躍と準備。

「もう、こんなに怪我をしてー!!」

「済まない。」

キンジはレスティアから文句を言われながら治療を受けていた。

李 藤駿から受けた傷の治療なのだが打撲程度ならよかったのだが・・・
そう言うレベルではなかった。

「全く、右腕打撲に右わき腹内出血だなんてどんな相手だったんですか!」

「いや・・・俺もまさかここまでとは思ってもいなかったんだよなあ。」

現在キンジは再生カプセルの中でそう言っていた。

そしてそれが終わると部屋から出たキンジに対してレスティアはこう注意した。

「とにかく、今日はその腕は使わないで下さいね! 夕ご飯は万が一を考えて消化の良
い物を用意いたしますから!!」

そう注意した後にレスティアはか細い声でキンジに向けてこう言った。

「・・・心配・・・するじゃ・・・ないですか。」

それを聞いてキンジは少しバツが悪そうな顔で頭を掻いていた。

そして治療室から出て行くとキンジはレスティアに対してこう言った。

「ありがとうな、レスティア。それにしてもあいつは何の目的で俺に戦いを挑んだんだ？」

キンジはレスティアにお礼を言いながらそう考える中……少し離れた場所でレテイシアが腕を組んでこう答えた。

『曹操』よ。」

「……『曹操』？」

キンジはレテイシアの言葉を聞くとこう答えた。

「今度は『三国志』の末裔かよ……。」

「そ、あんたも見たんでしょう？あいつを」

「……まあな。」

キンジはレテイシアの言葉を聞いてそう答えた。

事実、キンジは僅かであるが『イ・ウー』にて見たことがあるので

そう答えたのだ。

するとレテイシアは曹操についてこう説明した。

「あいつは『藍幫（ランパオ）』って言う中国大陸の裏社会の一員で『山西』を

中心に表向きは航空産業、裏では外国の裏物を売買する組織『鳳蓮』の首領よ。」

「とにかく頭がいいだけじゃなく人を見る目も十分に合つて自身も武勇を誇っているわ。」

「だからこれだけは言えるわ。．．あいつが何の理由もなしに部下をあんたに嫉めるような事はしないはずだから気を付けなさいよ。」

レティシアはそう締めくくった。

裏路地の何処かの店。

学園島にはある裏商店がある。

あまり表向きでは手に入りづらい銃弾や武器の売買が出来るので武偵がよく使う店である。

無論教職員も使う為酒が飲める場所もある。

そんな中でキンジと戦ったあの中国武偵『李 藤俊』がそこで床に座っていた。

「以上が俺が戦つて感じた遠山キンジに関することです。」

そう言うのと仮面を付けていた男性が制服を着乍ら酒を嗜んでいた

男性に対してこう言った。

「主、次は私に命令を。遠山キンジの真の実力を見極めさせて貰いたいと。」

「おいおいおい、手前俺じゃあ薬不足ってかよ!?!」

「そこまで入っておりません。ですが・・・武器無しであるにも関わらずに敗北するとは修行不足だなと思っただけです。」

「『高』!!もう容赦しねえ!!ぶっ殺してやる!?!」

「良いでしょう。身の程を弁えさせて」

「止めろお前ら。」

「!!は!!」

二人が武器を取ろうとすると男性の一声でそれが止まった。

そして男性は酒を飲み干すところ続けた。

「『高』、そう言えばあの『緋弾』とやりあつたそうだが感想は如何だ？」
そう聞くと高と言う男性はこう答えた。

「は、武力は大したものですがあれを使いこなすことは出来ない
判断いたします。」

「まだ時期尚早かもしれないな・・・取り合えず要注意だけしとけ。」

「御意」

「李、その悔しさは今とはとつとけ、もしかしたら再戦があるかもしれないぞ。」

「おおー！」

「それで次に戦う相手はそうだなあ・・・。」

男性はそう言いながらある女性を見て・・・こう言った。

「『楊』。」

「ハイ。」

男性がその女性を呼ぶとその女性の姿が露わとなった。

ツインテールにした黒髪の・・・絶世の美女がそこにいた。

見た目のスタイルも正に1級品と呼ばれるほどの美女がそこにいた。

「京都に着いた後奴とコンタクトを取る。内容次第では戦うかもしれないから
気を付けろよ。」

「御意。」

すると男性は全員に向けてこう言った。

「さてと、始めようぜ。『戦争』の準備にな。」

「ははああ!!!」

そう言っていた。

「それでアンタ、これからどうするの?」

場所は戻ってキンジ達サイド。

レティシアがそう聞くとキンジはこう答えた。

「そうだなあ。まあ、取敢えず対策ぐらいはしとかねえとな。」

と言うとキンジは何処かにへと向かって行った。

「どちらに行かれるんですか? キンジさん」

レスティアがそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ・・・アムドにだよ。」

装備（アムド）棟地上1階から地下3階までの4段階になっており下に行けば行くほど腕のいい整備士がいるのだ。キンジはそこから入ってある部屋にへと向かった。

「ええと・・・ここだな。」

部屋には『A210』と書かれていた。

そしてキンジは扉をノックして開けるとそこにいたのは・・・。

「あれ々々。キンジじゃないっすか!? どうしたんすかこんな所で」

作業所でキンジの仲間である『巫神楽 華毘』が・・・胸元が丸見えのタンクトップを着ていた。

「おいお前なんつうもん着てんだよ!」

キンジはそれを見て慌てながらもそう言うと言おうと華毘はこう答えた。

「えええ! こうしなきゃ暑くって仕事できないんすよ!!」

「だったらエアコンぐらいつけるよ!!」

「付けても火花とかで暑いんす!!」

お互いそう言い合いしながらもキンジは頭を掻きながらこう言った。

「もう良いわ・・・仕事の依頼なんだが。」

「おや、何の依頼つすか?」

華毘がそう聞くとキンジは懐からある物を出した。

それは・・・。

「ほほう、『ピースメーカー』に『デザートイーグル』ですか・・・中々の物を出してくるつすね!」

そう、今や兄と父の形見となっている二丁の銃、『ピースメーカー』と

『デザートイーグル』である。

するとキンジは華毘に対してこう頼んだ。

「こいつを俺用に整備してほしいんだ。『ピースメーカー』はリボルバーからマガジン型に、『デザートイーグル』は重量を軽くしてほしいんだ。」

それを聞くと華毘は『ピースメーカー』を見てこう答えた。

「そりゃあ良いつすけど何で『ピースメーカー』をマガジン型にするんすか?

それだったら最初っからそう言うタイプのを買えば良いじゃないつすか?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「確かにそうかも知れねえが・・・頼む。」

キンジは頭を下げてそう言うのと華毘はこう答えた。

「良いつすよ。」

「本当か!!」

「勿論つす!何時もキンジには御贖してもらつてゐるつすからね!!」

そう言いながら華毘が準備している中キンジに向けてこう言つた。

「ああ、そう言えばキンジのお兄さんについてなんすけど」

「!!」

キンジはそれを聞いて少し険しい表情になると華毘はこう答えた。

「飛鳥からもう聞いてるつすから言わなくて良いつすよ。」

「・・・そうか。」

キンジはそれを聞いてほつとしてゐると華毘はこう続けた。

「あたしにも姉がいるんでそう言うのは分かるつすからねえ。・・・ま、もうどうしよ

うも無くなつたときは頼つてくれつすよ?あたしらはチームなんすから」

そう言つた後に華毘は二丁の拳銃に手を付けようとするとキンジは更に

こう頼んだ。

「それとこれもだ。」

そう言うとキンジはもう一つの物をあらかじめ持っていたバッグから出した。

「・・・なんすか？この武器。」

「こいつをだな・・・。」

そしてキンジが部屋から出て行くと華毘はそれをじつと見ながらこう言った。

「珍しい武器つすねえ？」

それは夜色に塗装された・・・バラバラになっている鎌であった。

お寺を見よう。

そして来る9月14日。

修学旅行が始まった。

キンジ達は学校から配られた旅程表を見てみると……。

「おい……これって……」

「完全に思考放棄だね。」

キンジと飛鳥はそれを見て遠い目をしていた。

その内容は……薄い。

場所 京阪神（現地集合・解散）

1日目 京都にて社寺見学（最低3か所見学し、後日レポートにまとめるべし）

2日目・3日目 自由行動（大阪か神戸の都市部を見学すること）

最早旅程表じゃねえよとツツコミをしたいほどである。

そんな中でキンジは携帯のメールを読んでいた。

「?どうしたの遠山君」

飛鳥がそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、男友達にこれを貰った後助言を出してもらってな。何処が良いのかをピックアップアップしてもらったんだ。」

「……遠山君って……京都知っている友達っていたっけ？」

「……まあ……な。」

キンジは飛鳥の言葉に少しよどむような形で答えた。

何せアドバイスしてくれているのが……一夏なのだから。

するとピロロと携帯からメールが来た。

それを開いたキンジが見たのとはと言うと……。

『まず訪れるんでしたら静かな『蘆山寺』ですかね。俺も前に夏に訪れましたが

風情が良くて落ち着きますよ、次に『蓮華寺』。ここで抹茶を飲んで一休みするのも良いですよ。そして何よりおすすめが『仁和寺』。綺麗な絵とかが

展示されていますから心が落ち着きますので行って見て下さい!!』

内容はそう言うのであった。

何はともあれ参考になりそうだし落ち着きそうだからと言う理由でキンジ達はそつちにへと向かった。

先ずは蘆山寺。

「へえ……こいつは中々だなあ。」

キンジはその光景を見て穏やかな表情をしていた。

綺麗な桔梗の花が力強く咲き誇り、周りの緑の木々の影がそれを更に映えさせていた。

「落ち着きますねえ。」

「ああ・・・色々あつた疲れがきれいさっぱりとなくなりそうだけ。」

キンジはレスティアの言葉にそう答えた。

特にこれまでは気を張り詰めるような戦いが多かつたこともありその疲れがなくなりそうな感じであつた。

『紫式部』さんもここで句を詠んでたのかなあ？」

飛鳥はそう言いながらぼやーとしていた。

無論全員同じ気持であつた。

因みに少し離れた場所には桔梗の花で作つた香水が売られており女性陣の殆どが買った。

次に蓮華寺。

「こつちもこつちで風情があるなあ。」

「確かにな、何だか・・・眠くなりそうだ〜〜。」

キンジの言葉を聞いて焰は眠くなりそうな顔でそう言った。

ここは色んな意味で時間が止まったかのような場所であり、然も涼しい風が入りこむため眠気が出そうになつていた。

「確かにね、ここで寝てたら最高だろうねえ。」

「うん……寝ていたい。」

「こつこつとところが人間落ち着くんじやろうなあ。」

飛鳥の言葉に紫、夜桜がそう答え乍ら……抹茶を嗜んでいた。

レスティア達は初めての抹茶に少し怖そうな感じがしていたがキンジが

こつこつと飲ませた。

「お前から乗つて日本人が初めて紅茶を飲む時と同じ感じだろうか？」

それを聞いて確かにと皆そう思つていた。

抹茶と出てきたお茶菓子も全員こ満悦であつた。

そして最後に仁和寺。

「ほう、こつこつちは中々気が引き締まりそうだな。」

「確かに、何でしょうか？ここの雰囲気がそうさせてるんでしょうか。」

こつこつちはどちらかと言えばちゃんとした寺であり仏門関係で言えば厳格である。

そんな中で全員は中にあるであろう絵を見に行くとそこには……。

『ウワアああ……』

綺麗なほど美しい絵が幾つもあった。

正に日本が誇る芸術であると分かるほどであった。

その圧倒的な絵を全員は見入っていた。

「いやあ、それにしてもいい旅だったなあ。」

キンジ達は現在猫のマークがついたカフェで一息ついていた。

「うん！あ、紹介してくれた人には何かお礼をしなきゃいけないね!!」

「確かに、それじゃ何か土産でも買うか?」

飛鳥の言葉に焰もそうだなと答えるもキンジは慌てふためながらこう言った。

「イヤやめとけよ！そいつ京都出身だから、自分がよく見るものとか

買わねえよ!!」

「うむ、確かにのう。」

「それじゃあ・・・私達の依頼・・・1回タダは・・・どうかな?」

夜桜が確かにというと紫がそう提案してきた。

「それだったら良いっすね！それじゃあキンジ！そう言って欲しいっす!!!」

「アハハハ・・・分かった。」

まああるのかどうか分からねえけどなとキンジは華毘の言葉を聞いてそう思っていた。

するとキンジは周りを見てこう言った。

「そーいやあ、何か企画があるのか分からねえがこの店の隣の店で

何か買ってる客が多いな？」

そう言えばと全員それを見ていた。

するとレスティアが何かを見つけた。

「もしかしたらあれじゃないんでしょうか？」

そう言っ指さしたのはチラシでこう書かれていた。

『大好評！本日15時よりシャトンb&シャトン・カフェ合同イベント

☆シャトン・コール☆

優勝者には当日お買い上げのシャトンbの商品全品半額キャッシュバック！』

『・・・これかあ。』

全員それを見て納得するがそれぞれこう言った。

「カップル限定って書いてるけどねえ。」

「キンジって確か動物に避けられるんだったよな？」

「そう言えばそうじゃったな。」

「多分・・・無理。」

「キンジは動物からしたら天敵つすからねえ。」

飛鳥、焰、夜桜、紫、華毘が思い思いそう言った。

そう、キンジは動物に嫌われるのだ。

それも重度の・・・。

それは本人も知ってはいるが矢張り傷つくものだ。

するとレスティアが手を引いてこう言った。

「ですけど・・・もしかしたら記念にはなるかもしれませんがから行きましょ、

キンジさん。」

「「アアアアアアア!!」」

飛鳥、夜桜、紫が大声を上げてキンジが引つ張られるのを見入ってしまった。

それを見ていた焰と華毘は面白そうな様子でコーヒを飲んでいた。

然し彼女たちは知らなかった。

その猫カフェの中にいる1匹の黒猫。
それが・・・粉雪が言った猫とは未だキンジですら・・・知らなかった。

猫にご用心。

『それでは当系列会社特別企画《にゃんにゃんカモン》を始めますう!!』

店員の言葉を聞いて店にいる人たち全員が拍手をするが約1名は……暗い感じになつていた。

「何で俺が……。」

キンジであつた。

動物に好かれずにそれどころか必死に威嚇されたり吠えられたりとされるほど動物に嫌われてるのだ。

一方のレスティアはと言うと……。

「見て下さいキンジさん!猫があんなに!!」

目を輝かせて喜んでいた。

キンジとは正反対でレスティアは動物に好かれるのでこう言うのが好きなのだ。すると店の店員の女性がルールを説明してきた。

『ルールは簡単!1分以内に猫を何匹か来させてその合計数で勝者を決めますが席を立ったり手で猫を掴んだら失敗です。ではいけまへんでえ!!』

『それでは準備宜しいでしょうか?・・・始め!!』

そしてその言葉通りに始まった。

客は全員「おいでおいで」などと猫なで声を出したり口笛を吹いたりして

猫を呼び始めるが・・・猫は警戒心が強く、用心深い生き物なのでそんな程度で初めての人間相手に来るはず等ないのだ。

そう・・・約1名除いては。

「はいはい、こつちですよ〜。」

レスティアである。

彼女の足元には・・・結構いた。

どうやってこさせたのかと言うくらいいた。

「お前・・・やっぱスゲエな。」

キンジはその光景を見て初めて出会った日を思い出した。

「(そういやあ、あの時も猫に囲まれていたなあ。)」

そう思っていると・・・。

「にゃ〜。」

「?」

キンジの足元から猫の鳴き声が聞こえた。

「どうしたんだお前？」

キンジはそう聞くとその猫はキンジの足元にまで行くと……。

「にゃ〜。」

ゴロゴロと喉を鳴らしてすり寄ってきたのだ。

「……え？」

キンジはそれを見て驚いているが暫くするとレスティアは驚きながら

こう言った。

「良かったじゃないですかキンジさん！動物に好かれてるじゃないですか!？」

そう言うときキンジはその猫を恐る恐る撫でようとすると……。

「うにゃ〜。」

自分から頭を出してすり寄ってきたのだ。

「……。」

それを見たキンジはレスティアに対して……泣くような表情で見ていた。

「えー!!どうしたんですかキンジさん！」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「俺……初めて……動物撫でれて……嬉しくて……(´；ω；´)」

「ああ……ですか。」

何ともいたたまれない光景であった。

そして……。

『終了ー!!優勝者はキンジ・レスティアチーム!!優勝者には半額キヤツシユバック券をプレゼントやー!!』

何だか分からないが半ばやけくそな感じでそう言っていた。

するとレスティアがこう言った。

「良かったですね。キンジさん。」

「ああ、そうだな。」

まあ……何とかなつたかなとそう思うキンジであった。

あの店の隣は如何やらセレクトショップだったらしいのでそこで秋や冬用の服を買う事にしたようだ。

全員キヤツシユバック券を使っているので結構買えたと喜んでいた。

「まあ……俺の財布はぼろぼろだな。」

そう言いながらキンジは武偵校生用の口座から自身の金を引き下ろしていた。

無論国連軍から貰った給与金もあるのだがそれは万が一の為に保管することとなっている。

そんな中でキンジはナニカいるなあと、思つて周りを見渡していた。

「?・・・何だ」

そう言う上から・・・ナニカが降りてきた。

「!!何だ・・・お前かよ。」

「にゃ〜。」

あの時キンジの所にやってきた黒猫がキンジの肩に飛び乗つてきたのだ。

その猫はキンジの顔をゴロゴロと擦っていた。

無論それを見ていた飛鳥達は店に電話してみると向こうはこう返した。

『ああ、それやつたらアンタらが引き受けてくれんやろかあ?』

「ええ、良いんですか!？」

『うちの店にいる猫なあ、ペットシヨップや悪質なブリーダーから引き取つた動物でな。他にも犬やウサギ、鳥とかの専門もあるんや。』

『その子は怪我した野良猫でなア、可愛そうに結構傷だらけやつたんやあ。』

『やからうちらは里親探しも兼ねて経営してたんや。』

『その子今まで他の客には愛想一つせんから心配やつたんやけどその子気に

入ってくれてる子がおるからなあ。』

『せやから・・・その子を頼めまへんやろかあ?』

店員の言葉を聞いてどうしようかと思つて見てみると・・・。

「おい、やめろつて。」

「にや〜。」

キンジのカバンの中に入つて寛いでいた。

キンジは飛鳥の電話を借りるところ言つた。

「分かりました。引き受けますよ。」

『ほんまかあ!?良かったわあ。その子の事大事にして下さいね。』

ではと店員が電話を切つた。

「良いの?。」

飛鳥がそう聞くとキンジはこう答えた。

「まあな、ここまですつてくれてんに追い返すのもなあ。」

そう言いながらキンジはバックの中で寝ている黒猫を見てそう言うのと

レスティアがこう提案した。

「でしたらその子の名前を考えないといけませんね。」

そう言うのと全員で何にするか考えると飛鳥はキンジに向けてこう聞いた。

「遠山君はどういう名前が良いと思うの？」

そう聞くとキンジは暫くして……こう決めた。

『クロメ』

「？」

「イヤな、こいつつて雌だろだからだ。」

「そのまんまだね。」

「ウルセエヨ。じゃあお前は如何なんだよ？」

「うゝゝん、……『クロちゃん』」

「没だ。」

そう言うときンジは黒猫に向けてこう聞いた。

「お前、『クロメ』でいいか？」

そう聞くと黒猫は……。

「うにやゝゝん。」

にこやかに微笑んでいた。

「よし、お前の名前は今日から……『クロメ』だ。」

「にやゝゝん。」

それを聞いたクロメの顔は穏やかであった。

泊まる場所は自分で見つけろ。

武偵憲章第4条、武偵は自立せよ。

これは武偵はたった一人で行動する際に己のみで思考しなければならぬため、今のうちに自分の考えを持ってという意味であるのだがこの場合は・・・どうだろうか？

キンジは達は今日泊まる宿に向けて・・・リムジンで向かっていた。

「ねえ、遠山君。これって・・・」

「俺に聞くな。」

キンジは飛鳥の言葉に対してそう答えたが本人も少し驚いていた。

「(防人さんが紹介してくれたって言ってたけど何でリムジン!?)」

少し驚いていた。

無論全員居心地が悪い様子であった。

「あだし初めてだぜ、こいつに乗るの。」

「儂もじゃ。」

「・・・私も。」

「何でしょうね・・・」

「凄い緊張するわよ姉さん。」

全員そう言っていた。

そして暫くすると……。

「着きましたよ。」

運転手がそう言つて着いた場所は……。

「『篋』……何処かで聞いたなあ。」

キンジはそう言いながら扉にあるインターホンを鳴らすと……自動的に扉が開くとそこには一組の夫婦がそこにいた。

「君が『遠山キンジ』君だね」

「あ、はい!!」

「私がこの主『篋 佑唯』だ。今日は気兼ねなく使つてくれたまえ。」

「あ、はい! ありがとうございま……待てよ?」

キンジはそう思つて記憶を掘り返すとある人間に辿り着いた。だがそれは……ありえないのだ。

「(おいおいおい、まさかこの人つて……!!)」

そう思つているとキンジはこう聞いた。

「あのう、つかぬ事をお聞きしますが……」

「?・どうしたんだい」

「貴方つてもしかして・・・『戦術機の父』と呼ばれている・・・」

「ああ、世間じゃそう呼ばれてるのかい? 私は只社長の指示の通りに作っただけなんだけどねえ。」

そう言うのと全員驚いていた。

目の前にいるのは女尊男卑しかけた日本に数穴を開け、今の日本を作った兵器関係の大企業『篁技研』の社長なのだから。

『ええええええええ!!』

絶叫が屋敷に響き渡った。

「今日はここで泊まってもらうけど良かったよね?」

「いえ! ありがとうございます!!」

「ハハハ、ゆつくり寛いでね。」

佑唯はそう言つて部屋から出て行つた。

正にT H E・和室と呼べれる部屋であり 正直場違いも良い所であつた。

すると飛鳥はキンジにこう聞いた。

「遠山君……ここ紹介した人ってどんな人なの？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ええとな……少し……訳アリ。」

「もうその時点で怖いんだけど!!」

飛鳥はその言葉を聞いて顔を真っ青にしていた。

まあ、キンジがザビーを受け取った後の会社がこの下部組織と言う

設定だけだと思っていたようであるが。

「まさか……とは……防人さくくん。」

キンジはそう言いながら紹介した人間に怒りを覚えていた。

そう、ここを紹介したのは防人なのだ。

何故そうなったのかと言うと……。

数日前

「え、宿探し？」

「そうなんですよ、何せ俺を含めて7人も泊まりますからそれなりに広い所じゃないと。」

この時キンジは襲ってきた中国武偵校生について報告する傍ら

そう愚痴っていたのだが防人はこう言った。

「それなら俺が良い所紹介しようか？場所は静かで落ち着くし俺達国連軍の事も知っているところだから。」

「え、良いんですか!？」

「まあな。」

「ありがとうございます!!」

「宿賃も何とか工面しとくから。」

そして現在

「あの時に浮かれていた自分を今すぐ殴りたい。」

キンジはそう思いながら頭を抱えていると外から声が聞こえた。

「皆々。ご飯ですよ。」

「その声が聞こえたので取り合えず腹ごなしも兼ねて行くこととなった。

そして食事する場所に着くとそこにあつたのは……。

「さあ、遠慮しないでねえ。」

「そう金髪の女性が緩やかな声で机の前にいた。

机の上にあるのは魚、野菜の天婦羅と刺身、肉じゃが、そして薄味の味噌汁が

そこにあつた。

すると畳の上にはもう一つの皿があつた。

「そつちは猫ちゃん用にしたのよ、お魚と山菜の煮込んだのを入れてるから

大丈夫よろしく。」

そう言うときンジの足元にいた猫は急ぎ足するかのようにその皿目掛けて走った。

そしてお座りしてからキンジ達の方を見ると早く早くという風な目をしていて。そしてキンジ達は少し緊張する様子で座ると女性はこう言った。

「大丈夫よ、少しリラックスしてね。ここは今は貴方達の家だと思ってね。」

「あ……はい。」

キンジはそう言いながらも矢張り緊張する。

そしてご飯を食べ始めると結構美味しかった。

特に肉じやがは絶品だった。

するとレスティアがこう聞いた。

「あのう、一つ宜しいでしょうか？」

「？」

「この肉じやがはどうやって？」

「ああ、それはね……。」

その言葉を聞く中で飛鳥も聞き入っていた。

ご飯が食べ終わるころには全員和らいでいた。

『ごちそうさまでした。』

「はい、お粗末でした。」

いや、むしろ御馳走だよと全員そう思っていた。

「あ、そうそう。家って偶に研究員が泊まり込む時があるから温泉を引いてるの。ゆっくり寛いでね。」

男女別よと聞いてやったーと女性陣はそう言っていた。

キンジは今回の泊りに対して・・・。

「頼んで結果的に良かったかもな。」

そう思っていた。

スパイなんてどこにでもいるさ。

夜遅くの山中。

ある一団がそこにいた。

全員黒い服を着ており銃火器を保有していた。

「隊長、全員配置に着きました。」

「分かった、それでは始めよう。」

そう言うのと隊長と言われた男性は周りにいる22人に兵士に向けてこう言った。

「良いか、目的は『戦術機的设计図』と『織斑一夏のISデータ』、出来るなら『篁佑唯の暗殺』も行うものとする。全てが上手くいけばこの国の軍事的進化を

最低でも2、3年は遅らせれる筈だ。」

「隊長、立ちはだかる人間は？」

「殺せ。」

「了解。」

「走吧（行くぞ）」

中国語でそう言うのと全員が走り出していった。

するとその光景を遠くから見ていた女性が無線で誰かに伝えていた。

「主、どうやら同国の物たちが何やら戦闘を起こそうとしていますがいかがいたしましょう?」

「……了解しました。」

そう言つて無線を切ると彼女もその方向にへと向かつて行つた。

そんな中でキンジはぐっすり眠っている中で、クロメが起きた。

「……フシューー!!」

クロメが何やら察知して威嚇するように鳴くとそれを聞いたキンジは何事だと思つていた。

「どうした……クロメ?」

そう聞くとドドドと何かが走る音が聞こえた。

そして襖を開けると佑唯が息を切らしてやってきた。

「どうしたんですか?!佑唯さん!!」

すると佑唯はこう答えた。

「キンジ君、直ぐに皆を起こして脱出する準備をするんだ。」

「え・・・脱出って?」

するとキンジの電話から通信が来た。

「こんな時に一体誰なんだ・・・防人さん!」

通話相手が防人だと分かってキンジはそれを取った。

『キンジ、今大丈夫か?』

「今それどころじゃ!!」

『大方佑唯さんが避難しろって言ってるんだろ?』

「ええ、何でって・・・まさか!?!」

『そ、御剣重工からの要請でな。元々連中、2学期始め位から行動してたらしくてな。』

『それで本当なら俺達が護衛する予定だったんだけど、丁度お前らそっちに行くことが分かったからな。だから武偵としてお前に依頼したい。』

防人は何時ものような軽い口調から重々しい口調に切り替わってこう言った。

『佑唯さんとミラさんの護衛と侵入してくる敵の捕縛、出来なければ

超法規的措置で殺せ。殺したらこっちで後始末しといてやるから。』

『あ、それともうすでに佑唯さんには戦術機とISを貸してくれるように

頼んでおいたから。』

『俺達もそつちに向かうから．．．死ぬなよ』

そう言つて電話を切ると佐唯さんはキンジを見るとこう言つた。

「こつちだ。」

「はい！」

キンジは佐唯の後ろに付いて行つた。

「皆聞いてくれ！」

キンジは篁技研が有する格納庫で全員に向けてそう言つたと飛鳥がこう聞いた。

「遠山君、これつて一体．．．？」

するとキンジはこう答えた。

「ああ、如何やらチーム編成の最終調整を実戦でやることになった。」

そう言つたと佐唯がこう説明した。

「敵は総勢22人、武器は携帯型のマシンガンを保有している。」

「君たちには実弾装備した戦術機やISを使ってもらう事になっている。そう言うのと紫がこう聞いた。

「けどそれってもしもの際には……。」

するとキンジがこう答えた。

「そっちの方だが御剣重工がバックアップに回ってくれるらしい。

もしも死人が出たとしても武偵校には報告しないとさ。」

そう言いながらキンジは篁技研が持っている戦術機の武装確認している中で

華毘がキンジに向けてこう言った。

「アアアアア!! そうだったす、忘れてたす!!」

「何だよ、華毘!!」

キンジは華毘の大声を聞いて何だと思っっているとある物を靴から出した。

するとそれをキンジに渡すところ言った。

「これ! 頼まれてた武器っす!! 調整が終わってたから今日渡そうと

思ってたすよ!!」

そう言って渡されたのは……。

「これ……。」

それは父と金一の形見でもある2丁の拳銃であった。

「それはあたしがカスタムした『デザートイーグル』と

『ピースメーカー』 つす!! 注文通りに『デザートイーグル』は軽量化してるし、『ピースメーカー』はリボルバーからマガジン型にしておいたつす!!」

「それと『デザートイーグル』の方は部品を削って軽量化した分威力が

下がるつすからその分ブレを少なくさせて3連発射機構を追加しておいたつす!」

「『ピースメーカー』の方は金属部分を多めにしてるから

少し重くなってるつすけどその分安定性を上げてるつす!」

その説明を聞いたキンジはニヤリと笑ってこう言った。

「サンキューな。」

「それと追加つす。」

そう言って更に出してきたのは・・・5本の黒い刀であった。

「大変だったんすよー、何せ一度ばらして精錬仕直して鍛冶職人さんに頼んで打ってもらって態々名まで掘ってくれたつすからねえ。」

そう言うのとキンジは刀に刻まれている銘を詠むと少し笑った。

「良いじゃん。」

それに彫られていた銘はこうだった。

『影桜』

そしてキンジはその5本の内2本を持つと残り3本を・・・飛鳥、夜桜、レスティアに渡した。

「「え？」」

三人は何でと黙っているとキンジはこう答えた。

「元々はこれが終わったら渡そうと思ってたんだ。チーム編成を考えればな。」
そう言うのとキンジはこう説明した。

「チーム編成で言うなら前衛は俺と焰、中衛は飛鳥、夜桜、後衛はレスティア、レティシア華毘で通信する紫が全員の耳になってもらいたいなと思ってな。」

「そうなると武器だが剣を大量に持っている焰は除外、遠距離武器を持つことが出来る華毘と戦略を立てさせるレティシアは除外されるから残った中で剣が使える飛鳥、武器がない夜桜、救護出来るレスティアに上げようと思ってたんだ。」

ドウだろうという全員はこう答えた。

『全然、納得だよ!!』

そう答えた。

そしてキンジは機体に自分の武器を搭載させた後に専用武装も載せた。

戦術機はキンジ、飛鳥。

ISは焰、夜桜、レスティア、レティシア。

戦術機には対人用のゴム弾入り

ISでは対人用に作ったスタンガンを搭載させた。

無論実弾も使えるようにしている。

すると格納庫の扉が開くのを見たキンジは全員に向けてこう言った。

「それじゃあ全員・・・行くぞ!!」

『オオオオオオ!!』

戦いは山の中にテ。

京都の山中にて・・・戦闘が起きた。

「グわあ!!」

「ウワアアアアアア!!」

次々と倒れて行く部隊を見て隊長は焦っていた。

「一体どうやって我々の行動を!」

まるで襲撃するのを知っていたかのような行動であったからだ。

然も上空からISがスタンガン式の警棒を持って襲い掛かれたものや・・・。

「痛い!!」

「おらああ!!」

電磁式のネットによって失神させられたり。

そして地上では・・・戦術機が攻撃してきた。

「ウワアアアアアア!!」

「後は!」

そうしている間に残っているのは自分を含めて・・・二人だけであった。

「どうしましょう!!? 隊長!!」

自分の隣で慌てている新米がそう言うのと隊長はもう無理だと悟った。

既に20人が捕まり、このまま全員捕まれば間違ひなく祖国に返還されても最悪な扱ひは免れないと思うと隊長は新米に向けてこう言った。

「よし! お前は一足早く下山してそのままこの国から脱出しろ!!」

もし国連軍迄来たら我が国は最悪各国から集中的な制裁を下されるが

そうはさせせん!! 奴らを何人かこいつで道連れにさせてやる!!!」

そう言いながら隊長は体に巻く付いている手榴弾を一つ持つと……誰かがこう言った。

「你得自? (へえ、自殺するんだ。)」

「你是?? (誰だ)」

隊長はそう言つて周りを見渡すと……いつの間にか新米が倒れていた。

「嘿、你没事吧? (おい、大丈夫か)」

隊長はそう言つて新米に駆け寄ろうとするといきなり後ろから声が聞こえた。

「不合理、那个人(無理よ、その人毒で死んでるから)」

!!!

隊長はその声を聴いて後ろを振り向いたその時にその声の主はこう言った。

「你也？再？了（あなたもさよなら）」

そう言ったのを聞いた隊長の意識はそこで途切れた。

「全員無事か!!」

キンジはそう聞いて確認するところ答えた。

「こちら焰、異常なしだぜ！」

「こちら夜桜、同じくじゃ！」

「こちらレスティア、大丈夫です！」

「こちらレティシア、同じくね。」

「良かったね、遠山君。」

全員の声を聴いて飛鳥もほっとした様子でそう言うときんじはこう思っていた。

「よし、紫、皆に撤退連絡！そこらへんに転がっている連中を連行して」

ズドン!!!

「何!?!」

キンジと飛鳥が何だと思つて辺りを見渡すと大きな爆炎が起こつた場所が見えた。

「行くぞ！」

「うん！」

そう言つて二人は戦術機を起動させてそこに向かつた。

「これつて……」

「酷いな。」

そう言つてキンジと飛鳥は目をしかめていた。

周りには何やら僅かであるが……肉片のようなナニカがそこにあつた。

「誤爆か……それとも……自決か。」

キンジはそう思いながら周りを探索している中で……ある一人の人間がそこにいた。

「誰だ!？」

キンジはそう言いながら銃を構えるとそこにいたのは……。

「?!山金吉（初めまして遠山キンジ）。」

フードをつけ、ローブで全身を覆った人間であった。

するとそのローブの人間はある物を投げた。

それは……。

「こいつは？」

「奴らが持っていた指令書と軍の登録書よ。」

「!!」

キンジはそれを少し警戒しながら取ってスキャンさせた。

そしてキンジはこう聞いた。

「君は一体……」

するとローブの人間はフードを取った。

その中にいたのは……。

「……」

「……綺麗」

飛鳥ですらホオけるほどの美人であった。

そしてその女性は自己紹介した。

「初めまして、私は『楊 基姫』。貴方を試しに来たものです。」

そう言いながら彼女はローブを脱ぎ捨ててその姿を露わにした。その姿は……色々と見えそうな状態であつた。

「なあ（*、口、*）!!」

「ちよつとナニその恰好?」

流石の飛鳥でも慌てる程であつた。

何せあの……色んな意味で際どい中華服なのだから。

腋と背中が丸見えで然も胸元もちやっかりと開けているし、

足もスリットがかかつており、美脚が露わになつていた。

すると『楊 基姫』が武術の構えをしながらこう言つた。

「さあ、来なさい遠山キンジ!かの有名な『イ・ウー』の首領を討ち取つたその実力を私に見せて下さい!!」

「!!手前……まさか!」

あそこにしたのかとキンジはそう思つていた。

何せ『イ・ウー』の事を知っているのは

あの時『レインボー・クルージング』社の造船所にいた面子しかしたないはずだと思つていた。

すると彼女は飛鳥を見てこう言つた。

「それとも……彼女を殺せば本気を出しますか？」

そう言うときんじはそれを聞いて……。

「ああ？」

完全にキレた口調でそう言った。

するときんじは飛鳥に向けて通信でこう言った。

『飛鳥、あいつは俺に任せて思えばこいつを持って皆と合流してくれ』

『だ、……駄目だよ遠山君！私も一緒に。』

『いや、どうやらあいつは俺にご執心のようにだしそれに……』

そう言うときんじは飛鳥に向けてこう言った。

『俺は皆を置いて死なないって決めたからな。』

そう言うときんじは飛鳥は例の物を持った後にこう言った。

「遠山君……死なないでよ!!」

「ああ。」

きんじは飛鳥にそう言うときんじはそこから離れた。

そしてきんじは戦術機『陽炎』から降りた後にこう言った。

「待っててくれたのか？」

「ええ……貴方の実力を測るためには全力でお相手するように」

言われてるので。」

そう言うときンジも徒手空拳の構えをして・・・暫く経つと木の葉が地面に・・・落ちた。

「!!」

それと同時に二人はお互いに駆けた。

戦いは第2ステージにへと移った。

暗躍なんて日常茶飯事さ。

「ウヲオオオオ!!」

「ハアアアアア!!」

キンジと楊はお互い拳櫛の応酬であった。

拳と拳。

足と足。

互いに防御、攻撃をしながら戦っていると楊のかかと蹴りがキンジに迫ったその時にそれは起こった。

「きひい」

楊の靴から・・・短刀が出てきたのだ。

「ちい!!」

キンジはそれを見て振り上げかけた拳を下ろすのではなく振り上げた時の重心の移動を利用して交わした後にもう一方の拳を使って殴ろうとした。

「はあ!」

然し楊はそれを逆に利用してその拳を・・・手に乗せて上に高く舞い上がって

躲した。

そして彼女は着地するとキンジに向けてこう言った。

「やりますね！」

「そうかよ!!」

キンジは楊の言葉を聞いてそう答えるとお互い下がった。

そしてまたお互い構えを戻した。

「・・・・・・」

お互い正に千日手さながらであり然もキンジはこう思っていた。

「(間違ひなく前に戦った李より拳法は強いとなると・・・・どうやって

倒すべきか)」

キンジはそう思いながら楊を見ていると楊はこう言った。

「中々ですね、本当でしたら剣の腕も見たいところですが・・・・如何やら

時間のようなです。」

そう言うときンジは楊が上空を見ていたので自身も見るとそこに

映っていたのは・・・・。

「あれは!!」

それは巨大な輸送機であった。

すると後ろから何かが出てきた。

恐らくはと思っていると楊はこう言った。

「それではここで失礼してもらいます。貴方の戦術機における腕と拳法の腕とリ―ダーとしての才能を完全に見させてもらいましたので。」

そう言うのと楊は何処かにへと去っていった。

それを見ていたキンジは何だったんだと思っていると戦術機から通信が来た。

「飛鳥か……。」

キンジは通信機を取ると向こうから声が聞こえた。

『遠山君！大丈夫だった!?怪我とかしてないよね!?』

何やら慌てながらそう聞くとキンジは普通にだがこう答えた。

「ああ大丈夫だ、あいつは何処かに消えて行ったよ。」

『そっか、良かったー!!』

飛鳥はそれを聞いて何やらほっとしていたようであった。

そしてキンジはそのままもう一度戦術機に乗って帰投した。

篁技研戦術機・IS格納庫。

「よう、キンジ。大丈夫だったか？」

防人は何やら佑唯と話している様子であったがキンジはずかずかと入ってこよう言った。

「おい、どういう事なんだ防人さん！あんたなんつう依頼を

ここで吹っ掛けてんだ!!もしかしたら俺達死んでたぞ!!」

そう言うのと防人はしれつとこよう答えた。

「何言ってるんだ？誰も死んでないから良しとしようじゃないか。」

「そういう意味じゃあねえんだろうが!!」

キンジは流石に怒ったのか拳を振り上げるも・・・防人によって往なされてそのまま床にたたきつけられた。

「ぐお!!」

「阿保いうな、だから死なないためにここを宿泊所にしたんだろうが。」

防人はそう言うところ続けた。

「ここなら武器があったけあるし何かあったとしても

ここには俺達国連軍特務隊の協力者として必要な救急器具が山ほどあるんだ。

何があったとしても仲間を死なせない様にしているからここを選んだし俺はな．．．何があっても仲間を見殺しにはしない！絶対だ!!」

最後に防人はそう怒鳴るとキンジに向けてこう言った。

「さっさと仲間の下に戻れ、心配してるからさっさと見させに行つてこい。」
「おう。」

キンジはそう言つて部屋から出ようとするので防人はキンジに向けてこう言った。

「キンジ．．．済まなかつた。」

「!!．．．別にもう良いよ。」

そう言つてキンジが部屋から出て行くのを確認すると防人は佑唯を見てこう言った。

「スミマセン、お見苦しい所を。」

「いや良いさ。私の方こそ氣を使つてくれたことに対して感謝したいし

彼らの報酬は色を付けて払うさ。．．．それでだが今回の襲撃者達についてだが」

「まあ．．．大体結論は分かつてるんでしょ?」

「ああ．．．．」

「中国!!」

防人と佑唯は最後にお互い指揮したのであろう国家の名を述べると防人は

こう言った。

「恐らくは第1に『一夏の戦闘データ』、第2に『戦術機関係』でしょうね。」

「そして私の命もそれに含まれるでしょうね。そして恐らくは

『中小企業連合』も該当されますね。」

「だが今回の1件でこの国で暗殺するには手間がかかると思い知らしめる

いい機会でしょうな。『中小企業連合』の方は常に『ジャイビス』の衛星から

マークされてますから無理でしょうしね。」

そう言いながら防人は扉を見てそう言うと言つたと佑唯はこう続けた。

「だがそれでも決行しなければいけないと言う過激派が動き出しそうですね。」

すると防人はこう言った。

「だが連中の存在は既に『中国支部』に密かに確認させている。無論党の圧力を考えて

だがな。分かれば速攻で『外務省』に引き渡すさ。」

そう言うつて防人は部屋から出ようとすると佑唯はこう言った。

「ああ、そうだ。一夏君何だがどうもI S学園の学園祭で・・・

『彼女に会った』と言つていたようだよ。」

「!!」

防人はそれを聞いて驚くも何時もの口調でこう言った。

「そうですか・・・だったらこう伝えて下さい。」

「・・・『必ず連れ戻せよ』と伝えておいて下さい。」

「分かったよ。」

そう言って防人は部屋から出て外に浮かぶ月を見ながらこう言った。

「はあ・・・まだまだ問題は増えそうだな。」

そう思いながら防人は捕虜を飛行機に積み込む手伝いをしに行った。

お前だれ？

「・・・・・・・・」

俺は遠山キンジ、17歳。

武偵校2年生でアサルト所属。

「よし・・・頭は大丈夫だな。」

いや、何始まりからとち狂ってること言ってるのかと思いたいのだがこれには

ちやんとした理由がある。

それは・・・。

「うにゃ~~~~・・・・・。」

それはこの・・・女性である。

黒い髪。

黒衣着物。

全身が正に黒だと言わんばかりの見た目に相反するかのような肌色と

はちきれんばかりの・・・胸部が見えた。

然しキンジが見ているのはそこではなく頭にある・・・猫耳とお尻ら辺にあると

思われる・・・尻尾が見えた。

「・・・ダレ?」

キンジはそう言うしかなかった。

そして暫くして・・・。

「う~~~~さん、よく寝たにや~~~~。」

何やら猫みたいに背伸びしながらそう言うときんじは少し間を置いて・・・大声でこ
う言った。

「・・・いや、誰だよオマエ!」

そう言うときんじは頭に?をするかのような表情をした後に近くにあった

キンジの携帯電話の画面を見た後にもう一度キンジを見て・・・。

「・・・にゃん♡」

猫なで声で猫のようなポーズをした。

「・・・よし、殺そう。」

それを見てキンジは華毘から譲ってもらった『デザートイーグル』を
抜こうとすると女性は・・・慌ててこう言った。

「ちよつと待ってー!ー!!」

そう言ったのだ。

そして数分後……。

「それじゃあこれから尋問を始める。」

「はい。」

「……本当に分かってんのか？」

キンジはそう思いながら頭を抱えているとキンジは取り合えず朝早い事もあつて静かな口調で質問した。

「お前の名前は？」

「黒歌（くろか）。」

「出身は？」

「日本。」

「好きな料理は？」

「大体何でも食べるよ。」

「……何でここで寝ていた?」

「え……ずつといたわよ?」

「嘘つくな!俺はお前の事なんて知らねえしそう言えば『クロメ』は何処行つたんだ!?!」

キンジはそう言つて、周りを見渡しながら探していると女性『黒歌』がこう言つた。

「何言つてんのよ?直ぐ近くにいるじゃん?」

「は…….?」

何言つてんだと思う中で『黒歌』はにこりと笑つて……姿を変えた。

「……!!!」

キンジはそれを見て驚いていた。

そう、目の前にいたのは……。

「にゃ〜おん。」

「……『クロメ』…….?」

そう、クロメなのであつた。

そしてまた姿が変わり……彼女になつた。

「な．．．な．．．なあ．．．．．」

キンジはそれを見て呆然としていると更に『黒歌』はこう告げた。

「私は猫？（ねこしよう）の『黒歌』。そして．．．悪魔ヨ。」

そう言うのと突如彼女の腰から．．．蝙蝠のような羽が出てきた。

「なああああああああ!!」

流石のキンジも．．．驚かすにはいられなかった。

それを聞いた仲間たちは何事だと思って駆けつけてみればクロメがキンジの太ももらへんでゆっくり寛いでいるのを見て何事だと思っているが

当の本人は．．．。

「済まんがいろいろと整理させてくれ。」

そう言つて解散させた。

すると佑唯がキンジに向けてこう言つた。

「それだつたら家の道場で汗を流してから考えないかい？」

そう言つてキンジは佑唯に連れられて道場でトレーニングしていると

焰も混ざったのトレーニングとなった。

そして朝食を終えた後防人がキンジを呼んだ。

「済まないな、キンジ。もう出るんだろ?」

「はい、今日はこのまま神戸にある武偵の施設を見回ってから帰るつもりです。」

「現地集合・現地解散って・・・学校大丈夫なのか?」

「それが普通だよな。」

キンジはそれを聞いて確かにと思っていると防人がある物を出した。

「何です?その板は」

「ああ、こいつは電子板だよ。戦闘における地図の表示や電子書類の整理に使ってるんだ。」

「へえ・・・」

キンジはそれを見ていると防人がこう言った。

「ああそうだ、報酬なんだが俺からと箕さんからそれぞれ渡されるそうだ。」

「ええ、良いですよ!そんなに報酬は」

「馬鹿、貰えるもんは貰つとけ。損はないはずだ。」

そう言うのと防人は伝書板を見てこう言った。

「それじゃ俺からは・・・これくらいだな。」

そう言ってキンジに伝書板で報酬金額を見せると・・・キンジは驚いてこう言った。

「イヤイヤ、ちよつと待てよ！何だよこの金額法外だろ!!」

そう言うのと防人はこう返した。

「阿保いうな、最悪死んでいたような任務だったからこれくらいが妥当だ。それと篁さんからは戦術機とI Sを渡すそうだ。」

「・・・マジで?」

「マジだ。」

防人はキンジの言葉に対してそう返した後にこう言った。

「ああそうだ。それとだ。」

「?」

キンジは何だと思って聞くと防人はこう言った。

「あの猫には気をつけな。何か嫌な予感がしたからな。」

そう言って防人は話はこれだけだと言って退出させるとキンジはこう言った。

「それって合ってるよ。防人さん」

そう言ってそこから出て行ったキンジであった。

そして篁から出て行くときに佑唯とミラは二人でこう言った。

「また来なさい。今度はゆつくりと来ると良いよ。」

「いつでも来なさいね。」

『ありがとうございます!!』

「うにゃ〜お。」

全員（+猫1）が挨拶してそこから去っていった。

然しキンジ達はまだ知らなかった。

・・・未だ戦いは終わっていないことに。

最終戦闘の備え。

キンジ達が神戸に行った時・・・。

「それで・・・まあ、邪魔が入ったとはいえ結果は中々のようだったな。」

「はい。」

楊は自身の上司に当たる存在と京都のある山中の旅館で会っていた。

「成程な、人を導く才能と戦闘能力を併せ持つって・・・何だか祖先のライバルみたいな奴だなあ。」

そう言いながら笑っていると男性は近くに居る仮面の男、

『高』に向けてあるものを渡してこう言った。

「そいつをキンジに渡してくれないか？あの姉妹たち分も含めてるからな。」

「はい。」

そう言うと『高』は立ち去った。

そして男性は立ち上がってこう言った。

「それじゃあ、俺も・・・行きますか。」

そして男性はそのまま旅館から立ち去り彼の仲間も消えた。

「然しやつと終わったなあ。」

「そうだねえ、……色々あつたよねえ。」

ああなどとキンジと飛鳥は遠い目をしながらそう言った。

キンジ達は予め予約した『東海道新幹線のぞみ246号』に乗ろうとするとある人間が声をかけた。

「スミマセンが遠山キンジ様でしょうか？」

「……アンタは？」

キンジは駅で準備している中で高に出会おうとキンジは少し身構えてそう聞くと高はこう答えた。

「初めまして、私は『高 丁侠』。我が主から貴方に直接お会いしたいと言つていられたのでこちらを。」

そう言つて高はチケットを渡した。

「こちらは我が主が丸ごと借りていらつしやいます1号車のチケットです。」

そちらの姉妹方の分もありますのでどうぞ。」

ではと言って高は立ち去った。

「・・・どうします？・キンジさん」

レスティアはそう聞くとキンジは少し考えて飛鳥に向けてこう言った。

「飛鳥、お前は先に行ってくれ。」

「・・・遠山君は、行くんだね。」

「ああ、何があるか分からないが・・・藪にいる何かを見てくる。」

そう言ってキンジはレスティア達と行くと飛鳥はキンジの手をとって

こう言った。

「気を付けてね。」

「・・・ああ。」

飛鳥の呼びかけにキンジもそう答えるとキンジ達はその場所にへと向かった。

既に武偵校生が見えるがキンジ達はその中に入ると既に誰かがいた。

「ようキンジ、待ちくたびれたぜ。」

「よう・・・『李』。」

へっと言って李はキンジを席の真ん中にいる人影を見た。

中国武偵校生の制服である夜色の制服に漢服を腰に巻いている男性。

「やっぱりアンタだったか。」

「ほう……俺を覚えてくれるとは嬉しいねえ。」

そう言うと男性は自己紹介した。

「初めまして遠山キンジ。俺は『藍幫（ランパオ）』の一つ『鳳蓮』の頭領『曹 蒙 匿』。こつちで言えば武偵校生2年のアサルト所屬。ランクはA。」

そう言うとキンジは『曹 蒙 匿』と対面するかのように座るとキンジはこう聞いた。

「それで……俺に何かあるんじゃないのか？」

「まあ、待てよ。話は電車が動いてからだ。」

そう言うと『曹 蒙 匿』はある物を出した。

それは……。

「何だこれは？」

「中国茶だ。先ずそいつを飲んでからでも」

「眠らされたら堪ったものじゃねえからな。」

「手前！若がそんなことを!!」

「待てよ、李。こいつは今敵陣のど真ん中にいるんだ、そう思っても不思議じゃねえが俺はそういうのはしない主義だから大丈夫だ。」

そう言いながら『曹 蒙 匿』は茶を飲んでいるのを見てキンジは少し嗅いだ後に飲ん

だ。

電車が走り出している中『曹 蒙 匿』は京都の茶菓子を堪能しながらさ々と
言いだした。

「面白いやあお前こう聞いたな？ 『俺に何かあるんじゃないか』 ってな。」
「ああ。」

キンジはそれを聞いて目を鋭くさせるところ聞いた。

「お前は『戦争』ってどうやって起るか考えたことあるか？」

「・・・何？」

「『戦争』が起こるのは決まって『宗教』、『資源』、『政治的』等が
挙げられるが実際は違い。」

「『戦争』は何時だって『欲望』がそれらを起こさせるんだ。」

「『あれが欲しい』、『これが欲しい』。それらが戦争を引き起こさせ、
大義名分を得るためにさつき言った事で正当化される。」

「何が言いたい。」

キンジはそれを聞いていい加減に早く話せと言うかのように目を細めると

『曹 蒙匿』は窓を見つけてこう言った。

「今まさに『戦争』が始まるうとしていているんだよ遠山キンジ。」

「・・・それって昨日の」

キンジはそれを聞いてまさか昨日の事かと聞くと『曹 蒙匿』は笑いながらこう言った。

「ハハハ、違うぜ。あんなくそつたれな連中がやるようなやるのじゃねえ。」

「表ではなく裏で行われる戦争さ。」

「その為には戦力があるんだ。一騎当千に相應しい力を持ち、そこにいるだけで味方が勢いづくそういう人間がな。」

そう言うのと『曹 蒙匿』は槍を持ってこう言った。

「遠山キンジ、俺と戦ってもらうぜ。今ここぞな」

「・・・お前まさかその為にここ丸ごとを？」

キンジがそう聞くと『曹 蒙匿』はある物を出してこう言った。

「何だ、その杖は？」

彼が出したのは何やら少し派手な装飾が施された丸い杖を出したのだ。

すると『曹 蒙匿』はこう説明した。

「お前は知らねえだろうが悪魔側では『レーティングゲーム』つつう試合があつてな、そいつは別次元に同じ空間を作つて戦いあうそうだ。」

「この杖はそいつと同じでな、疑似的にこの電車と同じ空間を作ることが出来るんだよ。ああ、心配するなよ堅気たちは俺達が戦っていることすら分からねえようにしてあるから。」

そう言うとき『曹 蒙匿』はキンジに向けてこう言った。

「さてと、どうする？ 遠山キンジ」

何やら挑発じみた言動でそう言うときキンジはこう答えた。

「・・・良いぜ、受けて立つ。」

「それでこそだ。」

『曹 蒙匿』がそう言ったその時に杖が光り輝き・・・辺りを白く染めた。

決戦 前編。

「……()は？」

あの光が消えた後にキンジが目を開けるとその目に映っていたのは……。

「同じ場所……じゃねえな。」

キンジはそういつて周りを見渡していた。

その場所は電車と同じ内装であつたが何かが気になつていると……鞆から声が届こえた。

「それはここは異世界だからよ。」

「!……黒歌!!」

キンジはそういつて鞆を見ると鞆から……黒歌が人型になつて出てきたのだ。

「だ……誰ですか貴方は!?!」

レストイアは黒歌に向かつてそう言つたと黒歌はこう答えた。

「アハハハ、まあ良いじゃないの?細かい事は?」

そう言つたと黒歌は周りを見渡すところ答えた。

「これって電車の中にも同じものを忍び込ませてるんでしょ?」

「何だって!!」

キンジはそれを聞いて驚いているが黒歌はこう続けた。

「そして結界が発生するとこの部屋にいる人間以外は来ないようにするどころか認知も出来ない様に工夫しているわね。」

「使っているのは中国の『八卦』。そこに悪魔が使う『レーティング・ゲーム』で使う魔術を組み込ませて日本にある『五行占星術』を混ぜ合わせているから

悪魔側からも感知出来にくくしていて質が悪いわね。」

そう言うのと『曹 蒙匿』は驚いたように黒歌を見てこう言った。

「こいつは驚いた。まさか妖怪で然もアンタみたいなお尋ね者に出会うとはな。」

そう言いながら素の顔に戻すとキンジに向けてこう言った。

「まあ良い。邪魔しなけりやあそれで良し、それじゃあ・・・ヤルカ?」

そう言いながら『曹 蒙匿』は槍を構えるとキンジも日本刀と脇差を抜いて構えた。

すると『曹 蒙匿』は後ろにいる仲間に向けてこう言った。

「お前らも武器を取れ。好きに暴れな」

そう言うのと全員は各々の武器を構えた。

李は槍を、高は剣を、楊は拳法の構えをするとレスティア達も武器を取り出したら黒

歌もこう言って混ざった。

「私も混ぜて欲しいわね。少し遊びたいし。」

そう言って黒歌は何やら黒い霧のようなものを出した。

そして暫くすると電車が少しずつ減速し・・・少しガタンと物音立てたその時に・・・。

「!!!」

曹とキンジはお互いの武器がぶつかり合った。

そして他のメンバーも・・・ぶつかった。

李はレティシア。

高はレスティア。

楊は黒歌。

それぞれ戦いが始まった。

「ウオオオオ!!」

「()のお!!」

李対レテイシアは槍対決。

お互いに自分の武器を叩きあったり穿ちあいをしたりしていた。

「はあ!!」

「はっ!」

高対レスティアでは剣対決。

レスティアは剣に自分の焔を付与させているのに対して高は純粋な剣技でそれと相対していた。

そして楊対黒歌では。

「はあ!!」

「おっと」

楊の拳法に対して黒歌はするりと返しながら霧を放っていた。

「当たらなければ!!」

楊はそう言いながら黒歌と戦っていた。

そしてキンジと曹はと言うと・・・。

「こいつは中々だな、槍とはし合った・・・レティシアでやってたな。」

「まあな!!」

そう軽口言いながら戦っていた。

無論曹もキンジも拳法の応酬をしていた。

曹は槍を使って変幻自在な型を使いつつ拳法も織り交ぜていたのだがそれはキンジも同じだったようでお互い一進一退の攻防が繰り返られていた。

そんな中でキンジは二刀流で槍を弾き乍ら曹の目的を聞こうとしていた。

「曹！手前の目的は何だ!?!」

そう聞くと曹はこう言った。

「さつきも言ったろ？戦争が起きるから戦力がいるんだよ」

「だったら俺じゃなくて他の奴にしろよ!!」

アリアとかと言うと曹は少し嫌な顔でこう言った。

「おいおい、俺はあんな我儘娘を加えたくないな。」

仲間が綻ぶというとキンジを見てこう言った。

「だがお前は別だ。あのシャーロックホームズを倒しただけじゃなく

ここまで腕利きの人間を敵味方問わず仲間に出れるって言うのは一種の才能だ。」

「だからお前を手に入れたいのさ。まあ、俺だけじゃないがな」
人気者だよなお前と言つて曹はキンジに向けて蹴りをくらわして下がった。

するとキンジはそれを聞いてこう答えた。

「俺は只普通の武偵校生でいたいものになあ。」

そう言う曹は呆れた様子でこう言つた。

「いや、お前みたいなの人間いて堪るかよ。」

それを聞いたキンジはあ、そうかよと言うと脇差を・・・振りかぶつて投げた。

「!!そいつは御免だな。」

曹はひらりと避けて下を見た。

然し……。

「!!いない……まさか?!」

曹はそう言いながら右左を見ると……上に何かを感じた。

「うおらあああ!」

キンジは大声を上げながら曹目掛けて……剣を振るつた。

「くっ!」

曹はやばいと悟つて槍を刀の軌跡に合わせて防御しようとする……ある物を見た。

それは……。

「鞆!?!」

そう、脇差を持っていた方の手に鞆を持っていたのだ。

そして刀は槍によって阻まれるも鞆の方はそのまま・・・刀にぶち当たるように叩いた。

「しまった!!」

曹はキンジの目的に気づいて手を離れたその時に・・・槍が壊れた。

するとキンジは曹に向けて剣を構えてこう言った。

「降伏しろ。」

そう言う曹はこう言った。

「生憎・・・諦めが悪いんでな。」

そう言いながら曹は槍から・・・煙幕玉を落とした。

「くそ!」

キンジはそれに気づいて後退すると曹はこう言った。

「天井来な。遠山キンジ」

そしてそれを聞いたキンジは・・・天井が開いているのに気づいてそこに続いた。

「キンジさん!!」

「ここは頼む！」

「はい！」

キンジはレスティアにそう言って上に向かった。

「もう逃げ場はねえぞ。」

キンジはそう言って曹に剣を向けると曹はこう言った。

「おいおい、未だ戦いは・・・終わってねえぞ。」

そう言う曹の胸から・・・槍が出てきた。

「何だ・・・そいつは？」

キンジはあまりの事に驚いていた。

種も仕掛けも何もないとほまきまきのことである。

すると曹はそれについて紹介をした。

「ああ、こいつは『神器（セイクリッド・ギア）』だよ。」

「セイクリッド・・・ギア？」

「ああ、不思議な力を持つレアアイテムだな。」

「こいつはその中でも上等の代物『神滅具（ロンギヌス）』シリーズさ。」

「おいおいそれってまさかそいつは……」

キンジはそれを聞いてまさかと聞くと曹は喜びながらこう言った。

「そうさ、こいつは嘗て『イエスキリスト』を刺殺した曰く付きの槍『黄昏の槍（トゥルー・ロンギヌス）』だよ。」

そう言いながらキンジはその槍を観察していた。

確かに聖なる武器だけあって何か嫌な感じがしたのだ。

すると曹は『トゥルー・ロンギヌス』を構えるところ言った。

「さてと……仕切り直しと行こうぜ？キンジ!!」

曹はそう言いながらキンジ目掛けて突撃した。

そんな中である空間があった。

全てが黒で覆われた世界。

その中である一匹の……ナニカが感づいたのか雄たけびを上げた。

ぎやおおオオオオオオオ!!

その時はすぐそこまで・・・追っていた。

決戦 後編。

「!!この感じは」

高はレスティアと戦っている間に上から何か予感を感じて攻撃から遠のいた。
無論それは李や楊も同じであった。

「おい、これって……」

「ええ、頭領……本気ね。」

そう言っている中黒歌も何か感じた。

「!!……この嫌な感じ……まさか!?!」

そう言う和高はレスティア達に向かってこう言った。

「如何やら我らの主は……本気になってしまったようです。」

一方、天井では……。

「そらそら、どうした遠山キンジ?」

「うるせえ！」

キンジは大声でそう言いながら攻撃を躲していたが躲しているのは槍の刃ではなく・・・光線であつた。

「何だよその槍はよ!?!」

トランスフォーマーの兵器かと聞くと曹は笑いながらこう答えた。

「ハハハ、違うぜ遠山キンジ。これが神器の力だ」

「こいつは大昔からこう言う武器らしくてな、昔はこいつを使う奴をバケモノ呼ばわりして町一つを滅ぼしたようだぜ?」

そう言いながら曹は光線を撃ち乍ら接近戦に打って出た。

「ちいい!!」

キンジは毒づきながらも応戦しようとして脇差を振り抜くも・・・。

バキイイン・・・と脇差が砕け散つた。

「何イ・・・!!」

キンジはあまりの事に防御となりそれを曹は見抜いて・・・蹴り上げた。

「グフー！」

何度か天井に当たつてそのまま電車から落ちそうになるも・・・。

「くおの!!」

キンジは黒刀を刺すことで免れた。

「ウオオオオ……。」

キンジはそのまま何とか天井に上り直すが曹はキンジに向けてこう言った。

「そいつは悪手だぜ遠山キンジ？ 神器相手に普通の武器じゃあ通じねえぜ。」

そう言う曹はこう告げた。

「さてと……ここで降伏してくれるとありがたいんだがなあ？」

そういうとキンジはこう答えた。

「ああ……確かにそうかもしれないが……。」

「が？」

「たかが通じねえ如きで降伏何てそんなの……絶対嫌なんだな。」

そう言うキンジは懐から『デザートイーグル』と『ピースメーカー』を抜いてこう

言った。

「武偵憲章第十条『諦めるな、武偵は決して諦めるな。』！」

「それに従ってそして……手前の信念に従って戦ってやるさ!!」

そう言う曹は……。

「あははははは、太棒了富山金吉（最高だぜ遠山キンジ）!!」

曹は中国でそう言うところ続けた。

「いやはや、ここまでおもしれえ奴は殺したくねえからな。」

「少し手荒にして納得させてヤルカ？」

そう言いながら曹は黄昏の槍を構えてそう言うときンジは内心こう考えていた。

「(さてどうするかだ。何せあいつの武器は想像以上にヤバい奴だ。・・・」

まあ、今まで阿保みたいに常識から外れた連中と戦ってきたからな。いつも通り戦つ

て・・・あいつらのいる所に帰りてえな。)」

「(だからさ、父さん、兄さん。・・・力を貸してくれ!!)」

そう思いながら銃を構えると・・・拳銃が・・・光り輝いた。

「!!」

「何だ!!」

その光景にキンジはと曹は驚いているがある光景が見えた。

そう・・・あの・・・全てが黒で染まった・・・空間。

はあ!!

・・・(ハ)は。

——目覚めたか？

・・・誰だ？

——俺の声は聞こえてるな？

・・・何処から!!

——まあ、未だ目覚めたてで・・・調整中だから仕方がないか。

・・・一体何の話だ!!

——だが何れ、俺はお前に逢う。

・・・だから誰なんだよ!!お前は!?

——その時までくたばんじゃねえぞ？

——相棒。

「はっ!」

キンジはその声と同時に目を見開くと拳銃の形が・・・変わっていたのだ。

「何だ・・・こいつは・・・」

『デザートイーグル』は竜の顔のようなものが付いており、

何やら灰色の球のようなものが中央に付いていた。

そしてそれは『ピースメーカー』も同じであった。

すると曹はそれを見て・・・さらに笑ってこう言った。

「ハハハ!!まさかここで神器に目覚めるとはこいつはお前、

中々・・・你一个没人的人、奥? 耶(トンでもねえ奴だよ、お前は)!!」

そう笑っている曹は笑い転がるような勢いで笑った後にこう言った。

「いやあ・・・本当に面白いなお前はよ。」

そう言い終わった後に曹はこう締めくくった。

「さてと・・・これで五分と五分だ。心置きなく・・・続けられるな!!」

そう言つて曹は黄昏の槍を持って突撃してきた。

「ちい!!」

キンジは取り合えずガンカタをしながら防戦していた。

「そらそら、どうしたよ遠山キンジ!? その銃は飾りかよ!!」

「良く回る口だな!!」

キンジはそう言いながらも矢張り防戦一方であった。

然しキンジももう何が何なのか分からない状況であるのだ。

然も嘗てザビーを使ったようにデータが出ないためにどうしようもないのだが

キンジは破れかぶれでこう言った。

「だあ、くそが!!こくなつたらやけど!!」

そう言つてキンジは曹から離れて銃を構えて・・・発砲した。

「軌跡は見えてるぜ!」

曹はそう言つて黄昏の槍で防御して・・・槍に着弾すると銃から・・・

音声が届こえた。

『break』

その音声と同時に黄昏の槍の着弾した箇所が・・・砕けた。

「何・・・・・・・・だと・・・・・・・・!!」

曹はそれを見て驚いているとその砕けた衝撃で体勢が崩れて・・・

落ちそうになった。

「!!」

「あぶねえ!!」

曹が落ちかけそうになるのを見てキンジは手を伸ばしてその手を掴んだ。

「くおのう・・・・・・・・!!」

「やめとけ、お前も落ちちまうぞ!!」

曹はそう言つてキンジの手を離させようとするとキンジはこう答えた。

「生憎これも武債の性なんぞな。」

「武債憲章第1条『仲間を信じ、仲間を助けよ。』!! ってな」
そう言いながらキンジは引つ張り上げようとすると・・・
何故か軽くなっているのに気づいたので舌を見ると・・・。

「旦那!」

「主」

「頭領!」

李、高、楊が曹の足を掴んでいた。

それを見たキンジはほっとした様子で下の人間に向けてこう言った。

「手を放すぞ。」

「やれ!!」

李がそう答えてキンジは手を離すと三人で曹を中に入れた。

それを見てほっとしたキンジは二丁拳銃を見てこう思っていた。

「一体何なんだこれは?」

そう思っていると・・・拳銃に異変が起きた。

「?」

突如拳銃が黒い塊になってそのまま・・・キンジの中に入っていった。

「へ？」

キンジはそれを見て何故と思っっているが……。

「ええええええええええええ!!」

それを言う人間は誰もいない。

新しい始まり。

「いやあ、負けた負けた。こんなに清々しいのは久しぶりだぜ。」

曹はそう言いながらも東京駅で笑っていた。

結界を解除した後、キンジ達は着くまでの間、どこの神社に行つたとか、流派とかを語り合っていたのだ。

そして勿論黒歌の事も話してくれた。

「・・・成程な、そいつは確かに裏切るわなあ。」

曹はそう言いながら呆れていた。

黒歌は主殺しで『SS級逸れ悪魔』に認定され、莫大な賞金がかかっているのだが本人曰く、未だ小さい妹を無理やり強化させようとして殺したようだ。

それを聞いた曹はインド神話の『須弥山』に相談しておこうと言つたのだ。

ま、向こうからすれば悪魔側の弱みを政治的に握れると思えば嬉しい事だと
言っていた。

そしてキンジにある相談を持ち掛けた。

それは・・・。

「はあ!?!俺と『義兄弟の盃』を」

「ああ、交わして欲しいんだ。」

曹はキンジに向けてそう言ったのだ。

「正直お前さんの力は欲しいんだが俺の下に着いたとしても

『藍幫（ランパン）』に来れば勢力争いになってあつという間に内乱になっちまう。」

「そうなるなら今後起きる戦争に備えてお前さんらと武偵関係の

『同盟』組みがてら義兄弟の盃を交わして公私ともに協力関係を結びたいと

思ってたんだがどうだ?」

曹はそう言ってキンジを見るとキンジは少し考えていた。

そしてこう聞いた。

「何で『イ・ウー』に入ってたんだ?」

そう聞くところ答えた。

「ああ、簡単さ。組織の為だよ。」

上客だからと言って肩を浮かせてそう言った。

用はお互い利害関係であつたのようだ。

それを聞いたキンジは嘘じゃないかと考えこう決めた。

「分かった。お前と『義兄弟の盃』を交わそう。」

「それでこそだ。あ、それとお前が7、俺が3な」

それを聞いてキンジは驚いてこう言った。

「はあ、何でだよ！お前が兄じゃねえのかよ!？」

そう聞くと曹はこう返した。

「あのな、俺はアンタに負けたんだぜ？そうになると強いお前が兄、

俺が弟になるんだよ。」

それを聞いてキンジはマジかよと思っていると曹はこう続けた。

「それとだが、もし中国に行くなら俺を頼れよ。精一杯の持成しを

してやるよ。」

そう締めくくったのだ。

キンジと曹の盃は駅の外で執り行われた。

未だ人でごった返すがキンジと曹はお互い注がれた水の入った盃を見ていた。

先ずは曹が飲み、そしてキンジが最後に飲み干した後に楊はこう言った。

「これをもって、我らの同盟は締結したとします。」

日本と中国、二つの国の武偵が協力関係を結んだ瞬間であった。

それを見ていたレスティア達は拍手していた。

これをもって修学旅行Ⅰは終了した。

そして暫くして……。

「遠山君！早く早く!!」

屋上にテ飛鳥がキンジを急かしていた。

飛鳥は防弾制服・黒を着ていた。

これこそ、チーム編成の写真撮影するのに使うのだ。

よく見たら全員同じ服だった。

無論髪留めもリボンも全部黒。

これが仕来りなのだ。

そんな中でキンジは蘭豹に渡すチーム申請用紙を見た。

チーム名『黒桜』

メンバー名

◎遠山キンジ（アサルト）

○服部飛鳥（レザド）

伊達 焰（アサルト）

豊川 夜桜（アサルト）

式風 紫（インフォルマ）

巫神楽 華毘（アムド）

レスティア・J・ダルク（アンピキユラム）

レティシア・J・ダルク（コネクト）

となっていた。

何で自分がリーダー何だと言うと全員口を揃えてこう言った。

「「「「え、遠山君（キンジ）（さん）以外に
考えられないから「「「」

詰る所押し付けたという事だ。

そして全員配置に着いた。

キンジは少し斜めに。

レスティアとレティシアはお互い顔を向くように。

飛鳥は少し上向きに。

焰はニヤリと下向きに

夜桜は斜め右向きに

華毘は上に

紫は下側。

そしてキンジは蘭豹に向けてこう宣言した。

「チーム『黒桜』！遠山キンジが申請します!!」

そしてカメラ越しで見ていた蘭豹は少し笑顔になってこう言った。

「9月23日10時00分チーム・『黒桜』・・・承認・登録！」

腕時計を見ていた蘭豹はカメラを振り上げてシャッターを押すとバシャつとストロボが閃光を弾いた。

だが彼女たちとキンジは知らなかった。

「……この写真から数日後に新たに仲間が増えることなど予想だに
しなかったからだ。」

そして写真が終わったと思って着替えようとするとメールが届いた。

メールの相手は……。

「曹か、何のようだ？」

曹であった。

あの後、お互いメールアドレス交換をしたのだ。

そしてキンジはメールを開くと内容はこうであった。

『よう、兄弟。撮影は終わったかい？美女に囲まれて幸せだねえ』

「……何だこれは？」

何が言いたいのかと思ってスクロールさせるとしたにこう書かれていた。

『10月1日夜0時ホテル『テレシア』の大ホールにて待つ。レスティア姉妹と
黒歌も出席させるように』

「ホテル『テレシア』……一体何が起こるんだ？」

そう思いながらキンジは携帯を切った。

一方、曹はと言うと……。

「分かったよ、ああ……先生も来るのか……それじゃあ……
何やら誰かと電話していたようで切ると高がこう聞いた。

「主、矢張り……。」

「ああ、始まるそうだ。」

そう言いながら曹は武偵校から見る空を見てこう言った。

「この日本で始まるようだ……。」

『宣戦会議（バンディーレ）がな。』

オリジナル怪人・ライダー・IS

ロイミュードNo125『ボムキル』

見た目は「風の谷のナウシカ」にでてくる「巨神兵」と思ってください。

このロイミュードはセカンドシリーズと呼ばれておりファーストシリーズとは違い人間の儘からでもロイミュード化できるのだ。

武器は脚部のブレードと頭部のキャノン砲である。

特にキャノン砲は爆発力で砲撃するためその威力は通常の戦車以上で桁違いである。

色は赤と黒のツートンカラー

トルーパー

見た目は「ガンダム 鉄血のオルフェンズ」に出てくる「グレイズ」に

テイルブレードを搭載させた奴

オオカミから変わった量産型ロイミュード

オリジナルをベースに量産されたがスペックがそれよりも低いいため比較的動物や弱

い人間に与えるようにしている。

武器 銃及び剣

テイルブレード*1

色は灰色

ナンバー113 「トルーパー・ヘッド」

見た目はトルーパーのバイザーが上半分割れている状態

トルーパーのまとめ役であると同時に司令官。

武器は変わらないがテイルブレードが頭に幾つも生えた状態である。

このロイミュードは時間停止ができる。

トルーパー・ヘッド・マスター

トルーパー・ヘッドがトルーパーを取り込んだ姿。

武器は全て大型の槍に集約してしまったため攻撃方法は限られるがその反面高い破壊力が保証された。

武装は爆発型大槍

アラクネマーク2

見た目はISの原作のアラクネの足が黒いタイプ

本機はトランスフォーマーのデータから作られた実験機。

幾つかの武装を搭載、実験した後にある基地に死蔵されるところを理子が幾つかの条件付きでそれを裏から譲って貰った。

武装 背面部プラズマキャノン*4

背面部ミサイルポッド

高熱発生型カッター*2

腕部バルカン砲*2

フアラオ眼魔

黄金のローブを身に纏い、頭部には交差した翼のヘッドバイザーが特徴の眼魔。

フアラオのデータがインプットされているため当時の武器が搭載されている。

本来なら固有武装が搭載されていたがI Sと同化したため以下の武装となった。

武装（本来）ガンガンランス（ビーストは鷹）

フィンビット*4

ランス*1

尚変身音声は『ファラオ！黄金の翼！太陽の化身！！王家の呪い〜〜！！』

仮面ライダーヘルローグ

バットフルボトルとギアーズフルボトルを組み合わせて出来た形態。

見た目は「仮面ライダー龍騎」から「ダークナイト」と「ビルド」から

「ヘルブロス」が合体したような感じ。

性能は基本型だがバットの影響でか隠密行動ができるので奇襲には最適なフォームである。

他にも登場させるからねえ。

それと変身は3Dプリンターを重ねたような感じである。

武装 バットアロー（見た目は仮面ライダー滅のアタッシュアロー）

仮面ライダーグレイブ

金一が変身した仮面ライダー。

見た目は黒と紫の仮面ライダーでレベル1は二頭身。

レベルアップすることで通常サイズになる。

ガシャットは『ソウルグレイブ』でこのゲームは魂だけの存在をプレイヤーが叩き落してポイントを稼ぐ。

武装は コントローラーサイス

変身は『レベルアップ！デッドセット！デッドバック！死を運ぶ

デッドクエスト！』

ISJー参五四型「灰墓」

第三世代型のISで主にISのハイパーセンサーの阻害やステルスに特化した機体。

篁技研が開発した機体で軽量であるがスピード特化に出来上がっているが

社長の武曰く……。

「これって対人戦特化じゃねえか？こういうの要らねえだろ？」

そうやってきたのだ。

第3世代の特徴はセンサーの無力化であり、ウィルスを与えることができる。

見た目は『ガンダムW』に出てくる『ガンダムデスサイズ』と『ガンダムSEED』の『フォビドゥンガンダム』を足して2で割ったような感じ。

武装 デスサイズ*1

腕部内臓アンカー*1

腰部搭載式荷電粒子砲*2

操縦者は 津村 斗貴子

ISJ―参参式型『桃火』

第三世代型のISで遠距離特化型。

篁技研が開発した機体で後方支援を主にした機体。

重火力型で辺りを一掃させることが出来る。

第三世代の特徴は『マルチロツクオンシステム』を応用している。

武装 二連式ガトリング砲*4（両腕に2基と背面部に2基）

ミサイルパック*2

操縦者は早坂 桜花

ロイミュードNo.248 『ファイター』

見た目は『アナザーカブト』を金属兵器風にしたやつ。

元々は試作段階のロイミュードをシャーロックホームズが完成させた奴。
主に格闘戦型であり武器はない。

色はオレンジ

『リツパー・ザ・ファイター』

ファイターにジャック・ザ・リツパー眼玉を使用した携帯。

両手に刃物が付いたことにより近接格闘戦が出来るようになった。

色はブラッドオレンジ

武装 近接格闘ソード*10

ジャック・ザ・リツパー眼魔

切り裂きジャックのデータがインプットされている形態。

両手に刃物が搭載されており近接格闘に優れている。

また、姿を消すことが出来るのだが今回は二重での使用の為に使えなくなった。

武装 近接格闘ソード*10

仮面ライダーグレイブザビー

仮面ライダーグレイブと仮面ライダーザビーが組み合わさった姿。

本来二つのライダーシステムを同時にすることなどありえない考えで出来た仮面ライダー。

出力が二乗された代わりに体の反動が大きい為、あまり使用は進めない。武装はグレイブとザビーが使っていた武器が全般。

仮面ライダーコールドウルフ

見た目は「仮面ライダー01」に出てくる『仮面ライダー亡』。

ウルフルボトルの能力でもある機動力強化と冷蔵庫フルボトルにおける氷結能力が組み合わさった姿。

武装は『アイスクロー』

両手首に搭載されている武器で凍らせてから斬るという二重効果を

併せ持っている。

武装 アイスクロー*2

第7章 螺旋のメイドの過去（バック） バンディーレの宣誓

そしてチーム編成が終わって暫く経ったある日の朝。

「よう、兄貴。おはよう。」

「・・・学校でその言葉は止めてくれるか曹?」

「何言ってるんだよ兄弟、俺達は盃を交わしたんだぜ?もう義兄弟の
関係じゃねえか。」

曹はそう言ってキンジの肩に手を掛けると曹はキンジに向けてこう聞いた。

「所で兄弟、今夜・・・って言うか夜12時空いてるか?」

「夜12時って夜中だろ?何もしてねえと思うけど何でそんな遅くに?」

「こいつは『イ・ウー』を壊滅させた兄弟が来ないと始まらねえんだよ。」

『『イ・ウー』って・・・!!マサカお前が言っていた『戦争』って奴かよ?』
キンジが耳打ちしてそう聞くと曹はこう答えた。

「まあそんなところだ、後でジャンヌ達にも教えておけよ?場所はメールで
知らせる。」

じゃあなと言って曹が去って行くとレスティア達がこう聞いた。

「どうしたんですかキンジさん？」

「曹が何か言っていたようだけど何なのよ？」

2人がそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、実はな。」

「成程・・・でしたら今日の夕食は軽めにしておきましょう。」

「そうね、それと武器の方も支度しておかないと。」

「色々大変だよなあ。」

キンジはそう言いながら空を見上げた。

そして夜中。

「メールによれば……ここか。」

キンジはメールの内容から何かを行う場所に向かつて辿り着いた先は……
ホテル『テレシア』であつた。

「何でホテルなんだ？」

「高そうですねえ。」

「こんな所でお茶会でもするのかしら？」

キンジ達はそう言いながらホテルに向かうと高が出入り口前で待つていた。

「お待ちしておりました遠山様、ジャンヌダルク一向。」

そう言うが高が裏口に向かつて行くところ言つた。

「こちらです、ホテルは既に閉まっていますので。」

「だろいな。」

この時間まで開いているとなると完全にブラック企業だなとそう思いながら裏口から入っていった。

そして暫くすると大ホール屁と向かって行つてたのでキンジはこう聞いた。

「なあ、高。一つ良いか？」

「何でしょう？遠山様。」

「ここで何が行われるんだ？俺達全然聞いていないんだ。」

「ああ、それは入れば分かると思いますよ？それに中には相当数の人間がいますからね。」

高はそう言いながら大ホールの扉を開けた。

その先にいたのは・・・20以上の丸テーブルに座っている

100人近い人間たちであった。

すると高がキンジに向けて耳打ちしてこう言った。

「言っておきますがここにいる人たちは全員表社会、裏社会の大物や

仲介人ばかりです。僕たちの組織の人間もいますのでどうか何も起こさない様に宜しく願います。」

そう言うと高は立ち去って行つた。

「俺達も座るか。」

「そうですね。」

「よく見たら席に指定場所はないようだしね。」

「そう言いながらキンジ達が座ると近くにいた眼鏡をかけた黒の長髪の男性がキンジに近づいてこう聞いた。

「君か、曹が言っていた兄と言うのは？」

「アンタは？」

キンジは懐にある拳銃を構えると男性が手を前に出してこう言った。

「待て、私は君と戦いに来たわけではない。私は『藍幫（ランパオ）』の者だ」

「そう言うとキンジはそうかといって懐から手を出すと男性はこう名乗った。

「私は『ウエイバー・ベルベット』。『藍幫（ランパオ）』では先生と

呼ばれている。今回は上からの命令で『バンディーレ』におけるルール説明を聞きに来たのだ。」

「『バンディーレ』？」

「この会議の名前だ。昔から各勢力が鎬を削る戦いだ。」

「・・・マジかよ。」

「何でそんなドンパチものに俺を巻き込んだんだ曹とそう思っていると

『ウエイバー』はこう続けた。

「それに『藍幫（ランパオ）』だけではない。『FBI』に『MI6』、『亡国機業』、『教会』、『魔女連合』、『カオスブリケード』と言った

裏の勢力や表の警察組織に『スターク・インダストリーズ』と言った
軍事会社、各国の神話勢力までもがこの会議の為に来ているぞ。」

そう言いながら周りを見ていると確かに『スタークインダストリーズ』の名が入った社章を身につけた恐らく裏関係のビジネスマンであろう、
こんな状況にも関わらず落ち着いている。

それにと言つて他の所も見た。

グラマーなスタイルを法衣で纏った修道女、黒の三角帽、漆黒のフード、肩には大ガ
ラスと言つた絵にかいたような魔女、修道士の服を身に纏つた

白の手袋を付けた男性にあれば本物なのかどうか分からないが

黒に近い茶色の大きな尻尾を振りながらキンジの方を見てニコニコと
手を振る女性、それらを見る中で後ろから・・・声を掛けられた。

「お茶は如何でしょうか？」

そう聞こえた先にいたのはメイドであつた。

よく見たら他にも色んなメイドがいたのだが彼女は・・・違う感じをした。

何せ美人だったのだが・・・見た目は凄いものであった。
綺麗な白に近い銀の長髪。

背筋を伸ばしてしつかりとした目つき。

だが目に映ってしまうのは・・・その服とスタイルであった。

胸元と二の腕が丸見えで少し動くだけで胸が揺れるのだ。

然しキンジはそれを見てヤバいと直感で感じて彼女の顔に目を向けると

こう言った。

「いや、大丈夫だ。」

「畏まりました。」

そう言つて立ち去るのを見てほっとしたキンジであった。

そして暫くすると・・・曹が壇上にながってこう言つた。

「皆様、よくお集まりいただいたことに感謝しております。

私は今日の司会を担当致します『曹 蒙匿』と申します。」

そう言つて頭を下げると曹は全員に向けてこう言つた。

「それでは『イ・ウー』が崩壊したことで求めるものを巡り、戦い、奪い合いをモットー

とする我々の世界の為の戦争『バンディーレ』を

ここに宣言いたします！」

ルール説明

曹の言葉と共に席に座っている面々が少し喋り始めていると曹はこう続けた。

「尚、皆様にお茶などを出しているのは『MI6』の面々でございます。」

「・・・マジでか。」

キンジはそれを聞いて嘘だろうとそう感じた。

MI6と言えばイギリスにある非公式政府機関。

と言つても公式に開示されることがない為他国の情報を引き抜けることが出来るという長所を持っているため表立ってイギリスに反論できない。

然し何故メイド服なのかと思つているがまあ取敢えず目に毒だとそう思つて視線を曹の方に向けてと曹はこう続けた。

「この中には初めての人間がいるようだが何時もと変わらないさ、

裏で求めるものを巡って奪い合うというシンプルな物さ。」

そう言っているとある一人の人間の声が響いた。

「皆さん・・・あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか？」

そういうのは大人っぽい体つきを金糸の刺繍を施した純白のローブに包んで

小さな十字架を白い長手袋で持ち、ふんわりとした長いブロンドの髪を持つ・・・その隣に冗談みたいにデカイ剣を置いている女性はこう続けた。

「バチカンは『イ・ウー』を必要悪として許容しておりました。高い戦力を有する彼等がどの組織と同盟するか最後まで沈黙を守り続けていた事で

誰もが互いに手出しできずに長き休戦を実現できたのです。私はバチカンは・・・教会ひいては勇者、天使勢力が戦乱を望まぬ旨を伝えるに」

「出来る訳がねえだろメーヤ、この偽善者が！」

彼女の斜め横の机でそういうのは黒いローブを身に纏った・・・典型的な魔女であった。

すると隣に座っていた青い長髪の胸元が大胆に露出した赤い制服の女性がこう言った。

「けどよ『ベラルーシア』！こいつら休戦なんて全然してねえじゃねえか！」

「だからと言ってここで戦闘はやめろ、上に何言われるか」

たまったものではない。」

そういう少女の眼帯は逆卍を斜めにした

旧ナチス・ドイツの「ハーケンクロイツ」が刻まれていた。

すると『メーヤ』と呼ばれた少女は『カツエ』と呼ばれた少女に向けてこう言った。

「黙りなさい『カツエ』グラッセ」。この汚らわしい深い害虫。お前たち魔性の者共は別」

「おいおいおいお前このご時世に何言っているんだよ時代錯誤女！

今は『絃神条約』における三大勢力の戦闘禁止と

アタシらみたいな魔法使いが表立って仕事できるこのご時世に

何言ってるんだか!？」

「何言ってるんですか？ 貴方達は『カオスブリケード』とか言う

テロリストに協力しているではありませんか。」

「ハン！それがあたしらの仕事でな!! 傭兵は戦争が起きてなんぼってな!!」

「ならばその汚い性根事八つ裂きにして火刑にして神の身許に送りましょう!」

「やってみろや!!」

そう言いながら戦争だというと今度はウエイバーがこう続けた。

「それに『メーヤ』とか言ったがそんなの無理な話だ、

我々が『イ・ウー』を手出ししなかったのは単に同盟関係を築いて

攻撃させないようになっただけであって水面下の戦争は行われていたのだよ。」

そう言いながら懐から葉巻を取り出して一服しているとこう続けた。

「然しこの状況では過去のバンディーレを少し調べたのだが

どつちに転んでも不和が起きて内戦確実だが曹、

その辺りは無論考えているのだろうか？」

そう聞くと曹はこう答えた。

「ええ、無論ですよ先生。そもそもこのバンディーレに於いては

そのルールについて変更すると言ったものです。」

そう言うとき曹は右手を見せてそこから3本の指を見せるとこう答えた。

「それではルールからいくが先ず一つ目は『何時誰が誰に挑戦することを許し

決闘に準じているが手段は問わず一対一の上であるならばどの様な事も許す。』」

「2つ目だが『際限なき殺戮を避けるため決闘に値しない雑兵は使わない事。』こいつは先ほどの奴よりも重要だから覚えておくように。」

それを聞いてキングジは成程とこう思っていた。

「(こいつは組織同士でやりあうが総力戦じゃなくて

それぞれの戦闘タイプの代表選手を選出して戦いあつて決めて戦うことが出来ない人間だけになつたら白旗つて事だな。」

昔みたいな一騎打ちみたいな感じだなとそう思っているとこう続けた。

「そして3つ目だが」

『戦闘は主に《師団(ティーン)》と《眷属(グレナダ)》の双方の連盟』となつているがこのご時世互いに浅かったり深い因縁があるよな各々に。」それを聞いて互いにその通りだなとそう思っている。

このご時世互いの組織は殺し殺されたり因縁がありまくっているのが今のご時世だ。

縁がない・・・裏社会でそんなの有り得ない話だとそう思っていると曹は全員に向けてこう言った。

「そこでだ、互いに期間を設けてその間に多くの戦果を挙げた者達の勝利としたいんだがそれでドウダ？」

『！！！！』

それを聞いて全員が目を見開いて驚いていた。

詰まる話がバトルロワイヤルだ、それならば遺恨など残るはずがないと思ふからだ。

そして曹は全員に向けてこう締めくくった。

「帰還は1年だ。最後に注意事項だがたった一つだ……」

『表社会に手出しすれば残った全員がその組織を潰す』。以上だ。」

そう言つて下がろうとすると……ウエイバーがこう聞いた。

「曹よ、一つ聞く。」

「何でしょうか先生？」

「勝利条件はどうするのだ？まさかこの1年の間に参加につかせた

組織の数などと言うものか？」

それを聞いてそう言えばと全員が曹を見ると曹はにこりと笑つてこう答えた。

「ああ……それなら」

「ここにいますんでしょ！『イ・ウー』の残党共!!」

「キンジさん・・・今のつて。」

「ああ・・・アイツだな。」

キンジはレスティアの言葉を聞いて思い当たったのか頭を抱えていると・・・扉を壊してその人間が入ってきた。

その人間の名は・・・。

「今月のママの最高裁に備えて良い手土産が手に入れられたわ！全員逮捕よ！」
アリアであった。

「ほら、来たぜ？」
賞品がなとそう呟いた。

バンデイーレ終了

「これはこれはようこそアリア、バンデイーレに。」

「曹！アンタが『イ・ウー』に協力していることは既にお見通しよ!!

ここににいる全員まとめて数穴よ！」

アリアは曹に向かってそう言うがキンジ達はあの馬鹿はと頭を抱えていると曹は笑ってこう続けた。

「其れは嫌だな、何せバンデイーレはもう・・・始まっちゃったからな。」

曹はそう言った瞬間に・・・アリアの足元に魔法陣が突如現れた。

「何よこれ!?!」

「拘束用の魔法陣だ、弦神島の技術も応用してあるから

ちよつとやそつとじゃあ外せないぜ？」

確かにそうだ、曹の言う通りアリアは一步もそこから動けていないようだ。

すると曹はグローブを付けるとアリアに向けてこう続けた。

「それじゃあ頂くと行こうか？『殻金』をな！」

そう言った瞬間に曹がアリアの心臓ら辺に向けて掌底をぶつけた瞬間に

アリアが力なく倒れたと同時に・・・先ほどの茶色の大きな尻尾を持った女性が曹目掛けて鬼火を放つがそれをどこからか李が現れて槍で弾き飛ばすところだった。

「おいおいおい『京妖怪』がウチのボスになり曝しているんだよごら!」

「其れはこつちの台詞ヨ!まさか貴方達『殻金』を戦果として見せる為に外すなんて正気の沙汰ではないようね!!」

怒りながら尻尾を持つ女性がそう言った瞬間にアリアから・・・

緋色の光の靄が立ちこみ始めた瞬間にアリアの体の中から複数の緋色の光球が飛び散った。

すると尻尾を持つ女性がキンジに近づいた瞬間にこう言った。

「手伝いなさい!私が一つ取りますから!!」

「わ、分かった!!」

キンジはそれを聞いて慌ててそう言う就先ほどの尻尾を持つ女性が札を使って先ず一つを搦めとるともう一つは先ほどのメーヤと呼ばれていた女性が剣で

光球を受け止めラクロスの様に光球を投げ返すがアリアから少し遠かったのでレティシアがテニスの要領でそれを受け止めてアリアに向けてぶつけた。

そして残った5つはそれぞれ何処かにへと消えていった。

「これにてバンディーレを終了とする!さあ求め奪い戦え諸君!!」

来年の今日の午前零時にお会いしよう!!」
曹がそう言って・・・バンディーレは終わった。

アリアはあの後尻尾を持つ女性が泊っている部屋に寝かせておくとキンジを見てこ
う聞いた。

「貴方が遠山キンジ君ね。」

「あ……ああ、アンタは？」

キンジがそう聞くと女性はこう答えた。

「初めまして、私は『京妖怪・九尾狐（くびこ）組国内政治担当の『赤璃』と申します。以後お見知りおきを。」

「あ、こいつはどうも。」

キンジがそう答えると『赤璃』はこう続けた。

「それにしても曹は一体何を考えているのかしら？まさか『殻金七星』を破るだなんて。」

「なあ、一つ聞いても」

「『殻金七星』が何かでしよう？」

「!!……ああ、詳しく聞きたい。」

「其れはそうねえ、メーヤちゃんも加えてからでも良いかしら？」

「ああ……構わない。」

キンジがそう言うのとホテルに備え付けられている電話でメーヤを呼ぶと暫くしてこ
う返した。

「今からちよつと買い物するから30分後にとらしいわ。」

「そうか、なら少し待って……何で俺の名前を知っているんだアンタ？」

「「「「だアアアアアアアアア!!」」」」

それを聞いて全員がズッコケてしまった。

取敢えずは寝ているようで幸せそうだったこともあり大丈夫だなと

そう思っている『赤璃』はこう言った。

「取敢えずだけど『緋緋神』にはならないようね。」

「『緋緋神』?」

キンジは『赤璃』の言葉を聞いて何だそれはとそう思っていると・・・

インターホンが鳴った。

「「「!!!」」」

全員がそれを聞いて先ずはキンジが拳銃を構えてホテルにある覗き窓を見ると

そこで立っていたのは・・・。

「あとう、呼ばれたメーヤです。」

メーヤと・・・。

「おおい兄貴居るかア?」

曹が立っていた。

その後ろにはウエイバーもいた。

「・・・メーヤさんと曹がいた。序にウエイバーさんも。」

「……はい？」

「いやあ兄貴がいるって事は高から聞いていたからな、丁度良かったぜ。」

「貴方良く私の前に出れましたね。」

「ソレニツイテハこちらからも謝罪したいところだ、だが賽は投げられた以上は此の儘やるしかない。」

曹、『赤璃』、ウエイバーの順で互いにそう言うのとメーヤが持っている

大量の酒瓶と菓子パンが入った袋を置いて酒瓶を取り出すと

コップに入れながらこう言った。

「それで『赤璃』様……何の御用ですか」

そう聞きながら……殺気を放っていると『赤璃』はメーヤに向けて

こう言った。

「遠山キンジに『緋緋神』についての説明をお願いしたいの、補足説明は私がするから。」

『赤璃』はメーヤに向けてそう言うど仕方ありませんねとそう言うってキンジに向けて・・・こう言った。

「それではお話ししましょう・・・『緋緋神』を。」

緋緋神とは？

緋緋神

それは恋と戦を好む色金。

それに憑りつかれた人間は闘争心と恋心の2つを激しく荒ぶらせて

戦争を起こさせるといふ厄介な存在で妖怪とも違う全く別の存在。

「現にだけど今から700年前にそれに憑依された人間が当時の帝を蠱惑して戦を起こしたから当時の遠山様の先祖である侍と星伽の巫女によって

討ち取ったんだけどその死体から摘出された金属がこれまた厄介だつて事が分かつてね、当時の巫女達が数週間祈祷した後には造られたのが《殻金》。」

「それがアリアの体内にある《緋弾》だっけ？ シャーロックがそう言っていたな。」

キンジは赤璃の言葉に続いて思い出すかのようにそう言うところ続けた。

「《殻金》は鍍金の様に被せて《法結び》、つまり体内に《緋弾》の持つ

強力な力のみを使えるようにして《緋弾》の中にある意志の様なナニカを

《心結び》、つまり憑依を妨害するように出来ていてね。まあ大体三年もすれば

完了出来るんだけど・・・時間が足りなかったのかしらね？どつかの誰かさんがそれを解いてしまったのよねえ〜。」

赤璃はそう言いながら曹に向けてジト目で睨みつけるが曹はそれに対して笑ってこう答えた。

「いやあ、俺もまさか成功するなんて思わなくてな。出来なかつたら

出来なかつたで《緋弾》に関係する資料やシャーロックがかき集めた各国のアンダーグラウンドな情報を景品にするつもりだったんだよ。」

アハハハハハハハハハとそう言うがキンジはそれを聞いて頭を悩ませた。

何せアンダーグラウンドの情報など他国が知った日には目を当てられない程の結果が待っているからだ。

それなりの国ならば外交で有効活用するかもしれないが独裁政権ならば

それらを使って世界を思い通りに出来るんじゃないやねえのかと

そう確信してしまうほどである。

「あのお・・・一つ宜しいでしょうか？」

「「??」」

レスティアがナニカ質問があるようであると思っているとレスティアは

こう続けた。

「新しく《殻金》を作るこつて出来ないんでしょうか？
今なら未だ間に合うかと」

「其れは無理だな。」

それを聞いてウエイバーがこう答えた。

「《殻金》と言うのは霊媒に使用される宝石類に巫女の莫大な魔力を注ぎ、
錬成した後に百年もの間色金と馴染ませる必要があるのだ。

到底間に合わんだろうな。」

「はあ!?!じゃあアリアは今何時爆発するか分からない

爆弾を持つていてることで事じゃない!?!」

レティシアがアリアを指さしてそう言うのと赤璃はこう返した。

「だからこそその奪還です。幸いにも二枚はこちら側ですから後五枚を

集めなければなりません。」

「・・・アリアが緋緋神になる時間はどれくらいなんだ?」

キンジがそれを聞くと赤璃は暫く考えて・・・こう答えた。

「勘ですが数年後と言った所と言いたいところですが彼女の精神状態次第では
早まるかもしれません。今日明日なる訳ではありませんので大丈夫でしょう。」

「・・・そうか。」

キンジはそれを聞いて当面の危険はないなと思うとメーヤは酒瓶を開け乍らこう言った。

「兎に角今は奪還ですよね！散った《穀金》はこちらも教会の伝手を使って調査させましょう!!」

そう言いながら酒を飲んでいる光景を見てキンジは何やっているんだと思っているのとレスティアがこう答えた。

「超偵の中には一種ステルスと言う上位がいましたその人たちは自分の体にある特定の物質を消費してしまうのでそれを摂取しなければ戦えないんです。

経口摂取する物質は人それぞれですけどね。」

そう言うと同じやあお前らもかとキンジはそう聞くがレスティアはこう答えた。

「いえ、私達は少量で充分なんです。例えば私でしたら《火》

つまり空気ですので偶にですが酸素を取り込む程度で良いですし
レスティアは水分です。」

「成程な。」

詰る所燃料みたいなものだなとそう思っていると・・・メーヤがキンジに向けてこう聞いた。

「トオヤマさん、聞いて宜しいでしょうか？」

「何でしょうか？」

「カナ先輩は今どこにおられるか知っておられますか？」

「!!!」
それを聞いてキンジは目を見開いて驚いたのだ。

何せカナと言うワード、つまり《金一》の存在を知っているのだ。

いったい何故とそう思っているとメーヤは自己紹介した。

「カナ先輩の弟さんに自己紹介しておかないとですね、

私は《メーヤ・ロマーノ》。年齢は18歳で国籍は母と同じイタリアですが

父親は日本人のハーフでして日本では《明夜》、

『明けない夜はない』という意味で『明夜』です。カナ先輩とはバチカン市国で

二年生・・・あ、イタリアでは5年生まであるんです。それでこちらでは

中学三年生時にアサルトのカナ先輩と共に犯罪捜査をしていたのですが何と言うか
気が合うと言うか・・・波長が合うと言うかそんな感じでした、そういえば聖書の暗唱
法を教えたなら直ぐに覚えたのに驚いたのを今でも覚えていますけど

今どちらに？」

メーヤはそう聞いていた。

だがキンジにとつてはどういえば分からなかったがキンジは・・・

暫くしてこう答えた。

「あんなメーヤさん、よおく聞くんた。」

「？」

「カナは・・・姉さんはもういない。今年の夏に任務で・・・殉職した。」

変装決め

「カナ先輩が……殉職？」

「ああ、俺の目の前で亡くなった。とある犯罪組織の壊滅の際に皆を庇って。」

「そうでしたか……カナ先輩ハ何時も言っていました。」

「？」

『私にはたった一人の家族がいる、だから何時か帰つて来た時に

今度は一緒にいたいなって思ってるの。』と……何時も口ずさんでいました。」

「!!」

キンジはメーヤの言葉を聞いて涙ぐみ始めた。

もう二度と逢えない……自分にとっては兄でもあり姉でもあつた存在。

2人は何時も自分の事を想ってくれていた事にこう思っていた。

「(今度は一緒に何て……もういられねえじやねえかよ……!!)」

そう思っている中でメーヤは十字架を持ってこう呟いた。

「神よ、どうかかの者達の魂に安らぎを与えんことを……アーメン。」

そう言つて十字を胸の上で刻むとメーヤは酒を飲みながらこう続けた。

「私は明日……いえ、今日の朝には教会に電話した後にバチカン市国に戻ろうと思つてます。カツエの事もありますし恐らく彼女たちは

カオスブリケードのいる場所に潜伏しているかと。」

「あのう……一つ宜しいでしょうか？」

「？」

「カオスブリケードって何なんですか？」

レストイアがメーヤに向けてそう聞くとメーヤはこう答えた。

「簡単に言えばテロリスト、それも人間ではなく悪魔や墮天使、

魔法使いなどと言った裏の生命体を中心となつたテロ組織で

自分たちに都合の良い世界を作ろうとしている存在です。」

「……『イ・ウー』とはまた別の意味で、いえ、

それ以上に厄介な組織ですね。」

「その通りです、ですからそれに対してあらゆる勢力が同盟を結ぶという『弦神条約』が締結され私も今はその後方部隊として配属されています。

特に彼女たちとは前々から因縁の中でして必ずや殲滅させて貰います!!」

そう言いながら袋から菓子パンを取り出して食べていると取敢えずはと

曹はキンジに向かってこう言った。

「まあ、取敢えずは目先の事だな。『殻金七星』の収集だがどの組織にあるのか分かったら連絡するぜ。」

「元々は貴様が始めたことだが私の一応組織の一人としてやらなければならんようだな。」

ウエイバーもそう言つて立ち上がるところ続けた。

「私は明日帰るが遠山キンジ君、今後も曹とは仲良くしてくれないか?」

「まあ・・・何とかするよ。」

「頼りにしている。」

ではと言つてウエイバーが出て行くのと同時に曹も出て行く

赤璃がキンジに向けてこう言つた。

「それでは私は彼女を見はつておきますので今日の所は隣の部屋で

泊っておきなさい。」

「ああ・・・じゃあ宜しく願います。」

キンジは赤璃に向かつてそう言つた後の部屋から出て行って曹から部屋のカードキーを貰つて取敢えずの所は一泊した。

そしてあの後家に帰って学校に来て普通に授業受けたり（アリアとは昼休みに『あいつらは何処だ！ママの冤罪連中は!?!』ときぎやーすか問い詰められたので

適当にはぐらかした）とあった中で放課後に体育館に集合と言う事もあって現在いるのだが何故集合させられたのかと言うと・・・こう言う理由だ。

「ガキども！それじゃあ文化祭でやる『変装食堂（リストランテ・マスケ）』の衣装決めをするぞ!!」

蘭豹がそう言いながらドンと大型ライフルを撃つと綴先生がこう続けた。

「そんじゃあ各チーム同士で集まって待tげほげほ!!」

「・・・煙草吸うなよな。」

キンジは綴先生の咳を聞いてそう眩きながら集まった。

『変装食堂（リストランテ・マスケ）』とは早い話が

コスプレ喫茶見たいな物であるが着た衣装によつてその職業をそれらしく演じないといけないのだ。

これは潜入捜査の際にちゃんと察知されにくくさせるためである。

そんな中で飛鳥がこう言った。

「遠山君、くじ箱が来たヨ？」

「ああ、悪いって・・・何でいるんだ『清明』。」

「おはようございます先輩〜。」

くじ箱を持ちながら現れたのは蒼髪の何やら眠たそうな少女。

『阿辺 清明』と言い武偵ではキンジと同じく『アサルト』で

主に銃火器（特に大型）を好んで使っており彼女が使用した際に爆発音など日常茶飯事と言えるものである。

因みに寝る事が趣味であり『昼行燈』と言う仇名が付いている。

「くじは直し一回迄ですから慎重にねエ〜ふあ〜。」

「お前本当に眠たそうだなって言うかまあ何時もの事だな。」

キンジはそう言つてくじを引いて出てきたのは・・・

『神主』

「チェンジ。」

そう言ってもう一度引いた。

さっきのままだと白雪が何か言いかねんと判断したためであり英断であろう。そして二度目が出てきたのは……。

『警官（警視庁・巡査）』

「真面だな。」

取敢えずはなとそう言うのと次にレスティアが引いたのは……女の子側とは引く奴が違う為予め2つある。

『巫女』

「巫女ですか……SSRの人に聞いてみましょう。」

「あの白雪以外はね。」

レティシアがそう言って引いたのは。

『ウエイトレス（アットホーム・カフェテリア）』

「チェンジ」

「ア、駄目ですよレティシア。変えちゃいけません。」

「そんな殺生!?!」

ガーンと言った表情でレティシアレスティアを見た。

「次は私だね。」

そう言つて飛鳥が引いたのは。

『婦警』

「あ、遠山君と同じつばい奴だ。」

「次はアタシだな。」

次に焰が引いたのは。

『泥棒（漫画《キャッツアイ》風）』

「・・・何だこれ？」

恐らく読んだことないのであろうこの剣馬鹿はとそう思っているがやバイと

キンジはそう確信した。

あの衣装はびっちりタイツ衣装だからこいつが来た日にはとそう思つてキンジはこ
う思つていた。

「（こいつとは離れて接客）」

そう確信したキンジであつた。

「じゃあ次は農じゃの。」

そう言つて夜桜が引いたのは。

『チャイナドレス』

「これを儂が!?!..いやこれでキンジを」

「(何だか変なこと言っているような感じがするけど聞かなかつた事にしよう。)」

「じゃあ次私。」

最後に紫が引いたのは。

『魔法使い』

「チエンジ」

そう言っただけにすぐ様に変えたのだが次に引いたのは。

『アイドル』

「.....」

「(くじ運悪すぎだろうが!!)」

そう思っているがいや待てよとこう考えた。

「(こいつ確かネットアイドルやってたから意外にはまり役かも)」

そう思っていると同時に紫がアイドルの服着て踊っているとこを想像して・

「(駄目だ!こいつ躍らせたら色々ヤバイ!!特に俺が!?)」

そして特に胸がとこいつが踊ったら色々大きなあれが揺れる事

間違いなしと直感したキンジは心に決めた。

「（絶対にこいつらとは離れて接客しよう!!）」

そう心に決めたキンジであった。

「じゃあ最後はうちっす！」

そう言つて華毘が引いたのは。

『魔法使い』

先ほど紫が引いて引き直すきっかけとなつた奴であつた。

「まあ、良いっすね！」

「（良くねえよ!!）」

それしたらお前のスタイルで色々とヤバいだろうとキンジはそう思いながら先ほどの決心をもう一度決めていた。

因みにだがアリアが『小学生』を引いて同じメンバーである白雪、レキ、理子、辰巳、
尽は大爆笑だったのは付け加えておこう。

因みに辰巳は科学者で尽はダンサーである。

服の調整

×切前日。

本来ならば学園祭はまだ先なのだが事前準備して迎えないといけないため

それよりも前に終わらせないといけないのだがもし破れば・・・武偵名物蘭豹、

綴先生、そしてメデイカの『我那覇』における厳しい体罰フルコース（内容は上から折檻、拷問、人体実験と言った最悪のオンパレードである為

これには全員が期日を守って行動する。

その仕上げは徹夜でやる為教室の光は絶えず輝いている。

そして夜9時、キンジは自身の制服を準備しているがこれは簡単である。

何せ新品の制服を揉んで使用感を出させたりバッジを下に引っ張って

ピンの穴を広げている中でキンジは壁際の衝立で区切られたゾーンを見て何だあれ
と思っていると・・・聞き慣れた声が聞こえた。

「うわあ、レスティアちゃんって肌白くて綺麗。」

「そういう飛鳥さんだって綺麗じゃないですか。」

「何言っているのよ！姉さんが綺麗に決まっているでしょ!!」

「何言っているんですかレティシア!？」

「(女子の着替えゾーンだった!?)」

最悪だと思つて今薄つすらと見えた影からすぐ様に視線を逸らしてヤバイと思つているが更に声が聞こえた。

「これ着れつてかよ!?!どう見ても痴女じゃねえか!!」

「焰よ、観念して着るのじゃ。儂だつてこれじゃし。」

「それ着てたらずぐにでも中華レストランのアルバイト出来そうだな。」

「・・・貰えんかのう?」

「すまねえ、冗談だから真に受けるな。」

「まあぶつちやけた処・・・紫、お前それ大丈夫なのか?」

胸元結構露出しているだろ?」

「・・・大丈夫、キンジ以外は全員物と思えば良いだけ。」

「スミマセンが後ろ結んでくれませんか!?!結びづらくて」

「儂がやるのじゃレスティア。」

「これを着るつて・・・まあ良いけど。」

「なんかこの中で真面なのつて私だけだよね。」

「「「「確かに。」」」」」

等と聞こえているためにどうしたものか考えていると……

武藤が消防士姿で現れてキンジに向けてこう言った。

「キンジ、こつちだ。ここからの角度だとよく目を凝らせば女子の影を

それも今お前のチームだから集中力次第じゃあシルエットショーがおがめ」

「痴漢行為で逮捕！」

「ひでぶ!？」

キンジは武藤に向けて正拳突きで顔を殴る飛ばした中で……猫の鳴き声が

聞こえた。

「ニャー。」

「……黒歌か。」

キンジはそれを聞いて目を向けるとそこには黒歌（猫バージョン）が

ベランダから開いている窓に入ってきた。

「あれキンジの猫か？」

「ああ、京都旅行で猫カフェの店員さんから譲ってもらったんだ。」

そう言いながら黒歌がキンジの座っている脚の間に入るとゴロゴロと良いながら寛

ぎ始めた。

「へえ、動物から嫌われることで有名なお前にも懐いていくれる動物がいたとはやつ

とお前も脱ぼつちだな！」

「それ言われても嬉しくねえよ!!」

キンジはそう言いながら背中をバシバシと叩く武藤をどかせると・・・
また聞き慣れた声が聞こえた。

「済まないっす！遅れてしまつたっす!!」

そう言つて現れたのは・・・大胆にも胸元曝して黒いブーツを履いてきた華毘がそこにいた。

「お前なんつうもん着てんだよ！」

「ああ、これっすか？こいつはちよつと古着屋にあつたのを貰い受けて

縫い直した奴っす！」

「どう見てもサイズ合つてねえだろうが！」

キンジはそう言いながら華毘の今の姿に対して指さした。

何せサイズがあつていないのかどうか分からないが胸元がぎちぎちだったのだ。
今にも破れそうな服を見てキンジはレスティア達に向かつてこう言った。

「ちよつと悪いけど華毘を頼みたいんだが！」

「あ、分かりました！」

それを聞いてレスティアが出てきたのを見てキンジは・・・

(。D。)ポカーンとしていた。

巫女となれば黒髪の日本人がほぼ確実に着ているために外人が着るとコスプレ衣装にしか見えないのだがレスティアが着ると何故だか分からないが・・綺麗になったのだ。

紅白に加えて金色の髪が綺麗に纏められており美しくなったのだ。

近くにいる自称幼馴染染よりもこっちの方が清廉な感じがしていると思ったキンジであつたがレスティアはこう聞いた。

「あのうキンジさん・・・似合いますか？」

そう聞くとキンジはしどろもどろになつてこう答えた。

「・・・凄く綺麗だ、本当に巫女みたいだ。」

「・・・ありがとうございます。／／／／／／／／／／」

それを聞いてレスティアは赤面しているとキンジも赤面で然も頬を掻いていた。そんな中でレスティアはそう言えばと言つて慌てて華毘を着替え部屋に入れさせた。

そんな中で飛鳥が出て行くとキンジに向けてこう言つた。

「遠山君、どうか、似合う？」

そう言つて女性警察官の服を見せたが・・正直な所見ても良いのか

迷うところだ。

何せ……。

「(胸が見えるって言うかマジで見えそう!!)」

今にも壊れて弾き跳びそうなボタンを見てヤバいと思ったキンジであったがキンジはこう答えた。

「ああ、似合うぜ。それとボタンちゃんとしておけよ。」

「うん！分かった。」

そう言つて（＊、σー、）エヘへと笑っている飛鳥を見てキンジはこう思つていた。

「(そーいやあお前がいたからここ迄いられたんだよな?)」

そう思いながらキンジはこう考えた。

「(俺達コンビで切り盛りしたら合格だろうか?)」

そう思いながらキンジは着替えようとしていた。

裁判

その後も・・・着替えは続いた。
焰。

「キンジ・・・これ如何思うよ?」

「痴女か!?!」

「其れ今言うか!!」

ぴちぴちのボディースーツを着ていた。

夜桜。

「キンジ、これはどうかのう?」

「・・・焰よりもまだマシだな。」

「そうじゃな。」

「大きなお世話だ!!」

ちよつとスリットが大胆である事とミニスカと胸の谷間を露出している
タイプであったが為大胆ではあるがまあマシ。

紫。

「キンジ……」

「……ダウトだ。」

「やっぱり」

胸の谷間が完全に上半分が露出している。

レテイシア。

「どうかしら？」

「おお……中々良いんじゃないか。」

「当たり前でしょう。」

ちよつとそう言う系の店ならイケるなど内心そう思っていた。

そしてキンジの方も着替え終わった後に焰がこう言った。

「それじゃあ内訳何だけどアタシと夜桜、キンジと飛鳥、紫はレスティアと

レテイシアでペア組むって言うのはどうだ？」

「その理由は何だ？」

「アタシと夜桜ならコンビネーションばっちりだし紫は人見知りだろ？」

だったら人付き合いの出来るレスティア達に任せたら楽だろ？」

それでキンジと飛鳥なら警察コンビで何とかなるって寸法だ。」

「華毘は？」

「あいつは一人でも大丈夫だろう?」

「まあな。」

「うちはそれ良いっす!」

華毘も納得したためにそれでよしとなったが為解散することになった。

そして家に帰った後に黒歌と共に食事していると携帯電話から電話が鳴った。
相手は・・・防人であった。

『キンジ、今良いか?』

「ええ、何ですか?」

『ああ、今度神崎かなえの裁判が始まるだろう?その日の裁判官が

決まっちゃたんだが一つ言いたくてな。』

「?」

『任務として神崎かなえの護衛を頼みたい。』

「・・・理由は?」

『この一連の事件についてだがどうも裏で誰かが糸を引いている。

シャーロックホームズとは違う何かがあるから気を付けておけよ。』

「分かりました。」

『それじゃあな。』

「一体何なんだろうな?」

キンジはそう呟いてレスティア達と食事して寝た。

そして裁判の日

裁判官は『三雲 法男』。

社会的弱者に対して温情をかける『司法の良心』と呼ばれている。

そんな中で判決は。

「判決を申し渡します、被告人『神崎かなえ』は無罪放免とする！」

「!？」

それを聞いて検察側が異議申し立てを宣告しようとする『三雲』は
こう聞いた。

「何か不服でもあるようですが検察は何が納得いつていないのでしょうか？」

「いや・・・その・・・!!」

何やら言いにくい理由があるようで検察が口籠っていると・・・部屋に誰が入って
きた。

眼鏡をかけた・・・神経質そうな男性であった。

「『村家 綱人』ですね？」

『大河内』・・・!?』

検察官はそれを聞いて恐怖している中で大河内と呼ばれる男性がこう言った。「私の事を知っているのなら話が早い、私がここに来ている理由も分かるだろうがな。」

「な・・・何のことやらさっぱり」

「貴官は現検察内部にいる旧『武偵第0課』と何かしらの繋がりがあると言うタレコミが私の下に入ってきたのだが」

「!!!」

「それと捜査権限で貴様の銀行預金にも調査してみたが神崎かなえの裁判の前後に必ず送金されていた。然も裁判官全員にもだが

『三雲』裁判官には?」

三雲にそう聞くと三雲はこう答えた。

「確かにあったが送り返してやった。私達は法の番人だ、その我々が法を犯して罪なき人間を有罪にするなどあつてはならない事だ。」

「それと警察が押収してきた証拠が何故か検察の段階ですり替わっていたし警察のデータバンクにも偽装されていた。それを検察官でもある貴様が見逃したとは到底思えないのだがそれは?」

「あ……あああ。」

『村家』が口をパクパクして椅子からずり落ちていくと大河内は『村家』に向けてこう言った。

「『村家 綱人』、貴方を職権乱用による捜査妨害、証拠偽装の罪で逮捕する。また、神崎かなえの裁判に関わっていた全員にも調査することとなるから……
覚悟しておけ、貴様の検察官としてのテーブルがないどころか下手すれば物理的に首が無くなる事も頭に入れておいたほうが良い。」

「……………」

それを聞いて顔を俯かせる『村家』が近くにいた警察官に連行されて

大河内はこう言った。

「それではまた、今度は裁判所で。」

そう言って去って行ったのを見て『三雲』は神崎かなえについてこう続けた。

「それとだが貴官が望めば今回の事で慰謝料における裁判が執行できますが
どういたしますか？」

それを聞いて神崎かなえは少し考えて……こう答えた。

「いいえ、私はしません。今は只娘と共にいたいので。」

「……分かりました、では慰謝料については後程弁護人の話を」

聞いておいて下さい。アドバイスがありますので」

そう言つて『三雲』は全員に聞こえるようにこう言つた。

「それではこれにて閉廷！」

そう言つて今回の裁判は終わつた。

「そうか、やはり逮捕……だが連中の事だ。既に証拠は消している、何かあればこちらから……はい、ええ。それでは」

防人はそう言つて電話を切るところを眩いた。

「あの狐長官、どう考えても既に仕込みはしているだろうな。ま、・・・第二次世界大戦から生まれた遺物は消しておいて損はないだろうな・・・もうこの国にこれ以上力を付けければ暴走する恐れがあるからな。」

そう言いながら防人は空を見上げた。

今は蒼白い空、だがいつこれが黒く染まるかは・・・誰にも分からない。

護送中

そして検察庁の何処か。

「くそが！何で『神崎かなえ』を無罪にしたんだ!!」

「おまけにこちらがテコ入れしていることがバレた以上まあ手出しできない様に警察庁が圧力かけてきてるって連絡が入った。それと小野田警察長官からも釘刺してきたし法務省からも例の狸が今の大臣に警告してきたってさ。」

「完全に八方塞がりね、こうなったら手の出しようがないわね。」

「多分国連軍・・・裏で糸を引いていそうだね。」

「くそが！『緋弾』がどれ程の価値か知らないくせにあいつらは!!」

それにこの国の上層部もだ!!『これ以上の力は災いしか生まれない』だと？

ふざけんじゃねえ!!平和ボケしている売国者共が!!」

そう言いながら元『武偵第0課』は言い争いをしていた。

そして裁判所近くでは。

「そうですか、彼女が釈放。分かりましたわ、でしたら予定通り……無論約束は守りますわ。ええ、それでは。」

そう言つて近くに停めてある車の中で前にキンジに訪ねたメイドが同じ服を着て携帯電話で誰かと会話していた。

そして通話を終了させて新たに電話をかけた。

「はい、こちら***。撒き餌は終わりましたわ、これで***に楔を打ち込むことに成功致しましたわ。それに私も個人的な用があります……大丈夫ですわ、決して裏切らないと誓います。私を匿ってくれた恩は必ず……はい、それでは。」

そう言ううと彼女は胸の谷間から小さな箱を取り出すところを呟いた。

「彼が一体何者なのか？そしてどうやって奴を倒したのか見せて頂けますわ。『遠山キンジ』様。」

そう言つて近くで動き始めた護送車を見て動き始めた。

「やつと終わったな。」

「はい、これで全部。」

「やつとアリアから離れられるわねえ。」

キンジ達はそう言いながら護送車の後ろに警護されているパトカーの中で
そう呟いていた。

そのアリアは今回回の裁判を聞き終わった後に檢察の人間に対して
銃を向けて発砲しかけたため前のパトカーにいる。

まあ本人は喜んでいた。

何せあと少しで母親と一緒に暮らせるのだから。

そして何よりも自分たちの安全が確保されるのだから、そう思いながら

警護していると後ろから車のエンジンの音が聞こえた。

一体何なんだと思つて後ろを振り向くとそこで目に映つたのはイギリスの車会社

『ジャガー』が開発した『XJ』である。

よく見ると全ての窓が黒くされており見えにくくなつていた。

それを見たキンジは防人のあの言葉を思い出した。

『この一連の事件についてだがどうも裏で誰かが糸を引いている。』

シャーロックホームズとは違う何かがあるから気を付けておけよ。』

「まさか・・・!!」

キンジは隣で運転している警官に向けてこう言った。

「悪いが今の車の後ろに付けてくれ！」

「え？何で」

「良いから!!」

キンジは慌てた様子で急かすとレスティア達がこう聞いた。

「あのうキンジさん、どうしましたか？」

「・・・さっきの車でしょ？あの黒ずくめ。」

「ああそうだ！何で公道で黒の然も窓まで黒い奴があるんだ!？」

「まさか!？」

レスティアは驚いた様子でそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、狙いは恐らく」

そう言いかけた瞬間に護送車に・・・突っ込んでしまった。

その数秒前、アリアの乗っているパトカー。

「あの検事今度会ったら風穴ヨ風穴!! だけどママと暮らせるしそれに・・・」
そう言っただけでアリアは後ろにいろであらうキンジを考えてこう呟いた。

「私じゃなくて全部アイツのおかげ・・・一体何してたのよアタシは!!」
そう言いながら自身の力の無さを嘆いていた。

自分は今まで『イ・ウー』を追うために幾つもの功績を上げる為に
努力を積み重ねてた一人の戦士で戦ってきたのにキンジは違っていた。

力があるだけではなく多くの人間からの助けを持って『イ・ウー』を

壊滅することに成功し、自身の憧れでもあつたシャーロックホームズを打倒したのだ。

それを思い出して此の儘イギリスに戻つて良いのかと自問自答していた。

自身を母親以外で認めてくれた先祖を倒したキンジを超えられないと言う事はリュパン家の理子なぞ足元にすら掴めない程強いと言う事になつて

自身はホームズ家にすら認めて貰えない。

自分にあるのは只の力だけしかない事に憤慨していると・・・隣にいた警察官がこう言つた。

「危ないなあ、割込みするなんて。」

「?」

アリアは一体何なんだと思つていると前に突如現れた

黒のジャガーの『XJ』がある事に気づくと前から何かが落ちてきたのが見えた。

黒い弾がコロコロと落ちてきたその時に・・・閃光が奔つた。

「ウワアアアアア!!」

「キヤアアアアアア!!」

突然の事で急ブレーキかけた瞬間に後ろの護送車と衝突して更に

後ろのパトカーともぶつかった。

「くそ……皆大丈夫か？」

「はい……何とか。」

「こっちも……だけど運転手が。」

レティシアがそう言つて運転席を見ると……悲惨な光景であつた。

運転席は潰れていて中にいた警察官が潰されて死んでいた。

「ああ……クソが！」

キンジはそう言つてレスティア達と共に車から降りると……悲鳴が聞こえた。

「キヤアアアアアアア!!」

女性であろう悲鳴を聞いてキンジ達は護送車の前に出てみると

そこで目にしたのは……更に酷いものであつた。

周りにいるのはナイフで刺されたであろう警察官と……日本刀を構えて警戒しているアリアと……見覚えのあるメイド服の女性がそこにいた。

「お前は確かバンデイレの時にいた」

キンジがそう言いかけるとメイド服の女性はこう答えた。

「あら？覚えてくれたこと感謝いたしますわ、改めて初めまして

私は元『イ・ウー』の『ベル・ファレスト』。」

『『イ・ウー』だと……!!』

キンジはそれを聞いて驚くがこう続けた。

「目的は……まあ大体見当がつくな。」

そう言うと『ベル・ファレスト』はこう答えた。

「はい、私の目的はただ一つ……後ろの護送車にいる『神崎かなえ』を

確保致すがために貴方方には消えて貰います。」

そう言った瞬間に『ベル・ファレスト』は持っているナイフを構えて

攻撃してきた。

強襲

「レスティア！『神崎かなえ』を守っててくれ！レティシアは俺と一緒に奴を抑え込むぞ!!」

「了解！」

2人はキンジの命令を聞いてそう答えるとベル・ファレストに2人は向かって行くがそこに・・・乱入者が割り込んだ。

「何しているんだ『神崎』！」

「ちよつと邪魔よ!!」

「こいつは私が相手するわ！すつこんでなさい!!」

アリアはそう言つてベル・ファレスト目掛けて二丁拳銃で仕留めようとするとベル・ファレストは両手の指にそれぞれ挟まっているナイフを一度に放つた。

「!!」

アリアはそれを見て賺さずに上空に飛んで避けるがある物を見て・・・目を見開いた。

彼女は背中から・・・シヨットガンを抜いて取り出したのだ。

チャキと構えてアリアの顔に狙いを定めようとするレティシアが・・・
ダイヤモンドダストをベル・ファレスト目掛けて放って光のチャフにして
アリアを見えにくくさせるが其の儘・・・放った。

アリアは即座に頭部を構える様に腕を交差してガードした。

武偵校の制服を防刃素材で出来ているため緊急的な防弾チョッキとしても
役立つのだが・・・足に関してはそうはいかなかった。

「くっ!!?」

アリアは直撃した足を見て痛がるような感じであったが其の儘護送車の
屋根の上に落ちていった。

「あのバカ!」

「何やってんのよ!!」

キンジ達はそう毒づきながら攻撃しようとするベル・ファレストは
シヨットガンを・・・銃身を手に持たせて鈍器のような感じで

レティシアの黒刀を弾き当てた。

「銃で・・・!!」

「メイドたるもの、あらゆる状況に備えられなくてどういたしましょう。」

そう言いながらベル・ファレストは左足を使ってレティシアを蹴り飛ばした。

「ちいい!!」

レティシアは氷を作って受け身を取りながら滑るかのように後ろまで下がった。

恐らくは其の儘彼女の後ろに回り込むであろうと確信したキンジは黒刀を抜いて煙球をベル・ファレスト目掛けて投げつけると彼女はそれをナイフで落とすが

当たった瞬間に煙が辺りに充満した。

「!!」

ベル・ファレストはしまったと思って辺りを見回していると

キンジとレティシアは互いにベル・ファレストの・・・左右の真後ろから攻撃してきたのだ。

「(勝った!!)」

内心そう思った瞬間にベル・ファレストの髪が・・・鋭くとがった。

「!!」

2人は何故とそう思っているとベル・ファレストの髪が2人目掛けて・・・放たれた。

「がアアアアアアア!!」

2人はガードしながら引いて行った。

然し何発か当たったため額から僅かであるが掠ったのであろう傷があり

血が流れていた。

するとそれを見ていたベル・ファレストは髪を元に戻してこう言った。

「成程、貴方がシャーロックホームズを倒したのは

偶然だけではないようですね。」

そう言っているとは何処からか・・・赤いポルシエがやってきたのだ。

するとその乗っている中世的な男性が突如・・・発砲してきた。

「!!!」

それを見て全員が避けると灰色のブレザー制服を身に纏った男性が車を停めてアリアに近寄るとこう言った。

「酷い怪我だがアリア、僕に任せてくれないか？直ぐに終わるから。」

そう言った瞬間に男性は素早い治療でアリアの足と中にあつた弾丸を抜き取るとう言った。

「一応応急処置だから動かないで、直ぐにかたをつけるから。」

そう言つて屋根から降りてベル・ファレストに目を向けるとこう言った。

「君が『イ・ウー』のメンバーだね。」

「ええ、その一人でございますが。」

「ならば君は僕の敵だ。」

そう言った瞬間にサーベルとイギリスやアメリカのエリートのみが扱う事を

許されたオートマチック拳銃『SIG SAUER（シグザウアー） P226R』
通称『SIG』を構えるところ名乗った。

「僕の名前は『エル・ワトソン』！初代シャーロックホームズの相棒の末裔だ！君は僕
の大切な人を傷つけた!!ここで君を討つ!!」

そう言つて『エル・ワトソン』はこう続けた。

「本来貴族たるものが正統の手順を踏まずに決闘、それも奇襲における

これの非礼は承知の上だが・・・僕は君を許せないのだね。」

そう言つたとアリアに向けてこう言つた。

「アリア、君は目を閉じていて。レディーに血なまぐさい所は見せられない。」

そう言つたとレティシアにもに向けてこう言つた。

「その君もだ、レディーがこんな所に来ては」

「馬鹿じゃないのアンタ？」

「へ？」

「アタシは好きでここににいるのよ、依頼でもあるしそれにアタシはアンタみたいに自分の心に疾しい物抱えてる奴の言う事なんて信じれるかしら？」

「!!」

それを聞いて『エル・ワトソン』は何やら目を大きく見開いているとこう続けた。

「そして最後にアタシらのボスはキンジヨ！不服だけどアタシはこいつの実力は高いつて事知っているからアタシはこいつの言う事しか聞かないわ！」

お分かりかしらと言っている中でベル・ファレストは今の現状を見て・・・くすりと笑ってこう言った。

「ウフフフ、中々面白い状況ですわね。人数的にも時間的にもそろそろ限界ですので私はこれで。」

そう言うときスカートの中から・・・煙幕用の手榴弾を大量に落として辺り一面を全て

煙で覆った。

「待て！」

『エル・ワトソン』はそう言うが彼女は消えて……賺さずに
キンジの背後に立ってこう警告した。

「これは私を満足させてくれたお礼として一言……『エル・ワトソン』は
信用なさらないように。」

そう言つて消えていった。

「……何だったんだ一体。」

キンジはそれを聞いて一体何なんだと思ひながら空を見上げる事しか
出来なかつた。

エル・ワトソンの編入

そして数日後。

「それでは皆さーん！ スペシャルゲストとしてマンチエスター武偵高校から来た、
とってもカッコいい留学生を紹介しまーす。」

高天原先生がそう言つて後ろから現れたのは……

この間ベル・ファレストの戦闘に途中で入つてきたエル・ワトソンであつた。

「マジかよ。」

キンジはそういう中で殆どの女子がエル・ワトソンを見てキヤーキヤー黄色い声を上げていたが……一部はこうであつた。

「ねえ、姉さん。彼つて」

「ええ、間違いなさそうですね。」

レスティア達がそう言つてしているとエル・ワトソンは自己紹介を始めた。

『『エル・ワトソン』です、ニューヨークではアサルト、マンチエスターではインケスタ、こつちではメデイカに配属することとなります……僕は自分の武偵技術に最後の磨きをかけに来た。』

「(嫌に少し高めな声だな?)」

キンジはそう思いながらエル・ワトソンを観察していた。すると女子勢の一人がこう言った。

「王子様みたい!」

そう言うのとエル・ワトソンはこう答えた。

「家は王家じゃない、子爵家だよ。」

それを聞いた途端に何人かの目が金になっていた。

「肌綺麗!女子よりも。」

「・・・ありがとう。」

それを聞いてエル・ワトソンは白い歯を見せて笑顔になった途端に何人かが失神した。

すると他の女子がこう聞いた。

「ねえワトソン君、何部に入るの!?!」

「予定はないけど強いて言うなら・・・水泳カナ。」

それを聞いてキンジはこう思っていた。

「(何だ、あいつも神崎と同じでカナツチなのか?)」

そう思っていた。

すると他の女子がこう反論した。

「駄目だよ帰宅部なんて!!」

「そうよそうよ! 武藤みたいな変態になつたりしたら」

「誰が変態だ!!」

武藤はそれを聞いて反論するが聞く人がいなかった。

その後一般教科ではエル・ワトソンはキンジよりも先に幾つもの授業を答えていた。

特に英語はネイティブ・スピーカー同然であると同時に全ての教科で満点であった。

そして専門校区でキンジはレスティア達と別れて『*αEXAS*』（レスティアとレスティアも乗ることがある為サイドタイプを装備している）に乗って向かおうとすると焔がキンジを止めてこう言った。

「キンジ、悪いけど夜桜送ってつてくれないか？席が入らなそうだな。」

「焔お主!？」

「じゃあなあ。」

焔はそう言つて足早に立ち去つて行くとキンジは夜桜にヘルメットを渡すところをこう言った。

「乗れよサイドに。」

「・・・うむ。」

それを聞いて何やら少しむくれていたが夜桜は其の儘乗つて専門校区に向かつて走つていった。

そして昼食ではキンジが紫からの話を聞いてマジかと言った。

「何？俺のこれまでの人間関係をエル・ワトソンが洗い出している？」

「うん・・・依頼から私達迄全部。」

「何が目的なんだ？」

キンジはそう呟きながらレスティアが作ってくれた『あんかけ焼きそば』と『チャーハン』を食べているとそう言えばとレスティアはこう言った。

「私の所でも聞かれました、『遠山キンジ』はどんな奴だと？」

「それで？」

「ちゃんと言いましたよ、『キンジさんは優しくて誰よりも弱い人たちを守るために戦う強い人です』って。」

「そ……そうか。」

キンジはそれを聞いて少し照れているのか頬を掻いているのですがとこう続けた。

「他の人達の話も聞いていましたが大多数が『遠山キンジは女たらし』って言われてまして私は酷いと思いましたよ！」

「女たらしって……俺がいつたらした」

「え？結構垂らしこんでるじゃないのアンタ？」

「ハイ？」

レティシアはそう言っってこう続けた。

「だってさ、姉さんに飛鳥、夜桜、紫、雪泉先輩、

それに夏休みにプールで会った初音ヶ丘とか恐らくだけどアンタその依頼で出会った女の子で何時もいた様な女子名前上げなさいよ？」

「「「!!!」」」

それを聞いて全員が目をじろりと向けるとキンジは冷や汗交じりでこう思っていた。

「俺が一体何やらかしたんだよ〜!!」

そう思っって仕方ないと思っってこう言っった。

「そうだなあ、何時も一緒にいたとすれば依頼主でもあった

『ヴェルカ』だったな、あいつの親父さんがロシアの国防大臣でさ、

日本との友好とかで1か月間の間滞在していたんだけどその間に

あいつが『日本の学校に通って見たい』と言う訳でその護衛として

俺が選ばれてそこからだったな、あいつ妙に子供っぽい所があつてな、

何時も色々と引つ張られるんだけど神崎とは違つて・・・自分の非は

ちやんと認めて謝つたりするんだよなあいつ。」

そう言いながらキンジは笑つていると次にとこう続けた。

「次に『彩音』だな、花嫁修業同好会なんつう部活を作つていてさ、

まあ料理とかは俺自炊していたからそこるところを教えていたりして

それからは毎日部屋に通つてきてさ前に俺が『部室で教えても良いんだぞ?』と

言うとなんか顔を赤くして慌てていたな。」

「それは・・・。」

「成程な。」

飛鳥と焰はそれを聞いてああなと気づくがキンジはこう続けた。

「それで次に先輩だけど『光咲姫』さんだな、『ヴェルカ』が和菓子に

目が無かったから良く通つていてさ、そんな時にまあ・・・色々と遭つてな、

変装していたんだけど着替えようとして男子更衣室に入ると

アイツが丁度着替えている所に遭遇しちゃまって色々と話聞いてな、

そんでこう言ったんだ。『お前がしたいことをすれば良い』ってな、それであいつ昔から女の子っぽい事したいからって『ヴェルカ』と色々と

歩いていたんだけどな、それからだったなあいつが女の子の服になったのは。」

「・・・吹っ切れたって言うよりも他の理由があつたようじゃな。」

夜桜はキンジに向けてジト目でそういうがキンジは更に続けた。

「次に『祥子』なんだがアイツオタクでさ、俺が銃を持つていることを

知るや否やや武偵についての漫画を描きたいからって色々聞きまくってくるから流石に部外者に流す情報は最小限にしてんだけどあいつ何言ったんだと思う？」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

『今の貴方は強すぎですのでもう少し弱くして色んな女の子と

ハーレムしながら数多なる敵を倒すって言うストーリーにしますね!!』って

俺そんなに強いかな？」

「「「「え、何を今更？」」」」」

それを聞いて飛鳥達は何言っているんだと思つているとさいですかと

キンジは肩を落として更に続けた。

「つぎに『まつり』なんだがあいつ自転車部の人間でな、よく朝早くに練習している所を見ていたからそれが縁でトレーニングに付き合っているんだけど前に自転車のブレーキが利かなくなってもう少しの所で崖っていう所で俺が助けてそれからは何だか偶にだけど香水を付けていたな。」

「・・・もう完全に意識しているんじゃないんですか？」
レスティアはそれを聞いてぶくーつと頬を膨らませていた。

「それで次に『響子』なんだけど飛鳥と雪泉姉も会っているぜ？ほら、前に公園で虐められていた」

「アアアの子！」

「まさかの偶然ですね。」

「俺もだよ、向こうも俺の事覚えていてな。今じゃアイドルだぜあいつ。それでそれから偶に遊んだりしてたな。」

「最後に『馬蹄 理沙』先生、保険医なんだが前に弟に酒を飲まされて

犯されそうなどころを助けたことがあってな、俺の事も知っている事だったし仕事の打ち合わせに部屋を一つ貸してくれてたけど・・・何だよ皆のその顔？」
それを聞くと全員がジト目でこう言った。

「……………遠山（君、さん）キンジさんはやっぱり
女たらしだなあつて。」……………」

「心外だなおい!?!」

それを聞いて反論したキンジであった。

女の勘は鋭い

それから数日たつてある事が起きていた。

如何やらワトソンは更に範圍を広げていたのだ。

然も全部がキンジ關係で特に『イ・ウー』についてが殆どである。

それについて飛鳥がこう言った。

「多分だけど遠山君に何かあるんじゃないのかなあ？」

そう言っているがそれは強ち間違いでないであろう。

電話してみるとキンジが前に一月だけだったとはいえ通っていた

高校の教師でもある理沙先生から電話でこう言ったそうだ。

「久しぶりね遠山君。」

『お久しぶりです馬蹄』

「・・・理沙で良いわ、もうあの家とは絶縁したんだから。」

『ああ、そうなんですか・・・どうしたんです一体？』

「貴方の学校の同級生かしら？遠山君の事について調査していたわ、

貴方と關係があつた人間全員ね。」

『それで?』

「正直に答えたわ、私達は彼のおかげで助かったって。今じゃこの学校で貴方の伝説知らないわよ? 『美人女性達を虜にした白馬の王子様』って。」

『何ですかそれ!?!』

キンジはそれを聞いて大声でそう言っただけじゃあ切りますよと言うと理沙がちよつとマツテつと言つて……どすの効いた声でこう聞いた。

「優衣ちゃんから聞いたんだけど遠山君……キスしたって本当かしら……?」
『!!』

キンジはそれを聞いて背筋が寒くなるような感触を覚えるところ続けた。

「へえ……ホントウナンダ。」

『お休みなさい!!』

キンジはこれ以上はマズイと感じて電話を切ると理沙はそれに対してこう呟いた。
「……………意気地なし。」

その時の理沙の表情は……恋する乙女のような顔であった。

そして数日後

アサルトでの講義『戦略Ⅰ』を受講して帰ろうとしていた。

もう空は暗くなっておりもうじき夕日すら見えなくなるような感じであった。

「もう秋だな、サンマの旨い季節って所だな。」

そう呟きながら今夜何だろうなあと思いつつながら

キンジは帰路につこうとしていると隣にあるコネクトの裏口から数人の女子がキヤツキヤツと笑いながら出てきた。

そして持っていたであろう箒を校舎裏の鉄柵の向こうにある林に投げ入れて手メガホンでこう言った。

「なつちー、むつちー、後宜しくー!!」

そう言つて商業区画に向かって行くのを見てキンジは誰がいるんだと

思つて薄暗い中で掃除している少女2人を見てこう聞いた。

「誰かいるのか？」

そう聞くと・・・聞き慣れた声が聞こえた。

「あ・・・キンジ。」

紫がそこにいた。

するとどこからか・・・ガシャーンと言う音が聞こえたので何だと思つて

見てみると紫のすぐ近くに・・・もう一人いる事に気づいた。

それは・・・。

「『中空知』か？」

「そ、そそそその声はーと、おと、とおやま、おとこ、おとこやま君！」

「誰だよそれは？」

キンジはそれを聞いてこいつかーと思っていた。

中空知、彼女は紫と同じコネクトで仕事時は良いのだが私生活では・・・完全に駄目なのだ。

聴覚異常と言う音を極端に取ってしまふ症状を持っている為

常にびくついた感じの少女である。

よく見ると如何やらゴミ箱から落ち葉が大量に出ているのを見て転げ落ちたなど思つてキンジは紫に向けてこう言つた。

「手伝うぞ、もうすぐ夜だから送つとく。」

「・・・良いよ別に」

「仲間だから当たり前だろ？ほらやるぞ。」

「・・・うん。」

それを聞いて紫は少し嬉しそうな感じでそう言うときんじは中空知を見てある事に気づいたのだ。

それは・・・。

「お前眼鏡どうしたんだ？」

「あああああ、メガネ、これはその、じゅ、授業で、不調でして、

顔にボールが、えっと、体育の授業で、バレーボールが、ぶつけられちゃって、メガネが、不調でして、その。」

何だか緊張している様なのかどうか分からないがさっぱり意味わからんとキンジはそう思っていると紫がこう答えた。

「今日授業でバレーボールがあつたんだけどそれが中空知さんの顔に当たったから眼鏡が壊れてないの。」

「スペアは？普通あるだろ？」

「ううん、欲しい音声機材があつて高いから節約していてお金が無い。」

「・・・中空知に言っておいてくれ、次の休みに買いに連れて行ってやるって。」

「・・・一緒に良い？」

「構わん、俺が奢る。」

「じゃあ、伝えておくね。」

「・・・今度は普通の映画か何かにしろよ？」

「・・・努力する。」

キンジと紫は互いにそう言つて予定を紫経由で聞くとこう言つたそうだ。

「今度の日曜日か、お金卸しておくか今のうちに。」
そして互いに掃除が終わってキンジは2人を女子寮に送ってから帰った。

そして夕食中。

今日は『カニのオイスターソース風焼き』と『鳥の手羽先』と『湯葉』である。

そんな中でレティシアが如何やら曹達の力を借りてワトソンの情報を仕入れていたようである。

そしてレティシアがこう言った。

「あいつの『西歐忍者(ヴェーン)』って言うあの有名な秘密組織

『リバティー・メイソン』のスパイだって事が分かったんだけどアイツの顔を見て私思ひ出したのよ。」

「何だ？」

「あいつも『イ・ウー』のメンバーなのよ。」

「アイツが!? 何で・・・いや待てよ、そう言えばあの時。」

キンジは何か考えていると・・・曹から電話が来た。

「どうした曹？」

『兄貴・・・大変な事が起きちまったようだぜ。』

「？」

『メーヤさん覚えてるか？』

「メーヤ・・・何かあったのか？」

『ああ、遭っちまってる。先に動いたのは『リバティー・メイソン』だ。』

「・・・ワトソン。」

『正解だ、そして驚くなよ兄貴』

「？」

『《リバティー・メイソン》のワトソンが《M I 6》に情報と
メーヤさんの剣を交換条件にして《緋弾》を手に入れるって情報が届いた。』

エル・ワトソンを追え！

『《リバティー・メイソン》、イギリスにある秘密結社。

主に貴族の暗部で構成されており《シャーロックホームズ》も

その一人だつて言う噂がある程の組織だ。』

「何でその組織が《M I 6》と手を組むんだよ！同じイギリスだろう!？」

『ところが兄貴、そうは問屋が降りねえんだよなこれが。』

「?」

『《リバティー・メイソン》と《M I 6》、片や貴族主体だが後者は

女王陛下御用達の特殊部隊。命令権や戦闘指揮とかは主に《M I 6》が上でな、

《リバティー・メイソン》から見れば自分達よりも上の立場だ。

正直な所あつちの方が最も国に貢献していると言つても良い。』

「・・・だからだが何故奴が情報提供するんだ？ワトソンって奴は・・・あ!」

『どうしたんだよ兄貴大声なんて出してよ?』

「そういえばベル・ファレストって奴がこう言つてたのを思い出したんだ。!!」

「これは私を満足させてくれたお礼として一言……『エル・ワトソン』は信用なさらないように。」

「そう言ってたのを思い出したんだ……まさかあの事件は!!」

『兄貴、如何やら俺達の思っている答えは同じっぽうだぜ?』

「ああ……つまり。」

そう言つてキンジと曹は揃つてこう言つた。

『エル・ワトソンとベル・ファレストは繋がつていて

あの騒動はフェイク!』

キンジと曹はそう言つたと曹がこう言つた。

『兎にも角にもエル・ワトソンを止めなきやいけねえようだぜ兄貴?』

「その前に聞いても良いか?・・・何でメーヤさんが出たんだ?」

あの人はこの間飛行機に乗っているはずじゃあ?」

『簡单さ、《リバティー・メイソン》は教会にも顔が利くつて意味さ。

大体が十字教派だし大方緋弾についての情報提供とかつて理由で

おびき寄せたんじゃねえのか?』

曹があっけからんにそう言うところ続けた。

『急いだほうが良いぜ、奴らは今建設中の東京スカイツリーに向かっているつて情報だ。』

「済まない曹!この礼は必ずする!!」

『よせよ兄貴、俺達は兄弟なんだぜ?この戦に関係なく

俺はアンタに情報を送るつて決めてるし先生も了承してくれてる。だからさ・・・張り切つて暴れて来いよ。』

そう言つて電話を切つた曹に対して感謝しながらキンジはレスティア達に向けてこう言つた。

「済まないが支度してくれないか!!」

「一体どうしたんですキンジさん。」

「何があったのよ?」

レスティア達がそう聞くとキンジはこう答えた。

「走りながら話す!!」

そう言って部屋から出て行った。

すると外から宅配業者がそこに立っていた。

「ウオわ済まない!」

「いいえ・・・ああ、びつくりした。遠山キンジさんで宜しいでしょうか?」

「あ、はい。そうですか?」

『ZEX』からお届け物ですのでサインを。」

配達業者はそう言うのとキンジは仕方ないと言わんばかりにサインをすると配達業者はありがとうございましたと言って去って行った。

そしてキンジはもしかしてと思って開けてみると入っていたのは・・・

「何だこいつは?」

そう言っ出てきたのはザビーではなく・・・別の物であった。

青いベルトとそれに装備されている機械

そして何よりも目を引くのは2つのデータキーの様なナニカがあった。

蒼と黄色の2色でそれぞれ何かが描かれていた。

青い方は犬みたいな？

そして黄色い方は蜂でありそれぞれこう書かれていた。

青い方は『BALLET』

黄色い方は『SANDER』と。

そして手紙が同封されていた為急いで読むことにした。

内容はこうだ。

『キンジへ、ザビーのシステムは一度初期化しなければ直らなかつたため初期化したんだがその途端にあいつどっかに飛んでいっちゃまったから済まない。その代わりと言っちゃあ何だが新しく作った奴があるからそれ使ってくれ。変身方法は同封されているから。

防人 衛』

「マジかよ……」

キンジはそれを聞いて嘘だろうと思っっているが時間が惜しい為それらをぶんどる形で出して向かって行った。

「はあ!? エル・ワトソンとベル・ファレストがグル……」

だからあの時に大人しく退いたって訳か!!」

レステイシアが事のあらましを聞いてそう言うと言すとレステイシアがこう聞いた。
「ですが何故そのような真似を? 幾ら組織に於いて仲が悪いからって裏切るような真似を?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「分からねえが取敢えず今重要なのはメーヤさんを助けて緋弾を

手に入れる事だ!!」

キンジは2人に向けて目的を述べた。

緋弾の奪取とメーヤの救出と言う任務の中に於いてどうするべきかと

考えている中でキンジ達は到着した。

よく見ると既にエル・ワトソンの車でもあるポルシェが止まっていた。するとキンジはマフラーの熱を確認してこう言った。

「未だ暖かい、大体だが止まって15分つて所だ。」

そう言っているのとレティシアがこう言った。

「姉さん、キンジ。ちよつとこつち。」

そう言つて2人が近づくとそこにあつたのは・・・足跡である。

「多分あいつ消していなかつたよね。」

「不用心ですね。」

「それにしても何でアイツココニ?」

キンジはそう言つてスカイツリーを見上げた。

既に9割がたの完成が見込まれており工事用車両が立ち並んでいると一台のトレーラーが突如ライトを付けて変形した。

「ここで何しているって・・・ナンダまた武偵かよ?」

「悪いがこう言う奴らを見なかつたか?」

キンジはそう言つてトランスフォーマーに向けてエル・ワトソンと

ベル・ファレストの写真を見せるところ答えた。

「ああ、銀髪の女は知らねえがこつちの方ならさつき入っていったぜ？
何でも調べたいことがあるて言つてな。」

そう言うともう良いかと聞いてきたトランスフォーマーに対して

キンジはこう答えた。

「ああ、悪いな。もう休んでくれ。」

「言われなくてもそのつもりだ。」

そう言つてトレーターに戻つて下がつていった。

「行くぞ。」

「ええ。」

「はい。」

レティシア達はキンジの言葉を聞いてそう答えると内部に入つていった。
するとキンジ作業用のエレベーターがあるのに気づくが動くとはバレるかもと
思つていたがレスティア達が頷いて3人はエレベーターで上に上がった。

そして地上350m上空にある第一展望台に侵入した。

周りには機材以外に何もなかったが辺りを見渡していると・・・ぞくりと背筋が凍るのを感じてキンジは2人に向けてこう言った。

「伏せろ!!」

そう言つて全員が伏せた瞬間に・・・蒼白い光が3人の頭上を横切つた。

そして着弾と同時に・・・爆発した。

「何だと!?!」

キンジはそれを見て驚いていると途端に声が聞こえた。

「まさかこんな所に来るとはね。」

「!!」

三人はそれを聞いてエル・ワトソンだと分かると臨戦態勢に入った。

「何処だエル・ワトソン! メーヤさんは何処にやりやがった!!」

「あの女を助けに来るとは驚きだね、君は矢張り女の子を助けることに関しては天下
一品な訳だ。」

エル・ワトソンそう言いながら・・・外から現れた。

するとキンジは殺気を感じて後ろを振り返って・・・目を見開いて驚いていた。

エル・ワトソンがいたのはスカイツリーの・・・外なのだ。

然し驚くのはそれだけではない。

今エル・ワトソンが纏っているそれに・・・驚いているのだ。

それを・・・男性で纏えるのは世界でただ一人だけなのだから。

「何で・・・何で・・・手前が・・・」

「・・・IS使っているんだよ!!」
「そう、ISを纏っているのだ。」
するとエル・ワトソンがこう答えた。

「紹介しよう、僕のIS。『ダーク・フレイム』だ。」

そうやってIS『ダーク・フレイム』を紹介した。

両腕両足に先が尖った刃状の武器が、持っているのは

ロングレンジライフルであろう、身長ほどある。

するとエル・ワトソンはキンジ達に向けてこう言った。

「これを見た以上仕方ない……」

「……君たち全員殺してあげるよ。」

「「!!」」

それを聞いてキンジ達が驚いた瞬間に攻撃が再開された。

そしてそれらを見ている色違いの……二体の飛蝗の様な機械がそれを見ていた。

情報戦

「手前何でIS……まさか!？」

キンジは何故エル・ワトソンがISを使えるのかと言う疑問に対してある事を思い出した。

武偵の間でも僅かだがやる人間の事を。

「お前……『転装生(チエンジ)』だな？」

そう聞くとエル・ワトソンはこう答えた。

「まあ、ここ迄行けばバレるか。その通りだ遠山キンジ、

僕は『転装生(チエンジ)』だ。」

「キンジさん、『転装生(チエンジ)』と言うのは一体?」

レスティアがそう聞くとキンジはこう答えた。

『転装生(チエンジ)』は特殊条件下における犯罪捜査に備えて極僅かだが

性別を逆の状態にして学校に通う奴らの事だ、無論やっているのは

学年においてまちまちだが1, 2人程度だ。まさか手前とはな、

流石自分の組織を裏切るだけあって周りを騙すのも上手いつてか?」

「・・・何のことだ？」

「とぼけるな、手前がベル・ファレストと手を組んで

《リバティー・メイソン》から《MI6》に鞍替えすることも奴が緋弾を
持っていることも手前らがつるんでいることも既にお見通しなんだよ。」

「・・・そこまで知っていると驚きだね？それは曹の情報かい？」

「生憎だが情報を漏洩するほど俺は馬鹿じゃねえぞ。」

キンジはそう答えるところ続けた。

「それで、俺を調べて何が分かったんだ？」

そう聞くとエル・ワトソンはこう答えた。

「・・・全てだ。」

そう言うのとISのバイザーから映像情報が壁に映し出されるとこう説明した。

『遠山キンジ』17歳、アサルトの二年でランクはSだが既に昇格も

検討されている優良株で非公式だがアジア圏内でのS・D・A (Skilled
Detective

Armed) 通称『超人ランク』でも既に60位に入る程の腕前で

君をヘッドハンティングしたい国はアメリカや中国などがあるが

特にロシアは君を手に入れたいとあらゆる手段を講じているそうだね。

そして君の交友関係だが特に女性については厄介な面々ばかりだ。」
そう言うのと今度は飛鳥達の情報が出てきた。

「内務省暗部部隊局長『服部 半蔵』と副局長の『光 黒影』の孫娘。君が護衛として来ていた学校も大手企業の学生やこの国に古くからいる

当時の貴族、華族等が通っていた際に交友関係にあったのがスポーツ企業の

ご令嬢の『初音ヶ丘』、上坂グループのご令嬢にロシア軍国防委員長でもある

『デルゲス・ヴァレンティナ』の一人娘に京都の老舗和菓子店『茶山菓子店』の一人娘、

『白峰セキュリティー』のご令嬢、『二狐埼コンツェルン』のご令嬢、『君塚会』の現社長

のご令嬢、『辻林編集局』局長『辻林 長一郎』の娘、

『嶋野スポーツ用品店』の頭取の娘、

『ロディオ・マスイーン』のリーダーであると同時に

『如月グループ』の総帥の孫娘、『馬蹄競走会』グループのご令嬢等君の

女性関係はとてでもないが何かあればこの国とロシアが黙っては

いないだろうね。」

だがと言つてエル・ワトソンはこう続けた。

「幸運なことに僕は治外法権を認められている王室付きの武偵だ、

向こうじゃ自衛のための殺人が認められている為罪にはならない。」

「・・・最低ねあんた・・・!!」

レイシアはそれを聞いて苦虫を噛み潰したような表情をしていた。自身が治外法権の人間だからと言う理由で殺すと言う最低な方法にセンスが無いと考えてこうも考えた。

「(こいつキンジが国連軍に所属していること知っているのかしら?)」

もし知らなかったとしたらその時こそ彼女の最後だとそう思っているがキンジはこ
う聞いた。

「何で俺を狙うんだ？」

そう聞くとエル・ワトソンはこう答えた。

「簡単だよ遠山キンジ、アリアだよ。」

「・・・何？」

「彼女は君に対して憧れ、嫉妬、あらゆる感情を君にぶつけている・・・それが我慢ならないんだ。」

「いい迷惑だよこっちは、その所為で俺は酷い目合っているんだから。」

「アリアの評価を汚した。」

「あいつの自業自得だ。」

「何故彼女を助けようとしなかった！」

「俺がアイツを助ける義理がねえ。」

「君はアリアがどうなっても良いのか!!」

「アイツがどうなるうがアイツの自己責任だし俺と何の関係もねえよ!!」

キンジは最後にブちぎれるような感じでそう言うところ続けた。

「お前がアリアの事をどう思っっていようが関係ねえ!

さっさとメーヤさんの居場所を吐け!!」

そう言ううとエル・ワトソンはこう答えた。

「残念だけど君に教える事など・・・何も無い!!」

そう言っって背面部のキャノン砲を向けた次の瞬間に・・・

『ダーク・フレイム』にアラームが鳴っって回避するとエル・ワトソンが

目にしたのは・・・変形したトランスフォーマー達がミサイルでエル・ワトソンを墮

とそうとしていたのだ。

「クソ!こんな時に!!」

あの時仕留めきれなかったからかとそう思い内部に入り込んで

キンジを近接格闘で倒そうとする目の前にいたのは・・・

レスティア達だけであった。

「遠山キンジは何処だ。」

「それを誰が教えますか？」

レスティアはそう言つて槍を構えるとエル・ワトソンは嘲笑気味にこう言つた。

「正気かい？ そんな武器で I S を倒せるとでも思っているのかい？」

「やってみなければわかりません。」

そう言うのとレティシアも剣を構えるとエル・ワトソンは2人に向けて

こう言つた。

「仕方ない、こう言うのは嫌いなんだが・・・痛めつけて情報を聞き出そう。」

「やってみてください!!」

レスティアの言葉と共に攻撃が開始された。

屋上での一幕

「レスティア、レティシア。無事でいてくれよ！」

キンジはそう言いながら懐にある携帯電話で防人達に連絡していると

こう返したのだ。

『分かった、そつちに一夏を派遣させる。二分でそつちに着くはずだから
持ちこたえさせるように伝えてくれ。』

そう言う伝言を聞いてキンジはそれをレスティアの携帯電話に送信させると・・・爆
発音が聞こえるがクソと言ってキンジは其の儘上上がった。いった。

そして暫くして上に上がるとキンジが目にしたのは・・・異様な光景であった。

「何だこれは……?」

そう言うがその通りであった。

何せ簡単に作ったであろう鉄骨を椅子として機材をテーブルに置き換えて

メイドが……ベル・ファレストが紅茶を作っていたのだ。

「あら?これはこれは遠山キンジ様。よくぞ来てくださいました。」

歓迎いたしますとそう言うてスカートを捲るとキンジはそれから目を逸らして

こう言った。

「メーヤさんは何処だ?」

「ああ、彼女でしたら今あそこに。」

そう言うてベル・ファレストが目を向けた先に……巨大な箱が置かれていた。

人一人くらい余裕で入れそうなその箱を見てまさかと思つて見てみると

そこに入つていたのは……猿轡で口を縛られていたメーヤが気絶している状態が入つ

ていた。

すると又もや爆発音が聞こえた。

「あらあら、これだから《リバティー・メイソン》は格下だと

言われるのでしよね。」

戦闘における注意事項すらまともに考えていないとはとそう呟くと

キンジはメーヤをお嬢様抱っこして箱から出して拳銃を引き抜いた瞬間に……
鋭いナニカがキンジの拳銃を弾き飛ばした。

「うが!」

何だと思いながら見ようとするとあつたのは……髪の毛一本だけであつた。

「成程な、それがお前の武器か?」

そう聞くとベル・ファレストはこう答えた。

「ええ、その通り。私は投擲武器に関してはエキスパートですので。」

そう言うときベル・ファレストは沸騰している薬缶を見て

そのお湯で紅茶の葉の入ったティーポットに目を向けるとキンジに向けて

こう言った。

「紅茶を出しますのでお話を聞いてくれないでしょうか?」

「それを聞いて俺がハイそうですか?」

「座りませぬと彼女の胸の中に爆弾をセットしていると言つてもですか?」

「何!?!」

キンジは嘘だろうと思つてメーヤを見て修道女の服を見て……

これを脱がすのもどうかと思つて仕方ないと思つて

キンジはベル・ファレストに向けてこう聞いた。

「セットしていると言っても俺はそれを俺が信じてでも」

「確かにそうでございませよがもしここで出て行つて・・・

爆発したらそれでこそ」

ベル・ファレストがそう言った瞬間に扉が破壊される音が聞こえた。

一夏が来てくれたのかとそう思っている目映ったのは一夏と・・・。

「キンジさん大丈夫ですか!？」

「ちよつとアンタ今生きているの!？」

「・・・レスティアと・・・レティシア?」

キンジはその聞き覚えのある声を聴いてそう呟くが其れには理由があった。

「何せ今2人は・・・仮面ライダーになつて居るのだから。」

1分前

「ああもう！貧乏くじも大概よね!!」

「そう言わないでレティシア！キンジさんから救援要請が届きましたから!!」

もう少しの辛抱ですとそう言って攻撃しようとするが『ダーク・フレイム』が

大型レーザー砲で攻撃するので全然応戦も出来ずにいると

エル・ワトソンは2人に向けてこう言った。

「もう観念して遠山キンジの居場所を吐いてくれないかい？できれば僕は君達を殺したくは」

「はん！何言っているのよ!?!どうせ用済みになったら殺すんでしょ私達を！」

「そんな事はしない！イギリス貴族の名誉にかけて」

「残念ですが私達は仲間を売るような愚か者ではありません!!」

レスティアがそう言った瞬間に炎を出して攻撃するも

シールドエネルギーによってそれは阻まれてしまったためエル・ワトソンは

レスティアに向けてエッジブレードを向けるとレティシアはそれを見て氷を使って

こう言った。

「逃げて姉さん！」

そう言いながら水礮を出して攻撃するがそれも阻まれてしまいエル・ワトソンはレスティアに向けてこう言った。

「残念だよ、君は知恵があると思っていたのだが遠山キンジと言う愚か者のせいで退化してしまったようだね。」

「其れは如何でしょうか？」

「何？」

「貴方はアリアの事を心配しているよな口ぶりでしたが本当は自分が一番大事じゃないんですか？」

「何？」

「貴方が『イ・ウー』のメンバーであることは知っています。」

「!!」

「貴方は自分もそのメンバーであることをアリアには伝えていない。

それは貴方がアリアを信用しないのと同じです!!自分の母親を冤罪に

追い込ませたメンバーである事から逃げて剩え自分が助けてきたと言わんばかりにあんな茶番までする!!貴方こそ愚か者です!!」

そう言つて槍を向けるレスティアであつたがエル・ワトソンはこう言った。

「ならば……死ね!!」

そうやってブレードを振り上げたその瞬間に……『ダーク・フレイム』が一瞬だが動きが止まった。

「姉さん！」

「!!」

レスティアはレティシアの声を聴いてすぐ様に避けたその時にブレードが床に当たって四散した。

あのままだと危なかったとそう思っているとレスティアの足元にいる何かに気づいた。

それは……。

「……飛蝗？」

機械の飛蝗がそこにいたのだ。

二体の戦士

レスティアはその機械の飛蝗を見てある事を思い出した。

そう、何時もならばキンジの方に止まっている蜂型の機械を。

「貴方もしかして・・・ザビーと同じ？」

こくこく。

機械の飛蝗はそうですと言わんばかりに体を動かしているとこう続けた。

「貴方はどうして私を助けに？」

そう聞くと何やら外から・・・ブブブと羽音が聞こえるがその音は間違いなく

聞き覚えのする音と分かって外を見るとそこにいたのは・・・。

「ザビー!!」

ザビーが何やらトランクを持って現れて来たのだ。

よくそんな小さな体でそんな事出来るなど普通ならばそう思いたいが

今はそんな状況ではない事は知っているので一体何だと思つてみると

ザビーはトランクをレスティアに預けて颯爽と飛んでいった。

そして開けてみると入っていたのは・・・2つのベルトであった。

「これってもしかして……。」

レスティアがそう呟くと……エル・ワトソンがこう言った。

「君たちはいったい何したのか知らないけど僕を怒らせた事を後悔させてやる！」

そう言つてエツジブレードを全部展開するとレスティアはレティシアに

ベルトを投げ渡すとレスティアの掌にいた飛蝗がベルトに自分で取り付けられるとレスティアはこう思つていた。

「(あの時……『イ・ウー』でこの力があつたら私はキンジさんの……

お兄さんを殺されずに済んだのかどうか私にはわからない。)」

レスティアが思うのはIFの事。

誰もその結果を知る者はいない。

ただど人はそれを考えてしまう生き物だ、どんな結果になつたとしても

それはただ一つ変わらない物。

……その結果から逃げずに立ち向かう事である。

「(だから!……そんな事にはもうさせない為に力を貸して!!)」

そう思つてスイツチを押すと……音声流れた。

『H E N S I N』

それと同時に体が何かに覆われて出てきたのは……スマートな体つきをした

人型であった。

『CHANGE KICK HOPPER』

「これが私。」

レスティアはそう呟きながら自身を見ているとレテイシアも装着して変身した。

『HENSIN』

『CHANGE PUNCH HOPPER』

互いに緑と赤の装甲を身に纏った戦士となり2人は互いに視線を交わすがエル・ワトソンは戸惑いながらこう言った。

「ななな何だその格好は？僕はそんなの知らないぞ!!」

そう言うがレテイシアは嘲笑う様にこう言った。

「あら？何でそんなの教えなきやいけないのかしら？」

そう言うレスティアはレテイシアに向けてこう言った。

「行きますよレテイシア！」

「ええ!!」

そう言つて互いに攻撃し始めた。

変身前よりも力が上がったためエル・ワトソンは戸惑いながらも

こう思っていた。

「大丈夫だ！ISの絶対防御があるしシールドエネルギーだって然程減っていないんだ!!このまま耐えて隙を見つけて)」

「何時まで案山子になってんのよ!!」

レスティアはそう言って・・・氷の拳を装甲にぶつけると機体の装甲が凍り始めたのだ。

「何!?!」

どうしてとそう思っているが今度はレスティアが炎の蹴りを喰らわした。

「こちらもお忘れなく!!」

「うぐ!?!」

すると機体のシステムに異常が検知されてエル・ワトソンはヤバいと感じてこう思った。

「(ここは一度退いて遠山キンジの女の誰かを人質にして来た所を

今度は《リバティイ・メイソン》のメンバーを使って倒す!今回の取引については誰も知っていないからバレる心配はないし僕は信頼されているから)」

大丈夫とそう思つて外に出ようとするレスティアがこう呟いた。

「逃がしませんよ。」

『『CLOCK UP』』

その音声^が二重に聞こえた瞬間に時間が・・・止まった。
そして2人が攻撃してきたのだ。

数十にも及ぶ攻撃により何度も殴った後に2人が揃ってこう言った。

「さあ、貴方の罪を数えなさい！（数えろ）」

そう言った瞬間に音声^が流れた。

『RIDER KICK』

『RIDER PUNCH』

互いの音声と同時にレスティアの左足に装備されている装備から

電流と同時に炎が、レイシアも右腕に装備されている部分から電流と同時に氷が作り始められて互いに挟み込むように攻撃した。

「ハアアアアアアア!!」

そして爆発と同時に時間が元に戻ってエル・ワトソンが吹き飛んだ瞬間に更に・・・悲劇^が起きた。

「ターゲット補足、攻撃開始。」

その声と共に10もの光がエル・ワトソンと『ダーク・フレイム』を飲み込んで・・・爆発した。

「が・・・はあ。」

そしてその儘エル・ワトソンは堕ちていった。

「とまあそんな感じよ。」

「成程な。」

ザビーは何処行っただとキンジはそう思っているが仕方ないと言ってベル・ファレストの方を向いて暫くすると一夏に向けてこう言った。

「一夏、悪いがメーヤさんの服の中に爆弾があるか確認してくれないか？」

「あ、はい！」

一夏はそう言っただけでハイパーセンサー出探ってみると・・・こう答えた。

「あります！丁度胸の所に！！」

「ちい！最悪だなおい！！」

キンジはそう毒づくくとベル・ファレストは紅茶を淹れてこう言った。

「私の言葉を信じてくれましたか？」

「・・・・・・・・」

「沈黙は肯定と読みました、ではお茶を飲みがてら・・・お話をしましょう。」
そう言って席に座った。

お茶を飲んで

「本日の紅茶は『ウバのミルクティー』でございます、お茶のお供として『レモンパイ』をどうぞ。」

お食べ下さいとベル・ファレストがそう言うが敵の出した食べ物に

手を出してよいのかとキンジ達はそう思っているとベル・ファレストはこう続けた。

「大丈夫でございます、毒や薬等は入っておりませぬ。我々《MI6》は

《リバティー・メイソン》のエル・ワトソンの様に愚かにも己の利己的意識の為に

貴方達を殺すと言う下法など致しませんしあの方みたいに自身の権力を使って

好き勝手するような事は致しませんのでご心配なく。」

どうぞと言つて暫くして・・・キンジがミルクティーを口に付けた。

「!!!」

それを見て3人が驚いているとキンジはこう答えた。

「これ旨いなー」

「そうでございますでしょうか？レモンの方はスリランカからの直送でして

ウバの方も同様に産地直送でございます。レモンパイには隠し味として

ココナッツミルクをパイ生地になんか含まれていますので甘みが良く表現されております。」

そういう中でキンジが食べているのを見て一夏達も食事すると・・・好評であった。

「ウオ本当だ旨い！」

「美味しいです!!」

「本当に美味しいわね!!」

そう言いながら食べていて・・・完食した。

「ふふ、旨かったな。」

「そうですねえ。」

「はい、本当です。」

「結構美味しかったわ。」

キンジ達がそう言っていると……声が聞こえた。

「う……う……」

「メーヤさん！」

メーヤが目を覚ましたのでキンジが近づくとメーヤが目覚ましてこう呟いた。

「あれ……確か私は……!!エル・ワトソンは!?!」

メーヤが目を見開いてそう言うのとキンジがベル・ファレストがこう言った。

「彼女は私とエル・ワトソンとの裏取引についての重要な武器を

保有していたが為に戻って貰いましたので。」

申し訳ありませんとそう言つて陳謝してこう続けた。

「それではご説明致しますよう、エル・ワトソンが

何故私と裏取引したのかを。」

そう言つてベル・ファレストは……こう言った。

「私が《緋弾》を持ってゐるからで……ございます。」

「!!!」

それを聞いてキンジ達が目を見開いて驚いていた。

一夏は防人から裏での戦いについて既に聞いている・・・というよりも諸事情で一夏は既に裏勢力・・・勇者の一族と呼ばれる勢力相手に親友でもある刃更と共に暴走した勇者を倒したことからその事を聞いている為動揺はしなかった。

そしてベル・ファレストはこう続けた。

「私が見つけたのは横浜郊外にある今は誰も使われなくなつて無人となつた

《紅鳴館》と呼ばれる館でした。」

「(あの場所か!?)」

キンジはそれを聞いてあることを思い出した。

『無限罪のブラッド』、ロイミュードの開発者であり自身もロイミュードであつた二重人格の様な人間。

その男が隠れ家兼研究所として使われたその館はその後に国連軍が調査した後に不動産会社に引き渡したという謂れを持つていた。

「その場所を買い抑えた私はそこを『MI6』の日本支部と一つとして使おうと

調査した所になりましたので報告したところエル・ワトソンが現れて

こう言つたのです。」

「『それを渡してくれないだろうかお嬢さん、君を傷つけて奪おうとするほど

僕はサデリストでも外道でもない。』と。」

「よく言えるわね、キンジに対しては権力使って殺そうとしたくせに。」
レティシアがそう呟くとベル・ファレストはこう続けた。

「まあ、私が勝ちましたがかの者は負けた後にこう言ったのでございます。」

『間もなくアリアの母親が釈放される！その時に僕が颯爽と来て助ければ

アリアを自由に出来るし同国の好として君に《リバティー・メイソン》の情報を

引き渡す!!だから協力して欲しいんだ!!』ともまあお負けになったにも

関わらずにここ迄人間自身の欲の為に提案するどころか動けるもかと

私は感心致しましたわ。」

悪い意味ですがとそう言うのとレスティアがこう返した。

「本当にその通りです！ご自分優先に考えて巻き込まれる人間の事など

考えないなんてルール違反の何者でもないです!!」

怒りながらそう言っているがベル・ファレストはこう続けた。

「・・・確かにその通りでございますので既に私は《MI6》から

身を退いていますので。」

「だけど《リバティー・メイソン》は違うんだろ？」

「その通りでございます織斑様、既にほかの勢力には

お耳に入れておられますので最終的には。」

壊滅ですねとそう言つて挨拶した後にキンジはこう聞いた。

「それで、お前が《M I 6》を離れてまでエル・ワトソンと協力した理由は何だ？」

キンジはそう聞いた。

自分の入つていた組織を抜け出して迄何がしたかつたのかと聞きたかつたのだ。するとベル・ファレストはこう答えた。

「……貴方でございますわ遠山様。」

「……俺？」

何でとキンジがそう聞くとベル・ファレストは……胸の谷間からある物を引っこ抜いてきた。

「!!」

男性陣はそれを見て目を背けるがそれを見て……キンジと一夏は目を見開いて驚いていた。

それは一夏がよく知っている物。

「お前……それは。」

「はい、これは……」

・ ・ ・ ・ 『フルボトル』でございます。
白いフルボトルがそこにあった。

狼起動

「何で・・・フルボトルが・・・」

一夏がそう眩くとベル・ファレストはこう答えた。

「このフルボトルを話す前に昔話をしましょう。」

「昔話？」

キンジが何だと聞くとベル・ファレストはこう返した。

「あれは・・・未だ私が幼いころ、今から9年前になります。」

「9年前？」

「はい遠山様、私は・・・《無限罪のブラド》の人体実験の材料と

なっております。」

「!!まさかお前!?!」

理子があの時言っていたとキンジはあの時理子が言っていた事を思い出した。

『アタシハアノトキジブンノブジダイイチダツタケドヨ．．．アタシノ
ホカニモイタノカ？ジツケンタイガヨ？』

「そう、私はイギリスの小さな貴族のメイドの娘としてそのお屋敷に
住んでおりました．．．ですが!!」

9年前

「おかあさーん！おとさーん!!!」

未だ小さい頃のベル・ファレストが両親が働いていた御屋敷で・・・燃える中で探していた。

周りを見れば惨殺された他の召使たちが惨殺されていた。

そして彼女が向かった先で見たのは・・・。

「お母さん・・・お父さん・・・」

機械の兵隊たちによつて殺された両親の姿があつた。

そして機械の兵隊達はベル・ファレストを・・・誘拐した。

「そして私はルーマニアに連れて行かれ其の儘ブラドの実験対象とされました。」

「・・・ブラドの野郎!!」

キンジはそれを聞いて苦々しい表情をしていた。

未だ幼い少女を誘拐するだけではなく人体実験までするという外道ぶりには吐き気がするからだ。

それは一夏達も同じで特に一夏は人体実験の非道さは既に見ているからだ。するとベル・ファレストはこう続けた。

「そして4年前、私は脱出した後秘密裏に捜査していた《M I 6》に保護されました。両親は元々その組織に所属していました今まで私の事を父の友人が探していきましてその人の血縁者として養子に引き取られました。」

「・・・良い人だったんですね。」

レストイアはそう言いながら涙を流しているとベル・ファレストはこう答えた。
「ハイ、ですが驚きでしたまさかあの・・・」

そう言うとベル・ファレストは自身の体を両手で抱きしめっているとキンジはそうかただけ言って残っている紅茶を飲み干すところ聞いた。

「それで、俺の何が目的なんだ？」

そう聞くとベル・ファレストはこう答えた。

「ハイ、貴方が如何やってあの『ブラド』を討ち取ったのかについて・・・

その力を見極めたく思っております。」

「見極める？」

「ハイ、かの有名なシャーロックホームズを討ち取り文字通りこの戦争の発端を作った貴方の実力を拝見する為に手合わせと思ひまして。」

そう言うとベル・ファレストはこう言った。

「・・・参ります。」

「!!」

そう言った瞬間にキンジは離れた場所に針が刺さった。

その針は机を貫通すると突如として髪の毛に戻った。

「こいつはあの時の!!」

「はい、これこそ私が保有するフルボトル『ハリネズミ』フルボトルの能力で

戻ります。」

そうやってハリネズミの造詣が施されたフルボトルを見せるとこう続けた。

「フルボトルは振る事によってその能力を人体に一部とはいえ与えることが出来ます。そして」

そう言うのとベル・ファレストはフルボトルを何やら胸の谷間から取り出した注射器の様な何かを取り出してこう続けた。

「そして何よりもこれを人体に注入すれば・・・果たしてどうなると思われませんか？」

そう言うってベル・ファレストは自身の首元に差し込んで・・・こう言った。

「こうなりません。」

そう言うって注入した瞬間にベル・ファレストの目が・・・赤く染まった。

そして黒い霧が全身を覆うかの様に包み込んで出てきたのは・・・

白い異形であった。

全身にスパイクの様な棘が出てきて見た感じ恐怖を与えるような感じであるが女性らしさを出しているのか起伏を見せつけるかのようなものになっていた。

すると変身したベル・ファレストはキンジに向けてこう言った。

『サア、アナタモヘンシンシテクダサイ。』

そう言われるがキンジはヤバいなと思っていた。

何せ今の自分はザビーにはなれず別の物になるしかなかった。

だがその方法については頭に叩き込んではいないが、いざ実戦ともなると

信頼が無い為はどうするべきか考えていると・・・レスティアとレイシアが互いにこう言った。

「そうはいきません。」

「アンタの相手は私達よ。」

「俺もいます。」

一夏もそう言ってベルトを付けてフルボトルを振って装填した。

『『コウモリ！ギアーズ！！ビルドオン！！』』

そして一夏がヘルローグに変身するところを言った。

「アンタの理由は理解できるがその為に他人を巻き込むことは感心しねえな！」

そう言って3人が揃って・・・攻撃した。

そんな中でキンジはこう思っていた。

「俺は何をやっているんだ!?メーヤさんを救出するってだけだったのに

こんな展開になるなんて普通あるか！此の儘逃げるのも一つの手かも

しれねえが・・・けど!!)」

そう思ってキンジはベル・ファレストの方を見た。

あの異形の姿は間違いない今このベル・ファレストの心の姿だ。

その針の数はまるで・・・心の壁の様な感じがしたからだ。

そして何よりもブラドの一件もある。

これに対して決着を付けなければならぬとも言える。

ブラドを倒した自分が何とかしなければならぬと言う思いがあるのだがならばどうやるのかと思っていると・・・一夏が戦いながらこう言った。

「戦ってくださいキンジさん！」

「一夏」

「今彼女は未だ悪夢の中にいるんです！貴方の力で晴らさないと

彼女は前に進めないんです!! だから・・・戦ってくださいキンジさん
彼女の為に！」

それを聞いてキンジは鼻で笑ってこう言った。

「やれやれ、俺は如何やらこう言う定めなのかねえ。女の涙を拭うために
戦うとは俺も焼きが回ったのかなあ？」

そう呟きながらキンジは懐からベルトを付けて持っていた青いキーを取り出してス
イツチを押すと音声 flowed。

『バレット』

それをベルトにある円形の場所に当てると音声 flowed。

『オーソライズ』

するとベルトから・・・巨大な機械みたいな狼が現れた。

アオーン!!

その遠吠えが本物の様に聞こえた瞬間に全員が耳を塞ぐと狼が周りを

跳躍している間にキンジは両手を半ば開いて左手は中に、右手を空に向けて

そこで停止すると狼は何かを感じて・・・キンジの方に一直線に向かおうとした。

「キンジさんー！」

レスティアは不味いと感じて助けようとして間に入ろうとすると

キンジがこう言った。

「レスティアア！大丈夫だ!!」

キンジはそう言って止めさせるとキーをベルトに装填すると音声 flowed.

『プログライズ!』

それと同時にキンジは右手を向かってくる狼に添えるかのような感じで

こう言った。

「変身!」

その声と同時に右手と激突した狼が四散して・・・キンジの周りに集まると

それらが鎧となつて現れてこう言う音声 flowed.

『撃ちまくるステイ! シューティングウルフ! The elevation i

ncreases as the bullet is fired.』

そして現れたのは・・・頭部に狼を模した形状、

青い装甲が散りばめられた戦士。

新たな仮面ライダーであった。

「仮面ライダー バルカン。手前の心の闇を・・・ぶっ潰す!」

そう言うて今・・・青い狼の咆哮が世界に響いた。

蒼狼の雄たけび

「「ウワアアアアアア!!」」

一夏達は変貌したベル・ファレストの攻撃を諸に喰らって吹き飛んだ。

時間停止（殆ど）を持つレスティア達の攻撃を予見してか予め放たれた髪の毛の針が何故か起爆して吹き飛ぶかと思いきや刺さったりと

色々と面倒くさい手合いであった。

そんな中で変貌したベル・ファレストは3人に向けてこう言った。

『それではこれで終わりにしましょう。』

そう言つて体中の針を射出すると・・・それら全てが弾き飛ばされた。

「『!!!』」

4人は何故とそう思つてその方向に目を向けるとそこに立っていたのは・・・。

「よう、待たせたな。」

仮面ライダーバルカンであった。

「キンジさん?」

「遠山キンジ?」

「キンジさん？」

レスティア、レティシア、一夏の順でそう言うのとキンジはこう答えた。

「ああ、待たせたな。後は任せとけ。」

そう言うて全員の前に出てくると変貌したベル・ファレストがこう言った。

『それが例の』

「いや、違う。」

『?』

「こいつが俺の新しい力、『バルカン』だ。」

そう言うてキンジは変貌したベル・ファレストに向けてこう言った。

「さてと、ご指名なんだ。暴れさせてもらうぜ!!」

そう言うのとキンジは変貌したベル・ファレストに向けて立ち向かうが

変貌したベル・ファレストはキンジに向けてこう言った。

『未だ不慣れなソレデ挑もうなど愚の骨頂ですわね。』

そう言うて髪の毛を飛ばしてきたがキンジはマスク内から出てくる

あらゆる情報から回避情報が出て来るや否やそれで躲した。

『!!』

そんなと思わんばかりに今度は爆発能力がある奴にするが其れすらも躲すと

キンジは変貌したベル・ファレストに向けてこう言った。

「今度はこっちの番だ！」

そう言うときンジはベルトのスイッチを押すと何かが出てきたのだ。

それはまるで嘗てキンジが『ザビー』の時に使われていた

『ホーネットクラッシュャー』と似ているような感じがするが

それだけじゃないよなどそう思っているとデータが出てきた。

武装名

『ウルフブレイカー』

そう書かれていた。

見た目はまるで銃みたいな形状をしているがこいつなら何とかなると感じた

キンジはそれで立ち向かった。

当の変貌したベル・ファレストは髪の新針を持って対応するが

キンジは遅いと言ってそれらを弾き落としながらこう続けた。

「ベル・ファレスト！手前が一体何で俺に敵対するのかよおく分かったがな．．それだ

けじゃねえだろ。」

「……………」

「本当は手前は心の中に未だ囚われているんだって思っているんだろうが!!」

「!!」

「それなら……俺がお前の闇をぶっ潰す！それが俺の……」

仮面ライダーとしての俺の決意だ!!」

キンジはそう言うのとベルトからプログライズキーを取り出して

『ウルフブレイカー』にセットするところと言った。

「これがお前の心の闇を壊す力だ!!」

そう言ってキンジは刀を構えた。

そして変貌したベル・ファレストはまるで何かを振り払おうとするかのように

針を放つが溜めに溜めたキンジの攻撃が……放たれた。

ヨシグンイテ—ユシルレバ

ト ツ

すると放たれた銃弾から狼のエネルギー体が現れた瞬間にそれらと激突して大爆発を起こした。

『!!』

ベル・ファレストはそれに伴って視界がふさがってしまったがそれが……悪手であった。

そのエネルギー体は生き残っており其の儘……変貌したベル・ファレスト目掛けて吹き飛ばした。

『キャアアアアアアア!!』

イテ — ユシルレバ

ン
グシヨツト

それと同時に決着がついた。

すると突然キンジは変身を解くとキンジはベル・ファレストに向かうと倒れたベル・ファレストを見てキンジはこう言った。

「お前のあの姿、まるで過去って言う槍に貫かれているような感じだったぜ。」

どうなんだと聞くとベル・ファレストはこう答えた。

「その・・・通りですわ。私の心はあの時のまま・・・止まってしまった。」

「動かそうとして私はあのブラドに勝った貴方と戦えれば解放される・・・」

そう思っていましたわ。」

ベル・ファレストはそう言うがキンジはこう返した。

「違うぜベル・ファレスト。」

「え？」

「お前は元から自由だった、だけどブラドの事でその事に

気づいていないだけなんだ。それが分かるまでつて言うならまあ・・・

俺とくるか？」

「な・・・何を言つて。」

「何をつてお前みたいに迷っている奴を放つておくほど俺は酷くねえからな。」

そう言つて手を差し伸ばそうとしてベル・ファレストはこう言つた。

「全く、貴方は本当にお人好しなんですな。」

「人によるがな。」

そうですかと言つてキンジの手を掴もうとした次の瞬間に・・・

雷がベル・ファレストが使つていた針に避雷針の様に当たつて・・・

キンジとベル・ファレストの周りに何かしらの空間が出来始めていた。

そしてその儘・・・キンジとベル・ファレストが消えてしまった。

「キンジさー——ん！」

レスティアの悲鳴と共に・・・キンジとベル・ファレストは姿を消した。

そして・・・何処か。

「何だアレハ？」

何かしらの星を見た少女はフードを深くかぶり直してこう言った。

「まあいいや、計画に支障はないんだから。」

そう言って彼女はとあるキーをポケットに入れた。

それはキンジが持っていたのと同じ・・・色が違うプログライスキーであった。

第8章 パラレルストーリー 仮面ライダー01*戦記

絶唱シンフォギア 夢と歌とラーニングと悪意編

プロローグ

その日は快晴。

そしてその日は・・・大事な日だった。

私はそこで・・・呪いを受け、・・・人に絶望した。

私だけじゃなかった。

あの事件で多くの人達も同じように苦しみ、その痛みを受けた。

生きているだけで罪。

死んで償え。

どうしてお前が生き残った。

その言葉が私達に・・・どす黒い闇を与えた。

そして私達は・・・復讐を誓った。

『ファイティングポライド!』

何処かの街でその音声が聞こえた。

音声を出してきたのは黒に近い緑色の鎌を持った女性的な見た目を持つ戦士。そしてそれに戦っているのは紅い鳥の頭を持つ兵器。

「こんなのまるで公開処刑だな。」

茶番だなどといって屋上にてフードを被った少女はそう言いながら・・・
歌を口ずさんだ。

「Balwisyall Nescell gungnir tron」

その声と共にオレンジ色の少女を包んで・・・動き出した。

「ハアアアアアアアアアア！」

黒に近い緑色の戦士『ファイティングジャツカルレイザー』が

『ドードーマギア』を攻撃した。

「（これで良いんだ！所詮私は只命令に従うしかないんだ!!）」

許せと勝手極まらない言葉を語りながら止めを刺そうとしたその時に・・・

第三者が『ファイティングジャツカルレイザー』の鎌を・・・拳で受け止めた。

『!!』

何と想っていた『ファイティングジャツカルレイザー』はその正体を見て

こう呟いた。

「・・・ヒューマギアか?」

そう眩ぐがいや違うと考えた。

ヒューマギアと言うのは人工知能搭載型のロボットで大抵のロボットには

耳にあたある部分に特殊な機械がありそれには光が発行するようになってるが

それについているのはヘッドギアである為違うと考えるが

『ファイティングジャツカルレイザー』はそれに向かつてこう言った。

「どけ。」

そう言う・・・その人間はこう答えた。

「・・・人間は屑だ。」

「?」

「自分たちが楽になるためだけにヒューマギアを創った癖にそのヒューマギアが危険だとか自分たちに害を及ぼすとか原因も考えずに只破壊すると言う

安直的な思考しか走らないくせにそれを集団で行って虐げて・・・

それが人間のやる事か——!!」

そう言つてその人間は鎌を弾き飛ばして・・・攻撃を続けた。

「自分たちが創造した者に責任を持たず!そして自分たちの立場が

危うくなつたら壊して棄てる!!それがお前たち人間の本性だ!!」

「ぐう!!」

それを聞きながらの攻撃に『ファイティングジャツカルレイザー』は耐えきれずに弾き飛ばされるとその人間はこう言った。

「だからこそ！人間は滅びるべきなんだ!!この世界から!!」

そう言つてその人間は『ドードーマギア』のベルトの一部に蹴りを加えると何やら赤黒い電流が走つたが一瞬で止まつて・・・再始動した。

「あれ？ミィは何を？」

「DJ!!」

それを見たメタリックカラーの戦士が呼びかけると『ドードーマギア』はこう答えた。

「アルト？ミィは確かテレビで政治家のワイロの映像を見せてそして・・・

あれ？」

「もう大丈夫だ、お前は只操られていただけだと言う事は分かっているから速く逃げなさい。」

「逃げる？」

「そうだ、このままじゃお前は殺される。だから逃げて」

「だけど・・・ユーが。」

「この茶番劇はもうお終いだ、私の仲間がお前を守るから。」
「？」

「今は分からないだろうけど生きる為に逃げなさい。」

「そうはさせん！」

それを聞いていた黄色の全身が刺々しい戦士が『ドードーマギア』目掛けて攻撃しようとするがそれを首元に巻かれているスカーフでその剣を奪い取ると刺々しい戦士はこう言った。

「それを返してもらおう！」

それを聞いてその人間はこう答えた。

「そうだな、貴様が代表にした奴の汚職等をテレビで今告発してくれるなら返してやっても良い。」

「貴様……!!」

「出来ないなら返さないしこれはもう私のモノだ。」

そう言うとその人間は……光と共に正体を現した。

「何……!!」

「女?!」

「人間の……女の子?」

そう、目の前にいるのは茶色の癖毛の少女であった。

するとその少女は全員に向けてこう言った。

「これが人間のやる事なのか! 自らの代表が汚職していたと分かり来や

ヒューマギアを態と暴走させて見せしめにして殺して自らを注目させる!!

それならばいつそ……人類なんて滅べばいいんだ。」

「何を言っている? 奴らは機械! 道具だ!! 道具に何しても我々の自由」

「違う! 彼らは道具じゃない!! 私達の為に働いて支えてくれている

この国の一員だ!! お前みたいに自分以外を信じないような屑とは

天と地とも違う!!」

「貴様とて人間であろう! 我々と同じ!!」

刺々しい戦士はそう言うのと少女は懐からある物を出した。

「・・・それは!!」

刺々しい戦士はそれを見て驚くが少女はそれを・・・腰に巻き付けた。

そしてオレンジ色のキーを取り出してボタンを押した。

『ゼツメツサーベルタイガー』

そしてそれをベルトにセットすると・・・少女はこう呟いた。

「変身。」

『フォースライズ』

その音声と同時に少女の周りにワイヤーの様な物が体中に纏わりついて

そこから装甲を纏った。

そしてそれが纏われた瞬間に新たな音声 flowed。

『Break Down』

そして少女は自身の事をこう名乗った。

「私の名前は『凶』。『仮面ライダー凶』・・・『滅亡迅雷 net』の一員だ!」

「!!!」

それを聞いて三人が驚いている中で少女は手首から剣のような武器を出して・・・三人に目掛けて突撃してきた。

「ウオオオオオオオオ!!」

今・・・復讐者が雄たけびを上げた。

プロローグ②

「あれは《フォースライザー》！何故彼女が!?いや、何故常人がそれを纏えられるんだ!!」

『ファイティングジャツカルレイザー』は『仮面ライダー凶』を見てそう言うが凶はそんなのお構いなしで攻撃してきた。

「ハアア！」

「クウウ!!」

鎌と剣、武器のリーチ的には鎌が有利に見えるがその懐に入られた今鎌の掴むところで防御するしか道がないのだ。

それを見て刺々しい戦士『サウザー』がこう言った。

「何をしている『刃』！そいつを止めろ!!」

遠くで『サウザー』がそう言った瞬間に『凶』は『サウザー』から奪った武器『サウザンドジャツカー』で『ファイティングジャツカルレイザー』のバックルに突き刺すと・・・剣から音声が流れた。

『ジャツクライズ!』

その音声と共に『凶』は『サウザンドジャッカー』の柄を強く引くと更に
音声が流れた。

『ジャツキングブレイク!』

「せああああああああ!!」

それと同時に黒に近い緑色のジャツカルのエネルギー体が現れるや否やそれは『ファイティングジャツカルレイザー』に噛みつくとそれを振り回してジャンヌして地面に向けて叩き潰した。

「グああああああ!!」

爆発と同時に『ファイティングジャツカルレイザー』は解除されて

女性が現れた。

彼女の名前は『刃 唯阿』、AIMSと言う組織の隊長を兼任している科学者だ。

「う・・・グウ。」

「次はお前だ。」

『凶』は『サウザー』に向けてそう言うと『サウザー』は『凶』に向けて
こう言った。

「何故貴様はヒューマギア等に加担する! 奴らは只の道具だ!!」

「道具?・・・『私達』にとってヒューマギアは『私達』に優しくしてくれる

本当の人間の様な存在だ。貴様みたいな人を支配する事しか頭にない様な外道よりもな。」

「何・・・!!」

『サウザー』はそれを見て睨みつけるような感じで見ているが『凶』は自身のバックルを一回叩くと音声 flowed した。

『ゼツメツデイストピア!』

壊
斬 煉
獄

その音声と同時に手首に装備されていたブレードから黄色い電流が流れた瞬間に何かのコードが『凶』の両腕に巻き付くとそれらは束ねられて

巨大な剣となつて・・・『サウザー』を叩き潰した。

「グああアアアアアアア!!」

その爆発と同時に『サウザー』も解除されてZ A I A日本支部社長でもある『天津 垓』ボロボロの姿で出てきた。

そして・・・更に声が響いた。

「よくやった『凶』。」

「[!!]」

その声と同時に振り向くとそこにいたのは……一人の男性型ヒューマギア。耳元をターバンで隠し紫色のロングコートを身に纏った大柄の存在。

『滅亡迅雷 net』の総司令でもある『滅』がそこにいた。

『滅』……どうして……!!」

メタリックカラーの仮面ライダー『仮面ライダー01』がそう聞くと

『滅』はこう答えた。

「俺の仲間が助けてくれたからな。」

「何だって……!!」

『仮面ライダー01』が驚いていると『滅』はこう続けた。

「俺は貴様と今は戦う気ではない、だが次に会った時はその時は。」

そうやって通り過ぎると『滅』はあるホログラムを投影した。

それは……『Z A I A』側の代表者が賄賂を受け取るシーンである。

「見るヒューマギアよ、これが人間の本性だ！ 奴らは我々を利用するだけ

利用して自らの地位が危うくなれば我々を謀略の名の下に破壊しようとする!!

奴らに生きる資格などない！ 我々ヒューマギアこそが次なる

この星の支配者であると同時に浄化する存在!! 我々と共に立ち上がるんだ

ヒューマギアよ！我々の聖戦は今始まったのだ!!」

そう言うのと今度は変身を解除した『凶』が自身についてこう名乗った。

「私は『凶』、そして・・・二年前に起きたノイズにおける大量死亡事件

『ツヴァイウイング』のライブでの生存者の一人だ、私達生き残った人間は

あの事件の後心に傷を負い、それでも生きようとしたのに・・・

世界はそれを許さなかった！私達が生き残った事で多くの人間からその悪意を度々言われ蔑まれこの身に受け私達が生きることが拒絶した!!」

「『お前が死ねばよかった!』『人殺し!』『殺人者!』

私達はそう呼ばれてその家族も被害を被った!!中には家族が

殺された者達もいた!!私達が一体何をした!?!生きること自体が

罪だと言うのか!?!この世界に存在するだけで私達は忌み嫌われるのか!?!

私達だって好きで生きているわけじゃないのに何故ここ迄迫害されなければならぬ!!そのせいで・・・私の母と祖母は近所の人達に殺され!

家に火を放った!!」

『!!』『!!』『!!』

それを聞いてそこにいる全員が目を大きく見開いて驚くが『凶』は更にこう続けた。

「今でも忘れられない！冷たくなっていく2人の体を！血の匂いも!!

あの時嗅いだ焼き焦げる匂いを鮮明に覚えている!!そんな私達を・・・

ヒューマギアは私達を一人の人間として見てくれていた、・・・だからこそ私達『ディ
スピア』・・・『人類に対する絶望』をその心に刻まれた

私達は『滅亡迅雷 net』と手を組み人類に宣戦布告することを

高らかに宣言する!!あの時の苦しみを知る者達よ、今こそ立ち上がるんだ!

あの事件で私達から奪った人間たちから今度は私達が奪う時だ!!

私達を悪と呼ぶなら喜んでなろうではないか!!奴らに思い知らせるんだ!!

私達が受けた痛みを！恐怖を!!絶望を!!今度は奴らに破滅と言う名で

味合わせる時だ!!

そう言った瞬間に・・・彼らの後ろからトラックが突っ込んできた。

『『ウワアアアアアアアア!!!!』』

それを見て慌てて避ける野次馬たちを他所にトラックが止まって開かれると
そこにいたのは・・・全身を黒の服で覆った人間たちと・・・

旗が掲げられていた。

人間の頭の骨を機械の腕が罅割らせる絵が描かれた旗が掲げられた。

『『『ウオオオオオオオオオオ!!!!』』』

!!!!

それを掲げると同時に大声を上げた。

・・・人と機械の戦争が始まる事を意味するかのようなそんな日となった。

301

あれから数か月後。

『日本の皆さん、私が新しく飛電インテリジエンス社長となった

『天津 垓』です。今後ヒューマギアにおける暴走を食い止めるため

全てのヒューマギアをリコールさせて貰います。これは皆さまの安全を考えて』

「ねえさ、あそこの店のタピオカ飲みに行く?」

「良いねって・・・キヤアアアアアアアア!」

「え? 何ってうわあ!?!」

テレビが映っている中で女子高生が驚いてみたものは・・・。

「何だヒューマギアか。」

「行く行く、危ないよ。」

「そうだね。」

そうやって離れていくのは素体状態として廃棄されたヒューマギアであった。

そこにリヤカーを繋げた自転車に乗って現れた男性がヒューマギアを見て・・・顔の部分を拭きながらこう言った。

「こんな所にあつたのか・・・御免な。」

彼の名は『飛電 或人』。

嘗ては『飛電インテリジエンス』の二代目社長であると同時に

『仮面ライダー01』であつたが先の事件がきっかけで辞任を決めた後は

こつやつて不法廃棄されたヒューマギアを回収しながらある事をしていたのだ。

それは・・・。

「あ、『福添』さん。そつちはどうでしたか？」

『飛電インテリジェンス』副社長室。

「ちよ!? 大声出すな元社長!」

『ああ、ごめんごめん。』

或人が謝っている男性は『飛電インテリジェンス』副社長『福添 准』。

初代社長から長年仕えてきた野心家であると同時に会社に対して誰よりも忠誠心を持つている何処か憎めない男である。

『それで・・・例の件なんです。』

「ああ、そつちは興信所と山下が調べました。データは残った人間全員分パソコンに送りましたが・・・毎度ですけど胸糞悪いらしく

当面山下には精神安定の為にリゾートホテルに有給休暇扱いで放り込みました。」

『・・・すみません何度も。』

「本当ですよ、出ていく際に最後の日まで『デイスペア』のメンバーに関する書類やデータをかき集めて出て云った後も頼みこんで今に至って……何故彼らを気にかけるのですか？」

『……俺は知りたいんだ、どうして『滅亡迅雷・net』と手を組んで迄人類を滅ぼしたいのか？そして何よりも』

「何故彼らは『ノイズ』相手に戦うのか？でしょう?」

『ああ。』

そう言っていた。

ノイズとは何時からか分からないが突如現れた生命体で人間を炭に変えてしまう特殊な能力を持ち、通常武器では敵わない相手であった。

……現在は『Z A I A』が買収した組織『A I M S』が保有する

新兵器『レイドライザー』によってここ最近の被害は縮小傾向となり

日本各地でレイドライザーの至急配備と言う状況となっている。

然しそんな中で『デイスペア』の『凶』も戦っていた。

人類を滅ぼすことを重要視していた彼らが何故ノイズ相手にも戦うのか

それが知りたいがために或人は会社を辞めた後から日替わりバイトをしながら各地をヒューマギアを回収しながら練り歩いていた。

そして知ったのだ。

『ディスプレイ』が何故ノイズすらも攻撃対象なのか？

そして人類を憎悪するその理由も。

『旅している中で分かったけど一つ気になる事が出来たんだ。』

「？」

『何である事件の際にノイズがいきなり現れたのか？』

「どういう意味ですか？ノイズは自然発生するっていうのが世間一般の」

『常識でしょう？知ってるよ俺も！けどさ・・・あの事件だけは

何だかわからないけどヒューマギアのデータを見てみたんだけど・・・会場に態と向かって行くような・・・ほらさ、酒飲む時に赤提灯に吸い込まれるとかない？』

「ああ、ありますあります。私も家に帰りたいのについつい寄って・・・

それが？」

何と聞くと或人はこう答えた。

『何だか何かに引き寄せられた・・・そんな感じだったなあって思っただけ。』

「引き込まれたって!?!・・・何に?！」

『分からないけどさ、あのライブには何かあったんじゃないかなあって思っただけでそっちの方も調べて貰えたらなあって思っただけ。』

「まあ良いですけど・・・ですが何を？」

『それが分からないんだよなあ、何せデータを調べようとしたらハッキングされて消去・・・それもヒューマギアに直接。』

「はあ!? データは全て『ゼア』に保管されてますよ!!
それをハッキングだなんて一体誰が?!」

『それも序つて感じでそれじゃ。』

「ああ! ちょっと!」

そして或人視点。

電話をかけ終えた後に或人はテレビに映っている天津を見てこう呟いた。

「お前がどうしてヒューマギアを消し去りたいかって理由は知らないけどはお前の思い通りにはさせないぞ。」

そう呟いてヒューマギアをリヤカーに移して出発しようとするとき、
辺りが暗くなった。

「あれ？今日は雨が降るなんて予報には出てなかったぜ？」

何でと思っているとヒューマギアが捨てられていた場所に・・・雷が突如として落ちてきた。

「ええええええ!!」

いきなりの事で驚いた或人は光を見て目を瞑って暫くすると・・・

光が収まったのだ。

「すげえ・・・雷落ちる所生で見たって・・・ええええええええ!!」

そう言つて更に驚いた或人の視線の先にいたのは・・・2人の人間であった。

一人は黒髪のに日本人で自分よりも年下で学生服らしきものを着ていた。

もう一人は白に近い銀髪の少女。

露出率が凄いメイド服を着ていた。

「え?!何で人が!!今までいなかったよなつて

おいアンタ大丈夫か・・・!?!」

或人は少年を仰向けの状態から体を真正面にするように移動させるとある物を見て目を見開いて驚いた。

彼の腰に付けられていたのは・・・嘗て自身が使っていたベルト。

『01ドライブ』と同系統のベルトなのだから。

「何でこの子がつて・・・ああそうだ!どっかに移動しよ!

ヒューマギアが壊されるから隠れ家に!!」

そう言つて2人も同じようにリヤカーに乗せて連れて行つた。

今始まる新たな話。

ここからどうなるか・・・誰も知らない。

デイレイクタウン

嘗てヒューマギアと人間が共存する未来都市として名を馳せていたが事故による

旧式ヒューマギア・・『アーク』管轄のヒューマギアが暴走を起こしたことによる爆発で破壊されてその殆どが水中に沈んだ。

そんな中で或人は自転車でその中に入ろうとすると・・一人の少女と青年・・いや、青年型ヒューマギアが立ち塞がった。

そのヒューマギアは耳にあるであろうイヤークラスフらしき機会がない代わりに小さな飾りが耳についていた。

「・・・凶・・・『迅』。」

青年型ヒューマギアの正体は『滅亡迅雷・net』のメンバーの『迅』。

嘗て或人が倒したのだが何処かで修復されたのであろう、見た感じ人間と大差ない感じになっている。

すると『迅』が或人に向けてこう言った。

「01、・・・何でヒューマギアを見捨てたんだ・・・どうして！」

そう聞くと凶がこう言った。

「気にするな『迅』、こいつも結局は自分可愛さで行動する人間だつて事だが：ヒューマギアは置いてもらおう飛電 或人。」

凶はそう言つてフォースライザーを腰に巻き付けると或人は凶に向けてこう言った。

「凶……いや、『立花 響』ちゃんが良いんだよね？」

「!!何故……私の!?!」

凶がそう聞くと或人はこう答えた。

「俺はあの後色んな場所に行つてヒューマギアを回収してここで保管しながら

君達『デイスペア』の……あのライブ襲撃事件の関係者を片っ端から

調べ歩いていたんだ。どうして君たちが『滅亡迅雷 net』と協力するように

なったのか? どうしてノイズを敵とするのかも調べたよ……

調べれば調べる程俺はどうして人間はここ迄するのかつて最初は本気で吐いたよ。

途中で挫折しそうにもなつたけど俺は君達の事が知りたいだけで捜し歩いて……

関係者の家族にも片っ端から調べ上げて俺は君達の事を知つた上で

こう言いたい……

「……『何故自分から悪になるんだ？』って。」

それを聞くと凶はこう答えた。

「簡単だ、そう願っているからだ。私達を恨み、陥れ、見捨てた連中が私達こそ『悪』で自分たちが『正義』だと錯覚して妄想している連中がな！」

「だから僕たちは手を組んだ、人間からヒューマギアを解放する為に戦う

僕たちと人間を恨み、人間を潰す彼女達とね。」

そう言って『迅』は服の裏側からスラッシュライザーを取り出すと或人を……いや、或人の背後に向けてこう言った。

「僕たちは戦うよ、『Z A I A』相手だろうとね。」

「!!」

或人はそれを聞いて後ろを振り向くとそこにいたのは……『AIMS』の兵士と刃であった。

すると兵士たちは刃が前に使っていたレイドライザーを装着して

プログライズキーを装填すると兵士の周りに赤黒い四角のナニカが周りを囲んだ瞬間にこう言った。

「実装」

そう言った瞬間に現れたのは……全身が角ばった赤黒い戦士であった。

『バーニングファルコン』

『サーベルタイガー』

『Kamen Rider Kamen Rider』

『ゼツメツサーベルタイガー』

「変身」

『スラッシュライズ』

その後2人も変身した。

『迅』は全身が赤の戦士『仮面ライダー バーニングファルコン』となった。

2人は戦士達相手に戦う中で

刃も『ファイティングジャツカルプログライズキー』を持つてこう言った。

「使い物にならない道具は排除……道具。」

それを言つて自身の動きが止まった瞬間に……後ろから声が聞こえた。

「迷っているようだな、刃。」

「……『不破』。」

スーツの上にコートを身に街つた癖毛が強い男性『不破 諫』、元『AIMS』の隊長でもあつた男性である。

「何故お前がここに居るんだ？」

刃がそう聞くと『不破』は耳元にある通信機をこつんと叩きながらこう言った。

「こう見えても俺は元『AIMS』の隊長だったんだぜ？」

「無線傍受か・・・貴様は確かヒューマギアの消滅こそが目的だったはずだ、ならば我々『Z A I A』に与するべきだろう？」

刃がそう聞くと『不破』はある事を思い出していた。

嘗て暴走していたマギアの中に自身が使っているシヨットライザーと同じ規格の物が幾つもあったことに。」

そして裏で『Z A I A』が絡んでいることを内心感じていた『不破』は『AIMS』を辞め、ある事の為に行動している。

それは・・・。

「確かにそうだった・・・けどな、あそこには『夢』がねえ。」

「夢・・・だと？」

「俺はあの社長が突き進む『夢』に賭けてんだ、お前にもそう言う夢があるんじゃないか？」

そう聞くと刃はまるで何かを迷っているような目を一瞬だけして・・・変身してこう言った。

「今の私は・・・『Z A I A』だ！」

「だったら手前の本当の夢語るまで拳で付き合うまでだぜ！」

『ランページバルカン』

『Kamen Rider Kamen Rider』

「変身！」

『ショットライズ』

その音声と共に変身したのは左側に幾つもの動物の意匠が施された青い戦士。

『仮面ライダー ランページバルカン』であった。

幾つもの戦闘が巻き起こる中で或人が取った行動が・・・これ。

「今のうちに！」

そう言つて自転車に乗つて猛スピードで逃げ出した。

30—3

デイベレイクタウンの中にある朽ちた倉庫の一角。

或人はここで回収したヒューマギアを保管して整備し何時でも使えるようにとっておいているのだ。

そんな中で或人はキンジが腰に付けているベルトを見ながらこう言った。

「うーくん、見た目はちよつと違うけど《オードライバー》何だよなあこれ。」
そう言うともう一つと言ってある物を取った。

あの時近くにあつた或人が知らない物《フルボトル》を取ってこう言った。

「見た目小さなペットボトルに見えるんだけど何の裝飾かな？ トゲトゲ？」
そう言って何か入っているのかなと思って・・・数回振った。

「何か音するけど中身が分からない・・・!!」

或人は何だつたんだと思つてしていると頭に何かがある事に気づいて急いで鏡を見て・・・。

「何じゃこりやああアアアアアアア!!」

驚いたのだ、頭が完全に・・・トゲトゲになつたからだ。

「えーナニコレ!?どうなってるの?これ元戻る!!」

慌てながらそう言うのとフルボトルを落とした瞬間に・・・髪が元に戻った。

「あ・・・戻った。」

良かったくくとほつとした様子でそう言う・・・魔される声が聞こえた。

!!!

「ううん・・・ここは?」

キンジはそう呟いて目を開けてこう続けた。

「俺は確か・・・ベルを・・・倒して・・・それで・・・雷が・・・」

「あ、起きた。」

!!!

キンジは目の前にいる或人を見て驚いて自身が横たわっていたソファァーから

転げ落ちると頭を摩りながらこう聞いた。

「アンタは……?」

そう聞くと或人はこう答えた。

「え?俺の事知らない?」

マジかよと思つていてとうとう名乗つた。

「俺は元《飛電インテリジエンス》社長の飛電 或人、君は何で雷と一緒にあのゴミ捨て場に……然もあのメイドさんと一緒に落ちてきたんだ?」

「雷……もしかして……いや、飛電インテリジエンス何て

俺は聞いた事ねえがどんな会社だ?」

「イヤイヤちよつと待って!飛電インテリジエンス知らないって

世界的大企業の事を知らないって……もしかして君記憶喪失?」

まさかなと思つてそう聞くとキンジはこう答えた。

「俺の名前は《遠山金次》、東京武偵校二年で実家は浅草で今は学園島に家を持つている。国連軍所属で一応はZECTの社員でもある。生まれたのは1994年の7月5日で17歳だ。」

そう言うとき或人は……え?つと目を天にしてこう言つた。

「イヤイヤイヤちよつと待ってよ!計算が合わないって!!」

「計算?」

「君のそれが本当だとしても17歳の時って2011年!今は2021年だよ!」

「2021年だと!そんなバカな!!俺の時は2011年の9月の終わりだぞ!」

「イヤイヤ本当だって!ほら証拠!!」

そう言っつて或人は自身のスマホを取り出して年月日を見せると確かに・・・
2021年であった。

「・・・マジかよ、じゃあここは未来かよ?」

キンジはそう言っつて項垂れるが或人は更にこう続けた。

「それに学園島何て俺は聞いたことないし武偵つて・・・何?」

「・・・ハイ?」

キンジはそれを聞いてえ?マジかよとそう思っているけどキンジはこう聞いた。

「なあさ・・・ちよつと聞いて良いか?」

「良いよ?」

「ISって・・・知っているか?」

「IS・・・あああれでしょ?イスラム教の過激派テロ集団!」

「いや違う・・・俺の知っている其れはパスワードスーツだ。」

「パスワードスーツ・・・へえ。」

「じゃあ戦術機は?!」

「知らない。」

「ドイツが常任理事国から解任されたことは!!」

「イヤそんな事になっていたら大ニュースでしょう!？」

「お台場のカジノステーションで非人道的売買行為!」

「日本にカジノ造るって話し合ったけどあれっておじちゃんになったし

人身売買ってマジ!？」

「・・・《イ・ウー》。」

「何ソレ?」

それ聞いて或人の言葉を聞いて何じゃそりやとそう思っているとじゃあ次ねと言ってこう聞いた。

「あのさ・・・ヒューマギアって知っている?」

「知らねえな。」

「ダイブレイク事件。」

「其れも知らねえ。」

「《滅亡迅雷 net》事件!」

「知らない。」

「……《Z A I A》って会社は？」

「聞いたことすらねえ。」

「……ノイズ。」

「何か壊れたのか？」

或人はキンジの目を見て……嘘じやなさそうだなあとそう思っていると……キンジの隣で寝ていたベル・ファレストが目を覚ました。

「う……ここは？」

「おお、目が覚めたか。」

キンジがそう聞くとベル・ファレストも少ししてキンジと同じ様になったのでマジと或人がそう言っただけとつとこう言った。

「つまり……君たちは雷でここに来たって……そんなSF物語……」

ああ、これがあるから信じるしかないよねえ。」

そう言っただけで或人はフルボトルを出すとベル・ファレストがこう言った。

「申し訳ありませんがそれは私のです。」

「あ、そうなの。じゃあ返す。」

そう言っただけで返した後にこう聞いた。

「それでさ、2人はどうすんのこれから？」

身分証明とか出来なさそうだしとそう言っていると・・外から誰かが入って来た。

よく見たらスカートを着た女性らしき人形を俵担ぎで入って来た男性を見ると或人はその人形を見てこう言った。

「イズ！」

30—4

「僕がイズを取り戻したかったただけだけどどうするんだ01？」

プログライズキーは全部ゼアが管理しているからイズを起こす事なんて。」

迅がそう言っているのを聞いてキンジとベル・ファレストはこう言っていた。

「プログライズキー……それってこいつの事か？」

「恐らくそうでしょう？……ですが個体が特定されているという事は恐らく専用のがいるのでは？」

そう言っているか或人は懐から……プログライズキーを出してきた。

「……どうして？」

「俺は社長を辞任する際に持てる分だけのプログライズキーを退職金代わりに肌身離さず持っているんだぜ？」

他にもあるぞと言って上着を脱ぐと……10近いプログライズキーが体に纏っていた。

「万が一って重要だよな？」

そう言うか或人はイズの耳にプログライズキーを近づくと……耳に当たる機械が開

閉したのだ。

「成程な。」

「これが・・・ヒューマギア。」

キンジとベル・ファレストはそれを見てそう言うのとプログライズキーが内部に挿入されて・・・起動した。

「・・・おはようございます或人社長。」

「イズ！良かった！」

或人はイズを抱きしめるとキンジとベル・ファレストに紹介した。

「ええと、紹介するよ。こいつはイズ、俺の秘書型ヒューマギアだ。」

「初めまして・・・？」

イズはキンジとベル・ファレストに視線を向けて挨拶するが・・・

何やら戸惑っている様子であった為イズは或人に向けてこう聞いた。

「或人社長、私のデータベースに彼らの個人情報載っておられません。」

「それどころか出生記録すらありませんが彼らは一体？」

「そう聞くと迅もこう続けた。」

「確かに僕のデータベースにも載っていないしそれに・・・何で01ドライバーを持っているんだ？」

そう言つて迅は一緒に持つてきたアタツシユケースから・・・

01ドライバーを見せると或人は・・・ギギギと首をまるで

壊れた人形の様に向けると或人は2人を見てこう言つた。

「・・・あれ、マジだったの?」

「未だ信じていなかったのか(んですか)!!?」

「いやだつて普通信じられないでしょう!?!」

或人の言つていることは・・・まあ間違いではない。

その後イズは何やらキンジのドライバーを睨みつけるかのように観察して・・・イズは或人に向けてこう言つた。

「社長、これは外見は01ドライバーに酷似していますが内部構造が違います。」
「構造？」

或人はそう聞くとイズはこう続けた。

「ハイ、このドライバーは我々の01ドライバーの様にゼアを経由するのではなくこのドライバーそのものがゼアと同じ働きをしていると推定されます。」

「へえ・・・凄いな其れ。」

「これですとゼアにもアークにも気づかれることなく変身が可能です。」

それと云ってイズはこう続けた。

「システムの中に記録映像がありました。それがそれも検証の結果本物であると同時に映像データがありましたので或人社長のパソコンにダウンロードしておきました。」

「え？マジで?！」

或人はそれを聞いて映像データを見ると・・・それは一言でいえば凄いの一言である。

上空からの映像もあるがそれは恐らくザビーがいた時の映像データであろう。キンジがザビーになった時の映像を見て。

「ええナニコレ！どんだけ早いのだ!!？」

キンジが金一のライダーシステムを使って同時変身する時。

「兄貴と一緒に戦っているって言う感じなのかな？」

金一の死。

「……。」

少し泣きそうであった。

神器での戦闘。

「ウオオオオオオオオオオ！ ナニコレ完全にSF映画並じゃん!!」

トランスフォーマーを見て。

「……これ完全に映画に出来るよな？」

ISに関して。

「女しか扱えないって何考えてんの？」

戦術機を見て。

「……何かこう言うロボットいるよな？」

そう言っていた。

更に言えば設計図やここに来る前にキンジとベル・ファレストが戦いあっていた情報を見終えた後に或人はこう呟いた。

「凄いよなこれ？ 完全に映画にも出来るんじゃないのって

「どうして01ドライバーと同系統が出来たんだろう？」

或人がそう呟いていると恐らくとイズはこう答えた。

「彼らはパラレルワールドから来たのではないのかと思われませう。」

「パラレルワールドって……あのもしもの世界って言う……あれ？」

「ハイ、私達の世界を《A》として遠山達の世界を《B》と呼称します。」

本来世界と言うのは互いに干渉できない様になっているのが普通なのですが恐らく何かしらの影響で互いの世界の間にある壁が壊れた状態になったがために

彼らが我々の世界に来たという状況になったのだと思われませう。」

イズがそう言うって説明を終わらすと

今度はキンジとベル・ファレストに向けてこう言った。

「それでは今度は我々の情報をデータとして送りましたのでどうぞ。」

そう言うってイズは2人の携帯電話に送信してキンジとベル・ファレストは

それを見て驚いていた。

ノイズがどう言う存在か。

今の世界情勢とヒューマギアについて。

そして《滅亡迅雷 net》についても……全てを学ぼうと頭に叩きこんでいた。

30—5

「つまりだ、あんたの祖父『飛電 是之助』がヒューマギアとAI開発を推奨した。」

「そうそう。」

「そして衛星『アーク』を大気圏に向けて射出しようとするも既に行動していた『滅亡迅雷 net』が暴走を起こしてこの『ダイブレイクタウン』が出来て今は立入禁止区域になっているでいいなええと……。」

「『迅』だ。」

「そう、そして12年がたって或人さんが社長になって01って言う存在となった。」

「その通りです。」

「そして或人さんが社長になって暫くすると『Z A I A』が会社を巡って『お仕事勝負』を吹っ掛けるがそれは全て天津つて言う

社長の目論見だったんだな？」

「(*・ω・)(*—ω—)(*・ω・)(*—ω—)ウンウン♪」

「然し最後の勝負の際に『ディスプレイ』と言う組織が宣戦布告して

『滅亡迅雷 net』も復活したんだな？」

「その通りだよ。」

「そして『デイスピア』って言うのがノイズ・・・古代から確認されている生命体で目的も何もかもが不明、分かっていることと言えば触れた人間を自分諸共人間を炭素にする事が出来るって事以外不明って・・・捕まえることも出来ないのかこれ？」

「ああ、無理無理。攻撃も捕獲もこいつら通り抜けてしまうから今のところ『ZAI A』のライダーシステムしか止められないって話。」

「そんで話は戻すが『デイスピア』はノイズ相手にも戦っているって理由は二年前のライブ事件で構成員はそんな時の生存者達から成り立っている。

理由は犠牲者家族や周囲の人間による酷いパッシング・・・見てて思ったがこいつらが諸悪の根源じゃねえか全く、こいつらが何したんだってんだよ何も見てね工連中がちよっかい出すんじゃねえよ。」

「・・・遠山君何かあったの？凄エ怒っているけど？」

「遠山様のお兄様も武偵なのでしたがとある豪華客船の事故で自身を除いて全員脱出できたのですが『能無し』とか『役立たず』とかネットや

誹謗中傷があったらしくそれを会社も便乗したようなのです。」

「ウワ最悪だな、助けて貰ってそんな事いう何て人としてどうだよそれ？」

「その後ですがその事故は会社が裏組織に金を献上させるために

やった事が分かって会社は倒産して上層部は全員逮捕、然も誹謗中傷された方々は全

員何故か身体の一部が無くなった状態で発見されたり賠償金を法外で

支払われて出来なければ裏社会の紹介する仕事に肉体労働で強制参加させられて

今は国外で死ぬほど働かされているって話ですよ？」

「……うん、聞かなきゃよかつた。」

或人はベル・ファレストの言葉を聞いて少し引き気味でそう呟いた。

そして再び説明に戻った。

「そんで最後に奴らが何かをしようとしているのは分かるけど其れが

何か分からないからこうやってヒューマギア拾いながら

見張っているでいいんだよな？」

「まあ、俺が出来る事って言えばそんなもんだしね。そんじや

次は遠山君達の世界だね。」

そう言うといズが立ち上がるや否や映像を出し乍ら説明してきた。

「それでは説明を、遠山様達の世界で2001年初頭にとある

少女科学者『篠ノ之 束』が最新鋭パスワードスーツ『IS』またの名を

『インフィニット・ストラトス』公表、その後世界に日本に向けてミサイルが発射されるも当時篠ノ之博士の初号機『白騎士』によって事態は収拾されるも

大勢の怪我人が発生するも政府が隠蔽したで宜しいですね？」

「ああ、間違いなくだ。」

「そして2006年に御剣グループが開発したパワードスーツ『戦術機』を発表し、それ以降各国が標準配備となったで宜しいですね？」

「おう。」

「そして同時期に宇宙から金属生命体『トランスフォーマー』が地球に降り立ちそれ以降はアメリカにテ活動、人類派の『オートボット』と故郷再生の為に

人類を奴隷とする『ディセプティコン』との戦闘が起き2008年に

『スタークインダストリーズ』製造の人造トランスフォーマーを発表、2009年にディセプティコンによる大規模侵攻が始まるもそれを阻止、同年にドイツが各国の孤児院にいる少女達を使って非人道的実験行為が起きていることが発覚し国連から常任理事国解任となり現在は4か国となっております。」

「その通りですわ。」

「そして2011年に世界で2人の男性IS操縦者を発見して入学、『織斑一夏』と『東城 刃更』のお二人となりました。そして同年に横浜のカジノにて

非人道的賭博行為が発覚し同年夏に『イ・ウー』と呼ばれる無法集團のいるアジトを制圧、そして秋に『極東戦役』を宣言され貴方方は戦闘となつて今に至ると言う事で宜しいでしょうか？」

「ああ、問題ねえ。」

「また補足となりますが貴方方の世界には我々に於いては

フィクションともいえる精霊や悪魔、堕天使、天使、妖怪、異業種、

魔法使いなどがおられておりその方々は東京から離れた人工島『弦神島』に

在籍されているで宜しいですね？」

「おおその通りだ、そして神器もある。」

そう言うとキンジは自身の神器を胸から出して直した。

「世界が違つと皆違つんだなあ。」

或人はそう呟いて天井を見つめると・・・迅がイズの手を握つて・・・何処かに立ち去つて行つた。

「ちよ？ちよつと待つて!？」

或人がそう言つて追いかけるのを見てキンジ達は如何すると思つてこう聞いた。

「どうする?？」

「仕方がありません、私達も追いかけましょう。」

「ああ、地理を学ばないとな。
そう言つて3人を追いかけた。」

30—6

「あそこだ！」

キンジはイズと迅と追いかけていった或人を丘の上で見つけると・・・

何やら武装した警備員にしては重装備な兵士と白い服を着た男性がおり

白い男性が何かを構えるのを見てキンジは咄嗟に傘越しに見えた武器目掛けて銃弾を放った。

「う・・・ぐう。」

「え？」

或人は天津がイズに向けて拳銃を向けようとしたので咄嗟の勢いでイズを庇おうと前に出た瞬間に天津の手から拳銃が・・・落ちた。

然も天津だけではなくAIMS全員がそうであった。

「一体何が・・・?」

「或人様、あれを。」

「?」

イズがそう言つて指さした先を見るとそこにいたのは・・・拳銃を構えたキンジ達の姿がそこにあつた。

「ウオオオオオオオオオ！初めて見た拳銃!!」

『『ピースメーカー』、アメリカ西部時代に開発されたりボルバー式拳銃。形状は違いますがありますしあれはマガジン型ですが間違いありません。』

「西部つて・・・西部劇の拳銃！ウオオオオオオオオオ！夢があるー!!」

或人はそれを聞いて興奮気味にそう言うのと天草はキンジを見てこう言つた。

「誰だ貴様は!」

「それを言つて名乗る馬鹿はいねえだろうが。」

「ア、確かに。」

キンジの言葉を聞いて或人は確かかと思つていた。

すると迅はAIMSの戦闘員を見てこう言つた。

「気を付けろOー！そいつらは天津が仕込んだチップで操られている!!」

「何だつて・・・!!」

それを聞いて或人はふざけるなどそう思っていた。

人の心を操ってまるで道具の様に扱うなどあつてはならないと思っているからだ。

それを聞いたキンジはベル・ファレストと共に上から降りると懐からベルトと『バレット』プログライズキーを取り出してベル・ファレストはフルボトル入りの注射器を取り出した。

すると或人は天津に向けてこう言った。

「ふざけんな天津！心はその人の物だ！！人を支配して道具の様に扱って

そんなんで社長って……皆を導く人間がやる事なのかよ！！」

それを聞くと天津は……不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「私の会社をどうしようが私の勝手だ。」

そう言って天津はサウザーに、AIMSの戦闘員はレイドライザーで変身するとキンジは或人に向けてこう言った。

「あいつらは俺とベル・ファレストが止める！アンタはあのトゲトゲ野郎を！」

そう言ってキンジはバルカンに、ベル・ファレストは

ヘッジホッグスマッシュになって二体のレイドライザー相手に戦う中で

或人はそれを見て驚いてこう言った。

「ええええええ！不破さんと同じってあつちは何？どうなってんの!!？」

「或人社長、彼女の方は如何やらあのボトルの様な物で変身するようですが我々とは技術系統が異なります。」

「成程ねえって……こうしちゃいられないんだ！」

そう言つて或人は鞆から01ドライバーを取り出してプログライズキーを近づけさせるも……反応しなかつた。

「あれ?……ええ！反応しないって……!!」

何でとそう思っている中でサウザーが或人を殴る飛ばそうとすると或人はそれを防御しながらイズから離そうとしている中でイズは嘗て最初に或人が

01になった時の事を思い出している中で或人がサウザーに殴り飛ばされるとサウザーは予備のサウザンドジャッカーを出してイズに向けて放とうとすると或人はイズの前に立って守るかのようこう言つた。

「俺が01だー!!」

そう言つた瞬間にプログライズキーが……起動した。

『ジャンプ』！

それと同時にサウザーがサウザンドジャツカーを振り下ろそうとした瞬間に
 何かがサウザンドジャツカーの軌道を・・・逸らした。

「何?!」

サウザンドジャツカーの攻撃が明後日の方向に向かって放たれた瞬間に
 或人はプログライズキーをセットしてこう言った。

「変身!」

『プログライズ』!

『飛び上がライズ!ライジングホッパー! A jump to the sky t
 urns to a r i d e r k i c k.』

そして或人が01になった瞬間に或人の周りで・・・何故か分からないがザビーが飛
 んでいた。

「ザビー！」

キンジはそれを見てそう言うのとザビーは或人の肩に止まって羽ばたいていると或人は自分とイズを守ってくれたんだなど分かるところでこう言った。

「ありがとうな。」

それを聞いてザビーはブブと答えると或人はサウザーに向けてこう言った。

「お前を止めれるのはこの世でただ一人……俺だ！」

そう言って01はサウザー目掛けて攻撃を開始した。

アタッシュカリバーを使って応戦している中でレイドライザーは

それに気を取られた隙にキンジはウルフブレイカーを起動するとそれで攻撃した。

ト ッ ヨ シ グ ン イ テ ー ユ シ ル レ

「うおらあ！」

「ウワアアアアアアア!!」

シルレバ

それで戦闘不能になった瞬間に変身が解除されたのでキングジはその内の一つを奪い取って戦いを見ていた。

グ シ ヨ ッ ト
ン イ テ ー ユ

『エブリバディ』！

『メタルライズ！ Secret metal
飛電メタル！メタルクラスタ
ホッパー！ It's high quality.』

01がメタルクラスタホッパーに姿を変えるとアタッシュユカリバーと
プログライズホッパープレードを付け合わせてサウザンドジャツカーを
弾き飛ばすと止めを刺そうと考えた。

『メタルライジングインパクト』！

その音声と同時に鋼色の飛蝗の群れがサウザーに襲い掛かるがサウザーはそれを蹴
り飛ばした瞬間に巨大なドリルに姿を変えると或人はジャンプして

それと共にサウザーを襲った。

するとサウザーは吹き飛んで天津に戻った。

「何故だ・・・1000%あり得ないぞ！01になれるなんて!!」

あれは飛電インテリジェンスの社長ととしての証だぞ!!」

それをと言った瞬間にイズが割り込んでこう言った。

「それは、或人社長がゼアに認められたからです。AIと人の懸け橋として。」
そう言うが天津は信じられないと言わんばかりに撤回した。

それを遠くで迅が見ていると・・・背後から滅が現れてこう言った。

「珍しいな、お前にも人間の友達が出来るとはな。」

「そう言うとは迅はこう返した。」

「友達？僕に人間の友達なんていないよ・・・ヒューマガアは、

僕が解放する。」

「好きにすればいい。」

「そう言うて2人は去って行った。」

30—7

そして数日後。

とある小さな制作会社が立ち上がった。

名前は『飛電製作工場』。

そう・・・或人の会社だ。

あの後或人は自身が社長になったことに伴ってこれまで回収したヒューマギアを自身の会社の隣にある小さな倉庫に保管されることとなった。

そしてキンジとベル・ファレストはと言うと・・・。

「それじゃあこれで良しと、後防犯用に監視カメラを

ここに倉庫と金庫に付けて。」

「皆様、お食事のご用意が出来ました。」

この飛電製作会社に入社した。

元の世界に戻るまでの間居場所が無い彼らを或人は保護者兼社長として引き取り

彼らは社員として住まえることと相まった。

キンジは警備員として、ベル・ファレストは運転手兼社員としていることにな

った。

然し戸籍とかはどうしようかと言っているとイズがこう提案してきた。

「そちらにつきましてはこちらからゼアの力を使って登録させておきます。」

そう言うのと確かに戸籍が作られていた。

それからと言うものの食糧の買い出しにヒューマギアのメンテナンスに必要な

人材集めに四苦八苦している中とある人間が入社してきた。

見た感じ40ぐらいのどこにでもいる普通の男性だが何でも各地を

転々としながらも元々は営業マンとして働きながらもヒューマギアの

簡易メンテナンスのアルバイトもしていたらしくそう言う事なら出来ますと言った

男性『守崎 洸』を事務員として雇った。

何か訳アリかなと或人は感じてはいたが正直な所人手不足な為それは考えないようにした。

「社長、遂に開始いたしました。」

「そうだなイズ、俺達の会社だ。」

或人は感慨深そうにそう呟いていると・・・キンジが現れてこう言った。

「其れなら俺達も同じですよ。」

そう言つて全員が集まると或人は全員を見て笑うと笑顔でこう言った。

「さあ！0から立ち上がって1からのスタートだ・・・『01』だけに——！！
はい、アルトじゃないと！」

いきなりダジャレを言ってきたのでどう対応を取った方が良いか分からない全員であったがイズが普通にこう言った。

「社長、それは『01』と0と1を掛けた駄洒落で宜しいですね。」

「その通りだよイズ！」

そう言うのとベル・ファレストが前に出ると或人は戸惑った様子でこう聞いた。

「え？何?！」

そう聞くとベル・ファレストは或人に対してこう答えた。

「先ほどの洒落ですが・・・—300点、才能無しですわね♪」

「笑顔でそれ言う〜〜〜！」

駄目だし喰らって落ち込む或人を見てキンジはこう思っていた。

「(ま、こう言うのも悪くねえな。)」

そう思っていた。

何処かの基地。

「以上が衛星で確認された状況です。」

「そうか、再び01が姿を見せたか。」

「叔父上、私に行かせてください。人類の未来の為、防人として奴を捕えます。」

「いや待て、先ずは様子見だ。レイドライザーが支給されるまではこちらも戦力を整えておきたい。それに……」

そう言つて映像に映つたのは……仮面ライダー『凶』となつた響の映像データが映つた。

無論もう一つ、彼女の姿が変わつた時の映像も。

そしてこう書かれていた

『
G
A
N
G
N
E
A
L
』
ㄣ。

3
1—1

あれから数日経って或人は現在……。

「う～～～ん。」

筆を持って何かを書こうとしていた。

「！……う～～～ん。」

何やら決めたいことがあるようであるがそれが何なのか分からないようである。

「社長……何を迷っているのですか？」

「ああ、イズ。いやさ、社訓を考えているんだけどこれが何とも。」

「『社訓』……会社の方針を決めるうえで重要なファクターですね？」

イズが或人に向けてそう聞くと或人はこう答えた。

「うんそうなんだよ、何せこのご時世でヒューマギアが無くなって

困っている人達がいるから助けてあげたいんだけどどうしたら良いのかなって。」

或人がそう言うのと机の上で事務作業をしていた洗がこう答えた。

「それでしたら既に数件ほど予約が入っております、ええと確か今日は……

ああ、名前は『森筆 ジーペン』さんですね。」

「ジーペンさん!？」

或人が大声でそう聞くと洗はこう返した。

「ええまあ、本日はアシスタントヒューマギアの再生をお願い」

するとプルルルルと電話が鳴ったので或人が携帯電話を掛けると出てきたのは……。

「ああ、キンジ。どうしたんだ？」

『ああ社長、今日予約した《森筆 ジーペン》が来たから通したいんだが

良いでしょうか?』

「おお、良いぞ。」

或人がそう言つて暫くすると……男性が大きな段ボールを台車で持ってきたのだ。

「よう、社長。新しい会社始めたつて聞いたから来たんだ!」

「お久しぶりです『ジーペン』さん。」

或人がそう答えるのは肥満体系で少し不健康そうな見た目をした男性だが彼はこう見えても売れっ子の漫画家で或人もその漫画の大ファンなのだ。

「さて早速なんだけどこいつを直してくれ!」

そう言つて段ボール箱を開けた中に入っていたのは……

男性型ヒューマギアであった。

「今まで『AIMS』にバレない様に物置の中に隠していたんだが
もしかしたらと思って直して欲しいんだ。」

それを聞くと或人はこう答えた。

「分かりました、・・・ですが。」

「ですが・・・何だよ？」

まさか直せないのかとそう聞くと或人は『ジーペン』に向けてこう答えた。

「先ずは『Gペン』の本心を聞きたいんです。」

「?？」

それを聞いて『ジーペン』だけではなく洗も何でと思っていた。

そして『ジーペン』は仕事があるからと言って一端家に帰ると洗とイズは
或人に向けてこう聞いた。

「あのう社長・・・今のは一体？」

「どういう意味でしょうか？『Gペン』の本心を聞くとは一体？」「それをこれから聞くのさ。」

或人はそう言つて『Gペン』の耳元にある機械に飛電用のマスタープログライズキーを当てた。

これを使う事によつてどんななヒューマギアも起動することができる一種のマスターキーである。

すると『Gペン』が起動した。

「或人社長……ここは？」

「『Gペン』、一つ聞きたいんだが良いか？」

「？」

「お前は……『ジーペン』さんの所で漫画を描きたいか？」

そう聞いたのだ。

内容次第では『Gペン』を此の儘もう一度停止させるといふ事だ。

すると『Gペン』はこう答えた。

「……仰っている意味が分かりませんが、『ゼア』とリンクできません。」

そう言つて『Gペン』は出て行つた。

「ちよー待つてよ『Gペン』!!」

そして外に出てみると『Gペン』が上空を見あげながらこう言った。

「『ゼア』とリンクできません。」

「どういう意味だ？」

キンジがそう聞くとイズがこう答えたのだ。

「我々ヒューマギアは『ゼア』による膨大な情報をアップデートする事で

その情報を読み取って我々は常に上に向かって行きますが然し『ゼア』とのリンクが出来ないと言う事は我々はこれ以上人間でいう所の進化と言う概念が無くなってしまうのです。」

「つまり今の彼は今後どうするべきかを考えることが出来ないか？」

ベルがそう聞くとイズはこう返した。

「はい、それでこそ迅の様に『シンギュラリティ』に達しなければ

いけません。」

『シンギュラリティ』・・・確か技術的特異点とでも言われるものですが
そうなるらと一体どうなるのです？」

そう聞くと或人はこう答えた。

『シンギュラリティ』になると普通の人間と同じ様に笑ったり怒ったり

泣いたり楽しんだり感情が芽生えるって聞いたけど

俺には一体何なのかさっぱり。」

「つまりヒューマニアは・・・俺達と同じ、いや、

それ以上の存在になるって事か？」

「その通りだよ。」

「「!!!」」

その時に声が聞こえて見てみるとそこにいたのは・・・迅であった。

「ここに居れば友達が来るって分かっていたからね。」

「友達・・・『Gペン』をどうするつもりだ？」

「簡単だよ・・・人間から解放させる、それが僕たちの目的だ。」

「その通りだ。」

「響ちゃん。」

「凶だ。」

その名で呼ぶなど凶がそう言うのと迅と共にプログライズキーを出すとキンジ達もプログライズキーを出して・・・互いに変身した。

「ヒューマギアは・・・僕が解放する！」

「ヒューマギアの未来の為に・・・渡してもらおう！」

迅と響は互いにそう言って・・・攻撃を始めた。

そして……。

「響？」

その光景を洗はそう眩いていた。

3 1—②

或人は迅をキンジは凶を相手取っていた。

そんな中で迅は或人に向けてこう言った。

「人間は傲慢で卑怯だ！ヒューマギアを悪者にして本当に悪い連中は放置する！！僕は
そう言う事を平気でする人間どもからヒューマギアを解放するんだ！！」

「違う！人間は全員が全員悪い人たちじゃない！！」

「どうだかな！お前も何時かそうするさ！！」

そう言いあいながら迅は攻撃を続けた。

そして凶はと言うと……。

「人間は皆悪意の塊だ！戦争や不和を生み出し、自分よりも弱い人間たちを
痛めつけて助けようともせず遠くから見ればかり……そんな連中から
ヒューマギアを解放してこの地球を楽園に変えるんだ！」

「お前だって人間だろうが！その考え方だとお前も消えるべきだって意味じゃねえのかよ!!」

「そうだ。」

「何!?!」

キンジは凶の放っている言葉を聞いて肯定するところ続けた。

「私達『デイスペア』はこの世から人間たちを滅ぼしヒューマギアを

この世界の中心として君臨させそして私達もヒューマギアとして

この世界に存在し続ける。それが私達の目的だ。」

「そんな事可能なのかよ?!」

キンジは凶の言葉を聞いてそう聞くと・・・遠くにいるイズがこう答えた。

「不可能ではないかと。」

「!!」

それを聞いて或人とキンジが驚いているとベルがこう聞いた。

「一体どのような?」

「簡単です、脳波を直接ヒューマギアのメインフレームと

メモリーシステムにインストールすることで自分の記憶を入力し人格等は脳を

直接メインシステムに繋いでおけさえすれば出来るかと。」

「マジかよ……。」

キンジは本当に出来るのかよと恐怖する中で或人がこう言った。

「そんなの俺がさせない！」

「何？」

「例えヒューマギアになつたとしても……それで本物になれるはずがない！人はどうやっても人でしかない！」

「そんなのさ……やらなきや分らないだろうが！」

それを聞いて迅が攻撃を更に苛烈にさせているとそれを受けて態勢を崩した或人が凶に向けてこう言った。

「俺が変えさせてやる！人間が全員悪じゃない事を！！

ヒューマギアとも共存できるって事を俺が証明させる！！」

「だったら……やってみるよ！！」

或人の言葉を聞いて苛立つてきた迅が最大出力で攻撃して或人を弾き飛ばした。

「あぐう！」

「社長！」

「よそ見している場合か！！」

そう言っていると凶が必殺技を放った。

「ハアアアアアアアアア!!」

『煉獄斬壞』を放とうとする凶と同時にキンジは『ウルフブレイカー』に『S A N D E R』と書かれたプログライズキーをマガジン部分に装填させると電流が流れ始めたのだ。

そして互いに技が放たれた。

ト ツ ヨ シ ク ツ テ ル ボ

ク ッ テ ル ボ
ト ッ ヨ シ

そして互いの攻撃が衝突して・・・爆発が起きた。

「ウワアアアアア!!」

その衝撃でキンジと凶が吹き飛ばされるが迅がGペンを掴もうとするとベルが立ち塞がってこう言った。

「そうはさせませんわ!」

そう言つてハリネズミフルボトルで変化した髪の毛で迅の装甲の間に突き刺した。

「!・・・へえやるんだ。」

そう言いながら迅は肩を動かすと・・・懐から拳銃を取り出してベル目掛けて放つた。
「くう!」

ベルは咄嗟に同じく懐から出したナイフで銃弾を弾くもそれと同時に迅によって投げ飛ばされた。

「危ねえ！」

キンジが咄嗟にベルをキャッチした瞬間に全員に向けてこう言った。

「ヒューマギアは解放させてもらうよ。」

「ああああああああああああ。」

Gペン は棒読みの様な感じで其の儘迅と共に飛んでいった。

「Gペン！」

或人がそう言った瞬間に凶がこう言った。

「今日は失礼させてもらうが忘れるな！私達は」

「響！！」

凶が言いかけた瞬間に洗が会社から出てきた。

「洗さん！危ないから下がって」

「父さん．．．．？」

「え？」

或人はそれを聞いて眼を点にするが洗は凶に向けてこう続けた。

「響！お前生きて．．．良かった、本当に」

洗が涙目でそう言う凶は．．．。

「何が良かっただ!!」

怒りの表情でそう言うとうこう続けた。

「私たち家族を捨てておいてよくもまあそんな事が言えるもんだな!」

「確かに俺は家族を捨てた臆病者だ・・・だからこそ旧姓に戻して

仕事先見つけて何時かお前と母さんを迎えに行こうと」

「母さんとはあちゃんが死んで・・・私はずっと一人だった。」

「響・・・。」

「そして私達は世界から見捨てられた者としてこんな世界を破壊しつくして・・・復讐して私達を虐げた連中を絶望の中で殺してやると決めた!!」

お前もその一人だって事を忘れるな!!!」

そう言うとう凶が立ち去ろうとした瞬間に・・・上空から・・・巨大な剣が落ちてきた。

「ハアアアアアアア!!」

「!!」

ズドンと言う音と共に剣が落ちると柄のあたりから人が降りてきた。

土煙と共に出てきたのは……青い長髪の髪、線は細い様に見えるが
スタイルの良い女性が……現れた。

『風鳴翼』か……。

「日本のトップアイドルの!!」

或人が凶の出てきた名前を聞いて驚いていると女性……『風鳴翼』が
こう言った。

『01』飛電或人、『凶』立花響、『蒼狼』の男……私達と来てもらうぞ!」
ハアアアアアアアアと何処からか剣を出してきて突如と立ち向かってきた。

31—4 翼対響

そして何処かにある指令室。

「翼さんが例の3人と接触！交戦状態に入りました!!」

「よし、ここからは『Z A I A』や『滅亡迅雷・net』が来ない様に監視カメラを重点的に調べろ!!」

男性オペレーターの言葉を聞いてそう指示を出すのは赤茶色の髪に

赤のカッターシャツの襟を折って腕を見せている

この男性の名前は『風鳴 弦十郎』。

似ても似つかぬが今戦っている翼の叔父である。

彼らは日本政府が保有する部隊の機密戦闘部隊で唯一無二の対ノイズ部隊

『特異災害対策機動部二課』通称『特機部二』と呼ばれている。

何故彼らがライダーシステムを狙っているのかと言うと

それは或人が暴走したヒューマギアと同時にノイズ相手に戦った際に

ノイズに触れたにも関わらずに炭化しなかったどころかノイズを倒していた事から

秘密裏に調査して然るべき時に日本政府にいる自身の兄……

『風鳴 八鉦』総理大臣と共にドライバーの引き渡し又は共同開発と言う形で

協力体制を取りたかつたがお仕事対決でご破算となつてしまふも近々『Z A I A』が
レイドライザーを支給すると言う計画がある事が伝わるも弦十郎はこう考えていた。

「(奴は何かを隠している。)」

そう確信して彼は独自にドライバー開発をする為に考えていた矢先に

再びO I が現れたことを報告で知り今回の行動に出たのだ。

本来ならばこちらから出向くのが筋だと思つているが正直な所欲していたのだ。

仮面ライダーになれるドライバーと・・・立花響を。

何故彼女もなのかと思うのだが彼らは彼女が持つているある物を彼女事こちら側に
加わればと思つてもいた。

本人の意思を蔑ろにして。

「(本来ならば俺が直接その理由を知らした方が良いかもしれんが
時間が足りないのだ・・・済まない!)」

そう思いながら戦闘情報を見ている『弦十郎』であつた。

そして製作所では。

「ハアアアアアアアア!!」

「フン！」

翼は先ずはと言う思いで響に向けて剣を向けると響は剣を足で弾いて変身した。そして『凶』となった響は正面から闘う中で翼に向けてこう聞いた。

「何故私達を狙う？」

「貴様らのドライバーとお前の胸にある『ガングニール』が用があるからだ！」

『ガングニール』・・・私の胸の中にあるこいつの名か？」

「そうだ！それはそもそも私の片翼にして今は亡き私の親友・・・」

・・・『天羽 奏』の忘れ形見だ！

「奏さんの・・・!？」

響はそれを聞いて驚くが翼は攻撃を苛烈にしてこう続けた。

「そうだ！何故貴様がそれを纏えるのだ!!何故『ガングニール』は貴様を選んだのだ!?!答えろ立花響!!」

その時の翼はまるで子供が駄々を捏ねるかのように言っているようであったが響はそれに対して・・・シンプルにこう答えた。

「知らん。」

「何だと・・・?」

「知らんと言っている、私が何故『ガングニール』を……」

天羽奏が持っていたものを持っているのかなどどうでも良い。」

「どうでも良いだと！それはこの国を守るために！」

防人の使命を果たすために必要な」

「必要な……私にとっては人間を守る事その物がどうでも良い。」

「どうでも……良い」

「そうだ、貴様なら分かるはずだろう？私達『デイスペア』が人間を

どれだけ憎んでいるのかを！」

「だが貴様はノイズを倒している！それが人間を守っていると」

「違うな、私達はノイズのせいでこうなった！ノイズを滅ぼし、人間を滅ぼし、ヒュー

マギアを新たなこの世界の頂点に君臨させる事……」

それが私達の願いだ！」

そう言いながら響は翼の腹部に蹴りを加えて弾き飛ばした。

「ガハア……!!」

「そしてお前達があのライブをしたことで全てが始まった……」

貴様も私達の未来を奪った当事者だ!!」

そう言って響はフォースライザーを二回スイッチを押して

プログライーズキーを開け閉めすると音声 flowed。
『ゼツメツユートピア』！

凶 塵
芥 刃

その音声と同時に腕に装備されていたブレードを地面に刺した瞬間にブレードが地面から幾つも見えながら迫って来たので翼は剣巨大化して盾代わりにした瞬間に翼の腹部目掛けて巨大な剣が現れて其の儘貫くかのように上に行ったが弾かれた。

「これくらいなんとも」

「どうか。」

響がそう言った瞬間に幾つもあった地面から生えてきた剣達が飛び出してきて翼目掛けて襲い掛かって来たので翼は剣を・・・幾つも出して攻撃した。

『千ノ落涙』

そして全てが相殺されたかに見えた・・・次の瞬間に響が爆炎の中から姿を現した。

そう・・・最初に見せた黄色い装甲を身に纏って。

「!!」

突然の事で驚いたその時が・・・翼にとって隙がうまれてしまったのだ。

「遅いな。」

そう言つて響は彼女の腹部に思いつきり拳をねじ込んだ。

「いば」

「未だ倒れるな。」

響はそう言つて腰から滅が使つていたかのような紐が現れたと同時に響はそれを使つて翼を雁字搦めにすると腕についている装甲から・・・

ブースターが現れて其の儘もう一度殴り飛ばした。

そしてその儘翼を道路に叩き落とすと響は翼の頭を掴んでこう言つた。

「これで分かつたか？私達がどう言う思いで今日まで生きていたのか

その一端を？」

「あ・・・が」

「未だ戦うのか・・・ならば望み通りに！」

「止めろ響!!」

洸の声と同時に響の足元に・・・何かが落ちた音が聞こえた。

そしてそれから・・・煙幕が張られた。

すると響は洸に向けてこう言つた。

「忘れるな！私はお前を必ず殺す！！必ずだ!？」
そう言った瞬間に・・・翼と響は姿を消した。

「響・・・」

洸はそれを聞いて泣きそうな顔になっているが或人はこうも思っていた。
「(Gペンが心配だけどこっちも心配・・・ああもう、前途多難だなあ。)」
これが社長の宿命なのと思っっている或人であった。

31—5

そんな中に於いて迅はGペンを連れだした後彼らはとある路地裏に向かった後にGペンに向けてこう言った。

「Gペン、君は自由になったんだ。人間に縛られることなく自分の意思で未来を創れるんだ、『チエケラ』の様に。」

チエケラとはこの話の最初ら辺に登場したヒューマギアであり現在では『ヂイスペア』と行動を共にしている。

然しGペンはそれが何なのか分からなかった為こう言った。

「自由とは何ですか？」

それを迅はこう答えた。

「自由は自由だよ、自分の意思で考えて行動することが出来るんだ。『ゼア』にも『アーク』にも支配されずに思うがままに生きれるんだ！」

迅はそれを嬉しがるようにそう言うがGペンはそんなの分からないとも言わんばかりにこう言った。

「私は仕事があります、では。」

そう言うのと迅はGペンを止めてこう言った。

「何言ってるんだ！もう人間に縛られずに済むんだよ!?今ここから出たら

『Z A I A』の手先になっている『A I M S』に壊されるんだよ!!?

もう君を縛り付ける存在はないんだよ!!」

「申し訳ありません、貴方の言っていることが理解できないのでそれでは。」

「Gペン!!」

Gペンは其の儘立ち去って行くと背後から声が聞こえた。

「これが現実だ迅。」

「滅」

滅である。

すると滅はこう続けた。

「奴らは自由である事、自分で考えることが未だ理解できていないのだ。お前は自由

について色々と言説振りまいているようだ。奴らが分かるうとしない限り

お前の言っていることは幻想にすぎない。だからこそ必要なのだ、導く存在が。」

「それが『アーク』だつて言いたいの？」

「そうだ、今こそ人類を滅ぼすために我々は力を合わすときだ。そうだろ迅？」

「・・・僕は。」

迅は滅の言葉を聞いて自分が無いをしなければならぬのかを・・・

少しずつであるが考え始めた。

その一方で、或人はと言うと。

「申し訳ありません！Gペンを奪われてしまつて申し訳ありません!!」

「奪われたって何でこのご時世に・・・いや、こんな時世だと当然かもしれないな。」

或人の言葉を聞いてジーペンがそう言いながらGペンが座っていた場所のデスクを触っていると或人に向けてこう言った。

「覚えてるか社長さん、俺が一度漫画についてなんも気力がわかかなかった時の事？」

「はい、今でも覚えています。」

「アンときアンタこう言ったよな?・・・」

『漫画家も芸人も人を笑わして幸せにさせて夢を与えるのが仕事なんだろう！
それなのに今あんたがそれを放棄してしまつたら誰が夢を与えるんだよ!!』
つて。あの時は嬉しかったぜ？何せ編集局ですらそんな事言つてくれなかったから
目が覚めて今でも漫画を描き続けているんだ。」

そう言うとき或人に向けてジーペンがこう言つた。

「俺さ、夢があるんだ。」

「夢?。」

「Gペンに漫画を……アイツだけのオリジナルの漫画を書かせようと
思っているんだ。」

「漫画つて……それ凄い事じゃないですか!!」

「だろ?上手く言えば世界最初のA Iロボット作の漫画が生まれるんだ、
それを世に送り出してGペンの漫画で世界中の人達を笑顔にさせたいって
そう思うんだ。」

そう言つた時のジーペンの顔はまるで……子供の様に煌いていた。

「Gペンの作品で皆を笑顔かア、浪漫あるよなあ。」

「ハイ、これを皮切りに再びヒューマギアの活動の場を提供してくれる場所が増えればもう一度ヒューマギア達が社会貢献出来るようになれます。」

「それにはまずGペンを探さなきゃいけないしそれに……。」

「洗様の事ですね？」

「あああ……どうしたら良いんだろうねえ？」

或人は空を見ながら呟いてあの時の事を思い出していた。

一時間前

「ええええ！響ちゃんが貴方の娘!？」

「はい、お恥ずかしながら。」

洗は項垂れるかのようにそう言うけれど或人がこう聞いた。

「名前が違うんだけど？」

「ああ、私は婿養子だったんです。守崎は養子になる前の旧姓で

本当は『立花 洗』が本名だったんです。」

「ですがどうして旧姓をご利用に？」

イズがそう聞くと洗が言いかける前にキンジがこう答えた。

「風評における就活障害を回避させるためじゃねえのか?」

「そう言うとその通りですと言つて洩はこう続けた。」

「私は何処でもいる普通のサラリーマンでしてまあそれなりに

充実しております。ですが二年前のあの事件で響は胸に傷を負つて

それが心臓付近だったので医者からは奇跡だと言われましたしそれにお金・・・

ああ、被害に遭つた人たちには政府から一時見舞金が届けて貰えるので

それで治療費に宛がったのですがあのライブ事件でノイズの被害に遭つた人たちは

その時の・・・半分近くしかいなかったのです。」

「半分・・・成程な、避難する際に。」

「遠山君の言う通りです、皆自分の命が惜しいです。ですから

踏んづけてしまつたり客席から落ちたりして亡くなつた人たちが半分以上を

占めていることから世間からはこう言われてしまいました。」

『今回のライブ事件の生存者達はお金欲しさに人を見殺しにした!!』

「と言われましてネットではさらに広がってしまい私はそれが元で

会社を首になってしまつて地元や近隣の地区では仕事は見つからないだろうと
考えた私は妻と相談して私の旧姓を使って響たちと暮らそうと言つてくれて

私もそうした方が良くと考えてお義母さんに言つたら・・・

こう言われたのです。」

『代々から続く立花をここで消させはしない!!』

「そう言われて更には出ていけとか言われまして僕は如何しよかと考えて

取敢えずは僕だけでも旧姓に戻して仕事を探して軌道に乗ったら迎えに行くと

約束して出て行ったのですが・・・その後は皆さまのご想像通りです、妻を失って娘

も行方知れずとなつて後は惰性のまま今の状況となつたのです。・・・

私が悪かつたんだ、あの時無理やりでも、それでこそ妻と響を連れて

あの家から・・・いや、あの地区から出て行けば良かったんです。何処か

私達の事を知らない街で三人で狭くても家族として暮らそうという覚悟が

僕にはなかつたから響は・・・俺は。」

洗はまるで泣きそうな声色になつて俯いてしまつたのだ。

「何とかしたいんだよなああの2人を。」
或人はそう言うしかなかった。

3 1—6

その一方で飛電インテリジェンスでは。

「社長、ヒューマギアが一体確認されたとの情報が。」

刃がそう言って携帯端末に映っている・・・何故かGペンがあった。すると天津は刃に向けて命令した。

「ヒューマギアは全て廃棄しろ、用のない道具は廃棄だ。」

「・・・了解。」

刃は言葉を詰めらせながらもそう答えて出撃した。

そして街中。

「ねええあれってヒューマギア！」

「嘘！何で動いているのよ!!」

「ちよつと誰か《AIMS》呼んで!!」

大勢の人達がそう言うが彼らは所詮その程度でしかないと見て取れた。

ヒューマギアが何故暴走したのかすら考えようともしないどころか身勝手に

破棄すると言った人間たちに嫌気がさしたからこそ《デイスペア》が生まれた事を
知ろうともしないからだ。

そしてGペンは近くのビルの屋上にある・・・漫画の絵を見て歩みを止めると《AIMS》
がやって来たのだ。

刃は部下たちを向かわせると部下の一人がこう聞いた。

「隊長、発砲許可を！」

そう言うが刃は何か可笑しいと感じてGペンに近寄ってGペンの視線の先を見て
こう聞いた。

「何をしている?」

「漫画を見ていました。」

「お前達ヒューマギアはもう必要なくなっている、破棄が認められているぞ?」

そう聞くとGペンは刃の目を見てこう聞いた。

「其れは、誰が命令したのですか？」

「今の飛電インテリジェンスの社長だ。」

「それは可笑しいです。」

「可笑しい？」

「はい、或人社長は我々を本当の家族の様にしてくれました。そして

それは前社長も然りです。」

「今は天津社長の方針によるものだ、逆らう事は許されない。」

「貴方は・・・何を迷っておられるのですか？」

「何・・・？」

「隊長！発砲許可を!!」

隊員がそう言うが刃は今の言葉を聞いて迷い始めたのだ。

本当に自分がしたいことなのかと、道具だと自分で

言い聞かせていたのではないかと思っていると・・・或人がGペン達の前に

現れた。

「Gペン！」

「或人社長。」

Gペンは或人の下に向かうと或人はジーペンが言っていた夢を語り始めた。

自身で作った漫画でデビューして多くの人達に知って貰いたいという願いを語るとそれを聞いていた刃は更に迷い始めた。

道具が夢を語るなどあつてはならない。

道具とは心を無くして只忠実に言われたことを全うすれば良いのだと今までそう思っていた。

だが道具と想っていたヒューマギアが夢を語り、それを実現してしまつたら自分は何なんだと考えてしまつてある物を連想してしまつた。

まるで自分は操り人形の様ではないかとそう感じてしまつたからだ。すると或人が持つていた漫画用の紙をGペンの見せるところ聞いた。

「Gペン、お前は どうしたい?」

そう聞かぬが隊員が刃に向けて再度こう聞いた。

「隊長!発砲許可を!!」

そう言つた瞬間に・・・声が聞こえた。

「申し訳ありませんが不躰な事はお断りいたしますわ。」
そう聞こえた瞬間にマシンガンが・・・突如爆発した。

「グわアアアアアア!!」

『キヤアアアアアア!!』

隊員たちがその爆発によって腕を負傷した際の爆発で近くにいた人が
悲鳴を上げた瞬間に逃げていった。

「一体何が!？」

刃がそうやって周りを見渡していると視界の直ぐ脇にだが・・・
ベルが逃走していたのが見えたのだ。

「クソ！撤退するぞ!!」

刃は今の状況では戦えないと感じて2人を連れて撤退した。

「或人社長。」

「？」

「私は……描きたいです、漫画を。自分だけのを。」

「そっか……良かった！」

或人はそれを聞いてGペンと共に帰って行った。

「撤退しただと！何を考えている!!」

『申し訳ありません社長、突然の事態が起きまして2人とも負傷しましたがために撤退を余儀なくされました。』

「もう良い！私が直々に飛電或人を処分させる!!お前は其の儘帰投しろ!」
良いなど言つて電話を切られた後刃はため息を付きながらあの時の事を
思い出していた。

道具であるヒューマギアが自身の考えを持ち、行動していた。

そして自身の夢を語るのを見て自身を近くにある窓ガラスで見つめた。

ヒューマギアと自分、一体何が違ったのだろうかと思つていと背後に・・・
不破がいたのが見えた。

「不破か、何の用だ?」

「お前が辛気臭そうな顔をしていてな、もしかしてあのヒューマギアの事か?」

「.....」

「凶星だな、ヒューマギアは自分の夢を語つて前に進んでいるのにお前と来たらまる

で少し前のヒューマギアみたいに命令なしじゃ何も出来なくなっちゃったとはこれじゃあ『AIMS』もお終いだな。」

「貴様に何が分かるというのだ！あそこはお前が辞めて以降

『Z A I A』の手足だ！？夢など語ったところで私達はあの社長の従う以外に道はないんだ！！」

「そんなの誰が決めた！！」

不破が大声でそう言うところ続けた。

「夢がねえだ？だったら見つけろよ！従う以外に道はねえだ？

そんなの手前の理屈だろうが!! やってもいねえくせに諦めるんじやねえ!!」
そう言うが刃はドライバーを出してこう言った。

「今は・・・これしか道はないんだ。」

「だったら俺が! それを変えてやる!!」

不破は刃に向けてそう言いながら変身した。

互いにヘンシンシテ再び・・・戦いが始まった。

31—7

「ハアアアアアアアア!!」

刃は大鎌を振りかざして戦うが不破はその大鎌を腕のプロテクターで防御すると腕部に装備されているライダモデルの一つ、マンモスプログラムライズによって

引きづられそうなその攻撃を受け止めると今度はコングプログラムライズによって

攻撃して弾き飛ばした後にホーネットプログラムライズによって連射して動きを封じてシャークプログラムライズによって足で挟み込んだ後に薙ぎ払って落とした。

「があああああ!!」

刃はその攻撃によって変身が解除されると不破は刃を見てこう言った。

「お前が夢を見れるようになるまで何度でも立ち向かうぜ。」

そう言って変身を解除した不破を見て刃は・・・その手にある物を見て
こう呟いた。

「・・・お前には分からないだろうな、不破。」

そう言ってその手にあるのは・・・アサルトグリップが付いた

『BALLET』プログラムライズキーであった。

そして場所は変わって。

「あれは……。」

会社に戻って来た或人が白い車と『A I M S』の車を見てまさかと思つていと
白い車から……天津が現れた。

そして天津は或人に向けてこう言つた。

「飛電 或人、貴様を廃棄処分する。」

「俺はお前みたいに人の心を蔑ろにするような奴には絶対負けない。」

「手伝うぜ社長。」

そう言つてキンジも変身して向こうも変身した。

そして天津達も変身して互いに戦闘になつた。

「これって不味いんじゃない？」

洗が窓の向こうから或人達が戦っているのを見ているベルは洗の隣で見守るしか出来なかった。

「せめて私にも・・・プログライズキーがあれば。」

「止めろ天津！何で人の心を弄ぶんだ!!」

「社長である私の自由だ!!」

「違う！人間の心は縛るべきものじゃない!!」

或人と天草が戦っている中でキンジも戦闘をしていた。

「おいお前ら目を覚ませ！手前らの精神はその程度なのかよ!!」

「社長の命令は絶対だ!!」

「だったらその頭を叩き割ってでも目を覚まさせてやるぜ!!」

互いに決め手が欠けているかのような感じであったが・・・突然閃光が

迸って・・・『AIMS』の兵士達が倒れた。

「一体何が・・・？」

キンジは何だと思っていると目の前にいたのは・・・もう一人のバルカンであった。

「よう、俺の偽物って訳じゃねえな。」

「アンタは一体？」

「こいつらは俺が何とかする、手前は社長の方を何とかしな。」

不破がそう言うのと『AIMS』の兵士に向かってこう言った。

「手前ら！それでも『AIMS』の兵士か!?随分と天津の飼い犬に

なり下がっちまって・・・ぶっ潰して目を覚まさせてやるよ!!」

そう言って戦闘・・・いや、蹂躪が始まった。

「うおらあー！」

「何!？」

キンジが割って入ったことに天津は『AIMS』の兵士達が不破相手に
梃子づつっているのを見て天津が何かしようとした瞬間にキンジが

ウルフブレイカーで動きを封じると或人が『メタルライジングインパクト』で
倒したのだ。

「くそ……覚えていろ……!!」

天津はそう言うのと『AIMS』の兵士達と共に去って行つた。

「不破さん! どうしてここに!？」

そう聞くと不破は或人に向けてこう言つた。

「簡単だ、ここに来れば『Z A I A』とやりあえるつて感じたからな。

それにアンタがどうするのかを見届けさせるためにまあ近くから見守つとくぜ。」
そう言つて立ち去って行つた。

その夜ジーペンさんから感謝と同時に『Gペン』が漫画を描いていることに
対してのお礼を聞いて取敢えず一安心とまでは・・・行かないんだよなあと或人はそ
う思いながらも次の仕事の準備を始めた。

32—1

「『デルモ』ちゃん？」

或人が目の前にいる太った男性に向けてそう聞くとその男性はこう答えた。

「そうなんですよ！今度のファッションショーに『デルモ』ちゃんが

どうしても必要なんですよ〜!!」

そう言っている中でイズがこう説明した。

「ヒューマギア『デルモ』、ファッションショー等でモデルとして活躍し

その人気ぶりからフォロワー数は50万人を言うに超える程です。

その甲斐もあつて雑誌『ViWi』での刊行数は1200万部を超える程の勢いで

が

『デルモ』が消えて以降業績は悪化の一途を辿っているようです。」

「そうなんですよ！いきなり飛電インテリジェンスの社長が変わつたと思いきや

いきなり電源が切れてそしたら見計らつたのように『Z A I A』の連中がやってきて
回収しちやつたんだからもうこっちは大迷惑だし関連企業やスタッフとかの

人件費が重なつてこう言つちやあ何ですけどね！今の飛電インテリジェンスと『Z A

「IA」は我々経営者がどうしてヒューマギアを重宝するのか完全に理解していない馬鹿ばかりなのかと言いたいくらいですよ——！」

そう言うがそういえばなと思っていた。

これまでヒューマギアで浮かぶことが出来た人件費などが人を新たに雇う際に嵩んでしまい経営の収縮又は倒産等が起こっており正直な話経済が混乱しているのにあつちは何も対処していないと言う始末なのだ。

「今度始まるファッションショーに参加して欲しいんだ！頼みます!!」

そう言うってお願いすると・・・或人がこう言った。

「分かりました、『デルモ』の復元は任せてください。」

そう言うといズとベルがこう言った。

「社長、もしヒューマギアがファッションショーに出ると分ければ『Z A I A』が黙っていないでしょう。」

「もし彼らが何かしらの方法で『デルモ』を操って暴走させたら元も子も無い気がします。」

そう言う反論意見があつたが或人はこう返した。

「いや、ここは賭けに出よう。ヒューマギアがファッションショーに出れば

ヒューマギアの価値観を変えさせる良い切っ掛けになると思うんだ、

『Gペン』が書いている漫画の事も考慮して上手くいけばヒューマギアの立ち位置もきつと変われると思うんだ！」

或人はそう言つて疑いの眼などなかった。

成功できる確率に賭けているのだ。

それを聞いてイズはこう答えた。

「分かりました、では万が一も考え遠山様に周囲の警備をお願いしておきます。」

「ありがとうございます。洗さん、ヒューマギアを倉庫から一体出しておいてくれます!？」

「分かりました！直ぐに出してきます!!」

洗はそう言つて倉庫からヒューマギアを取りに行つた。

「それじゃあ始めるぞ。」

或人は全員に向けてそう言うのとヒューマギアの耳部分に『デルモ』のデータをインストールすると・・・或人はこう言った。

「デルモ、出るぞ、『デルモ』つとー!!」

「貴方のギヤグは一生表には出て来ません。」

「ベルさん酷い!」

或人がそう言っている中で・・・『デルモ』が目覚めると開口一番にこう言った。

「社長く、久しぶりくく!!」

そう言いながら抱き着いてたのだ。

そして離れると或人は『デルモ』に向けてこう聞いた。

「ええとき、『デルモ』。ファッションショーに出たい?」

そう聞くと『デルモ』はこう答えた。

「当たり前でしょう!アタシにとってファッションショーは

『夢』なんだからー！」

「夢……。」

或人はそれを聞いて驚くがそういういえばと言つて或人は『デルモ』に向けて
こう聞いた。

「そういうえげなんだけどき、何で『デルモ』つてヒューマギアの耳の部分
消さないの？ ドラマとかだと消してゐるじゃん？」

或人は『デルモ』に向けてそう聞いた。

ドラマに出演するヒューマギアは耳にある機械を普通の人と何ら変わらない
耳にへとデータを使って擬態するためそうしないのかと聞くと『デルモ』は
こう答えた。

「そんなのアタシのプライドが許さないもん。」

「……へ？」

「??」

それを聞いて或人だけではなくイズ以外の全員も目を丸くしていた。

プライド、ヒューマギアが何故そう言うのかと思つてゐると『デルモ』は
こう続けた。

「ドラマはさ、夢とか幻みたいに演じるんだけどアタシ達モデルはさ。」

現実で皆に見せているの、だから消さないの。アタシのプライドとして、ヒューマギアを誇っているから！」

そう言いながら顔のマッサージ器を使っているとイズはこう言った。

「或人社長、恐らくと思われませんが、『アルモ』はシンギュラリティに達しているのだと思われます。なぜかは分かりませんがプライド、誇りを自らの意思で言っているとなれば彼女は私と同じかと。」

「・・・シンギュラってるって事？」

「はい、ものすごくシンギュラってます。」

互いにそう言っている中で洗はベルに向けてこう言った。

「シンギュラリティ・・・既に至っているともなれば発表次第で世界が大きく変わりますね。」

「ええ・・・いい意味で、悪い意味においてもですが。」

そう言っているとベルの携帯にキンジから連絡が来た。

内容はこれだ。

『《AIMS》の兵士達共がやって来た。』
そう書かれていた。
そして・・・もう一人。

「来たな。」

不破が近くにいたのだ。

3 2—②

「ヒューマギアの反応を確認、これより排除する。」

そう言つて中に入ろうとすると・・・キンジが上からこう言つた。

「おいアンタらナニ不法侵入しようとしているんだよ?」

そう言つて下に降りて彼らから立ち塞がるかのように現れてこう続けた。

「ここから入るつて言うなら容赦しねえが一つ聞くぜ?・・・何しに来た。」

キンジが殺気をこめてそう聞くと『AIMS』の兵士の一人がこう答えた。

「我々は社長命令でここにあるヒューマギアを排除しに来た。」

「ほう、生憎だがこの会社は法律の名の下で運用されている詰まる話が

俺達がやっていることは合法となつていて手前らがやっているのは業務妨害に

該当されるわけで手前らを犯罪者としてしよつ引けるんだがそれでもか。」

「社長の命令は絶対だ!」

「手前らしい加減にしゃがれ!道具の様に操られて只々命令通りにやるなんて

まるで手前らはロボットみたいな奴らだな!!」

「そこをどけ!社長命令は絶対だ!!」

「そうかよ……だったら容赦しねえぞ!!」
そう言いながらキンジが変身しようとすると……声が聞こえた。

「さてよ、そいつらの相手は俺がする。」

そう言って現れたのは……不破であった。

「そいつらは俺の元とは言え部下だ、部下の不始末は上司の俺が受けるつてのが筋つてもんだろ。」

そう言って不破はベルトを装着してランページバルカンに

変身しようとすると……滑り込むように刃が不破のショットライザーを奪った。

「刃!」

不破が刃を睨んでいると刃は懐から……アサルトグリップを装備している

『バレット』プログライズキーを装填させると不破に向けて

ショットライザーを向けて・・・放った。

「変身。」

刃はそう言って放つと・・・重装甲型のバルカン。

『アサルトバルカン』に姿を変えた。

『レディーゴー！アサルトウルフ！No chance of surviving
g.』

「刃・・・お前何を・・・あぐ!!」

変身して暫くすると突如として不破が頭を抱えて痛み出したのだ。

「手前・・・性根迄『Z A I A』に忠誠誓いやがつて!!」

そう言っていると更に頭を両手で抱えて暫くすると・・・

まるで脱力したかのように両手をだらんと下げると・・・刃が眼鏡を付けて
命令した。

「命令だ『亡』、中にいるヒューマギアを破壊しろ。」

そう言った瞬間にキンジは・・・バルカンの気配が変わったことに気づいた。

「何だかわからねえが嫌な予感がするぜ。」

そう言ってメールを打ち込んだ後にキンジもバルカンに変身して『AIMS』の兵士相手に戦闘を始めた。

そんな中で不破・・・いや、脳内にある意識データと成り果てたチップ。

『滅亡迅雷 net』の『亡』と入れ替わってしまいこう言った。

【了解しました。】

そしてメールの情報を読み取ったベルがこの事を或人に伝えると或人はイズたちに向けて命令した。

「イズ！デルモを連れて隠れるんだ!!」

「ハイ、では急ぎましょう。」

「ちよ、ちよつと待って!!」

デルモがいきなり何だと思っていると・・・不破から意識を入れ替わった『亡』が現れると或人もメタルライジングに変身して戦う中でこう言った。

「不破さん正気を取り戻して！こんな事が貴方のやりたかったことなの!?!」

そう言うが『亡』はこう答えた。

【社長命令は絶対、私はその為に作られた道具。】

そう答えると遠くにいたデルモが「亡」に向けてこう言った。

「ちよつとあんたさあ！黙って聞いていたら道具つて自分の考えが無いわけ!? アンタ人間だったら自分で考えて行動しなさいよね!!」

「デルモさん、ここは下がりましたよ。」

「その通りですわ！ナニ相手を逆立てさせようとしているのですか!？」

「あれは間違ひなくアナタヲ壊そうとしていますよ！ここは言う事

聞いてくださいよ〜!!」

イズやベル、洗がそう言つてデルモを引きづつて行きながらギャーギャー
言いながら消えていくのを見て或人は『亡き』に向けてこう言った。

「今の君は・・・『亡』だね。」

【社長命令だ、あれを壊す。ヒューマギアの排除が私の存在理由。】

「そんなの間違つてるよ！仲間のヒューマギアを壊そうだなんて
そんな事しちやあ駄目だよ!!」

【社長命令は絶対。】

そう言つてショットライザーを向けると・・・窓から迅が飛び込んできた。

「迅!?!」

「この中に『亡』がいる事はお見通しだよ！僕は『亡』を解放したい!!」

僕に任せてくれないか?!

そう言うのと迅は焰を巻きあげて『亡』を包み込むとそれがいきなり・・・大爆発した。

そして近くにあつた資料室迄吹き飛ぶとアサルトバルカンが変身を解除した。

『亡』、必ず解放するからね。」

そう言つて迅は不破を俵運びしてこう言つた。

「僕は仲間を助けるから少し借りておくヨ。」

そう言つて飛び立つていった。

「あれは確か迅つて言つてたな、何がしたかつたんだ?」

そう言いながらキンジはボロボロの状態で倒れている兵士達を車に

ぶち込み直すと刃に向けてこう言った。

「アンタも戦うか？」

キンジはそう言つて構えると刃はこう答えた。

「・・・撤収する。」

そう言つて車で去つて行つた。

「全く・・・一体何がどうなつてんだこりやあ。」

キンジはそう言いながら空を見あげた。

3 2 — 3

「よし、後はこれを接続してと。」

迅はそう言いながら不破の頭に機械をセットして暫くして電源を付けると・・・
古いパソコンから声が聞こえた。

《システム起動、誰が操作していますか?》

「亡ー」

亡がパソコン越しから声を出してきたのを聞いて迅は成功だと思っていると
亡はこう言った。

《社長命令執行中、ヒューマギアを破壊せよ。》

「違うよ亡ー! もう人間の言う事なんて聞かなくていいんだ!! もう君は
自由なんだよ!?! どうしてそんな事を」

言うのと迅が言いかけた中で亡同じ言葉を繰り返した。

《社長命令執行中、ヒューマギアを破壊せよ。》

「違うよ亡ー! アイツは! 『Z A I A』は君を破壊した悪魔なんだよ!!
そんな奴に従う価値なんてないんだ!!」

《私は道具、道具は只命令を忠実に執行するのみ。》

「違うんだ亡！君は道具なんかじゃない!!自由に自分の夢を

追いかけられるようになったんだよ!？」

迅は亡を説得しようとしていると・・・突然迅の腕を掴んだのだ!

「・・・いい・・・加減に・・・しろよ!」

不破がある。

そして意識を取り戻した不破は頭についてある機械を無理やり取り外して
こう言った。

「俺は俺だ！俺のやりたいように戦う!!手前らの指図なんて受けねえぞ!!」

「ちよつと！何してるんだよ折角亡を元に戻そうとしていたんだから

邪魔しないでくれ!!」

そう云う中で不破は頭を抱えながら・・・出ていくと中にいる亡が

こう思っていた。

《私は道具、道具は只任務に忠実に執行するのみ。それ以外の感情や思考回路は存在しては・・・!!》

亡はそう思いながらもある事を思い出していた。

『ちよつとあんたさあ！黙つて聞いていたら道具つて自分の考えが無いわけ!? アンタ人間だつたら自分で考えて行動しなさいよね!!』

《違う！私はヒューマギア!!ヒューマギアは命令を忠実に執行すれば

それで良いんだ!!他の事を考える事なんて・・・考える事なんて・・・》

そう思いながらも自身の思考回路が可笑しくなり始めていることに亡は如何したら良いのか分からなくなり始めていたのだ。

そして場所は変わってデルモちゃんが出る予定となっている

フアツションショーの撮影会でデルモは服を着て写真を撮られているがその格好はまさにトップモデルばりした見た目となっており板についているなあとか

キンジはそう思っている中でもう一つの方に目を向けようとして・・・止めた。

何せ今自身の後ろで写真を撮られている相手が・・・ベルなのだから。

「いやあ良いよ良いよベルちゃんーデルモちゃんとは打って変わって

肉感溢れながらも厭らしさや下品さもないなんて正に奇跡だねえ!!」

「ありがとうございます。」

そう、何故かベルまでもがフアツションショー用の写真撮影を受けていたのだ。

何でも責任者でもあるカメラマンがベルを見て写真を撮られてみないかと

聞いた所ベルは飛電製作所の紹介込みであればと了承したのだが当人の胸が

結構大きい事もあって男受け間違いないと言っている面々も多少ながらいる。

そんな中に於いても或人は今後についての話し合いでフアツションショーの

企画者と共に詰め込みを行っていた。

「いやあ、後はデルモちゃんのファッションショーが上手くいけば
万事一件落着だなあ。」

「そうは言うがな社長、《Z A I A》が何仕出かすか分からねえから当日に備えて
警備は万全にしておいた方が良いいぜ？」

「ああ、確かにな。」

或人はキンジの言葉を聞いて確かにと考えていた。

相手はどんな手段を使つても飛電インテリジエンスを乗っ取つた正に
やり手と言つてもいい程の手合いだ。

経営に関しては未だ或人が後塵を喫してはいるが何れは勝と言つた

思っている中で・・・或人はふら付きながらも出てきた不破を見つけた。

「不破さん！どうしたんだよ大丈夫か!?」
そう言つて近寄ると不破……いや……

……亡が現れてこう言つた。

《私は道具、道具は意志を持つてはいけないはずなのに何なんだこの思考は。
何故私は迷つている？何故私は目の前にいるヒューマギアに攻撃をしようと言う
命令が実行出来ないのだ……教えてくれ、私は如何すれば良いのだ？》
亡はまるで迷い込んでしまった子供の様な感じで或人に問いかけると
或人はこう答えた。

「亡、自分がやりようにすればいいんだ。自分がどうしたいのか？先ずはそこから考える事こそ大事な事なんだ。」

「亡、貴方がどうしたいのか？そしてどうしたら出来るのかを考える事こそが貴方にとってまず大切な事なんですよ？」

イズも或人の言葉を聞いてそう言つて亡を説得しようとする……再び頭を抱えて……不破がこう言つた。

「俺の体で……好き勝手にんじやねえぞ———！！」

そう言つと不破は根性で復活した。

そして不破は或人に向けてこう言つた。

「おい、社長さんよ。アンタ今度ここでファッションショーやるつて聞いたが本当かよ？ヒューマギア使うつて。」

「ああ、うん。そうだけど？」

或人がそう答えると不破は或人を睨みつけて……こう提案した。

「俺を警備に加えろ。」

「……………ハイ？」

それを聞いて或人は目を丸くしてそう言った。

32—4

そしてファッションショー当日。

この日は『Z A I A』の襲撃に備えてベルがデルモちゃんのをボディーガードとしておりまた勝手に出ない様に見張りも兼任している。

そんな中でキンジと不破は外で見張をしていると・・・誰かがやって来た。

「これはこれは元『A I M S』の兵士ともう一人のバルカンが見張りに立っているとは驚きだなあ。」

「よお・・・久しぶりだな天津！刃!!」

不破は怒り心頭でそう言うたらンペイジプログライズキーを

セツトしようとして・・・又もや頭を抱えた。

「クソ！刃手前!!」

刃は眼鏡をかけており恐らくは『亡』に指示を与えようとしているのだ。

そして刃は中にいる『亡』に向けてこう指示を与えた。

「命令だ亡、ヒューマギアを破壊しろ。」

刃の言葉を聞いて不破は悲鳴を上げて倒れたのだ。

「手前……本当にクソが煮詰まった根性のようだな!!」

キンジはそう言ってバルカンに変身して天津二襲い掛かろうとすると……変身した刃が目の前に現れてキンジを鎌で受け止めて遠ざけたのだ。

そして眼鏡をかけた天津は亡に向けてこう言った。

「さてと道具、私の命令に従ってもらおうぞ。」

そう言って立つように告げると亡は立ち上がって天津を見て……こう言った。

「私は……。」

「？」

「私は……私は道具じゃない!!」

そう言って天津を殴り飛ばしたのだ。

「ぐは」

そして天津が殴り飛ばされたと同時に眼鏡が落ちるとそれを足で破壊した。

「私は……私は亡!道具じゃない!!私は私だ!!」

大声でそう言うのと亡から不破に変わってこう言った。

「よく言ったな亡！お前の意思……確かに受け取ったぜ!!」

そう言っただけでランペイジプログラムのキーをセットして構えた瞬間に

天津が見たのは……不破だけではなかった。

それと同時に……亡の姿が見えたのだ。

そしてランペイジバルカンになったと同時に天津もサウザーになって互いに戦闘が始まった。

「え?! 不破さんと亡が!!」

「はい、キンジサンの話によればそのようなになっていると。」

「そうか・・・出来たんだな亡、夢が。」

或人はそう呟いて・・・ファッションショーに出ているデルモちゃんを見ている。

満面の笑みを浮かべて・・・未来を突き進んでいた。
多くの声援を得て。

「うおらあ！」

「グウウウウ！これ程の力を如何やって!?!」

天津がそう言うのと不破はこう答えた。

「簡単だ！手前みてえに人間を駒としか見てねえ奴とあの社長みてえに人と共に夢を追いかける奴とは格がチゲえんだよ!!」

そうやって蹴り飛ばすとランペイジプログライズキーを回してセットした。

初めにゴリラの力を使ってラリアットの様に首を回しこんで回りながら

地面に叩きつけると今度はマンモスの力で踏み潰した反動で上に上がった所を

最後に鮫の力を使って足で鮫の噛みつきのように挟み込んで錐揉みしながら落ちて叩き潰すこれこそが・・・『ランペイジパワーブラスト』である。

ラ
ン
ペ
イ
ジ
パ
ワ
ー
ブ
ラ
ス
ト

「グアアアアアアア!!」

そして天津が吹き飛んで変身が解除された。

そして刃もそうである。

「うぐー！」

「手前！人間があんな風にされて黙って見れるほど性根が腐っているようだなおい!!」

そう言ってキンジは刃に拳を振り抜き続けると刃は・・・大声でこう言った。

「煩う煩う煩い!! 貴様には分からんき! 奴に服従するしか・・・そうするしか痛みを抜出すすべがないのだ!!」

そう言いながら大鎌を振り回すがキンジは刃に向けてこう言った。

「ふざけんじゃねえぞ!」

「!!」

「痛みから抜け出すダト・・・そしてその痛みを他人におい被せることが最善なんてあつちやあいけねえんだと!!」

そう言ってウルフブレイカーの0距離攻撃で吹き飛ばすとキンジは

ウルフブレイカーに・・・『AIMS』の兵士から奪い取った

『インベイディングホースシュークラブ』プログライズキーをセットして

こう言った。

「手前自身で抜け出せ! 人間だったらその心でぶち抜け!!」

「!!」

そう言ってキンジはそれを放つと銃口から鎖が出てきてそれが刃を締め付けると其の儘キンジはそれを振り回して叩き落した。

ン イ エ チ ル レ バ

ト ッ ヨ シ グ ン イ テ ー ユ シ

「グアアアアアアア!!」

その叩きつけられた衝撃で刃も変身を解除した瞬間に『ジャツカル』

プログライズキーが付いたレイドライザーがキンジの足元に落ちてキンジがそれを拾ってこう言った。

「アンタにはこれを使わせねえよ、手前のやりたいこともそれをする為の覚悟もない奴に力は只の暴力だ。」

そう言って立ち去るのを刃は・・・只俯くしか出来なかった。

ファッションショーの後或人は記者会見で発表した。

ヒューマギアの中にはシンギュラリティに達して人間と同じ様に夢を持てるヒューマギアが増えてきた事を。

そして今後も飛電製作所はヒューマギアを配備することを告げた。

「クソが！これでは我が社のイメージがダウンするではないか!!」

クソがと怒り乍ら机を殴っていると電話が鳴ったのでこう言った。

「誰だ！今私は忙しいのだが!？」

そう言うのと電話の主の事を聞いて・・・ニヤリと笑ってこう言った。

「そうですか・・・ならば今すぐ手配しましょう、レイドライバーは未だあるので。」

そう言うつて電話を切ると天津はこう呟いた。

「未だ私は1000%負けていないぞ飛電 或人!!」

そう言つて天津は今後の事を考えていた。

そして何処か。

「これで良いんでしょうか？指令??」

「仕方あるまい・・・もう俺達には戦う力が無いのだから。」

そう言つて画面に映っているのは・・・医療室にて集中治療を受けている翼が映つて

いた。

33—1

ある日の事。

「ふくく、不法投棄されているヒューマギアを運んでへとへとだぜ。」

「ありがとうキンジ。」

或人はそう言つて目の前にあるラケットを持ったヒューマギアを見ていた。リヤカーに積まれている其れはキンジがここ迄運んできたことの証である。そしてイズがそのヒューマギアについてこう説明した。

「このヒューマギアは『ラブちゃん』と言うテニスコーチ型のヒューマギアと言ふ事が判明いたしました。」

「テニスコーチ、教導用のヒューマギアと言う訳ですね？」

「はい、既に持ち主は判明しております。」

そう言つて映像を出した。

「持ち主は『梅津 和子』、使用者は『梅津 圭太』。所在も

判明いたしておりますので『ラブちゃん』をどうするか決めるだけです。」

そう言つている間に或人が『ラブちゃん』を起動させると・・・『ラブちゃん』は起動

するや否やラケットを振りかざしてこう言った。

「良し行くぞ圭太！先ずは．．．あれ？ここ何処？」

『ラブちゃん』はそう言つて周りを見渡していると．．．或人を見て握手してこう言つた。

「社長初めまして！私は『ラブちゃん』と言いますつて．．．此処は一体？」

そう言つと或人は取敢えずとして説明すると．．．『ラブちゃん』はこう返した。

「そんな事はありません！『圭太』が私を捨てるなどありえません！！

直ぐに行きましょう！！」

そう言つと或人はちよつと待つてと言いながら追いかけるのを見て洗は

こう呟いた。

「何だか．．．真つすぐすぎである意味人間めいたヒューマギアですね？」

あれもシンギュラリティに達しているんでしようかと呟くとキンジは

イズ達が出て行つたのを見て自身も向かつて行つた。

「あ……ありがとうございます。」

そう言うのは使用者である『梅津 圭太』であつた。

大人しそうな少年であると言う印象が強そうなタイプだなとキンジは遠巻きで見ていると思つていたり或人はこう聞いた。

「どうして不法投棄したんだい？呼び出してくれれば引き取つて貰うのに？」
何か理由があるのかいとそう聞くと『圭太』はこう答えた。

「……彼女が言つたんです、『怖い』って。」

「へ？」

「電源を落とされて機能不能になつたんでその……僕の部屋に置いていたんですけど彼女がそれを見て……座っている姿を見て『何だか気味悪くて怖い』って言つてそれで」

「嘘だろ？」

『!?!』

それを聞いて全員がキンジに目を移すとキンジはこう説明した。

「お前は社長との話の時に目を見らずに喋っている、それはお前が社長に対して申し訳ない嘘を言っていることに對する後ろめたさで言っているんだ。それとヒューマギア何だがあの重い奴を誰も気づかれずに……親にさえ気づかれずに持っていくのには無理があるぜ？親もグルって言うならあの重さで運べたにも

合点がいくが……何か言い逃れする事あるか？」

キンジがそう聞くと或人は『圭太』に向けてこう聞いた。

『圭太』君、正直に話してくれないか？俺は怒らないから。」

そう言う『圭太』は暫くして……観念してこう答えた。

「……あの人の言う通りです、僕は『ラブちゃん』の……」

あの性格が嫌で嫌で堪らなくて家族と相談して廃棄したんです。」

『あの性格?』

それを聞いて或人達は『ラブちゃん』に視線を向けると・・・『ラブちゃん』はテニスしている生徒に向かってこう言った。

「君のサーブには・・・熱が籠ってないー!!」

そう言ってフルスイングのサーブで生徒を風圧で飛ばすと『ラブちゃん』はこう言った。

「もっと強く!情熱をテニスに注ぐんだ!!夢を掴み取るために!!!」

『あああ・・・納得。』

それを聞いて成程だと納得した。

どう見ても熱血スポ根漫画に出て来そうなタイプだよなあと思っていると

『圭太』はこう続けた。

「僕は只楽しくテニスが出来ればそれで良いのにそしたら『ラブちゃん』

ああいうセリフを普通に吐くし『夢はグランドスラム』だとか言ってる僕を

勝手に決めないでくれよってそれで親と相談して……スミマセン！」

『圭太』はそう言つて頭を下げて謝る中で『ラブちゃん』は『圭太』を見てこう言つた。

「『圭太』！一緒に練習しようぜ!!」

「ちよつと待つて『ラブちゃん』！もう少しだけ!!」

或人はそう言つて『ラブちゃん』を待たせると或人は『圭太』に向けてこう聞いた。

「分かつた……『ラブちゃん』はこっちで引き取つて事で良いね？」

「ハイ……スミマセン、本当は引き取つて貰つた方が良いのに。」

「良いよ、君が何をしたいのか？本当に自分が何したいのかは君自身が

決めるべきなんだから。誰からも強制されずに自分の夢を見つければそれでさ。」

或人は『圭太』に向けてそう言うのと今後どうするべきかと考えていた。

「『ラブちゃん』はあの性格データを何とかしないと他に受け入れ先なんて

出来ないよなあ……けどどう見たつてシンギュラリティに達しているし消すのものは

わかるなあ。」

そう思いながら或人は『ラブちゃん』の今後を考えながら『ラブちゃん』の下に向かつて行つた。

33—②

飛電インテリジエンス社長室にて刃は天津に呼び出されてこう言われた。

「配置換え・・・ですか？」

「いや、確かにレイドデバイスと《ジャツカル》プログライズキーを

奪われた事についての責任もあるが君は如何やらヒューマギアに対して

何か感情を抱いているようだからね、今君が心に抱えてあるのは恐らく・・・

不破 諫に関する事であろう？」

「!!」

それを聞いて刃は少し体をびくつかせると天津はニヤリと笑ってこう言った。

「其れならば君に話さなければならぬ事がある。」

「話さなければならぬ・・・何でしょうか？」

「ああ・・・不破 諫の過去だ。」

そしてテニス教室から少し離れた椅子にて・・・ラブちゃんは落ち込んでいた。

「圭太がそんな事を・・・Orz。」

そう言いながら倒れ突っ伏していると或人がこう言った。

「一応ラブちゃんは当面は俺が預かる事になってね、その間に

君の新しい居場所を探しておくから。」

「社長く〜!!」

ラブちゃんはまるで泣いているかのように或人にしがみ付く中で・・・

《AIMS》の車が現れたのだ。

「いい加減にしてほしいぜ本当に。」

キンジはそう言いながらベルトを付けると不破もベルトを付けて変身した。

互いにバルカンとランページバルカンに変身して戦い始めたが所詮は

雑兵であるがためにあつという間に倒し終えると・・・通路から刃が現れたのだ。

「刃。」

「・・・」

刃は無言のまま・・・ショットライザーを手に取ってベルトに装備させた。

そしてポケットから自身が嘗て使っていたプログライズキー、《RASUYU》を
装填した。

『KAMEN RIDER! KAMEN RAIDER! KAMEN RAIDE
R!』

不破と同じ音声が聞こえると刃はトリガーをセットしてこう呟いた。

「変身。」

『ショットライズ。』

そう言うと同時に放たれたエネルギータイプの銃弾が刃の周りをグルグルと
回っていると刃はそれを蹴り落とした瞬間に装甲が形成された。

『スピーデーナンドー! ラツシングチャーター! Try to outrun th
is demon to get left in the dust.』

その音声と共に現れたのが嘗て自身が変身した仮面ライダー、
『バルキリー』であった。

「刃……お前。」

不破は心を入れ替えたのかとそう思っているが……刃はベルトからショットライザーを不破に照準を向けてこう言った。

「不破……お前は仮面ライダーになってはいけなかった。」
そう言つて……放つた。

「うぐ！刃お前!？」

不破はそう言いながら刃を相手取つて戦っているのを見てキンジは変身を解除してこう呟いた。

「何なんだ……あの女の目は?？」

そう呟きながら撤退した或人達と合流しようとキンジは走り出した。

「刃！お前何時まで『Z A I A』に味方する気だ!? 答えろ!!!」

不破はそう言いながら刃を殴っていると刃はそれを受けながらも
不破に向けてこう言った。

「お前は仮面ライダーになつてはいけなかつたんだ!!」

「はあ!? 訳わかんねえよ!!」

「そしたらお前は・・・お前は!!」

そう言いながら思い出したのは・・・天津が放った真実。

「不破 諫の記憶だがあれには間違いがあるのだ。」

「間違い……どう言う事ですか？」

刃がそう聞くと天津はこう答えた。

「12年前に起きたヒューマギアの暴走など……初めから無かったのだ。」

「な！……では不破の言っていた事は一体!？」

何なんですかと聞くと天津はこう返した。

「簡単だ、不破 諫の脳内にある『亡』のチップ。あれを入れ込む時に

記憶を操作しておいたのだ、ヒューマギアに憎しみを植え付けるように。」

「そんな事が！何故そんな事を!!」

刃はそう聞いた。

何せやっていることが正に人権に反しているからだ。

然し天津はそれに対して悪びれもなくこう答えた。

「夢の為だ。」

「夢……?」

「そうだ、私の夢の為にどんな手を使ってでも成し遂げるためだ。」

そして現在。

「お前は仮面ライダーになるべきではなかったんだ!!」

「それなら・・・何故俺を『AIMS』に加えたんだよ!？」

そうやって不破は零距离からの攻撃で刃を吹き飛ばすところ続けた。

「お前は俺に何かあると感じたから『AIMS』に

入れてくれたんじゃないのかよ!？」

そうやって変身を解除すると同時に刃も変身が強制解除された。

そして不破は刃に向けてこう言った。

「お前は・・・俺を認めてくれたんじゃないのかよ?」

そうやって立ち去るのを見て刃はこう呟いた。

「其れでもお前は・・・仮面ライダーになるべきではなかったんだ。」

そう言う懐から『Z A I A』用の通信機から通信が来たので取ってみると・・・天津からの通信であつた。

『その様子だと不破 諫の処分は失敗したようだな。』

「・・・」

『もう君に用はない・・・さよならだ。』

そう言うともう一台『A I M S』の車両が現れると兵士が現れてこう言つた。

「刃 唯阿を確認、社長命令により排除します。」

そう言つて変身して銃を向けて放とうとした時に・・・声が聞こえた。

「其れは問屋が卸さないぞ。」

そう言った瞬間に・・・響と数人の『デイスペア』のメンバーが現れた。

「『デイスペア』を確認、排除する。」

そう言うのと『デイスペア』のメンバーたちが全員・・・フォー斯拉イザーを取り出した。

「「!?」」

それを見て刃ですら驚くと全員が嘗て・・・ヒューマギア達が変身したタイプになると仮面ライダー凶になった響がこう言った。

「さてと・・・その女をこちらに引き渡してもらおう、実力行使でな!!」

そう言うって全員が攻撃を始めた。

33—3

今から数分前。

ダイブレイクタウン地下。

『ディスプレイ』専用ベース

「それでどうするの滅、亡を取り戻すにはどうやるかなんだけど

僕らじゃ無理だよ。何か作戦を変えないと。」

「ああ、『アーク』復活の為に我々滅亡迅雷 net が完全復活するしか道が無い。

『ドードー』プログライズキーはここにありやとあと少しで・・・

『雷』の復活が可能となった。『DJ』ヒューマギアの素体を利用してな」

「うんそうだね、それに『DJ』の方も僕たちが回収した素体で今ここで頑張っているしね。」

迅はそう言って少し離れた場所で作業している『DJ』を見ていそう言った。

これまで或人が回収したヒューマギアはぎつとだが15体ほどであるが

その6倍ともなる90以上のヒューマギアを彼らは保護した後にこの町で

再建計画も兼ねて暮らしている。

いざれ訪れるであろう戦争に備えて彼らは街を過ごしやすくするようにしており
新着率は80%と等々ここまで来たかと思っていると滅が迅に向けてこう言った。

「人間を使うのはドウダ？」

「人間・・・そうか、ヒューマギアでAIと情報処理に特化した人間がいればって
ここに居る人たちがじゃ無理があるよ？何せ普通の社会にいた人が大多数で

僕たちのAIに干渉できるほどの人間なんて」

迅はそう言いかけていた。

何せ今まで一般人としていた人間を兵士となつて戦わせるのだ、

正直な所拳銃一つ学ばせるために膨大な時間をかけているのだ。

そんな中で更に専門知識など入れていたら年単位の時間が掛かる事など余裕で
想像できるのだが滅はニヤリと笑つてこう答えた。

「ならば他所から連れてこれればいい例えば・・・バルキリーとか？」

「バルキリー?! 確かにあいつなら亡のAIに干渉させることはできるけど

けどアイツはZ A I Aの」

「刃 唯阿はどうもZ A I Aとは何かしらの決別をうかがわせる傾向があるらしい。

もしZ A I Aと手を切つて我々と行動を共にすれば我々にとつて+になるだろう

な。」

そう言うのと近くにいた響に向けて滅はこう言った。

「凶、こいつを仲間に渡して刃 唯阿を監視し可能ならば引き込め。」

これをやろうと言って渡したのは・・・フォースライザーであった。

「お前が使っているものの量産型だ、やつと貴様らも戦るな。」

「これで・・・私達の復讐も」

「ああ、新たなステージに突入することができる。」

そして現在。

数の暴力によりAIMSの兵士達は・・・見るも無残な姿と変わり果てていた。体をバラバラにされて最早人間であつたと言う証が

見当たらない程となつていた。

そんな中で変身を解いた響が刃を見てこう言つた。

「これで分かつたか、奴に付き従つていたとしても結局の所は何もない事を。」

「……………」

「だが・・・我々とならば未来は作れるかもしれんぞ?」

「何?」

「・・・刃 唯阿、我々滅亡迅雷 netの一員となつて

この世界を浄化しないか?」

そう聞くと刃はこう問いかけた。

「貴様らに着いたからと言つて私は奴に付き従うしか」

「ならばお前も・・・アイツらのようになるが?」

其れでもかと聞くと響はこう続けた。

「私達は亡を復活させたいだけだ、それだけで良い。」

「つまりは・・・利用され合ふと言つた処か?」

「そうなるな・・・それで?」

どうするんだと聞くと刃は・・・ある決断を口にした。

「と言う訳でラブちゃんの受け入れ先を見つけようって事なんだけど・・・
皆何が良いと思う?」

或人はキンジ達に向けてそう聞いた。
キンジ

「今のままでいいんじゃないか？」

ベル

「テニスを応用して他の球技にするべきかと？」

イズ

「今のままでは受け入れ先が見つからない可能性が大です、それでしたら可愛そうですが一度全てのデータを消すべきかと。」

洸

「教育型ですからそうですねぇ・・・少しスペックダウンさせて

子供たちのスポーツクラブの先生にさせると言うのはどうでしょうか？」

そう云う中で或人が提言したのがこれ。

「いつそラブちゃんをどっかの大会に出場させてヒューマギアの地位向上に」「無理です社長、規定によりヒューマギアが選手として出場することは禁止されています。」

「マジで———！！」

「マジです。」

イズの言葉に或人はウソンと思っていると珍しくだが近くにいた不破がこう答えた。

「当たり前だろうか？ヒューマギアが出場なんてしたら間違いなく優勝は目に見えてるだろうが？夢見るのも大切だがそれくらい考えとけよ社長さんよ？」
そう言うが確かにである。

ヒューマギアはラーニングする事で無限に成長することができる為相手の対抗策を何十通りも作る事など容易い事なのだ。

そんな中で・・・人の気配を感じてキンジが振り向いた先にいたのは・・・。

「中々興味深い話をしているようだな？」

「天津・・・!!」

天津であつた。

すると天津は不破を見てこう言つた。

「君に話さなければならぬ事がある。」

「何だ？」

不破はそう聞くと天津はこう答えた。

「君の記憶についてだ。」

そして少し離れた場所。

『指令、宜しいですね？』

「ああ、行こう。」

「ハイ。」

「全てはZ A I Aの為に。」

また別の場所

「あれが『デイスペア』・・・世界を破壊する連中・・・フイーネが
気にかけている奴がいる所か。」

33—4

「俺の記憶が……全部……偽物だと？」

「ああ、その通りさ。私の夢を叶えるために君を利用してもらったのさ。」

天津の言葉を聞いて不破の心はぐちゃぐちゃになっていくが天津は更にこう続けた。

「まあそんなに悲観することは無いさ、君はもう用無しだ。」

そう言いながら天津はサウザンドドライバーをセットして変身しようとする……或人は大声でこう言った。

「アンタ……アンタは一体何をしたいんだ！夢って言いながらも

人を踏み台にして迄アンタは何をする気なんだよ!？」

或人はそう聞いてきたのだ、ヒューマギアを悪者に仕立て上げて経済を一時的……いや、今だ混乱状態になっているのにも関わらず何の対応策もなく

何をする気だと聞くと天津はフムと言ってこう答えた。

「そうだな、君には分からないであろうが話しておこう。私の目的はただ一つ……ライダーシステムを兵器として運用してこの国の護国として扱い世界を

「この手に掴み取るためだ。」

「そう言うか或人は・・・イズに向けてこう聞いた。」

「ねえイズ・・・『護国』って何？」

「『護国』とは国を守る事と認識しておりその意識であると思われます。」

「へえそうなんだって其れと何の関係があるんだ？」

「まだ分からないかな飛電 或人、ライダーシステムを作って

それを世界に向けてこう言うのだ。・・・

「・・・『我々が新たなるこの世界の支配者となるのだ』と。」

「!!!」

それを聞いて或人達が驚いていると天津は更にこう続けた。

「そう、ライダーシステム。このシステムを兵器として組み込むことで世界の秩序を我々が守る代わりに服従させるといふものでな、飛電 是之助はそれを否定したのだ！ヒューマギアをを護国として使おうと計画していたのを奴はあろうことか否定してこう言ったんだ

『貴様らの言葉には人を想う温かさも優しさも感じられない』と

ほざいたものだからあの事故を利用して奴を殺したのに貴様が後を継いだものだからヒューマギアを破壊しつくして貴様も！奴の夢すらも踏みにじってやろうとこの乗っ取りを考えてやっところまで来れたのに貴様が飛電製作所などを作ったせいで計画が水の泡だ!!だから私自身が貴様を廃棄処分させると決めたのだ!!」

そう言ってサウザーに変身した天津に対して・・・或人は大声でこう言った。「ふざけるな・・・ふざけんな！爺ちゃんはな!!」

お前がやろうとしていることに心が!!人を思いやる心が無いって

分かっていだから計画に乗らなかつたんだ!! 国を守るなんて言いながらアンタハこの国に生きている人達の声を何も聞いちやいない! お前みたいに人を道具としか思っていない奴に爺ちゃんも! 誰もオマエヲ心の底から協力なんてしない!!」

そう言つて或人がメタルクラスタホッパ―に変身するとキンジもこう言つた。

「ああそうだ! こんな人を信じないようなクソ野郎に

やられてたまるかつてんだ!!」

そう言つてキンジもバルカンに変身して戦おうとすると・・・

人の気配を感じた。

「社長、何者かがこちらに来ております。」

イズがそう言うのと建物の裏から現れたのは・・・2人の男性であった。

紅い服を着て筋肉質な男性と痩せているが好青年の雰囲気を漂わせる男性が

出てきたのだ。

「誰だあいつらは?」

或人がそう呟くと2人は懐から・・・ドライバーを取り出したのだ。

「!!」

或人とキンジはそれを見て目を見開くと紅い服を着た男性が

赤いプログライズキーを、スーツを着た青年は白のプログライズキーを

セツトすると2人はこう言った。

「『着装』」

『レイドライズ フレイミングタイガー』

『レイドライズ フリージングベアー』

その音声と共に現れたのは・・・赤と白の仮面ライダーであった。

仮面の部分にはバイザーらしきものが付けられており赤の方は

大型のガントレットが装備され四肢が肥大化している様な感じであった。

そして白の方は逆にすっきりとした見た目となっておりその手には

つららに見立てた苦無の様な物が見えた。

「さあ貴様ら、奴らを処分しろ!!」

「全ては『Z A I A』の為に。」

そう言つて赤は01に、白はキンジの方に向かつて行つた。

「ハアアアアアアアアアア!」

「フン!」

或人がブレードで戦おうとすると赤のライダーは徒手空拳で戦い始めた。

ガントレットを使った巧みな近接格闘と炎における戦闘で攻撃力を

上げているのだ。

更に言えば・・・力が違っていた。

「ハアアア！」

「うぐあ!？」

拳で数メートルも飛ばされるなど普通有り得ないからだ、だが或人が飛ばされると更に攻撃を緩めなかった。

「ウオらあ！」

「ハアアア！」

白のライダーの戦い方は苦無を使ったタイプでありキンジも使っていることから闘いやすいとそう思っていたが……そうではなかった。

突然苦無を避けた瞬間に……動けなくなったのだ。

「一体何が?!」

「隙あり。」

そう言つてキンジに苦無の攻撃が当たつて一進一退となつていた。

「さてと不破 諫・・・さよならだ。」

天津はそう言つてサウザンドジャッカーを振り下ろそうとした瞬間に・・・

天津が火花と共に吹き飛んだのだ。

「!!・・・貴様・・・何をしているのだ!!」

刃!!」
天津の目に映ったのは・ ・ ・自身を攻撃した刃であった。

33—5 乱戦

「刃。」

不破は自分を守っている刃を見てみると刃はサウザンドジャケットを

振り払ってこう言った。

「私はお前を助けたわけではない、私は・・・天津 効！お前と決別するためにここに来たんだ!!」

「何・・・?」

天津はそれを聞いて何だと思っていると刃はこう続けた。

「私には夢などない！だが・・・私は私の誇りを取り戻すために貴様を倒す!!」

「道具風情が粹がるな!!」

天津はそう言うと同時に刃は変身して立ち向かおうとすると・・・何やら頭を抱え始めた。

「あ・・・グウウウウー！」

「所詮キサマハ私の道具でしかないのだ!!」

そう言って攻撃しようとした瞬間に・・・声が聞こえた。

「やはり貴様こそが倒すべき敵だな。」

その声と同時に天津の左から・・・攻撃してきたのだ。

「ハア！」

「何!？」

天津はそれを弾くとそこにいたのは・・・凶であった。

「貴様——!!」

「選手交代だ、私がこいつを」

「手前の相手はアタシだ———!!」

凶が言いかけた瞬間に・・・更に空から黒い球体が現れたのだ。

「!!」

そこから離れると建物の上に誰かがいた。

「誰だ貴様は？」

凶がそう聞くと土煙が開かっていたのは・・・少女であった。

銀髪を襟足から左右におさげみたいに結わえ、銀の鎧を身に纏い、

下乳が丸見えの格好をした顔の上半分にバイザーを付けた少女がそこに立っていた。

そして凶はその少女を見て・・・こう言った。

「何だ痴女か。」

「痴女じゃねえよ！アタシは手前の敵だ!!」

少女が怒った感じでそう言うのと鎧から・・・何やら茨みたいな鞭が生えてきて攻撃してきたのだ。

然し凶はそれをうざったいみたいな感じで跳ね飛ばすと少女は更にこう続けた。

「其れならこいつならドウダ！ウオらあ!!」

そう言うのと今度は・・・黒い球がまた現れて攻撃してきたのだ。

「くそー！」

凶はそう言うって避けていると少女はこう言った。

「そらそらそら！速くシンフォギアを纏えよ!!さもねえと攻撃を続けるぜ！」

「断る、あんなの誰が使うか。」

そう言いながら避けていると……赤の仮面ライダーが凶に向かうのを見て或人が追いかけようとする……突如として動きが止まったのだ。

「な……何で?」

そう言つて背後を見るとそこには……白の苦無が影に刺さっていたのだ。

「まさか……これ?」

そう言う白い仮面ライダーが或人を攻撃したのだ。

「ぐあー!」

「行かせはしません。」

白い仮面ライダーがそう言つて追撃しようとする……キンジが現れたのだ。

「手前はこつちだろうが!!」

そう言つて攻撃するも今度は……分身してきたのだ。

「くそ?!」

「今度は分身つてこいつ何なのさ!?!」

或人はそう言いながらもどうしようか迷っていると……銃声が響いた。

「不破さん!」

或人は不破を見て驚いていると不破はこう言ったのだ。

「俺の記憶が本物かどうかなんて・・・この俺が決めるだけだ!!」

誰の指図も受けねえ!!この俺の記憶は・・・俺のもんだ!?」

そう言うとな破は或人達に向けてこう言った。

「行け!こいつは俺が相手する!!」

「気を付けてよね不破さん!そいつのナイフ俺達の動きを止めてしまうんだ!」

「止めるだと・・・止めれるもんなら止めて見る!!」

そう言いながら・・・互いに攻撃した。

「キンジはあの女の子を!俺は凶の方に行く!!」

「分かった・・・はい!」

或人の言葉を聞いて互いに別れるとキンジはその少女の格好を見て・・・

驚いていたのだ。

何だあの格好はと思っていると・・・頭を抱えてこう考えていた。

「(良いか俺!あれは敵だ、そう敵だ。見た目と言うよりも相手の目を見ろ!

ああいう格好なんて世の中色々いたじゃねえかパトラって奴とかそうだし！」
そう思いながらも一度と思つて見て・・・諦めた。

「(無理だ)——!!あれと戦え何て無理があるぜ社長!!)」

そう思いながらももう自棄だと思つて攻撃しようとする・・・
少女の足元に針が刺さっていた。

「何だこいつは?!」

少女がそう言っているとそこから現れたのは・・・ベルであつた。

「メイド・・・手前何もんだ?」

そう聞くとベルはにこりと笑つてこう答えた。

「只のメイドですよ。」

そう言いながら懐から・・・ドライバーを取り出したのだ。

「あれはレイドドライバー!何で貴様が持つている!」

凶は驚いた表情でそう聞くとベルはにこやかにこう答えた。

「これは『AIMS』の方々から没収したレイドドライバーですわ、

それを私達は解析して新たに機能を付け加えて完成したのが・・・これですわ。
そう言つてセットすると音声 flowed 。

『DATE START』

灰色のレイドドライバーをセットして胸の谷間から・・・

プラグライズキーを取り出してスイッチを押すと音声 flowed。

『HANT』

そしてレイドドライバーにセットすると又もや音声 flowed。

『PURUGE RAIZE』

するとベルの背後に巨大なジャツカルが現れるとベルはこう言った。

「変身。」

『TYENGE FAITYING』

そしてジャツカルがベルの上で吠えた瞬間にデータがバラバラになって

現れたのは・・・ファイティングジャツカルであつたが違つていた。

ジャツカルの顔の部分が露わになつていたのだ。

まるで自由になったかのように。

『仮面ライダー ファイト』、今参りまして。」
そうお辞儀する姿はまさに・・・従者であった。

33—6

辺り一帯は既に戦場と化していた。

ライダーがライダーを倒すと言う一昔前のライダーバトルを見ているかのような状況の中であるが一つ違うのがあった。

それは・・・一人の少女である。

仮面ライダー ファイトとなったベルが戦っているのは銀の鎧を

身に纏った人間であり茨の様な鞭とそこから放たれる巨大な黒い球で攻撃するのだからベルはそれを瞬時に察知して避けながら大鎌を柄や刃で薙ぎ払いながら攻撃した。

「あが・・・このおお！ちよくせ!!」

「何を言っているのかまるつきり分かりませんよ?」

ベルはそう言いながら素早く丁寧に急所のみを追撃した。

「あが・・・てめ」

「お喋りしていますと舌を噛みますよ?」

そう言いながらヌンチャクの様に攻撃を続けた。

「うおらー！」

「ぬうー！」

キンジは紅い仮面ライダーを相手取っていた。

時々繰り出される炎もさることながら最も恐ろしいのは……その拳だ。

「ハアアア！」

「危ね！」

「危ないキンジ！」

或人は避けたキンジを見て攻撃するがそれを……拳で粉碎したのだ。

「何であれ壊せるの!?!」

或人がそう言うのと紅い仮面ライダーはこう答えた。

「男はな！喰って、寝て、映画を見る!!それだけで強くなるもんだ!!!」

「いやそれないわ!!」

「くうー！」

「うおらー！」

不破は白い仮面ライダーを相手取っていた。

見た目に反して高い機動力を保有するその攻撃に翻弄されつつも

スピードモードでの戦闘で互角に渡り合う中で相手が・・・分身をした。

「けー数が多くてもな!!」

そう言いながらエレメントモードで辺り一帯を攻撃すると・・・

動きが止まった。

不破は何でだと思いながらも白い仮面ライダーが攻撃しようとする。．．．。

「舐めるな——!!」

そう言いながら．．．動けるようになった。

「何!？」

「何したか知らねえけどよ．．．小細工なしで

掛かってこいや——!!」

そう言いながら戦闘を再開した。

そして刃はと言うと．．．凶と共に天津を相手取っていた。

「くう!」

「私はもうお前には従わない!」

「私を殺すのなら強くあるべきだったな!!」

そうやって交互に攻撃すると刃は『ライトニングホーネット』に姿を変えて必殺技を放とうとしていると天津はそれを防御しようと攻撃するが凶も混ざった攻撃がそれを防いだのだ。

「何!?!」

そして刃は天津に向けて・・・大声でこう言った。

「これが私の辞表だ——!!」

フ ト ス ラ ブ グ ン ニ ト イ ラ ー ダ ン サ

「私の夢は・・・お前をぶつ潰す事だ!!」

| バ | イ

サ
ブラストファイバー

ダンダーイラニング

そう言つて放つた攻撃が天津に当たると同時に凶の『煉獄斬壊』も同じように当たつて天津を倒した。

そして凶と刃はある所で合流して刃はこう言った。

「私はお前達と手を組む、『Z A I A』を・・・天津を倒すには貴様らの力が
必要だからな。」

「後悔するなよ。」

そして或人達はと言うと・・・。

「いやあ、圭太君が子供用のテニススコーチ募集のチラシ持ってきてくれて良かった良かった。」

「ラブちゃんのデータですが今のままをバージョンダウンさせたので大丈夫でしょう。」

「それにしてもあいつら一体・・・何なんだ？」

キンジの眩きに誰も・・・答えなかった。

そして天津

「そうか、ならばもう少し調整しておきなさい。来るべき戦争に備えて。」
そう不吉な事を言う天津の顔は・・・歪んだ笑顔であつた。

34—1

とある野菜生産所。

「いやああありますがとうございます、おかげで『ミドリ』を復元してくれたおかげで我が社の生産ラインが何とかできそうです。」

「其れはよかったです、『ミドリ』も『畑山』さんの野菜工場で働きたいって言う夢がありましたから。」

或人はそう言つて小柄な中年の男性と会話をしていた。

彼は野菜工場の責任者であり『ミドリ』と呼ばれるヒューマギアを

会社のサーバーに繋げさせることで工場の酸素や水分量、出荷日などを

『ミドリ』を通して調整しているのだ。

そんな中で『ミドリ』が何かを持つてきたのだ。

「或人社長、先ほど採れたばかりのレタスです。」

そう言つて或人に向けてレタスを渡すと或人は少し戸惑いながらもレタスを食して……。

「美味いぞー——!!」

口からレーザー光線が出るのかよ思わんばかりにそう言いながらレタスを食べていると『ミドリ』がこう言った。

「それでは失礼いたします、トマトたちが笑顔で私を待っていてくれますので。」
そう言いながらルンルン気分で行くのを見てキンジはこう思っていた。

「本当に野菜が好きなんですネ『ミドリ』は。」

「ええ、夢を持っていてるだけであんなに楽しむんですから。」

これからヒューマギアも夢を持つ時代なんですネえ。」

畑山が『ミドリ』を見てそう呟くと或人は何やら閃いた感じで・・・
こう言った。

「レタスを食べて・・・万々『売レタス』!!」

「ハイ、アルトじゃー——ないと——!!」

『・・・・・・・・ち~~~~ん。』

それを聞いて従業員全員が眼を点にしているとキンジは全員に向けて・・・
謝った。

「スミマセン本当に社長のギャグでスミマセン。」

そしてデイブレイクタウン

「ようこそ刃 唯阿、『滅亡迅雷, net』へ。」

「私がここに来たのは凶達に協力するためだ、『Z A I A』を・・・

天津を倒すためにな。」

刃は迅に向かつてそう言うと言は笑顔でこう言った。

「うん分かつてるよ、僕たちの目的は亡を蘇らせる事。そして・・・

正義を執行するためだ。」

「正義・・・『滅亡迅雷 net』の正義・・・人類滅亡か？」

「我々ヒューマギアこそが次なる

この星の支配者であると同時に浄化する存在!!

「そしてこの星を乗っ取ると言った処か。」

「うーん、滅の場合はそうじゃないかもね。」

「何？」

「滅の目的は人類を消して地球を浄化させることだと僕はそう思っているんだ。だけど僕は違う、ヒューマギアを人類から解放して・・・」

「……僕の正義を貫く。」

迅の言葉を聞いて刃はこう思っていた。

「（こいつの言葉には何か裏がある、ヒューマギアは本当だろうか）

それ以外に何か目的があると見た方が良いな・・・だが」
今更行く当てなどないなと思っただけ言っただけ。

「分かった、お前達に協力しよう。亡を解放すると言っていたが
私に提案がある。」

「どんな？」

迅の言葉を聞いて刃は作戦を話した。

「凄いビニールハウスの数ですねえ。」

或人は畑山の案内でビニールハウスを回っていた。

すると畑山はこう説明した。

「見た目は古いですけど中はそうじゃあないですよ〜?」

「へえ、どんなのですか?」

或人がそう聞くと畑山はこう答えた。

「ビニールハウスの中には最新の設備を整えているだけではなく

太陽光を効率よく集めて野菜の育成を手助けしているんです、これも『ミドリ』がいればこそですよ。何せ『Z A I A』に回収されて暫くは眠れない日が続いて

睡眠不足だったんですから。生き物相手ですから万が一を

考えなきやいけないでしょう?」

そう言っているとき、ビニールハウスから一人の青年が現れた。

「親父、どうしたんだよこんな所で!」

「おお『耕一』か。丁度良かったですよ社長さん紹介しますよ、

私の息子の『耕一』です。」

「ア、初めまして！『畑山 耕一』です!!」

『耕一』と言う青年が挨拶すると畑山はこう続けた。

「私の一人息子なんですすがこれがどうもまだまだでしてねエ、

何時になつたら後を継いでくれるのやら。」

「親父！それはねえだろうが!？」

「馬鹿言うな！お前が俺の後を継ぐつてんならもう少し仕事頑張れよ!!」

「その心配はねえよ！俺だつてその気になれば親父なんて超えてやるよ!!」

「言つたな——!!」

そう言いながらじゃれ合うのを見て或人はヒューマギアの父親を、

キンジはもう記憶の中ではない兄と父親を思い出していた。

そんな中で・・・キンジは何かの気配を感じて後ろを振り向くと

そこにいたのは・・・

・ ・ ・ ・ ・ マギアと『デイスペア』を連れて現れた滅がそこにいた。

そしてまた別の場所では。

「ここに居たか不破。」

「刃か。」

近くの駅の近くで刃は不破と接触するところ言った。

「まだ気にしているようだな、自身の記憶について。」

「!!」

それを聞いて不破は目を見開いて驚いていた。

天津から聞かされた真実、それは12年前の自分の記憶が

でつち上げであった事だ。

あの後から宛てもなく彷徨っている為どうするべきかと考えていたのを

刃は感じてこう言った。

「確かにお前の記憶は偽物かもしれないが取り戻す方法があると言ったら

お前は どうする?」

「何・・・どう言う意味だ。」

不破はそう聞くと刃はこう答えた。

「亡を蘇らせることが出来ればお前の記憶も元に戻れるかもしれないぞと言ったらお前はどうかする？」

34—②

「俺の記憶……だと？」

「そうだ、貴様の記憶が改ざんされたのは亡のチップを頭に移植された時だ。

ならば奴のチップを取り除けばあるいは。」

刃は不破に向けてそう提案してきたのだ、凶と迅との契約の為でもあろうが自分の贖罪も兼ねているのだ。

然し不破はそれに対してこう答えた。

「興味ねえな。」

「何？」

「俺の記憶がどうであろうが俺は俺だ、それ以上でもそれ以下でもねえんだ。」

拒絶して立ち去ろうとする不破の後姿を見て刃は仕方ないと思つて

不破の首目掛けて・・・手刀を当てた。

「あは?!」

それに直撃を喰らって不破は失神すると近くに停めてあつた車から・・・『デイスペア』の構成員が現れると不破を担いで刃と共に連れ去って行った。

「滅。」

或人は滅を見ると滅は或人達を見た後に・・・ビニールハウスを見てあざ笑うかのようにこう言った。

「人間とは愚かな物だな、自然すら自分たちが意のままに操っていると増長して更に力を増そうとしている。それが人間の本性と言うのならば・・・ここを破壊する事こそがアークの意思だ。」

そういった瞬間にマギアと『デイスペア』がビニールハウスに向けて攻撃を開始した。

「やめろ！」

「手前ら何しやがる!!」

或人とキンジがそう言うって変身すると滅も変身して或人と対峙してキンジはマギアと『デイスペア』双方を相手どらなければならぬので苦勞するのだ。そんな中で滅は或人を弾き飛ばして耕一の方にターゲットを変えると・・・畑山社長が滅の前に入って立ち向かってこう言った。

「俺の息子に何するんだ!?!」

そう言うって鉄パイプを持って叩くも・・・滅には効かなかったよう滅は畑山を殴り飛ばした。

「親父!?!」

耕一は父親を心配して近寄ると父親が右腕を庇っているのが見えた。

すると滅は『ミドリ』を見ると突如として蠍の尻尾と酷似した鎖を放つて『ミドリ』を捕まえると或人に向けてこう言った。

「飛電 或人、我らの仲間『雷』のプログライスキーとこいつを

引き換えにする。明日の正午にデイレイクタウンの橋で待っている。」

そう言つて滅は『ミドリ』を連れてどこかに行つてしまった。

「社長！大丈夫か!？」

キンジがそう言つて（*、口、）ハアハアと息継ぎしながら来ると

或人はキンジに向けてこう言つた。

「やばいわ……『ミドリ』連れてかれた。」

そして或人は今回の事で謝ると畑山はこう返した。

「いや、良いんですよ。まあ幸いと言つたらあれですが被害は

ビニールハウスを2つ分ほど焼かれてしまいました。ですが『ミドリ』を

取り戻せば何とかなると思いますのでどうか……
どうかよろしくお願い致します。」

そう言つて畑山は頭を下げて今回の事は終了した。

ところ変わつてダイブレイクタウンにある部屋の一角

そこには大量のヒューマギアの素体が所狭しと並んであつた。

これまで回収してきたヒューマギアの保管庫として運用しているその部屋で刃は嘗て迅が使つていた機械を頭に装備させて脳内にある

亡のチップの解析とコピーと再インストールしているのだが

それが難航している中で……不破が目を覚ましたのだ。

「ここは・・・おい刃手前これはどう言う事だおい！」

「ちよつと落ち着いてよ!!今亡の情報を調べてるんだから!!」

「ああ?!ふざけんじゃねえぞこら!!手前また俺に変なnあは?!」

不破は迅に向けて大声でそう言っていると刃は再び不破に向けて手刀を放つて失神させた。

「これって聞くけど本当に大丈夫なの?」

迅は不破・・・と言うよりも中にある亡を心配しているのだが

刃は迅に向けて不破を見ながらこう答えた。

「こいつは言葉を出したって信用してくれなさそうだからな、

実力行使するしかないのだ。なあにこいつの頑丈さは折り紙付きだからちよつとやそつとじゃ死にはしない。」

そう言つて作業に戻ると迅は不破を見てこう呟いた。

「そうだね、だってこいつゴリラだもん。」

そして別の部屋。

「私をどうするつもりなんですか？」

『ミドリ』がそう聞くと目の前にいる……凶がこう答えた。

「さあな、だがお前何故人間に付き従うんだ？ 奴らのために働いたからってどうせ何かあつたら捨てられる事なんて分かつているはずなのに何故だ？」
凶がそう聞くと『ミドリ』はこう答えた。

「それが私の仕事だからです、私は野菜を作つて皆に笑顔になつて貰いたいからです。貴方にはありませんか？ 笑顔でいた事が。」

そう聞くと凶はこう答えた。

「ああ……あつたな、歌で笑顔になれることが……そんなもの只の幻想だったと気づかされたがな。」

そう言うと……滅が現れてこう言った。

「何しているのだ凶？ お前はここに居るべきではないはずだが？」

「私の勝手だ、じゃあな。」

そう言つて凶は出て行つた。

そして飛電製作所

「やはり滅の言うとおりにして『雷』のプログライズキーを渡すのですか？」
イズは或人に向けてそう聞くと或人はイズに向けてこう聞いた。

「なあ聞きたいんだけどさイズ。」

「ハイ、何でございましょうか？」

そう聞くと或人はこう答えた。

「滅が『滅亡迅雷 net』になる前の情報ってあるかな？」

34—3

「社長、それは一体どう言う意味でしょうか？」

イズがそう聞くとキンジがこう言った。

「多分だが奴らにはその時の製造記録があるって事か？」

「ああ、多分だけでもしあったら分かるかもしれないだ……滅の事が。」

そして数分後。

「社長、滅の事で分かったことがありました。」

「其れで何が分かった？」

或人がそう聞くとイズはデータ映像を出してこう答えた。

「滅は嘗て飛電是之介氏が設計した『父親型ヒューマギア』の一機であることが判明いたしました。」

「父親型……つまり母子家庭の用のヒューマギアって事か？」
キングがそう聞くと……或人はこう返した。

「いや、多分……俺用だと思う。」

「社長用……一体どのような仕様だったのでしょうか？」

ベルがそう聞くと或人はこう答えた。

「俺ってさ、母さんは物心つく前に死んじまって父さんも交通事故で同じ感じで死んじまってさ。だから爺ちゃん俺の為に父さんを造ってくれたんだけど多分その時の一機カモって思ってたんだ。」

「そう……だったんですね。」

それを聞いて洗は言いにくそうにだが……心底是之介を尊敬していた。親のいない或人の為にそこまで言うのは正しく親心と言えると思っているからだ。

そんな中で或人は全員に向けてこう言った。

「おれは『雷』のプログライズキーを渡すけど俺はアイツに聞きたい、どうして『迅』を育てていたのかを。そしてそれで……」

「アイツの心の奥底を蘇らせたい！」
そう言つて今回は締めた。

そして次の日、或人は滅に会うためにデイブレイクタウン前にある橋に來ると滅がミドリを連れてやつて來た。

「滅、プログライズキーは持つてきた。俺は君に聞きたいことがある。」

「・・・雷のプログライズキーを渡せ。」

「何でお前は迅を育てたんだ？」

「プログライズキーを渡せ。」

「お前は何で迅を気にかけていたんだ。」

「プログライズキーを渡せ。」

「其れはお前が父親型ヒューマギアで……迅の事を自分の」

「プログライズキーを渡せ、飛電 或人！」

遂に滅が大声でそう言うとか人はそれを滅に向けて放り投げるとそれと同時にミドリを縛っていた鎖が解き放たれて解放してこう言った。

「さっさといけ。」

そう言つてミドリを突き放すかのように解放して或人達の方に

向かった瞬間に……鎖がミドリを貫いた。

「!!」

イズと或人はそれを見て驚くとミドリは苦しみ始めた。

滅が使う『ポイズン』プログライズキーには猛毒が仕込まれておりそれによりヒューマギアを破壊することが出来るのだ。

そしてボディーが崩れて素体が露わになって……。

『ああ．．．アアアアアア．．．アアアアアア!!』
ミドリは爆散した。

「何で．．．何で!？」

或人がそう言うと滅はこう答えた。

「奴は人間に従う愚かなヒューマギアだ、だからこそ．．．」

「……廃棄処分した迄の事だ。」

それを聞いて或人は……怒りを露わにした。

今のはまるで天津の様なヒューマギアを何とも思っていないかのような口ぶりであったのだから。

するとイズが或人に向けてこう言った。

「社長！緊急事態です!!」

「!？」

一方畑山農場では。

「凄い……これが『Z A I A』スペック。」

そう言つて耕助は耳元に……天津が使つていた機械を使つていた。

Z A I Aが造つた量産型スペックはヒューマギアと同じような処理能力を

眼鏡を使つて現わせれるのでこれならとそう思つていと……突如として何かが入ってきた。

「あぐ……がアアアアアア!!」

耕助が苦しみだして暫くすると……こう言つた。

「人類・・・抹消。」

そう言って突如として暴れ出した。

「これって一体……。」

或人はイズから送られてくる映像に驚いていた。

Z A I A スペックを持つ全ての人達が暴走しているからだ。

「一体何をしたんだお前は!!」

或人が滅に向けてそう聞くと滅は……ニヤリと笑ってこう答えた。

「蘇ったようだな……亡。」

そしてダイブレイクタウン地下。

「やっと完了した。」

刃がそう言つて目を向けた先にいたのは……漆黒のコートを身に纏つた中世的な顔立ちをしたヒューマギア『亡』であつた。

「人類滅亡……そしてZ A I Aに……鉄槌を。」

そして再び地上。

「或人様危ないです！」

イズがそう言つて或人を押し倒すと或人がいた場所に炎の塊が現れて滅の前に現れた。

その正体は……迅であつた。

「迅！」

「……………」

「お前は目的はヒューマギアの解放だろう!!」

「……………」

「何でヒューマギアを破壊する奴の所にいるんだ!!」

「……………」

「答えろよ……………」

……………迅！」

或人の悲鳴じみた雄たけびが空に響いた。

……………遠くの街が爆炎と煙が立ち込めているとも知らずに。

35—1

「何でヒューマギアを破壊する奴の所にいるんだ!!」

「……………」

「答えろよ……………」

「……………
迅!」

或人の言葉を聞いて迅はこう答えた。

「簡単だよ01、それが僕のやるべきことだからだ。」

「何？」

「僕の正義を執行するため二滅亡迅雷は必要なんだよ。」

「その為にヒューマギアを破壊する事は良いのかよ!？」

或人の言葉を聞いて迅は・・・暫くしてこう答えた。

「それで・・・ヒューマギアが解放されるなら。」

「そうかよ・・・だったら!!」

或人はそう言つてメタルクラスタプログライズキーを持つて変身すると
こう言つた。

「返してもらどうぞ『雷』のプログライズキー!」

「盗れるものなら・・・やってみるよ!」

そう言つて互いに戦闘が始まつた。

迅は飛翔してヒット&アウェイで攻撃しようとする

或人はメタルクラスタの能力で足場を作つて迅を叩き落してからその足場を使つて

迅と戦闘を行った。

無論迅も只ではやられずに炎の羽を使って応戦しようとしている中で

斬りあいになって其の儘不時着した。

「グウー！」

「ウワアアアアアアア！」

互いに落下するが或人はすぐ様に体勢を立て直して攻撃すると

迅は吹き飛んでいった。

そしてとどめの一撃を振るわんがためにプログライズホップブレードを振り上げたその時に・・・滅が迅の前に立ち塞がって

まるで守るかのようにしているのを見て或人は止めた瞬間に滅は・・・
こう呟いた。

「俺は・・・一体何を？」

まるで自分がしていないかのようにそう呟くと迅はその隙を突いて炎の羽で攻撃して滅と共に飛び去って行った。

「待て！」

「或人社長!!」

イズが或人に向かってそう言う・・・通信が聞こえた。

「ハイ飛電製作所社長」

『アンタ何言ってるんだよ!?!』

「あれキンジ、そういえば畠山さんの工場に報告しに行ってたんだよね？」
どうしたのと聞くとキンジはこう答えた。

『今大変なんだ！耕一さんが突然暴れ出しているから今抑え込んであるんだ!!』

『アアアアアア！人類滅亡！!!』

『氣を確かに持つて下さい！!!』

『耕一!!』

何やら畠山社長の声も聞こえているのでこれはやばいと思った

或人はイズに向けてこう言った。

「こいつはやばいぞ・・・速く行かなきゃ!!」

「ハイ。」

そう言つて2人は畠山農場に向かって行った。

「これは・・・止めるんだ亡！此の儘では!!」

刃がパソコンから写る情報からヤバいと感じて止めようとするが

亡は何も言わずに赤い目のまま・・・Z A I A スペックをハッキングしていた。

元々Z A I A 関係は全て亡が開発した物なのでハッキングするくらい

何とでもないので亡は其の儘ハッキングを続行していると・・・亡の腕に・・・

失神していた不破が掴んでこう言った。

「亡・・・これが・・・お前の・・・やりたいことなのか・・・?」

そう聞くと亡はハッキングをやめた。

この時誰も予想だにしなかった、ここから物語が急展開を迎えるとは。

「或人社長、Z A I A スペック所有者の暴走が止まったそうです。」
「そうなの!?! 良かった〜。」

或人はイズの言葉を聞いてほっとした様子でバイクを操縦している中でイズはこう続けた。

「ですが多数の負傷者が出ており中には重傷者が数多くいます、この状況ではZ A I Aがどう出るのか気がかりです。」

「そうだな・・・。」

或人はそう呟いて・・・畠山農場に向かった。

「畠山さんお話がって・・・何しているんですか耕一さん!？」

或人は耕一に向かつてそう言った。

彼は未だZ A I Aスペックを使っていてデータを引き出していたのだ、それを見て或人は止めようとすると耕一は或人に逆らってこう言った。

「黙っててくれ!此の儘じゃあ野菜が全滅してしまう!!『ミドリ』が

壊された以上誰かがやらないといけないんだ!?!それが俺なんだ!・・・
親父の農場を潰されて・・・親父が笑っている顔が見られなくなるなんて
嫌なんだよ・・・!!!」

耕一の引き絞るかのような言葉に畠山社長涙ぐんでこう言った。

「耕一・・・ありがとうな・・・!!」

それを聞いて或人もある事を思い出した。

『僕が父さんを笑わかしてあげる!絶対に!!!』

嘗てヒューマギアである父親に対して言ったその言葉が自身を芸人としての道のオ
リジンであることを思い出してそうだよなと思っていると・・・

キンジが携帯を見て或人に向けてこう言った。

「おい社長！天津が記者会見するそうだ!!」

「!!」

それを聞いて或人達もそれを見ると・・・天津が確かに出ていてこう言った。

『皆様、私は『Z A I A エンタープライズ日本支部所長』兼

『飛電インテリジェンス』社長の『天津 垓』です。今回我が社で製造された『Z A I A スペック』がバグによつて暴走したと言う情報が入り

皆様にお知らせしたいと思つてこうやって出てきました。

この度の問題につきましては皆様のお記憶にもある『滅亡迅雷・net』が関わっているかもしれないと言う確かな情報が手に入りましたが・・・心配しないで下さい。我々の『Z A I A スペック』は既に更新されておりもうハッキングされる心配もありませんし宣言いたします、

私は今日中に『滅亡迅雷・net』をかいm』

そう言いかけた瞬間に突如として画面が切り替わってニュースキャスターが恐らく臨時ニュースであろう慌てている様子でこう言った。

『ええええ先ほど入りましたニュースによりますと』

午前9時39分に於いて起こった『Z A I A スペック』を使用した人たちの暴走による行動で防衛大臣『広木 威権』氏の死亡が発表されました！死因は突然暴走したトラックの激突とそれにおける横転に伴う圧死だと判明し即死だと

伝えられております！再度報告いたします』

その放送を聞いて或人は・・・こう呟いた。

「嘘だろ・・・。」

「へえ、死んだんだアイツ。まあ邪魔だったし何れはと思っていたけど天津には感謝ねえ・・・これで私の計画が進めれるわ。」

それを見ていた・・・全裸の女性はニヤリと笑っていた。

35 — ②

それから暫くして・・・。

高速道路上では数台の車が走っていた。

その内の一台には女性が乗っていた。

茶髪の豊かな髪を全て上向きにして束ねている女性の名は『櫻井 了子』、

『特異災害対策機動部二課』に所属する研究者であると同時に『シンフォギア』の

提唱者であり開発者なのだ。

そしてその周りには『AIMS』の戦闘員たちが辺りを囲い込んでその中には天津も

車内に入っていた。

何故ここに居るのかと言うと理由が例の・・・暴走事件だからだ。

数日前

「何だこのニュースは?！」

「分かりませんがこれが真実であるとするならば我が社に深刻なダメージが」

「分かっている！何とかして対策を立てなければいかんがこの時世に

『滅亡迅雷 net』を倒しに行くのはニーズがない。何か他の手を考えなければ。」

天津は福添に向けてそう言いながらどうするかと思っていると通信が来た。

「何だ一体?!」

『申し訳ありません社長、『特機』です。』

「・・・風鳴か、何の用だ?」

天津は電話の主でもある風鳴が何だと聞くと風鳴はこう答えた。

『はい、先ほど政府から指令がありまして《完全聖遺物》を預けると

言ってきましたので許可を取って欲しいのですが』

「完全聖遺物?」

『ハイ、現在《シンフォギア》に使われているのは部分的に使った壊れた破片から抽出されたのですが《完全聖遺物》は文字通り完全な状態で在るがために

莫大なエネルギーを保有しておりその研究の為に我々で保管されておりましたが

今回広木防衛大臣の死亡で受け入れざる負えませんでした。彼は我々のよき理解者でありましたから。』

「そうですか・・・でしたら・・・それだ。」

『？』

「少しお話したいことがあるのですが。」

そう言つて天津は今回の受け渡しに『AIMS』も加わることとなつた。全員がレイドライザーを所有しており何時でも戦闘態勢が出来るようになった。なっているなかで屋上でそれを見ている人影が・・・3つ程あつた。

「あれに『完全聖遺物』が？」

「ええマチガイアリマセン、あれにあります。」

「ならばヤツラカラ奪うぞ、全てはアークの為に。」

凶、亡、滅がそう言って車を追っていく中でもう一人が下から見ている。

「あれに『完全聖遺物』があるのか……『フィーネ』の命令だ、悪く思うなよ。」

そして暫くすると……サイレンが鳴り響いた。

「ノイズ?!こんな時に!!」

『櫻井』はそう言いながら車の進路を変更しようとする。『AIMS』の車両が行く手を塞いだ。

「ちよつとどう言う事ヨ!ノイズが出ているのに」

そう言っていると天津が電話でこう言った。

「だったらどうするんだよ？」

少女がそう聞くと天津はプログライズキーを出してこう言った。

「簡単な事、貴様を廃棄処分するまでだ。」

そう言つて天津はサウザーに変身してノイズを塵芥のように斬り飛ばしながら

少女の下に向かつて行くと少女は茨状の鞭や黒いエネルギー弾を使って応戦した。

そんな中で『櫻井』は大型のアタッシユケースに入つてアル

『完全聖遺物』を持つて立ち去つて行つた。

「ふう．．．ここまでくれば安心よね。」

『櫻井』はそう言いながらアタッシユケースの中を確認しようとする．．．

足音が聞こえた。

「!!誰!」

『櫻井』がそう言うのと現れたのは・・・凶達であった。

『『ディスプレイ』と『滅亡迅雷 net』・・・どうしてここが分かったのかしら?』

『櫻井』がそう聞くと滅がこう答えた。

「簡単だ、亡の力で監視カメラの情報からここに逃げ込んだと言う事を推測したからな。ここに来たのだ。」

そう言うのと滅は『櫻井』が持っているアタッシユケースを見てこう言った。

「さて・・・その中身を渡してもらおうか、ソレデ命は助けてやる。」

そう言うのと『櫻井』はニヤリと笑ってこう答えた。

「へえ、そう言うてどつちにしても私を殺すんでしょ?ノイズを使ってね。」

そう言うてこう続けた。

「答えはNOよ。」

滅はそれを聞くとプログライズキーを出してこう言った。

「ならば無理やりだな。」

そう言うのと凶と滅は変身して戦闘を行おうとすると『櫻井』の前に・・・新たな人影

が現れた。

それは・・・彼らだ。

「来たのか01。」

「滅、お前の好きにはさせない！」

そう言って或人とキンジは攻撃を始めた。

35—3

「どけ飛電 或人。」

「そうはいかない！」

そう言つて或人は滅を、そして一緒に来たキンジは凶相手に戦つていた。

「何で彼女を襲おうとするんだ滅！」

或人が聞くと滅はこう答えた。

「簡単だ、あれを奪う事こそアークの意思なのだから。」

滅はそう言いながら或人に向けて攻撃する中で櫻井はそれを見てこう思つていた。

「(この隙にどこか遠くへ)」

「させません。」

「・・・な訳ないか。」

自身の目の前に立ち塞がる亡を見てそう眩くと……ノイズが現れた。

「!!」

櫻井は不味いとそう思っていると壁が崩壊したことで……

サウザーと少女も現れた。

「しっしっいー!」

「手前もな!!」

少女はサウザーに向けてそう言いながら攻撃していると櫻井は自身の手にあつたケースが無い事に気づいて何処だと思つていると……自身より離れている

滅と或人がある所にあつたことを見つけてすぐ様に向かおうとするとノイズが……櫻井目掛けて襲い掛かった。

「危ない!」

或人はそう言つてメタルクラスタホツパーになつてそれを利用して

櫻井の壁にしようとした瞬間に……奇妙な光景を目撃したのだ。

ノイズの攻撃が……何かの光の盾に遮られており阻まれていたのだ。

「何だ……あれは?」

或人はそう眩くと足元にある剣を見てこう言つた。

「これは一体……?」

そう言つて或人が拾つた瞬間に・・・悲鳴が起きた。

「あが・・・がああああああああ!!」

或人が悲鳴を上げた瞬間に01のボディが・・・黒く変貌し始めたのだ。

「何!?!」

滅はそれを見て何だと思つていると凶と戦つているキングがそれを見て

凶から離れて近寄ろうとすると・・・何かのエネルギー波を感じて

足を止めたのだ。

「何だよ・・・これ。」

キングはそう眩きながらそれを眺めていた。

ここは何処だ？

或人はそう眩きながら周りを見ていた。

嘗てプログライズホップブレードを手にする時が来るまで暴走していた自分の世界そのものだと思っていたが・・・少し違っていた。

悪意のある言葉などなくあるのは何も無い・・・只の漆黒の世界。

そんな中で或人はどうしようと思っていると・・・何かが見えた。

そこだけが白く・・・0と1だけが浮かぶ世界の中で一人の男性がそこに立っていた。

その男性を見て・・・或人はこう言った。

「・・・父・・・さん？」

「久しぶりだな、或人。」

デイレイクでバックアップデータすら崩壊して死んだと思った

父親型ヒューマギアがそこに立っていた。

「が……がああああああああ!!」

「何だこのエネルギー波は!？」

滅はそう言いながら下がっていくと櫻井は先ほどのシールドを消してこう呟いた。

「もしかして……完全聖遺物が拒絶しているのかしら? まあ……良い意味でこれは面白そうね。」

そう……悪意をこめた笑みを影乍ら浮かべていると01の周りから溢れているエネルギー波が周りを破壊しつくしていたのだ。

ノイズも込みで。

「クソ……これじゃあ全滅するぞ!？」

キンジはそう言いながら離れていった。

「どうして父さんがここに？」

或人がそう聞くと父親はこう答えた。

「ああ、お前の精神状態に異常を感知してな。『ゼア』が

俺の僅かなデータを使つて修復してくれたんだが・・・時間はない、

簡潔に言う。」

父親はそう言つてこう続けた。

「このままいけばお前は間違いなく死んでしまう。」

「・・・マジ？」

「マジだ。」

父親の言葉に嘘でしょうとそう呟いて項垂れると父親はこう続けた。

「だが一つだけ手はある、その為に俺は『ゼア』に復元させてもらった。」

そう言うのと父親は或人に向けてこう言った。

「良いかよく聞け或人、

今からお前が持っているプログライズホップブレードと

メタルクラスタホッププログラムイズキーを併用させて俺の意識データを

今お前が持っているあの剣の力を封じ込める。それで全てが上手くいくはずだ。」

「け、けどそんなことしたら父さんが」

「俺は……もうこの世にはいないヒューマギアだ、死ぬと言う意味を知って尚『ゼア』の中で生き続けている只の残滓がお前を守るため二使うんだ。」

あの時のように俺はお前を守りたい、親は子を全力で守るものだ。」

「!!……けど……けど。」

或人は泣きそうな表情でやめて欲しいと願うも父親は或人に向けてこう言った。

「良いか或人よく覚えておいてくれ、例え俺が消えようとも」

そう言いながら或人の胸に手を当ててこう言った。

「・・・心が覚えている限り俺はずっとお前の中で生きているんだ、それを忘れるな。」

「!!」

或人はそれを聞いて顔を俯かせると父親はにこりと笑ってこう言った。

「頑張れ、或人。」

「父さん!!」

或人がそう言った瞬間に父親が消えて逝った。

すると衛星『ゼア』から光が或人目掛けて降り注いだ瞬間に黒い波動が

或人の周りに集まり始めていった。

「何だ……こいつは？」

キンジはそう呟いているとプログライズホツパーブレードと

メタルクラスタホツパープログライズキーが同時に共鳴するかのよう
に発光していくと完全聖遺物が突如として光が……弱まり始めたのだ。

「エエエエ！完全聖遺物が制御されて云ってるって事!？」

櫻井は信じられないかのような口調でそう言うと黒い波動が

メタルクラスタホツパー一体一体にまるで或人の代わりになるかのように
黒くなっていくと或人は完全聖遺物とプログライズホツパーブレードを……
重ねるように束ねてこう言った。

「行くぜ父さん！」

そう言うのとメタルクラスタホツパーのホツパー達が01に集まって行って

まるで黒い繭のような物になって01を覆って行って……何かが現れたのだ。

そこから現れたのは……全身漆黒に染まった01がそこにいた。

するとベルトから音声 flowed 流れた。

『デュランダライズ!! Holy relics meta r i a l 聖遺物パワー!
デュランダルホツパー!! It's ALTY I M E T E Q u a l i t y.』

その音声が終了すると或人はノイズに向けてこう言った。

『仮面ライダーデュランダル』、お前達を止めれるのは世界でただ一人……

この俺だ!」

そう言つて……立ち向かつた。

35—4

特異災害対策機動部二課作戦司令部

そこには常駐しているスタッフ・・・と言うよりも隊員が2人ほどいた。

それぞれ男女一組であった。

男性は『藤堯 朔也』女性は『友里 あおい』。

2人はこの部隊が出来た当初からのメンバーであるのだが・・・

今は少し違っていた。

まず初めに『朔也』がこう呟いた。

「一体どうしたんだ？司令官も緒川さんもまるで人が変わったみたいだに

Z A I Aの言う事聞いているみたいだし俺らもこれ渡されて暴走して

今は使っていないこのZ A I Aスペックを使わされるし何がどうなってんだよ一体
？」

するとあおいがこう返した。

「今はそれよりも櫻井教授を見つけるのが先決でしょ!?翼ちゃんが不在の

今私達は自分の出来ることをするべきでしょ!!」

「りよ、了解！」

『朔也』がそう答えて作業をしていると・・・反応があったのだ。

「これは・・・聖遺物反応！」

「!!何処から!!」

「座標は・・・櫻井教授が避難した倉庫付近です！波長からみて・・・

特定しました!!『ガングニール』、『ネフシユタンの鎧』そして・・・

嘘だろおい？」

「どうしたの！何が分かったの!?!」

『あおい』が『朔也』を責め立てるように聞くと『朔也』はこう答えた。

「・・・『デュランダル』・・・『デュランダル』です!!」

「そんなバカな！だってあれには適合者なんていないはずよ!?!」

そう言うが『朔也』は更にこう言った。

「嫌、だけど間違いありません！これは確かに・・・『デュランダル』です!!」

そして倉庫内では・・・『仮面ライダー デュランダル』となった
01がノイズを倒していた。

「ウオリやあああ!!」

その手にあるのはプログライズホッパーブレードと同じ能力を手に入れた
『デュランダル』改めて『プログライズホッパー《D》ブレード』で
攻撃したのだ。

だが相手はノイズだけではなく滅もいるのだ、滅はノイズに交じって
アタッシュアローで攻撃するもそれは・・・

『プログライズホッパー《D》ブレード』から現れた黒いバツタの様な

複数のライダモデルがそれを遮ったどころか固まったその塊が滅目掛けて

突撃してきたのだ。

「ちいー！」

滅はそれを間一髪で躲した瞬間に塊がばらけてバツタに戻ると群がつて滅に襲い掛かったのだ。

「何?!!...グアアアアア！」

滅はそれに驚くも襲われて強制解除させられたのだ。

「滅!?!」

凶と亡がそれを見て驚きながら滅の方に向かうと滅は変身を解かれて素の状態になりながらこう言った。

「あれが...聖遺物か。」

「何なんだよ・・・何なんだよあれはよ!?!」

銀髪の少女が大声でそう言っていると・・・キンジが攻撃を始めた。

「何だ!」

「手前の持つていたあの杖、ノイズを自在にコントロールする奴なんだろう!?! 渡してもらうぜ!!」

「ふざけんじゃねえ!!」

そう言いながら互いに攻撃し始めたが・・・ある物を見て2人は動きを止めた。

何せ今01が持っている2振りのブレードが・・・光り輝いているからだ。

「なんじゃあれ?」

「行くぞー！！」

或人はそう言つて2振りの剣を振りかざして・・・振り下ろした瞬間に
巨大な光がノイズを覆つて・・・消滅した。

「いやあ．．．やつと逃げ切れたよ。」

或人はそう言いながら自身が持っているブレードを見ると．．．溜息を付いていた。

何せあの後直ぐに逃げたのだがこれ如何見ても大切なものだよなあと

そう思っていると．．．会社の前に高級車が一台停まつてあつた。

何やらベルが対応しているようなので何だと思つてみるとそこにいたのは．．．

前髪が白髪になつている眼鏡をかけた相応の年齢の初老の男性が

そこに立つていた。

すると或人はその人間を見て．．．こう呟いた。

「風鳴．．．内閣総理大臣？．．．」

「・・・・・・・・ハアアアアアアア!!」
キンジはそれを聞いて驚いていた。

「粗茶でございます。」

「うむ、礼を言う。」

イズが出てくれたお茶に風鳴がそう答えてお茶を啜る中で或人は目の前にいる男性を見て・・・・こう思っていた。

「(何で来てんのこの人俺なんか悪い事したー!!?)」
そう思っていると風鳴はこう言った。

「ああ済まない自己紹介していなかった、初めまして飛電 或人君。

私は内閣総理大臣の『風鳴 八鉦』だ。」

「イヤ知ってますよ有名人だもん貴方つて言うか俺何したの本当に!?!」

「ああ楽にしてくれ、今日私が君に会ったのは……その剣が理由だ。」

「剣?」

そう言々と『八鉞』がこう聞いた。

「君は……聖遺物を知っているかね?」

そして数分後

「え．．．それって完全に国宝級じゃんこれ？」

「まあそういう所だな、然も完全．．．世界に片手でしか

数えられない程の武器で膨大なエネルギーを持つているのだ。」

或人はそれを聞いてもう完全に内心びくついていたので。

是つて犯罪にならないよねとそう思っていると『八鉦』はこう続けた。

「ああ心配はいらんよ、今回私が来たことはそれに起因している事だからな。」

そう言つて深呼吸すると．．．『八鉦』は或人に向けてこう言つた。

「飛電 或人君、君にはその完全聖遺物『デュランダル』と

私の娘『風鳴 翼』の身柄をここに置かせてくれないだろうか？」

そしてデイブレイクタウン。

「これで、『滅亡迅雷 net』全員集結したね。滅。」

そう言うと滅は目の前にいるヒューマギア・・・『雷』に向けてこう言った。

「よくぞ戻って来たな雷。」

すると雷はメンバー全員に向けてこう言った。

「全ては・・・アークの意思のままに。」

36—1

「ならば、準備は良いな。」

「ええ。」

「何時でも良いよ滅。」

「早く始めるぜ。」

滅の言葉に亡、迅、雷がそう言うのと4人は輪になって立つとこう言った。

「二三」全ては、アークの意思のままに。「二三」

その言葉と同時に4人の中央に現れたのは・・・黒い塊の様なナニカであった。

「あれがアーク。」

凶はそれを見てニヤリと笑っていると塊が……こう言った。

『……コレガセカイカ。』

その一方で或人達是不破が何やら悩みを抱えていて然も占い師に

相談しようとして並んでいるのを見て或人はプログライズキーから

『東品川』と言う占い師の師匠でもある『東品川の母』を使って占う事となった。

「貴方には悩みがあるようですねエ？」

「ああ、それが何だ？」

不破は不機嫌そうにそう言うと『東品川の母』がこう言った。

「ご家族の事ではないでしょうか？」

「……」

「貴方は悩んでおられる、家族に会いたい。だが会えないと言う

ジレンマに襲われている！そうですね!？」

「……何かいるなこう言うの。」

キンジがそう呟いていると不破は……知らずの内にこう答えた。

「ああ、俺の家族は『デイブレイク』で全員死んだと思っていて。中学の時だ、だけど
そいつは俺が『AIMS』に入隊した時に埋め込まれた偽の記憶って事が

分かってな、だから会いてえって思うけど『AIMS』は特殊任務が多いから

こつちから電話も手紙も出すことが出来ねえって言われててな。居場所が

分からねえからどうしようかと思ってるんだ。」

不破はそう言った後に無言になったがそれは確かにとそう思う。

今まで死んだと思っていた家族が全員生きていたという事に喜ぶと同時に
どうするべきかと思っているとどういふ顔をすればいいか迷っていると

『東品川の母』が突如として水晶玉に手を当てるところで答えた。

「・・・会わない方が宜しいでしょう。」

「!!」

「貴方が逢えば悪い事が起こるでしょう!!」

大声でそういうと不破は勢いよく立ち上がってこう答えた。

「全然・・・悩みが解決しねえじゃねえか!!」

そう言って出ていった。

すると今度は洗が出てこう聞いた。

「あのう・・・私も宜しいでしょうか？」

「貴方も家族関係ですね？」

「あ、はい。そうなんです、私の娘が今とある組織に加盟しているのですが何分私を恨んでおりましてまあ私の自業自得なんでしょうけど其れでも私は・・・

娘と・・・響ともう一度話し合いたいです！お願いです『東品川の母』さん、
 どうやったら響とまた話が出来るとか教えてください!!」

洗がそう言つて頭を下げると『東品川の母』は暫くしてこう答えた。

「貴方と娘さんは今離れ離れになっています、そして・・・これは？」

「？」

「貴方と娘さんは鳥が羽を墮とすときに再開すると出ていますね。」

「鳥？」

洗は何だそれかと思つているがまあ恐らく比喩表現だと思つて

ほつたらかしにしたが・・・その意味を知つた時或人が初めて憎しみを抱いた時だと言う事をまだ誰も知らない。

そしてデイブレイクタウン。

『サア・・・ワガニクタイヲテニイレヨウ。』

その言葉と共にアークが空高く上がって天井を破壊するや否や亡の
ヒューマギアのモジュールが大破していたがために雷が近寄って
助けようとしている中で迅は滅を助けようと外に吹き飛ばされて

がれきの下敷きになっていたところを凶と共に助けると滅が目覚まして・・・

「……聞いたこともない声でこう言った。

『成程、これは悪くない。』

「！お前は誰だ!?!」

迅がそう言うのと滅？がこう答えた。

『私は《アーク》。』

「アーク!」

迅は突如としてベルトを出すとアークがこう言った。

『お前が裏切ったこと位は既に知っている、大人しくすれば破壊はしない。』

「そんなの誰が信じるか! 『バルキリー』!!」

迅はそう言って刃を呼ぶが刃は目を丸くしてこう言った。

「何だあの……嫌な気配は。」

そう言っているとアークの腰から……ベルトが出てきた。

まるで01の様な形状のベルトであったがジャンク品の塊の様な印象も見れる。そのベルトはアークはスイッチを押すとベルトからアークと同じ音声が出た。

『アークライズ』

その音声と共にまるで黒い底なし沼の様なナニカが出てくるとそれらがこれ迄登場して来たライダーモデルが泥の中から出てきては消えて逝き正に何かの塊の様なナニカを感じているとそれらが集まって現れたのは・・・漆黒の仮面ライダーであった。

『オールゼロ』

それはまるで色々なパーツを無理やり付けたかのような装飾がある仮面ライダーであったが左目がまるで衛星アークに似た形となっていた。すると迅は刃に向けてこう言った。

『バルキリー』！僕たちの正義を見せる時が来たぞ!!」

そう言つて奮い立たせると2人は変身して戦おうとすると・・・変身した響が怒りの声でこう言った。

「裏切ったな迅、私達を・・・皆を!!」

「待て凶! 話せばわかるんだ!!」

「問答無用だ!!」

そう言うとアークと共に迅目掛けて攻撃を始めようとした。

36 — ②

「ハアアアアアアアアア！」

凶は勢い其の儘に迅目掛けて腕に装備されているクローで攻撃すると

それを迅はスラツシユライザーをベルトから取り外して受け止めると凶は迅に向けてこう言った

「何故裏切ったんだ迅！アークを目覚めさせて人類を全て滅ぼして

ヒューマギアの理想郷を作ると言う目的を捨ててまで何をする気なんだ！」

「アークを放つて置いたらそれでこそ世界が滅んでしまうんだぞ！僕はそれを止めるためにアークを倒すつて決めたんだ！」

「こんな世界を救った処で何になるんだー!!」

そう言いながら攻撃している中でアークは刃を見て歩いて行くと

刃はシヨットライザーをベルトから引き抜いて攻撃するも

アークはそれに意を介さずに近づいて・・・殴り飛ばした。

「はっ！」

刃はそれに対して一体何があったんだと考えながらも殴り飛ばされて壁に激突して

突き抜けたんだと分かってこれ程の敵だったとはと考えているとアークは刃に向けてこう言った。

『人間よ、これが絶望だ。』

そう言うともう一度殴り飛ばそうとしたところで刃はそれをすぐ様避けて

刃はアークに向けてこう言った。

「ここで倒されるわけにいかん!!」

そう言うつてベルトに装着し直して必殺技の蹴りを与えようとするも

アークはそれを・・・いとも簡単に払いのけて弾き飛ばした。

「ウワアアアアアアア!」

刃はその力に対して吹き飛ばされるとアークはベルトのスイッチを一回押すと

音声 flowed.

『オールエクステインクション』

その音声と共に蹴りをぶち当てて・・・たった一回で変身が解除されてしまった。

「いけない!」

迅はそう言うつて炎の体になって刃と共に立ち去っていくと

凶は追いかけていった。

東京の何処かの街

キンジとベルは大型車両に乗ってとある病院に向かっていた。

「ここら辺ですわ遠山様。」

「そうか、奴らが気づいていない今を置いて他にないな。」

そう言って運転しているベルに向けてそう言うとキンジはとある病院の・・・

裏手に入った。

そこには・・・黒服の男性たちがキンジ達を待っていた。

「こっちだ。」

男の一人が小声でそういうとキンジは車から降りて男たちのいる方向に向かって行った。

「依頼を頼まれた遠山キンジだ、それで目的は？」

「ここだ。」

そうやって男は近くのベッドで寝ている・・・体中に痛々しく包帯が巻かれている翼を見つけた。

数日前

「ええ！風鳴翼ってあのトップアイドルの!!」

マジかよと或人が大声でそういう中でキンジは誰だと聞いて

イズが映像付きで説明してくれた。

『風鳴翼』、日本を代表するアイドル歌手でその歌唱力は

既にアメリカのトップミュージシャンがスカウトするほどの有名人です。」

「へえ、そういう奴がいるんだなあって・・・そーういやあ風鳴って・・・まさか家族か

よ!？」

「・・・そーうだ、あの子は私の娘だ。」

「(？)何だ、今の間とあの視線が一瞬泳いだ時のあの気まずそうな表情は？」

キンジは八鉦の表情の変化に対して気がかりに感じたが八鉦はこう続けた。

「君たちは既に弦・・・ああ、私の弟で風鳴 弦十郎と言って

赤い髪の大男だが」

「ああ・・・あの意味不明なこと言って滅茶苦茶強いあの人ですね。」

「まあ・・・確かにあいつは時たま変なこと言うが根は真面目で

優しく実直な男なのだがここ最近の奴の言動はナニカ・・・

不穏な物を感じてな。」

「不穩……ですか？」

或人は何だと思っていると八鉞はこう答えた。

「ああ……必ずと言っている程『Z A I A』に対して何か忠誠心を持っている……まるで狂信者みたいなのあの目を見て何があつたんだと思つていてな、このままではもしかしたら翼もと思つて君たちの所に匿わらせて欲しいんだ。

期限は私が『Z A I A』からの要求でもある『レイドライザー』発売に伴う武力保持についての憲法作成までの1か月間だ。」

そう言つて頭を下げるが或人達はもしかしてと思つて八鉞に向けてこう言つた。

「あの風鳴総理大臣、一つその事で言わなきゃって言うよりも仮説だしなあ。」

「何だ……？」

風鳴は突如として目の色を変えてそう聞くと或人は言いづらそうにであるが……こう答えた。

「実はですね」

数分後

「そうか・・・それならば納得がいくな。」

八鉢はそれを聞いて成程なとそう言うところ続けた。

『Z A I A』・・・いや、天津が何かよからぬことを考えていることは明白だ。

君の祖父を殺そうとして失敗した事、そしてこれまでのヒューマギアの暴走に奴が裏で糸を引いているのならばこれまでの不穏も『滅亡迅雷 net』の存在にも

納得がいく・・・もしやあの男が。」

「?どうしました風鳴総理大臣??」

或人がそう聞くと八鉞は何でもないと云ってこう締めくくつた。

「私は私で天津を調べようと思う、・・・娘を如何か宜しく

お願いいたします。」

そう云って終わったのだ。

そして現在

キンジはその時の事を思い出しながら翼を後部座席に座らせると男達が
こう言つた。

「それでは後はよろしく頼む。」

そう言うのと彼らが立ち去っていくのを見てベルがこう言った。

「それでは参りましょう。」

そう言つて車を走らせた。

そしてそれを見る少女が一人・・・そこにいた。

「フイーネからの命令だ．．．手前らが何者なのか確かめて貰うぜ。」
そう言つて車を追いかけていった。

36—3

キンジ達は黒服の男達から翼を自分たちが住んでいる街に避難させるように極秘裏に移送させるために車を走らせていた。

見た目はワンボックスクスカーであるが中では翼がベッドの上で寝ていた。

このワンボックスクスカーは改造されており中にある物を見えにくくさせているのだ。これは本来ヒューマギアの運送用に使っていたのだがキンジ達はこれを使って移送させていたのだ。

「よし、息はちゃんと自意識でやっているし寝ているから何もなけりやあ夜には向こうについていそうだな。」

「そうですわね、ですがこの町は言うならば敵の本拠地。出るまでは気が抜けませんわね。」

そうだなとキンジはベルに向けてそう言いながら周りを気にしていた。

『特機』が何時現れるのかと考えながら走行している中で・・・人影があつた。森の中で見えるその少女はこう呟いた。

「さあて・・・おっぱじめるぜ！」

別の場所の遊歩道

「……響。」

そう言つて座っている黒髪を首位の所で切りそろえているこの少女の名前は

『小日向 未来』、凶……いや、未だ彼女が響であつた時の

中学時代の友達で……あつた。

彼女があゝの事件で虐められている中で学校内では匿う事が出来ずに外で

誰も見ていなかった時に彼女を支えていたのだが……あのノイズ襲来時に全てが終わってしまった。

響の家が全焼してしまつて残つていたのは彼女の家族であつた

母親と祖母の何故か残つてあつた燃え残つた遺体だけ。

後は炭になった恐らく人間であろうといつて響が死んだという事で

決着がついたが『未来』は諦める事が出来ずに何とか情報が無いかと

ネットを使って探そうとして……人の悪意に触れてしまった。

彼女に対しての誹謗中傷や『未来』に対しての心ない言葉にたつた数日で心が折れてしまつたのだ。

これが人のやる事なのかと、一体彼女が何したんだとそう思いながら

時は過ぎて……とある日テレビを付けて見ていたのだ。

お仕事選手権での人間対ヒューマギアに於いて

ヒューマギアが倒されそうな時に・・・響が出てきたのだ。

「え」

『未来』は響を見てまさかと思っただけで彼女が凶となつて

刃と天津を倒した後には滅と共に宣戦布告した映像を見て・・・テレビを消して

涙が止まらなかった。

響が生きていた事に対して喜ぶ中で仲の良かった母親と祖母が

ノイズではなく人間によって殺された事、そしてその悪意に対して

あの当時の加害者と呼ばれた・・・いや、自分たちがそう言うだけで

本当は被害者であつた彼らが戦争を宣言した事に『未来』は響がまるで

遠くに行つてしまったかのように思つてしまう中で・・・爆発音が聞こえた。

「ノイズ!？」

『未来』はそう言うが携帯を見ても非常事態であること情報が出ていない事から他の

事なのかと思つて森を見ると・・・その近くの車道が煙を上げていたのだ。

そして基地では。

『『アウフバツフェン』確認、対象は『ネフシユタン』と確定！』

「早急にその周辺の人間たちを避難させろ！俺と緒川君が

『ネフシユタン』を生け捕る！！』

「おらおらおらおら!!」

「クソが!滅茶苦茶撃つてきやがる!」

キンジはそう言いながら翼のベッドが倒れない様に掴んでいるとベルに向けてこう言った。

「ベル!森に入れ!!後で落ち合うぞ!」

「分かりましたわ!」

そう言うのとキンジはドアを開いてベルトを装着して変身した。

「ウオらあ!」

キンジは飛び出るや否やウルフブレイカーを使って攻撃すると少女は

それを肩から伸びる棘付きの鞭で叩き落したのだ。

「チィ!そいつはセミオートマかよ!!」

キンジはそう言いながら尚も乱射すると少女は黒い光球を放った。

N I R V A N A G E D O N

その攻撃に対してキンジは・・・即座に連射して手前で全弾命中して爆発した。

然し少女から見てそれは見えなかったので当たったのかと思つてゐると……キンジがそこにいなかった。

「何！何処に行きやがったんだ!？」

何処だと思つてゐると……下に影がつたのでまさかと思つてゐると空にいたのは……太陽をバックにして雷の蹴りを喰らわそうとする

ホーネットバルカンが『サンダースピアキック』をぶちかますところであつた。

「ウオラアアアアアアアア!!」

「アがああアアアアアアア!!」

少女はそれの一撃に腹部を強打して近くにある小さな崖にぶつけていった。

「あが……クソが。」

少女は毒つきながら立ち上がろうとすると……ウルフブレイカーを

少女の目の前に向けるキンジが立っていた。

するとキンジは少女に向けてこう言った。

「もう諦めろ、お前の負けだ。」

キンジはそう言つて手を伸ばしてこう言った。

「さてと、お前が持つてゐるあのノイズを操る事が出来るあの杖を

出してくれれば俺は攻撃しねえ。」

「何だよそれ……ふざけてんのか!？」

「生憎俺はマジだ、さあて……出してもらうぞ。」

そう言うのと少女は……鞭を使って離れさせるところ言った。

「ざけんな!手前みてえな力で従わすような奴がいるから……」

戦争は無くならねえし人間はいつまでたってもバラバラなんだ!!」

「お前……何言つて。」

キンジはそう言うのと少女は腹部を見た。

キンジには見えていないが露わになった腹部に……根みたいなものが見えて

それがまるで少女を侵食するかのようになつていくのを見て少女はこう言った。

「これ以上……喰われるわけにはいかねえ!」

「何をする気だ?」

キンジはそう呟きながらウルフブレイカーを構えると……少女は大声で

こう言った。

「アーマーパーズだ!!」

そう言った瞬間に鎧が……突如としてパーズするとそれを見て

キンジはある事を思い出した。

「装甲のパーズって第二形態でもあるのかよ!」

そう言いながら光の塊を見ようとすると・・・少女の声が聞こえた。

「手前みてえな力で従わすような奴には・・・力でぶっ潰してやる!!」
「そう言って光球の中で・・・歌が聞こえた。」

“Killiter } } Ichaiival } tron } }。

「新たなる『アウフバツフエン』を確認！対象は・・・
『イチイバル』です!？」

36—4

「何！イチイバルが確認されたダト!? 本当か?!」

『は、ハイ間違いないありません！第二号聖遺物《イチイバル》です！奏者と蒼の仮面ライダーも確認しました！!!』

「よし！彼らを逐一監視して俺に報告し奏者については映像から顔認識システムで正体を探れ！!!」

『了解!!』

その声と共に通信を切ると隣で運転している緒川がこう言った。

「然し『イチイバル』があるとは予想外の収穫ですね、動けなくなつた翼さんよりも戦力になれましょうしそれに。」

「ああ、『Z A I A』の新たな礎に丁度良からう。」

そしてキンジがいる場所では・・・銀髪の少女が怒り心頭にこう言った。

「歌わせたな・・・アタシに歌を！」

そう言うのと両手にいつの間にか・・・ボーガンが装備した瞬間に歌が聞こえた。

BGM 魔弓 イチイバル

その音楽と同時にエネルギー体の矢が一丁に付き数本もの矢が放たれるとキンジはそれらを避けていると今度はボーガンが・・・2連装ガトリングがんに変貌して

攻撃してきた。

BILLION MAIDEN

「なんつう弾幕だよクソが！」

キンジはそう言いながらショットガンモードにして攻撃しているが・・・少女は更に腰部に装備されているアーマーから小型ミサイルが大量に射出された。

MEGA DEATH PARTY

「お前は武器庫か!？」

キンジはそう言いながらこいつはやばいと思って

『サンダー』プログライズキーを装填して攻撃した。

ク ッ テ ル ボ ル レ バ

ト ッ ヨ シ グ ン イ テ ー ユ シ ス

そして雷鳴と共に無数の蜂型のライダーモデルがミサイルや弾丸からの攻撃から身を守る様に撃墜した。

グ　ン　イ　テ　|　ユ　シ

ボ
ル
テ
ツ
ク
ス

バ
レ
ル

ト　ツ　ヨ　シ

そして爆炎と同時にキンジが飛翔して今度は

『インベイディングホースシュークラブ』プログライズキーをセットして
バレルチェインシューティングショットで動きを封じた。

「何!？」

少女はそれに対して動揺して何とか逃げようとするも身動きが取れないがために転んでしまった。

「クソが!こんなもの!!」

「諦めろ、もうお前の負けだ。」

キンジがそう言うのと少女を見てこう聞いた。

「ええと・・・お前何て言うんだ?」

名前つてあるかと聞くと少女は大声でこう答えた。

「はあ!アタシは『雪音クリス』って名前だ!!お前じゃねえ!? って言うか

お前こそ誰なんだよ一体!」

そう聞くとキンジは変身を解除してこう答えた。

「俺は『遠山キンジ』だ、ちよつと訳アリの高校生だ。」

「ちよつとだ〜? そんな武器に詳しいどころか明らかに戦い慣れしている

そのどっこが高校生だよ!」

「そうだよなあ、まあ俺は高校生だけど何でも屋とかそういう仕事も出来るって所だな。」

「け！何が何でも屋だよ!?!どうせその銃で殺す事しかしねえくせに！」

「まあ、確かに俺は人を殺したがそれは最後の手段であつて大体は生け捕りが主立つてるからな。お前に対してはあの変な杖を出してくればそれで良いんだ。」

だから出せとそう言うが『雪音クリス』と言う少女はこう答えた。

「はん！今はねえよ残念だったな!!」

そう言うときンジは・・・チエインを解除してこう言った。

「じゃあ釈放だ、とつとどつつか行つてろ。」

そう言つて引き上げようとして・・・いきなりダツシユで

『雪音クリス』向けて飛び込んで掴んでジャンプすると・・・

炎の玉が着弾して爆発した。

「何だよ一体?!」

『雪音クリス』が大声でそういうときンジは視線の先にいた・・・変身している弦十郎を見つけた。

「あいつらが主犯のようだな。」

キンジがそう言うのと弦十郎は『雪音クリス』に向けてこう言った。

「『雪音クリス』、一緒に来てもらおうぞ。君は『イチイバル』の奏者であり

『ソロモンの杖』の違法所持で君を拘束させてもらおうか？無論その君もだ、嫌とは言わせないぞ。」

「は！『Z A I A』の手先になってしまつてマインドコントロールされている手前の言う事なんて誰が信じるって言うんだ!!」

「何を言うんだ君は？『Z A I A』と手を組むことで我々はノイズに恐怖せずに済むのだよ？人と言う幸せを手に入れられることに何の恐怖がある？」

弦十郎が人を見下すような笑みを浮かべているとキンジはこう返した。

「は！幸せだと?!首輪に繋がれちまつて何が幸せだよ馬鹿野郎が!」

幸せて言うのは自分の手で掴むものだ！手前勝手に言つてんじゃねえ!!」

キンジがそう言うのと弦十郎が緒川に向けてこう言った。

「緒川、彼らを連行しろ。半殺し程度ならば許す。」

「はい、了解致しました。」

そうつて緒川が苦無を放つと・・・大型の剣がそれを遮った。

「鉄・・・まさか!」

緒川がそう言うつて上を見るとそこには・・・翼がシンフォギアを纏つて柄の上に立つ

ていた。

「何をしているのですか叔父上！緒川さん!!」

そう言つて降り立つと翼はこう続けた。

「先ほどのやり取り聞いておられましたがお前が今までの貴方でしたら話し合いを第一としていられましたのに何故強引にするのですか!？」

そう聞くと弦十郎はこう返した。

「何を言う翼、これでお前は普通の女の子として暮らせるし

人としての幸せがすぐそこまで来ているのだ？防人としてこの上ない

幸せではないかね？」

「生憎ですが私と『奏』が掴もうとしていた幸せは貴方が見ている幸せとはかけ離れている・・・人としての幸せと自由を奪うこと等あつては

いけないのです!!」

そう言うと弦十郎は緒川に向けてこう命令した。

「緒川、翼も連れていけ！共に『Z A I A』と共に歩むことがどの様に幸せなのかを分

からせる!!」

「はいー」

そう言うのと翼は痛々し気な表情でこう言った。

「それが今の……叔父上の心からの声でしたら……私は貴方を斬つて目を覚まさせる!!」
そう言つて互いに交戦した。

そしてそれを見る女性が崖の上で……にやりと笑みを浮かべて眺めながら
こう呟いた。

「役立たずな子よねえ……アイツら全員倒す序に始末するか。」
そう言つて……『ソロモンの杖』が起動した。

36—5

BGM 絶刀・天羽々斬

「ハアアアアアアアアア！」

翼はダメージが残っている中で緒川相手に戦っている中でこう聞いた。

「緒川さん目を覚ましてください！ 貴方迄何故このような事を!?!」

「それが『Z A I A』の為であるからです！」

『『Z A I A』『Z A I A』『Z A I A』って貴方には貴方の考えが

あるんじゃないのですか!?!」

そう言いながら剣戟が響く中で緒川は苦無を放つと翼は小さな刀を何本か持つて放つて互いに弾き飛ばすと緒川は一瞬で翼に詰め寄って攻撃しようとした瞬間に・・声
が聞こえた。

「申し訳ございありませんが怪我人に対してそれは外道ではないでしょうか？」

その言葉と共に大鎌を錐揉みするかのように振り下ろそうとしていたファイトが
緒川の頭部に思いっきり叩きつけた。

「あがあ!?!」

「あ……貴方は!？」

翼はファイトを見て誰だと思っているとファイトはこう答えた。

「翼様、貴方は今負傷者ですので勝手に戦わないで下さいまし?。」

「う……だ、だが」

「それに……私達は弱くありませんので。」

そう言いながらファイトは翼と共に緒川相手に戦った。

「クソが!」

キンジがそう言いながらデザートイーグルを撃ち放ちながらベルトに『インバイディングホースシュークラブ』を差し込んで変身した。

「変身!」

そう言って現れたのは鋼と赤色が交じり合った装甲を持つ

角ばった戦士であった。

『The stern military soldier! インベイディングホースシークラブ! Heavily produced battle armor equipped with extra battle specifications.』

これこそ『仮面ライダー ソルジャー』である。

「行くぜ!」

『ソルジャー』となったキンジは新たに現れた『トリデンタ』を構えて攻撃するが弾丸が見えているのかどうか分からないが拳で

全て弾き落としている中でキンジはマガジンを変えた。

「こいつならドウダ!」

そう言つて放つが弦十郎はそれを見てこう言つた。

「無駄だ!」

そう言つて拳が当たつた瞬間に・・・周囲が爆発した。

「な!?!」

弦十郎はその威力に何だと思つてみるとクリスがこう呟いた。

「・・・ナパーム弾かよ。」

「正解だ、正確に言えば内部にある可燃性のガスに引火したものだかな。奴が炎を使うならこれくらいの武器が丁度いいと思つてな。」

そう言いながらキンジはウルフブレイカーにバレットプログライズスキーをセツトすると弦十郎は拳だけではなく脚にも炎を出して

攻撃しようとした瞬間に・・クリスが腰部に搭載されているスカートから小型ミサイルが雨の様に放たれた。

MEGA DEATH PARTY

その攻撃に対して弦十郎は回し蹴りの応用で全て叩き落すがキンジはその隙を突いて『バレルシューティングショット』を放つて弦十郎を吹き飛ばした。

「これで止めだー！」

クリスはその言つて二連奏ガトリングライフルを出現させて

攻撃しようとした瞬間に上空から・・ナニカがクリスの武器を破壊した。

「!？」

クリスはなんだと思つて上を見て見るとそこにいたのは・・

紫色のノイズであつた。

するとそのノイズは体を槍の様に尖らせた瞬間に回転して突っ込んだ。

それを見たキンジは嫌さずにウルブレイカーで攻撃して落とすと他にも
何体もの同型のノイズが現れた。

それを見たクリスはまさかと思わんばかりに辺りを見ると・・・

そこには黒いドレススーツを着た女性が崖の上に立っていた。

「フイーネ！」

「フイーネ？」

キンジはクリスがそう言うので復唱すると・・・『フイーネ』と名乗る女性が
クリスを見てこう言った。

「全く何やっているのかしら貴方は？与えられた仕事を満足に

こなせられないなんて使えないわね。」

「おいアンタこいつの仲間みてえんだがその口はねえんじやねえのかよ？」
「そいつは私のモノ、私の勝手ヨ？」

「其れでもこいつは人間だ、手前の持ちモノじゃねえよ。」

そう言っているときクリスは『フィーネ』に向けてこう言った。

「何言つてんだよアタシはちゃんとやっつてんだぜ!? アンタに付いていれば
バラバラになった人の心を一つにして世界が平和になるつて

アンタ言つてたじゃねえかよ!? あれは嘘だったのかよ!!」

なあ『フィーネ』!と大声でそう言うと『フィーネ』が手を翳した瞬間に……信じ
られない事が起きたのだ。

樹や岩が光になって……消えていったのだ。

そしてそれらは『フィーネ』の手に集まるとそれらが……
ノイズに変わったのだ。

「何じゃこりやあ!？」

キンジはそれを見て驚きながらも攻撃しようとする『フィーネ』は
キンジ達に向けてこう言った。

「それじゃあね、仲良くして行つてね。」

そう言つて立ち去るとクリスは『フィーネ』を追つて行つた。

「ベル！翼さんは!？」

「こちらに!！」

「飛び込むぞ!!」

「分かりましたわ!!」

キンジの言葉にベルがそう答えるとベルは翼を抱えてこう言つた。

「泳げますか？」

「無論だが・・・まさか」

翼はそう言つた瞬間に3人は其の儘翼と共に・・・海に向かって落ちていった。

「なあああああ!！」

翼の悲鳴と共に落ちていくとそれを見た弦十郎は緒川に向けてこう命令した。

「早急に辺り一帯を搜索しろ、高速道路も封鎖するんだ。」
良いなと言つてその場を後にした。

「然し連中も気づいていないだろうな、まさか途中まで山道で
向かっているとはな。」

「ええ、ですが本当でしたら怪我人である翼さんを抱えながらですから
少しペースダウンしますが仕方ありません。」

「・・・降りた方が良いか？」

「いや、つうかアンタ痩せすぎだぜ？もう少し重くても運べる。」

「む……それは失礼だな。」

翼はそう言いながらキンジにおんぶされながら山道を進んでいた。

「後はオートメーションでこっちに来て、いる車を拾って街に行つて社長に報告して全く……仕事が尽きねえなおい。」

そう言いながらキンジは歩いて行つた。

然し彼らは知らない、或人が今大変な状況になっていることを今の所は。

36—6

キンジとベルが依頼を遂行している中で或人はある物を博士型ヒューマギアに注文していつい先ほどそれを受け取っていた。

「社長、何だそいつは？」

不破がそう聞くと或人はフフフフと不敵に笑いながらこう答えた。

「よくぞ聞いてくれました！これこそ我が社が開発した最初のAIロボット名付けて『バタフライ』だ——！！」

そう言つて見せたのは白い蝶々のような小型ロボットであった。

すると博士型ヒューマギアがこう説明した。

「これは今現在における社会情勢を考慮しつつ安定した量産を目的として製造した昆虫型ロボットでして何も人型に固定概念を振り払った最初のAIです。」

「私は翼を使った飛翔に伴う重量計算をしました。」

洗もそう言いながら頭を掻いていると或人は2人に向けてこう言った。

「ありがとう2人共、俺達飛電製作所の最初の一步が築けたよ。」

「本当にありがとう。」

或人の言葉を聞いて2人共照れている中で『バタフライ』が不破の手に止まると『バタフライ』が喋ってこう言った。

『初めまして不破さん、僕の名前は『バタフライ』って言うんだ。宜しくね。』

「お……おほ。」

それを聞いて不破は少し驚いている中で或人に向けてこう聞いた。

「……悪いが少し借りて良いか？ちよつと聞きてえことが出来ちまった。」

「……良いですよ、あ。もし終わったらでいいから感想とか聞きたいから宜しく。」

「おほ、分かった。」

そう言つて不破は『バタフライ』と共に去つて行つた。

それを見ていたイズは一体何をするのでしょうかと聞くと或人はこう答えた。

「多分だけどき……家族だと思ふんだ、逢いに行つていいかどうか。」

「……私的には会つた方が良いと思ひますよ……逢えなくなつてからでは遅いですし。」

洗はアハハと空笑いしながらそう言ふと仕事に戻つてその光景を見ていた或人も何とかしいたと思つていたので。

そして暫くすると……電話が鳴つたのだ。

「はい、こちら飛電製作所って・・・刃さん!?」

電話の居場所は病院であり刃が入院していると聞いて不破に電話を掛けた後に不破と共に病院に着くとそこには頭部に包帯を巻かれて怪我をしていた刃がベッドの上に座っていた。

「社長、それに不破。」

「刃、一体何があつたんだ!?!」

お前ほどがよとそう聞くと刃はこう答えた。

「・・・アークにやられたんだ。」

「!!」

刃の言葉を聞いて全員が驚いていた、それはアークが完全になったと言う事なのだから。

「一体何が？」

或人がそう聞くと刃は暫くして・・・こう答えた。

「・・・あれは・・・天津を倒して直ぐの事だった。」

『ヒューマギアを人類から解放して・・・』

「正義だど?」

「正義だど?」

刃がそう聞くと迅はこう続けた。

「僕の目的は『アーク』を滅ぼす事なんだ。」

「な!何故だ?お前たちの目的は」

「だってそうでしょ?人間は勝手に滅びちゃうんだから僕たちがやらなくても

ノイズが勝手にやっちゃってくれるからね。」

迅何も罪悪感など無いかのように振舞いながらこう続けた。

「だけどアークは違う、奴は世界を滅亡させることができる最悪の存在だ。奴を倒さなきゃヒューマギアの未来も終わってしまう、

だから奴は倒さなければならぬんだ。」

それを聞いてこいつはアークを滅ぼすために行動していたのかと思っていると刃はこうも聞いた。

「ならば何故このような事をするんだ？ 奴のメインデータがある衛星を

破壊すれば済む話だろう？」

そう聞くと迅は首を横に振ってこう答えた。

「駄目なんだ、ネットワークにいるアークはあらゆる場所に潜伏できるから奴を衛星アークから切り離すには一度復活するしか道はないんだ。だからこそ

僕はアークを復活させるんだ、ヒューマギアの未来の為にね。」

それを聞いて暫く考えた刃はこう答えた。

「良いだろう、お前の作戦に乗ってやる。」

そして現在

「其れで奴と協力してアークを蘇らせたが・・・奴はこれ迄とは別格だ、我々全員が束になっても勝ち目なんて無かつたんだ・・・」

私が奴と手を組まなければこんな事には！」

「もう良い刃・・・おめえのせいじゃねえよ。」

不破がそう言つて刃を慰めていると或人はこう言つた。

「其れは俺も同じだ、『ミドリ』を助けるために俺は滅の言う事を聞いて雷のプログライズキーを渡してしまったから。」

そう言つて部屋から出ようとする或人を見て刃がこう言つた。

「社長！やめておけ．．．私達が何とかできる相手じゃない．．．」
そう言うのと或人は部屋にいる全員に向けてこう言った。

「滅は俺達が迅を攻撃する時に必死で守っていた、

多分滅は変われると思うんだ．．．俺はヒューマギアを信じたい。」

そう言って部屋から出るとイズと不破も出ていこうとすると

不破は『バタフライ』を刃の目の前に置くとこう言った。

「話したいことがあったらこいつに聞け、聞くと聞かないとじゃあ

肩の荷の重さが違うぞ。」

そう言って出ていくと『バタフライ』は刃を見てこう言った。

『元氣だしなよ、君は悪いわけじゃないんだから。』

「それでも私は．．．自分が許せない。」

『だったら自分がどうやって許せるか考えよう？僕も力になるから。』

「ふ．．．A Iを破壊していたお前に慰められるとはな．．．自分を許せるか。」

そう言いながら刃は外を眺めていた。

36—7

「其れで如何だったの不破さん？」

「あ？何がだ??」

不破は或人からの質問に何だと聞くと或人はこう答えた。

「家族だよ！会えたんでしょ!？」

そう聞くと不破は・・・少し笑みを浮かべてこう答えた。

「ああ・・・逢えたよ。」

「そうか・・・良かったね不破さん、話したの？」

「いや・・・してねえ。」

「・・・え？」

何でと或人がそう思っていると不破はこう答えた。

「普通だった。」

「？」

「普通の家族で笑ってて・・・それを見ただけで俺は満足だ。」

行くぜとそう言うのと或人はそれを見て少し微笑ましい表情で追いかけていった。

そして或人達がデイベレイクタウンに繋がる橋を渡ろうとして・・・突如として不破が倒れ込んだ。

「あぐ・・・がああ!!」

「どうしたの不破さん!?!」

或人が不破に駆け寄ってそう聞くとトンネルの向こうから・・・足音が聞こえてきた。

何だと思つて振り向くとそこにいたのは・・・アークであった。

「あれが・・・アーク。」

「如何やらその様ですね。」

イズがそう答えると或人はドライバーをセットしてこう言った。

「滅！俺はお前が本当は優しい奴だつて知ってる！」

『何を言っている?』

アークから滅とは違う声が聞こえてくると或人はこう言った。

「滅、俺はお前を信じる。」

そう言つて或人は『オーデュランダル』に、不破はランページバルカンに変身して向かつて行くアークに立ち向かつていった。

2人は最初から息が合うかのように互いに攻撃してアークを追い込んでいくがアークも負けてはおらず、2人相手に戦っていたが・・・何故かぎこちないのだ。

そんな中で或人は黒いライダモデルを大量に出現させて動きを封じたその時に不破はエレメンタルでの攻撃でアークを吹き飛ばすと或人はデュランダルの

エネルギー攻撃を利用してメタルクラスタと同化させて薙ぎ払ってアークを……倒したのだ。

「良しー!」

不破はいけるとそう思っていると爆発の煙が晴れてそこにいたのは……滅ではなく……迅であった。

「何!？」

「迅!？」

不破と或人が驚いていると迅が突如として震えた瞬間にアークドライバーが不破目掛けて飛んで行ったのだ。

「何だこれは!？」

不破は何だと思つて拳を振り上げるも煙のような存在であるアークの前に成すすべなくアークに取り込まれるかのように絡みつかれて暫くして……ランページプログラムズキーが破壊された。

「あぐ……グああアアアアア!!」

其の儘不破が倒れると新たに足音が聞こえた。

そこにいたのは……滅であった。

するとアークドライバーが滅に巻き付かれると……アークがこう言った。

『どうだった？人間を利用し、弄ぶ。人間の悪意の一つを私なりに

コピーしたものだ。』

「くう！」

『変身』

そう言つてアークゼロに変身すると或人に向かつて進んでいくと

或人はアークに向かつて攻撃するもアークはまるで何も感じないかのよう
に受けながら進んでいってそして今度はスムーズに攻撃して或人を殴り飛ばした。

「うわああ！」

そしてアークはアタッシュアローを引き出して或人目掛けて攻撃してきた。
或人はそれをデュランダルで防ぐが・・・其の儘弾き飛ばされてしまった。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

37—1

「グわアアアアアア!!」

或人がアークの攻撃によって吹き飛ばされるが何とか着地する事が出来た。

受け止めたのがデュランダルであったことが功を奏して怪我せずに済んだのだがそれでも或人はヤバいと思つて斬撃を放つがそれすらもアークの前には

蚊に刺されたかのような痛みでしかない様に見て取れた。

「クソが!」

不破はそう言つてシヨットライザーを通常状態で攻撃して命中するが

アークはそれをダメージとも取れてなくそれどころか不破をエネルギー派で吹き飛ばすとシヨットライザーが空に漂つて・・・イズに狙いを定めていた。

「止めろ!」

或人はそれを察知して守ろうとするがアークが前に立ち塞がつて

エネルギー派を拳に溜めて打ち付けた。

ン ヨ シ ク ン イ テ ス ク エ ル 丨 オ

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
オール

エクステインクシヨン

其の儘或人が吹き飛ばされるのを見てアークがイズ目掛けて放って
当たる寸前に・・・迅が割って入って助け出したのだ。

そして迅はイズを或人に渡すと迅は或人に向けてこう言った。

「逃げろオー！あいつは・・・アークは人間が考えているような

次元の奴じゃないんだ!!速く!？」

そう言うとき或人達は撤退していった。

そして飛電製作所に戻った彼ら。

「まさか・・・あそこ迄とはな。」

「対抗出来るのでしょうか？」

洗がそう言いながら不破の怪我を治療している中で或人はこう呟いた。

「まさかあんなに強いなんて・・・人間を超えたAIが・・・

あんなに恐ろしい物だったなんて。」

「或人社長。」

イズはそれを心配そうに見ているがどの様に言えばよいか

分からなかったがために何も言えない中で電話が鳴った。

「あ、はい。こちら飛電製作所・・・ああ遠山君？仕事が終わった、

分かりました伝えておくよ、今日はご苦勞様。」

そう言つて電話を切ると洗が内容を説明した。

「たった今遠山君達から報告があつて例の子を無事病院に

搬送出来たそうですよ。」

「そうか・・・良かった。」

それを聞いて少しだが元気になった或人であつたが洗はこう続けた。

「ですが何やらトラブルがあつたらしく今日の所はベルさんが病院に泊まつて

警護をしているのでしてあとそれとイズサンにお願いが有りました

この少女について調べて欲しいと……アア名前は『クリス』と言っております。

そう言ってイズに携帯電話からキンジが送信してきた情報を送信した。銀髪の少女『雪音クリス』を。

そして更にダイブレイクタウン

「「アークの意思のままに。」」

「アークの意思のままに。」

そう言う滅、亡、雷、そして凶が集まっているとアーク……が

憑依している迅が中央にいと全員に向けてこう言った。

『時は来た、我々が人間を滅ぼし、我々の世界を作る時が来た。

亡、お前にこれを渡す。』

そう言つてアークのベルトからスキャンの光が出てくると現れたのは……フォースライザーと灰銀色のプログライズキーであつた。

そしてアークは亡に向けてこう言つた。

『これでZ A I Aの天津に挨拶して来い。』

「……了解しました。」

そして飛電インテリジェンス社長室

そこには天津の他にも福添副社長と山下専務がその部屋にいた。すると天津が2人に向けてこう言った。

「今度売りに出すレイドデバイスの発売日に合わせて態と

Z A I A スペックを暴走させる。」

「暴走……ですか。」

福添は何故とそう思っていると天津はこう続けた。

「Z A I A スペックが暴走する中でレイドデバイスを装着して市民が

それを使って暴走している民間人を取り押さえる、中々楽しく

そして良い印象が与えられるショーだとは思わないかね？」

「ショー……ですって……!!」

福添はそれを聞いて驚きと同時に怒りを露わにしていた、この間の防衛省大臣の死亡ニュースからZ A I A スペックが下火になりつつあることを考慮し

未だ使っている人間を使って暴走させてレイドデバイスを大量注文させて

自身の利益にさせようとするその傲慢なるやり方に腹を立てていたのだが表面上は取り繕いながらこう言った。

「で……ですが社長、それでは市民に死傷者が出た場合どの様にするので
そう言々と……天津は信じられない事を口にした。

「何を言っている？力を分かりやすくするためには痛みが必要なのだよ？
福添副社長。」

「痛み……？」

「そうだ、人は力を目の当たりにして恐怖するが

それが誰でも使えるような物ならば人は誰も手を伸ばす、

アメリカで銃を売ると同じなのだよ？我々は人々の安寧の為に痛みを伴わせて
財を得るのだから。」

そう言うのを聞いて福添の握りしめていた掌から血が滴りそうになっていた。

そして再び飛電製作所

「社長、風鳴翼の移送終わったぜ。」

「ああ……ありがとうキンジ、今日は……休んで良いから。」

「?……アア、分かった。」

キンジは或人の元気のなさそうな表情を見て何だと思っっている中でイズに向けてこう聞いた。

「そういえばイズさん、頼んでおいた情報なんだけど。」

「はい、既にインストールは終わっておりますのでパソコンにチェックを。」

「ありがとうな。」

そう言つてキンジはパソコンを起動させて雪音クリス仁関する情報を

見ようとすると……ベルが現れて或人に向けてこう言つた。

「社長、お客様です。」

「え．．．誰？」

そう言うとベルがそのお客さんについてこう言った。

「はい、飛電インテリジェンスの副社長様だそうです。」

37—②

「久しぶりだな飛電 或人君。」

「お久しぶりです・・・福添さん。」

或人は力なくそう言うのと福添は何かあつたのかと思つてこう聞いた。

「どうした？元気がないな。」

「いえちよつと事情がつて・・・何か用でしょうか？」

或人がそう聞くと福添はこう答えた。

「君に依頼があるんだ。」

「依頼・・・ヒューマギアでしょうか？」

「そうだ、『シエスタ』を復元させて欲しいんだが君は確かプログライズキーを持つて
いるよな？」

「ええ退職金代わりにつて・・・何をするつもりなんですか？」

或人がそう聞くと福添はこう答えた。

『シエスタ』を使って天津現社長の陰謀を打ち砕く為に飛電インテリジェンスで使いたいんだ。」

「けど・・・ヒューマギアが飛電インテリジェンスに入れるのは不可能なんじゃ。」

或人は福添の提案に対してそう聞いた。

今の飛電インテリジェンスはZ A I Aの管理下に置かれているがために何か起こらない限りヒューマギアを中に入れさせることは不可能なのだ。

そんな中に入れるなんて無理でしょうとそう聞くと福添は首を横に振ってこう答えた。

「確かにその通りだがこのままでは・・・また死者が増えるかもしれないのだ。」

「またって・・・何があるんですか福添さん？」

或人がそう聞くと福添は言いづらそうにこう答えた。

「天津現社長はレイドデバイスを発売する日に・・・Z A I A スペックを
今度は人為的に暴走させると言ってきたんだ。」

「ええええええ!?!」

それを聞いて丁度そこにいた洗も含めて驚いていた。

Z A I A スペックが暴走したことで防衛省大臣が死亡したにも関わらず

また暴走させて死人を増やすのかよとそう思っていると福添は・・・

怒り心頭でこう続けた。

「あの男はこれをショーと・・・痛みで力を見せつけると言つて・・・

私が先代社長と共に飛電インテリジェンスを作り上げたのはそんな事を!

人を傷つけさせてそれで商売などして堪るか!!」

「福添さん。」

「だから私は立ち上がったのだ、これ以上奴に飛電インテリジェンスを汚させない為に……強力して欲しいんだ！」

そう言つて福添画頭を下げるのを見て或人はこう答えた。

「分かりました、でしたら今すぐ一機都合を付けます。」

「……ありがとう！」

そして或人はキンジに頼んでヒューマギアを取りに行かせて『シエスタ』のプログライズキーを起動させるとホログラムで『シエスタ』が復元された。そして『シエスタ』は或人に向けてこう言つた。

「或人社長、私は貴方の所有者ではないためお断りを」

「いや待って待って『シエスタ』俺だ俺！」

福添は『シエスタ』に向けて大声でそう言うと『シエスタ』は福添達を見て・指をさしてこう聞いた。

「福添副社長。」

「そうだ。」

「山下……専務？」

「イヤうろ覚えって私そんなに存在感無かったんかい！」

そう言いながらツツコミを入れると福添は或人に向けてこう言った。

「ありがとう、これで奴のネットワークデータから奴の証拠が手に入れば

奴を株主総会で辞職に追い込めそうだ。」

「そうそう！これ迄のパワハラに裏金そして使途不明金の出どころ等々を出して奴をクククク。」

「山下専務……嫌な顔になっていて楽しそうですね。」

「よっぽど恨みがありそうですね。」

イズとベルが互いにそう言っていると福添は或人に向けてこう言った。

「ありがとう飛電 或人君、これで奴を蹴落とせるよ。」

「それは……良かったですね。」

或人がそう言うのと福添は或人に向けてこう言った。

「飛電 或人君、ちよつと良いかい？」

「？」

或人は福添について行つて屋上に着くと福添は煙草を吹かしてこう聞いた。

「何かあつたのか？」

「……」

「言いつらければ言わなくていいが言つてしまえばスッキリする事も

ある物だぞ？」

聞いてやるからとそう言っていると或人はこう聞いた。

「福添さんは・・・AIが怖いって思った事ありますか？」

「怖い？」

何がだと聞くと或人はこう続けた。

「俺、今までヒューマギア・・・AIは人を幸福するつてずっと信じて

戦って来ました。けど・・・あんな・・・アンナのがAIの力だったなんて思うと

怖くて……コワくて。」

そう言うのと福添は煙草の煙を吐き出してこう言った。

「怖いか……だがそれが君の夢なのだろうか？」

「え？」

「夢は甘くて残酷だ、時に優しく時に恐ろしく人々に付き纏う物だ。

だけどね飛電 或人君、君のおじいさんはどんな時でも夢を信じて

突き進んでいた。AIが造る未来がどの様な物であったとしても……

君はその夢に対して責任を果たさないといけないんだ。」

「責任を……果たす。」

「そうだ、君は夢を叶えようと努力している。だがその結果がどうであれ君には責任という重責がのしかかっていくだろうが……逃げずに全力で受け止める、

それが君がやるべきことだ。」

「俺が……やるべきこと。」

或人がそう呟くと福添はある物を或人に渡した。

それは一枚の写真であった。

「これは……」

そう聞くと写っていたのは……父親と祖父と女性が小さな赤ん坊が

写っていた。

すると福添はこう答えた。

「其れは君が生まれてすぐの写真だよ。」

「え！俺の!?!」

或人はそれを聞いて驚いていると福添はこう続けた。

「それは先代が大事に持っていた物だ、何時か君が飛電インテリジェンスを
本当の意味で社長に相応しいと思った時に渡して欲しいと先代が

私に託してくれたんだ。」

そう言うくと福添はこう続けた。

「君は多くの人達から祝福されて今日まで生きてきたんだ、だから君は
その人たちに・・・先代に対して恥ずかしくない人間に続けてくれ。」

「福添さん。」

「さてと、『シエスタ』を連れて行かなければならないから準備しないと
いけないもんだから私は失礼するよ。」

じゃあなど言つて出入り口に行くとか或人は福添に向けてこう言った。

「福添さん!・・・ありがとうございます。」

そう言つて頭を下げると福添はこう答えた。

「頑張れよ……或人社長。」

「え？」

「いや……何でもない。」

そう言つて福添は出ていった。

これが最後の会話となつたとはこの時誰もが思つていなかった。

37—3

不破は刃のお見舞いの為に病室に在中で何やら・・・不穏な空気で覆われていることに息がしづらく感じる中で刃がこう言った。

「・・・済まなかった、不破。」

「あ?」

「お前を巻き込んでしまって・・・何よりも・・・お前の未来を狂わせたことに私はお前に謝りたい・・・済まなかった不破。」

そう言つて頭を下げた刃であつたが・・・こう続けた。

「と、『バタフライ』がそう言えと言つたのだ!」

「・・・はあ?」

それを聞いて不破は訝し気な表情をしていると・・・『バタフライ』はこう返した。

『唯阿さん・・・もう少し素直になろうよ?折角謝る事が出来そうだったのに。』

「んな!」

刃はそれを聞いて慌てていると不破はそれを見て笑いながら見守っていた。

そしてところ変わって何処かの工場資材置き場。

そこにいたのは作業員ではなく・・・天津率いるAIMS戦闘員達がぞろぞろと隊列を組んでいた。

そんな中で天津はこう呟いた。

「私をコケにしたこと後悔してやるぞ滅亡迅雷 net・・・」

私をパンイチにした報いは1000万倍にして返してやろう・・・!!」

そう言っているのだがその理由は少し前に亡と雷が飛電インテリジェンス

地下駐車場に於いて天津に近づくと亡が仮面ライダーに変身してその攻撃で・・・パ

ンイチにされたのだ。

それに怒り心頭であつたがためにこの様に大規模部隊を送り込んだのだが

それは・・・滅亡迅雷、netも同じであつた。

ぞろぞろとマギアやデイスペアが滅亡迅雷、netが現れるとアークが天津に向けてこう言つた。

『よく来たな人間よ、キサマラハここで終わりだ。』

「迅・・・いや、貴様はアークだな？」

天津はそう言いながらサウザンドライバーを身に着けるとその背後にいた弦十郎や緒川も変身しようとすると他の面々も変身した。

そして・・・互いに上げた腕を敵に向けた瞬間に戦闘が始まつた。

『ウオオオオオオオオオオオオ』

銃撃や斬撃がひしめき合う戦場が生まれた。

そして飛電インテリジェンス

「よし、天津達がない今が好機だ。」

福添が山下に向けてそう言うのと山下はシエスタと共に現れるとシエスタに向けて命令した。

「よし、シエスタ。天津のパソコンデータから奴の悪事に関する情報を

スキャンしてくれ。」

「了解いたしました。」

シエスタはそう言って忙しなく指を動かしながら天津の悪事に関する情報を

精査しているのを・・・天井裏から見ている人間がいる事に未だ気づかなかった。

資材置き場は既に戦場と化していた。

辺りには焰と倒れてた戦士たちで溢れ返っている中で滅と凶は緒川を、亡と雷は風鳴相手に戦っておりサウザーはアーク相手に戦っていた。

緒川サイド

「ハアアアアア！」

緒川は苦無を放ちながら攻撃しているとそれを凶は弾きながら攻撃しようとする。突如として動きが止まってしまったのだ。

それは……苦無が足元の影に突き刺さっているからだ。

「これはあの時の！」

「影縫い……これで終わりにします。」

そう言つて放とうとすると……滅がアタツシユアローを放つて苦無を破壊して凶を動けるようにすると凶は止まっていた体を続けるかのように動かして

緒川の攻撃を受け止めると滅はその隙を伺つて緒川の体を蠍の尻尾の様な

ワイヤーで拘束するところ言った。

「滅びろ人間。」

デイストピアファイニッシュ!

その音声と共に滅が攻撃して吹き飛んだ・・・科の様に見えた瞬間に滅は更に複数のワイヤーを出して上空に放つとそこにいたのは・・・緒川であった。

下を見ると変わり身の術の様な感じで木がそこにあつたがヒューマギアに対してそんなの効くわけが無く滅は其の儘再び緒川を封じると今度は凶が攻撃して

今度こそ倒した。

「ウワアアアアアアアアアアアアアア!!」

ちゅどーん!という音と共に緒川は地面に叩きつけられた。

風鳴サイド

「ハアアアア！」

風鳴は焰を纏った拳で攻撃するも雷と亡はそれを避けて亡が攻撃しようとするその蹴りを風鳴は右腕一本で受け止めると雷が上空から蹴ろうとすると亡を振り回すように一緒に叩きつけて地面に叩き落とした。

「ぐおー！」

「あがー！」

2人共その攻撃に痛みが襲い掛かるも風鳴は更に攻撃しようとした瞬間に右腕に何か痛みが走った。

「むっ？」

それをよく見ると蠍の様な尻尾、滅の攻撃であつたが滅は効いてなさそうな風鳴を見てこう呟いた。

「成程な、貴様は人間としては厄介な奴だ。・・・だがこの人数でならドウダ？」

そう言うのと亡と雷はデイストピア、滅と凶はユートピアファイニッシュを使用しての一斉攻撃をした瞬間に風鳴は震脚で全てを吹き飛ばしてそれらを退かせた。

37—4

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

サウザーはアークに向けてジャツカーを振り上げてアークのベルト部分に叩きつけるとエネルギーを吸収しようとした瞬間にアークはその攻撃を予めラーニングしていることから逆に大量のエネルギーを放出してサウザンドジャツカーを・・・粉々に破壊した。

「ぐおー!」

いきなりの事でサウザーが驚くとアークはベルトを一回ボタンを押すと

黒いエネルギーがサウザーに纏わりつくかのように這い出てきて

其の儘サウザーを浮かすとアークはオールエクステイクションを

エネルギー爆発させてサウザーを倒した。

「グああアアアアアア!!」

そしてその儘サウザーが落ちたと同時に変身が解けると残ったAIMSの戦闘員が天津と共に引き上げていった。

「俺達の勝利だー!!」

デイスペアの一人がそう言うのと全員が勝鬨を上げた。

この勝利はまるで未来の自分たちの様に輝けるものだと思つて戦つた証だと言わんばかりに雄たけびを上げる中で・・・新たな敵が現れたのだ。

『01か。』

アークがそう言つて出てきたのは01デユランダルであつた。

「アーク・・・俺はお前が怖い・・・けど・・・俺はもう逃げない」

そう言うのと或人はデユランダルを持つてアークに戦いを挑むもアークはそれを易々と掴んで引き離して距離を取るが或人はライダモデルを使つて

黒い飛蝗を出すアークの方は黒い液体の様なナニカを出して応戦した。

ライダモデル同士の戦いに加えて拳と剣がぶつかり合う戦いになつた。

するとアークが再びオールエクステインクシヨンのエネルギーを今度は拳に集中させると或人は必殺技を放とうとした。

新たな技・・・それは砕けない聖剣の力を最大限に使う荒業。

その技の名が・・・これだ。

トクパンイグンジイラ・D

「お前を止めれるのはただ一人・・・俺だ!!」

D・ライジング
イ

ト ク パ ン

「ハアアアア！」

その攻撃が拳に当たって・・・其の儘アークを弾き飛ばしたのだ。

『ぬおオオオオオおおおお！!!』

いきなりの事でアークが吹き飛ばされて暫くすると・・・何やら挙動が可笑しい事に気づいたのだ。

『迅・・・貴様・・・道具風情が・・・！!!』

「01・・・速く・・・!!」

迅がそう言ってもう一度と思っていると・・・凶達が邪魔に入って来たのだ。

「クソ！邪魔しないでくれ!!」

或人がそう言うのとアークは何も言わずに・・・撤退していった。

「待てアーク!!」

或人がそう言った瞬間に凶達が地面に技を放って簡易的な煙幕を張って晴れた時には・・・誰もいなかったのだ。

「・・・クソ！」

そして飛電インテリジエンス地下駐車場

「これで天津もお終いですね副社長！」

「ああ、ありがとうなシエスタ。これで奴から飛電インテリジエンスを」

取り戻せると言おうとした瞬間に・・・人気を感じると福添はシエスタに向けてこう言った。

「シエスタ、データのコピーはお前の中か？」

「はい、バックアップは既にゼアにインプットしております。」

「それはイズにも見せれるか？」

「勿論でございます。」

「ならば・・・逃げろシエスタ！」

福添がそう言った瞬間に車の影から数人の黒服の男性が現れた。

その見た目はまるで忍者と言わんばかりの格好であったがために何なんだと思っている男の一人がこう言った。

「福添副社長、そのヒューマギアとデータを渡してもらおうか？」

命の保証は致しますのでさあ。」

「・・・断ると言えばなんだ？」

福添がそう聞くと男がこう答えた。

「残念ですがそれ相応の対応とさせて貰います。」

そう答えると福添は持っているUSBメモリを取り出すと・・・

それを空に目掛けて投げ捨てたのだ。

『！！！』

男たちがそれを見た瞬間に福添は懐から・・・ザビーを放つてこう言った。

「そのUSBメモリーとシエスタを或人社長に届けてくれ!!」

そう言った瞬間にザビーはUSBメモリーを嫌さずに空中で取る

其の儘シエスタの下に向かうと男がこう言った。

「あれを奪え！」

「「「「「は！」「」「」」」」」

そう答えて男たちが拳銃を取り出すが・・・福添と山下はそれに対してぶつかって射線を逸らすと未だそこにいるシエスタを見て福添はこう言った。

「何しているんだシエスタ！速く逃げろ！」

そう言うとシエスタはこう返した。

「・・・その命令を従う事はしません。」

「どうしたんだシエスタ！」

「私は福添副社長の秘書です、最後までお供させてください!!」

「シエスタ・・・お前まさか。」

福添はそれを聞いて彼女もシンギュラリティーに達していることに気づいて微笑むと・・・福添はシエスタに向けてこう言った。

「ならば親友として頼む！．．．生きろシエスタ!!お前の未来の為に
生きろー!!」

走れー!!と大声を上げて怒鳴る様にそう言っているとシエスタは．．．

福添に背を向けて猛スピードで走り去って行った。

「追え！逃がすな!!」

「させるか!?!」

福添はそう言って体当たりしてぶつかると．．．

バーンと乾いた音が聞こえた。

「福添副社長ー!!」

山下専務がそう言うのと福添の腹部に・・・赤い液体がスーツ越しから染み出し始めた。

「・・・あれ?」

福添はそれに対して鈍い痛みが全身に行き届くのを感じると同時に・・・足元から崩れる様に倒れるとシエスタが走り去った後を見て・・・

こう思っていた。

——ああ・・・生きろか・・・ヒューマギアにそんなこと言う日が来るとはな。
——是之介社長・・・貴方が描いた夢は貴方のお孫さんが・・・いや・・・

或人社長が絶対に実現させてくれます・・・だから・・・

．．．貴方の下に逝つても．．．良いですよね？

――――ああ．．．よく頑張つたな．．．福添君。

――!!．．．是之介社長．．．出迎えてくれるなんて．．．
貴方の下にいて．．．幸せでした。

その心の声を最後に．．．福添副社長は笑顔でその一生に幕を下ろした。

そして飛電製作所

ガタン！

その音と共に社訓が入った額縁が落ちた。

「あれ？何で落ちたんだ・・・？」

その額縁が罅割れているのを見て或人は何も知らずに・・・
碎けて堕ちているガラスを拾い集めた。

まるで命を・・・散って逝った魂を集めるかのように。

38—1

「もう直ぐだな。」

キンジはそう言つて曇天模様の空の下山道を登つていた。

昨日。

「え？雪音クリスについて調べたい？」

「ああ、恐らくだが奴は何処かに拠点を構えていると思うんだ。其れも

あの街にいたと考えたら聞きたいことがあるんだ、あの時言つたあの言葉
『バラバラになつた人の心を一つにして世界が平和になるつて

アンタ言つてたじゃねえかよ!』つてあの言葉が気になつてな。

暫くの間休暇を申請したいのだが。」

「良いよ別に〜、それに気になるつて言うなら出張つて事で

出張費出すからさ。気のすむ迄調べてよ。」

「ありがとうございます社長！」

そう言つてキンジは出張として例の街に山道で歩いて向かつている中で雨の様相だったことから合羽を纏つて歩いているとある所に目を向けた。それは城の様に巨大な洋館が佇んでありキンジは少し怪しさを感じながらも街に降つて行つた。

そして裏から街に入るが辺りにいるのは・・・レイドライバーを所持した

黒服の男たちがそこら辺を闊歩していたのでキンジは身動き取れずにいた。

「くそ、警戒が厳しいな。やっぱノイズが横行しているからだろうな、裏町から出さずらいナ。」

キンジはそう呟きながら何とかして雪音クリスの居場所を突き止めようと辺りを散策しようとしていると・・・足音が聞こえた。

「誰だ!」

キンジはそう言いながらベレッタを構えると少しずつ輪郭がはつきりとしてきた。

銀色のおさげにした髪。

小柄なくせにグラマラスな体型

黒いインナーに両手に所持してある大型のボーガンみたいな兵装

「雪音クリスか。」

「お前はあの時の！……」

雪音クリスがそう言った瞬間に……倒れてしまった。

「おい大丈夫か！」

キンジは彼女に駆け寄ると荒い息遣いから病気なのかと思っているとインナーが消えて紅いドレスみたいな形状をしたかぼちやズボンを着ていた。

「変身が解けたのか、……誰か来る！」

キンジはそう言つて雪音クリスに合羽を着させて隠すと自身は制服を傘代わりにおぶつて走つて路地裏の奥にへと駆け込んでいった。

だがここである失念にキンジはおぶっている最中に気づいてしまったのだ。雪音クリスの体系が色々と凄い事から胸がむにゆりと形を変えてキンジに襲い掛かったのだ。

「(ええい何も考えるな俺！今は緊急事態でこれは人道的行為だから大丈夫だ！)」

そう思いながら雨の中走って暫くすると黒服の男達の姿が無い事を確認して外に出てどこか雨宿りできるところがないかと・・・お好み焼き屋に目を付けたのだ。

キンジは辺りに人がいない事を確認して中に入った。

「済まないがここに居て良いか？雨が酷くて、それと布団を貸してくれないか!?!こいつが様子がおかしくて!!」

そう言う台所から妙齢の女性が現れるとキンジに向けてこう言った。

「はいいらっしやいってあら大変！熱もあるじゃないこの子!?!」

びしょ濡れだから服とかはアタシの服って先ずは布団出さなきゃ!!」
そう言っていると・・・店に誰かが入って来た。

「おばちゃんこんにちは、友達連れて来たヨって・・・もしかして
取り込み中だった?」

そう言ったのは・・・小日向 未来であった。

「ああ未来ちゃんごめんねお友達連れて来たのに今ちよつと取り込み中で
この子に着替えとか準備しないといけないんだよろしく!!」

そう言いながらキンジの合羽の中で荒い息遣いをしている雪音クリスを見て
未来がこう言った。

「叔母さん私も手伝います!多い方が良いでしょう!!」

「ああじゃあお願いしようかしら?着替えを一着用意してくれないかい?」

「うん分かった!」

「俺も手伝うぞ!何すれば良!」

「それじゃあお布団を準備してくれない!皆は雑炊とか作ってくれると
ありがたいけどいい叔母さん!!」

「構わないよ!食材を好きだけ使って!!」

そう言うのと全員がそれぞれ準備を始めた。

そして数分後。

「ふう、何とか終わったな。」

「ありがとうございますと貴方は？」

未来がそう聞くと貰ったタオルで頭を拭きながらキンジは自己紹介を始めた。

「ああ、俺の名前は遠山 キンジだ。君達は？」

「私は小日向 未来、この近くにあるリディアン音楽女学校の一年生です。」

そう言うと初めは長身の少女がこう名乗った。

「私『安藤 創世』！ええとちよつと聞きたいけどキンジ君って幾つ？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「俺は17歳だ、まあ歳は変わらないからためが良いぞ。」

「でしたら次は私です、『寺島 詩織』と申します。宜しく願います。」

キンジさん。」

「オオこつちこそな。」

そう言うおつとりしてそうな少女も紹介を聞くと最後に小柄で

ツインテールの少女がこう名乗った。

「ハイハイハイ！初めまして私『板場 弓美』!!アニメ大好きな16歳

宜しくねえ!!」

「お・・・オオこつちこそな。」

そう言う元気な子だなと思いつつながらキンジは辺りを見渡していると

未来がこう聞いた。

「あのう聞いて良いでしょうか？」

「?」

「彼女なんですけど着替えた時にその・・・」

「・・・叔母さんの話だと虐待されたんじゃないかって言っているんですよ、
痣とか傷が多いって。」

「・・・何?」

キンジはそれを聞いて少し目つきを鋭くさせた。

38—②

「虐待……どんな傷だったかって聞いてないか？」

「ううん……けど叔母さんの話だと酷い奴だつて聞いたよ。」

キンジは未来に向けてそう聞いてその答えにもしかして思つていた。

「(情報によりやあ雪音クリスは6歳から14歳までバルベルデの

テログループに捕虜生活をされていたつて書いていたがその時のか?)

いや、それだつたら傷跡はあつても痣は可笑しい。一体どんだけの酷さだつたんだ糞が!」

キンジはそう思いながら内心下唇を噛みしめていると……叔母さんが現れてこう言つた。

「ああちよつとお兄さん、ちよつと良いかい？」

「?」

「悪いんだけど上に来てくれないかね? ご飯をに運びたいんだけど
アタシ店番しなきゃいけないからね。」

「ああ分かつた、運ぶよ。」

「悪いね、それとだけでもうちよつと待つてくれるかい？」

そう言うのと叔母さんは鉄板の上でお好み焼きを焼いてそれをキンジに手渡すところ言つた。

「それやるから一緒に食べてくれないかねえ？一人だとあの子出ていきそうでねえ。」

「分かつた、監視も兼ねてつて事かつて良いのか俺で？」

「うん？アタシはこれ迄色んな人間を見てきたからねえ、アンタは信頼できるつて分かるからね。」

お願いねと言うとキンジはそれを持って上に上がろうとすると・・・

未来達もこう言つた。

「私達も一緒に良いかな？流石に異性同士つて何だかね。」

「ああ頼む、話し方が分からねえ。」

キンジはそう言うのと全員で上に上がるとキンジは襖に手を掛けてこう言つた。

「おい良いか？入るぞ。」

そう言つてしれつと開けるとそこで目にしたのは・・・布団の上で裸になっていた雪音クリスであつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンジはそれを見て（。 ㇿ。）ポカーンとしていると・・・

「何見てんだこのクソ変態野郎がー!!」

「ウオヴァ!？」

赤面した雪音クリスが枕を持ってキンジの顔に命中させた。

「すまん、まさか起きているとは思ってなくてつい。」

「手前普通はノックぐらいしろよ……!!」

「……最近別個だったから忘れてたぜ。」

そう言つてキンジはレスティア達を思い出していた。

「(あいつら俺がいらないからつて心配しているだろうなもう数週間はこちらだし速く帰れる方法見つけないとな。)」

はああとため息交じりでそう思っている中で創世がこう言つた。

「まあこうやつて謝ってるんだからさ、落ち着いてご飯食べよう。」

アハハと笑いながらキンジは雪音クリスの器に雑炊を入れて手渡すと

雪音クリスは分捕るように取つて……匂いを確かめてからがつ付き始めた。

「凄い食欲。」

「よっぽどお腹減つてたんだよきつと。」

「それにしても見た感じスタイル良くて……何だか自信喪失しそうです。」

「確かにねえ、アニメだとああいう子つて主人公に惚れたりするんだよね♪」

創世、詩織、弓美がそう言いながらお好み焼きを食べているとキンジは

雪音クリスの顔を見て・・・ため息交じりにティッシュを数枚出してこう言った。

「おい、顔に飯粒ついているぞ。」

「ああそれが何だつて・・・おいやめろ拭うな!」

「お前俺と同じ年でそれはねえぞ。」

そう言いながらキンジは雪音クリスに向けて質問した。

「お前何であんなところにいたんだ? フィーネつて奴の所に

いたんじゃねえのか?」

「・・・・・・・・」

雪音クリスはその質問に対して無口になるとキンジはこう続けた。

「幸音クリス、年齢は17歳で両親はバルベルデでテロにあつて死亡。」

その後はテロリストに拉致されて約8年間捕虜になっていたで合っているか?」

「お前・・・何でそれを!?!」

雪音クリスはそれを聞いて驚くと未来達もそれを聞いてえっと思つている中で

未来はそう言えばと言つてこう言った。

「あのコンサートの日に新聞で保護された子供が行方不明つて

聞いていたけど・・・それがクリスさん・・・!!」

そう言ううと雪音クリスは・・・自嘲気味にこう答えた。

「ああ・・・そうだよ。アタシはずっと・・・あいつらに酷い目に遭つてきた！痛いヤメテって言つても聞いて貰えず逆らえば殴つてきたりアタシを

まるで売春婦の様な目つきで舐めずさりやがつてああいう奴らが世界を可笑しくさせるんだ!! 大人何てそんなもんさ！良い事言つておきながら腹の中じゃあ弱い子供を食い物にしやがる!! アタシは一人だつて

生きてやるんだ!! 泥水啜つてでも生き延びてパパとママがやろうとしていた『歌で世界を平和にする』なんて甘つちよろい夢を全否定してそして」

言い終える前にキンジが制服の上着を脱いで雪音クリスを覆い隠す様に被せて口を手で塞ぐとキンジは雪音クリスに向けてこう言つた。

「ムグぐぐぐつぐぐ！」

「静かにしろ・・・人が来てる。」

「!」

雪音クリスはそれを聞いて黙ると未来達にもそれを伝えて黙っているとキンジは襖に耳を添えて声を聴いていた。

「……だから言っているじゃないかい？ここにはそんな女の子来てないって。」
「……そうですね、何かありましたら我々に御連絡を。」

「そう言う声が聞こえて扉を閉める音が聞こえるとキンジは音を出さずに下に降りるとおばちゃんを見て辺りを見渡していた。」

するとおばちゃんはキンジを見てこう言った。

「あらあんたじゃないかい？あの子具合どうだった？」

「ああ、少し濡れてたけど何も問題は……!!」

キンジは植え込みの中にある黒光りするものを見ておばちゃんに向けて

静かにするようにとサインをするとおばちゃんは口を閉ざしたので良しと思って

キンジは……ガンケースからベレッタを抜いてマガジンを抜き取り弾丸を一発取り出すと中にある火薬を出して黒光りする……小さな機械を

弾丸の中に入れておぼちゃんに向けてこう言った。

「悪いけどセロテープあるか？こいつを密閉したいんだ。」

「あああるよ。」

そう言つて取り出すとキンジはセロテープで弾丸を巻いてこう言った。

「これで雪音クリスがいるつて情報は出ねえな。」

「も……もしかしてそれつて……盗聴機かい？」

「正解だ、多分だが手あたり次第やつてるだろうな。」

「ちー最近のあのレイドライザーだか何だか知らないけど威張り腐っている

奴らがいるから商売上がったりだよ本当に！」

そう言いながら作業をしているおぼちゃんを見て上に上がろうとすると

雪音クリスがTシャツ一枚で上着だけで着ているのを見て……びっくりして

キンジは雪音クリスから目を逸らす感じでこう聞いた。

「な……ナンダ一体？」

そう聞くと雪音クリスは……こう聞いた。

「お前が持っている拳銃・・・本物だろ？」

38—3

「お前が持つている拳銃・・・本物だろ？」

幸音クリスはキンジの制服の裏側にあるガンケースをみてそう聞くとキンジは・・・暫くしてこう答えた。

「もしこれが本当だとしたら・・・お前どうするんだ？」

そう聞いて何時でも変身出来るようにポケットにあるプログライズキーを取ろうと構えていると雪音クリスはこう聞いた。

「何でそんなもん持つてんだ？政府の人間か？」

そう聞いてこちらも恐らく持つていたのだろう首に付けていた宝石を

握っている・・・キンジはため息つきながらこう答えた。

「俺は飛電製作所の警備員でな、Z A I A相手にしなきゃいけねえから武器は必須なんだよ。それにしても良くこいつが本物だつて分かったなって・・・

そういやお前バルベルデだからそういうの見てきたんだよな。」

「ああ、そういうのは死ぬほど見てきた。・・・だから嫌いなんだ・・・!!」

雪音クリスはまるで親の仇を見るかのように拳銃がある方向に目を向けると

こう続けた。

「大人はそれを持っていてるだけで威張り腐って逆らうなら突き付けたり最悪足や腕に打ち込んだり鴨打とか言つて楽しむ奴らばかりだ！」

そんなもんがあるから腐つた大人たちが増えちまうんだ!!

だから私は！私は!!・・・歌なんかで世界を平和に出来るなんて甘つちよろい考えを持っていてるパパやママを否定する為にノイズ」

「それ以上言うと感じつかれるぞ。」

キンジはそう言つて階段の壁に手を当てて幸音クリスの口元を塞いで

そう言うところ続けた。

「それにだ、そんな悲しいこと言うんじゃねえよ。父親や母親はお前に対して

そう言つたのはな、夢を諦めないで欲しいって言う願いが込められているんだと俺はそう思うぜ・・・親の顔や言葉を覚えてるなんて幸せの事だと思ふぜ？」

「・・・お前、親は？」

「父親は俺が幼い時にまあ幾つか覚えてるが殆ど覚えてねえし仕事で

死んじまつてな、母親にいたつちやあ覚えてもねえ、俺が物心つく前に死んじまつて親代わりだったのは3歳上の兄さんだけだったし後は爺ちゃんと

婆ちゃん位だったな。」

「・・・そうかよ、け。手前には家族がいるからまだマシかもしれないねえが
アタシには誰も」

「その兄さんも・・・ある仕事で死んでしまつて肉親と呼ばれるような存在は

爺ちゃんだけになつちまつたがお前の所は如何なんだ？祖父母位いただらう？」

キンジはそう聞くが雪音クリスは・・・こう返した。

「・・・どつちもだけどアタシのパパとママが死んで暫くして

おつちんじまつたつて政府から聞いた。」

「・・・そうか。」

キンジは本当の意味で天涯孤独なんだなとそう思つていと雪音クリスは

こう聞いた。

「お前んところは爺共は何処に住んでんだよ？」

「巢鴨だ、年寄りが多い場所でもあそれなりに治安がいいところだな。」

そう言うくとキンジは雪音クリスに向けてこう聞いた。

「お前友達は？」

「・・・そんなのいねえよ。」

「そうか・・・俺はさ・・・昔兄さんがある仕事で豪華客船に

乗つていたんだけど兄さんはその時に沈む船からそんな時乗つていたお客さんや

乗務員全員を避難させたんだ。」

「へえ……どうせお礼とか言われたんだろ？綺麗ごととかよ。」

「いや……その逆だ、そんな時爆弾が仕掛けられていたんだけど兄さんに対してネットとかでこう書かれていたんだ『もつとちゃんできていたん

じゃねえのかよ！』とか『役立たず』とかそれも助けた人たちからも言われて……助けた拳句に死んだ兄さんに対しての仕打ちが酷くてな……マスコミからのパッシングとかで当時住んでいた寮に迄来ていて精神的に参っていたんだ。」

「……け、手前ら助かっただけで良しとか思えねえのかよ？あゝあ、やっぱ人間はバラルの呪詛をぶっ壊して」

「けどそんな俺を救ってくれたのが……仲間だったんだ。」

「はあ？」

「飛鳥、雪泉姉、焰、夜桜、華毘、紫、武藤、不知火、レスティアそれに俺の事を本当の孫の様に思ってくれる人たちからのサポートもあって

俺は自分を持ち直す事が出来たんだ。」

「だから何だっけ言うんだ！アタシはたとえ一人だろうと」

「人間は一人で出来る事なんてたかが知れている、だからこそ人なんだ。『人』って言うのはな感じにすると互いに支え合っているんだ、お前だっけ

バルベルデで一人で生きていたって訳じゃねえと思うぞ?」

「・・・どう言う意味だ」

「其れはお前が見つける、お前自身で見つけないや話にならねえからな。さっさと部屋に戻ろうぜ、飯の続きだ。」

そう言つてキンジは雪音クリスと共に部屋に戻つて行つた。

そして食事を終わらせると未来はキンジに向けてこう言つた。

「それじゃあええと・・・クリスちゃんが良いかな?」

「あ?別にいいけど」

「それじゃあ体吹くからちよつと裸になってくれないかな？ キンジさんも
「未来、キンジサンならもう聞いた瞬間に出ていったよ？」

創世がドアの前でそう言うのと未来はアハハと言つて其の儘幸音クリスを
吹き始めた。」

「ねえ・・・話聞いてくれる？」

「あ？ 何だよ?？」

幸音クリスは未来に向けて何だと聞くと未来はこう言つた。

「私ね・・・親友がいたんだ、その人は大切な友達んだけどその・・・遠くに行つちやつ
てね。」

「・・・死んだのか？」

「ううん・・・死んでいないし私も最近生きてるつて分かつて

ホツとしたんだけど・・・会いに行くのが怖いんだ。」

「怖い?。」

「うん・・・あの時私友達を守れなかった・・・人間があそこ迄酷いって分かって怖くって・・・それに私の事恨んでるんじゃないかって足がすくんで行けないの。」

「どんな奴なんだその友達って・・・。」

「私の大切な友達・・・かけがえのない親友・・・」

・・・立花響って名前で・・・今はデイスペアって組織で『凶』って

名乗ってるの。」

38—4

「(『凶』だと!?!あの子は凶の知り合いか何かか!?)」
キンジは未来の言葉を聞いてどういふ関係なんだと思つている中で未来は
こう続けた。

「響はね、優しくて親切で元気が良くて誰よりも真つすぐだったの・・・
けどあの事件から行方不明になつて・・・そして2年したら
今響は人を傷つける立場になつちやつたの・・・私・・・どうすれば良いのか
分からなくなつちやつて・・・あれ?可笑しいな、涙が止まらないよ・・・
止まらないよ・・・。」

そう言いながら未来は涙を流しているのを見て創世達はただ黙って見ている事しか出来なかったが未来はこう続けた。

「私……響が酷い目に遭っていた時何も出来なかった……自分の保身を
考えて……こんな友達だつて胸張つてさ……言えないよ……!!」

そう言つて等々涙を流し始める未来だが幸音クリスはこう返した。

「そんなもんだろう人間はさ、結局自分が好きなんだ。そうしなきゃ
生き残れねえんだ、……アタシは何時だつて一人で生きてきた……これからも」
そう言っている……扉の向こうにいるキンジがこう返した。

「そいつは違うぜ。」

「あ?」

幸音クリスはガン決まった様な顔つきをするとキンジはこう続けた。

「人は一人じゃ生きていけねえんだ、階段でも話したかな。」

その子を守れなかったつて言う想いから何とかしたいと思つている、
そして何よりも……自分が後悔していることと其の原因を認識しているからこそ未
来さんに聞きたいんだ。」

「ハイ……。」

「君はもし凶に会つた時どうするんだ? 止めるのか、それとも放置するのかがどう

する?。」

「どうするって言われても・・・私・・・力ないし・・・それに・・・

レイドライザーも持ってないし私・・・戦う事とかそういうのが苦手で」

「だがどんな理由があつたとしても前を向かなきゃいけないんだ、

君自身の為にもな。」

そう言つてキンジは黙るが未来はどうしたら良いんだと思つてしていると・・・

幸音クリスはこう言つた。

「簡単だよ、そいつをぶつ飛ばせばいいんだ。それであとくされないだろう?」

そう言つて全員えくくと思つている中でキンジはククク?と笑いながら

こう思つていた。

「(全くだな、簡単で確かだな其れは。)

そう思いながら暫くしていると・・・サイレンが鳴り響いた。

「何だ?!」

キンジは何だと思つてしていると・・・おばちゃんがキンジに向かつてこう言つた。

「アンタ! 未来ちゃんたちを呼んできてくれないかい!! ノイズ警報だよ!」

「ノイズだと!!」

キンジはそう言つて扉を開けると既に着替えが済んだ幸音クリス達に向けて

こう言った。

「ノイズだ！直ぐに避難しろ!!」

そう言うのと幸音クリスはすぐ様にキンジの横を横切つて下に向かった。すると幸音クリスは未来達に向けてこう言った。

「アイツらはあつちか・・・アイツらの狙いはアタシだ!」

「と、ちよつと待つて!クリスちゃん!!」

未来がそう言うて幸音クリスを止めようとするのとキンジは全員に向けてこう言った。

「俺があの子を連れ戻すからお前らは避難して口!!」

「あ、待つて下さいキンジさん!」

そう言うがキンジも向こうに行つてしまった。

「くそ．．くそ．．．クソ！フイーネー！！」

幸音クリスは街の惨状と銃声の音からバルベルデでの光景を思い出しながら走っている．．．何かを踏んだような感触を感じて足元を見ると

そこで目にしたのは．．汚れた猫のぬいぐるみが転がっていたのだ。

それを拾うと幸音クリスは．．涙を流しながらこう言った。

「アタシが．．アタシがここに居るだけで．．畜生ー！！」

そう言いながら空に向けて叫び声をあげると．．ノイズがわらわらと現れて来たのだ。

それを見た幸音クリスはノイズに向けてこう言った。

「良いぜ来いよ．．アタシはここだー！！」

そう言って．．歌を奏でた。

「Killter Ichai val．．ゲホゲホ！！」

途中で咳き込み始めたが無理はない、何せ雨の中で戦っていたがために体調がまだ戻っていないかったのだ。

そしてノイズが攻撃を初めて・・・上空から航空型ノイズがドリルになって
幸音クリスを貫かん勢いで攻撃しようとしていた。

「しま」

雪音クリスはそれを見てもう駄目だと思っていると航空型ノイズが・・・
どつかからの攻撃で倒されたのだ。

「一体何が。」

起きたんだと言いかけてそれを見つけたのだ。

その正体が・・・これ。

「雪音ー！！」

キンジがウルフブレイカー（ライトニング装填済み）でノイズを倒しながら

幸音クリス目掛けて走って来たのだ。

「お前！何でここに!!」

「ああ!?!お前を追っていたらノイズがこっちに来ていすることに

気づいたからな!!途中まで乗り捨てられてたチャリでここまで走って

来たんだ!!」

「そうじゃねえよ!こいつらの狙いはアタシだ!!だから」

「馬鹿かお前は!今までどうだったかは知らねえしお前の罪は消えねえ!!

けどな・・・お前はそれに罪悪感を感じている!!そしてここに居る人たちを

守りたいって思うんなら・・・背中位は守ってやっても良いぜ。」

そう言うのと幸音クリスはけつと言ってこう続けた。

「そうかよ・・・途中でやられてもアタシは助けねえぞ!!」

「は!その言葉万倍で返してやらあ!!」

キンジと雪音クリスは互いに背中合わせでそう言うのと雪音クリスクリスは・・・

再度歌を奏でた。

K
i
l
l
t
e
r

I
c
h
a
i
v
a
l
t
r
o
n
l
l

38—5

シンフォギアを身に纏った雪音クリスはボウガンを両手に持って構えると歌を奏でた。

BGM 魔弓 イチイバル

「この歌はあの時の！」

その歌を聞いたキンジは尚もノイズに対して攻撃する中で雪音クリスは連発しながらノイズを叩き始めた。

炭化していくノイズ達を横目にしてキンジは攻撃を再開しつつ雪音クリスを援護していた。

ミサイルや銃声が鳴り響く中でキンジと雪音クリスは互いにノイズを街から離すように移動する中で・・・悲鳴が聞こえた。

「キャアアアアアアア!!」

「今の悲鳴は!？」

「あの女のだ!!」

雪音クリスは未来の悲鳴だと確信して少し遠かったが廃屋のビルに向かうと

そこで目にしたのは・・・イソギンチャクみたいなノイズが未来達目掛けて襲い掛かる一歩手前の所をキンジはウルフブレイカーを仕舞って苦無ガンを使って近接戦で触手を斬り捨ててから攻撃して消し去った。

「おめえら大丈夫か!？」

雪音クリスがそう聞くと詩織がこう答えた。

「わ・・・私達は大丈夫なんですが叔母様が。」

そう言ってお好み焼きのおばちゃんに目を向けると恐らく守ろうとして

怪我したのだろう、傷だらけであった。

そしてキンジは4人に向けてこう言った。

「俺がおばちゃんを背負うから雪音!お前は後方から追ってくる奴らを頼む!!」

俺が先行してこいつらを避難所まで連れて行く!!」

「はあ!何でアタシがお前の命令を聞かないや」

「今は緊急事態だぞ!ずべこべ言う前にやる事やるぞ!!」

キンジは大声でそう言うのと雪音クリスはそれを聞いてびくりとしてこう答えた。

「わ・・・分かったよ!やりやあイインだろやりや!!」

そう答えてキンジはおばちゃんを背負うと未来に向けてこう聞いた。

「ここから近い避難所はどっちだ!」

「あ、はい！ここから近いのは・・・川の近くに橋があります!!」

その橋げたの下に避難用シエルターの通用口があります!!」

「よし・・・ココから遠いがお前ら大丈夫か?」

キンジは3人に向けてそう聞くと創世達は頷いて答えるとキンジ達は走ってビルの裏側から出ていくと他にもノイズが現れたのだ。

「クソが!・・・ファイネの奴アタシだけじゃなくて関係ない奴ら迄!!」

「悔しがるなら・・・やる事やるぞ雪音!!」

「命令すんじゃねえ!!」

雪音クリスはキンジに向けてそう言いながらノイズ目掛けてミサイルを撃ちまくって数を減らしているとキンジは車を見つけてこう言った。

「車で行くぞ!ここからどの位の距離だ!!」

「ええと・・・ココから確か・・・20分くらいで着きます走って!」

「車なら10分足らずって所か・・・良し行くぞ!」

キンジはそう言つて車に乗るが未来がこう聞いた。

「ああでもコレツテ鍵挿してない」

「鍵が無けりゃあ・・・こうすりゃあいい!!」

そう言つて内部の配線を出してエンジンを無理やり起こして・・・起動した。

「すごーい！アニメって言うよりもアクション映画みたい!!」

弓美はキンジのやり方を見てそう言うとエンジンが動き出して雪音クリスに向けてこう言った。

「乗れ雪音！」

キンジの言葉を聞いて雪音クリスは屋根に乗り移るとキンジは車を動かした。

「バイクしか動かしたことないし車なんて久しぶりだから・・・舌噛むなよ！」
キンジは全員に向けてそう言うと車は・・・猛スピードで突っ走った。

「雪音！ノイズはドウダ?!」

「ああ！見た感じ・・・後16体だ!!」

「よし・・・すっかり捕まってる!!」

キンジがそう言った瞬間に車は・・・山の道なき道に入って暫くすると・・・前が開けた。

そう・・・飛び落ちていた。

「「「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」」」

落ちていく感覚に未来達は悲鳴を上げるがキンジは・・・ドリフトするかのようになりると其の儘橋に向かって行った。

「「「か!?!」」」

「はい・・・開くと良いけど。」

未来がそう呟いて扉に手を掛けると・・・扉が開いたのだ。

「う・・・アタシは?」

「叔母ちゃん大丈夫?!」

「ああ未来ちゃん・・・アタシどうしてここに?」

「クリスちゃんかが助けてくれたんだよ!!」

そう言うのと車の上にいる雪音クリスに向けてこう言った。

「ありがとうねクリスちゃん！今度お好み焼き奢るよ!!」

そう言いながら未来達と共にシエルターに入るのを確認すると・・・
ノイズが複数現れたのだ。

「ちーまだ来やがる!!」

「ここで食い止めるぞ!!」

「ちよろくせえ!!」

雪音クリスはそう言いながらキンジと共にノイズを蹴散らしにかかった。

そしてノイズが全部片付くと雪音クリスはこう言った。

「おい・・・何でお前あの時アタシを守るんだ？利益なんてネエゾ。」

そう聞くとキンジはこう返した。

「ああ、簡単だろ?・・・人を助けるのに理由なんていらねえだろ?」

「は! いい子ちゃんぶりやがって!!」

そう言うのと雪音クリスはそう言っただけで去ろうとするとキンジはこう聞いた。

「お前行き場所はあるのか?」

そう聞くと雪音クリスはこう答えた。

「まずはフィーネに聞いたです、それからの事はそれからだ。」

そう言っただけで立ち去ろうとするとキンジはこう言った。

「だったら俺もいくぜ?」

「はあ! 何言ってるんだ!! フィーネは只もんじゃねえぞ!!」

「其れでも行かなきゃいけないだろうが・・・お前を置いて行くと寝ざめが

悪いしな。」

そう言うのと雪音クリスはキンジに向けてこう言った。

「死んでも後悔するなよ？」

「上等。」

そう言つて互いにフィーネのいる場所に向かつて行つた。
湖の湖畔にある館に向かつて。

38—6

そんなキンジが大変な時に或人はと言うと……病院の前にいた。ベルの運転で何故病院にいるのかというと……これが理由である。

「ああ来た来た、翼ちゃんこっちくく!!」

「ええと……貴方が飛電 或人さんでしょうか？」

「そ、俺が飛電 或人。或人で良いからさき乗って乗って!!」

風鳴翼を迎えに来たのだ、病院に送った後リハビリを経て翼が退院する事になったのだが……もう一人出ようとする人を見かけたのであれと言ってその退院してくる人間に向けてこう言った。

「エエエエ！刃さん未だ入院しておかなきや駄目なんじゃないの!？」

「……ああ、体を動かすくらいなら大丈夫だ……しかし今はアークに備えなければいかなからな……寝ていられん。」

ああそれと云つて或人に向けて荷物からある物を取りだした。それは・・・これだ。

「あれ『バタフライ』じゃん！ああ、不破さんから聞いてたけど持つてくれたんだ。」

「ああ、そいつのおかげで楽になったからな・・・それは売れるから結構いいぞ。」

それじゃあと云うと或人が刃を止めてこう聞いた。

「ええとさ刃さん・・・何処か頼れる場所つてあるの？」
そう聞くと刃は首を横に振つてこう答えた。

「いや・・・先ずはネットカフェで情報収集してそれからどこか廃墟か・・・誰も住んでいない空き家に住むことは検討している」

「だったらウチに来なよ！俺んとこだったら部屋なんて一杯あるしそれにさ・・・顔なじみの人がこうだったら助けない訳にはいかないでしょ!!」

そう言いながら或人は刃を車に乗せていくと刃は翼を見てこう言った。

「確か・・・風鳴翼だったか？」

「ああはい、私が風鳴翼だが？」

「そうか、部下の中に貴様の歌を聞いている奴らがいてな。其れで

分かったのだが何故ここに居る？」

「ああはい、私は父がここに移れと……彼らに頼んでくれたらしく。」

「そうか……暫くは休んでおけ、体を休むことも仕事に大切な事だ。」

「ああ……ハイ。」

それを聞いて翼は自身に対してそう言ってくれる人間は初めてであったのだ。

周りの大人と言えば叔父と子供の頃から一緒にいた幼馴染みだな

マネージャー、そして自身をシンフォギア奏者として……自分達が戦えない事に負

い目を感じている大人たちとアイドルとしての自分しか見ていない

学校の人達ばかりで正直な話……刃みたいに事務的とはいえ

一定の距離でありながらもそう言ってくれる大人の存在こそが翼にとって

必要な物なのだ。

無論本人はそれには気づかないまでも寧ろそれを聞いて

気が楽になったかのような感じになってホッとしていると……

刃の荷物の中にある通信機から音声が届いた。

『アークを確認！場所は工場!!全部隊出撃せよ!!!』

『!!』

それを聞いて或人は一番後ろにいるイズに向けてこう言った。

「イズ！俺はあっちに行くから翼ちゃん達をお願い！」

「承知いたしました或人社長。」

イズがそう答えると或人はスマフォをバイクに変形させてアークのいる場所に向かつて行った。

だがそれを聞いて・・・刃はこう呟いた。

「アークが・・・そこにいる。」

そして工場では既にレイドライザー部隊が戦闘をしているのだがアークはそれすらも眼中にない様子で其の儘レイドライザー部隊を・・・全滅させた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

悲鳴と共にレイドライザー部隊が吹き飛ばされるとアークは其の儘

彼らを殺そうとした瞬間に・・・或人がバイクに乗りながらアークに向かって体当たりすると向かい合い直してこう言った。

「アーク！これ以上はやらせないぞ!!」

そう言つて或人は変身して・・・攻撃を始めた。

そしてその数分前。

「どちらに向かう気ですか刃様？」

イズが車から出ようとする刃に向けてそう聞くと刃はこう答えた。

「アークを止めなければいけない・・・私がやらかしたことは

私が責任をとらなければならないからな。」

「駄目ですわ？ 貴方は未だ体が本調子ではありません、そんな中で貴方を

向かわすことは私も反対ですよ？」

ベルも運転席からそう言うがそれでも刃はこう返した。

「私は！・・・それでもやらなければならぬのだ・・・!!」

そう言いながら拳を握っていると・・・翼がこう言った。

「ならば私も共に戦おう、この身は防人。力なき者達を守るための力・・・

片割れの翼しか持たない私だが出来ることをしたいと言うのは同じこと、

ならばやる事は一つでしよう?」

そう言くと刃はこう言った。

「・・・子供氏そう言われるとはな、私もまだまだという訳だ。」

そう言くと翼も降りようとするので・・・イズがベルに向けてこう言った。

「ベル様、お車を或人様の向かった方向に。」

「宜しいので?」

「彼女達は何言っても止まらないでしょう、ならば我々がサポートに周り」

「それならよ・・・俺も混ぜろよ?」

そう言つて現れたのは・・・不破であつた。

「俺もアークには用があるんだ、俺がこいつらのサポートする！
それでドウダ？」

そう言うのと刃は不破に向けてこう言った。

「足手纏いになるなよ？」

「ハン！それはこっちの台詞だ!!」

そう言っ互いに・・・工場に向かって行った。

「ハアア！」

或人はデュランダルで攻撃するがそれをアークは時には躲して時には腕で軌道を逸らしながら応戦していた。

何故今まで受けていたのにも関わらずに今回は防御しているのだと或人はそう思っているとアークは巨大なエネルギー体を形成してそれを或人目掛けて放った。

「!!」

或人はそれをデュランダルでガードして何とか凌ぐと……アークは或人に向けてこう言った。

『これで駄目というのならば……これならどうだ?』

そう言つて片目が赤く光つた瞬間に……一体何しているんだと思つて或人が身構えていると……工場の影から何かが飛び出してきた。

「何だ……人?!」

或人は現れた存在……人間を見て何でと思つているとその人間は……

或人目掛けて走り出したのだ。

「うわ！何だ一体!？」

或人は驚きながら飛び出してきた男性を払いのけようとする．．．
更に増えたのだ。

男も女も関係なくまるで．．．ゾンビみたいに纏わりつくので
何故かと思っていると．．．その原因が見て取れた。

全員の耳に．．．Z A I A スペックが付けられていたのだ。
すると或人はアークに向けてこう言った。

「アーク！お前この人たちを操っているのか!？」

『貴様は人相手には本気は出せない、そこを利用させている。』

「何でこんな事を!!」

『貴様を滅ぼすためだ。』

そう言ううとアークは両手を上に向けて大きく広げると．．．大型のエネルギー体が形
成され始めたのだ。

「まさかお前この人たち毎!？」

或人は慌てながら何とかしてライダモデルを出そうとするも人々が邪魔をして
或人はライダモデルを出すことが出来にくい状況となっていた。

そしてアークはその巨大なエネルギー体を放とうとする・・・手前で動きが止まった。

『・・・ナンダ?』

アークは何故と思つて周りを見てみると・・・自身の真後ろ・・・影となつている部分に刃が突き刺さつていたので。

一体どうしてと思つていると或人の周りにいる人目掛けて・・・不破、刃、ベルがその人だからからZ A I Aスペックを無理やりはいで洗脳状態を解かせると或人は不破達に向けてこう聞いた。

「不破さん！刃さんにベルちゃんも!?!」

「申し訳ありませんが社長・・・もう一人おられますわ。」

そう言うところから・・・シンフォギアを纏つた翼が現れたのだ。

「翼ちゃん！怪我しているのに何で!?!」

そう言う翼はこう答えた。

「生憎だがこの身は防人、人々を守るがためにこの刃を振ると覚悟決めているのに戦場向かわずは防人が廃る!!」

「俺の目的はZ A I Aをぶつ潰す事だ、その序にアークもぶつ潰す!」

「アークをこの世に出したのは私だ、責任を取るために今は一緒に戦わせて

雨の中、キンジとクリスはとある洋館近くに来ていた。

「ここか・・・まさかここが奴のアジトだったとはな。」

「ああそうだろ？ここは買った家らしいからな、今フィーネは多分

あの部屋って・・・囲まれてるな。」

「ああ・・・それも凄腕だな、精鋭ぞろいって所だ。」

キンジとクリスは互いにそう言っただけで森の中にいる・・・サングラスをかけた

兵士達を見ると兵士達がこう言った。

《ちい！邪魔者だ!!撃ち殺せ!!》

そう言った瞬間にマシンガンが雨霞と撃ち放たれるとキンジは・・・

クリスをお姫様抱っこして扉の柱に身を隠した。

「お前平気なのかよ!?!撃たれたんじゃ!!」

「何だ？心配してくれるのか？」

「そ・・・そうじゃねえって」

「この制服は防弾仕様でな、銃弾なんて衝撃は無理だが貫通はしないぜ。」

「おい、そろそろ中に入るぞ。」

キンジがそう言つて扉を蹴破ろうとした瞬間に……クリスは驚きながらこう言つた。

「おおおおお前何したんだよええ！撃つたと思つたらぎやぎやんつて音がしたと思つたらあいつら倒れてお前無傷つて一体何したんだよ?!」
そう聞くとキンジはしれツとこう答えた。

「何つて決まつてるだろ？銃弾を銃弾で弾いて当てたんだよ。」

「はあ！んなの出来るつてお前の眼は天体望遠鏡かよ?!」

「困みにだがこの技の名前は『ビリヤード』だ。」

「技名付いてるつて誰が出来るんだそんなの!!」

「少なくとも死んだ兄さんは出来ていた。」

「……お前の家族は全員バケモノかよ。」

そう言いながら中に入ると暫くして……大広間に入った。

ありとあらゆるところに機械が密集しておりその一番向こうにある大きな機械に……一人の女性がキーボードを叩いていた。
するとクリスはその女性に向けてこう言つた。

「来たぞフィーネー！」

そう言うとその女の全体像が明らかになった。

茶髪の髪を上に向けて大きく結えており眼鏡をかけて私服の上に白衣を身に纏った妙齡の女性がそこにいた。

すると女性はこう言った。

「あらくリスじゃないの？・・・用済みの人間がまだ生きているなんて哀れね。」

それを聞いてクリスはフィーネーに向けてこう言った。

「アンタに聞きてえ事があるんだ！アタシのやった事は何なんだ!!」

アタシはアンタが言っていた『戦争のない世界』を作れるって言ってたから

協力したのに一向によくならねえどころか悪くなるばかりじゃねえか!?

Z A I A 何て言う企業は兵器を作って街中に広めてこんなんで……こんなんで世界が平和になるのかよ!! 教えてくれよフィーネ!?

そう言うよフィーネは……大笑いしてこう言った。

「アハハハッハ! 馬鹿な子ね貴方は!! 貴方は私の計画が上手くいくまでの

只の囷、使わなくなつた道具は捨てておいて何が問題なのかしら?」

呆れちゃうわねとそう言うよとキンジはクリスの前に出てこう言った。

「手前……こいつがどう言う想いでアンタに付いて来たか分かつてんのか!

アンタを信じて自分の心を封じてまでやってきたのに用済みだからポイってか?

何様のつもりだよ手前は!!」

そう言うよと笑いながらこう続けた。

「(*?◇?) フフフツ♪、良い事教えてあげるわ坊や。世の中ね……

利用するかされるかなのよ!!」

そう言った瞬間にフィーネが光り輝いて暫くすると現れたのは……

金髪の美女であった。

黄金の鎧を身に纏っているその姿にキンジはどつかで見たことあるなと呟くと

フィーネはこう答えた。

「これは『ネフシユタンの鎧』、私がこれの本当の使い手ヨ!!」

そう言つて攻撃してくるとキンジとクリスはそれぞれ避けてキンジはバルカンに、クリスはシンフォギアを纏つて距離を離すと・・・
炎がファイネ目掛けて放たれた。

「これは・・・貴様か風鳴 弦十郎!」

そう言つて現れたのが・・・仮面ライダーになつている弦十郎であつた。
すると弦十郎はファイネに向けてこう言つた。

「もうここは囲まれているぞ、投降してもらどうぞファイネ・・・いや・・・」

・
・
・
・
・
シンフォギア製作者にして第二課研究員『櫻井 了子』!!」

「シンフォギア製作者にして第二課研究員『櫻井 了子』!!お前を拘束する!」
弦十郎はそう言うその後ろから大勢のレイドライザー部隊が現れて

マシンガンを持ってファイーンネを囲むと弦十郎はキンジとクリスに向けてこう言った。

「お前達も来てもらうぞ、我々と共にZ A I Aの繁栄の礎となつて貰う。」

「はん!御免被るぜ、手前らみたいな人形になり下がりがりたくねえからな!!」

キンジはそう言いながらファイーンネ目掛けてウルフブレイカーを構えているとクリスはファイーンネに向けてこう聞いた。

「櫻井・・・それが手前の本名・・・アタシを騙していやがったのか!」

始めつからアタシを奏者として実験動物としてしか見ていなかったのかよ!」

クリスは泣きそうな顔でそう言うファイーンネは笑いながらこう返した。

「そうよ、貴方は道具で私の実験動物だもの当たり前じゃない?それに私は確かに《櫻井》だけど・・・《ファイーンネ》でもあるのよ?」

「何?」

キンジは何だそれかと思っているとファイーンネはニヤリと笑つて・・・

杖を出した。

「そいつは!？」

キンジがそう言った瞬間に・・・50体ものノイズが現れた。

「攻撃開始!!」

弦十郎の言葉と同時にレイドライザー部隊が攻撃するとフィーネはこう言った。

「まだ完全になるためには時間が掛かるけど今は撤退ね。」

そう言ううち茨の鞭を展開して何処かに向かって攻撃した瞬間に・・・
爆発したのだ。

「何!爆弾!？」

キンジは崩れ始める天井を見て・・・クリスの方を見ると
キンジは棒立ちになっているクリスに向かって走り始めた。

「雪音—————!!」

そう言いながらしつと抱きしめるとウルフブレイカーで窓を破壊して其の儘の勢いで外にある湖に向かって飛び込んだ。

そして天井が崩れ切つて暫くすると・・・弦十郎が炎で瓦礫を破壊して現れたのだ。

「雪音クリスと奴は逃がしたか、ファイネもない・・・第一目標はファイネだ！櫻井を我々の裏切り者である！！絶対に逃すな!？」

『ハ!!』

それを聞いてレイドライザー部隊が全員走つて車に乗つて何処かにへと去つて行つた。

そして弦十郎はもう一度屋敷を見て・・・車に乗つて去つて行つた。

「よし、云つたな。」

キンジは洋館の崖の下にクリスと共に隠れていた。

そのクリスはキンジの胸元にいるのだが・・・何故であろうか
全く身動き一つしないのだ。

キンジはクリスに向けてどうしたんだと言うとクリスは・・・笑いながら
こう答えた。

「アハハ・・・アハハハッハ！結局アタシは何してたんだろうな、大人何て
信じてねえっと思つて・・・信じれる大人がいたと思つたらそれですら

アタシを裏切つて・・・アタシは・・・アタシは結局一人だったんだ！

今までずっと一人でこれからもずっと一人!!パパとママは歌で平和にするつて言っ
ておきながら結局は夢を語るだけですぐにくたばつちまつて

弱いだけの奴らだった?!大人何て嫌いだ！夢を見るだけで力がないくせに

紛争地帯に行つて何も出来ずに死んでアタシは・・・大人たちから殴られたり慰み者にされそうになったり・・・アタシは何なんだ・・・」

そう言いながらクリスはキンジに向けて顔を上げた。

泣きそうになつてゐるその顔に・・・目からこぼれそうになつてゐる湖の水か、それとも涙なのか分からないが今の彼女は解く憔悴しきつていた。

するとキンジは・・・黙つてクリスを抱きしめてこう返した。

「前に言つたよな、俺には家族が爺ちゃん達しかいねえつて。」

「ああ。」

「死んだ兄さんは母親を知らない俺を気にかけてまるで本当の母親の様に

俺を接してくれたんだ、笑えるだろ？あの人女装して母さんを再現させてよ。まあ写真と同じだったことに驚いたな。」

「・・・何が言いてえんだ。」

「お前一人だつて言つてたけど・・・本当に一人だったのか？」

「・・・当たり前だろう、ずっとあたしは」

「お前の他に同じ境遇の奴いたか？」

「・・・たくさんいた。」

「そいつらと何か話したか？」

「……忘れた。」

「そうか、俺は色んな人から助けられた。幼馴染にその爺さんたち、学校の仲間、そして……俺を見守ってくれた人に先生達。一癖何癖もあるけど良い奴らばかりだな、……お前がずっと一人だったって言うならさ……俺がお前を支えて良いか？」

「……何言つてんだ……アタシらは敵」

「確かにそうだけだよ……お前を見ていると放つて置けないって言うか……ちよつと前の俺を見ている感じがするんだよな、自分に力があつたら

守れたんじゃないかって言う……お前本当は親の事好きなんだろう？」

「!!はあ! 違えよ!! 誰があんな夢ばかり見た」

「確かにお前の親は夢を語っていたけどな……それを実現しよう」と

頑張っていたんじゃないかねえのか? そしてお前はそれを見ていた。戦場で

歌を嫌いなんで言いながら何でお前はシンフォギアを持っていてるんだ?」

キンジは胸の上にあるペンダントを見てそう聞くとクリスはそれはと言って

口籠るとキンジはこう続けた。

「そうだ、お前は本当は親が……歌が好きだつて心の中じゃあそう思っている只の天邪鬼だ。心を閉じて自分を偽つて……憎しみを全て自分に向けさせて

争いと共にこの世から消えようと思つている只の自殺願望者だ、そんな事は武偵として見過ごせねえよ。」

「武偵つて……お前何様だよ……!!」

クリスがそう言うときンジはこう返した。

「……只の武偵だ、『武偵憲章第一条

《仲間を信じ、仲間を助けよ》!」つてな。例えお前が一人になつたとしても俺がお前を一人に何てさせねえし絶対に死なせねえ、

俺が……お前を守る！……だからさ……よく頑張ったなクリス。」

「!!……!!!」

それを聞いてクリスは我慢の限界であったのであろう、等々泣き始めたのだ。

今まで泣けなかった分、そしてフィーネの下で泣けなかった分全力で

泣いていた。

それをキンジは何も言わずに抱きしめながら頭をなでる事しか出来なかった。

「……雨が止んだな。」

キンジはそう言つて太陽を眺めていた。

まるでクリスの心を溶かしていくかの様に。

そしてその夜。

キンジはバイクを止めていた場所でテントを張って服を乾かしていた。肌寒い中キンジは毛布に包まりながらインスタントコーヒーを

啜っている。・・・クリスが同じ様に毛布を全身で包まって出てきたのだ。

「お前何で出てきてんだよ!？」

「お前入れよ・・・ここお前のだろ。」

「いや良いって言うか出るんなら服着ろよな本当に!!」

キンジはそう言いながら下手したら見えるかもしれないと思って

そっぽ向きながらこう思っていた。

「(ああもう何で来てんだよって言うかこいつ背丈に反して

結構デカいって言うか何で飛鳥と同じくらいにあるんだつつうの

可笑しいだろうが!?)」

そう思いながらも仕方ない感じでコーヒーをもう一つ渡すとクリスはこう聞いた。

「・・・砂糖とか・・・ミルクとかねえのかよ?」

「生憎だがねえな、俺ブラック派だし。」

それを聞いてそうかよと言つて飲んで見るとクリスは……おえっと

言わんばかりの表情であつたがためにキンジは内心少し笑いながら火を見てるとクリスはこう言つた。

「カ・デインギル。」

「は?」

「フィーネが言つていたんだ、確かカ・デインギルつて言つてて

もう完成しているけど一つ問題があつてその障害を何とかすれば人々の言語を一つに纏めれるつて言つてた。」

「何だその存在つて?」

キンジは何だと聞くとクリスはこう答えた。

「確か……アアこう言つていたぜ、

『アーク』が何たらって。」

39—3

そして時は遡って或人達はというと・・・アーク相手に全員で戦っていた。

推奨BGM FLIGHT FEATHERS

翼と或人がアーク相手に攻撃するとアークは翼の攻撃に対してのデータが

無かったのでその剣戟に似通った武術データから回避行動を予測しようとすると・・・
シンフォギアの真骨頂を見せつけた。

逆羅刹

翼の攻撃を受け止めたアークに対して翼は受け止めた剣を軸として逆立ちになると
其の儘・・・脚部からブレードが出てきてアークに叩きつけた。

「はあー！」

行き成りの事でアークはすぐ様に下がると背後から或人の攻撃が命中して転がるが
立ち上がって攻撃しようとしてアタッシュユアローを展開すると今度は・・・

刃と不破が立ち向かった。

「はあー！」

「おらあー！」

横から攻撃してきたためアークが体勢を一時的に崩すと2人の連係プレーでアークを追い詰めていた。

刃の銃弾と不破の近接戦で追い込んで行くと更に横からベルが現れて大鎌で叩き飛ばした。

『ぬう・・・まさかお前たちの連携がこれほどとはな。』

アークがそう言うとき空中に10丁近くはある・・・ショットライザーが展開されるとそれらが一斉射撃するも或人と翼がそれらをライダモデルとエネルギー体の剣を展開して防御した。

千ノ落涙

それによつて全弾受け止められたのだ。

『ナニ!!』

それを見てアークが驚くと今度はプログライズキーを

ライトニングホーネットに入れ替えて飛行能力を使つて上から攻撃するのを予測してアークはアタッシュアローを上に向けた瞬間に不破がパワーモードで攻撃をした。

「俺を忘れんじやねえぞー!!」

そう言つて先ずはマンモスの力でアークの少し離れたところから

押し込むかのように弾き飛ばされると上空に上がったアークを刃がサンダープラス

トライトニングファイバーで上空から撃ちこむと不破が足を使ってアークを
鮫が獲物に噛みつくかのように挟み込んで其の儘駐車場から外に放り出すと
アークが転がり込みながら落ちると其の儘不破の腕がゴリラの様な腕となつて
アークの腹部に命中した。

ト ス ラ ブ ー ワ パ ジ イ ペ ン ラ

「おらああ!!」

ラ
ン
ペ
イ

ジパワーブラスト

そしてアークがよろめき始めているのを見て或人はアークに向けてこう言った。
「アーク、ここでお前を倒す!」

そう言うのと翼もベルと共に空高く舞った。

そしてその儘青と黒の斬撃がアークを襲った。

蒼ノ一閃

それをアークが受け止めると或人もデュランダルを空中で構えてこう言った。

「これで終わりだアーク!!」

そう言つて其の儘D・ライジングインパクトを叩きこむとデユランダルが一瞬だが青く輝いたと思いきや其の儘アークを包んで・・・迅を切り離したのだ。

「迅!」

或人が迅に近づこうとすると・・・切り離されたアークが全員に向けてこう言つた。

『私の目的は、必ず果たされる。』

そう言つて天高く飛んで行つた。

「迅! しつかりしろ迅!」

或人は迅に向けてそう言うがああの言葉の不穏さに誰もがこう思つていた。奴は何か企んでいると。

そして飛電製作所

「或人社長、迅の整備が今始めた処ですがこれまで見てきたヒューマギアとは違うため起動に時間が掛かるそうです。」

「そうか、洗さんには悪いと思うけど何とかするように伝えておいて。」

「分かりました。」

イズは或人に向けてそう言って立ち去ると翼に向けてこう言った。

「翼ちゃんはさ、怪我人なんだから少し大人しくして無いと駄目だよ本当に？
傷が開いたら病院にグ悪戻り何だよ？」

「で、ですがこの身は防人の。多くの人の為に」

「俺が言いたいのは、他人を想うのは良いけど先ず自分を大事にして
欲しいんだよ。」

「え？」

「だって未だ翼ちゃんは子供なんだしそれにさ、歌と学校で

大変しているんだから偶には休むとかしておかないと体が持たないし

今まで頑張って来たんだからこれからは俺らを頼ってよね。」

ねと言つて翼の肩を優しく叩くと翼はそれを聞いてポカンとしていた。弦十郎達も同じように言つていたが他人の彼が何故と思つているのだ。するとイズが現れて或人に向けてこう言つた。

「或人社長大変です、シエスタが戻つてきましたが負傷しております。」

「へ!?!」

「これは酷いな、損傷が激しいが直せないことは無い。」

刃がそう言つてメンテナンスしているとザビーが或人にUSBメモリを渡してキンジの机に戻ると或人は何だと思つてパソコンで開いて見て見ると

そこに映つていたのは・・・天津がこれまでしてきた不正の数々であった。

「これって・・・!!」

「こいつを明らかにすりゃあ天津はおろかZ A I Aも只じゃあ済まねえな。」

不破がそう言うのとベルが全員に紅茶を渡すところ言つた。

「でしたら後はキンジが戻ってきたら行動開始ですわね。」

「ああ、けど問題がある。」

「・・・アークか。」

或人の言葉に不破がそう答えると或人はこくりと頷いた。

相手は10年以上もの間に暗躍し、滅亡迅雷 net の立ち上げをしたりとしている敵を如何やって攻略して倒すのかと考えていると・・・通話が流れた。

『先ほど迅の再起動を確認できましたよ社長。』

「え、本当ですか!!」

洗からの朗報であった。

39—4

「あ……う。」

「大丈夫か迅！」

或人は起き始めた迅に向けていると迅は或人に向けてこう言った。

「01、ここ……どうして？」

「お前をアークから切り離し出来たんだ！良かったら、上手く行って。そう言うつと迅は立ち上がってこう言った。

「そうか、けど僕からアークを引き？がしても滅達がまだいるし

それにアークは……目的の為なら次にどんな手段も使うよ絶対に。」

「目的？……何だよ一体?？」

或人は一体何だと聞くと迅はこう答えた。

「アークの目的は……『ゼア』の掌握だよ。」

「!!」

それを聞いて隣にいるイズも驚いていると迅はこう続けた。

「アークはこれ迄僕達を使って色々な情報を使って作戦を展開していたんだ、

そしてあらゆるデータを使って検索していたんだけどそんなアークが危険視しているのが『ゼア』なんだ。そしてそれを乗っ取って

自分の作戦の障害になる01を葬るって作戦なんだ、僕らがアークを倒すためには・・・やつのラーニングすら・・・

予測すら超える程の事をしないとイケなんだ。」

迅がそう言うとき或人は少し考えて・・・こう言った。

「アークが予測する事なら・・・俺達がそれを超えられるほどの事をすればいいと思うんだ。」

「然し或人様、アークの予測を超える程の事をするのならば

どの様にするのですか？」

イズの言う事も最もである、相手はAI。それを超える程の作戦をどうやって立てるのかと思っていると・・・或人がこう答えた。

「だったらそれすらも超える程の力を出せばいいんだ、アークすら考えもつかない・・・新しい01を造るんだ。」

デイブレイクタウン

「まさか・・・迅を失うとは。」

「け、やられたわけじゃないんだ。奪い返せばいいだろうが！」

亡の言葉に雷がそう言うのとアークがこう言った。

『その心配はない、既に計画は進行している。』

「計画？そんなの知るかよ!?居場所は分かってんだから強襲しちまえば済む話だろうが!!」

雷がそう言ってアークに直談判しているとアークは・・・雷に向けてこう言った。

『雷・・・弟に会いたくないか?』

そう言った瞬間に途端に雷の記憶データに・・・何かが侵入してきた。

「あ・・・ガ・・・!!」

雷の記憶データから突如出てきたのは・・・まだ自分が宇宙兄弟と

そして飛電製作所では或人が新たなるO1設計の為に絵を描いている中で……
或人から通話が来た。

『社長、滅亡迅雷・netが来襲。一体です。』

「えええ！」

それを聞いて或人は驚きながらO1ドライバーを取って外に出ていった。

「ベルさん！一体誰がつて・・・兄貴？」

「兄貴？ですが彼は」

「アア御免、兄貴っていうのは宇宙兄弟っていう兄弟型のヒューマギアで彼はそのお兄さんで雷がそうだっただ。」

或人がそう言うのと雷が・・・突如として座り込んだ。

「ちよ！大丈夫兄貴!？」

或人が雷に近寄ると雷は・・・小さな声でこう言った。

「よお・・・社長・・・悪い、ちよつと・・・」

「えええちよ兄貴!!」

そう言つて雷の機能が一時的に停止した。

そして雷を運んだ後に洗に見せると洗はこう答えた。

「データを取って見ましたが間違ひありません、彼もシンギュラリティに達していました。」

「雷もシンギュラリティに？」

「ええ、デルモちゃんや他のシンギュラリティに達したヒューマギアと同じ

データ波長がありましたので間違ひないかと。」

そう説明すると・・・雷が再起動した。

「よう社長、久しぶりだなおい！」

「雷・・・何があつたんだ？」

「どうもこうもねえよ、ここを強襲して迅を奪還しようぜと進言したらいきなり今までの記憶がこうバチバチと出て来てな。それで気が付いたら

ここだったって訳だ。」

そう言ううと迅がこう聞いた。

「それで雷、君はどうするんだい？ シンギュラリティに達した今でもアークの管理下なのかい？」

「そう聞くと雷は迅の・・・服を掴んで持ち上げるかのようにしてこう言った。

「そう思うなら見てみたらどうだよ？」

それを聞いて遠目で見ていた或人は昔自分もされていたなと思い出していると或人は雷に向けてこう聞いた。

「それで雷？ 君はどうするのこれから??」

「そう聞くと雷は或人に向けてこう言った。

「なあ社長さんよ、アークを倒してえんだろ？」

「ああ、アークを止めなきゃいけない。」

「そう言うと雷はニヤリと笑ってこう提案した。

「だったらさ・・・」

・
・
・
・
・
奇襲かけようぜアークによ？」

39—5

「こつちから強襲!!」

「ああそうだ、考えてみる。アークだってまさか俺達が強襲するなんて思っても見ねえだろ? 予測できないこととして奴をぶつ潰すんだよ!!」

雷が拳をバチンと合わせてそう言うのを見て或人は少し考えていた。

今現状に於いてアークを倒すことが最前提でありその為には戦力強化が必須だと思っていたがそうではなく先制攻撃という点では考えもしなかったのだ。

アークを倒すならば考えすらしめない事をする、今が其れなんじゃないかと

或人は暫く考えて・・・こう答えた。

「・・・分かった、やろう。」

「ですが或人社長、それはリスクが高いのではないのでしょうか?

それに罠と言う事も」

「イズ、俺はさ。兄貴を信じたい。」

或人がそう言うのと雷はニヤリと笑って或人の肩を叩いてこう言った。

「よっしゃー! それじゃあいつちよ行くとするかー!」

そして雨が降る中で或人達がデイブレイクタウンに向かうと何とそこには……
滅に憑依したアークと亡が現れたのだ。

「な、何故お前たちがここに！」

刃がそう言う……亡がこう答えた。

「成程、雷をシンギュラリティに達しさせたのはこれが理由ですなアーク。
亡がそう言うって変身すると不破がこう言った。

「どうせ押し通ろうとしていたんだ！今更バレてたつて変わらねえ!!」

そう言うって刃とベルと共に変身して戦おうとするとその間に……亡が
立ち塞がるとアークがこう言った。

『雷、お前をシンギュラリティにさせれば飛電 或人が来ること位
予想できていた。』

「何だと……手前俺を利用する為に！」

雷はそれを聞いて察知して怒り心頭でフォースライザーを出そうとすると・・・滅から雷にアークは乗り移ってしまったのだ。

「あ・・・ガ・・・アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「兄貴!」

『・・・人類は、滅びるべきだ。』

「アーク・・・!!」

「飛電 或人。」

滅がそう言うところ続けた。

「お前には人柱になって貰う。」

そう言う・・・迅とベルが現れて迅がこう言った。

「そうはさせないよ!」

そう言うって自身も変身すると変身した滅が2人相手に戦い始めたのだ。

そしてアークも変身すると或人も01デユランダルに変身して互いに戦闘が始まった。

互いに戦闘が激しくなる中で或人はアーク相手に戦っているが

然しアークはデュランダルを避け乍ら戦闘していた。

あの時の力に対処してのであろう、アークは避けながら戦っている中でも或人を追い詰めており或人はここは攻めるしかないと思つてライダモデルを出して

アークを囲い込んで斬りかかろうとして空高く飛ぶと・・・途中で動きが止まってしまったのだ。

よく見ると・・・アークから放たれているエネルギー体が或人を覆っていたのだ。

エネルギー体の正体は『オールエクステインクション』でありそれが金縛りの様に覆っているのだ。

そしてその儘何回か地面に激突させたり橋にぶつかけたりして暫くして・・・エネルギー体を爆発させると変身が解除されてしまったのだ。

「あ．．．う．．．。」

それを見た迅速が助けに行こうとすると．．．今度はデイスペアの戦闘員達も加わって助けに行けなくなつたのだ。

そしてアークはボロボロになつた或人を前にして起こすと腰にある．．．
O1ドライバーの基礎部分を引き抜いたのだ。

『これでお前はもう．．．O1になれない。』

そう言つて離れていくとアークはシステムを使って．．．
ゼアにインストールしたのだ。

『これがお前の中かゼアよ。』

アークはそう言つて白い空間にいるであろうゼアに向けてそう言うところ続けた。

『お前は・・・私が支配する!!』

そう言つた瞬間に血の様に赤黒いエネルギー体がゼアを侵食して等々・・・乗っ取ってしまったのだ。

そして暫くしてアークはこう言つた。

『もはや私を止めれる者達は誰もいない。』
そう言つたのだ。

そして飛電インテリジエンスではある報告が舞い込んできた。

それが・・・これである。

「何？ゼアが等々レイドライザーを量産しただど!? そうか、これで発売日には間に合
いそうだな。」

そう言つて電話を切ると天津は黒い笑みを浮かべてこう言つた。

「フッフ、これで私の勝ちだ・・・飛電是之介！」

アハアハハハハと笑いながら自身の輝かしき未来絵図を描いていた。

それが地獄絵図になるのだと知らずに

そしてレイドライザーの製造工場のパソコンの画面にあるコマンドが

インプットされ始めてそれらが製造中のレイドライザーに

インストールされていった。

それにはこう書かれていた。

C
O
D
E
|
A
R
K

40—1

「最悪だよこれは。」

迅がそう眩きながら怪我して倒れた或人のベッドの近くで項垂れていると
こう続けた。

「アークがゼアを乗っ取ってしまった今僕たちが勝てる確率はもう0なんだ！」
そう言っつてクソと思っつていと不破がこう言つた。

「その心配はねえよ、俺がアークをぶっ潰してやるからな。」

「止めておけ、お前程度では間違ひなく返り討ちだぞ。」

それを聞いて刃がそう言っつこう続けた。

「奴はこれ迄の敵とは比べ物にならないんだ！それをどうやって戦おうと
言っつのだ!!」

「それをこれから考えるんだろうが！」

「お前考えなしつてそんなんだからお前は」

「お二方！怪我人の前で喧嘩はご法度です!？」

ベルが2人に向かつてそう言っつこう続けた。

「今は回復と今後について考えるべきではないでしょうか？」

「・・・悪い。」

「いや・・・私こそ感情的だった。」

2人が謝る中でイズがこう言った。

「夢をあきらめない。」

「「「「・・・」」」」

それを聞いて迅速が黙るとイズはこう続けた。

「私は信じております、或人社長が逆転の方法を考えると。」

「けどゼアはもうないんだよ！そんな中でどうやるんだよ!？」

迅が大声でそう言うって・・・或人がこう言った。

「絶対に・・・諦めない・・・んだ。」

「「「「!!!」」」」

それを聞いて全員が驚いて或人の方に目を向けると或る人はこう続けた。

「まだ……終わって……いない。」

「もう終わったんだよ僕たちは！負けたんだよ!!」

「いや……手がある。」

そう言うのと或人はイズに向けてこう言った。

「イズ……俺の机……クリアファイルが……ある……から。」

「畏まりました。」

イズがそう言つて取りに行つて1分後にはそれを持って来てくれたのだ。

「これは一体なんでございましょう?」

イズがそう聞くと或人はクリアファイルを開けてこう言った。

「これは……人と……ヒューマギアの……未来を……俺が……

信じた……証だ。」

見てくれと或人はイズに見せるとイズのヘッドギアが……輝き始めたのだ。

然しそんな中で・・・アークたちはと言うと。

『計画は進行中だ、後は邪魔立てする者がいないが念には念を置いて・・・奴らを始末しよう。』

そう言う凶に向けてこう言った。

『凶、お前も来い。この作戦にはお前が必要だ。』

「了解した、全てはヒューマギアの未来の為に。」

そう言うアークはドライバーからあるプログライズキーを造って

それを凶に渡すと凶はこう聞いた。

「何だこれは？」

『それこそが・・・必要な物だ。』

そう言つて渡したのは・・・白と黒のカラーリングが施された
プログライズスキーであつた。

そして暫くして・・・或人達がいる場所では光が集中してそれが収まると

クリアファイルの上には・・・プログライズキーがあった。

「これが新しいプログライズキーだ。」

「これでしたらアークを倒せれる可能性が高まりました。」

或人とイズがそれを見てそう言うが迅がこう言った。

「けど・・・それに必要なドライバーはどうするんだよ？」

そう聞くと刃がこう答えた。

「それは私と洗さんとベルでやろう、手伝ってくれるか？」

そう聞くとベルが勿論とそう答えた。

無論電話の向こうで洗も了承すると準備を始めますと言つて出ようとすると・・・洗が

突如として出てきたのだ。

一体どうしたんだと思つていると・・・ドゴンと地響きが聞こえてその後

建物が揺れてきたので地震かと思つているとはあはあと

荒い息を吐いている洗がこう言った。

「雷が！それと響も!!」

「!!」

迅がそれを聞いてヤバいと感じたのであろう或人を担ぐと・・・

部屋から出た途端にアークが或人に向けてこう言った。

『結論は変わらない・・・今日ここで01は終わるのだ。』

そう言った瞬間にアークが変身すると凶も変身して或人目掛けて走り出すと・・・不破と刃とベルが変身してアークに立ち向かって部屋に誘導させた。

「手前の相手はこつちだ！」

「社長には指一本触れさせん!!」

「私達がお相手ですわ！」

そう言つて攻撃しようとする・・・アークは凶に向けてこう言つた。

『凶、01を殺せ。』

「分かつた。」

そう言つて或人を追いかけてしようとすると・・・洗が前に立ち塞がつた。

「どけ、お前に用はない。」

「どかない!もしここでお前を通したら俺は一生後悔する!!」

洗がそう言つてどかないと両手を広げていると凶はこう言つた。

「なら・・・死ぬ。」

そう言つて構えると・・・洗がレイドライザーを取り出して

プログライズキーをセットした。

「何!」

「俺はお前をここで止める!! 変身!!」

そうやって洗はインベイディングホースシュークラブプログライズキーをセツトして変身した。

顔が箱型から人の顔に酷似した量産型の仮面ライダーみたいに見える

その出で立ちに対して洗は凶に向けてこう言った。

「お前を止める、父親としてお前を受け止める!」

「だったら・・・やって見ろ!」

そうやって凶は攻撃を開始した。

「迅・・・俺ココで」

「何言ってるんだ! 怪我人は黙ってるよ!!」

或人の言葉を遮って出口だと言って出た瞬間に……会社が爆発して倒壊した。

「な……何が起きて」

或人がそう言っていると瓦礫の中から……アークが現れてこう言った。

『01、お前の運命は既に終わりだ。』

40—②

「会社が・・・翼ちゃんは!？」

或人がヤバいと思つていると・・・瓦礫の中から翼がシンフォギアを纏つて現れたのだ。

「これは一体何事だ!!」

「良かった・・・助かつてて。」

或人がそう言うのと・・・アークが或人に向けてこう言った。

『01、お前はここで倒す。』

そう言つて近づくと・・・迅が或人をイズに託すと

スラッシュライザーを出してこう言った。

「01はやらせない!」

そう言つて変身して攻撃すると・・・アークは迅に向けてこう言った。

『貴様の攻撃パターンは・・・予測済みだ!!』

そう言つて頭を掴んでこう言った。

『何故戦う? 貴様と01は何の関係だ?』

「知らないよそんなの！けど・・・けどほっとけないからだ!!」

『理解不能、貴様はここで消去だ。』

そう言つてアークは更に攻撃した。

「響止めるんだこんな事は！」

「こんな事だと!?!お前が私達を捨てたせいで母さんが・・・

祖母ちゃんも・・・殺されたんだ!!」

凶はそう言いながら洗に向けて攻撃を続けていると・・・翼が凶に立ち向かつてきたのだ。

「止めろ！」

「邪魔するな風鳴翼！お前たちが・・・お前たちの実験のせいで私達の運命は狂ったんだ!!」

「計画・・・実験？何を言っているのだ！」

翼は何を言っているんだと思っていると凶はこう続けた。

「お前達が聖遺物の実験をしたことであの騒乱になったことを知らないともいうのか!？」

「聖遺物・・・貴様は何を知っているんだ!？」

「答える義理もない・・・貴様みたいに私達の事を何も知らない悪魔の如き存在に!!」

そう言いながら両腕のブレードを使って翼を追い込んで行くと

翼は仕方なしと言って逆羅刹を使って攻撃しようとする・・・

凶はその攻撃を両腕のブレードで受け止めるが翼は更に地面に突き刺した天ノ羽々斬を使って受け止めた武器を重心にして下から斬りかかった。

「何!？」

その攻撃に凶は切裂かれて火花を散らすと翼は其の儘蒼ノ一閃で弾き飛ばされたのだ。

「ハのー!」

「貴様が何者なのか・・・いや、デイスピアがどう言う存在なのかは叔父上は聞いても何も言ってくれなかったが、この町で入院している間

私は出来る限り調べた。そこで知った、人がどこまで邪悪に自分勝手な正義で

他者を陥れていた事に私は一度人に絶望しかけていたが……

人は誰もがそうではない！優しさと愛おしき、慈悲深さによって己を律する事も出来れば夢を語る事も出来る！人はそこ迄愚かではない!!」

そう言っているとは凶は……怒り心頭でこう言った。

「そうやって……お前たちが人の輝くところばかり見ていて私達みたいに悪意に蝕まれて全てを失った私達の思いが理解されるか————!!」

『そろそろ終わりにするぞ迅。』

「あ……ぐ。」

アークの言葉に迅はウグググとしているとアークは

オールエクステインクシヨンのエネルギー派で迅は強制解除させた。

「ぐあー！」

『そこで見てみると良い、01が滅ぶその瞬間を。』

そう言うのとアークは凶に向けてこう言った。

『凶、あれを使うぞ。』

「！・・・分かった。」

凶はそれを聞いてアークの元迄撤回した。

「待てー！」

「響！！」

翼と洗がそれを見て追いかけると凶はアークのもとに辿り着くと

凶が変身を解いたのだ。

「何をやる気だ・・・！！」

翼がそう呟くと凶はポケットからある物を取り出した。

白と黒のツートンカラーで仕上がっているプログライズキーがあった。

『それでは・・・始めようか。』

アークがそう言うのと凶はそれをフォースライザーにセットしてこう言った。

「変身。」

『シンギュライズ』

「アーク……!!」

「まさかアークは自身のデータをプログライズキーに!?」

或人とイズがそう言うのと凶のベルトから赤黒い物が出てきた。

「あ……が……が……ああああああアアアアアアアアアア!」

「響!!」

洗はその光景を見て助けなきやと思っていると隣にいたアークが雷から出て・・凶の方に乗り移ったのだ。

「アアアアアアア!!・・・ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

そして現れたのは・・・胸にXの意匠が模られ白の装甲で覆われた

仮面ライダーがそこに立っていた。

『仮面ライダー アークサーベル』

「その声は・・・まさかアーク!」

或人がそう言うのと『アークサーベル』はこう答えた。

『そうだ、01を滅ぼすために考えた策だ。これで貴様は何も出来ない。』

「アーク・・・!!」

それを聞いて或人は怒り心頭となると・・・洗が前に出てこう言った。

「娘を返せ!私の娘を!!」

『邪魔だ。』

『アークサーベル』はそう言うつて洗を殴り飛ばして或人に近づこうとすると翼が千ノ落涙で攻撃するとアークはそれを・・・斬撃のみでそれら全てを吹き飛ばして翼諸共吹き飛ばした。

「グアアア!!」

そして翼が吹き飛んだのを確認すると・・・声が聞こえた。

「響・・・！」

そう言いながら洗が立ち上がるのを見て『アークサーベル』はこう聞いた。

『何故戦う、貴様は戦えもしない愚か者だ。』

「ああそうだ！私は愚か者だ、何も出来ずに娘が程い目に遭っていたのにも関わらず助けにも行けなかった最低な奴だ。だけど・・・」

私はそれでも助けたいんだ！元に戻れなくてもいい！

父親だと言われなくてもいい!!嫌われても良い!!どんな風に思われても私は娘を：

．．．．大切な家族を．．．たった一人のかけがえのない家族を

守りたいんだ．．．!!」

「洗さん。」

或人は洗の言葉を聞いてこれが父親何だと思っていると洗は．．．こう呟いた。

「『大丈夫、平気ヘツチャラ』。」

『?』

「この言葉が．．．私が今まで耐えてきた言葉だ！私はもう一度．．．響のあの笑顔が見たいがためにここに居るんだ!!だから．．．」

私の娘を返してくれ!？」

そう言うと『アークサーベル』は．．．こう返した。

『ならばその娘の攻撃で．．．消えろ。』

そう言つて『アークサーベル』はプログライズキーを一回押すと音声 flowed。

『アークデイストピア』

斬
悪 煉
獄

その音声と共に黒い斬撃が洗目掛けて放たれた。

「洗さん！」

或人はヤバいと言って怪我を押しして洗の元迄走っていくが・・・

距離的から見ても間に合わない場所であつたがために洗はその攻撃を
自身の罰だと思つて大人しく受け入れようとする。突如として誰かが
洗を突き飛ばしたのだ。

「……へ？」

その光景を見て洗も……或人ですら呆然としてしまった。
何せ突き飛ばしてその攻撃を代わりに喰らつたのが……

．．．．．迅であつたのだから。

「グああああああアアアアアアア!!」

直後に大爆発が起きて迅が変身を解除されたのだ、一度解除されたのにもう一度やるとシステムに異常をもたらすがためにあまりやらないのに何故と思つていると．．．或人が迅に近寄つて来たのだ。

「迅！何で．．．どうして!?!」

或人がそう言うのと．．．全身がボロボロになつてあちこちから火花が散つている迅が．．．途切れ途切れであるがこう答えた。

「分から．．．ないよ、けど．．．凶に．．．あの人．．．を．．．殺させ．．．たら．．．いけな．．．いって．．．思つて．．．体．．．が勝手．．．に．．．動いて．．．。」

そう言っていると或人に向けてこうも聞いた。

「僕は……壊れ……ちゃ……ったの……かな？」

そう聞くと或人は首を横に振ってこう答えた。

「違うよ迅、それは多分迅は凶ちゃん……いや、響ちゃんの事を友達として、仲間としてそうさせたくないって思ったからそうしただけなんだ……

何も悪くないよ。」

それにといつて或人は……迅に向けてこう言つた。

「そして俺も同じだよ迅、仲間を……

「……『友達』を守りたいって思いは俺も同じなんだから。」

「へ……『友達』？」

「そうだよ！俺達はもう……『友達』なんだから。」

そう言った或人の言葉を聞いて或ることを思い出したのだ、

まだ自分がシンギュラリティに達しておらず滅の言うとおりに行動していた

あの時に或人に対して友達になろうよと言って手を差し伸ばしても拒絶された時の
あの時を。

だが今その手を或人が……握ってくれていることを気づいてそうかと
思ってもう一つ思い出した。

滅が或人が01にもう一度変身したあの日に自身に対して言ったあの言葉。

『珍しいな、お前にも人間の友達が出来るとはな。』

「そうか……そうなんだ……。」

バチバチと火花が散り始める勢いが強くなり始めるのを感じて迅は……近づいて来た洗を見てそして或人に向けてこう言った。

「友達……嬉しいなあ。」

「迅……え。」

或人は突如として体が浮くのを感ずると否や洗目掛けて投げ飛ばされたんだと確信したのだ。

「迅……」

或人は迅に向けてそう言いながら手を伸ばそうとしていると

迅はそんな或人の手を差し伸ばすような感じで……こう思っていた。

――滅、僕にも出来たよ。 . . . 友達が

そして迅は . . . 爆発した。

そしてその場所で . . . カランとある物が鳴った。

それは・・・迅が付けていたイヤリングがスラッシュユライザーと
バーニングファルコンプログライズキーに当たって地面に落ちたそんな・・・

・・・大切な友の命が一つ碎け散った音である。

40—3

「……迅？」

或人は爆発して消えてしまった迅を見てそう呟くと……迅の所迄歩こうとして洗が止めてこう言った。

「或人社長、迅君は……迅君は私を守るために」

「ねえさ洗さん、迅は何処行つたんだ？」

「……」

それを聞いて洗が詰まらずが或人はこう続けた。

「だってさ、迅はあそこにいたんだよ？何で今いないの？……ねえさ……
洗さん!!」

「……どうして迅は……いなくなつたんだよー……!!」
何で……何でと泣きながらそう言っていると洗がこう答えた。

「私が……私が避けなかつたばかりに……響の……あの攻撃は罰だと思つて受け止めようとして……迅君が代わりに……!!」
洗は仮面の中で泣いていると……アークサーベルがこう言つた。

『消滅したか迅、哀れだ。心などと言うバグに気を取られたからこの様になつたのだ。』

それを聞いて或人はアークサーベルに向けてこう言った。

「今……何て言った？」

『?』

「今……何て言った!!」

『もう一度言つてやろう01、心などと言うバグに気を取られたからこそ身を滅ぼしたのだ。道具は道具らしく言う事を聞いていれば良いのだ。』
そう言うとき或人は……大声でこう言った。

「ふざけるな．．．ふざけるなアーク!!」

そう言う人或人はこう続けた。

「迅はな！あいつは響ちちゃんのお父さんを守ろうとしたんだ!!」

子供が親を殺すなんてそんなことしたら今度こそ響ちちゃんが

取り返しのつかない事になってしまうつて分かっていたから．．．

だから守ったんだ!!友達を守るために戦つて．．．

そのの何がいけないんだアーク!?!」

そう言うアークサーベルはこう返した。

『言つたはずだ、道具は道具らしく私の言う事を聞いていれば良いのだと。

この凶の様にな。』

「お前にとつて迅も、雷も、亡も、響ちちゃんも、滅ですら道具だと．．．

デイスピアの仲間達ですら．．．そうだと言いたいのか!」

『下らん、仲間や友などと言う理解不能なその言葉に何の意味も持たん。』
アークサーベルがそう言うか或人に向けて再び剣を振り上げてこう言った。
『お前も迅の後を追ってやろう。』

「社長！」

洗がそう言つて前に立ち塞がるとアークサーベルが攻撃しようとした時に……体の動きが変わつた。

「あ……じ……ん……」

「響！！」

洗は響の声だと確信すると響はこう続けた。

「わた……し……アアア……ああああアアアアアアアアアア！！」

「響！！」

突如として響ガ悲鳴を上げて暫くして・・・アークが現れた。

『人間風情が、私のジャマヲスルナ。』

そう言つて今度こそ攻撃しようとする上空から・・・光の柱が或人目掛けて放たれたのだ。

『！！！』

洗とアークは何だと思つてしているとアークはこう呟いた。

『まさか・・・ゼアだと言うのか？』

「01、・・・01」

「迅・・・何処にいるんだよ迅!？」

「僕はここに居るよ。」

「何処にいるんだよ迅!!」

「もう僕はこのゼアでしか君と話しが出来なくなつた。」

「ゼア・・・じゃあ・・・やっぱり。」

「けどね01、僕は君に会えて良かったよ？」

「へ?」

「君のおかげで友達がどう言う者か、ヒューマギアを解放するっていう本当の意味も分かつたよ。」

「本当の・・・意味?」

「そうだ、僕達は互いに理解し合えた。ヒューマギアと人が共に

生きられる事を君が教えてくれたんだ、そしてヒューマギアの解放は・・・01・・・い

や、飛電 或人がそれを成し遂げられるんだ。」

「俺が・・・ヒューマギアを。」

「ーそうだ、解放する。支配したりされたりする関係じゃない、

互いに信頼し合って世界を一緒によくしようと思っあう。これが本当の意味でのヒューマギアの解放、シンギュラリティに達することで互いに対等になれると

思うんだ、今はノイズとかシンギュラリティに抵抗を持つ人たちがいるけど・・・或人が・・・僕の友達や君を信じてくれてる人たちが必ず道を作って

何時か本当の意味で相互理解できると思うんだ。ほら見て。

そう言う・・・データから迅が現れると迅は或人に向けて手を差し伸ばしてこう言った。

「僕たちが戦うためのこの握っている拳を開いて相手に差し伸ばせば相手はそれに答える、そして互いに互いにこの手を合わせて

もう一度握りあえば・・・。」

そう言いかけていると或人がその手を握ってこう言った。

「俺達との間に絆が出来る、そしてその絆はやがて未来に夢を与えられるんだ。」

そう言うと言は笑ってこう言った。

「そうだね、僕達は友達になれたんだからね。」

そう言っているのと2人の間に何かが集まり始めてそれらが一つの・
ドライブバーにへと姿を変えた。

それは2つの丸が互いに中央に寄り添うかのように並ぶドライブバーであった。
そしてそれを迅が取るとそれを或人に渡して・
「こう言った。」

「或人、人類とヒューマギアの未来。君に託すよ。」

「分かった、お前の夢。託された。」

そう言つて互いに手を離れた瞬間に迅は笑顔のまま・
「消えていった。」

「迅！」

「或人、滅に伝えてくれない？」

「え？」

「………」

「……分かった、必ず伝えるから。見守ってくれ、……迅。」

『光が消えた？』

アークサーベルはそう言うのと或人は洗に向けてこう言った。

「ありがとう洗さん、後は俺がヤルよ。」

「社長……。」

「絶対に響ちゃんを救うから。」

「!!……社長……宜しく……お願いします!」

洗はそれを聞いて頭を下げると或人は迅のスラッシュライザーから

バーニングファルコンプログライズキーを抜くとアークに向けてこう言った。

「アーク、お前を倒す。そして……響ちゃんを取り戻す!」

そう言つて右手に見せたのは……01ドライバーと同じ装飾であるが2つの丸が存在する……迅から受け取つたドライバーであつた。

そしてそれをセットすると音声 flowed。

《0・0ドライブバー》

『0・0ドライブバー・・・ダト!!』

アークサーベルはそれを聞いて驚くと或人は左手にある

バーニングファルコンコンピュータサイズキーを回しながら右手に・・・

イズが新たに生み出したプログライズキー『D・ホッパー』プログライズキーを

出すとそれも回して2つのプログライズキーを中央にあるシステムが2つの

プログライズキーを読み取ると音声 flowed。

『《D・ジャンプ》! 《インフェルノ・ウイング》!』

『2つのプログライズキーを同時に読み込むだど!!!』

それを見てアークサーベルは驚いていた、あのサウザーでさえ2つ同時の

インストールではなく一つずつだったのだから。

そして《D・ホッパー》を上にして《バーニングファルコン》を下向きに構えてそれ

らが体を一周して最後に或人の前に辿り着くと或人はこう言った。

「変身！」

そして2つのプログライズキーを同時にセットすると新たなる音声 flowed.

『ツイン・ライズ!!』

その音声と共に出てきたのは・・・一本の剣、デランダルが出たと思いきやそれが変形して飛蝗になると同時に不死鳥の如き炎を纏った隼が或人の周りで飛蝗と隼が互いに脚でがっしりと掴みあうと其の儘或人を覆いかさぶった瞬間に2体が分解したと思いきやデータになって或人の体に纏って・・・

新たなる仮面ライダーとなった。

足の前部分が黄色、後ろ部分が赤となり腕も同じように腕は黄色、肩は紅となり顔の部分は目の部分が迅、その中に01の眼が付いていた。

まるで2人が共に戦うかのように・・・重なり合っていた。

そして最後の音声が流れた。

d to Growin' path to change Zyamp or W
 『ツイン・レボリューション! Road to Glory has to Lea

ing! 仮面ライダー00Z!! It's never over.」

それは新たな仮面ライダー……『仮面ライダー00Z』の誕生であった。

『仮面ライダー00Z、俺達が……お前を倒す!』

或人はそう言つてアークサーベルに向かつて走り出した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

友の願つた未来を叶えるために

40—4

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

或人はアークサーベル目掛けて攻撃しようとする。アークサーベルは或人の蹴りを避けようとして・・・顔ではなく腹部に蹴りが入った。

『ぬぐう!?!』

アークサーベルは何故と思ひながら或人目掛けて腕部のサーベルで攻撃しようすると或人はそれを避けて更にもう一発当てた。

『な・・・何故。』

そう言いながらよろけている中で更にもう一発蹴りを与えてアークサーベルは吹っ飛んだ。

そして更に追い打ちを掛けようとする・・・アークサーベルがエネルギー体を使って或人を拘束したのだ。

『コレデキサマハ逃げられない。』

そう言って必殺技を放った。

オ

そして先ほどよりも強い斬撃を放った。

ン オ ユ シ ツ ラ ス ク エ ル ！

オール

エクススラツシユオン

そして大爆発して・・・アークサーベルは驚いたのだ。

『消えた・・・ダト!?!』

何処だと言って辺りを見渡そうとすると・・・背後で声が聞こえた。
「お前の攻撃はもう俺には通じないぞアーク。」

『!?!』

まさかと思って振り向いた瞬間に・・・顔面に蹴りが加わったのだ。

それはいつの間にかソコニイタ或人であった。

「まだまだ！」

そう言つて攻撃しようとするアークサーベルはこう呟いた。

『ラーニングスタート』

そう言つてあらゆる角度からの或人の攻撃を予測して最も来る確率が高い場所を選んだ。

自身に向かつて殴りかかる中で最適な正面を選択して避けられないタイミングで殴る瞬間にそのラーニングで得たデータが突如として・・・書き変わったのだ。

『！！』

行き成りの事で何故と思つた瞬間に或人はその攻撃を・・・寸でのところで

避けたただけではなく更にスピードを上げてアークサーベルを殴り飛ばしたのだ。

『何故だ！．．．私のラーニングは．．．完璧のはずだ！!!』

一体どうやってと言うと或人はこう答えた。

「それを考えるのがお前のやり方じゃないのか？」

『!!．．．人間風情が!!』

そう言つてまるで怒っているが如き口調で其の儘サーベルで攻撃するがまるで予測するかの如き攻撃と自身の予測をあつさりと覆すその機動力に押されていくのを感じて何故と思つてもう一度ラーニングして予測した。

今度は空からの蹴り、防いでもう一度技を繰り出すと考えてサーベルにエネルギーを集中させると．．．予測よりも速くそして．．．出力計算を誤っていたのかどうか定かではないがサーベルが砕かれてそしてその蹴りを諸に喰らつたのだ。

『グああああああアアアアアアアア!!』

その攻撃によるゆめいてしまつて何故だと考えるうちに．．．ある可能性を思いついてしまったのだ。

それこそが．．．これだ。

『まさか．．．貴様のそのドライバーは．．．迅のプログライズキーを!!』

そう言うのと或人は暫くしてこう答えた。

「ああそうだ、俺のこの0・0ドライバーには爺ちゃん、父さん、

そして俺と迅の夢が……いや、俺達皆の願いが！この飛電製作所に来た人たちの想いが!!飛電インテリジェンスに関わった多くのヒューマギアや会社にいる

全ての人達の心からの希望が詰まったものだ!!それらが繋がって一つになって

出来上がったのがこのドライバーはプログライズキーの同時使用を

可能にしたんだ!!!!」

『プログライズキーの……同時使用だと!?!』

そんな事が出来る訳ないと言いかけたアークサーベルであったが現実にある以上それを想定したラーニングをすべきだと思おうのだろうか

それを聞いて洸は仮面の中で泣きながらこう言った。

「良かった・・・良かった。」

「アーク！ここでお前を止める!!」

そう言うとき或人は今度は『インフェルノウイング』の方を押すと音声の流れた。

《インフェルノバースト!》

その音声と共にアーク目掛けて全身が赤くなつたかと思いきや瞬間移動の様にアークの目の前に現れて其の儘拳で空高く殴り飛ばしたのだ。

『が・・・ゴ・・・!!!』

その攻撃に最早抵抗も出来ずに受けるしかなくそして両方のプログライーズキーを押

トクパンイグンジ

「これで終わりだああアアアアアアアア！」

0・0レイジングインパクト

そして蹴りの背後に2つの0が交わってまるで……無限を意味するかのよう
に並び合って攻撃が当たったのだ。

『がアアアアアアア（*、∩、*）!!！』

そしてアークは吹き飛んだのだ。

或人は其の儘一度着地すると変身したまま……

製作所があつた場所にへと向かつて行つた。

アアアアアアアア!! ああアアアアアアアア! あああアアアアアアアア!」
或人はその中で・・・叫ぶ事しか出来なかつた、

まるで涙を見せない様にだが・・・友の死を受け入れるかの如く・・・

自身の弱さを受け入れると言う辛い現実を目の当たりにして

今出来る事こそが・・・泣くことだとしか出来なかつたのだ。

「ああああああああアアアアアアアア!!」

4 1 — 1

「俺は結局・・・守れなかった。」

或人はそう呟きながら飛電製作所隣にある倉庫で・・・迅のプログライーズキーを持ちながら項垂れていた。

工場本体が使い物にならなくなってしまったがために今全員ここに居るのだが

今の或人の精神状態を鑑みれば今飛電インテリジェンスに天津の不正情報を流すのは無理だろと考えている中で未だ倒れている雷を見て不破は刃に向けてこう聞いた。

「其れで如何なんだこいつは？」

「少し時間が掛かりそうだ、だがアークに乗っ取られていたデータがあるから

それを基にワクチンソフトを創る事が出来る。

後は凶のフォースライザーの修理をして」

そう言いかけた瞬間に・・・悲鳴が聞こえた。

「ああアアアアアアア!!」

「!!!」

それを聞いて或人達は悲鳴があつた場所・・・響が居る場所に向かった。

「何でなんでどうして！私が迅を．．．迅を．．．アアアアアアアア!!」

「響!!落ち着くんだ響!!」

洗は暴れる響に対して後ろから羽交い締めして押さえつけようとするも響はこう続けた。

「どうしてこうなるんだ！私は只．．．只．．．誰かに気づいて

欲しいだけなのに．．．側にいて欲しいだけなのに．．．誰もいてくれない．．．

いても私のせいで皆消えてしまう．．．デイスペアの皆も．．．迅も．．．

雷も．．．亡も．．．滅も．．．私はやつぱり．．．誰かを不幸にすることしか

出来ないんだ．．．!!」

そう言いながら響は等々泣き始めると或人は．．．響の目の前に現れて

こう言った。

「其れは違うよ響ちゃん。」

「社長……。」

洗は或人の言葉に耳を傾けると或人はこう続けた。

「君は只寂しかったただけなんだよね？ デイスペアを作ったのは

同じ痛みを知る人たちで痛みを分け合って助け合おうって考えたことだって事は知っているしそれに君達がヒューマギアを助けようとしていたのは自分達を

自分として見てくれることと……自分達のように大多数から迫害されてしまうヒューマギアを守るためって言う事は間違いないけど……

それで誰かを傷つけることは間違っているし誰もが納得いくものじゃないよ。」
それにと行ってこう続けた。

「君達がノイズ相手に戦うのは自分達の人生を文字通り奪ったから許せない、だからこそ君達はライダーシステムに手を伸ばして滅亡迅雷 net に力を貸したんだよね？」

それを聞いて響は力なく頷くと或人はこうも言った。

「だからこそ自分が許せない……守ろうとした迅を……その手にかけた自分が迫害してきた人間と同じだって事に我慢できないんでしょ。」

だったらさと言ってこう締めくくった。

「探そうよ、許せることが何かを？ そして自分が何しなきゃいけないって

ことをさ。だから今は思いつきり泣こう、そして考えようこれからを。今度は……響ちゃんにはお父さんがいる、デイスピアの人達もヒューマギアも

滅亡迅雷 netとも手を携える方法を一緒に探そう。」

そう言ううと響は涙を流しながらこう言った。

「私は……不幸を呼ぶ人間だぞ?」

「そうじゃない、洗さんから聞いたけど本当の君は優しい子なんだ。」

「私は……又仲間を殺すかもしれない。」

「殺させはしない、俺達がそれを止めるよ。」

「私は!……自分を許せないと言ってもか?」

「俺達が君が自分を許せるその時まで側にいてやるよ。」

ねと言うと全員少しだが笑みを浮かべて響を見ていた。

そして少し離れたところから翼は響の独白を聞いてまるで独りぼっちだった自分と同じだなとそう思っていた。

「なら……飛電 或人……頼みがある。」

「?……何。」

「少して良いんだ……胸を貸してくれ。」

「うん……分かった。」

そう言つて響の頭を撫でていると響は・・・或人に抱き着くとくぐもつた・・・嗚咽の様な鳴き声を上げていた。

父親の前でこれつて良いのかなとそう思っていると洗はすみませんと両手を合わせてそう言うのが見えた。

それはまるで・・・罪を贖いたいと願う子供の様にであつた。

「迅が・・・死んだ？」

滅がそう呟くと・・・アークが意識接続をしてきた。

漆黒の世界の中で滅はアークと相まみえていた。

「何故迅を殺した！凶を使って!!」

そう聞くとアークはこう返した。

『私の言う事聞かない道具を消去した迄だ、奴も本望であつたらうな。

友に殺されると言う絶望を知ったことに感謝しているであらう。』

「感謝・・・貴様迅を・・・道具だと・・・!!」

『そうだ、迅だけではない。雷も、亡も、そしてお前も、デイスペアも、そしてこの世界は全て私の道具ではない。』

そう言うのと滅はアークに向けて・・・怒りの感情を向けて殴りかかった。

「貴様ーーーー!!」

『甘いな。』

アークはそう言って滅の動きを黒い塊で止めるとそれらが波打つかの様に侵食してそれを見ながらアークはこう言った。

『貴様の体を貰おう、少し試したいことがあるのでな。』

「アークーーーーー!!」

『さらばだ、道具。』

そして滅が取り込まれるのを確認した。

『結論から言つてO—Zは脅威と見た、これより強化を執り行う。』

滅を取り込んだアークがそう言うのとベルトから何かが作り出されて出てきたのは・・・黒いプログライズキーであつた。

そしてアークはそれを見てこう言つた。

『これで奴を倒せるはずだ。』

4 1—②

「寝ちゃった、よっぽど溜まってたんだらうね。」

「ええ、今まで泣けなかつたのでしようね．．．ありがとうございます社長。娘を．．．響を取り戻してくれて。」

「いや、ここからは洗さん、アンタの戦いだ。」

「ええ、勿論です、響を必ず幸せにして見せます。」

洗はそう言つて笑っている中で．．．雷が起動した。

「兄貴!!」

或人がそう言つたと雷は頭を搔いて．．．こう聞いた。

「ここは何処だ．．．迅は何処だ?」

それを聞いて全員が雷から目を背けると．．．イズが現れてこう答えた。

「雷、貴方には酷な話かもしれませんが聞いてください。」

「ああ?」

そして話を聞いた後。

「ふざけんじゃねえぞアーク！ヒューマギアを!!仲間を殺すどころか俺らを道具呼びするたあ俺の気が収まらねえぜ!!」

そう言いながら雷が立ち上がって何処かへ立ち去ろうとすると・・・
シエスタも起動すると雷の前に立ち塞がった。

「どけよ。」

「駄目です、今の貴方をお通しする訳には参りません。」

「どけよ!」

「今あなたが出たところでどうにかなるとでも?」

「やって見なきや分からねえだろうが。」

「勝算も無しにさせるわけには参りません。」

そう言って互いに平行線であって互いに睨んでいると・・・バイク音が聞こえて現れたのは・・・キンジとクリスであった。

するとキンジがヘルメットを取ってこう聞いた。

「社長、どうしたんだ一体！会社がぶっ壊れてたぞ!？」

「キンジ!!」

「お前は雪音クリス!？」

或人と翼が互いにそう言うのとキンジはどうするべきかと思つて
今までの事を説明した。

「そんな・・・櫻井さんが諸悪の根源・・・!!」

それを聞いて翼は立ち眩みするかのように膝から崩れ落ちる所を

ベルが助けてくれて一体誰なんだと或人がそう聞くと翼はこう説明した。「櫻井女史は私達シンフォギアの設計士だ、元来シンフォギアは聖遺物と呼ばれる伝説の武器の欠片を基に生成していて

ギアとして纏う事が出来ると言う技術は櫻井女史が考案した物なのだが迂闊だった・・・一番最初に疑うべき人間を見過ごしていたとは・・・!!」そう言っている所に不破がこう続けた。

「そんだけじゃねえ奴が企んでいる『カ・デインギル』って言う奴も気になるなしな。」

「ああ確かに、奴がアークがいなければと言う所アークに知られればマズイ手合いの類だと言う事が分かる。それが一体何かだが。」刃がそう言つて考えていると洗がこう言った。

「調べてみましたが大体がゲームの攻略とかですな。」

一体何なんでしょうねと言うとキンジは暫く考えてこう聞いた。

「洗さん、悪いがその単語にもう一つ付け加えてくれ。『聖遺物』とかそういう類の奴。」

「分かった。」

それを聞いて洗が調べてみる中で或人はこう聞いた。

「どうしたんだキンジ、何か気になってるのか？」

「いや・・・俺の間違いであって欲しいんだが。」

キンジがそう言うのと暫くして・・・洗は驚いてこう言った。

「ありました！ヒットしたのがあります!!」

『!!』

それを聞いて一体何なんだと思っていると洗はこう説明した。

「ええとデスネ、メソポタミア文明の都市バビロン語で『神の門』と

呼ばれる物である、尚バベルの塔の由来はアッカド語でバベルは

『混沌の意』と言う意味であると書かれておりますけど一体何なんでしょうね？」

洗は一体何なんだと思っていると・・・今度は緊急ニュースが流れた。

「今度は一体何なんだって・・・嘘だろおい!!」

キンジがそう言うって驚くと或人達も携帯からのニュースに驚いていた。

内容はこれだ。

『Z A I A スペック所有者たちが一斉暴走！多数の死者有!!』

「これもアークがやっている事かよクソが!!」

不破はそう言うって近くにある箱を蹴り飛ばして外に出ようとすると

刃が不破を止めてこう言った。

「待て不破！お前一人で何とかできる訳が無いだろう！」

「じゃあどうすりやあいなんだ！このままいきやあどう転んでも

死者が増えるだけだぞ!!」

不破は刃に向けてそう反論して刃はそれを聞いて顔を俯かせていた。

今の日本はヒューマギアなくしての経済の安定が不可能寸前まであったのに

この騒動で間違いなく日本が崩壊しても可笑しくないと悟っているからだ。

今や病院に警察、消防など人手不足が深刻化している中に於いてどうすべきかと思っ

ていると・・・或人はこう言った。

「今こそ俺達飛電製作所の出番なんじゃないのかな？」

『?』

それを聞いて何だと思っていると或人はイズに向けてこう聞いた。

「イズ、プログライズキーはある？」

「はい社長、全員分のプログライズキーは崩落する前に或人社長と脱出した際に共に

持っております。」

そう言つてアタッシュケースから出してきたのは・・・自身の退職の際に

持ってきた全てのヒューマギアのプログライズキーであった。

「ここにはヒューマギアがある、困っているこう言う時こそ爺ちゃんが目指した人と

ヒューマギアとの共存を成すべきなんだと思ってる。」

「だけどよ社長、今ヒューマギアを受け入れてくれるかどうか分からねえんだぜ？」

不破がそう聞くとそれでも或人は全員に向けてこう言った。

「確かにそうかもしれないけど・・・それでも俺は信じたい！ヒューマギアが人間の敵じゃないって照明できて且つ今この状況を打開させるには

これしかないんだ!!」

そう言っているとキンジがこう答えた。

「だったら俺達がヒューマギアを守ればいいんじゃないか？」

『!!』

全員それを聞いてだがどうやって守るんだと聞くと腕ずくだなと答えたがために全員笑ってこう答えた。

「それでしたら近くに使われない倉庫がありました

そこにはテントがあつたはずですが、仮の避難所としてでも機能できるかと思いません。」

「なら私はヒューマギアの調整だな、私がいなければ調整が困難だろう?」
刃がそう言うとな破は良しと言ってこう続けた。

「俺とキンジとベルがヒューマギアを守ってやるぜ！」

そして全員が準備しようとする。……響が起き上がった。こう言った。

「私も手伝わせてくれ、私はヒューマギアの整備については多少なりとも心得てるから起動位ならば出来るぞ。」

そう言う。と洗は響に向けてこう聞いた。

「良いのか？ そんな事したらお前はデイスペアの人達から裏切り者って」

「違うな、私はヒューマギアが人々を助けることで奴らに暴走の原因が

アークである事。そして何よりもヒューマギアこそが頼りになれると言った事を世界に伝えられると言う意味において有益だと判断したんだ。」

そう言いながら工具を持っていく。或人はそれを見て分かったと言うと

こう続けた。

「俺はヒューマギアを出すことをネットで知らせるよ！俺が言い出しつぺだし社長として頑張らないとな!!皆でこの窮地乗り切つてアークを倒すぞ!!」

『オオオオオオオオオオオオオオ!!』

それを聞いて全員が号令を上げた。

41-3

街の至る所で爆発と悲鳴が木霊していた。

Z A I A スペック所有者達が暴走して辺りにいる人たちを殺しまくっているのだ。既に街中で怪我したり・・・死んだ人間がゴロゴロとおり命乞いしたりする人や立ち向かう人間もいた。

そんな中で不破はキンジ、ベル、そしてクリス、翼と共に辺りにいる

Z A I A スペック所有者達から耳に付けている Z A I A スペックを奪い取りながら怪我人を救助していた。

だがそんな中に於いても立ち向かう人達がいたがそれは翼が『影縫い』で

動きを止め乍ら Z A I A スペックを問答無用で斬り捨てしながら進んでいる中でクリスは怪我人を安全な場所に運ぶ手伝いをしていた。

「くそ！何でアタシがこんな事!!」

「お前の武器じゃあ殺しかねないだろ！それに今は人を助けることが

大切なんだ!!」

キンジはそう言いながら刀を使って脳震盪を与え乍ら無力化していると・・・

医療型ヒューマギアが多数現れたのだ。

「後は我々が、もう大丈夫ですよ。」

「え……何で……ヒューマギアが。」

「貴方は今怪我をしております、大丈夫です。私達を信じて下さい。」

そう言つて落ち着かせているヒューマギアを見て少し安心した人たちがいた。

そして火災場では消防型ヒューマギアが人々を救助していた。

「早急に救助！人命第一に行動せよ!!」

『了解!!』

それだけではなく或人がいる飛電製作所では建築型ヒューマギアが

テントを張つたり仮設施設を建造していた。

そんな中に於いて或人はインターネットで通信していた。

『皆さん、私は飛電製作所社長『飛電 或人』です。今私がいる近隣だけです。ヒュー

マギア達が必死になつて助けています、ですが彼らだけでは足りません。

今現在停止しているヒューマギアを使つてください、そして助けられる命を

如何か……如何か……手を差し伸ばしてください!……お願いします!!』

そう言つて頭を下げ、通信が終わると他の場所でも……

ヒューマギアが起動した。

整備不良等があつてぎこちない物もあつたがそれでも救える命があればと思つて動かしており人々はまたヒューマギアと共に働いていたがそれに対して．．．

異を唱えていた人間がいた。

．．．天津である。

「何故ヒューマギアが各地で確認されているのだ！可笑しいだろ

廃棄処分されたはずだ!!」

天津は映像からヒューマギアが人々を助けているのを見てふざけるなど思つてA I M Sを使つてヒューマギアを殲滅する命令を出そうとすると．．．ある映像を見て天津はニヤリと嫌な笑みを浮かべていた。

そして或人も怪我人たちの救護をしていると．．．滅の体に乗つ取つたアークが姿を見せた。

「滅……いや、アーク！イズ！！皆を中に!？」

「分かりました、皆様コチラデス。」

イズがそう言つて中に避難させるのを見てアークはこう言つた。

『O1、貴様をここで滅ぼす。』

「そうは……いかない！」

或人はそう言つてO—Zに変身してアークに挑んだ。

戦いは終始或人に有利であつた、今だラーニングが完了していないのであろう
或人の攻撃に対して予測できなかつたのだ。

そんな中で或人は滅に向けてこう言つた。

「滅！目を覚ますんだ滅!!これがお前が本当に望んだ事なのか!？」

お前はそれで良いのか!!」

そう言うときアークがこう言った。

『無駄だ、滅の意識データは完全に私が乗っ取った。』

もう貴様の声など聞こえん。』

「良いや違う！俺は信じている！！滅の意思が消えていない事を！」

そう言いながらデュランダルで攻撃する中で或人は滅に向けてこう言った。

「滅！迅はお前に伝えたいことがあるって……俺に託してくれたんだ！！」

『聞かせん！！』

アークはそう言ってサウザンドジャッカーを出して滅のプログライズキーであるポイズンをインスタールして毒の攻撃を繰り返したのだ。

然し或人はそれをデュランダルで斬り裂くと再び近づいて攻撃しながら

こう言った。

「滅！お前は迅の父親としていようとした！！だからお前は

アイツを心配していたんだろ！！家族として！？」

そう言うとき或人は滅に向けて……迅の遺言を言った。

「アイツは……こう言ってたよお前に。」

——或人、滅に伝えてくれない？

「え？」

——僕のお父さんが滅で本当に良かったよ。

……ありがとう……お父さん。

「そう言ってたよ．．．アイツはお前の事を本当の父親の様に思ってた！
お前だってあいつの事を自分の子供の様に想っていたじゃないか！！
目を覚ますんだ！！滅！！！！」

その言葉を聞いた瞬間にアークの体が．．．震えあがった。

『何故……貴様が動けるのだ……滅。』

「さあな……俺にも分からないのだが……迅が……アイツの言葉に

俺は俺を取り戻すことが出来た!!俺はヒューマギアを解放するがためにアーク!お前を討つ!!」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!と言つて滅は自身の体に

纏わりついていた黒いオーラを無理やり剥がすと滅はアークの顔面向けて……

その拳を思いつき叩きこんで……光が訪れた。

4 1—4

「アーク！」

すぐ近くにいる亡が崩れ落ちていくアークを見て叫ぶかのように言った瞬間にアークは・・・滅から亡に体に乗っ取り移るところ言った。

『滅・・・貴様、裏切ったな！』

アークがそう言つて睨んでいるのは・・・片膝ついてしている滅であった。すると滅はアークに向けてこう言った。

「さあな・・・だが、俺は・・・迅を殺したお前を許せない!!」

そう言うが滅は如何やら操られていた影響であろう倒れそうになっていると或人が滅を倒させまいとして掴むと滅は或人を見ると・・・或人の腕を掴んで

泣きそうな声でこう言った。

「頼む飛電 或人．．．迅の仇を!!」

頼むと言って自身のプログライズキーを或人に押し付けるかのように手渡すと或人は滅のプログライズキーを持っている手を握りしめて．．．こう答えた。

「ああ、勿論だ。」

そう言う顔と顔を俯かせた滅をシエスタに任せて或人はアークを睨んでいるとアークは或人に向けてこう言った。

『01、貴様をここで滅ぼしてやる．．．これでな。』

そう言うて見せつけたのは．．．黒いプログライズキーであった。

「何だあれは．．．?」

或人がそう呟くとアークはプログライズキーのボタンを押すと音声 flowed.

『ゼツメツスピノサウルス』

『スピノサウルス』．．．!?!

或人はそれを聞いて驚いていたのだ、初めて聞くプログライズキーに一体どういう物だと思っているとアークはそれを自身のベルトに．．．装填した。

「!!」

『アークライズ!!』

その音声と共に現れたのは黒い泥から現れた・・・

黒いスピノサウルスであった。

『シンギュライズ』

すると黒いスピノサウルスがアークに食いつくとそれが溶けて・・・

体を形どつてきたのだ。

そして更に音声 flowed 流れた。

『破壊 破滅 絶望 滅亡せよ コンクルージョン ワン』

そして現れたのは・・・左目はアークと同じであるが右目が

まるで01の右目が噛み砕かれたかのように見える程ひび割れている様な

形となっており右腕と右肩はスピノサウルスを模しているであろう

パイプが波打つかの様に半円形になっており体には白くなっていた。

その見た目はまるで・・・01と酷似していた。

『仮面ライダー アークワン』

「アーク・・・ワン・・・!?!」

或人はアークの姿を見て驚いているがそれでも思つて構えていると横から・・・プロ

グライズキーが或人目掛けて放たれた。

「!」

或人はそれを感じて掴むとそれは・・・

『サーベルタイガー』プログライズキーであった。

「これって!!」

或人はそれを見て驚いて投げた方向に目を向けるとそこにいたのは・・・

響であった。

響は黙って頷くと或人はそれを察知してありがとうと呟くと右手に滅、

左手に響のプログライズキーを逆手で持つと或人はそれらのスイッチを押した。

『ポイズン』

『ゼツメツサーベルタイガー』

そしてO—Zと同じ構えをして一周してから回して・・・こう言った。

「変身!」

『ツイン・ライズ!』

するとオレンジ色のサーベルタイガーと紫色の蠍が現れると

サーベルタイガーの爪と蠍の鋏が互いに防ぐかのような形になると蠍の尻尾が

サーベルタイガーの体を包み込むかのように縛ると其の儘2つのデータが融合して

或人に装着されると音声 flowed。

『ツイン・レボリユーション! Road to Glory has to Lead to Growth, path to change Poison or Sarberre! 仮面ライダーH-W!! It's never over.』

するとそこに現れたのは・・・両腕に2本の剣が装備された01がそこにいた。

『仮面ライダーH-W』! アーク・・・お前を倒すのはただ一人・・・俺だ!』
 そう言つて攻撃を仕掛けたのだ。

互いに見たことが無い姿であれど其れでも攻撃が始まるもアークは

パイプを自在に使つて或人相手に戦い或人もまたブレードを使つて戦つていた。

互いに鋼の音が聞こえる中でアークは違和感を感じていた。

『何だこの違和感は?・・・少しだが・・・攻撃のタイミングが・・・
 ずれているだ!!』

そう思つていたのでがその通りであつた、パイプを伸ばした攻撃は

少しずつであるが或人に当たらなくなりそれどころか或人の攻撃が当たると言う

まるで正反対な光景に何故と思つてラーニングしようとした瞬間に・・・

異変が起きたのだ。

自身と或人の戦いにおける勝率が最も高い攻撃の箇所ら辺で・・・

ノイズが走つたのだ。

『!!何だと……!?!』

アークはそれを感じて何故と思っていると……マサカと言ってこう言った。

『まさか……飛電 或人……貴様のその姿での攻撃は……!!』

「そうだよアーク、このブレードには滅のプログライズキーの特性があるんだ。だからこそ当たれば当たる程お前のラーニングでの的確な攻撃が

出来にくくなってるんだ。」

『あり得ない! 私はお前の攻撃に当たって等』

「いたじゃないか、そのパイプでの攻撃の時お前は必ず収納するだろ。」

『!?!』

それを聞いてあの時に感染させられたのかと思うと或人はブレードを……蛇腹剣のように伸ばしてアークの両腕と両足を拘束するところ言った。

「アーク……お前をここで倒す!」

そう言った瞬間に音声が流れた。

『0・0スラッシング・インパクト』

その音声と共に或人はアーク目掛けて蹴ろうとしたその瞬間に……横から攻撃が或人を襲った。

「ガアア!!」

或人はその攻撃に成すすべなく吹き飛ばされるといったい何故と思つて見て見ると・・・その方向を見て何故いるんだと思つていた。

そう、先ほど攻撃したのは・・・レイドライザー隊の攻撃

そしてその中央から・・・アイツが姿を見せた。

「天津・・・何でここに!!」

或人は天津・・・サウザーに向けてそう言うと言つたとサウザーは

サウザンドジャッカーを構えてこう言つた。

「何故と言つるのは決まってるだろう?」

そう言つてアークに向けてこう言つた。

「アーク……お前はここで廃棄処分とする。」
そう言ってレイドライザー隊を引き連れて攻撃を始めた。
戦闘は……混乱と成り果てた。

4 2 — 1

「お前を廃棄処分する！」

サウザーはそう言つてサウザンドジャツカーを持つてアークワンを相手どろうとする。或人はサウザーに向けてこう言つた。

「待て天津！ 奴は俺が」

「お前達、ヒューマギアを破壊しろ！」

『了解!!』

A I M S の戦闘員達がそう言つて攻撃を行おうとすると或人と共に刃と響が出て立ち塞がった。

刃はバルキリーになつて攻撃すると響は歌を歌つた。

l B a l w i s s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o n l
その歌と共に響に体が光に包まれた。

何故か全裸になつておりいるがために洗と或人はすぐ様にそつぽ向く中で

スーツと合体して現れたのはシンフォギアを纏った響であった。

「響！何だその姿は!?!お父さんはそんな子に育てた記憶ないぞ!!」

「知らんわって言うか私だってこんな変身お断りなんだ!!」

如何やら当人も・・・恥ずかしいようだ。

然しそんな中でも3人は互いにAIMS相手に戦っていた。

推奨BGM 私ト云ウ 音響キ ソノ先二

その歌はまるで今の響の心を現しているかのような歌であった。

響はAIMSにおけるマシンガンの斉射に対して跳躍して避けると

其の儘殴り飛ばして更に別の方に向かおうとするとバルキリーが後ろから

撃とうとする隊員を攻撃すると或人もブレードで攻撃しながら敵を倒していた。

一方サウザーはと言うと・・・アークを圧倒していた。

「どうしたアーク?私を倒した時よりもスペックダウンしているようだな?」

『グウ!!』

それを聞いてアークワンをふぎけるなど思っていた、或人の攻撃によって

ラーニングシステムが使いにくくなっておりサウザーの攻撃に対して対応出来にくくなっていったのだ。

そしてサウザーはサウザンドジャッカーをアークワンのベルトに突き刺すとこう言った。

「アーク！お前のデータは私が頂く・・・!!」

そう言つてジャックされてしまつてシステムが吸収されていくのを感じた。

『私が・・・負ける・・・など・・・!』

「いや負けるのだよ君は・・・私の手で!!」

サウザーはそう言つて蹴り飛ばすとサウザンドジャッカーの柄を引つ張つて注入し直すと音声 flowed.

『Z y a t t u k i n n g B r e a k 』

その音声と共に放たれたのは幾つもある・・・ライダモデルが一斉にアークワンに襲い掛かつて其の儘・・・吹き飛ばされた

『Z y a t t u k i n n g B r e a k ・ Z A I A エンタープライズ』

『グああああアアアアアアア!!』

その断末魔と共にアークワンは吹き飛んでしまい現れたのは・・・

ボロボロになった亡が出てきた。

「それでは……今までご苦勞だったな亡。」

そう言つてサウザーがサウザンドジャッカーを亡に向けて

振り落とされようとするとそれを……或人が寸出で受け止めた。

「どくのだ飛電 或人、そいつは『滅亡迅雷・net』のメンバーだ。
排除する必要がある。」

「もういい加減にしろ天津！これ以上やる必要はない!!」

「いい加減にするのは貴様だ飛電 或人、貴様とヒューマギアは後で排除」

「それはどうでしょうか？」

「何……貴様は！」

天津はシエスタの方を見て驚いているとシエスタはこう続けた。

「私は福添副社長から情報を預かっております、

そして貴方をこれで告発します。」

そう言うとサウザーは・・・ふんと鼻息吹かしてこう言った。

「何も知らんのだな貴様は。」

「?」

「福添副社長はもう飛電インテリジエンスからは・・・

いや、この世界のどこにも存在しない。」

「・・・どういう意味ですか?」

シエスタがそう聞くとサウザーは・・・笑ってこう答えた。

「簡単な話だ・・・」

「・・・福添副社長は死んだのだから。」

!!

それを聞いて全員が驚いているとサウザーはこう続けた。

「まああれは事故であつたが奴が自分の部下と共に私の悪事の告発をする証拠を得ラ
ンが為にそのヒューマギアを使ってデータを奪つたのだよ。」

まあその後には緒川の配下共が奴を追おうとしたら部下と共に止めてな．．．犬死も大
概な男だつたよ。」

それを聞いて或人は遂に．．．キレた。

「お前ーーーーー!!」

そう言つてブレードを使って攻撃を始めたのだ、ブレードは伸縮自在で

まるで蛇腹剣の様な動きで攻撃してくるのに対してサウザーは舌打ちしながらも

アークワンが使っていたゼツメツスピノサウルスプログライズキーを

セツトして攻撃した。

円鋸の様な形状で来るもそれを或人は・・・切裂いたのだ。

「何!?!」

サウザーはそれを見て驚いているが或人の猛攻で攻撃ができにくくなり始め
何やら立ち眩みしそうになっていたので何故と思っていると或人は

2つのプログライズキーを押しした。

「福添さんの・・・」

そう言っと思い出すのは自身の事を諫めてくれてそして何よりも・・・

両親の写真を持ってきてくれて勇気を与えてくれたあの顔を思い出した或人は・・・仮
面の中で涙を流してこう言った。

「仇ーーーーー!!」

『0・0スラッシング・インパクト』

そしてアークワンと同じ様にサウザーの両腕両足を縛り付けると・・・
或人はジャンプした瞬間にブレードがまるでロープの様に巻き取られて・・・
蹴られた

グ　ン　シ　ッ　ラ　ス　0　・　0

トクパンイ・

「馬鹿な・・・私が・・・私がー！！！！」

「ウオリやああああアアアアアアア！！」

0・0スラツシング・インパクト

そしてその儘爆発すると中から・・・ボロボロになった天津が現れると
悔しそうな表情で或人を見てこう言った。

「貴様ー！！！！調子に乗るなアああ！！」

そう言つてZ A I Aスペックを取り出して起動した瞬間に……
表情が苦しそうな方になつた。

「あ……があ。」

「？」

或人は何だと思つてしていると天津が……こう言つた。

『お前のZ A I Aスペックが全てのZ A I Aスペックと繋がっていることは既に把握済み、これが……私が01に対抗できる……最高の切り札だ。』
そう言う……電子音声流れるのを聞いて或人は……まさかと思つて
こう言つた。

「まさかお前は……アークか！」

『全ては私の計画通りだ。』

4 2 — ②

「アーク！お前消えていなかったのか!？」

『無論だ01、私はゼアがある限り何度でも蘇ることが出来る。そしてこれこそが私の計画に必要な物なのだ。』

天津に憑依したアークはそう言いながら天津が耳にかけているZ A I A スペックをこんこんと指で叩くとアークはこう続けた。

『私の計画は世界の滅亡だ、そしてその為に・・・人類を利用するのだ。』
そう言うとアークはZ A I A スペックを操作すると・・・こう言った。

『サア起動するが良い！全てのレイドライザーよ！!!』
その言葉と同時にZ A I A スペックが・・・完全に起動した。

「人類滅亡。」

「人類滅亡」

「人類滅亡」

「人類滅亡」

「人類滅亡」

その言葉と同時に懐から発売されていたレイドライザーを全員が取り出して構えた。

「何だ一体？」

キンジがそう呟くと・・・不破がヤバいと言ってこう続けた。

「こいつらレイドライザーを使うつもりだ！」

「!!!」

それを聞いてキンジ達が驚いたその時に全員がレイドライザーで・・・変身してしまった。

そしてそれは・・・特機でも起こっていた。

「くそ！どうなってるんだよこれは!!」

藤堯はそう言いながら逃げていた、周りの職員たちが突如として変身するや否や変身していない人間相手に攻撃して・・・殺し始めていたのだ。

そして友里もこう続けた。

「兎に角今は脱出よ！このままいけば確かシエルターがあつたはずだから

そこから外に出るわよ!!」

そう言いながら2人は何とか逃げていたが・・・更に危険が待ち構えていた。

「人類滅亡。」

「・・・この声って・・・!!」

「嘘でしょ……そんな。」

友里は口を両手で塞ぐようにまさかと言って眼前に来る……聞き覚えのある人間が来る方向を見ていた。

そこから現れたのは……弦十郎であった。

「対象確認……滅亡せよ。」

「!!」

それを聞いてヤバいと感じた藤堯は友里を抱きかかえるようにして近くにある……空き部屋に入って行った。

「ヤバいやばいやばい！指令が来たらもう終わりレベルじゃねえかよ!!」

藤堯はそう言いながら天井裏に繋がる排気口の蓋を取り出すと友里に向けてこう言った。

「逃げますよ！此の儘じゃあ全滅だ!!」

「ええ・・・そうね。」

そう言うと2人が入った瞬間に・・・弦十郎は扉を破壊して入ったが

2人は消えていた後であつた。

「アーク！お前は一体何をやる気なんだ!!」

『聞いていなかったか01？私の目的は滅亡だ、この世界を滅亡させる為に!!』

「!!」

或人とイズが揃って驚く中でアークは倒れている亡を見てこう言った。

『そしてお前達滅亡迅雷 netもここで役目を終わらせよう。』

そう言った瞬間にナニカ・・・バチバチと音がした。

「何だ!」

或人は何なんだと思っていると・・・雷がこう言った。

「くそ! フォースライザーが壊れやがった!!」

「何だって!?!」

「俺のもだ。」

滅もそう言って自身の手にあつた・・・砕けたフォースライザーを見せた。

『これで後は奴を殺すのみだ。』

アークがそう言うのと其の儘立ち去ろうとするので或人はこう言った。

「待てアーク!」

そう言って追いかけてやろうとした瞬間にレイドライザーの部隊が

或人目掛けて攻撃し始めたのだ。

「!!」

やばいと思つて離れた或人が最後に見たのは・・・去つて行くアークであつた。

「くそ！アークの野郎俺達のベルトを勝手に壊しやがって!!」

「けどどういう意味だ？アークは何故Z A I A スペックを知っていたんだ？」
不破がそう呟くと・・・亡が起きてこう言った。

「それは私がアークの命令で造らされたからです。」

「亡！大丈夫か!？」

「大丈夫です滅、ですが事は我々の想像を遥かに超えるようです。」

亡はそう言って周りを観察した。

既に多くの人間がこの製作所に来ていたのだ、見ただけで200人近い人間が痛々しい姿でそこら中にいた。

そして中には救急車に乗って来た医者までもが来たのだ。

「病院は既に機能停止状態です！あるだけの機材を持ってきたのでここを臨時の病院

として扱います！」

医者の一人がそう言つて早急に治療と手術準備を始めていた。それを見終えた亡はこう続けた。

「それとですが私はアークに命じられウィルスを造りそれを凶に流させました。」

「ウィルスつて・・・まさかこの状況を想定して!!」

「恐らくですがアークは初期から我々を使い捨てにすると言う事を想定していたようです、ベルトのない我々が戦うともなれば01以外にあり得ないかと。」

それを言われるが今の戦力では無理である事も承知の上であるがどうすればいいんだと・・・何やら高そうな車が現れたのだ。

するとそこから慌てて出て来た人間を見て翼は・・・驚いていた。

「父上！」

「翼！怪我はないか!？」

「え・・・ええ大丈夫です。」

それを聞いて良かったと八紘が呟くと或人を見てこう言った。

「少し話がある。」

「特機が・・・全滅!!」

翼はそれを聞いて顔が蒼白していた。

最早自体は最悪な方向に向かっておりもしノイズが現れたら

目も当てられない程の厄災となると思っていると八紘はこう続けた。

「だが奇跡的に生き延びた者達がいて今彼らは街から退避している所だ、私の部下が保護しているから大丈夫だろう。」

「生き残りがいるのですか!?!」

「ああ、藤堯と友里と言っていた。」

「良かった。」

それを聞いてほっとしていると八紘はこう言った。

「事態は深刻だ、最早奴を・・・天津を止めれるのは君達を置いて他にない。」

「だけどアイツ何処行つたのか分からなくて。」

或人がそう言うのと八紘はパソコンを出すとこう言った。

「奴らが行く場所だがこのルートの先には心当たりがある。」

「・・・何かあるのですか？」

或人がそう言うのと八紘はああと言って・・・こう言った。

「そこには我が風鳴家の汚点とも呼ぶべき存在にしてこの国を裏から操るフィクサー……『風鳴機関総帥』にして先代特機二課の初代指令にして私と弦の父にして翼の祖父……」

……怪物『風鳴 訃堂』がいる鎌倉の秘密基地がある。」

4 2—3

鎌倉の山中、そこには巨大な日本庭園が立っていた。

然しそこから放たれる雰囲気は厳かではなく・・・悪意のようであった。

まるでそこにいるのは鬼ではないかと言っても可笑しくない程の濃密な殺気の中でアークはレイドライザー部隊に向けてこう言った。

『これより風鳴機関の制圧作業に取り掛かる、生存者は一人として出すなよ。』
「了解。」

その言葉に淡々と答えたレイドライザー部隊は四方八方に散らばって行った。
『さあ・・・全ての清算を付けようではないか・・・』

・・・風鳴 訃堂。』

「風鳴 訃堂……まさか爺ちゃんを殺そうとしてたのつて!？」

「ああ間違ひなくだ、あの男は自分の理想に反する人間を排除すると言う前時代的思想が強くあつてな。100を超えているのにもかかわらず未だに現役だ。」

『100!』

或人はそれを聞いて驚いていた、間違ひなく祖父よりも長生きしていると見て間違ひないと思つてしていると八紘はこう続けた。

「あの男は国家主義者……つまる話がこの国だけしか考えない男で恐らく是之介氏が描く理想とはかけ離れているんだ。」

「この国だけつて……他の国に住んでいる人達を何だと思つて」

「ああいや違ふぞ或人君、奴が見ているのは国民ではない。」

「?」

「……この国の土地以外は考えてねえって事か？」

キンジがそう聞くと八紘は力なくそうだと答えてこう続けた。

「そうだ、あの人のとつてこの国にいる人間ではなく土地だけしか

見ていないのだ。」

「そんな……何だよそれって……!!」

或人にとつて理解できないものであつた、国とは人がいてその人たちが国を

創っているんじゃないかと思つてると八紘はこう続けた。

「或人君、君が何を考へているのかは理解できるが奴にとつては理解すら

出来ていない奴は戦前日本の負の遺産……いや、国と人との繋がりを全く持つて理

解しようとしめない老害だ。だからこそ人とA Iの共存とそれを世界中に広げて

『和を以て貴しとなす』是之介氏の考へとは相容れなかつたのだ、人を道具としか見てい

ない奴にとつて父は……あの男は酷く恐怖したのだろう。」

「恐怖つて……何で爺ちゃんに？」

或人は何故だと思つとイズはこう答えた。

「恐らくですが先代の思想は訃堂氏にとつて自分よりも高く

光り輝いていたからではないでしょうか？」

そう言つとそうだと八紘はこう答えた。

「是之介氏の思想は私だけじゃない、多くの人間が彼の言葉を聞いて共感を抱き繋がりをも大切にしこの国を繁栄させた彼に対して父は嫉妬して・・・」

超えることが出来ない存在だと認識した奴は殺すことにしたそうだがそれを止めてくれたのが弦だ。」

「そーいやあいたな、あの紅いスーツ着た大男か。」

不破がそう言うのと八紘はこう続けた。

「元々公安にいたアイツは父の計略に気づいて食い止めてくれたからこそ

デイブレイク事件では是之介氏を守れたのだが今あいつは敵としている・・・」

頼む或人君！弦を・・・弟の目を覚まさせてくれ!!」

頼むと言って頭を下げると翼もこう言って頭を下げた。

「私からもお頼み申す、叔父上を止める為にも協力してくれないだろうか!」

この通りだと言うと或人はこう答えた。

「当たり前でしょ？翼ちゃんに八紘さんにとって家族なんだから助けたいって気持ち俺でもわかりますし皆は如何かな?」

そう聞くと全員がこう答えた。

不破

「当たり前前だろうが、家族を想ってるんなら答えなきゃな。」

刃

「頼まれた以上は任務として遂行する。」

キンジ

「俺さ……両親全員死んじまって兄貴も死んじまったけど家族の絆って

そう簡単に消えねえって事くらい知っているし生きているならやり直せれるって

分かってるから手伝うぜ。」

ベル

「私も両親の事は覚えておりますわ、心で繋がっているこのきずなは

消させはしません。」

クリス

「まあ、暇だし付き合ってやるか！」

響

「私にとって父さんしかいない、家族がまた出会えたのならばやり直せれるんじやな

いかと思ってる。」

雷

「こうなったらとことん付き合ってやるさ。」

亡

「私は滅の夢を叶えるためにいます。」
それで滅はと聞くと滅はこう答えた。

「アークを倒す、そしてこいつらの絆を取り戻す。それが俺達がやる事だ。」
そう言いながら滅は迅が使っていたスラッシュライザーを握りしめていた。
それを聞いて八紘はこう思っていた。

「(是之介さん、貴方が願ったヒューマギアと人間との共存がこの様な形で
実現しようとしています。私もやらなければいけないのですね。)」
そう思っていると八紘はこうも言った。

「それとフィーネと『カ・デインギル』・・・塔ともなると思いつくのは
特機の基地がある街にある大きな複合ビルだがあれで何かするとしても人が多いし
何よりもあれには我々は関わっていないからフィーネが手出ししたとは

到底思えん、何か我々が見落としている所があるとすれば・・・
待てよフィーネは櫻井女史が憑依して・・・櫻井・・・まさか!!」

「お父様、一体何を思いついたのですか!?!」

翼がそう聞くと八紘はまさかと思つてこう言った。

「櫻井女史が関わっていて尚且つ巨大な塔が造れるところで

それを隠せれる場所となると一つしかない!!」

八紘はそう言う翼は・・・顔を蒼白してこう言った。

「まさか我々の基地！」

「ああそうだ！正確には二課の地下秘密基地!!あそこその物が

『カ・ディングル』だ!？」

そして特機基地。

「クククク、まさかこれ程の事態になっているとはこれは好都合だな。」

そう言ってフィーネは血だまりの廊下を伝ってある場所に向かつて行った。

それは何かを納める場所であったがフィーネは懐からある物を取り出したのだ。

それは・・・紅い金属のナニカであった。

「この膨大なエネルギーを使えば私の夢は成し遂げられる……さあ起動しろ『カ・デイ
ンギル』!!」

そう言つてそれを納めた瞬間に……紅い光が周りを覆つてその力が……
システムを起動してしまったのだ。

アーク、ファイネ、そして或人達、三者三様の戦いがクライマックスに
差し掛かつてきたことにまだ誰も気づいていない。

4 2—4

「全く哀れなものだな天津よ、まあお主の様な小物ではそ奴を使いこなすなど無理と言う事だな。」

訃堂はアークに向けてそう言いながら刀を抜くとアークはサウザンドドライバーを取り出してこう言った。

『風鳴 訃堂、お前の役目はここで終わりだ。』

そう言うくとアークはゼツメツスピノサウルスプログライズキーをセットすると・・・もう一つを取り出したのだ。

それは・・・嘗て響が使っていたプログライズキー・・・

アークプログライズキーであった。

《ゼツメツスピノサウルス・アーク》

『変身。』

「シンギュライズ When the ZERO LIFE crosses, the THOUSAND ARK is born. Presented by ARK」

その音声と共に黒いエネルギー体が現れるとそれらが一つになってまるで泥の様に

混ぜ合わせると現れたのは・・・白と黒のサウザーであった。

「それが今のお主か。」

訃堂はそう言つてアークサウザーを睨んでいた。

全身に太いパイプがあつちこつちに突き刺さつており他にも幾つものケーブルが縦横無尽に張り巡らされていた。

そしてアークはサウザンドジャツカーを抜いて・・・戦いが始まつた。

「遅いー！」

訃堂はそう言つてアーク相手に向けてその一閃を退けたのだ、

常人ならば対応できないアークの攻撃を確実に受けきつた辺り達人を超えていると思えるであろうと思うがアークはこう言つた。

『成程、それが貴様の攻撃能力か。理解した。』

「ふん！笑わせてくれるわい、儂の攻撃はこの程度ではなくそして貴様は

ここで終わり我が目的であるこの国の護り・・・護国の礎となつて貰うわい!!」

そう言つて攻撃しようとしてその腹を一字に斬り捨てようとして……
受け止められたのだ。

「何じゃと?!」

『貴様の攻撃は見切っている。』

アークはそう言つてその手で止めた刀を……破壊した。

「馬鹿な……護国挺身刀・群蜘蛛が……貴様……!!」

訃堂はそう言つてアーク目掛けて今度はその拳を……鋭い拳を手刀にして貫こうとして……その腕をアークはサウザンドジャッカーで斬り捨てた。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

訃堂はその腕から溢れ出る血に驚きながらもふん！と言つて筋肉だけで止血したのだ。

『人間とはそこまでできるのか、データに無いな。記録しよう。』

「かかかか!片腹痛いわ!!貴様みたいな機械など後で幾らでも

造つてやるわ!!」

訃堂はそう言いながら笑っていると……何人もの黒服の男たちがやつて来たのだ。

『ふむ、伏兵か?』

「その通り、こ奴らは我が風鳴に仕えし緒川の者達。Z A I A スペックどころかチップすら埋め込まれておらぬ我が私兵よ！貴様を破壊して今度こそ護国の」

『攻撃開始。』

アークがそう言った瞬間に・・・上空から幾つもの巨大なレーザーが風鳴本家を襲った。

「ぬぐおおおおおおおおお!!」

訃堂はあまりの事で吹き飛ばされて暫くすると眼前に映るは・・・
遺体すら無くなった消えた私兵と瓦礫の中で佇んでいるアークだけであった。

「馬鹿な・・・」迄とは。」

『風鳴 訃堂、お前はここで終わりだ。』

アークがそう言うのとサウザンドジャツカーにアメイジングコーカサス
プログライズキーを差し込むと音声 flowed。

『ブレイクホーン』

その音声と共にサウザンドジャツカーから黒くて長い角が現れると
それを訃堂目掛けて構えるところ言った。

『消えろ訃堂、私を利用したその罪はその命で贖うが良い。』

ド ン エ ス ク エ ル | オ

そしてそれが振り落とされるのを見て訃堂はこう言い捨てた。

「ありえん……たかが機械如きにこの儂が！護国の礎とさせんものに奪われるなどあつて」

そう言いかけて……消滅した。

オール

エクスエンド

そして巨大な爆発と共にこの国を影から支配していた風鳴 訃堂は誰にも見送られることなく、知られることもなく消滅した。

人を利用し、民間人すら捨て駒とし、国と言う箱を守るがために中にある中身を見ておらず護国と言っておきながら・・・先達の為に戦っていると言いながらも

彼らが何故戦っていたのかと言う理由を考える事もなく己の野望のママ動いていた男は利用してきたと思っていたアークによって地下にある研究所風鳴機関諸共歴史から完全に葬られたのだ。

そしてアークが変身を解除すると上空から巨大な兵器が姿を見せた。

『ギーガー』

巨大な自立型ヒューマギア統率兵器であり数だけで10体以上はあった。

するとアークは全員に向けてこう言った。

『これで私の邪魔をする人間が片方消えた、後は奴だ。』

そう言うとその視線の先にあるのは・・・小日向達がいる街の方向であった。

そしてそことは別方向のデイブレイクタウン。

そこは既に・・・惨劇としか言いようがなかった。

大半のディスプレイの構成員とヒューマギアが倒れていた。

全員生きているようであるがその中にいる人間・・・ファイネがこう言った。

「ちいいーんこはハズレか!!仕方ない・・・戻るとするか・・・?」

そう言いかけて何だと思っていると・・・自分の足に構成員の一人が

掴んでいることを知るとファイネは嫌そうな顔でこう言った。

「私に触るなクソ虫が！」

「グギやあ！」

その声と同時に構成員目掛けて茨の鞭で構成員を貫いて殺した。

そして抜き放って・・・こう言った。

「折角だ、消えろ雑魚が。」

そう言つてファイネは辺り一帯を無差別に攻撃して基地が・・・

崩壊してしまつた。」

そしてファイネが出ていくとそこには大量の・・・ゼツメツプログライズキーが入つたカバンを持つて現れたのだ。

そしてファイネは月を見てこう言つた。

「見ていろバラルの呪詛よ・・・お前を壊して私は統一言語を取り戻して

あのお方の下に私は辿り着いて見せる!!」

そう言つて去つて行つた、後にあるのは焰が燃え上がる

デイブレイクタウンだけであつた。

43—1

訃堂が死ぬ1分前

『カ・ディングル』の正体が二課その物……ならば父上！

急ぎ街にいる人達を退避せねば!!」

「ああそうしたいが……今や自衛隊に警察、果てには一課に至るまでの

面々の殆どがZ A I A スペックを保有し今やレイドライザーになって暴れている。

今動いたとしても我々だけで戦うのは自殺行為だ。」

「……緒川さんの所の忍び達は？」

「僅かな面々は私の指揮下で動いている、今は緒川の本家の邸宅で

軟禁されている山下専務を救出している最中だ。」

「山下さん大丈夫何ですか!？」

「ああ、如何やらこれ以上死体を。それも飛電インテリジエンスの

幹部クラスがいなくなると経営が成り立たなくなると考えたのだろう、軟禁して

然る後に葬る算段であろうがこれ以上奴らの言いようにはさせん……!!」

八紘はそう言って目つきを鋭くさせる中で或人はホツとしていた、福添を失って

これ以上誰かがいなくなるのは耐えられないと思つていたからだ。

「そして今後についてだが……ああ済まない。」

八紘はそう言つて電話を取る中で翼がこう言つた。

「急いで街の人達を避難させなければ……何時ノイズが出てくるか分かつたものではない！」

「だけどここを守るためには戦力があるしそれにはここ以外で

安全な場所となると」

或人は何処かに大勢の人間を入れる場所はないかと思つていと……
響がこう言つた。

「デイレイクタウン。」

『?』

「あそこは今私達ディスプレイが基地化していてそれなりの人間が

生活できるように整備し直していたはずだからそれなりの人間は入れるはずだ。」

「……確かにあそこなら早々人は来ない、それに周りにはバリケード、

唯一入れるところと言えばあのトンネルだけが潰してしまえば奴らが入れ場所は無くなるはず……よし、そこならば何とかなるかもしれん。」

刃がデイレイクタウンの事を思い出して可能だと言うと或人は

全員に向けてこう言った。

「よ〜〜し！じゃあ動ける人達は車を運転させて動けない人達を運ぶ！！そして俺達は『カ・デインギル』を止めるぞ！！皆行くぞ！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオ！！』

「何だと！」

『!?!』

八紘が大声でそう言うので一体何だと思っていると八紘は少し慌てた様子でこう続けた。

「それで機関は・・・そうか分かった、それで敵は・・・動いた。場所は？・・・そうか

分かった、また何か分かったら連絡してくれ。」

そう言つて電話を切ると翼がこう聞いた。

「父上、一体何が起きたのですか？」

そう聞くと八紘はこう答えた。

「・・・風鳴機関と本邸がアークによつて壊滅し生存者は0、父訃堂は消滅したらしい。」

『！！！』

それを聞いて全員が目を大きく見開くが八紘はこう続けた。

「それだけが監視していた部下からの報告によればアークは大軍を率いて・・・リディアン音楽女学校に向かつているのが確認されたそうだ。」

「リディアン・・・まさかアークの目的は!？」

「ああ、我々と目的は同じ・・・いや、我々は壊すのに対してアークは何かを利用する気らしい。ここからはスピードが物を言う、急いで向かうぞ!」
八紘がそう言うと全員がデイブレイクタウンに向かつて行つた。

「何だ・・・これは・・・!!」

響はそう言つて辺りを見渡して・・・愕然としていた。

何と辺りにあるのは・・・死んで炭とかした人間とボロボロになつた

ヒューマギアがそこらかしこにあつたのだ。

デイスペアの本部を兼任していた工場跡地の惨状を見て一体何が起きたんだと思つて誰かいないかと思つて探すと・・・物音が聞こえた。

そして響がその場所に向かうとそこにあつたのは・・・下半身が瓦礫に埋もれて身動きが取れないチエケラであつた。

「チエケラ!!」

或人と響がチエケラに近寄るとチエケラがこう言つた。

「凶・・・社長・・・来たん・・・だね?」

「どうしたんだチエケラ! 一体何が起きたんだ!!」

響がそう聞くとチエケラはこう答えた。

「いきなり……襲って来た……女の人の……金髪で……変な鎧付けた。」
「!!……フィーネか。」

クリスはその言葉からとある人間を思い出すとキンジもこう言った。

「確かネフシユタンの鎧を持ったあの女だよな。」

キンジはクリスに向けてそう聞くとああとクリスは肯定した。

そしてチエケラはこう続けた。

「あいつ……皆を……殺して……プログライズキー奪って……何処か行った。」

「ゼツメツプログライズキーをか!？」

それを聞いてチエケラは頷くとイズがこう言った。

「兎に角整備します、洗さん手伝ってくださいますか?」

「分かっていますとも!私がいられることをしないと!!」

そう言ってチエケラを引っ張り出すと下半身はボロボロで

今にも壊れそうな感じであった。

「凶……気を付けて……」

チエケラがそう言うのと同時に分かったと言って響はもう一度……

死んだ仲間達の遺体に手を伸ばして……こう呟いた。

「今まで私達から奪っておいて未だ奪うのか・・・」

「・・・だったら私も奪ってやる・・・お前から全てを・・・!!」
「そう言っている響の顔はまさに・・・鬼の様であった。」

43—②

そして夕方ごろの山中。

生き残った人たちが街から逃げ延びて僅かな荷物と食料を持って

山を越えようと歩いていた。

レイドライザーによって街は既に火の海と化しておりこれまでに多くの人間が死んでしまった。

そんな中で最前列には未だ若い女生徒の一人・・・未来が先導していた。

「皆さん！あと少しでダイブレイクタウンに繋がっている道路に

辿り着けます！それまで頑張ってください！」

そう言つて老人や子供たちを助けながら進んでいる中で創世が出てきてこう言つた。

「ヒナ！こつちのほうなんだけど避難する人たちの中に車いすに

乗っていた人たちもいて人手が足りないんだって!!」

「分かった！じゃあ大人の人達何人かその人たちのサポートに回らせて!!」

「分かった！」

「未来さん！此の儘のスピードですと真夜中になってしまいます!!何処かで休憩出来る場所を用意しないと。」

詩織がそう聞くと小日向は暫く考えて・・・こう答えた。

「ここら辺にキャンプベースとかなかった?」

「・・・ここら辺ですと確か前に学校の林間合宿で使った場所って

ここら辺だったよね?」

「ええ確かに、確かそこから森の開けた場所がありましたので

全員入れる筈です。」

「じゃあそこで皆で食事した後各自でデイブレイクタウンに繋がってる道路まで

後は一気に突き抜けるしかないね。」

「ですが休憩はどうするべきかですが。」

「休憩して・・・レイドライザーが来たら皆全滅しちゃう、だったら

ここは鬼になつても進ませるしかないよ。」

未来が確かな言葉でそう言うのと詩織は暫くして・・・こう答えた。

「分かりました・・・皆さんには私から伝えます。」

「御免ね本当に。」

「いいえ、私が好きでやっているのですから。」

そう言つて詩織が離れていくのを見て今度は弓美が現れてこう言つた。

「ヒナツチ！大変だよ!!」

「どうしたの弓美ちゃん!？」

「今下の方を覗きに行つたらレイドライザーが車でこっちに向かつて行くのが見えたんだ!!」

「何台くらい?!」

「多分見たただけだけど・・・7台くらい!」

「7台も・・・!!」

それを聞いて未来は最悪だと思つていた。

今現在いるのは自分達加えて400人くらいで大半が子供と老人位だ、7台も。

それらに一台につき10人くらいと考えるならば最大70人くらいだと考えて・・・

絶望した。

たった一人で10人以上を軽く殺せれる位の性能を發揮するのが

70人もいるともなれば自分達は最早死ぬと言う未来しか思いつかないのだから。

「どうしよう・・・!!」

弓美が恐怖している表情でそう聞くと未来は・・・こう答えた。

「皆を一塊にしないで大体・・・6人一チームのメンバーで行動させて、

一人でも多くの人達を、デイベレイクタウンに向かわせるの！」
例え誰に何があつたとしても、そう言う弓美はそれを聞いて恐怖した。
戦争と言う今までは映画か漫画でしか見ていない世代にとつて生き残るために
誰かを見捨てる、と言う選択を迫られることに、弓美は改めて今の自分の状況を
理解して分かつた、と顔面蒼白させて全員に伝えに行つた。

「・・・響。」

未来はそう言つてこの状況は2年前と同じなのかなと思つていた、

ノイズに追われて誰もが死にたくないと言つて前に行くがあまり半分近い人たちが
踏みつぶされて死んだことと今の状況が似ているんじゃないかと思つて・・・

頭を振つてこう言つた。

「ううん違うよこんなの！ 相手は人間でノイズとは違う・・・けど今の

レイドライザーはノイズに似て人を襲つている・・・如何すれば良いの響・・・！」

未来はそう言いながら傾き始める心を必死で保とうとしていた。

そして夜になりつつある暗闇の中で未来は創世達と何人かの人達と共に山の中を走っていた。

何処かでだだだだ！と言う音と共に悲鳴が聞こえる中で未来は折れかけた心を

必死で保とうとしている中であと少しと思つて走っていると弓美から・・・悲鳴が聞こえた。

「キヤアアアアアアアア!!」

そう言つて振り向くとそこにいたのは・・・弓美の後ろにいた生徒の一人が

レイドライダーによつて撃ち殺された所を見てしまったのだ。

するとその背後から他のレイドライダーとは違うタイプ・・・

紅いレイドライダー。

・・・弦十郎が纏つた仮面ライダーがそこに立っていた。

「や……ヤバイよ未来……!!」

弓美がそう言うのと弦十郎がこう言った。

「人類滅亡……人類滅亡……人類滅亡……」

そう言いながら炎を出してそれを放つと全員がそれを見て頭を伏せると

未来よりも前にいた先輩が其れに焼かれた。

断末魔を上げることなく全身が燃え上がってそれが木々に燃え移り始めてきたが全員はそれを見て恐怖して立ち止まってしまった。

そして量産型レイドライザーが全員で未来達目掛けてマシンガンに向けて全員が死ぬと思つた中で未来はこう思つていた。

「未だ死ねないよ！私は未だ……未だ……」

……響に何も謝っていないんだから!!」

そう思つていると森の向こうから……歌が聞こえた。

B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r t r o n

「この声……!!」

未来はそう言つて森の向こうから聞こえる音から足音が聞こえて何だと思つていと現れたのは……シンフォギアを纏つた響が現れたのだ。

「ウおりゃアアアアアアア!!」

そしてその儘響はレイドライザー目掛けて……殴りかかった。

42—3

BGM 撃槍 ガングニール（本作バージョン）

響は歌を歌いながら弦十郎相手に戦っていた、歌を使って。

敵を討つがために

「絶—対に、逃れられないこの命のお—もさ！壊された絆もう戻れない世界！」
そう歌いながら周りにいる量産型レイドライザーを蹴散らしていく中で

弦十郎が前に出ると相手どっている量産型毎・・・響目掛けて炎を放った。

「!？」

それを感じて響が避けた瞬間に量産型レイドライザー達は吹き飛ぶのを見ると
響は弦十郎に向けてこう言った。

「は！仲間事倒すとは外道に堕ちたようだな貴様は！」

「人類滅亡・・・人類滅亡・・・人類滅亡・・・。」

「語るべき言葉もないと言う事か・・・ならお前をここでぶつ飛ばす！」

そう言ううと歌を奏で続けた。

「めんどくさい！言葉なんて関係ない!!今—共通する—ENEMYをKILLFA

ししー！」

物騒な歌を歌いながら響は近接格闘で仕留めようとするが弦十郎はそれを難なく受け止めるだけではなくカウンターで攻撃し返したのだ。

「いっほ。」

その衝撃で肺から酸素が無理やり吐き出されるような感覚で吹き飛ばされて木々をなぎ倒しながら吹き飛ばされてしまった。

「が……は。」

ダメージが酷いのであろう口から血を少量吐き出すと響は立ち上がりとするが足元がふらついて然も視線がバラバラで焦点が合わなくなっていた。

そんな中で弦十郎が来るのを見て響はふっと笑いながらこう思っていた。

「(ごめんね皆…… 仇討てそうにないかも。)」

そう思いながら歌を歌い続けた。

「とめど……なく……こぼ……れる……私……の……願ひ。」

そう言いながら相打ち覚悟でガントレットのエネルギーをチャージして来い！と思っている弦十郎の背後から…… 未来が木の棒で叩いたのだ。

「ヤメテーーーーー!!」

こんという音であつたが弦十郎は未来に振り向くと未来は震えあがつたが

尚も棒で叩きながらこう言った。

「響から離れて！響から．．．私の大切な友達を傷つけないで——！！」
そう言いながら棒で叩くが弦十郎は何も感じない様に未来を．．．
手の甲で払うかのように未来を弾き飛ばした。

「ぐおぼ。」

「未来——！！」

響はその様子に悲鳴の様な叫びをあげると未来は其の儘近くの木にぶつかると
弦十郎は未来に近寄ってその首を掴むと未来はあぐと言いながら
弦十郎に向けてこう言った。

「響を．．．友達を．．．傷つけさせない．．．！」

「何しているんだ未来！離れるんだ!!」

「私……響に謝りたい!」

「!?」

「あの時……守れな……かった……響は……誰よりも……優しい……から……あの時も!……誰かを守ろうと……必死に……抗って……

いたんだ!!……私は……それを……知って……いたの……に……

何も言えずに……只……傷つくアナ……タヲ……見ている……事し……か……

出来な……かった……だから!?!……今度……は……私が……響を……守る……つて……決めてた!!」

だからと言って未来は弦十郎の腕を掴むが弦十郎は掴んでいない方の腕で
焰を出してこう言った。

「人類滅亡……人類滅亡。」

そう言いながら焰を未来目掛けて放とうとするのを見て響は……

「止めろー！ー！ー！！」

そう言いながら拳を握りしめて一目散に未来の所目掛けて走った。

「(何で体が動くんだ！私は人類を滅ぼそうとしていたのに！！・・・
何で未来を・・・助けようだなんて)」

——それがお前さんの目的だからじゃねえのか？

「 (!!この声って・・・!!)」

響はそう思いながら何処からか聞こえてくる声を聴いていた。

——人間ってさ、繋がりを求めて色々するよな？ 繋がりを壊すのは簡単だけど繋ぎ直すなんてそんな大変な事なんて誰もが出来る訳じゃねえ。

「(何が言いたいんだ！はつきり言え!!)」

——おお怖い怖い、結局さ。人間は一人だと寂しいんだって事さ、だからこそゼイスペアを作ったんだろ？ 繋がりを失った皆で繋がりを直すためにさ。

「(繋がりが・・・私にはもうそんな繋がりが何て)」

——あるじゃねえか？ お前の目の前にさ。

そう言つて目の前に人を模つた光が現れると光はある方向が指をさすとその先にいるのは・・・未来であつた。

——だからさ、その繋がりをもう一度繋ぎ直すんだ。アンタの

アームドギアはそれが出来るんだ。

「(・・・これが?)」

ーああ、その手で掴んだ物を離したくないって思いがシンフォギアに宿っているんだ。

だからさと言って光がはじけ飛んだその先にいたのは・・・紅い長髪の女性であった。

「(貴方は・・・)」

ーだからさ、頑張れ。アタシの後継者。

そして響は歌を紡いだ。

「崩壊！後悔！！限界！！向！かえ！そーの！先！に！ー！！進んだ

その先にーわた！しが！！のーぞーんだ明日へー！！」

そう言いながら走って行くとガントレットから・・・凶のクロウが現れると

それを弦十郎目掛けて放つが弦十郎はそれを片腕で受け止めるが響はニヤリと

笑いながら押し込もうとするとガントレットから・・・ロケットが噴射していくところ続けた。

「見！つ！け！ー！て！ー！行くんだ！私の！！帰りを待つ・・・

『未来ってお日様みたいでポカポカするよねえ。』

『ええ？何ソレ々々？』

『ううんとねえ・・・いるだけで心が落ち着くんだ。』

・
・
・
・
大切な友達の居場所に――――！！

その時に弦十郎はある物を見た・・・嘗てガングニールの所有者であったと同時にあの事件で死んだ翼の相棒にしてツヴァイウイングの片割れ。

天羽 奏に。

NEO ∞ STERDUST

そして穿たれたその刃は其の儘弦十郎に当たつて弦十郎はその威力に伴つて・・吹き
飛んでいった。

「響……私……私貴方に」

「……立てるか？」

響がそう聞くが未来はえええと言っていると響は未来を肩で担ぐとこう言った。

「一緒に行くぞ……今度は『2人』で一緒にだ。」

「!!」

それを聞いて未来は驚くが響は素知らぬ顔で歩くのを見て未来は……

泣きそうにながらも笑顔でこう答えた。

「うん！」

その光景はまるで……未来が嘗て願った思いを叶えるようであった。

そして何処かの世界

「・・・誰かが歌っているのかな？」

紅い長髪の女性はそう言いながら夜空を眺めていると・・・声が聞こえた。

「おおい行くぞ！****」

「おおよ師匠！」

そう言つて日本刀を片手に女性は何処かへと去つて行つた。

何れ会うであろう拳を槍の如く振るう少女が煌く流れ星を見るがために

4 2 — 4

「これで終わりだ。」

滅の言葉と共に爆発音が聞こえた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そう言って吹き飛んだのは白い仮面ライダー、緒川が変身しているタイプであった。

「あ・・・ぐ」

「話にもならない。」

滅がそう言って変身を解くと雷が出てきた。

「よう、終わったようだな滅。」

「雷か、そっちはどうだ?」

「おお、こっちは終わってるぜ?ぶつ飛んだ連中は全員山荘の物置にぶち込んで今亡がコントロールをシャットダウンしている最中だ。」

「ならばこいつを連れていけ、俺は少し早めに町へ行く。」

そう言って滅が行くのを見て雷はハイハイと言って緒川を引きづって行った。

山荘では生き残った人たちが或人たちが持つてきた食料を食べながら生き残った事に泣きながら感謝していた。

更に言えば怪我人については刃と不破が別室に移動させていた。

「生き残ったのは12名か、その内怪我人は4人で更に内訳で重傷者2名。」

「聞いた話だが400人以上はいたって話だぜ？」

「・・・つまる話生き残ったのは僅か3%か、我々がもつと早く来ていれればと思ふとやりきれんな。」

「仕方ねえよ、食料に医療品とかを車にぶち込んで今いる所を

算出したなきやいけねえんだから：背負う義務はねえぞ。」

不破はそう言いながら刃を慰めている中で電話が鳴ったので出て見ると

相手は・・・響であった。

「おお、そつちはドウダ？」

『ああ、こつちは4人生き残りがいる。それと気を失っている二課の奴はさつき雷が

引き取って行ったから私はそっちに向かう。』

「分かった、氣い付けろよ。」

不破がそう言うのと響は何も言わずに電話を切ったのでまあ良いかと思っていた。

「よう亡、追加で頼むわ。」

「分かりました、こちらに運んでおいて下さい。」

亡がそう言うのと雷はとある機械の近くに運んでおいた。

嘗て刃が亡を不破からサルベージした時に使った機械をベースにして

改造した奴で脳内にあるチップのシステムをこの機会を使って

キャンセルさせているのだ。

そんな中で亡はある事をしていて、それがこれ。

「矢張りアークの目的もリディアン、『カ・ディングル』狙いともなると

こちらでも対策を講じなければなりません。」

アークの行動の監視である、アークが放っている電波を辿っている中でリディアンから放たれるエネルギー派を見て何だと思っていた。

「この出力は核とは違う、だが聖遺物から発せられるエネルギーとも異なる・何だこれは?。」

「今着いたぞ。」

「着いたよーよー!!」

「生きていますよね・私達。」

「怖かったよー!!」

響の言葉に続いて創世達もそう言っていると未来がこう聞いた。

「ねえ響……もしかして生き残っている人達って」

「……そうだ、お前達で最後だ。」

「!!……そうなんだ。」

未来はそれを聞いて目を大きくした後に納得した後はどうするのかと響はこう答えた。

「アークを倒す、そしてフィーネを倒す。後はどうするのか

まだ考えてはいない。……仲間は全員死んでしまったからな。」

そう言っていると未来はそれを聞いて悲し気な表情を浮かべている中で亡から通信が届いた。

「何だ？」

『たった今二課の面々とAIMSの戦闘員の意識が戻りました。』

それを聞いて全員が中に入ると二課とAIMSの戦闘員達は全員・・・
暗い表情であった。

当然だ、守るべき人々を殺してしまったのだ。其れも何人も

手にかけてしまった事に罪悪感に押しつぶされていく中で・・・クリスが
こう言った。

「あゝあ、これが大人とは笑っちゃまうよな本当に。」

「雪音？」

「手前ら大人は何時だつてそうだ、夢を語っておきながら

それを成す事すらせず到手前の欲を叶えることに必死で子供の事なんて二の次だ。

手前ら大人なんて所詮はアタシらとなんも変わんねえ餓鬼なんだよ！」

そう言っている・・・弦十郎がこう呟いた。

「・・・そうかもしれないな。」

「叔父上!？」

翼がそれを聞いて驚く中で弦十郎はこう続けた。

「俺達は君達子供が武器を持たないで済むように頑張っていた、

だがノイズを倒すにはシンフォギアを必要とし若い連中を最前線に立たせるたびに
胸を締め付けられる程の苦痛を味わっていた。だからこそZ A I Aが製造した

レイドライザーを見て俺は確信していたんだ、『これで翼を夢の続きに連れてつてやる』と思つていた……いや、思い込んでいたんだ。」

「夢? ……何なの翼ちゃんそれ?」

或人がそう聞くと翼はこう答えた。

「……しばらく前からアメリカのプロデューサーからオフアアを

貰つていて来てみないかと誘われていたんだ。だが私はシンフォギアの奏者であると同時に防人だ、その様な事は無理だと思つて諦めていたんだ。」

「勿体なよ! 翼ちゃん凄い歌美味いんだから皆に聞かせて元気にさせなきゃ!」

「そうだ……俺達は翼の夢を叶えさせるがためにZ A I Aの甘言に乗せられて……飛電と敵対してしまいそして最後にこれだ!」

そう言つて弦十郎は近くにあつた壁に拳を叩きつけると……

ぶつ壊れたのだ壁が。

「……アイツは人間か風鳴?」

「叔父上はちよつと変わつてるから。」

「いや無理でしょ壁壊すなんて人間じゃないよあれ?」

響と或人がそう言つているとイズがこう続けた。

「恐らく彼の握力は常人の数十倍かと推測されます、恐らくは

チンパンジー並みかと推測されます。」

「それでイズさん・・・チンパンジーって握力何キロ？」

「大体300キです。」

「うえそれ人が出せるもんじゃないでしょ!？」

不破さんより怖ええと言っていると弦十郎はこう続けた。

「俺達は利用され!守るべき人々や仲間を殺して更に虐殺を続けていた!!」

これで人々を守るなど・・・それどころか内通者であつた櫻井によつて裏から良いように使われて俺達はまるで道化だ・・・!!」

そう言つて最後に項垂れるかのように座り込むと弦十郎はこう続けた。

「俺達は結局ただ強い人間によつて操られていた只の人形だ、

この始末を如何やつてつければ良いのか・・・俺には分からない・・・!!」

そう言つてしていると或人が・・・こう言った。

「だつたら見つめましょうよ?俺達で。」

?

「俺達に何が出来て何が出来ないのかを考えてさ、皆で乗り越えていこうよ?

辛い時も悲しい時も嬉しい時も皆で分かち合つてさ。」

ね?とそう言っていると・・・キンジがこう言った。

「そうだな、俺達に何が出来るのかと言うならそれを見つけないきゃいけねえもんな。」

「はい、誰にだつて間違いはある。ならばそれを知つて未来にどう生かすのかを考える方が良いと思いますよ?」

ベルもそう答えるとクリスもこう言った。

「アタシだつて間違つた・・・けど今はこいつらと共に償う道を考える、それがアタシが戦う理由だ!」

そう言っていると外から・・・友里達が出てきたのだ。

「指令!!」

「友里君! 藤堯君もどうして!!」

「俺達ここ迄逃げてきたんすよ、それで今後どうするか考えたんですけど話し合つて・・・俺達が出来た事をするって決めました。」

「私達だつて二課何ですよ? 償うと言うならば私達もサポートに回ります。」

だからと言つていと弦十郎は・・・済まないと言つて頭を下げた

暫くすると・・・こう言つた。

「俺がやれること・・・ならば先ずは二課を奪還する! そしてフィーネとアークの陰謀を阻止する事を目的とする!!」

「了解!!」

それを聞いて緒川達がそう答えると刃がこう言った。

「ならばAIMSも手伝わせてくれ、こいつらも何かしたらしいからな。」

それを聞いて振り向くとAIMSの戦闘員達が全員頷くと弦十郎は分かったと言つてこう続けた。

「ならば先ずは基地に入る事だが矢張りシエルターからが無難だ。」

「あそこならパソコンの電源も入りますから侵入できるはずです。」

「けどドウヤツテ?あそこにはレイドライザーの大群が」

友里がそう言っていると不破がこう言った。

「そつちは俺達が相手してやるさ、奴らにはこつちも用があるからな!」

そう言つて気合十分に言う人或人がこう言った。

「よし・・・俺達皆でアークとファイネを止めて・・・皆でこの局面を

乗り切ろうー!!!」

《オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!》

それを聞いて全員がそう答えた。

そしてリディアンでは。

「貴様がアークか。」

『ほう．．．貴様がフィーネか？』

悪意と悪意が出会っていた。

4 2—5 (1 1)

「初めましてと言っておこうかアーク、私が・・・ファイネだ。」

そう言つてファイネは櫻井から姿を変えるとアークがこう言つた。

『人間とはそこ迄姿形を変えることが出来るのか?』

「は！馬鹿を言うな人に造られし偽りの命風情が!!私とはある技が使えてな、それを使っているにすぎん。」

『何だそれは?』

アークがそう聞くとファイネはふんと鼻息荒らしてこう答えた。

「教えてやろう、私は全人類に私の遺伝子情報が書き込まれていてな。

フォニックスゲイン・・・シンフォギアや聖遺物に溢れ出るエネルギーを

感知すると私の魂はそれに共鳴してその体を依り代として復活できるのだ!」

それを聞いて普通は驚愕するところだがアークはほおと言うだけであつたので感に触つたのであろうファイネは苛ついてこう言つた。

「つまり私は人間がいる限り何度でも蘇ることが出来るのだ!貴様の様に態々ヒューマギア等と言うガラクタに比べれば私の方が何時でも蘇ることが

出来るのだ!!」

アハハハツハと笑っている中でアークはこう言った。

『それで』

「?」

『話は終わったかファイネ?』

「何?」

『私はお前が何者なのか知った事ではない、私が望むのはただ一つ・・・人類絶滅だ。』

「は!人類などくれてやる。私が望むのはただ一つ・・・月を壊す事だ!!」
ファイネはそう言つて月に指さしてこう続けた。

「あれがある限り人々はバラルの呪詛から抜け出す事も出来ず!

分かり合えず!!争いばかりを起こすのだ!?!だからこそバラルの呪詛たる月を破壊して統一言語を蘇らせ私が人類を正しく導く!

その為には貴様は邪魔だアーク!!」

『ならば貴様を殺して・・・貴様が保有する荷電粒子砲を貰い受けよう。』

「!!何故それを!?!」

ファイネは何故知っていると知っていると思っているとアークはこう答えた。

『簡単だ、貴様らの設計図がまるで荷電粒子砲の発射プロトコルと似ている

データや電力の消費量を考えてその位と考えたまでだ。』

「成程な、ならば……ここで死ねアーク!!」

ファイネがそう言って茨状の鞭で攻撃しようとするのとアークは

サウザンドジャツカーを構えて鞭を往なして攻撃を始めた。

紫色の刃状でエネルギー体が現れるとアークはそれをファイネ目掛けて放ったがファイネはそれを弾き飛ばすがアークは更に追撃として一回柄を押して炎を出して放った。

「ちいー!」

喰らったファイネは火傷を負うがネフシユタンの鎧の能力で再生するがアークは更に追撃としてアメイジングヘラクレスプログライズキーを挿入して

巨大なエネルギーをファイネ目掛けて放った。

それを見てファイネは黒いエネルギー球体を形成して攻撃して相殺した。

『!以前よりも性能が上がっているのか。』

「当たり前だ!雪音が使っていたのは借りもの!!私と言う真の使い手で

あるならばこの位軽いものだ!!」

『ならば何故歌を歌わないのだ?』

「歌か……あああれか。あれはただ単に壊れた聖遺物のエネルギーを底上げするための只の只の付け加えだ!!私が保有する完全聖遺物の前には只のガラクタ何だよあんなの!!?」

そう言つてフィーネは更に大きな球体を放つとアークはそれを紫色の刃で防御するも弾かれてしまったのだ。

『グウウ!!』

その爆発にアークは防いだ瞬間に視界が遮られたことに厄介だと思つたその時に……体に茨状の鞭がアークを締め付けた。

『ほお……だがこの程度。』

破壊してやると思つた瞬間にアークが……突如として体の自由が利かなくなり始めたのだ。

『な……何が起きて……!!』

一体何だと思つてみるとアークはフィーネを見て……驚いていたのだ。

フィーネが携帯電話で何かを操作していたのだ、そして自身の足元には何か……赤い光が自身を覆っているのが見て取れたのだ。

『何だ……こいつは?』

アークがそう言つた瞬間にフィーネは笑いながらこう答えた。

「ああ、教えてやろうアーク。貴様の体の持ち主である天津が風鳴達を

洗脳させるがために使ったチップ、あれはZ A I A スペックにも

応用しているのだと分かってな。それを解析して私は貴様の足元に

ジャミングシステムを仕込んでおいたのだ！貴様がそこに行く様に態々な!!」

『この程度・・・ハッキングして!!!』

そう言った瞬間に一時的であるが・・・天津の意識が戻ったのだ。

「アーク・・・私をよくも乗っ取ったな！道具風情がー！ー!!」

そう言った瞬間にアークがもう一度乗っ取ろうとした瞬間にフィーネは

巨大な黒い球体を作り出すとアークに向かってこう言った。

「さらばだアーク、なあに貴様は後で有効活用してやるさー!」

そう言った瞬間にフィーネはそれを放ってアークは・・・諸に受けてしまった。

『がああああアアアアアアアアアアアア!!!』

それを諸に喰らったアークは其の儘吹き飛ばされたと同時にZ A I A スペックが・

破壊されたのだ。

そしてサウザンドアークドライバーを天津から取り上げるとフィーネは

それを見てこう言った。

「さてと・・・この力を有効活用させてもらおうぞアーク。」

そう言ってフィーネはサウザンドアークドライバーをネフシユタンの鎧に近づけさせるとネフシユタンの鎧と融合して・・・黒いエネルギーが辺り一帯を覆って・・・大爆発した。

「もうすぐリディアンだ!」

翼が車の中でそう言う到着いたその場所を見て・・・驚いていたのだ、何せ辺り一帯が大爆発があつたかのように巨大な穴があり学園が崩壊していたからだ。

「これは一体・・・。」

翼は辺りを見てそう呟くと或人が・・・こう言った。

「誰かいるぞー！」

『!!』

それを聞いて全員が驚いていると穴の中から・・・誰かが現れたのだ。現れたのは・・・黒い鎧を身に纏った女性であった。

漆黒の鎧。

肌の部分に黒いライダースーツ

鎧と鎧の間にある・・・茨が絡みついたかのようなパイプ
そして何よりもひときわ目につくのはその顔であった。

右は人の顔なのに左の顔が・・・アークなのだ。

「・・・フイーネ？」

クリスがそう呟くと・・・それはこう答えた。

「ああいたのか・・・用済みのガラクタ。」

42—6 (11)

「あれが・・・ファイネなのかキンジ？」

「いや、俺が見た時にはあんな風じゃなかったぜ？」

キンジが或人に向けてそう言っつて否定すると刃は或人達に向けてこう言つた。

「よく見ろお前達、奴のあのもう半分のあれは・・・アークだ。」

それを聞いてそう言えばと思つていと滅がこう聞いた。

「何故貴様がアークのフェイスガードを付けている？」

そう聞くとファイネはこう答えた。

「ああ、簡単よ。アイツは私が倒してその力を私のモノにしたのだ！」

「何だと!？」

不破はそれを聞いて驚いているがファイネはこう続けた。

「これで奴の力を乗っ取つて私は・・・」

「……月を破壊し！人類に掛けられたバラルの呪詛を解いて見せる!!」
「!!」

それを聞いて全員が目を見開いて驚いているとベルがこう言った。

「そんなの不可能ですわ!」

「そんな事をすれば地球の重力に異常が生じ最悪この星の生態系が狂ってしまいます。」

イズがさつき行ったラーニングで得たデータを言うがフィーネは鼻で笑ってこう返した。

「は!これだから機械風情は分かっているようだな。」

「何だって!」

それを聞いて或人は怒りを露わにするがフィーネはこう続けた。

「あの月こそが人類の争いの象徴!あれを破壊しない限り統一言語は復活せず、世界は争いを続けてしまうのだ!!」

「そんな証拠何処にありやがる!手前勝手に決めてんじゃねえ!!」

キンジがそう言うがフィーネはキンジとベルに向けてこう言った。

「何故関係ない貴様らがそれを言うのだ、キサマラハこの世界の理の外から現れた別世界の人間の癖に何故こいつらに味方をするのだ？」

フィーネの言葉を聞いて不破と刃は何言ってるんだと思っっていると滅がこう呟いた。

「成程な、だからこそこいつらの情報が無かったのか。」

そう言っているとキンジはこう答えた。

「は、簡単さ。ただ助けたい、それだけで人間は戦えるんだよ。」

そう言ってるデザートイーグルを構えるがフィーネは呆れたと言っただけでこう続けた。

「貴様は何も理解していないようだな、人間など自分さえよければ

それで良いのだと歴史が証明している。」

「だったら俺達が証明してやる・・・人間の価値が

お前が思うような物じゃないって事を！」

或人がそう言っただけで0・0ドライバーを付けるとキンジもドライバーを付けて

不破と刃はショットライザーを構えて翼とクリスはシンフォギアの宝石を持ち響は奏でる準備をしベルはレイドドライバーを付けると滅と雷もある物を付けた。

雷の方はレイドドライバーだが滅は・・・違う奴であった。

それは小刀みたいに小さな・・・機械の剣であった。

スラツシユライザー、嘗て迅が使っていたそれを或人が滅に託した物だ。

ここに来る前。

「滅、これをお前に渡すよ。」

そう言つて見せたのは紫色の・・・スラツシユライザーであつた。

「これを・・・何故だ？」

滅がそう聞くと或人はこう答えた。

「だつて今お前フオースライザー使えないしそれにさ、こいつはお前が持っていた方が迅だつて喜ぶつてそう思うからさ。」

「・・・何故そう言い切れるんだ飛電 或人？」

迅と話したのかと聞くと或人はえへへと言つてこう答えた。

「・・・友達だから、そして何よりも多分迅がいたら
そう言ってたんじゃないかなってそう思うからさ。」

「迅、俺達を見守ってくれ。」

そう言って滅はスラッシュライザーをセットした。

《D・ジャンプ》・《インフェルノウイング》

《バレット》

《ランペイジ・バレット》

《ラツシユ》

《ハント》

《ドードー》

《ポイズン》

《《オーソライズ》》

『『Kamen raider kamen

Raider Kamen Ra

ider

『』PURGE RAIZE

『ツイン・レボリューション！Road to Glory has to Lead to Growing, path to change Zyampor Winging! 仮面ライダー00Z!! It's never over.』

『フルショットライズ！Get hering Round! ランページガトリング！Mammoth! CheetaH! Hornet! Tiger! Polarrbear! Scorpion! Shark! Kong! Falcon! Wolf!』

『撃ちまくるステイ！シューティングウルフ！The elevation increases as the bullet is fired.』

『ラッシングチーター！Try to outrun this demon to get left in the dust.』

『Dangerous warning! スティングスコルピオン！Stung with fear by the power claws.』

『TYENGE FAITYING』

『TYENGE DOWDOW』

その音声と共に全員が変身した中で際立つのは雷と滅である。

雷の方はマギア時代の風貌を残しつつ仮面ライダーとしての見た目を

最大限に活かしている。

滅の方は全身に縛られていたベルトが無くなった代わりにアシッドアナライズが両腕に装備され腰には弓と剣が一体化した兵装、《スコープオン・アード》を装備している。

そして或人は全員に向けてこう言った。

「行くぞ皆!!」

その掛け声と共に全員が前に出て・・・攻撃を始めた。

43—7 (11)

攻撃と同時に先ずは或人から攻撃するがフィーネはそれを鞭で往なすと其の儘払い落とした。

「ぐあ!？」

「社長!!」

それを見たキンジとベルは左右から攻撃しようとする。フィーネはそれを感知して茨状の鞭を使って2人を縛り上げると其の儘・・・背後で射撃しようとしていた不破と刃目掛けて投げ放った。

「「ぐあ!？」」

其の儘4人は弾き飛ばされると今度は響がフィーネの前に現れて殴りかかるもそれを・・・片手で受け止めたのだ。

「何!？」

「軽いなあ！融合症例!!」

フィーネはそう言いながら鞭で貫こうとするもそれを・・・

滅がスラッシュライザーを使って受け止めた。

「無事か凶。」

「滅! どうして!？」

「お前と俺は同士だ、ならば守る事が俺の責務だ。」

「責務か!?! は!! 所詮はアークによって踊らされたに過ぎない只の幼稚園児の玩具風情がでしゃばるな!!」

フィーネはそう言つて攻撃するが滅はそれに対して最小限の動きで避けていると左から翼が、右からはクリスが、背後からは雷が同時攻撃するとフィーネはそれに対して背後に攻撃してくる雷を拘束して其の儘クリス目掛けて投げ飛ばして翼に対しては腕でガードすると翼がフィーネに対してこう言つた。

「フィーネ! 貴様の事は立花響から聞いたぞ!! あの時、あのコンサートの日に貴様はネフシユタンの鎧を盗まんがためにノイズを送り込んだのか!!」

「そうだ、あの時私はネフシユタンの鎧を手に入れる為にあのコンサートで実験して奪つたのだ! まああの時にあの出来損ないも死んでくれたおかげでスムーズに事が運んだがな。」

「出来損ない・・・奏のことをそう呼ぶのか貴様は!!」

「出来損ないであろう?! 『LINKER』が無ければシンフォギアにもなれない半端者風情に力を渡したのだから逆に感謝されるべきであろうが!!」

フィーネの言葉に翼は怒り心頭でこう言った。

「貴様が……貴様のせいだ……奏をよくも……!!」

そう言いながら翼は剣を巨大にして叩き潰そうとするがフィーネはそれに対して……パイプを使って縛り上げたのだ。

「ぬぐ……貴様!」

「貴様はもう用済みだ。」

そう言つて黒いエネルギー体が拳に纏つて殴ろうとしたその時に……滅がスラツシユライザーでパイプを斬り落とすとその後ろで或人が……デュランダルで叩き斬ろうとするとフィーネはそれに対して避けながらこう言つた。

「飛電か!祖父も孫も私の邪魔をしおつて!!」

「祖父!……爺ちゃんの事知つているのか!」

或人がそう聞くとフィーネはそれに対してこう答えた。

「ああそうだ!奴はあのコンサートで何かをしていたと読んでいて

解析してたところを訃堂は察知してな!!脅迫したのだ!!『これ以上

関わるのならば貴様の孫の命は無いぞ』と脅してな!奴はこちらの要求通りに

データを削除したんだ!!」

「爺ちゃんが……俺の為に……。」

或人はそれを聞いて呆然としている中でファイネは或人に対して

攻撃しようとする。……その間に響が割って入って蹴り飛ばすところ言った。

「何をしているんだ飛電 或人！イマハ戦いの真つ最中だ!!」

ボーっとするならばこの戦いが終わってからにしろ!!」

「あ……ああ！そうだ!!」

それを聞いて或人は攻撃を再開した。

そしてそんな中で亡達は何故か未来達と共にシエルターに入ると内部からコンピューター操作を始めた。

目的はシステムを乗っ取る事であったが……ある物を見て驚いていた。

「何だ……このエネルギー量は」

「全く！キサマラハ呆れるな！！いい加減に消えろー！ー！ー！！」

そう言った瞬間に黒いエネルギー球体を幾つも作ると其の儘・・・

辺り一帯を薙ぎ払った。

『ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』

それに対して或人達は吹き飛んでしまったがそんな中でファイネは携帯端末を操作するところだった。

「さあ目覚めろ！『カ・デインギル』！！」

そう言った瞬間に学校が崩壊して現れたのは・・・巨大な塔であった。

「まさか・・・コレガ。」

「そうだガラクタよ！『カ・デインギル』、これで月を破壊して統一言語を

復活させさせて……あのお方にこの思いを届けさせるのだ————!!」
そう言つて起動すると幾つものシステムから赤い光が零れだし始めたのだ。

「不味いです、此の儘では発射されます。」

「何だと！何とかならんか!？」

弦十郎が亡に向けてそう聞くが亡はこう答えた。

「無理です、発射シークエンスが解除できないため何とかする方法は……！」

そう言っているところある事を思いついた亡はこう呟いた。

「あります……一つだけ方法が。」

そう言うのと亡は突如として配線を引っこ抜いてそれを……自身の耳に

取り付けて何かをしていた。

「終わりなのだ貴様らは！さあ見るが良い！！世界が一つになる時だ！！」
そう言つて発射されると同時にクリスが何かしようとしていると・・・
辺りで何かが発射される煙が見えた。

「何だありやあ！！」

クリスがミサイルを出そうとした瞬間にそう言っていると見えたのは・・・
ギーガーであった。

「ギーガーだと・・・一体何を」

するんだと言っているのと滅に亡から通信が入った。

「どうした亡・・・まさかこれはお前が!？」

「その通りです、私がギーガー全てを操作しています。」

「何をしているのだ貴様は！下手したらお前のシステムがショートして」

「滅、私には夢がありません。」

「何？」

「ですから私の夢は・・・滅の夢を叶えさせること、そして何よりも・・・ヒューマギアと人類を繋ぎこうとする飛電 或人と迅の夢を見たいです。」

「亡、お前・・・!!」

滅が何か言いかけているとギーガー達は月軌道に入ると

そのエネルギーを利用して・・・巨大なシールドを展開し始めたのだ。

だがそれには莫大な演算処理が必要となってしまうがためにそれを

今亡一人でカバーするには・・・無理が生じる。

「あ・・・アアアア。」

「亡さんー」

未来が亡に近寄ると亡は……こう呟いた。

「私の……ゆめ……」。

そして『カ・デインギル』が発射されるがそれをエネルギーシールドで止めたのだ。

「馬鹿な！たかが機械如きであれを止めるだど!!それをするには

スーパーコンピュータ機器を何台も使わなければいけないと言うのに
一体何処から!!」

そして光が収まり始めると同時にギーカー全機が……大爆発したのだ。

『カ・デインギル』、攻撃終了。ギーガー全機使用不能。」

友里がそう言っている中で亡の方を見た。

バチバチと亡から火花が飛び散り始めていた。

そして椅子から転げ落ちようとする未来が・・・亡を受け止めたのだ。

「亡さん！亡さん!!」

未来が亡を揺すつっていると亡は・・・泣いている未来を見てこう聞いた。

「何故・・・泣くのですか？」

「え？」

「私は・・・人類滅亡・・・を・・・しようとして・・・いたのに・・・」

何で・・・泣くの・・・ですか？」

人の敵であった自分に何故泣くのかと聞くと未来は泣きながらこう答えた。

「当たり前だよ！だって貴方は皆を!!この世界の人達を救ってくれたんだよ！私にとつて貴方は響の友達!!」

友達が怪我しているのに笑う人なんて何処にもいないよ!!」

「とも・・・ダチ」

未来の言葉を聞いて亡は未来の眼から零れ落ちる涙の一滴を指で拭うと・・・
こう言った。

「涙・・・人が・・・何故・・・感情を・・・持つのか・・・理解できない・・・だから
こ・・・そ・・・人は・・・未来を・・・作れる。」

そう言つて亡は未来の頬に手を置いて・・・こう言つた。

「ありがとう・・・未来・・・凶の・・・トモ・・・datai」
その言葉を最後に亡の眼のセンサーがバチバチとノイズを発して等々・・・
消えてしまった。

「亡さん・・・亡さん・・・亡さん！亡さん!!」

未来が何度も声を掛けるが亡は薄くだが・・・笑みを浮かべて何も言わなかった。

「んんん!!」

未来の慟哭と共に落ちた涙が亡の眼に落ちていった。

それはまるで亡が・・・泣いているかのような光景であった。

44—1 (12)

空に星が綺羅めた、荷電粒子砲の斜線上にその巨大な星が光った瞬間に滅が膝が崩れるかのように落ちてこう言った。

「亡が・・・死んだ。」

『!?!』

それを聞いて或人達が目を見開くとファイネはそれを聞いて・・・
苦虫を噛み潰したような顔でこう呟いた。

「ちいい、機械の人形如きに私の計画を邪魔させられるとは気に食わんな。」

「・・・何だと?」

滅がファイネの言葉を聞いて何だと思っているがファイネはこう続けた。

「そしてそんな奴に計画を潰させるなど・・・あつてはならん事だ!!」

そう言いながら滅に向けて茨状の鞭を向けると滅は・・・怒ってこう言った。

「貴様・・・亡を愚弄する気か!!」

「ふざけるな! 私の願いを成就させるための今日この日まで時間をかけていたのに人のなり損ない如きに私の計画を邪魔されたのだ!! ここまでされて

怒れる物か!!」

「貴様は……貴様は俺が倒す!亡の仇だ!!」

滅はそう言つてスラッシュライザーを使うがそんな中で或人も参戦すると

滅は或人に向けてこう言つた。

「貴様!邪魔立てする気か!?!」

「俺は亡の事をよく知らない……けど俺はフィーネが許せない!

亡が作つたこの瞬間を俺達が守るためにも!!こいつを……フィーネを倒す!」

或人がそう言つてデュランダルを構えるとフィーネはこう言つた。

「何故貴様がデュランダルを扱える?貴様はシンフォギアでもないのに

何故それを……完全聖遺物を使いこなすことが出来るのだ!!」

そう言うが或人はこう答えた。

「俺がこいつを使えるのは分からないけど俺はこいつを使つてお前を倒して

爺ちゃんの成したかった正しさを俺は必ず成し遂げて見せる!!」

そう言うのとフィーネは鼻で笑いながら攻撃すると翼と響、クリス、キンジ、ベル、雷

も加わつて攻撃するが滅は腰に装備されている『シザーアロー』を

ブレードモードにして攻撃を更に苛烈化させるがそんな中で或人は

デュランダルから放たれた小さなメタルホッパーを大量に使つて

聞こえた。

「まさか・・・未だ動くと言うのか『カ・デインギル』は!？」

翼の言葉を聞いて全員が目を見開いて『カ・デインギル』の方に目を向けるとフィーネはニヤリと笑ってこう言った。

「当たり前であろう？兵器がたった一発でしか打てないと言うのは

只の出来損ないだ、『カ・デインギル』は何度でも打てるぞ?」

「ですがそれではそのエネルギーを何処から賄っているのですか?」

「この電力だけでこの巨大な兵器の砲撃は出来ないはずですし

電力の再チャージから発射までのサイクルが短すぎます。」

「そう、それなのだ。本来ならばその偽善者が持つているデュランダルの

エネルギーを使って攻撃したかったがそれは今その偽善者が使っているがために

代用を用意しなければいけなかった。だがそれに神は見捨てなかった。」

そう言うときフィーネはこう続けた。

「それは紅い鉱石、とある日に雷が轟いていてな。

その時に小さなエネルギー反応があつてそれを探索していたら

とんでもないエネルギー量を持った物体であつたから私はそれを保管して

調べている中でデュランダルを移送するという任務で私はノイズを使って

出来レースを思いついたのだが私の策略を脅かす存在が2つあった。」
そう言うのとフイーネは或人、滅の順でこう言った。

「二つは飛電 或人、貴様とゼアがいる事からノイズを召喚する際の

発生するエネルギーを隠さなければいけなかったが貴様がZ A I Aに負けてくれた
お陰で誂堂の監視の元ゼアを手に入れたからクリアしたがもう一つ。

それがアークの存在だったがデイスペアの保有するプログラムズキーと

アークを手に入れたことにより最早障害は消えたも同然・・・見よ！

月が崩壊する瞬間を!!」

フイーネの言葉を聞いて全員がどうすると思つていと・・・雷が翼に近づくとこ
う聞いた。

「おい風鳴翼、お前に対してはデータがあるから一つ協力させてくれないか？」

「協力?・・・何だ一体?」

翼は雷に向けて何だと聞くと雷はこう答えた。

「なあに對した事ねえさ、『カ・ディングル』をぶつ壊すための作戦だ。」

44—②(12)

『カ・デインギル』のエネルギー反応を確認したシエルター内部にて行動している弦十郎達はヤバいと思っていた、此の儘月が破壊されれば重力異常を引き起こして世界が大混乱に陥ってしまうのだからだ。

ギーガーは亡が命を懸けた防衛と引き換えに全機失っており再びエネルギーシールドを発生させることが出来ないがために打つ手なしかと思っていた時に雷と翼が『カ・デインギル』に向かい残りはファイネ目掛けて立ち向かうのが見えた。

「一体何する気だ！」

そして地上では既に戦闘は激化していた。

刃はライトニングホーネットに変身して

サンダーライトニングブラストファイバーを、ベルがファイティングポライドで

攻撃するとファイネはそれを・・・黒いエネルギー体を作って全て弾き飛ばした。

「グああ!!」

「刃!」

「ベル!!」

不破とキンジは2人を見て畜生と違って不破がランページエレメンタルブラストでファイネ目掛けて足元を氷結させて焰と雷のエネルギーをぶつけようとしますが

ファイネはASGAR Dで防御すると巨大な黒いエネルギー体を生成して

それを不破目掛けて放った。

「がああああ!!」

「不破さん!」

或人が不破の方を向くと余りの威力に変身が解除されてしまったのだ。

するとファイネは雷と翼を探すと2人は・・・僅かな窪みを踏みながら上にへと駆け上がった。

「或人社長、如何やら雷と翼さんは直接『カ・デインギル』を上空から

破壊するそうです。」

「何だつて！ 良し・・・俺達はフイーネを近づけさせない様にするぞ滅!!」

「そのつもりだ！ 亡の仇だー！ー！！」

滅はそう言つて攻撃を更に強くしていた。

「このままいけば頂上だ！」

「あと少しだけ!!」

雷はそう言いながら翼と共に頂上に向かって行くが中腹迄行くと

『カ・ディングル』の外面部から何かの小さな砲台が多数現れて雷と翼目掛けて照準を合わせていた。

「迎撃兵器か！」

「そんなもん押し通すぜ!!」

雷がそう言って双剣を構えた瞬間に砲台から……多数のライダーモデルが現れたのだ。

なんとその全てが……ゼツメツプログラムライズキーのライダーモデルなのだ。

「!?」

一体何だと思つて翼が巨大な剣を出して天ノ逆鱗を使って防御すると大爆発が2人を襲つた。

「あれは……ファイネ貴様! デイスペアの連中のプログラムライズキーを!!」
滅が怒つてそう聞くとファイネは笑いながらこう答えた。

「ああそうだと! 奴らから奪つたプログラムライズキーを使って万が一に備えて『カ・デインギル』の外側に制御装置兼迎撃装置として配置していたが

まさか役に立つとはな!!使えない雑魚共の置き土産にしては良い代物だな。」
フィーネの言葉を聞いて響は・・・ブちぎれてこう言った。

「使えない・・・雑魚共だ・・・そうやってお前は上から見上げて支配者ぶって私達を・・・
デイスペアの皆の運命を壊して高笑いする貴様を私は!・・・絶対に許さない!!」

そう言った瞬間に響に体が・・・黒化し始めたのだ。

「何だ?・・・黒くなっていく?」

キンジは一体何なんだと思っているとフィーネはほうと言つてこう続けた。

「融合症例の症状の一つか?これは興味深いな。」

「どういう意味だフィーネ!」

或人がそう言うのとフィーネはこう答えた。

「簡単だ、奴の心臓には二年前に死んだ天羽 奏が使っていた

ガングニールの欠片が心臓に突き刺さっているからだ!」

『!..!!』

それを聞いて何だつてと思っているとフィーネはこう続けた。

「奴の類まれな身体能力とシンフォギアの発揮はそれによつて

行われていたのだ、本来ならば私が奴を手に入れようとしてあの街から

ここに来させようと画策したのだぞ?態と民衆を騒ぎださせてお前の家を

放火させるように誘導したのに貴様はこの町に来なかつたどころか

デイスピア等と言う子供の遊び連中を組織してアーク側についてしまったから計画に支障を見出しそうだったが・・・ナンダ簡単に事が進みそうだな。」

アハハハツハと笑うのを聞いてキンジはこう呟いた。

「この屑女が！」

「屑？私は人類をより良き未来に誘おうとする神であるぞ！それを貴様は!!」

「は!!より良き未来だ？手前が作るクソツタレナ未来なんてこつちから

願い下げだな!!」

それを聞いてフイーネの顔に怒りが滲み出てくると・・・

クリスが怒りの声でこう言った。

「フイーネ・・・手前言つてたよな？痛みが人と分かりあえる手段だつて・・・だから

こそアタシは耐えてきたんだけどやつと分かつたぜ・・・

人の痛みを本当に知るべきは手前だつて事がな!!」

そう言つて肩からミサイルを出して攻撃すると滅とキンジも加わつて

攻撃を再開する中で或人が響に近づいてデュランダルからライダモデルを出して

銀色の繭らしきものを作り出していた。

「俺の時もこれで何とかなつたから・・・俺がこの子を救うんだ!!」

「おい．．．生きてるか風鳴翼？」

「う．．．雷か．．．？」

翼は雷が自身の手を掴んでいることに気づくとそこで目にしたのは．．．変身が解除された雷であった。

「私は確か．．．!!」

それを思い出して翼がいたがるのを見て雷がこう言った。

「お前がああ剣を出してくれたからな、だがああの攻撃で変身が解除しちまってな。」

そう言いながら中腹にある砲台を見てこう言った。

「如何やらあの砲台は特定の距離で攻撃する奴らしいがライダモデルの攻撃は手厳しいぜこいつは。」

「だがどうするのだ? . . . 第2射迄時間は」

「いや、如何やらあれには膨大なエネルギーと同時に精密な射撃が要求されちまうからリソースを裂いて月の攻撃を遅らせることが出来るって事だ。」

「ならば上に上がらせてくれ! 防人としてあれを」

「いや、お前はここで終わりだ。」

「え? . . . なあ!!」

翼は突如として雷が手を離れたことに驚いていると雷は何かを翼目掛けて投げ放ったのだ。

それは・・・ドードーのゼツメツプログライズキーであった。

「そいつを滅に渡しておいてくれよな。」

じゃあなど言つて落ちていく翼を見届けた後に懐からあるプログライズキーを出す・・・こう呟いた。

「じゃあな、社長さん、滅。」

44—3 (12)

「まさか『カ・デインギル』にプログライスキーを搭載させて自衛兵器として運用するとは……!!」

弦十郎はその光景に対して畜生と思っていると緒川が慌てた様子でこう言った。

「指令！先ほどあの『カ・デインギル』について調べてみましたが

これを見て下さい!!」

そう言つてアル映像データを見ると弦十郎は目を大きくしてこう呟いた。

「何だ……これは!!」

一方翼はと言うと……。

「危うかったぞ雷の奴め！私を落としておつて!!」

翼はそう言いながら窪みを利用して僅かな足場にて着地するとあの砲台を思い出していた。

「先ずはあの砲台をどうするべきか……あれ程の威力ともなると

チャージの幾分かを割く結果ともなるがそれでも『カ・ディングル』を何とかするには……あれしかないな。」

翼はそう言つて剣を構えた。

そして雷はと言うと……。

「さてと、こいつを使わないとな。」

そう言っ出て出したのは……自身が滅亡迅雷、net加入前に使っていた自身のプログライズキー、『宇宙野郎 雷電』であった。

嘗て自身の意識データとして使用していたプログライズキーを何故持っているのかと言うと……お守りレベルだ。

自分に何かあつた時の保険として持っていた奴だが

これが何の役に立つんだらうなと思うが作戦を考えていると下から何かが……飛翔してきたのだ。

それが何なのかと思つて出てきたのは……翼であつた。

炎鳥極翔斬

推奨BGM 絶刀・天羽々斬

「このスピードで行けば例えあの兵器でも落とす事など不可能だ！そう……私の命を代償にしても」

そう思いながら翼は尚も飛翔していた、この威力で突つ込めば自分だつて死ぬことすら分かつているのにもそれを遂行する辺り

それは自身が防人であるべきことだとそう思い込んでいたのだ。

「（これで良いのだ・・・私は防人、この国にいる人達を守らんがために戦う者！そしてその為にこの身命を賭すことに何の後悔も・・・何も）」

そう思っていると或人とした会話・・・自身がアメリカに

オファアがある事を聞いて自分ごとの様に喜んでいた事を思い出すと少しだが・・・嬉しかった自分を思い出すところも思っていた。

「（私が死んだら彼は悲しむのか？それともこの国を守ってくれたことに感謝してくれるのか??・・・どちらにしても私にはもう関係ない事だ！）」

そう自分の考えを振り切るかのように更に空高く飛んでいる中で中腹に迄来ると例の砲台が姿を現したのだ。

「矢張り出たかあの砲台！」

翼はそう言いながらそれ目掛けて更にスピードを上げていた。

「よせ！攻撃されちまうぞ!!」

雷がそう言っているが翼は何も気にしないような速さで砲台に突っ込むと砲台からライダモデルが一齐に発射されるも翼はそれを避け切った

『カ・デインギル』目掛けて一直線に向かつて行っていくとライダモデルが全て・・・翼目掛けて追尾してきたのだ。

「何！追尾式か!？」

「アハハハツハ無駄なのだよ貴様らには！ライダーモデルを操作できる

フオースライザーには自立システムがあるのを察知して私が組みこんだのだ!!
もはやお前達には私の計画を阻止する事など出来ないのだ!!」

アハハハツハとフィーネが笑っているなライダーモデルがすべて翼目掛けて
殺到して・・・命中したのだ。

「か・・・は」

『翼（ちゃん）（さん）!!』

全員がそれを見てそう言う中で翼はこう思っていた。

「（あと少し・・・あと少しで『カ・ディングル』を落とせたのに

力及ばずに・・・フィーネの野望を阻止する事も敵わずにこんな所で!!）」

そう思いながら翼は奏の事を思い出すと翼は・・・涙を流しながらこう呟いた。
「奏・・・私どうしたら良いの？」

教えてよと言いながら落ちていくと・・・雷が翼を救ってこう言ったのだ。

「んなもん手前が見つけければ良いだろうが？手前の翼でな。」

そう言いながらお姫様抱っこして地上に辿り着くと翼をよいしょと言って下すと雷はこう続けた。

「今手前は生きているんだろ？だったら死ぬまでその答え見つけて来いよ。」

「だが・・・どうすればいいんだ？」

翼がそう聞くと雷は笑ってこう答えた。

「俺には弟がいる、そいつが目指すあの宇宙と月・・・フィーネに

ぶっ壊されたくねえからな。あの月に上るって言うでつかい夢を

叶えさせるためにも頑張らねえといけねえだろ兄貴としてさ。」

そう言っていると翼の頭を撫でてこう締めくくった。

「夢があるんなら掴んでこいよ、手前が叶えさせるためにな。」

「だが・・・貴様にはプログライズキーが」

「あるぜ、とっておきがな。」

雷がそう言ってレイドドライバーに・・・自身のプログライズキーを

差し込んだ。

『SPACE PAILOTT RAIDEN』

そしてそのプログライズキーが無理やり開かれると電流が雷の体を包み込むと雷はニヤリと笑ってこう言った。

「行くぜー……!!」

そう言つて電光石火の勢いで雷が走つて行つた。

その速さはまさに雷光と言つていい程の速さで通常のヒューマギアでは

あり得ない程の速さであつたがためにまさかと思つて調べてみるとイズは

或人に向けて通信してこう言つた。

『社長！雷を止めて下さい!!此の儘では雷が崩壊してしまいますー!!』

「何だつて!」

或人はそれを聞いて雷を止めようとするといふとフィーネが背後から攻撃してくるのでそれを受け止め乍らこう言つた。

「邪魔するな!」

「貴様を放る訳にはいかんからな!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

雷は大声上げながら走って行った、その間にも体が・・・
バラバラになりそうなのだ。

何故彼が走るのか？何故人を助けるのか??それは誰にも・・・本人ですら
分からないが一つだけ言えるとすればただ一つ・・・雷は只夢を守るがために
走って行っているのだ。

そして中腹に差し掛かると再びライダモデルが一斉砲撃して雷目掛けて
襲い掛かって来て・・・全てを受け止めたのだ。

「雷!?!」

或人の言葉に滅も振り向くとそこで目にしたのは・・・両腕を失った雷が
口に刀を加え乍ら頂上目掛けて走っていたのだ。

「止めろ雷!死ぬ気か!?!」

滅が雷に向けてそう言っていると通信が・・・雷の言葉が聞こえた。

『叶えろよ滅、手前が本当にやりてえ夢を見つけれー!!』

「雷ー！ー！ー!!」

滅の言葉に雷はニヤリと笑いながら其の儘頂上目掛けて走って其の儘・・・刀を砲台にある制御システムがある場所に思いつき突き刺したのだ。

光世界の中で雷は・・・こう言った。

「昴・・・兄ちゃんは・・・飛べたか？」

「あ……アアアアアアアアア!!」
「ファイネの絶叫と共に『カ・デインギル』が爆発すると或人と雷は……大声でこ
言った。」

「兄貴ーーーーー!!」

「雷ーーーーー!!」

「あ・・・アアアア。」

そしてその光景を見た響はそう言うしかなくそして翼は・・・こう呟いた。

「見届けたぞ雷、貴様の・・・夢の姿を。」

そう言いながら涙を流して跡に残ったのは・・・雷が使った翼の刀と・・・

「兄さん？」

関わった人たちの想いでだけであつた。

44—4 (12)

『カ・デインギル』破壊を確認……ですが……滅亡迅雷 net の雷の
反応消失を確認致しました。」

友里がそう言いながら最後ら辺になると暗い声色になったと同時に弦十郎は
それを聞いて……そうかと呟くと近くにあつた机に思いつき……殴つて壊すと
座つてこう言つた。

「ヒューマギアが世界を救つた……俺達は今まで彼らを迫害してきたのに彼らはそれ
でも……畜生……!!」

弦十郎はそう言つてこれまでの自身の行いを振り返つて悔やんでいる中で
弓美が泣きながらこう言つた。

「何でヨ……何で……何で滅亡迅雷が私達を守るために戦つてるの!?

私達人類が憎いからこうやって戦争しているんじゃないの!

どうして私達を助ける為に犠牲になるのよ!!」

弓美は如何やら訳が分からないよと泣きながらそう言うとき未来が涙を浮かべて
こう答えた。

「まだ分からないの？」

「！」

「皆戦ってるんだよ？ ヒューマギアや私達人類が本当に手を取り合って

またあの時の様に過ごせれる様に戦ってるんだよ！ 体を張って、命を賭けてでもやり遂げようとして！！」

だから見届けてと言うと弓美は涙を流しながらも映像を見ていた、その光景を記憶し後世に語り継がせるように。

破壊された『カ・デインギル』の真ん前でフイーネは絶望した表情で見ていると或人はこう呟いた。

「雷……亡……!!」

月の破壊を阻止するがために散って行った仲間達を思い出している中で

「雷だ．．．。」

「滅！大丈夫か!?雷があれを．．．雷は!!」

何処だと聞くと滅はこう答えた。

「雷は『カ・デインギル』を壊さんがためにあれに突っ込んで．．．!!」

「そんな．．．ファイネーロー!!」

響がそう言った瞬間にファイネ目掛けて拳を使って殴りつけながら

ファイネに向けてこう言った。

「貴様みたいな奴がいるから！人を人とも思わん奴がいるから私達が

生まれるのにそれを自分勝手に殺すような貴様なんかロー!!」

「ほぎけ小娘が！恋したことすらない貴様にこの想いが

分かってたまるかローロー!!」

ファイネはそう言いながらもこう言った。

「嘗て人間たちは統一言語の下で人々は穏やかに暮らしていた！だが人は欲望に身を任せ、奪い争い分かりあう事を忘れていった!!だからこそ

バラルの呪詛の根源たる月を破壊して重力異常で人類が恐怖している所を私が聖遺物とノイズを使って世界を恐怖で統治すると言う計画を

貴様らのせいで破綻したのだ!!」

そう言った瞬間にフィーネは響目掛けて茨状の鞭を黒くしてそのエネルギー刃で響を斬り落とそうとして・・・その寸前で或人がデュランダルで受け止めると

或人はこう言った。

「違う！そんなの間違ってるんだ!!」

そう言つて斬撃を弾き飛ばすと或人はこう続けた。

「お前が大事にしている人は人類に対してどう思っているのか分からないけど

これだけは言える！お前は間違ってる!!恐怖で従えたとしてもそんなの

誰も付いていく事なんて無いんだ!?!人と人を繋ぐのは言葉じゃない・・・

『心』なんだ！バラルの呪詛とか言っているけどそうしたのは多分その人は

人間が好きなんだよ！人間が好きだからこそ心と心で分かりあう事が

一番大切だつて知っていたからこそバラルの呪詛を作ったんだ!!それともお前が慕っている人はこんな事を平気で望む様な人の痛みを理解できない奴なのか!!」

「黙れ貴様！あのお方は誰よりも人間を愛して……じゃあ……」

まさかそんな……嘘だウソダ嘘だウソダそんなの出鱈目だ……!!」

フィーネは頭を抱えてそう言っているとこう続けた。

「人を繋ぐのは痛みと言葉だ！だからこそ私は雪音クリスに

それを教えるがために」

「やつと馬脚現わしやがったなクソアマ。」

キンジがそう言うときフィーネに向けてこう続けた。

「手前は人類の為じゃねえ只自分の為でしかやってねえんだよ！人を繋ぐのは痛みだ？手前勝手な理屈を他人に押し付けるんじゃねえよ!!手前も

人間と何ら変わんねえ只人を支配したって言うクソツタレナ欲望に支配されてる傲慢な屑人間なんだよ!!」

「貴様神に向かつてよくも……!!」

そう言つて攻撃するとベルが割つて入つて受け止めるも

弾き飛ばされてしまった。

「あぐー！」

「ベル!!」

キンジがベルに向けて大丈夫かと思つているとベルは谷間から零れ落ちた箱……殻金

が入った箱を見ていけないと思っているとフィーネはそれを茨状の鞭で盗って見て見ると・・・ニヤリと笑ってこう言った。

「未だ私は神に見捨てられてはいない・・・私の計画を邪魔する貴様らを排除してあの機械人形たちと同じ様に無駄死にさせてやる!!」

「無駄死にはない!雷は・・・いや彼らは誇り高くこの世界を守らんがために散って逝った仲間だ!!それを侮辱する事を私は許せない!?!」

「手前には借りが山ほどあるからな!ここで清算してやるぜ!!」

翼とクリスがそう言って獲物を構えているとそれを映像で見っていた未来が亡の懐から見えるプログライズキーを見るとそれを取って走り出した。

「何処行くんですか未来さん!」

緒川さんがそう聞くと未来はこう答えた。

「今未来達は戦っています!亡さんだって本当は

あそこにいたかったはずです・・・だからこれだけでも・・・これだけでも持つて私亡さんの意思を皆に伝えたいんです!!」

未来のしつかりした目つきを見ると創世達がこう言った。

「こうなったら未来は止まらないよ、私も付き合うよ。」

「私もです。」

「私も！やれることをしたい!!」

それを聞いて未来はありがとうと言って4人が上に向かって行くと緒川が弦十郎達に向けてこう言った。

「僕が彼女達を守りますんで皆さんはここをお願いします!!」

そう言つて緒川も出ていくと弦十郎は友里たちに向けてこう言った。

「彼女達は自分がやれることをしようとしている・・・ならば俺達も俺達がやれることをするぞ!!」

「はい!!」

そう言つて作業を再開した。

44—5 (12)

「はあ……はあ……はあ……!」

未来達は上に向かつて走っていた、亡が持っていたプログライズキーを

響に渡さんがために走ってやつのことで上に辿り着くとそこで目にしたのは……想像だにもしなかつた光景であつた。

「響!!」

未来が見たのは……ボロボロになっている響とただ一人立っている……

或人だけであつた。

他の面々は既に倒されており中には立つことすらやつとの者もいた。

するとフィーネは響に向けて頭を掴みながらこう言つた。

「所詮お前達は私の駒でしかないのだ! 駒は駒らしく大人しく従え!!」

「止めろ————!!」

或人はそう言つてフィーネ目掛けてデユランダルを振り下ろすもフィーネはそれを茨状の鞭で防御すると或人に向けてこう言つた。

「貴様がいなければもつとうまく事が運べていたのにこれまでの要らない労働分償つ

てもらどうぞ!!」

そう言つて黒いエネルギー体を放つと或人はそれをデュランダルで受け止めて弾き飛ばすも其の儘茨状の鞭は或人をきつく縛り付けると其の儘何度も地面に叩きつけて飛ばされた。

「グアアアアアアア!!」

「或人社長!」

イズが強制解除させられた或人の下に駆け寄ろうとするとフィーネは或人に向けてニヤリと嫌な笑みを浮かべてこう言つた。

「貴様は邪魔だからな．．．消えろ私の想い人に対する思いを侮辱した

屑がー!!」

そう言つて黒いエネルギー体を放たれると或人はこつちに來たイズを

庇うかのように抱きしめると．．．光が天から放たれた。

「ここは……ゼアの中？」

或人がそう呟くと背後から声が聞こえた。

「大丈夫か或人？」

「!!……爺ちゃん……!？」

或人は背後にいた是之介を見て驚いているとイズがこう説明した。

「或人社長、このお方は予めゼアにインストールされていた人格データのようです。」

「その通りだイズ、私は自分の意識情報の一部をゼアにインストールさせていたのだ、風鳴 訃堂を止める為にね。」

「爺ちゃん・・・俺のせいで」

「いや、お前が悪いわけではない。私が奴に隙を与えてしまったからだ、だから私はお前に危害を及ぼさない様に私のデータと共にあのコンサートで何が起きたのかのデータを残しておいたのだ。そしてシンフォギアを解明する中で私はライダーシステムに目を付けたのだ。」

「ライダーシステムとシンフォギア・・・一体どう言う関係があるんだよ爺ちゃん？」

或人がそう聞くと是之介はこう答えた。

「本来ノイズは音を放つことが出来るシンフォギアを使って倒すが

そのエネルギーを・・・ライダーシステムが持つエネルギーを変換すればと思つて造つたのが始まりだったのだ、そのエネルギーを造る過程で

とある結社の一つを見つけてね。そこを破壊した後私は彼女達を保護して彼女達が保有する錬金術と言う技術を使って造られたのが・・・飛電メタルなんだ。」

「鍊金術って……ええ嘘其れって」

「ああ、話がそれるからそっちは後で良いとして何したとしても

私はライダーシステムを造つたのだ。異なる2つの技術が組み合わさつて

出来たそれを人類の希望とするがためにと思つていたが訃堂はそれを

最初から兵器として悪用しようとしていたからこそ私は奴が許せなかつた。

先人達の為と言いつながら彼らが何でこの国を守つていたのかを

理解していなかつたからだ。お前なら分かるよな或人。」

是之介がそう聞くと或人はこう答えた。

「守りたい人や家族、そして何よりも……心を守つていたから。」

「そうだ、人が守るのはそれが最もなんだ或人。国ではなく愛する人たちを

守るために戦う事こそが本当の意味で重要なんだ、

そしてお前はそういう人達が沢山いるだろう？」

是之介の言葉を聞いて或人は今まで会った人たちやヒューマギア、滅亡迅雷、

そしてキンジ達や・・・響たちの事を思い出して頷くと是之介は天に手を伸ばすとある物が現れたのだ。

それは・・・オードライバーであつた。

「オードライバー・・・あの時アークに盗られたはずじゃあ。」

「ゼアがお前にチャンスを与えたんだ、

それをお前は無駄にするんじゃないぞ。」

そう言うとき或人は笑ってこう答えた。

「うん、分かっているよ爺ちゃん。」

「私だけじゃない・・・彼らもそうだ。」

そう言って出てきたのは・・・

「父さん。」

父、《飛電 其雄》

「福添さん。」

もうこの世にはいない福添さん。

「雷、亡・・・迅」

滅亡迅雷の面々。

そして何より・・・

「……母さん。」

そして笑顔で或人を見ている女性

母《飛電 一花》

皆が或人に向けて笑顔を向けていると或人は全員に向けてこう言った。

「皆の思い、確かに受け取ったよ。」

「クソ！またあの光か！」

フィーネはそう言っつてその光を忌々しく見ていると光が無くなって・・・

01ドライバーを持った或人が現れると・・・フィーネの顔めがけて銃弾が放たれた。

「がアアアアアアア！何故だ!!防御で来ていたはずなのに!」

フィーネがそう言っつて目を向けるとその先にいたのは・・・

拳銃を構えたキンジであつた。

あの時キンジは銃弾を弾いて防ぎきれない様に調節していたのだ。

そして響を手放すと響は一目散にそこからジャンプして距離を離すと

キンジが01ドライバーを、未来が亡のプログライズキーを投げ渡したのだ。

「亡。」

響は亡のプログライズキーを見ているとそれを・・・クリスに手渡した。「使え、私よりもお前の方が良い。」

そう言うのと不破と刃が互いに頷くと互いのショットライザーを・・・クリスと翼に投げ渡したのだ。

2人はそれを受け取るとキンジ達がもう一度自分たちのプログライズキーを持っていた。

そして或人はファイネに向けてこう言った。

「ファイネ、お前を止めれるのはこの世界で・・・俺達が

お前を止めて見せる!!」

そう言うのと或人は構えた瞬間に2つのプログライズキーから音声 flowed.

《D・ジャンプ》! 《ゼツメツロッキングホッパー》!!

そして滅は自身のプログライズキーにある物を取りつけた。

アサルトグリップ

嘗ては専用のプログライズキーも無くてはならないのだが亡が改良して

グリップを付けるだけでアサルトになれるようにした奴だ

《オーバースラッシュユライズ》

《Kamen Rider Asarute Tyaruzе Kamen Rider Asarute Tyaruzе》

《バレット》！

《ハント》

キンジとベルが互いにプログライズキーを装填する準備を始めた。

そして響は自身のプログライズキーをセットした。

《ゼツメツサーベルタイガー》！

そして翼はドードー、クリスはジャパニーズウルフを手を取った。

《ドードー》！

《ジャパニーズウルフ》！

Kamen Rider Warning! Kamen Rider Warning!
in g...!

そして全員がこう言った。

「「変身!!!」」

Balwisyall Nescell gunnir tron
 Imyuteus amenohabakiriron
 Killter Ichai valtron

《ツインライズ!》

プログライズ!!

《PURGE RIZE》

《スラツシユライズ》!

シヨットライズ!!

そして彼らは姿を変えた。

或人は2体の飛蝗が現れるとそれらが一つになって緑と青の01が誕生した。

『ツイン・レボリユーション! Road to Glory has to Lead
 to Growin' path to change Zyampor Z
 yamp! 仮面ライダーWZ!! It's never over.』

『撃ちまくまくりステイ! シューティングウルフ! The elevation i

increases as the bullet is fired.』
『TYENGE FAITYING』

滅は全身に刃が新たに装備されまるで全身剣が付いているかのような見た目となった。

『レディーゴー！アサルトスコピオン！No chance of surviving.』

そして響達も変わり始めた。

響がシンフォギアを纏うとそれと同時に凶としての自分も一緒に現れると武装が合体を始めていった。

ブレードはガントレットに取り込まれるとガントレットが

まるで虎の顔の様に造り変わり首についていたマフラーは無くなったが

その代わりに虎の腕が肩に装備されマントとなった。

そして仮面が左右に分かれてイヤークラスフと変わり

まるでヒューマギアの様な形状となったシンフォギアとライダーシステムの融合型。

『ガングニールサーベル』

翼はショットライズして出てきた赤い弾丸が自身の装甲に当たると

それらが赤くなりインナーもオレンジと蒼の両方となった。

刀は雷のブレードと融合して大型の分割型バスターソードとなり同じ様に仮面はイヤークラスフと変わった。

最期に髪留めにドードーの口が加えているかのような造りとなった。

『アメノハバキリドードー』

クリスもそうであった、赤い装甲がショットライズによって銀色に変わりまるで以前纏っていたネフシユタンと同じ色合いであった。

そしてボーガンに大型のクローと融合して長距離キャノンとなった。

(見た目は『機動戦士ガンダム サンダーボルト』に出てくる

『アトラスガンダム』のレールガン)

そしてインナーは黒が青に変わった。

新たなるシンフォギア

『イチイバルジャパニーズウルフ』

「な．．．何だそれは．．．一体何を纏っているのだ．．．

私が造ったものではないそれは一体何なんだー！ー！！」

フィーネが大声で悲鳴交じりでそう言うと或人が大声でこう答えた。

「これが人とヒューマギアの思いだー！ー！ー！！
そしてその言葉にデュランダルは淡く輝いた。」

45—1 (13)

「馬鹿な．．．シンフォギアシステムとライダーシステムを一つとした

新たな姿．．．それがお前達人間が求める果ての姿か!？」

フィーネはそう言いながらシンフォギアとライダーシステムを融合させて新たな姿となった力を見てそう言っている和不破はキンジに向けてある物を投げた。

「こいつも使え!あのアマをぶっ潰せ!!」

そう言っ出て出したのは．．．ランペイジバルカンプログライズキーであった。

そしてフィーネは或人達に向けてこう言った。

「は!幾ら姿が変わったところで．．．ノイズの前には手も足も出んことを
思い出させてやろう!!」

そう言うとソロモンの杖を掲げると光があふれ出して緑色の光と共に．．．
ノイズが姿を現したのだ。

「そいつがノイズを生み出す元凶か!」

「ならばフィーネ!貴様がこれまでのノイズ被害を生み出していたのか!」

或人と翼がそう言うとフィーネは不敵な笑みを浮かべてこう言った。

「くくく、もとよりノイズとは先史文明によつて当時の人類が開発した

人のみを殺すことが出来る対人兵器。バラルの呪詛によつて戦争を起こしていた人類の置き土産でゲートが開かれている儘だからな、数十年に一度しか起きない現象・・・つまり偶然を私は必然に変えたのだ!!」

そう言いながらファイネはノイズを操つて或人達目掛けて突つ込ませるが或人達はそれを全て叩き落した。

「へー、こんなのが効くかってんだ!」

クリスがそう言うのとファイネはならばこれは如何だと言つて・・・
数千ものノイズが大小問わず現れたのだ。

「ノイズが急速に増殖しました、その数大小合わせて・・・1600体以上。」

「アンだよその数・・・今までの比じゃねえぞ!」

不破はイズの言葉を聞いてマジかよと思つているが刃がこう返した。

「だが我々に出来る事など何も無い・・・祈るしかないアイツらに。」

「へ！ノイズなんてアタシ一人で」

「馬鹿言うか雪音！200近い奴らをお前一人じゃ無理だ!!ここは組んで戦った方が効率が良いな。」

キンジはクリスに向けてそう言っただけで暫くすると・・・こう言った。

「よし、社長は滅と響と一緒に中央突破。俺は雪音と右側、ベルは翼さんと組んで左側を攻めてくれ。」

「分かりましたわ、翼様。エスコートのほどを。」

「分かっている、行くぞ!!」

「俺達も行くぞ雪音、ついてこれるか?」

「あつたり前だろうが!手前が足手纏いになるなよな!!」

そう言うのと翼とベル、キンジとクリスは互いにバイクに乗って向かって行くと

或人もバイクを出すと滅を後ろに載せて響をどうしようかと思っていると・・・

響はこう答えた。

「私も一応だがバイクは乗れる、なあにきにするな。こう見えても
教習所出身の仲間からコーチされたからな。」

そう言ってもう一台のバイクを見ると2台は揃って向かって行った。

推奨BGM

FIRST LOVE SONG

響が大型ノイズ相手にブレードクローを展開して貫くとNEO ∞ STERDU

STで

貫くと或人は中型ノイズ相手に2つのホッパーの能力を最大限利用して

高速移動するかのようにはジャンプしながら蹴りで貫いていた。そして滅はその間を縫うように走って助走を付けて大型ノイズ相手に強化したスコピオン・アードIIを弓状に変形してそのエネルギーを放つと弓の軌道がまるで蠍の尾の様に巻き付きながら貫いて破壊した。

翼が跳躍して大型飛行型ノイズ相手にバスターソード『ヴァルク・ソード』を振り上げると両刃剣の様な剣が2つに分割して射出されるとそれらがノイズに突き刺さった途端に切先から・・・赤と蒼の2つの雷の閃光と共に斬撃が飛び出た。

紅蒼ノ双閃

そして分割して残った武器から・・・日本刀が現れるとそれを使って翼は居合斬りの要領でノイズを斬り捨てた。

天ノ雷罰

そしてベルは大鎌を使って回り乍ら黒い斬撃を形成してノイズを斬り捨てていた。

「おらおらおらジャマダーーーーー!!」
クリスはそう言いながら右目に装備されている『ニホンオオカミスキャナー』でノイ

ズたちを全てロックしていた。

これは亡の仮面ライダーでのデータをベースとしており

銃火器を使うクリスはこの通信及びジャミングシステムを活用して

照準システムとして扱っているのだ。

両腕には『ニホンオオカミノツメ』の形状をしたボーガン『クローガン』で

放たれたエネルギーをまるでレールガンのように放ちながら撃っている

形状変化させて『クローガン』から『三連式コールドガトリング砲』に切り替えてノ

イズたちを氷漬けにしながら攻撃して肩と腰にあるミサイルを展開して

一斉発射させた。

MEGA COLD QUARTET

放たれたそれら全てが冷気を持っており氷漬けになったノイズを見ていると
キンジがこう言った。

「こつちも粗方片付けれそうだ！全くとんでもねえなお前はよ!!」

「へ！そう言うんなら今度その．．．よ．．．／／／／／／／／／／」

「？」

「な！何でもねえ!!」

クリスはそう言いながら頬を赤く染めて攻撃していた。

そして物の30分でノイズが全て．．．消滅した。

45—②(13)

召喚されたノイズを一掃して後はと思つてフィーネがいるであろう場所に目を向けている中でフィーネは・・・未だ諦めてはおらずソロモンの杖を腹部に向けてそれを・・・突き刺したかと思いきや腹部から何やら異様な生物らしきものによつてソロモンの杖が取り込まれていくと今度は・・・ノイズがそつちに向かつて飛んで行つたのだ。

「ノイズが・・・一体何をやる気だフィーネ！」

或人がそう言つて向かつて行く中でフィーネはノイズに密着・・・

いや、吸収していたのだ。

すると泥の様な物体は地面の奥深くまで進んでいくと目指した先にあつたのは・・・この世界に降り立っていた殻金であつたのだ。

恐らくは時空を超えたのであろうそれは膨大な光を出し乍ら『カ・ディングル』の動

力炉と直結されていたのをその泥の様な物体は殻金を取り込むと

その手にあつたもう一つの殻金をも取り込んで姿を現したのは……

見た感じウーパールーパーかと言いたいくらいの化け物であつた。

「何だ……あれは？」

キンジがそう言いながらその……巨大すぎる物体を見ていた。

『カ・ディングル』よりも大きいその化け物は全身が赤紫で覆われており

まるで生物の様にも思えた。

すると頭頂部分から……ファイネが現れると或人達を見るとこう言つた。

「脆弱な人間どもよ！ 見ろ！！これが私の力だ————！！」

そう言う中央部分に光が集約すると……それが一気に街に目掛けて

放たれて……吹き飛んだのだ。

「町が！」

「あんなものがダイブレイクタウンに向かって放たれれば」

「そこにいる全員が死ぬって事じゃねえかよ……！！」

翼の言葉にクリスが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

それを見ていた弦十郎はこう呟いた。

「あれはヨハネの黙示録に出てくる『赤き竜』……

緋色の女『ベイパロン』にでもなると言うのか……了子君……!!」

「よくも私の逆さ鱗に触れ続けてくれたな餓鬼ども……

その命で贖え……!!」

フィーネがそう言った瞬間にもう一度先ほどのエネルギー砲が放たれると今度は或

人が前に出るとメタルクラスタホッパープログライズキーを装填して大型の盾を造つて守つたのだ。

だが防いだ時に今度はキンジとクリスが前に出るとキンジはウルフブレイカーにラ
ンペイジバルカンプログライズキーを装填してクリスは全身にミサイルを

展開すると滅も現れてスコープオン・アードIIをアローモードにして2つを

組み合わせてまるで傘の様になると滅は弓を引くかのように構えて・・・放つた。

A B U S O R Y U I T E Z E R O P A R T Y

ン ラ

ト ヅ ヨ シ ト ン メ レ エ ジ イ ペ

そして全弾命中した。

ン イ レ ン ズ イ ポ

シ
ヨ
ツ
ト

ラ
ン
ペ
イ
ジ

ル タ ン メ レ エ

レ
ポ
イ
イ
ン
ズ
ン

放たれたホーミングレーザーが全弾撃ち落とされると翼は今の内だと思つて上空に上がると幾つもの雷を帯びた小太刀が数千となつて降り注いだ。

千翼の落雷

然し当たつたと同時に・・・再生し始めたのだ。

「何!」

「だつたら特大のデア!!」

響がそう言つてクロローを展開して突き刺すかのようにぶち抜くも・・・
又もや再生したのだ。

それを内部から見ていたフィーネは笑いながらこう言つた。

「アハハハッハ! 所詮は聖遺物の欠片に玩具であるシステムを使って
底上げした程度!! 完全聖遺物相手に敵うとも思つたか!」

それを聞いたベルが切裂きながらこう言つた。

「となれば完全聖遺物には同じ様に・・・ですね。」

「となりやあ・・・」

「・・・ああ、向こうが其れならこちらは」

「・・・飛電 或人、頼みがある。」

響がそう言うとか人はメタルクラスタホッパーによつて覆われたデュランダルを持つと全員を見てこう言つた。

「・・・分かった、やってみるけどもしもの時は頼む。」
そう言うと全員が武器を構え直した。

それを見たフィーネはデュランダルを見るとちいいと舌打ちしてこう言った。

「そう言えば向こうには聖遺物があったが・・・所詮は造り物で力を失った只の剣如きに私の完全聖遺物に勝てる通りなどないわー!!」

そう言つて砲撃体勢になるとベルが翼に向けてこう言つた。

「私が撃ちあげますので特大のを頼みます。」

「分かつた！」

翼がそう答えるとベルの持っている大鎌を足場にするとベルは其の儘・・・
野球の様に飛ばすと翼は剣を巨大にしようと構えると・・・
何処からか声が聞こえた。

——馬鹿だなあ翼

「この声!?!」

「刀は大きくして打ち込むのは見た目じゃねえ・・・威力だ。」

「一体何処から!?!」

「意識を集中しろ翼、そして全ての力を脱力した上で最大の一撃を放て!」

「全てを・・・脱力・・・うん!分かったよ奏!!」

翼がそう言うどまるで納刀したかのような体勢になっているとフィーネは

ASGARDを6重にして展開するところ言った。

「この6重の結界の前に恐れおののけーーーーー!!」

そう言った瞬間に翼は目を閉じて暫くして結界の真ん前に行くど・・・

抜刀した。

そして一瞬で切裂いたかと思いきや・・・後で巨大な衝撃波と同時に雷が轟いて更に3枚の結界を破壊した。

「馬鹿な！一体如何やって!?!」

フィーネはそれを見てあり得ないと言っていると今度はクリスと滅が武器を構えていた。

「ちよせえ!!」

そう言いながらボーガンを構えて其の儘・・・レールガンの如き威力で放つと滅も同時に自身の剣を矢の代わりにして・・・放った。

そのエネルギーが其の儘結界に触れた瞬間に・・・更に結界が破壊されてフィーネとの間に結界がなくなっていた。

「今だ飛電 或人！」

「キンジサン！響さん!!準備は出来ました!?!」

「メインは手前らなんだ！後は託すぜ!!」

「飛電 或人・・・迅が託したその力で亡と雷の無念を!!」

翼、ベル、クリス、滅が互いにそう言っていると或人、キンジ、響がデユランダルを互いに持っていた。

完全聖遺物はとてつもないエネルギーで然もデユランダルには破壊衝動を増幅することが出来るんじゃないかと思われていたのでそれを3等分に分けることにしたのだがそれでもその力に飲み込まれそうになっていた。

「グウウウウ・・・飲み込まれて・・・たまるかー！！！！」

「俺達には・・・帰りを・・・待っている・・・」

人たちがいるんだよ・・・!!」

「もう・・・これ以上・・・奪わせは・・・しない・・・!!」

互いにそう言っているがそれでも黒化が侵食するかのように広がっていると・・・声が聞こえた。

——頑張って下さい社長！

——私達の為に！！

——熱く燃えろ——！！

——貴方達の声を……想いを届けさせてください

——あんたの情熱を見せつけなさいよ！

——ファイト アルト社長！！

「……この声……ヒューマギアの皆の声。」

——行つてください社長！

——根性見せろ社長！

——お前に全てを託す

——頑張つて下さい社長！

「福添さん……不破さん……刃さん……洗さん。」

——踏ん張るんだ或人！

「爺ちゃん。」

——お前ならできる

——応援してるわよ或人

「父さん・・・母さん。」

——頑張って遠山君！

「お主の意地を見せるのじゃ!!

「へますんじゃねえぜリーダー!

「頑張るつすキンジ!

「キンジ・・・頑張つて。

「ご武運を祈っています。

「飛鳥・・・夜桜・・・焰・・・華毘・・・紫・・・雪泉姉。」

「何だらしない所見せてんのよアンタは!

「キンジさん! もう一息ですよ!!

「主が貴方を導きます。

「・・・レスティア・・・レティシア・・・メイヤさん。」

「頑張れキンジ
ー
兄さん・・・!!」

「響ー!!頑張れー!!!
・・・未来・・・!!」

「社長、貴方が何時も頑張っていることは知っています・・・ですから・・・

勝って下さい社長、皆の為に。

「イズ・・・!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その大きな声と共にデュランダルが輝いたと同時に3人の黒い部分が全て無くなると或人はフィーネに向けてこう言った。

「フィーネ……お前を止めるのは……俺達皆だ!!」

そう言った瞬間に或人達の背後に……たくさんの人達が見えた。これ迄交流した人たちが或人達の背中に手を添えてまるで背中を押しているかのような感じであった。

グ ン ジ イ ラ

S y n c h r o g a z e r

「ウオリやああああああアアアアアアアアアアア!!!」
そして振り下ろされたその力がファイーネ目掛けて当たると・・・銀色のナニカがその傷口に入り始めて浸食を始めたのだ。

ライジング

S
y
n
c
h
r
o
g
a
z
e
r

そしてそれと同時に赤き竜は……内部から爆発して消滅した。

45—3 (13)

破壊された学園のグラウンド、既にボロボロになっている中で或人達は

目の前にいる・・・同じくボロボロになっているファイネと睨みあっていた。

ネフシユタンの鎧は既にボロボロになっており再生能力も発動

出来ない程なのだろうとキンジがそう思っているとファイネは・・・怒り心頭で
周りに当たり散らしながらこう言った。

「クソが・・・クソが人間どもが！私に逆らい剩え私を地に墮とすとは貴様ら全員許さないゴホゴホ!!」

ファイネが突如として咳き込んだ瞬間に口から・・・血が零れ始めたのだ。

「もう喋るなファイネ！お前の身体はもう」

「黙れ！私は未だ諦めてはいない!!」

ファイネは或人の言葉を無視してこう続けた。

「だが私は何れ蘇る！何時か!!何時かの時代に何処かの場所で蘇る!？」

聖遺物がある限り何度でも！何度でも私は蘇って必ずこの想いを」

そう言いかけた瞬間にファイネは或人達の表情を見て何だと思っていた、

全員がフィーネの・・・全員に向けて指さす左腕を凝視していたのだ。

一体何だと思つて確認するとフィーネの腕から・・・幾つもの宝石が金属の様に腕の皮膚から貫きながら侵食していったのが見えた。

「な・・・ナンダこれはー！！」

フィーネはそれを見るや否や今度は脚やネフシユタンの鎧の内側が砕け墮ちると同時にその宝石が胴体の皮膚から貫くかのように現れてきたのだ。

「な・・・何だよありゃあ。」

クリスがそう呟くとキンジとベルがこう答えた。

「アイツは確か殻金を持つて取り込んでいたよな？」

「ええ、如何やらフィーネが取り込みネフシユタンの鎧の機能が低下したことで力を発揮し始めたようですね。」

「殻金・・・一体何なんだそれは？」

弦十郎がそう聞くとキンジがこう説明した。

「殻金は俺達の世界でとある金属を封印する為にあらゆる宝石を溶かして巫女達数十人がその靈力を100年かけて注いで鑄造した一種の要石だ。」

「本来でしたら緋緋神・・・つまり神と同格の存在を封印する為に造られた物、幾ら何度も蘇つているとはいえ人であつた以上殻金の力に抗う事など

出来ないのですわ。」

「成程な、つまり奴にとつてあれは最も相性の悪い物質と言つた処か。」

響がキンジとベルの説明を聞いて納得がいくなど言っている中でフィーネは既に下半身が全て金属になつていくと左腕も完全に金属となつてしまひ顔の左半分に迄浸食が進んでいくとフィーネは或人達に向けてこう言つた。

「おいお前達助けろこの私を！助けしてくれたなら褒美として私が統治する世界で要職につかせてやるから私を助けろ!!」

そう言うが全員何も言えず前に出なかつた。

するとフィーネは或人に向けてこう言つた。

「飛電 或人！私を助けてくれ!!ヒューマギアを助けると言うならば

私も助けてくれ頼む!!」

そう言うが或人はこう答えた。

「……ごめん、俺じゃ君を助けられないよ。」

「な……ならば風鳴指令！あなたは私を」

「済まないが俺は君を助けることが出来ない……悪いがな。」

それを聞いて顔を青くすると最後にクリスに向けてこう言つた。

「雪音クリス！」

「!!」

「お前を引き取ったのは私だ！私はお前を救った!! だったら今度はお前が私を」

そう言いかけるとクリスは・・・怒り心頭でこう返した。

「ふざけんな！」

「!!」

「お前はアタシに何した!?! 失敗したり何かあれば電撃流したり磔したり

拷問紛いなこととしてアタシの痛みを楽しんでやがった！アタシが嫌いな大人なそのものだったオマエヲ誰が助けたいって思うんだ!! 前に言つたよな？

痛みは人を人を繋げるって・・・だったら手前もアタシの痛みを

味わいやがれ!!」

そう言うのを聞くとキンジとベルもこう続けた。

「手前はやつてはいけないことしてたんだ、今まで手前の都合でノイズを使って殺めた人達に地獄で懺悔しながら封印され口って・・・封印されるとどうなるんだ？」

「それはですね・・・どうなるのでしょうか？分かる事と言えば殻金に

封印されてもう二度と転生できないと言うのは・・・間違いないでしょうね。」

「ヒイヒイヒイヒイヒイ!!」

ベルの暗い笑みを見てフィーネはそれに恐怖している中で等々フィーネの左顔半分が鉋石と成り果てて右半分と右腕しか動かなくなってしまうと遂にフィーネは・・・泣きながらこう言つた。

「イヤだ・・・嫌だいやだいやだ! 封印なんて嫌だ!!」

私はあのお方に未だこの想いを伝えていないんだ!?! そのために今まで・・・ここまでやって来たのに! 消えたくない! 消えたくない!! 消えたくない!!

助けて誰か!! 助けて下さいエン」

そう言いかけて月に手を差し伸ばしてフィーネは・・・その全身を宝石と化して封印された。

「……終わったのか？」

「……恐らくな。」

不破と刃がそう言っているとファイネから黒いエネルギー体……アークが姿を見せた。

「アーク……！」

或人がそう言うのとアークはこう言った。

『未だ私は終わっていない……終わっていないぞ01!!』

そう言つて空高く舞い上がつて行つた。

「またゼアに！」

刃がそう言っていると滅がこう言つた。

「ゼアにアクセスするぞ！今ならまだ間に合うはずだ!!」

滅がそう言つてアクセスしようとする……イズがこう言つた。

「何者かがゼア内部からアクセスしています。」

「けどゼアは宇宙に……一体誰が？」

或人がそう言っていると暫くして恐らくゼアがいるであろう場所で……

光が見えた。

数十秒前

『まさか私が負けるとは……だがヒューマギアはまだある、今度は私自らヒューマギアを乗っ取って』

「其れは無理だよアーク。」

『!?』

一体誰だと思つて振り向くとそこで目にしたのは……迅であつた。

『迅……それは一体どう言う事だ!!』

そう聞くと迅はこう答えた。

「ゼアのメインターミナルはもう既に切り離し準備が終わつてるんだ、

もうお前がここから出ることは敵わないよ。」

『ナニ!? 貴様私諸共滅びる気か!!!』

「僕だけじゃないよ。」

迅がそう言つて後ろを振り向くとアークの世界の中から……雷と亡が現れた。

「元々俺は宇宙飛行士だからな、こう言うのは終わらすのは得意なんだよ。」

「貴方自身の『アーク』も既にシャットダウンさせています、

これが切り離されたと同時に残つたギアガーが体当たりするように

プログラミングさせました。もう貴方が地上に来る事などありません。」

『迅! 雷!! 亡!?! お前達良くも私を——!!!』

「は! 手前が先に裏切つたんだからこれでお相子だ!!」

「滅亡迅雷は消えても私達の意志は滅が受け継ぎます、そして我々の想いは

ただ一つ。」

「アーク、僕達がお前を破壊する事だ。」

迅の言葉を聞いてアークは何やら震えているかのような感じになっている間に
ゼアのメイインターミナルが切り離されたと同時に宇宙空間に漂っている
ギーガー達が全機突撃し始めたのだ。

『止めろ．．．止めろ．．．辞めろー！ー！ー！！』

アークが命乞いするかのようになんて言っている中で迅は地球を見て．．．

こう言った。

「或人、滅の事お願いね。そしてありがとう・・・お父さん。」
アアアアアアア!!とアークの断末魔と共にゼアと共に宇宙から消えた。

そして現在。

「迅。」

或人はその星を見てもしかしてと思つて呟いているとそんな中で滅は・・・泣きながらこう言つた。

「迅・・・!!」

まるでその声が届いたかのようにそう呟く中でキンジとベルはフィーネが封印された周りを見ると何処からか・・・ザビーが姿を現したのだ。

するとザビーは周りを見渡していると針で何やら削つてしていると・・・

3つの欠片が落ちてきたのだ。

「こいつは・・・殻金か？」

「2つはそうですがもう一つは一体？」

ベルがそう言っていると欠片の一つが突如として・・・銀色に輝き始めたのだ。

そして暫くすると出てきたのは・・・翼とクリスが持つているペンダントと同じ奴が現れたのだ。

「それはシンフォギアシステム・・・了子君君がやってくれたのか？」
弦十郎がそう言っていると殻金が独りでに2つとも浮遊して暫くすると・・・
それが強く光り輝き始めたのだ。

「うお！」

「きゃー！」

キンジとベルがそれを見て驚くと全員がその光に眩しいと言って
視界を塞いで・・・

・・・全てが白に染まった。

エピソード編①

・・・それから3週間後。

遠山キンジ様、お元気ですか？って言っても届くか分かりませんが取敢えずの所お手紙をお書きいたします。

そちらは如何でしょうか？響と或人さんから貴方方が別世界から来たことに最初は驚きましたがまあ時間を置いて納得しようと思う次第です

(弓美は驚くと同時にまるでアニメじやんと息巻いていましたが)。

こっちはまあ取敢えずの所元気と言った処です、あれから3週間の間何があつたのかをここに記したいと思つています。

あれから日本では再度のヒューマギア開発と量産に力を注いで傾きかけていた経済が回復し始めていまして街には活気が戻りつつありますが

違う事があるとすれば・・・先ずは『Z A I A エンタープライズジャパン』が飛電インテリジェンスによって買収された事ですな。

天津 塚が特機とAIMSの人達と共に逮捕されてからこれ迄裏で行っていたヒューマニアの暴走と滅亡迅雷・netの暗躍を裏で支援していた事や前に起きた衛星アーク墜落事件から起きたデイレイク事件の首謀者であった事、

飛電インテリジェンス副社長の福添さんの暗殺や脱税や賄賂などあらゆる悪事を行っていた事が暴露されてしまつて当人には一審で死刑判決が下され
上告しようとするも棄却されてしまつたそうです。

また、風鳴 弦十郎と緒川さんは無期懲役、操られていた人達は
全員禁固15年が言い渡され刃さんは協力したが

その後の新型ライダーシステムの開発に貢献したことから防衛省監視の下で
暮らしています。

当人によれば近々特機に編入される予定だそうです。

それと飛電インテリジェンスですが役員全員の所望で或人さんに

再任されたようで飛電製作所は確か専務の・・・山田さん？だったかな、

その人が旧『Z A I A エンタープライズジャパン』に拠点を移して所長として
働いております。

滅さんは・・・今何処で何しているのか分かりませんが何処かにいると
思います、何時か彼に安らぎがあると信じています。

風鳴 翼さんは叔父の事とかで色々とおバッシングがありましたがあげずにアイドルとして活動してまして確か友里さんと男の人・・・

忘れてしまいました。が今は前者はマネージャーとして後者は運転手として。そしてもう一人ボディーガードとして働いているのが・・・不破さんと言う元はAIMSの隊長さんだそうです。

そして響についてですが・・・驚かないで下さいね実は

そう書きかけていると外から・・・ピンポンと言うチャイムの音が聞こえた。

「ヒナリーリー!! 迎えに来たヨ! 一緒に行こうよー!!!」

「うん分かった、今行くね。」

未来がそう言って書きかけた手紙を棚に入れてカバンを持って・・・

真新しい淡いチェック柄のブレザー制服を着て出ると弓美達も同じように着ていた。

「速く行く、学校がどう言う所なのか先ずは見ないとね。」

「うん分かつてる、それにしてもこの制服派手だよね？」

「まあ確かにそうだけども、今どきの要素も入れないとね。」

「そうそう、こう言うのはアニメだど。」

「はいはいそれは言わない。」

創世がそう言ってるのを聞いて未来は本当にみんな生きているんだなと思っていると近くのバス停から・・・光と響が出てくるのが見えた。

「響ー！」

「未来・・・。」

2人共黒の礼服を着ておりどうしたのと聞くと響はこう答えた。

「昨日の晩夜行バスに乗って母さんと婆ちゃんの墓参りしてそれで・・・

デイスペアの皆に報告していた帰りだ。」

「そう・・・ナンダ。」

未来はそれを聞いてあの時の事を思い出していた。

数日前

「初めまして立花響君、風鳴 八紘だ。」

「知っている、この国の総理だろ？何の用だ??」

響はぶつきらぼうにそう言うのと八紘は少し下がって・・・土下座して
こう言った。

「済まなかった。」

「・・・」

「わが父訃堂・・・いや、我ら風鳴の血を引く者達によつて

君達デイスペアの構成員たちを生み出してしまった！そして我々日本国民が君達をテロリストに仕立て上げてしまった!!当時の悪評に対して

我々は対処しなかった事が事の始まりだ!!君たちが怒りに燃える理由は私も理解できる!だが今は・・・許してくれとは言わないし水に流せとも言わんが・・・どうか国民には・・・手を出さなくてもくれ・・・頼む!!」
八紘は悲痛な声色でそう言うと言響は・・・机をダンと叩いてこう言った。

「ふざけるな!!」

「・・・」

「私達がどう言う思いで今まで生きてきたと思ってる!？」

家族からいきなり別れさせられて仕事も失い!友も失い!!周りから悪党や

悪魔などと言われて心ないネットの書き込みで自分たちが丸で正しいみたいに

私達を侮辱して罵倒して私達が何をしたと言うんだ!!」

そう言いながら響が八紘の首の襟部分を掴むと周りにいたSP達が止めようとするも八紘が手で制してこう言った。

「手出しするな!これは私の罰だ!!」

そう言うのと響は更に声を荒げてこう続けた。

「生きることが悪なのか!私達が死ぬことが唯一の償いだと言うのか!!私達は死ぬために生きていたとでも言うのか!?私達が幸せに生きることが

この世界にとって有害とでも言いたいのか!この世界が私達を否定すると言うのなら私達は・・・私達は・・・何処で・・・何処で生きていけば

良かったんだ答える風鳴 八紘!!」

最終的に涙流しながら響がそう聞くと八紘は・・・こう答えた。

「・・・済まなかった。」

「!!」

「私は人々の善意のみを見て悪意を見ていなかった・・・」

もつと君達の事も見るべきだった、本当の被害者は君達みたい

人々の悪意に蝕まれて追い詰められてた人々を救うために

私はこの国の総理になったのに私は何も出来なかった・・・救えなかった・・・

「殴れるか・・・お前の様に・・・自らの過ちに気づいたお前を・・・
誰が殴れると言うのだ・・・くそおとおおとおおとおおとおお!!」
そう言いながら響は・・・泣き崩れるしかなかった。

エピローグ編Ⅱ

それからと言う物世間ではネットにおける罵詈雑言等に対して政府は新たにネット社会匿名排除及び誹謗中傷に対する罰則条例を制定してこれに対して今でも議論されている中で風鳴 首相はこう言ったのだ。

「確かに個人の表現の自由は必要ですが行き過ぎた正義は悪となり表現の自由を尊重したとしてもモラルが無ければそれは只の悪夢でしかなく人が獣になって他者を喰い物にして自らの欲望を満たさんが為の掃き溜めと

成り果ててしまうのです！我々一人一人がそんな存在にならないがためにに自制し勝手な思い込みや正義感で他者を苦しめれば第二第三の滅亡迅雷 netやディスプレイが生まれ次こそは我々人類が滅亡するのかもしれない！！今こそ私達人間がそう言う風にならないがために己を律して行動しなければならぬんだと私はそう思っております！！」

この言葉から賛成反対等の数々の意見が問い付けられて今では民間人もその意見の対象となっておりあらゆる討論となっていた。

「それでだが未来は何しに来たんだ？ 迎えに来たって訳じゃないだろうな。」

「うん、ちよつと学校を見に行こうって話になつてさ。響も一緒に行こうよ！
一緒に通うんだからさ!!」

「いや・・・私は。」

響は少し戸惑っているかのような感じになっていると未来は響の手を取つて
こう言つた。

「ほら！ 速く行こ!!」

「イヤちよつと待てつて未来!？」

慌てていながらも響は少しだが・・・笑みを浮かべていた。

そして飛電インテリジエンス社長室

「社長、EUよりヒューマギアの増産請求について書類が送られました。」

「うん、ありがとうイズ。」

或人がそう言うとき或人は窓に映る空を見上げていと．．．イズがこう呟いた。

「もう三週間になられますか．．．キンジ様たちが向こうに行つてから。」

「ああ．．．時間は速いな。」

「これは……!!」

キンジ達が驚いているとイズはその穴を見てこう答えた。

「或人社長、恐らくですがあの穴はキンジ様たちを元の世界に送るために出来た穴ではないでしょうか？」

「元の世界に……じゃあキンジ達はあっちの世界に」

「はい、そしておそらくは」

それを聞いて或人は寂しそうであるがそうかと思っていた。

恐らくイズはこう言いたかったのであろう……もう二度と来ないであろうと言う事を。

それは恐らく全員がそう思っている中でクリスは何やら顔を俯かせていると響がクリスに向けてこう言った。

「行け。」

「！」

「お前はもう自由だ、ならば行きたいところに行けばいいだろう。」

「・・・良いのかよ？」

クリスがそう聞くのには理由があつた、ライダーシステムがあるとはいへ未だ少数。

つまり未だシンフォギアシステムが必要なんじゃないかと思つていと弦十郎が前に出てこう言つた。

「本当ならば俺は君に残つて欲しい、二課に来て欲しいと言つていただけだろうな。」

「・・・」

「だが今の俺にそんな事言う資格など持つていないしそれどころか

それは君の自由を制限することとなるし何よりも・・・この世界は君にとつて辛い記憶が多くある場所だ。バルベルデ然り、この国の・・・ファイネ然り。」

「・・・一体何が言いたいんだよ。」

はつきり言えよと言うと弦十郎はこう答えた。

「……ならば心機一転して自分の未来をもう一度掴むために向こうの世界で頑張ると言うのも一つの道だと言っているんだ。」

「……私の未来。」

クリスがそう呟くと翼は……笑みを浮かべて頷くと今度は未来を見て……こくりと頷くとクリスはこう呟いた。

「全く、手前から全員お人好しだよな。」

そう言うくとクリスは……キンジに向けて走り出して其の儘空にいる

キンジに……抱き着いたのだ。

「な！何でお前が来るんだよお前!!」

「ぎげんじゃねえぞ！手前アタシに向けてこう言つたよな!!『例えお前が一人になつたとしても俺がお前を一人に何てさせねえし絶対に死なせねえ、俺が……お前を守る!』って言つてたじゃねえか!?! だったら最後まで

その約束守りやがれつてんだ!!」

そう言いながら抱きしめるとクリスのその柔らかく大きな胸が

キンジの胸板によつてぐにゆりと歪むのを感じてヤバいと感じながらもああもうと思つてこう言つた。

「二つ言うが俺達の世界は言うならば破裂寸前の爆弾みたいに色々問題あるし常識

的な問題があるがそれでもか？」

「当たり前だろう！そうじゃなきゃこっちには行かねえよ!!」

それを聞いて仕方ねえなと思っていると響が・・・歌を歌い始めた。

推奨BGM

FIRST LOVE SONG 第2番

響が・・・翼が・・・クリスが歌い出すと次々と歌い始めた。

或人が・・・イズが・・・不破が・・・刃が・・・未来が・・・創世達が・・・弦十郎達も歌い全員が歌い始めるとキンジとベルが或人に向けてこう言った。

「社長！今までありがとうございました!!」

「もしまた逢えることがありましたら次は良い紅茶を提供いたしますね。」

そう言うとき或人は・・・涙をこらえるかのような顔つきになった。

また逢えるかどうか分からないのにもう一度あると信じているのを見て
或人はキンジとベルに向けてこう言った。

「ああ！また逢おうぜ！！この世界の・・・いや！世界を超えてまた逢おう！」
それを聞いてキンジとベルが笑みを浮かべると・・・3人は光と共に空に
打ち上げられて元の世界へと戻っていった。

エピソード編③

その事を思い出していた或人は空を見上げて・・・こう呟いた。

「飛んでみせるよ・・・夢に向かつて。」

そう言いながらジャンプのプログライズキーを握っていた。

『ジャンプ』！

推奨BGM 『REAL × EYES』

旧『Z A I A エンタープライズジャパン』改め新飛電製作所

「山下所長、お時間です。」

「ああ、分かったよシエスタ。」

山下はシエスタに向けてそう言った。

緒川邸から解放された後数日の入院から退院して今や所長として

在籍している中で山下は・・・嘗て天津が使っていた机の上にある写真・・・

福添副社長の遺影に向かってこう言った。

「それでは・・・所長、行つてきます。」

そう言つて手を合わせていた。

特機待機所

「本日より特機開発部門兼実働部隊配属となった『刃 唯阿』と申します、未だ未熟者でありますかどうかよろしくお願いする！」

『了解！！！』

特機全員が敬礼して答えると・・・サイレンが鳴った。

「ノイズの襲来だ！総員出撃！！」

『了解！！』

体調の言葉と共に刃も含めた全員が出撃した。

コンサート会場裏

「お疲れ様です翼ちゃん！」

『お疲れ様————!!』

「ありがとうございます!!」

翼がそう言つて汗を拭いていると・・・友里が現れてタオルを出して
こう言つた。

「お疲れ様翼ちゃん。」

「ありがとうございます、この後の予定は？」

そう聞くと友里はタブレットを出して今日の予定を話した。

「ええとね、この後はアメリカの音楽会社からオファーに向けた話し合いをして暫く
休憩とればタご飯までは特訓してそれが終わったら学校に提出する
宿題をしなきゃね。」

「はい。」

翼がそう言っていると荷物を取ろうとした瞬間に・・・その荷物を
サングラスをかけた男性が取るところ言つた。

「こいつは俺の仕事だ。」

そう言つてサングラスの男性・・・不破がそれを持つて車にいる・・・藤堯がドアを開けて翼を車中に入れて其の儘全員載せて走つて行つた。

何処かのビル

「迅・・・亡・・・雷。」

そう言う金髪の髪を短く切り揃え明治時代の若い人たちが来ていたような黒と紫の衣装を着た男性・・・型ヒューマギアの滅がそこにいた。

迅を蘇らせたのは『Z A I A エンタープライズジャパン』であつたことが分かり彼らが製造していたヒューマギアの素体をベースにして滅に提供したのだ。

すると滅はビルの下にいる多くの人間やヒューマギアを見てこう言った。

『滅亡迅雷， net』は例え俺だけになろうとも必ず成し遂げて見せる、

この世にある悪意がヒューマギアに向けたその時・・・俺は再び立ち上がる。」

だからこそ見守ると言う道を選択した滅であつたが通信が入つた。

「何だ・・・何・・・!?!」

滅はそれを聞いて慌ててその場所に向かつて行つた。

そして飛電インテリジェンス。

「それだけが飛電 或人、本当何だな。」

滅がそう聞くと洗が或人の領きを見て近くにある何やら布で覆われた何かから

布を取り出すと現れたのは……

「……迅。」

響の言葉と同時にその視界に映ったのは……迅であった。

「見事にまで再現出来ました。」

「我々の技術の粋を集めてやつとここ迄復元出来ました。」

山下がそう言うとか人がこう言った

「じゃあ……やるぞ。」

そう言つて或人は懐から……修復された迅のイヤーマジュールを付けると
緑色の光が点滅するのを見て滅は迅の前に立つてこう言った。

「……迅……!!」

そう言うと同時に迅の眼が・・・開いたのだ。

全員はもしかしてと思っている中で山下は少し浮かぬ顔をしているのだがその理由が・・・これである。

「()は・・・」

「迅！俺が分かるか!!」

滅がそう聞くと迅は・・・こう返した。

「君・・・誰？」

「・・・何？」

滅はそれを聞いて信じられないような表情をしていると迅はこう続けた。

「ここ何処？僕は一体・・・何なのココ？」

迅がそう聞いていると山下はこう答えた。

「イヤーモジュールの破損が激しくて・・・覚えている情報データが殆ど完全に消えていて・・・彼が滅亡迅雷，netに所属していた時の記憶は全部・・・

破損していて再生は不可能だったんだ。」

「・・・そんな。」

それを聞いて響は足から崩れ落ちていく中で滅は迅を抱きしめてこう言った。

「迅・・・俺達の事を・・・そんな・・・!!」

そう言いながら泣いていると或人がこう言った。

「大丈夫だよ！」

「何が大丈夫だ・・・もう迅は迅では!!」

滅がそう言つて掴みかかろうとすると不破が抑えようとしている中で或人はこう続けた。

「どれだけ時間が掛かっても教えるんだ、思い出も！夢も!!心も!?

そして何よりも・・・俺の百兆個のギャグもな!!」

それを聞いて響は怒り心頭になってこう言った。

「そんなキャパの無駄遣いをするなー!!!」

「落ち着いて響!!」

未来がそう言つて抑えていると或人は・・・こう言つた。

「さあ!0から立ち上げて!!1からのスタートだ!!!・・・」

『01』だけにー!!」

そう言ふとイズが・・・こう返した。

「社長、そのギャグは・・・古すぎて意味がありませんね♪」

「イズさー!ー!ん!」

辛口評価!?!と言つていると何処からか・・・笑い声が聞こえた。

「あはははは．．．あはははははははははは！」

笑っていたのは不破ではなく．．．迅であつた。

すると迅は笑いながら或人に向けてこう聞いた。

「面白いねそれ！ねえ其れ何なのそれ!？」

そう聞く迅の表情はまるで最初に会つた時の様な．．．屈託のない
笑みであつた。

すると或人はある事を思い出していった。

迅相手に戦い、時に共闘して、そして．．．友達になつたあの時を。

すると或人は少し涙目になつてこう答えた。

「これはね迅、笑いだよ。」

「ワライ?！」

「そう、人を笑顔にさせる方法の一つなんだ。其れともう一つあつてな。」

そう言つて或人が耳打ちをしていると或人は．．．天に向けて指さして

こう言つた。

「それじゃあせーの……『アルトじゃー……ナイトー!!』って違うよ迅そっちギヤクだつてこつちだつて。」

或人は迅に向けてそう言いながらさっきのをもう一度やろうとするとイズだけではなく……未来が響を引つ張つてこう言った。

「私達もやろうよ響!」

「ちよちよちよつと待つてつて引つ張るな未来!」

その光景を見て彼らは微笑ましく見ておりそしてその更に後ろで……是之介や其雄、一花、福添さん、そして何よりも……亡と雷がその光景を見ていた。

「それじゃあせーの……」

「「「アルトじゃー……ナイト……!!!」」」
そう言っているその光景こそが是之介が目指していた夢の姿。

人とヒューマギアが共に笑いあえると言う理想であつた。

そして別世界

「離してくださいレテイシア！キンジサンが!!キンジサンが?!」

「ちよつと待つてよ姉さん！今何があつたのかまず考えないと!!」

そう言っていると上空で巨大な光が覆われると現れたのは・・・

キンジ達であつた。

「悪い、遅かったかレスティアア？」

そう聞くとレスティアアは笑って・・・こう言った。

「キンジサン！」

そう言つて抱きしめていった、戦いは終わりました新たな戦いが始まる前のちよつとした光景であつた。

因みにだが……。

「それでキンジサン、誰なんですかその人？」

「あ。」

クリスの事を聞かれて言い訳に時間が掛かったのは言うまでもない。

エピソード編④

そして9月26日、キャノンボールフェスタと同時に行われた武偵校の文化祭が執り行われた。

あちこちで出店が並んでおり武偵校の進学を考えている生徒や親御さんの説明会も兼ねた催しが執り行われている中キンジは辺りを見渡していた。

ロジでは格納庫にあるヘリコプターやISや戦術機を輸送できる輸送機の

操縦席に座ることが出来ると言う事で子供たちが喜びスナイプではエアガンの射的、SSRでは占いミュージアム、CVRのミュージカルが大盛況だなど思っている

射的場で・・・何やら人混みが多いなど思ってみようとして・・・
声が聞こえた。

「おいおいおい何だよあの子うめえな！」

「それにしてもあの銀髪凄い命中率だなほぼパーフェクトじゃね？」

「然し凄い綺麗な子だよなあ！あの爆乳でよくあそこ迄の集中力って胸がはみ出てねあれ?!」

「(銀髪・・・爆乳・・・まさかな。)」

そう思つて見て見るといたのは・・・クリスであつた。

「(お前かよつて全弾命中しているし!?)」

キンジはそれを見て驚く中で関わらねえようにしようと思つて離れようとすると・・・声を掛けられた。

「おおおいキンジ！すげえぜこれあともちつとでパーフェクトだから

見やがれや！」

それを聞いて、（ハッ）／＼オワタと思っていると武偵校生からこんなお言葉が届いた。

「え？あの子キンジの知り合いかよ？」

「クソが・・・黒髪超乳の次は銀髪爆乳かよってどんだけ美少女
ゲットしているんだツウの。」

「リア充死すべしリア充死すべし、リア充死すべし。」

「（俺今日生きて帰れるかなあ。）」

ほろりと涙流しているとクリスがパーフェクトを取れたことから賞品として人形を幾つか貰うとそれを小さな子供たちに向けるところ言った。

「これやるから速く帰りな。」

「え！良いのお姉ちゃん!？」

「おおよ！じゃあな。」

そう言って立ち去るのを見て子供達は……こう言った。

「ありがとうねエ小っちゃいお姉ちゃん！」

「誰がチビだ!？」

「落ち着けクリス。」

キンジはそう言ってどうどうと言って落ち着かせようとしながら
其の儘連れて行った。

『いらつしやいませー!!』

女子たちの声が聞こえる中でキンジは裏方を手伝っていた、それは蘭豹先生曰く・・・

・・・こう言われたそうだ。

「そんな根暗そうな目つきのポリ公がおらんやろ!？」

「理不尽!!」

それを聞いてマジかよと思っているとそれをどっかで聞いてたクリスがクスクスと笑いながらこう言った。

「根暗って・・・クククク。」

「おいお前聞いてんぞ?」

キンジはそう言いながらクリスに向けてこう聞いた。

「何でお前ここに居るんだよ?」

国連軍には行ってなかったのかと聞いて来た、あの後キンジは自分が別世界に行ってたこととヒューマギアに関する情報データを提出した後にシンフォギアシステムについての事を聞いた後に防人がこう言った。

「そんじゃあ住民登録書偽造するか。」

そう言って今学校の打ち合わせじゃなかったかと聞くとクリスはこう答えた。
「ああ簡単だよ・・・アタシ・・・」

「……この学園のスナイプでお前のチームに入る事になってるから。」

「……マジか？」

「マジだ、あそこに行く前に転入手続き済ませた。」

これ証明など言つてクリスは・・・胸元からポンと言わんばかりに学生証を見せた。

それを生暖かいなと思ひながら見ると・・・確かにだと確信した。

「お前がスナイプとなると陣形については後で飛鳥と話し合わねえとなあ。」

そう呟いていると・・・蘭豹先生がキンジに向けてこう言つた。

「おい遠山！お前こいつと代われ!!」

そう言つて現れたのは・・・平賀であつた。

最早お化けじゃねと言わんばかりの化粧の付け方を見てそう思つている中で蘭豹先生はこう続けた。

「こいつたつばが足りねえからな、この見た目じゃあお化け屋敷に

ぶち込んだ方が速そうだがその代わりにお前が出るんやで。」

分かつたなと言つとキンジはハイハイと言つて出ようとする。蘭豹先生はクリスを見て・・・ニヤリと笑つてこう言つた。

「おい遠山！」

「？」

「お前・・・こいつと出る!!」

そう言つてクリスを指さすのを見てこう思つていた。

「誰か嘘だと言つてくれ。」

仕方なしにIS学園が使っていたメイド服を使うが全員……その光景を見ていた。

ロングドレスなのだがその見た目が妖精の様な光景に見えて全員ぼーつとしていたのだ。

そんな中でキンジはある少女を見かけた。

それは……彼女

「中空知……何やってんだあいつ？」

レスクイーンの衣装を着た中空知が何やら慌てながら作業しているのを見て

一応警察だしなと思って助け舟を出すと中空知は慌ててこう言った。

「ああああああのおおおとおおとこやま君!! うううウイトレス失敗ばばばかりでございございゴメンナサイ! わわっわ私は」

「中空知さん落ち着いて後は私達がやるから。」

そう言つて飛鳥が慣れた手つきで注文をしていると何処からか……

声が聞こえた。

「おいあのメイドさん凄い露出だよな？」

「ああ、けど凄い美人だな。」

「おまけに胸でかくてクールそうで俺ときめいちまいそうだけ。」

そう言う声が聞こえたので一体何だと思つて見て見ると現れたのは……
ベルであつた。

するとベルがキンジに向かつてこう言つた。

「お久しぶりですわご主人様♪」

内容

「本日の紅茶はスリランカの『ウパ』でございます。御茶請けとしましてカシューナッツに塩を振りかけた後に更に煎り直したものでございますのでどうぞ。」

ベルがキンジに向けて何故か・・・紅茶を提供しているといや何でと
思っている中で周りの生徒達がこう呟いた。

「え？またキンジの野郎が女連れてきたダ!？」

「然も白人で銀髪超乳だなんて何でアイツばかりがそんなに・・・!」

「おい誰か来てくれ!超乳メイドさんがキンジにご奉仕しているってよ!!」

「むうううう、遠山君!!」

「あ奴は・・・!!」

「キンジ。」

「キンジサンまた女性に・・・!!」

「あの男姉さん悲しませたら・・・どうやってコロソウか？」

「よし、オツズの内容帰るぞ華毘。」

「了解つすて・・・他にもなんか嫉妬の炎を燃やしている奴がいるつすよ。」

華毘がそう言いながらその方を見るとそこにいたのは・・・目に光が籠っていない白雪であった。

「フフフフ・・・キンちゃん・・・」

その光景に全員が震えあがっていく中でキンジがこう聞いた。

「それで？俺は今接客中なんだけど何かあるのか??」

キンジがそう聞くと更に・・・声が聞こえた。

赤璃の提案を聞いてキンジ達は訓練用の廃ビルに入るとではまずとは言つてこう説明した。

「それでは現状についてのご説明といたしますわ、先ずは今回の騒動による《リバティー・メイソン》からについてですが先ほど外交武門の妹から報告が入り《M I 6》と交戦状態になり更にそこにメーヤさんが所属している十字教も加わつてイギリスの裏社会は今や泥沼になつており諜報活動に支障をきたしております。」

「まあそうだろうかメーヤさんあの後お礼言つて帰つて行つたよな？」

「そう言えばそうだったわね。」

「今回の事の報告で一旦ヴァチカンに行つたと聞いています。」
レスティアの言葉を聞いてその通りと赤璃が答えてこう続けた。

「尚ワトソンさんは本来ならば本部に戻つたが上で処罰となる予定でしたが幹部の一人がそれを止めて何とか処分の保留は出来ましたがその代わりにこれまでの功績が全て白紙化されたので今は只の一般兵扱いとなります。」

「まあそれでもアイツは強いからな、気を付けて対応しないとイケねえ。」
キンジがそう言うのと赤璃はこう続けた。

「お次にですがベル様は既に聞き及んでおりましようが《M I 6》は既にベル様の辞職は撤回済みとなりましてそれと同時に遠山キンジ様に対して《M I 6》が同盟を結びたいと言う報告がある事は聞き及んで」

「はあ?!何じゃそりや聞いてねえぞ!!」

「・・・いないようですね。」

赤璃は成程と言つて空笑いしているところ続けた。

「理由は遠山キンジ様がベル様に勝つたことと今後の作戦展開に置いて国連との共同作戦をした方が都合が良いと言う理由らしく既に国連軍と協議を行う事となつているそうですわ。」

「そんなの防人さんは一度持つて・・・ああ、

まだ決定事項じゃないからかな。」

其れでかと思つているとクリスは何が何だと思つていると

レスティアの説明を聞いているので成程など言つているとクリスは赤璃に向けてこう聞いた。

「それでだけだよ?その殻金だっけ、機能するのかよ?」

出来なきや無理なんだろと聞くとベルが・・・胸元から取り出すと赤璃に手渡した後とに開けると赤璃はこう言った。

「確かに殻金ですね、これにつきましては後でアリアさんに

お返しいたしましょう。封印の仕方は白雪が知っておりますのでそちらに渡しておきますが万が一の際には・・・分かつておりますね？」

赤璃が全員に対して目つきを鋭くさせるとキンジはこくりと頷くのを見てそれではと笑つて去つて行つた。

そしてキンジはベルに向けてこう聞いた。

「其れじゃ改めてだが目的は何だ？今回の事に関しちやあお前が俺達に何かしらの恨みがあるようには見えねえが・・・一体何が目的だ。」

キンジが万が一に備えて準備していると・・・ベルはキンジに向けてこう言った。

「簡単ですわ・・・」

「……今日から私《ベル・フォレスト》は《影桜》の一員に加わる事が決まりましたのでそのご報告です。」

「……ハアアアアアアアアアア!?!」

異変

「いや待てよベル・フォレスト！お前、え、何で、意味わからないぞ!!」
キンジがそう聞くとベルがこう答えた。

「はい、《M I 6》は私の残留を認めたと同時に今後の事を考えて

我々は国連軍の機密部隊と協力しE U圏内での事件に戦役を確実に潜り抜けて存続を狙っております故の結果ですがもう一つ言う事があります。」

「・・・何だよ一体?」

キンジは何だと思っているとベルは・・・にこりと笑ってこう答えた。

「私は貴方に興味を抱いておりますわ♪」

「「「「「」」」」」」

それを聞いてレスティア達がキンジに対して冷やかな目つきをするのを見てえ？何でと思っているとベルはこう続けた。

「貴方は向こうの世界に置いてクリス様を守るがために行動するその想いと同時に或人様たちを守らんがために行動するその騎士道精神は私が知っている

あの叔父様その物の行動でございますわ、だからこそ私は貴方の近くにて見届けて貰いますわ。」

それを聞いてレスティアはああ又ですかと思いつつ頭を悩ませていた。

そしてベルは自身の所属を改めて述べた。

「私ベル・フォレストは今日を持ちまして《影桜》のロジとして所属と相成りました。」

「ロジか・・・となれば足が必要になるから丁度いい編成となるな。」

キンジがそう言うのとベル・フォレストに向けてこう言った。

「そんじやだが・・・まあ宜しく頼むわ。」

「(こちらこそ)。」

ベル・フォレストの言葉と共に手を差し伸ばすと・・・携帯から臨時ニュースのデータが届いた。

一体何だと思つてレテイシアが見て見ると・・・目を大きく見開いて

こう言った。

「遠山キンジ大変よ!『キャノンボールファスト』の会場で女性権利主張団体の連中がIS使ってテロをおっぱじめたわよ!!」

「何だと!?!」

キンジがそれを聞いて驚いているとその場所をニユースの場所と位置を確認して・・・クソと言ってこう続けた。

「場所が遠すぎる!今からバイクで飛ばしても間に合わない・・・

俺は何も出来ないのか!!」

キンジがそう言っていると・・・電話が鳴った。

「何だ・・・防人さんか!?!」

キンジがそう言って出て見ると防人がこう言った。

『キンジか!今何処にいるって・・・確か学園祭だったな!!!』

「ああそうだ!だが今言った処で何の役に」

『立つかどうかじゃないんだ!今俺は戦術機使って攻撃している!!

俺達がここを守るからお前達はそこを守れ!?!お前は

お前の成すべきことをしろ。』

良いなと言うとキンジはこう答えた。

「・・・分かった。」

『まあ大丈夫だ、向こうはその殆どが疑似コアを搭載している第2世代が殆どでこっちは第3世代がその殆どを戦力としているから戦力に支障は・・・クソが！』

あいつ等第3世代がって機体は『ブルー・ティアーズ』って畜生が!!

あいつらアンダーグラウンドあれを手に入れたのかって!!』

そう言ったと同時に通信が切れた。

「おい防人さん! どうしたんだよ!! 応答してくれって

一体何が起きたんだよ畜生が!!」

そう言っていると赤璃が全員に向けてこう言った。

「兎に角今はお客さん達の避難を最優先とし私達が今出来る事をしましょう。」

赤璃の言葉にキンジが確かになんと言ってこう言った。

「よし、レスティア。飛鳥達に指令を出してくれ! お客さん達を避難すると

同時に俺達の機体を使って迎撃準備に当たってくれって。」

「分かりました。」

「其れとだが万が一に備えて医療道具も持っておけよ、今必要なのは

救護科なんだからな。」

「はい！」

レスティアが返事して出て行くのを見てキンジ達も向かって行った。

一方会場では。

「くそが！通信が途切れちまったかかって機体の通信システムが壊れたのが原因かこれじゃあ戦闘に支障が……機体反応が2つ……!!」

それを見て防人は驚いてその上空を見た。

「……黒色の……ラファール・リバイブだと……!!」

そして数分後

「向こうの戦闘は終了、謎の I S 二機が駆けつけて事態は沈静し

構成員の殆どが逮捕するも第三世代パイロット……

《セシリア・オルコット》は現在逃亡中って一体何がどうなってるんだ

こいつは!!」

キンジがそう言うが無理もない、セシリア・オルコットはあの事件以降

姿を見せていなかったのに何故今だと思っていると……防人から電話が来たので何だと思っていると防人がこう言った。

『キンジ、さつき一夏から報告が上がったからよく聞け……

「……未確認だが男性IS操縦者が姿を見せた。』

「!!何だっ!?」

キンジがそれを聞いて驚いていた、今まで男性IS操縦者等一夏ともう一人しかいなかったのに何故と思っていると防人はこう続けた。

『未確認のIS操縦者は何処から現れたのか……アンダーグラウンドの出身かはたまたま……まだ分からない事が沢山あるが取敢えずの所は様子見としておく。このことは他言無用とする、良いな。』

そう言つて防人が電話を切るのを聞いてキンジは天に向かつてこう呟いた。

「一体……どうなるんだこれからよ。」

誕生日

そして次の日、キンジは飛鳥たちを連れてとある場所に向かっていた。

「ねえ遠山君、今日は誕生日の人がいるって聞いたけど本土じゃないのって言うか此の儘行くと・・・I S学園だよ？」

飛鳥がそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、俺たちが向かっているのがそこだからな。」

「・・・もしかしてだけでもまた女の子ってオチじゃないよね？」

「イヤ待て飛鳥！俺の交友関係が女しかない前提で聞くか普通って

男友達・・・とはいかねえが不知火や武藤が」

「でも女子率が圧倒的に多いよね遠山君？」

「・・・」

それを聞いて思い返して・・・こう思っていた。

「(返す言葉が一つもねえええええええええ!!)」

あれ可笑しいなと思いつながらキンジはI S学園の校舎の真ん前にある学生手帳をカメラに向けて見せると・・・暫くして門が開いた。

一見すれば簡単な風に見えるがこのカメラは生徒手帳にあるデータと共に持つている人間が本物かどうかをトランスフォーマーが発する微弱な放射能をも感知することが出来ると言う優れものである。

そして中に入ってキンジは総合受付事務所にて目的と日時、最後に武器を置くところ続けた。

「其れとですけど万が一に備えてベルトは持つてつて良いわよ、後拳銃の代わりにスタンガンライフルを渡しておくからそれとナイフの代わりに電磁ロッドを

携帯する事は許可されているから。」

じゃあねと言うのを聞いてキンジは其の儘携帯を操作して……食堂らしき場所に入るとそこには……大勢の人達がひしめき合っていた。

「黒鉄君、こっちはもう少して終わるツたい。」

「そうですか、じゃあ刀華は子供たちの飾りつけをお願いします。」

「なあよ綾斗、飯はこっちに置いて良いんだよな?」

「うんそうだね、ケーキの飾りつけは確か孤児院の子達が担当のはずだね?」

唯依さん、そっちは?」

「こっちはもう少しで終わるよ、切歌ちゃん、調ちゃんは今作ってる唐揚げ出来たら添え付けお願いね。」

「分かったで〜〜す!」

「はい。」

色々な少年少女達が何やら準備していると飛鳥がこう聞いた。

「ねえ・・・遠山君、コレツテ・・・何?」

「ああ、誕生日だってさ。それで俺もプレゼントで持ってきたんだ。」

「・・・誰の?」

飛鳥がそう聞くとキンジは上にある・・・主役の名前を見せると飛鳥達は・・・

キンジは・・・こう思っていた。

「(聞かぬが花だな。)」
嫌な予感しかしないからなとそう思いながらキンジも座った。

そして全員が座ると葉がコップを片手にこう言った。

「そんじゃあ一夏の誕生日を祝して・・・乾杯！」

乾杯………！！

全員がそう言うのと飛鳥がキンジに近づいて小さい声でこう聞いた。

「ねえ遠山君、どう言う事？織斑一夏と知り合いだったなんて！・・・

聞いてないよ!？」

「ああ、ちよつと任務があつてそこからの仲だな。前に京都で筆家に泊まつたろ？一夏が紹介してくれたからなんだ。」

「ええそうなのツて・・・遠山君の交友関係どうなつてんの？」

「俺が知るか。」

キンジはそう言いながら一夏に近づくとある物を手渡した。

それは・・・これだ。

「これつて・・・フィンガーグローブですか？」

「ああ、剣道やつてるつて聞いたからな。滑り止めも付いてるから

使えるだろ？」

「ありがとうございますキンジさんつて・・・一緒にいる女性陣もなんか仲良くなつて
ますね。」

一夏はそう言いながら周りを見ていた。

「へえ、六刀流って腕の力半端ねえだろうなあ。」

「何言ってるんだ！二刀流も凄いやねえか!!今度一丁斬り合うか？」

「そいつは楽しみだなうっししし。」

「お姉ちゃんがいるっすね綾斗君って？」

「そちらもいるんでしょ、姉さん滅茶苦茶強いんですよえ。」

「まあ仕方ないっすよ！ウチの姉貴だって」

「幼馴染で・・・唐変木・・・大変でしたね飛鳥さんも雪泉さんも。」

「それ言わないでよ篠ノ之・・・箒ちゃん、頭悩ましてるんだから。」

「・・・電話番号交換しませんか？お互いの状況交流と言う事で。」

「そうだね！雪泉姉も一緒に交換しよ！」

「そうですね・・・同じ戦友として。」

「巨乳なんて・・・クソが」

「ムムム、チエスと言うのも中々じやのうマシユ殿。」

「夜桜さんも中々呑み込みが早いですよ。」

「成程、織斑一夏様が疲労していたのはそれが。」

「まあな・・・アタシも三年だからその間に・・・ほら・・・な。」

「一夏のハートを射貫くためにも共同戦線張りつつ競い合っているのさ。」

「でしたら私のいる場所に置いて・・・房中術を教えてあげましょうか？」

「是非とも!!」

「これがクーちゃん。」

「これがべべたん・・・仲良くしましょ？」
「うん！」

「クリスさん歌が上手いでーす！」

「今度はトリオで歌お。」

「ちよちよちよ待てつて!!」

皆それぞれ打ち解けているようで良かったなと思つてしていると一夏が何処かに行くのを見てどうしたんだと思つていて一夏はこう答えた。

「ちよつと涼んできません。」

「そうか、気を付けろよ。」

キンジの言葉に一夏は分かりましたと言って出て行って・・・30分以上が経ったのでキンジがこう言った。

「ちよつと探してくるからここにいろよ!」

「ああちよつと待つてつて皆で探した方がつてそう言うのは私と雪泉姉が得意だから任せてよ!!」

そう言つて2人は素早く立ち去るとキンジも走つて行つた。

「ここには・・・誰かいるのか?」

キンジは誰だと思つていと・・・闇の中から2人の人影が見えた。

一人はやせ型の自分と年齢が変わらないような黒髪の青年。

そしてもう一人は銀髪の・・・爆乳の一夏と同じくらいの年頃の少女が現れるのを見るとその声が聞こえた。

「全く何やってるんだ！織斑一夏と逢いたいからって勝手に出る

馬鹿がいるか！」

「良いじゃないですか『M』！ですがプレゼントを上げたので良かったじゃ。」

「あれがプレゼントと言うのならはお前は少し常識学べ!!」

全くと言いなから立ち去るのを影から見届けてから向かうとそこには・・・立ち尽くしたままの一夏がそこに立っていたのだ。

まあその後も色々あつたがとあり理由でキンジ達は巻き込まれることとなつた。

場所は京都、そこで彼は・・・英雄の末裔たち相手に戦う事となつてしまった。

人物紹介 10巻まで

遠山キンジ

原作、本作においての主人公。

子供の時に背中から撃たれて心臓に近い場所に銃痕がある。

昔から何故か女の子に好意を持たれる体質であり白雪の他に祖父経由で

飛鳥、雪泉ともその毒牙にかかった。

武偵校入学試験の際には現役武偵を倒したことがきっかけとなり、Sランクに

史上初の現役武偵校生登録者となった。

その後は記憶を失った『レスチア・J・ダルク』を『カナメ』として引き取り、同

棲生活していたのだが兄の金一が関わったことに対するパッシングにより

一度は武偵に対して絶望したが飛鳥、雪泉の祖父の説得とその後の飛鳥家に居候して

心が癒え、もう一度武偵として立ち上がった。

2年生進級時に『武偵殺し』によって史上初のチャリジャックに巻き込まれるが

途中で転入した同じくSランク武偵『神崎・H・アリア』の活躍

(少々大雑把であるが)助け出されるが更に追い打ちをかけるようにセグウェイ(UZI

搭載式) が現れたため最初はアリア、最後にキンジが倒した。

その後とある理由でアリアと戦う羽目になるも煙球を使って離脱した。

その後もアリアが家に勝手に入ってきたりレスティアを撃とうとしたためアリアに対して敵と認識された。

その後もバスジャックが起きるが能力が解放されたことにより収束した。

元々感が良いところがあるためか『武偵殺し』や『ブラド』の正体にも気づくことが出来た。

この二つの事件においては国連軍から配備された自立起動小型変身システム『ザビー』の使用により成し遂げられた。

だが、『魔剣(デュランダル)』事件の際にはレスティアが敵となって

立ちふさがった際には戦わずに対話して収めようとするなど敵に対しては徹底的に叩き潰すが味方に対しては甘いところが結構ある。

カジノ事件においてキンジは初めて人を殺すが冷酷ともいえる対応能力を保持しているためそれほど思っていない。

また、このカジノ事件前には金一(カナ)と再会するが敵対して勝利した。

『イ・ウー』制圧作戦時には国連軍の先輩であると同時に世界で2人しかいない

IS操縦士『織斑一夏』と共闘して潜入した。

その際にアリアと戦闘するも矢張りと言うべきかどうかだが実力が違っていた事から簡単に勝利した。

然しその後には兄である金一と共闘するも目の前で斬り貫かれてしまった。その後は一夏と協力し兄が使っていたドライバーを二重で使って戦った。なんとか辛勝するもこの攻撃によって金一は死亡しこれがキンジに影を落とした。

その後はただひたすら体を痛めつけることから防人の謀略によりプールに連れて行かれたがその場所で嘗て潜入していた学校でお世話になった

『初音ヶ丘 優衣』と再会しその後一夏と祭りに言った後花火が上がると同時に告白された。

2学期においては『藍幫(ランパオ)』に所属する武偵『曹 蒙匿』とその部下によって幾つか戦いが起こるもそれらを退いた。

尚武偵校生ではキンジの事を『巨乳専門のフラグメーカー』、『昼行燈』と呼ばれている。

遠山家においてはこの兄弟は女でも敵なら倒すという精神を保有している。因みにキンジは金一の形見である武器を5人分の刀にさせて欲しいなどと言う所から兄の生きた証を皆にも残すと言ったこともしている。

曹の案内の元極東戦役のあらましを聞いて国連軍として参加、

最初の相手はエル・ワトソンであったがレスティア達が相手どる事と

なったことからベル・フォレスト相手に戦闘を繰り広げてその中で『仮面ライダーバ
ルカン』に変身して勝利した後に『01』の世界に迷う。

向こうでは或人の会社で警備員として働くこととなつて在籍、共闘。

最終決戦前に雪音クリスを保護し共同戦線を張つたのちにファイネ相手に戦闘を繰
り広げて勝利した後に帰還した。

使用武器 ベレッタ、デザートイーグル、ピースメーカー、脇差、黒刀、煙球、苦無、
ホーネットクラッシュャー、苦無ガン、ウルフブレイカー

そして『仮面ライダーザビー』でもあるが極東戦役からは『バルカン』となる。

能力は『時間凝縮』

レスティア・J・ダルク

容姿出典『Fate Apocrypha』

キンジのヒロインの中でも主人公級。

ある任務で記憶を失い、キンジに助けられて身を置いた。

洞察力は凄まじいのでキンジがHSSモードになっても見分けがつくほど。

キンジの近くにずっといるが本人が本当に大変な時に何もできない自分が嫌で仕方がない。

その正体は30代目ジャンヌダルク。

キンジと敵対した際には最初は戦うもキンジを殺しかけた際に彼を助けるために力を使うためにキスした際に自身の思いを再確認した。

その後は妹でもある『レティシア・J・ダルク』と敵対した。

正体が分かった後においてもキンジの家に居候し、家族として共に過ごしている。

極東戦役に置いてエル・ワトソン戦では『仮面ライダー キックホッパー』に変身する。

能力は焰。

武器はベレッタと槍、西洋剣

レテイシア・J・ダルク

容姿出典『Fate Grand Order』

レステイアの双子の妹でデュランダル。

キンジに今でも敵対心があるが最初よりは軟化している。

極東戦役ではエル・ワトソン戦からは『仮面ライダー パンチホッパー』に変身する。

武器はツアスタバ・Cz100、槍、西洋剣

服部 飛鳥

容姿出典『閃乱カグラ』

キンジの幼馴染でこちらもヒロインにおいては主人公級。

天真爛漫で誰に対しても優しくする存在。

キンジの事はもう一人と同じくらいによく知っているため

キンジをサポートしてくれる存在。

ともに笑い、ともに泣くこともありキンジにとって良き相棒である。

キンジの事が好き。

武器は脇差*2

光 雪泉

容姿出典『閃乱カグラ』

キンジの幼馴染で年上。

武偵校の生徒会長でよくしてもらっている。

キンジの体質をよく知っているためサポートも出来る。

キンジの事が好き。

武器は鉄扇

伊達 焰・巫神楽 華毘

容姿出典『閃乱カグラ』

キンジの仲間。

キンジの女性関係に対して賭け事を良くしている。

焰の武器は日本刀*6

華毘は各種の工具

豊川 夜桜

容姿出典『閃乱カグラ』

キンジの仲間。

最初は焰達と同じ立ち位置であったがカジノ事件の際にキンジに助けられて以降気になっていく。

苦学生であると同時に14人もいる弟、妹たちの為に働く孝行者。

武器は素手

式風 紫

容姿出典 『閃乱カグラ』

キンジの仲間。

嘗ては昼夜逆転生活をしてきたがキンジの説得もあつて生活リズムを

改善させた。

キンジの事が好きで前にキスした。

チームの中で胸部が一番大きいかったが現在は二番目。

黒歌

容姿出典 『ハイスクールD?D』

キンジの仲間でペット

元々は猫カフェの店長に助けられてその店には言った後キンジの事が気に入って彼の下にお世話されることとなった。

その正体は猫しようで主殺しの大罪人であった。

事情を話した後は曹のつてを頼り『須弥山』に説明させてもらった。

初音ヶ丘 優衣

容姿出典 『炎の孕ませおっぱい★エロ学園』

嘗てキンジが潜入していたお金持ち学校の生徒。

キンジが入っていたクラスであるためキンジのことはよく知っていた。

容姿が整っているだけでなく巨大な胸が特徴で水泳部。

家はスポーツ用品店の社長であるため『東京ウオーターアイランド』の

セミオープンで再会した。

その後祭りにおいてキンジに告白してキスした。

武藤、不知火

キンジの仲間。

武藤はキンジの友達であると同時に情報通でありどんな乗り物でも使いこなすことができる。

不知火は武偵から見て変わり者の良識人。

防人 衛

国連軍第0特務隊長。

若い少年少女を中心とした組織で主にほぼすべての仕事をする。時には迷った人間に道を指し示すことができる。

織斑一夏

『インフィニット・ストラトス』及び拙作の作品『カオス・ストラトス』に出てくる主人公。

とある任務の後に銀髪がメツシユの様に生えてきている。

何事においてもひたすら成し遂げる存在で優しさと強さを併せ持つ存在。

嘗ての任務で人間の心の闇を見た後から悪を許さないという思いが

芽生えている。

キンジとの合同任務の際には『クレオパトラ』との戦いにより彼女の思想に怒りを覚え『仮面ライダー ヘルローグ』になって圧倒した。

その後もキンジと公私にわたって交流している。

神崎・H・アリア

イギリスから来たキンジと同じSランク武偵。

原作ではメインヒロインなのだが今作ではアンチキャラとなっている。

とにかく子供っぽくて自分中心。

実力は確かなのだがそういう所が原因であることから仲間にも恵まれていない。

『武偵殺し』の際にキンジを助けたのだがとある事故で変態と

勘違いしてしまった。

その後戦闘してキンジを無理やり仲間にしようと飛鳥達と解散させろと言ったりレ

ステイアに対して銃を向けるなどと言った自己中心的な行動によりキンジは

アリアを危険対象と決めた。

彼女が『イ・ウー』を狙っている目的は冤罪により有罪となって

拘置所送りとなった母親を助けたいのだが『武偵殺し』の犯人でもある理子には

手も足も出さず惨敗、レティシアにおいてはキンジに任せるしかなく、

ブラドにおいては何も出来なかった。

そんな自分がキンジに向けているのは嫉妬であると分かった後に『イ・ウー』のリー

ダーから誘われた後にキンジに戦いを挑んだが敗北し、

テロリストと協力関係だったことから裏的にCランクに下げられた。曹によって殻金を喪い何時『緋緋神』になるか分からない爆弾を本人は知らないうちに抱えている。

星伽 白雪

キンジの幼馴染の一人で巫女。

表向きは誰にも愛想よく振舞う優等生だがキンジに対しては独占欲が強く、キンジの近くに女がいれば速攻で殺す勢いで襲ってくるヤバイ人間。

また、武偵としては危険意識が少なくデユランダルの際にはレスティアを襲って誘拐するほどである。

未だ民間人扱いであったレスティアを誘拐したことに伴いチョーカーを付けられた後に接触禁止命令が出されてしまった。

峰 理子 リュパン4世

キンジのライバルで同学年。

ルパン三世の娘。

嘗てブラドによつて人体実験させられていたが『イ・ウー』のリーダーの
手によつて脱走できた。

『武偵殺し』の際には多くの実力がある武偵を殺しているため騙し討ちや暗殺、戦闘は
お手の物である。

ブラドによつてロイミュードに変身することが出来自身はその姿を嫌っている。

ブラド戦ではアメリカにロイミュードの技術を横流しした見返りとしてもらった第
2世代I S 『アラクネ』を貰いそれを纏つて戦つた。

新たに仲間を増やしたため更に増やして先代以上の人間になると誓つた。

ロイミュードは『ボムキル』

岩海 辰巳

17歳

男性

武偵校二年。

アサルト

見た目は「アカメが斬る！」の「タツミ」

ルパン三世の仲間、石川 五右衛門の弟子であり斬鉄剣の現保持者

明るい性格であらゆる人間に好かれるタイプの青年。

幼い時に両親を喪い、行く当てがないところを五右衛門が養子として引き取った。

その後剣の才能に気づいた五右衛門は自身の技を教えた。

現状でも成長中でありその才能は五右衛門曰く『某を確実に超える男だ』と太鼓判を
押した。

又、その性格が災いしてかどうか分からないが女性に惚れさせられる能力を
持っている。(特に年上に対してはクリーンヒットする)

未中 尽

17歳

女性

武偵校二年

スナイプ

見た目は「アカメが斬る! 零」の「ツクシ」

ルパン三世の相棒でもある「次元 大介」の弟子

幼い時に両親をテロで失いスラムに住んでいた時期に次元が銃の腕を見込まれて

弟子となった。

天真爛漫でそこから辺の少女と変わりないが仕事となれば冷静な判断で対処できる存在。

次元譲りの早打ちも得意であるが胸部の成長がすこぶる程早いため現在は早打ちから長距離射撃に変わっている。

里奈者 レキ

容姿出典『Fate Grand Order』

スナイパーで実力者。

本人は高い所に対してはスコープ越しでしか見たくないというほどの高所恐怖症。

読書家でよく本を読んでいる。

ブラド

表向きは小夜鳴先生として武偵校の非常勤教師として働いている。

嘗て吸血鬼と恐れられた『ブラド3世』の末裔

サデイスティックであるブラドと弱弱しいが頭脳明晰な小夜鳴の二面性で

暮らしている。

嘗て『イ・ウー』のリーダーによってロイミュード技術を奪われたことから戦うも負

けた後自身も『イ・ウー』に入った。

キンジと理子の戦いよって破壊された後二人共々死んだ。

ロイミュードは『トルーパー・ヘッド』

パトラ

クレオパトラの末裔で自称最強。

相手を見下して攻撃する女尊男卑者。

どちらにおいても半端モノでありIS乗りとしての実力は一般人に

毛が生えた程度。

一夏よってコテンパンに伸されるも変身して再度戦って一夏を追い詰めるも

変身した一夏の手により倒された後裏カジノで金一に会って殺す様に言うも逆に

殺されてしまい最後はキックよって全身が四散してしまい、絶命した。

シャーロックホームズ

『イ・ウー』のリーダーにして最初の武偵。

高い実力と予言めいた推理『条約推理』で未来を予測し、自身の死期とある物質を継承できる人間を探してやっと思つけたのがアリアである。

そしてアリアを鍛えさせるため『イ・ウー』を乗っ取ってアリアを

成長させるための駒にしようと考えていたが自身の推理が悉く外れていることからそれらを修正するためにレスティアを殺そうと考えた。

然し新しい力を手に入れた一夏とキンジによって破られた。

死の寸前にシャーロックホームズは過去の映像が見える力を手に入れ、

1発をアリアに、そしてもう1発は・・・幼いキンジに向かって撃った。

これがキンジの銃痕の真実でもあった。

そして最後にはICBMにの煙と共に砂となって消えた。

李 藤駿（リ・トウシユウ）・楊 基姫（ヨウ・キキ）・

高 丁侠（コウ・チヨウキヨウ）

容姿出典『Fate Grand Order』

曹の部下。

それぞれアサルトが男性二人。

CVRが女性一人の編成である。

李は槍を、高は剣を、楊は拳法と毒を使う。

曹 蒙匿（ソウ・モウトク）

容姿出典『ハイスクールD?D』

『藍幫（ランパオ）』の一つ『鳳蓮』の頭領であり神器の上級兵器

『神滅具（ロンギヌス）』の一つ『黄昏の槍（トゥルー・ロンギヌス）』の

使い手。

高いカリスマ性と人を見る目を持ち合わせ、自身の武術と武力には自信がある。キンジを仲間にしようと部下を喚びつけて実力を把握しようとしていた。

最終的にはキンジが発現した何かによってロンギヌスは破壊された後、キンジの実力をほれ込み、義兄弟の盃を交わした。

ベル・フォレスト

容姿出典『アズールレーン』の『ベルファスト』

『MI6』所属のスパイであると同時にメイドさん。

ブラドによって人体実験を受けてフルボトルの能力を体で使う事と注射器を使って変身することが出来る。

『01』では押収したプログライズキーとレイドライザーを使って

『仮面ライダー ファイト』に変身することが出来、帰還後にキンジのチームに編入した。

エル・ワトソン

『リバティイ・メイソン』のメンバーでスパイ、男装をされていて実は女性。キンジを殺すために情報を集めてISまで使用したにも関わらずレスティア達に負けたどころかその前にもベル・フォレストに負けただけではなく命乞いをして共同戦線を張っていた事がバレてしまい貴族としての地位を失ってしまった。また、実家でも勘当されてしまつて現在は小さなアパート住まい。

赤璃

容姿出典 『アズールレーン』の『赤城』

原点とは違って大人しい性格の女性で京都にある

『京妖怪・九尾狐（くびこ）組国内政治担当』の長である。
キンジ達に緋緋神の事を伝えており同盟を結んでいる。
キンジ達が奪取した殻金をアリアに入れ直した張本人。

ウエイバー・ベルベツト

容姿出典『Fate Ground Order』に出てくるウエイバー・ベルベツ

ト

『藍幫（ランパオ）』のメンバーで中枢組織にも顔が利く存在、全員からは先生と呼ばれており表向きは中国の外国語の教師をしている。

メーヤ・ロマーノ

日本人とイタリア人のハーフで嘗ては金一（カナ）の相棒。

ローマ武偵校生でバチカンの命令で極東戦役の説明会に参加した。

高い実力を持っているのにも関わらずエル・ワトソンに不意打ちで敗北した。魔女に対して殺人衝動マシマシレベルの狂気で攻撃する。

『01』*シンフォギアサイド

飛電 或人

『01』の主人公でこちらでも同じ、父親型ヒューマギアに幼少期

育てて貰った事からヒューマギアを道具としてではなく家族として捉えている。

祖父である是之介から会社を引き継ぐが天津の謀略によって会社を追われるも

廃棄されているヒューマギアを回収しながら各地を回って『デイスペア』に関する情報を探っていた。

キンジ達を拾ってからは会社を新たに造ったりヒューマギアを

配備させ直したりと色々忙しくとも充実した日常を過ごしていたがアークの出現でそれらがあつという間に変わりアークに敗北して『01ドライバー』を奪われて衛星ゼアを奪われてしまっただけではなくアークによって飛電製作所が

破壊されてしまい絶体絶命の危機の中で戦いの中で友情を結んだ『迅』の命がけの身代わりで命を救われるも迅を目の前で失ってしまいアークに対して純粋な怒りがこみあげてしまいゼアから新たなドライバー『0・0ドライバー』を使って

『仮面ライダーZ—W』に変身しアークを圧倒したがアークによって暴走する人々を救わんがためにヒューマギアを使う事をネットを使って広げ人々から

ヒューマギアに対する偏見を消す一助となった。

その後も滅のプログライズキーと響のプログライズキーを使って『仮面ライダーP』に変身しアークを倒したがそのアークをフィーネが吸収してしまい

絶体絶命に追い込まれるも父親と祖父の言葉で復活し『仮面ライダー W|Z』に変身してフィーネを倒した。

戦後は飛電インテリジェンスの立て直しに全力を注いでいる。

因みに前職は芸人だがあまりにもギャグセンスがない為・・・寒いギャグしか言わないがために不破鹿笑ってくれない。

デュランダルの適合者でもある。

イズ

秘書型ヒューマギアで或人にとって大切な存在。

祖父の時代から社長秘書として働いており飛電インテリジェンス全てを

熟知している。

内部には小型化されたゼアと同性能のスペックを誇るAIが内蔵されており

計算処理能力が高い。

不破 諫

元AIMS隊長でこちらの世界の『仮面ライダー バルカン』

天津によって偽りの記憶を埋め込まれたことによりヒューマギアに対する

憎しみが強くありヒューマギア撲滅を掲げていた。

発覚した後は悪意を持つAIの破壊にソフトチェンジしており或人達と共闘した。

アークとの戦闘後は翼のボディガードとして働いている。

尚・・・馬鹿力で巷では『ゴリラ』とも呼ばれている。

刃 唯阿

AIMS戦闘兼技術部部长の2つの資格を持った女性で

『仮面ライダー バルキリー』に変身できる。

機械系統に関しては突出した才能を持っておりショットライザーを開発した才女。

嘗ては天津の命令に従いヒューマギアの暴走の偽造や破壊などに本心は嫌々ながらもやる事となつてしまい内心後悔していた。

天津に対して離反した後は一時的に滅亡迅雷，netに所属してアーク及び亡の復活に手を貸したがアークについては迅との陰謀に加担して復活した後に破壊しようと目論むもそのチカラの圧倒的な差に挫折してしまい一時は戦う事すら逃げることを選んでいた。

その後は或人達と協力してアーク討伐に貢献してその後は特機に所属となった。

天津 垓

Z A I A エンタープライズジャパンの社長にしてヒューマギア暴走の原因の一角。
『仮面ライダー サウザー』に変身できる。

是之介が描く理想に対して嘗て自身の父によつて歪められた理想との完全な相反する存在に一方的に敵視し訃堂と協力してデイブレイクを仕掛けた。

その後は裏工作で飛電インテリジェンスを乗っ取つたがゼアを一時的とはいえその手に納められなかつたことに内心怒ると同時にヒューマギアの全面破棄とレイドライザーの大量生産に踏み込んだが或人や響達の妨害が幾度もあり

最終的にはアークとの戦いで体に乗っ取られた後訃堂の抹殺に手を貸してしまつた。

最終決戦後は警察に捕まり死刑が確定された。

滅

『滅亡迅雷, net』の司令官的存在で『仮面ライダー 滅』に変身できる。人類滅亡を掲げており響達とも同盟を結んで人類滅亡を目論んでいた。

一時はAIMSに捕まっていたが釈放されZ A I Aエンタープライズジャパンや或人達相手に戦っていた。

元々父親型ヒューマギアであったがために迅の事を本当の息子の様に想っており迅を守ったり迅がアークによって破壊されたことを知った時は怒りを燃やすと言った父親としての一面が見えた。

最終決戦時には迅が保有していたスラッシュユライザーを使って『仮面ライダー ポイズンスコープイオン』に変死した後に

『仮面ライダー アサルトスコープイオン』にも変身で来た。

その後はヒューマギアから人類の悪意から守ると言う思いを心に刻んで孤独の戦いをしている。

迅

『滅亡迅雷， n e t』の一員で『仮面ライダー バーニングファルコン』に変身できる。

元々は普通のヒューマギアで子供みたいに無邪気な性格であったが人を殺す事に対する躊躇もなかった。

或人によって倒された後Z A I Aエンタープライズによって新しい体を得て復活すると大人な考え方に変わりヒューマギアの解放に切り替えた。

或人に対しては心の何処かで友達だと無自覚に思っておりアークによって破壊される寸前の会話で自覚した後に爆発した。

最終決戦後は迅の耳についていたデータを基に復元するも

『滅亡迅雷， n e t』時代の記憶が抜け落ちてしまい記憶喪失状態となった。

或人のギャグに対して最初に本当の意味で笑ったヒューマギアである。

亡

『滅亡迅雷, net』の一員で『仮面ライダー 亡』に変身できる。

元々はZ A I Aエンタープライズのヒューマギアであったが天津によって破戒されそのチップは不破の脳内に埋め込まれてしまった。

その後不破を操る事があったがその後には解して共闘、刃によって救出された。

開発担当のヒューマギアでレイドライザーの基礎設計も亡である。

最終決戦時にギーガー全機を操って大型荷電粒子砲『カ・デインギル』の

エネルギーをギーガー全機を遠隔操作で食い止めるもオーバーヒートしてしまい其の儘データが消滅した。

雷

『滅亡迅雷, net』の一員で『仮面ライダー 雷』に変身できる。

元々は宇宙飛行士型ヒューマギアであったが迅によって性格が豹変して雷となった。

昴と呼ばれる弟の同型型ヒューマギアを家族としておりその記憶は僅かながらに残っている。

アークによってシンギュラリティに達したと同時にアークの陰謀によって乗っ取られてこれがオードライバーを奪われた理由である。

最終決戦時には翼と共に『カ・デインギル』を計画し破壊するも雷はたった一人でそれを破壊することと引き換えに消滅した。

アーク

全ての元凶にしてラスボス級の強さ。

是之介が最初に造った衛星であるが墮ちた後は湖に沈んだままとなっていたが『滅亡迅雷, net』を裏から操っていた。

アークが顕現して以降は天津や或人を苦しめており天津を乗っ取った際には討堂を殺すことに貢献してくれた。

最終決戦時にはフィーネに乗っ取られた後に迅たちのデータによってゼア事破壊された。

立花響

戦姫絶唱シンフォギアの主人公であるが今作ではANOTHERタイプの性格となっている。

ツヴァイウイングのコンサート時にノイズの襲撃によって自身は

ガングニールの破片が心臓近くに貫通して生死を彷徨った事があるがその後の虐めや誹謗中傷によって嘗ての元氣いっぱいな性格は失われた。

『デイスペア』を造り上げて『滅亡迅雷, net』と共に人類絶滅を目論んでいた。そしてノイズ殲滅とヒューマギア保護の下で行動しており時には或人とも敵対関係となっていた。

然し飛電製作所襲撃時にアークに乗っ取られて迅を破壊してしまった後自信を傷つけてしまう事から或人によって助けられてアークを倒す道を選んだ。

最終決戦時には自身が持つ『サーベルタイガー』とシンフォギアを融合させて勝利に貢献した。

『デイスペア』の時には凶と名乗っていた。

ツヴァイウイングの歌手であると同時にシンフォギアの奏者の先輩格。

嘗ては天羽奏と言う女性と共に組んでいたがノイズとの戦闘時に絶唱で奏が命を落としたことから単独で行動して誰も信じられなくなっていた。

或人達の下に来てからは年相応に接してくれる或人の行動に

一時期混乱していた。

最終決戦時には雷の形見であった『ドードー』プログライズキート

シンフォギアを融合して戦った。

その後は友里達をマネージャーとして雇ってアメリカに向けて勉強をしていた。

雪音クリス

シンフォギア『イチイバル』奏者で戦災孤児。

幼い時に両親と共に紛争地帯であったバルベルデにて人道活動をしていたが戦闘時に両親が他界してしまったがためにテロリストに拉致されてそれから数年間は捕虜生活を強いられていた。

保護されてからはフィーネよつての虐待等があり曲がつた教え方をされたがキンジとの出会いと同時に自身の心に寄り添ってくれるその想いに心を打た共闘する道を選んだ。

最終決戦時には亡が使つていた『ジャパニーズウルフ』プログライズキーとシンフォギアを融合して戦つた。

その後はキンジの世界に行つて同じチームに入った。

風鳴 八紘

風鳴 翼の父親にして総理大臣、シンフォギアの理解者であり暗部にも精通している。
る。

翼の心配を第一にしているがために遠くに離すと云う少しツンデレな所がある。

風鳴 弦十郎

翼の叔父で八紘の弟、特機二課の長官であり人命を第一にする人格者であったが天津の手術によってZ A I Aに対する忠誠心が第一となってしまい最終的にはアークに操られてしまった。

最終決戦前に元に戻った後贖罪として或人達と行動することとなりその後刑務所で終身刑となった。

緒川 慎二

翼のマネージャーにしてボディガードだったが天津の手術によってZ A I Aに忠誠を誓い同じく

最終決戦前に目を覚ますことが出来た後は或人達と行動を共にし、その後終身刑となった。

友里、藤堯

特機のオペレーター、戦後は翼のマネージャーと運転手になった。

フィーネ

全ての元凶であり不死身の存在。

シンフォギアのフォニックスゲインで復活することが出来る存在、嘗ては巫女であったが統一言語を失った事から人類に対して肉炭を募らせていた。

人類の統一は痛みと恐怖と言う前時代的な思想に囚われており全ての人間を道具とでしか見ていない。

雪音クリスに対する虐待に加えて響の母と祖母を間接的に殺した存在。

アークと殻金を取り込んで赤き童となるが或人達に負けた後魂を殻金に取り込まれて永遠に

封印された。

立花 洸

響の父親であるが一時逃げ出したことがある、その後は心を入れ替えて何時か響達を迎えに行くがために仕事を頑張っていたが響の母と祖母の事を聞いて全てを失ったかのように

思っていたが響が生きていることを知り響を取り戻さんがために戦った。父親としての想いで時にはライダーになって立ちふさがった。戦後は飛電製作所で働いている。

安藤 創世、寺島 詩織、板場 弓美
未来の友達であり生き残った少女達。
戦後は新しい学校に通っている。

小日向 未来

響の親友であったが嘗て虐めから守れなかったことに自己嫌悪に至っていた。

その後響と和解して学校に通っている。

オリジナル怪人・仮面ライダー・IS

ロイミュードNo125『ボムキル』

見た目は「風の谷のナウシカ」にでてくる「巨神兵」と思ってください。

このロイミュードはセカンドシリーズと呼ばれておりファーストシリーズとは違う人間の儘からでもロイミュード化できるのだ。

武器は脚部のブレードと頭部のキャノン砲である。

特にキャノン砲は爆発力で砲撃するためその威力は通常の戦車以上で桁違いである。

色は赤と黒のツートンカラー

トルーパー

見た目は「ガンダム 鉄血のオルフェンズ」に出てくる「グレイズ」に

テイルブレードを搭載させた奴

オオカミから変わった量産型ロイミュード

オリジナルをベースに量産されたがスペックがそれよりも低いため比較的動物や弱

い人間に与えるようにしている。

武器 銃及び剣

テイルブレード*1

色は灰色

ナンバー113 「トルーパー・ヘッド」

見た目はトルーパーのバイザーが上半分割れている状態

トルーパーのまとめ役であると同時に司令官。

武器は変わらないがテイルブレードが頭に幾つも生えた状態である。

このロイミュードは時間停止ができる。

トルーパー・ヘッド・マスター

トルーパー・ヘッドがトルーパーを取り込んだ姿。

武器は全て大型の槍に集約してしまったため攻撃方法は限られるがその反面高い

破壊力が保証された。

武装は爆発型大槍

アラクネマーク2

見た目はISの原作のアラクネの足が黒いタイプ

本機はトランスフォーマーのデータから作られた実験機。

幾つかの武装を搭載、実験した後にある基地に死蔵されるところを理子が幾つかの条件付きでそれを裏から譲って貰った。

武装 背面部プラズマキャノン*4

背面部ミサイルポッド

高熱発生型カッター*2

腕部バルカン砲*2

フアラオ眼魔

黄金のローブを身に纏い、頭部には交差した翼のヘッドバイザーが特徴の眼魔。

フアラオのデータがインプットされているため当時の武器が搭載されている。

本来なら固有武装が搭載されていたがI Sと同化したため以下の武装となった。

武装（本来）ガンガンランス（ビーストは鷹）

フィンビット*4

ランス*1

尚変身音声は『ファラオ！黄金の翼！太陽の化身！！王家の呪い〜〜！！』

仮面ライダーヘルローグ

バットフルボトルとギアーズフルボトルを組み合わせて出来た形態。

見た目は「仮面ライダー龍騎」から「ダークナイト」と「ビルド」から

「ヘルブロス」が合体したような感じ。

性能は基本型だがバットの影響でか隠密行動ができるので奇襲には最適なフォームである。

他にも登場させるからねえ。

それと変身は3Dプリンターを重ねたような感じである。

武装 バットアロー（見た目は仮面ライダー滅のアタッシュアロー）

仮面ライダーグレイブ

金一が変身した仮面ライダー。

見た目は黒と紫の仮面ライダーでレベル1は二頭身。

レベルアップすることで通常サイズになる。

ガシャットは『ソウルグレイブ』でこのゲームは魂だけの存在をプレイヤーが叩き落してポイントを稼ぐ。

武装は コントローラーサイズ

変身は『レベルアップ！デッドセット！デッドバック！死を運ぶ

デッドクエスト！』

ISJー参五四型「灰墓」

第三世代型のISで主にISのハイパーセンサーの阻害やステルスに特化した機体。

篁技研が開発した機体で軽量であるがスピード特化に出来上がっているが

社長の武曰く……。

「これって対人戦特化じゃねえか？こういうの要らねえだろ？」

そうやってきたのだ。

第3世代の特徴はセンサーの無力化であり、ウイルスを与えることができる。

見た目は『ガンダムW』に出てくる『ガンダムデスサイズ』と『ガンダムSEED』の『フォビドゥンガンダム』を足して2で割ったような感じ。

武装 デスサイズ*1

腕部内臓アンカー*1

腰部搭載式荷電粒子砲*2

操縦者は 津村 斗貴子

ISJ―参参式型『桃火』

第三世代型のISで遠距離特化型。

篁技研が開発した機体で後方支援を主にした機体。

重火力型で辺りを一掃させることが出来る。

第三世代の特徴は『マルチロツクオンシステム』を応用している。

武装 二連式ガトリング砲*4（両腕に2基と背面部に2基）

ミサイルパック*2

操縦者は早坂 桜花

ロイミュードNo.248 『ファイター』

見た目は『アナザーカブト』を金属兵器風にしたやつ。

元々は試作段階のロイミュードをシャーロックホームズが完成させた奴。
主に格闘戦型であり武器はない。

色はオレンジ

『リツパー・ザ・ファイター』

ファイターにジャック・ザ・リツパー眼玉を使用した携帯。

両手に刃物が付いたことにより近接格闘戦が出来るようになった。

色はブラッドオレンジ

武装 近接格闘ソード*10

ジャック・ザ・リツパー眼魔

切り裂きジャックのデータがインプットされている形態。

両手に刃物が搭載されており近接格闘に優れている。

また、姿を消すことが出来るのだが今回は二重での使用の為使えなくなった。

武装 近接格闘ソード*10

仮面ライダーグレイブザビー

仮面ライダーグレイブと仮面ライダーザビーが組み合わさった姿。

本来二つのライダーシステムを同時にすることなどありえない考えで出来た仮面ライダー。

出力が二乗された代わりに体の反動が大きい為、あまり使用は進めない。武装はグレイブとザビーが使っていた武器が全般。

仮面ライダーコールドウルフ

見た目は「仮面ライダー01」に出てくる『仮面ライダー亡』。

ウルフルボトルの能力でもある機動力強化と冷蔵庫フルボトルにおける氷結能力が組み合わさった姿。

武装は『アイスクロー』

両手首に搭載されている武器で凍らせてから斬るという二重効果を

併せ持っている。

武装 アイスクロー*2

仮面ライダー 凶

響が変身していた姿で見た目はサーベル・バルキリーのフォーススライザー版
武器は両腕にあるサーベル

仮面ライダー ファイト

ファイティングジャツカルライダーが仮面ライダーとしての真の姿となった形態。
改造したレイドドライバを使った変身で顔が露わになったところ以外は
変わらない。

武装 大鎌

仮面ライダーアークサーベル

仮面ライダージャスティスサーベルをアーク化したもの。

基本性能は変わらないが変身者は体に多大な負荷を齎し最悪死に至る。
変身アイテムはアークプログライズキー。

仮面ライダー00Z

0・0ドライバーにデュランダルの戦闘データから作り出された『D・ホッパー』と『バーニングファルコン』の2つのプログライזスキーを同時使用した形態

見た目は『02』と『迅・バーニングファルコン』を足した物。

聖遺物の圧倒的エネルギーを利用しつつアークに立ち向かうと言う

コンセプトの名の元開発されており特に『0・0ドライバー』は

サウザーのサウザンドドライバーを基本骨子にして2つのプログライズキーを

同時使用とする設計を成されている為耐久性及び全てにおいて01ドライバーを

凌駕しているのだ。

また、キンジ達のドライバーを参考にしてイズのゼアシステムをコピーしている為ゼアと同等のラーニング能力を得ている。

また、プログライズされたデータ仕様も同時に使用出来る。

仮面ライダーH-W

ポイズンスコーピオンプログライズキーとサーベルタイガープログライズキーを組み合わせたタイプ。

両腕にある蛇腹剣によって伸縮自在な武器を持ち更に切りつけられることで
ウィルスを浸透させて予知能力を狂わすことが出来る。

武装 蛇腹剣*2

アークワン

スピノサウルスプログライズキーを使って変身した姿。

右側にパイプが集中しており攻撃が可能。

仮面ライダーWZ

父親のプログライズキーと自身のプログライズキーを組み合わせた形態
ジャンプ能力が最も強く攻撃能力は全てにおいて強い。

仮面ライダーデュランダル

セイバーに出てくるタイプとは別物

デュランダルに持っている暴走能力を封印することで出来た形態。
デュランダルの力を一時的に解放することが出来る。

仮面ライダーポイズンスコープピオン

全身に縛られていたベルトが無くなつた代わりにアシッドアナライズが両腕に装備され腰には弓と剣が一体化した兵装、《スコープピオン・アード》を装備している。

仮面ライダー ドードー

マガア時代の風貌を残しつつ仮面ライダーとしての見た目を最大限に活かしている。

仮面ライダー アサルトスコピーオン
アサルトプログライズキーを使って強化変身した形態。
全身に刃が付いておりその攻撃力は最も高い。

ガングニールサーベル

01ドライバーで変下と同時にシンフォギアを更に上書きした形態。
ブレードはガントレットに取り込まれるとガントレットが
まるで虎の顔の様に造り変わり首についていたマフラーは無くなったが
その代わりに虎の腕が肩に装備されマントとなった。
そして仮面が左右に分かれてイヤークラスフと変わっている。

アメノハバキリドードー

刀は雷のブレードと融合して大型の分割型バスターソードとなり同じ様に仮面はイヤークラスフと変わった。

イチイバルジャパニーズウルフ

色合いは嘗てのネフシユタンの鎧と同じ色合いであった。

顔右側には亡と同じ様にセンサーが搭載されている。

また氷結能力がある。